(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第320集

稲荷塚道東遺跡

前橋警察署新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2003

財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第320集

稲荷塚道東遺跡

TOU KA ZUKA MITI HIGASI

前橋警察署新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2003

財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

口絵

稲荷塚道東遺跡全景（南東上空より）

銅・鉄製品（63号住居）

転用硯朱墨痕（31号住居）

白磁・青磁（表）

白磁・青磁（裏）

序

『稲荷塚道東遺跡』は、前橋警察署が現在の大友町から総社町へ新築移転する工事に伴って発掘調査された、前橋市総社町に所在する遺跡の調査報告書です。調査は平成14年１月７日～６月28日、整理事業は平成14年10月１日～平成15年８月31日まで、群馬県教育委員会が調整し、群馬県警察本部と財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が委託契約を締結し実施しました。

遺跡地は、相馬ヶ原扇状地が前橋台地に移行するあたりに位置し、上野国府、上野国分僧寺・尼寺、山王廃寺、総社古墳群等重要な遺跡の存在する古代上野国にあっては中枢的地域の一角を占めています。調査では、古墳時代から奈良・平安時代の竪穴住居跡などの遺構とともに、数多くの土器・石器・金属器などの遺物が発見されました。特に、調査区の中央部で検出された竈構築材採掘痕は、その竈構築材を利用した竪穴住居跡群もセットで発見されており、県内では鳥羽遺跡、大屋敷遺跡に次ぐ、貴重な発見となりました。今回の調査で明らかになった事実は、地域の歴史を明らかにする上で大いに役立つものと確信しております。

最後になりますが、群馬県警察本部、群馬県教育委員会文化課、前橋市教育委員会、地元関係者の皆様には、発掘調査から本報告書刊行まで終始ご協力を賜り、心から感謝の意を表すとともに、発掘調査担当者、作業員及び整理業務担当者、整理嘱託員・補助員の労をねぎらい序といたします。

平成15年８月

財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長　小野宇三郎

例　言

1．本書は、前橋警察署新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査として実施した「稲荷塚道東遺跡」の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．本書に所収の遺跡名と発掘調査地の所在地番は、以下の通りである。

遺跡名　稲荷塚道東（とうかづかみちひがし）遺跡

所在地　群馬県前橋市総社町１－９－３番地

3．発掘調査は、群馬県教育委員会が調整し、群馬県警察本部と財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が委託契約を締結し実施した。

4．試掘調査は、群馬県教育委員会文化財保護課が平成12年10月５日～10月７日まで実施した。

5．調査期間　　平成14年１月７日～平成14年６月28日

6．調査組織

平成13年度

事務担当

理事長　小野宇三郎

常務理事（総務担当）	吉田　豊	常務理事（事業担当）	赤山容造
管理部長	住谷　進	調査研究部長	能登　健
総務課長	大島信夫	調査研究第１課長	真下高幸
総務課係長	笠原秀樹、小山建夫	調査研究係長	國定　均
総務課係長代理	須田朋子、吉田有光、森下弘美	総務課主事	片岡徳雄
事務補助員	吉田恵子、今井もと子、内山佳子、佐藤美佐子、本間久美子、北原かおり 狩野真子、松下次男、吉田　茂、蘓原正義、若田　誠		
調査担当	専門員　田村公夫、今井和久	調査研究員	諸田康成

発掘作業員

小林延子、井野口久代、富岡邑次、細谷ひさえ、松田チカ子、吉田美津子、堀越みな子、久保初江関口エイ、春山米子、神保君江、滝上光代、三木幹枝、桜井康広、工藤きみよ、高橋春代、田中みき江、若林トヨ子、小瀬智志、小林喜美子、小林千代子、桜井はる枝、治田あやの、松本嘉久治、小池信治、平柳雅子、阿部七郎、山口光明、河野みどり、松田伸夫、松田日登美、大野久子、阿久沢和子高桑久子、木嶋三郎、木暮シズイ、中里八郎、長井由美子、茂木満、渡辺紀子、川田佳子、時田正義高林操、木闇武夫、塚越栄次、荻野三枝子、鎌田裕義、野尻信子、野積弓子、真下初江、野口敏男石井緑、安藤好美、柿沼英、鈴木キミ子、徳江幸雄、大沢昭雄、青木林蔵、足利寛、天田絢子、今井靖子、木闇良定、佐藤茂夫、吉田純一、五十嵐宰

平成14年度

事務担当

理事長　小野宇三郎

常務理事	吉田　豊	事業局長	神保侑史
管理部長	萩原利通	調査研究部長	巾　隆之

総務課長	植原恒夫	調査研究第２課長	小山友孝
総務課係長	小山建夫、高橋房雄	調査研究係長	國定　均
総務課係長代理	須田朋子、吉田有光、森下弘美	総務課主事	田中賢一
事務補助員	今井もと子、内山佳子、佐藤美佐子、本間久美子、北原かおり、狩野真子 松下次男、吉田　茂、若田　誠		

調査担当　　専門員　田村公夫、今井和久

発掘作業員

角田令子、茂木美恵、大塚日呂美、矢口豊子、横山美千代、大前美智子、後藤友英、飯野文子、小金澤たみ子、牧口ケサノ、竹内八重子、深沢ヨシ子、斉藤文子、石原侃一、石原紀一、山田由美子堀口武子、串渕春江、中村元久、吉田えい、瀧澤洋子、大村美枝子、村井田実、武藤とく江、阿部善充、清水正男、小杉君代、長谷川ツネ子、青木雅代、林実、木村昌子、小林一雄、大山光代、伊佐悦子、永井由美子、佐藤世利子、原沢菊次郎、青木けい子、宮崎亀寿、三水邦得、石田悦司、川上哲男田川真知、加藤智恵子、井野国雄、石田高義、岡田千枝子、狩野恵子、高木克巳、鈴木和子、中野勝雄、新井孝司、箱田茂、富沢晟、武田洋、浜名新平、塩ノ谷正男、原沢泰明、角田和子、櫻井敏江樺沢菊司、高橋末治、橋元裕児、若松良幸、狩野貢、久保田行男、真下美昭、山本松治、安田智恵本間富子、吉田久子、山田卓乃、成瀬ケイ子、高橋清、村磯光子、采女直美、平方正廣、白石悦子、本多和子、井上清、小島京子、宇貫美代子、遠藤逸子、宮口るみ子、横谷純子、狩野良夫

7．整理事業は、群馬県教育委員会が調整し、群馬県警察本部と財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が委託契約を締結し実施した。

8．整理事業期間　　平成14年10月１日～平成15年８月31日

9．整理組織

平成14年度

事務担当

理事長	小野宇三郎		
常務理事	吉田　豊	事業局長	神保侑史
管理部長	萩原利通	調査研究部長	巾　隆之
総務課長	植原恒夫	資料整理課長	西田健彦
総務課係長	高橋房雄、小山建夫	調査研究係長	國定　均
総務課係長代理	須田朋子、吉田有光、森下弘美	総務課主事	田中賢一
事務補助員	今井もと子、内山佳子、佐藤美佐子、本間久美子、北原かおり、狩野真子 松下次男、吉田　茂、若田　誠		
整理担当	今井和久		
整理補助員	新谷さか江、土田三代子、光安文子、高橋優子、吉澤照恵、渡辺八千代		
臨時雇用職員	角田　修、吉田圭子、土井洋子、国安真美、桜井次男、山岸洋一、白石満美子 吉尾千鶴、小池次男、金井隆明、竹之内芳明、三浦　尚		

平成15年度

事務担当

理事長	小野宇三郎

常務理事	住谷永市	事業局長	神保侑史
管理部長	萩原利通	調査研究部長	右島和夫
総務課長	植原恒夫	資料整理課長	相京建史
総務課係長	高橋房雄、竹内　宏	調査研究係長	國定　均
総務課主幹	須田朋子、吉田有光		
総務課主任	阿久澤玄洋	総務課主事　田中賢一	
事務補助員	今井もと子、内山佳子、佐藤美佐子、本間久美子、北原かおり、狩野真子 松下次男、吉田　茂、若田　誠		
整理担当	今井和久	整理嘱託員	新井悦子
整理補助員	土田三代子、光安文子、田中富子、吉澤照恵、渡辺八千代		

10. 本書作成担当

編集　今井和久

執筆　第１章田村公夫・今井和久、第４章第２節神谷佳明、第５章第２節飯島静男
第５章第３節楢崎修一郎、前記以外は今井和久

遺物観察

陶磁器・瓦・鉄製品・石製品観察　大江正行　　石器観察　関口美枝

上記以外の遺物に関しては、当事業団諸氏にご教授頂き、今井が観察を行った。

遺構写真撮影　田村公夫、今井和久、諸田康成　　遺物写真撮影　佐藤元彦

遺物保存処理　関　邦一、土橋まり子、小材浩一　　臨時雇用職員　本所智子、矢部素子

機械実測　田中富子、富沢スミ江、伊東博子、岸　弘子

遺構図（竪穴住居跡）修正　田村公夫・今井和久　　空中写真撮影　技研設計測量株式会社

遺構図等測量　技研設計測量株式会社、株式会社測設

古井戸掘削測量　株式会社原澤ボーリング　　自然科学分析　古環境株式会社

獣骨（馬歯）の鑑定・分析　楢崎修一郎　　石材鑑定・分析　飯島静男（群馬地質研究会）

遺構デジタルトレース　技研設計測量株式会社

11. 本遺跡の記録図・記録写真・出土遺物は、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が管理し、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管している。

12. 発掘調査及び本書作成にあたり、下記の関係機関・関係諸氏にご助言・ご指導・ご協力を得た。記して感謝の意を表したい。（敬称略）

矢部良明（郡山市立美術館長）、群馬県警察本部、前橋市教育委員会、群馬県教育委員会文化課、地元関係者各位

凡　例

1．挿図縮尺は図版に記載した。概要は以下の通りである。

遺構　全体図1/200、竪穴住居跡・竪穴状遺構・井戸1/60、竈1/30、溝1/100・1/200、土坑・ピット1/40

遺物　土器1/3・1/6、瓦1/3、石器・砥石1/3、火打ち石1/2、紡錘車1/2、土錘1/2、鉄器（鉄製品）1/3

2．遺構図の方位は座標北である。座標系は、国家座標第Ⅸ系（旧測地系、日本測地系）である。

3．遺構断面実測図及び等高線に記した数値はL=mで表示し、標高値を示す。

4．遺構図の方眼杭名は５ｍごとにＥ区a-1杭をEa-1と記し、５ｍ以内の地点では方眼杭の南東杭を基準に北、西方向への距離を＋○m（mは省略）で表し位置を示す。

例：Ｅａ－１から北へ２ｍは、Ｅａ＋２－１

例：Ｅａ－１から西へ３ｍは、Ｅａ－１＋３

5．遺構面積は、デジタルプラニメーターによる３回の計測の平均値である。

6．テフラの名称は次の略号で表した。

As-A　・・・浅間Ａ軽石、1783年（天明３年）

As-B　・・・浅間Ｂ軽石、1108年（天仁元年）

As-C　・・・浅間Ｃ軽石、４世紀初頭

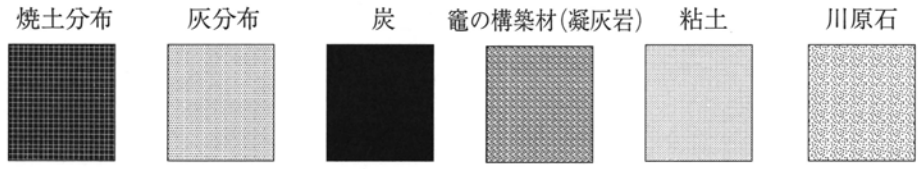
Hr-FA・・・榛名二ッ岳渋川テフラ、６世紀初頭（本文中はFAと略）

Hr-FP・・・榛名二ッ岳伊香保テフラ、６世紀中葉（本文中はFPと略）

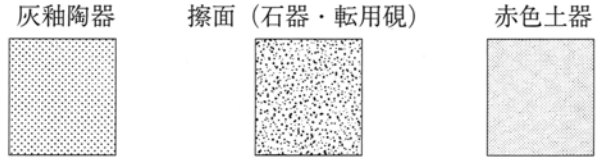
7．住居の方位は、竈の付設された住居では、竈を持つ壁（竈を持つと推定された壁）に直交する線を、炉の付設された住居では北辺に対して直交方向を、主軸線とした。溝の方位は、上流方向を基準に走行方向を主軸線とした。土坑・ピット・井戸は、長軸方向を主軸線とした。

8．本書で使用したスクリントーンは、下記のとおりである。

遺構



遺物



9．遺物番号は、遺構ごとに登録した。遺物番号は、遺構図中番号と遺物番号が統一されるようにした。

10．土器の実測図は原則として四分割法をとった。残存量が1/2以下の遺物は180°展開して図上復元した。回転実測の場合は口縁線を切断し表現した。へら削りの方向は→で示す。

11．色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修、新版標準土色帖（1987年）によった。

12．遺物写真の番号は、遺物図の番号と同一である。

目　次

口絵
序
例言
凡例
目次（挿図目次・表目次・写真図版目次）
報告書抄録
第１章　発掘調査の経過と方法
　第１節　調査に至る経過 …… 1
　第２節　調査の経過 …… 2
　第３節　調査の方法
　（１）　調査・整理方法 …… 5
　（２）　基本土層 …… 6
第２章　周辺の環境
　第１節　遺跡の立地 …… 7
　第２節　周辺の遺跡 …… 9
第３章　検出された遺構と遺物
　第１節　竪穴住居跡、竪穴状遺構 …… 13
　第２節　溝、竈構築材採掘痕群 …… 114
　第３節　井戸、土坑、ピット …… 122
　第４節　トレンチ調査 …… 133
　第５節　遺構外出土遺物
　　1　縄文・弥生時代 …… 134
　　2　古墳時代 …… 136
　　3　奈良・平安時代 …… 136
　　4　中世以降 …… 138
第４章　調査の成果
　第１節　稲荷塚道東遺跡出土施釉陶器（神谷佳明）…… 139
　第２節　竈構築材採掘痕について（今井和久）…… 143
第５章　付編
　第１節　自然化学分析について（古環境）…… 149
　第２節　稲荷塚道東遺跡の土坑より採取した試料について（飯島静男）…… 171
　第３節　稲荷塚道東遺跡出土馬歯・馬骨（楢崎修一郎）…… 172
遺物観察表
写真図版
付図１　２号溝・竈構築材採掘痕群　　付図２　全体図

挿　図　目　次

第１図　稲荷塚道東遺跡位置図……1
第２図　調査区図……3
第３図　グリッド設定図……4
第４図　基本土層図……6
第５図　遺跡周辺の地質図……8
第６図　地質断面図……8
第７図　周辺遺跡図……11
第８図　竪穴住居跡・竪穴状遺構全体図……13
第９図　１号住居跡……14
第10図　１号住居跡出土遺物……15
第11図　２号住居跡出土遺物……15
第12図　２号住居跡……16
第13図　３号住居跡、出土遺物……17
第14図　４号住居跡、出土遺物……18
第15図　５号住居跡、出土遺物……18
第16図　６号住居跡、出土遺物……19
第17図　７号住居跡……19
第18図　８号住居跡、出土遺物……20
第19図　９号住居跡、出土遺物……21
第20図　10号住居跡……21
第21図　11号住居跡……22
第22図　12号住居跡……22
第23図　12号住居跡出土遺物……23
第24図　13号住居跡出土遺物……23
第25図　13号住居跡……24
第26図　14号住居跡……25
第27図　14号住居跡北竈・掘り方……26
第28図　14号住居跡東竈……27
第29図　14号住居跡出土遺物（１）……27
第30図　14号住居跡出土遺物（２）……28
第31図　15号住居跡出土遺物……28
第32図　15号住居跡……29
第33図　16号住居跡、出土遺物……30
第34図　17号住居跡、出土遺物……30
第35図　18号住居跡……31
第36図　19号住居跡……31
第37図　19号住居跡竈、出土遺物……32
第38図　20号住居跡、出土遺物（１）……33
第39図　20号住居跡出土遺物（２）……34
第40図　21号住居跡出土遺物……34
第41図　21号住居跡……35
第42図　37号住居跡・竈、出土遺物……36
第43図　22号住居跡、出土遺物……37
第44図　23号住居跡、出土遺物（１）……38
第45図　23号住居跡出土遺物（２）……39
第46図　24号住居跡……40
第47図　24号住居跡竈、出土遺物（１）……41
第48図　24号住居跡出土遺物（２）……42
第49図　25号住居跡、出土遺物……42
第50図　26号住居跡……43
第51図　26号住居跡竈、出土遺物……44
第52図　27号住居跡、出土遺物……45
第53図　28号住居跡……45
第54図　28号住居跡竈、出土遺物……46
第55図　29号住居跡……46
第56図　29号住居跡出土遺物……47
第57図　30号住居跡……47
第58図　31号住居跡・竈、出土遺物……48
第59図　32号住居跡・竈……49
第60図　32号住居跡出土遺物……50
第61図　33号住居跡・竈・掘り方、出土遺物……51
第62図　34号住居跡・竈、出土遺物……52
第63図　35号住居跡……53
第64図　35号住居跡竈、出土遺物……54
第65図　36A・B・C号住居跡、出土遺物……55
第66図　38号住居跡・竈……57
第67図　38号住居跡出土遺物……58
第68図　39号住居跡、出土遺物……59
第69図　40号住居跡・竈、出土遺物（１）……60
第70図　40号住居跡出土遺物（２）……61
第71図　41号住居跡・竈、出土遺物（１）……62
第72図　41号住居跡出土遺物（２）……63
第73図　42・46号住居跡、42号住居跡出土遺物……63
第74図　46号住居跡出土遺物……64
第75図　43号住居跡……64
第76図　43号住居跡竈、出土遺物……65
第77図　44号住居跡、出土遺物……65
第78図　45号住居跡……66
第79図　45号住居跡出土遺物……67
第80図　47号住居跡……67
第81図　47号住居跡竈、出土遺物……68
第82図　48号住居跡、出土遺物……69
第83図　49号住居跡・竈、出土遺物……70
第84図　50号住居跡……71
第85図　50号住居跡竈、出土遺物……72
第86図　51号住居跡出土遺物……72
第87図　51号住居跡……73
第88図　52号住居跡・竈、出土遺物……74
第89図　53号住居跡……75
第90図　53号住居跡竈、出土遺物……76
第91図　54号住居跡……76
第92図　54号住居跡出土遺物……77
第93図　55号住居跡、出土遺物……78
第94図　56号住居跡出土遺物……78
第95図　56号住居跡・竈……79
第96図　57号住居跡……80
第97図　57号住居跡出土遺物（１）……81
第98図　57号住居跡出土遺物（２）……82
第99図　58号住居跡……82
第100図　58号住居跡出土遺物……83
第101図　59号住居跡・竈……83
第102図　59号住居跡出土遺物……84
第103図　60号住居跡竈……84
第104図　60号住居跡、出土遺物（１）……85

第105図　60号住居跡出土遺物（２）……86
第106図　61号住居跡 ……87
第107図　61号住居跡竈、出土遺物 ……88
第108図　63号住居跡、出土遺物 ……89
第109図　64号住居跡、出土遺物（１）……89
第110図　64号住居跡竈、出土遺物（２）……90
第111図　65・70・71号住居跡 ……91
第112図　65・70号住居跡出土遺物 ……92
第113図　66号住居跡 ……92
第114図　66号住居跡出土遺物 ……93
第115図　67号住居跡 ……93
第116図　67号住居跡竈、出土遺物 ……94
第117図　68号住居跡 ……94
第118図　68号住居跡竈、出土遺物 ……95
第119図　69号住居跡・竈、出土遺物（１）……96
第120図　69号住居跡出土遺物（２）……97
第121図　72号住居跡・竈、出土遺物（１）……98
第122図　72号住居跡出土遺物（２）……99
第123図　73号住居跡・竈、出土遺物（１）……100
第124図　73号住居跡出土遺物（２）……101
第125図　75号住居跡……101
第126図　75号住居跡竈、出土遺物……102
第127図　76号住居跡……103
第128図　76号住居跡出土遺物……104
第129図　77号住居跡出土遺物……104
第130図　77号住居跡……105
第131図　78号住居跡出土遺物……105
第132図　78号住居跡・竈……106
第133図　79号住居跡……106
第134図　79号住居跡出土遺物……107
第135図　80号住居跡……107
第136図　80号住居跡出土遺物……108
第137図　81号住居跡、出土遺物（１）……108
第138図　81号住居跡出土遺物（２）……109
第139図　82号住居跡竈、出土遺物……109
第140図　83号住居跡、出土遺物……110
第141図　84号住居跡、出土遺物……111
第142図　85号住居跡、出土遺物……112
第143図　86号住居跡、出土遺物……112
第144図　１～３号竪穴状遺構、出土遺物……113
第145図　溝・竈構築材採掘痕群全体図……114
第146図　１・３号溝……116
第147図　４～６号溝、２号溝出土遺物（１）……117
第148図　２号溝出土遺物（２）……118
第149図　２号溝出土遺物（３）……119
第150図　３・４号溝出土遺物……120
第151図　竈構築材採り残し痕①・②……121
第152図　井戸・土坑・ピット全体図……122
第153図　１号井戸、出土遺物（１）……123
第154図　１号井戸出土遺物（２）……124
第155図　２号井戸……124
第156図　２号井戸出土遺物……125
第157図　１～４号土坑……125
第158図　５～９号土坑、出土遺物……126
第159図　11～13・15号土坑、出土遺物……127
第160図　16～18・20・21号土坑、出土遺物……128
第161図　22～27号土坑、出土遺物（１）……129
第162図　25・26号土坑出土遺物（２）……130
第163図　８・22・24・35・36・54号ピット、出土遺物
……131
第164図　Ｂ・Ｄ・Ｅトレンチ全体図……133
第165図　縄文（弥生）時代出土遺物（１）……134
第166図　縄文（弥生）時代出土遺物（２）……135
第167図　古墳時代出土遺物……136
第168図　奈良・平安時代出土遺物（１）……136
第169図　奈良・平安時代出土遺物（２）……137
第170図　奈良・平安時代出土遺物（３）……138
第171図　中世以降出土遺物……138

付図１　２号溝・竈構築材採掘痕群（１：100）
付図２　稲荷塚道東遺跡全体図（１：200）

表　目　次

第１表　周辺遺跡一覧表……12
第２表　土坑計測表 ……130
第３表　ピット計測表 ……132
第４表　剥片類の石材・量 ……134

写　真　図　版　目　次

PL 1　B・E区竪穴住居跡群（上空から）
　　2号溝・竈構築材採掘痕群（上空から）
PL 2　1号住居跡全景（南から）
　　2号住居跡掘り方全景（南から）
PL 3　3号住居跡掘り方全景（西から）
　　4号住居跡掘り方全景（西から）
　　5号住居跡掘り方全景（西から）
　　6号住居跡掘り方全景（西から）
　　6号住居跡貯蔵穴（西から）
　　7号住居跡掘り方全景（西から）
　　8号住居跡掘り方全景（東から）
　　9号住居跡掘り方全景（南から）
PL 4　10号住居跡掘り方全景（西から）
　　11号住居跡掘り方全景（西から）
　　12号住居跡掘り方全景（西から）
　　12号住居跡竈遺物出土状況（西から）
　　13号住居跡遺物出土状況（西から）
PL 5　14号住居跡遺物出土状況（南から）
　　14号住居跡北竈遺物出土状況（南から）
　　14号住居跡北竈セクション（西から）
　　14号住居跡掘り方全景（南から）
　　14号住居跡遺物出土状況（北から）
PL 6　15号住居跡全景（南から）
　　16号住居跡全景（西から）
　　16号住居跡竈全景（西から）
　　17号住居跡竈全景（北から）
　　18号住居跡掘り方全景（西から）
PL 7　19号住居跡遺物出土状況（西から）
　　19号住居跡竈全景（西から）
　　20・21・37号住居跡遺物出土状況（西から）
　　20・21・37号住居跡概念図
　　20・21・37号住居跡掘り方全景（西から）
PL 8　22号住居跡全景（南から）
　　24号住居跡竈全景（西から）
　　23・24号住居跡遺物出土状況（西から）
　　23・24号住居跡概念図
　　25号住居跡掘り方全景（西から）
PL 9　26号住居跡遺物出土状況（西から）
　　26号住居跡竈全景（西から）
　　27号住居跡全景（西から）
　　28号住居跡竈遺物出土状況（西から）
　　29号住居跡掘り方全景（西から）
PL10　30号住居跡全景（西から）
　　31号住居跡遺物出土状況（西から）
　　31号住居跡竈全景（西から）
　　32号住居跡遺物出土状況（西から）
　　32号住居跡竈遺物出土状況（西から）
　　32号住居跡鉄製紡錘車出土状況（北から）
　　33号住居跡全景（西から）
　　33号住居跡竈全景（西から）
PL11　35号住居跡全景（西から）
　　35号住居跡竈掘り方（西から）
　　38号住居跡遺物出土状況（西から）
　　38号住居跡竈掘り方（西から）
　　39号住居跡全景（西から）
PL12　34号住居跡全景（西から）
　　34号住居跡竈掘り方（西から）
　　36A・B・C号住居跡遺物出土状況（南西から）
　　36A・B・C号住居跡概念図
　　36号住居跡掘り方実測風景（南西から）
PL13　40号住居跡遺物出土状況（南から）
　　40号住居跡竈全景（西から）
　　41号住居跡遺物出土状況（西から）
　　41号住居跡竈全景（西から）
　　42・46号住居跡全景（西から）
PL14　43号住居跡全景（西から）
　　43号住居跡土錘出土状況（北から）
　　44号住居跡掘り方全景（西から）
　　45号住居跡遺物出土状況（西から）
　　47号住居跡全景（西から）
　　47号住居跡竈全景（西から）
　　48号住居跡全景（南西から）
　　49号住居跡全景（西から）
PL15　50号住居跡全景（西から）
　　50号住居跡竈全景（西から）
　　51号住居跡全景（南西から）
　　52号住居跡全景（西から）
　　52号住居跡竈全景（西から）
PL16　53号住居跡全景（南西から）
　　53号住居跡竈全景（南西から）
　　54号住居跡遺物出土状況（西から）
　　55号住居跡全景（南西から）
　　58号住居跡全景（西から）
PL17　56号住居跡掘り方全景（西から）
　　56号住居跡竈全景（西から）
　　57号住居跡遺物出土状況（西から）
　　57号住居跡全景（西から）
　　57号住居跡炉遺物出土状況（西から）
PL18　59号住居跡全景（西から）
　　59号住居跡竈遺物出土状況（西から）
　　60号住居跡遺物出土状況（西から）
　　60号住居跡竈遺物出土状況（西から）
　　60号住居跡竈全景（西から）
PL19　61号住居跡全景（南西から）
　　61号住居跡竈全景（西から）
　　63号住居跡全景（西から）
　　65・66・70・71号住居跡掘り方全景（西から）
　　65・66・70・71号住居跡概念図
PL20　64・69号住居跡遺物出土状況（西から）
　　64号住居跡竈全景（西から）
PL21　69号住居跡竈全景（西から）
　　64・69号住居跡全景（西から）
　　64号住居跡竈天井石（西から）
　　64号住居跡竈支脚石（西から）

67号住居跡全景（西から）
67号住居跡竈掘り方（西から）
68号住居跡全景（西から）
68号住居跡竈・貯蔵穴（西から）
PL22　72号住居跡遺物出土状況（西から）
72号住居跡竈遺物出土状況（西から）
72号住居跡竈掘り方（西から）
73号住居跡全景（西から）
73号住居跡竈全景（西から）
PL23　75号住居跡全景（西から）
75号住居跡竈全景（西から）
76号住居跡掘り方全景（西から）
76号住居跡炉全景（西から）
77号住居跡掘り方全景（南西から）
78号住居跡全景（西から）
78号住居跡竈全景（西から）
79号住居跡全景（西から）
PL24　80号住居跡全景（西から）
80号住居跡貯蔵穴（西から）
82号住居跡全景（西から）
82号住居跡竈全景（西から）
83号住居跡全景（西から）
84号住居跡全景（西から）
85号住居跡全景（西から）
86号住居跡全景（西から）
PL25　２号溝全景（北から）
２号溝全景（南上空から）
２号溝セクション（南から）
２号溝馬歯出土状況（東から）
３号溝全景（南から）
４号溝全景（西から）
PL26　５号溝全景（西から）
６号溝全景（東から）
竈構築材採掘痕全景（南から）
竈構築材採掘痕全景（北から）
竈構築材採掘痕近景（北東から）
竈構築材採掘痕近景（東から）
竈構築材採り残し痕①（西から）
竈構築材採り残し痕②（東から）
PL27　１号井戸全景（東から）
２号井戸全景（西から）
８号土坑全景（北から）
11号土坑全景（南から）
12号土坑全景（西から）
15号土坑全景（南から）
18号土坑全景（南から）
20号土坑全景（西から）
PL28　22号土坑全景（北から）
23号土坑全景（西から）
24号土坑全景（西から）
25号土坑全景（西から）
26号土坑全景（南から）
８号ピット全景（南から）
24号ピット全景（南から）
35・36号ピット全景（南から）
PL29　Ｂトレンチ全景（北から）
Ｄトレンチ全景（西から）
Ｂトレンチセクション（西から）
Ｄトレンチセクション（南から）
Ｅトレンチ全景（西から）
Ｅトレンチ（旧河道）セクション（南から）
PL30　１～14号住居出土遺物
PL31　14～20号住居出土遺物
PL32　20～24号住居出土遺物
PL33　24～29号住居出土遺物
PL34　31～36号住居出土遺物
PL35　36～39号住居出土遺物
PL36　39～44号住居出土遺物
PL37　45～52号住居出土遺物
PL38　52～56号住居出土遺物
PL39　57号住居出土遺物
PL40　57～60号住居出土遺物
PL41　60～64号住居出土遺物
PL42　64～72号住居出土遺物
PL43　72～73号住居出土遺物
PL44　75～81号住居出土遺物
PL45　81～86号住居、１・２号竪穴状遺構、２号溝出土遺物
PL46　２～４号溝、１・２号井戸出土遺物
PL47　２号井戸、８～26号土坑、８～54号ピット、遺構外（縄文）出土遺物
PL48　遺構外（縄文、古墳、奈良・平安、中世）出土遺物

発掘調査報告書抄録

ふりなが	とうかづかみちひがしいせき
書名	稲荷塚道東遺跡
副書名	前橋警察署新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	なし
シリーズ名	財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	第320集
編著者名	今井和久
編集機関	財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒377-8555 群馬県勢多郡北橘村大字下箱田784-2　TEL 0279(52)2511
発行年月日	平成15(2003)年8月31日

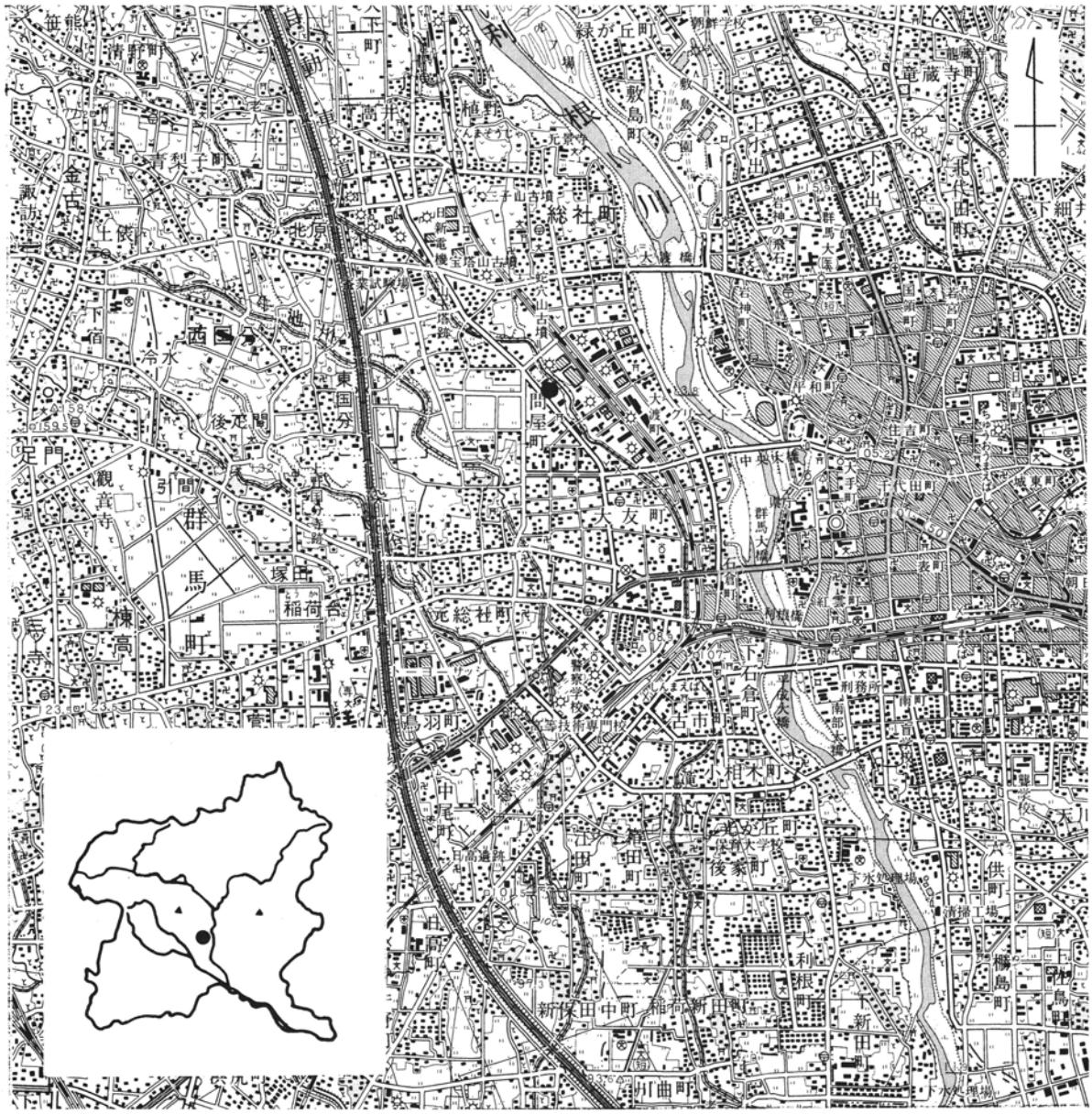
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 東経	調査期間	調査面積 m^2	調査原因
稲荷塚道東遺跡（とうかづかみちひがしいせき）	群馬県前橋市総社町（ぐんまけんまえばしし そうじゃまち）	10201	00829	36°23′45″ 139°02′36″	20020107 ～ 20020628	6,500m^2	前橋警察署新築工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
稲荷塚道東	集落	縄文時代	なし	土器、石器	条痕文系土器
		弥生時代	なし	石器	
		古墳時代	竪穴住居跡、井戸、土坑	土師器、須恵器	赤色土器、石製紡錘車
		奈良・平安時代	竪穴住居跡、井戸、土坑 溝、竈構築材採掘痕	土師器、須恵器 灰釉陶器、石製品、土製品、鉄製品	鉄製紡錘車、墨書土器 刻書土器、転用硯
		中近世	溝、土坑	馬歯、陶磁器	中国製青磁、白磁

第１章　発掘調査の経過と方法

第１節　発掘調査に至る経過

前橋警察署は老朽化のため、大友町から総社町に新築移設することとなった。この工事に先立ち建設地内の埋蔵文化財について、群馬県警察本部より県教育委員会文化財保護課に問い合わせがあり、予備調査として建設予定地内の遺跡分布調査が実施され遺跡が確認された。建物建設は、平成14年度から開始され平成16年度完成の予定である。群馬県教育委員会文化財保護課が平成13年12月に試掘調査を実施し、平成14年１月より財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団による調査が開始された。調査は順調に進み、平成14年６月28日に無事終了し、７月上旬に残務処理をし、７月15日に群馬県警察本部に引き渡した。



第1図　稲荷塚道東遺跡位置図（国土地理院地形図１：50,000「前橋」使用）

第２節　調査の経過

本遺跡の発掘調査は、平成14年１月７日より調査区北西部分から開始し、平成14年６月28日まで実施した。その後、引き続き平成14年10月１日から平成15年８月31日まで整理事業を実施し、本事業を終了した。発掘調査の事前準備として、平成13年12月３日から調査事務所・器材庫・遺物収蔵庫の設置を始めた。発掘調査に使う物品・資材等は、12月18・19日に搬入し、平成14年１月からの調査に備えた。以下、調査日誌より、調査経過の概略を記す。

平成14年１月

平成14年１月７日より重機によるＥ区（一部Ｆ区・Ｂ区も含む）3,500㎡の表土及び攪乱部分の除去を開始した。８日より作業員を導入し、遺構確認・遺構調査を進めた。９日からは測量会社に委託し、方眼杭打ち、ベンチマークの設置をした。10日には、県教育委員会文化課（以下、文化課）職員１名と群馬県警察本部（以下、県警）職員５名が現場の視察に見えた。

調査区の東側は予想以上に遺構の残りが悪く、しかも土層がわかりにくかったので、重機による、試掘トレンチ・攪乱層除去を効果的に行い、土層断面を確認しながら遺構確認を実施した。その結果、竪穴住居跡数十基、多数の土坑・ピット、数条の溝跡などが確認された。重機による表土除去は順調に進み、22日に終了した。特に調査区を北東から南西に走る大溝（２号溝）は断面調査の結果、幅約５ｍ、深さ約2.5ｍを測り、覆土（排土）を除去するのに困難が予想された。そこで、１月22日～30日まで、ベルトコンベアーを使い、排土搬出を行いながら調査した。27日（日）には県内平野部にも降雪があり、28日午前中は、調査区の除雪作業を行った。

平成14年２月

２月１日には、前橋共愛中学校の２年生５名が職場体験学習の事前打ち合わせに来跡した。５日には、県警職員５名が調査区東側の河川との境界測量の下見に見えた。７～８日には河川との境界測量のための除草作業を県警の委託業者が行った。12日には河川との境界の測量を県警の委託業者が行った。14日には前橋共愛中学校の２年生５名が職場体験学習を実施した。また、同日、県警、河川課、土木課の職員が来跡し、前橋警察署の建物配置がほぼ確定なので、調査対象地域について協議が必要との話があった。20日～25日には、業者に委託し、１・２号井戸の掘削・調査を行った。21日には、２号溝から東側調査区（約2,000㎡）の空中写真撮影・航空測量を業者に委託し実施した。西側調査区（約1,500㎡）の調査は土層もわかりにくい上に、遺構の重複も予想されたので、グリッド杭に沿ってサブトレンチを掘りながら調査を進めた。27日には県警職員４名、文化課１名、当事業団担当課長、調査担当との打ち合わせ会があり、その場で、工事設計図が提出され、調査範囲が最終的に確定した。

平成14年３月

３月１日には、高所作業車から縄文時代草創期の遺構確認Ｅトレンチなどの全景写真を撮影した。２日～15日まで調査区の東側の埋め戻し作業を重機により実施した。15日には本年度で退職する作業員２名に感謝状を贈呈した。20日には高所作業車から２号溝などの全景写真を撮影した。21日には西側調査区の空中写真撮影・航空測量を業者に委託し実施した。22日には、平成13年度の作業員による調査を終了した。25日には発掘担当者により遺構図（平断面図）の作成を行った。平成13年度の調査では、遺構総数で住居39軒、溝６条、土坑15基、ピット約60基の調査が終了した。

平成14年４月

４月４日には測量会社に委託し、平成14年度調査区（2,500㎡）の設定を実施した。８、９日には発掘担当者により遺構図（平断面図）の作成を行った。11日より重機による表土及び攪乱部分の除去を開始した。17日より作業員を導入し、遺構確認・遺構調査を進めた。その結果、古墳・奈良・平安時代の住

居が重複して検出された。22日には測量会社に委託し、方眼杭打ち、ベンチマークの設置をした。22日～25日まで本遺跡で当事業団の平成14年度新任研修が行われた。

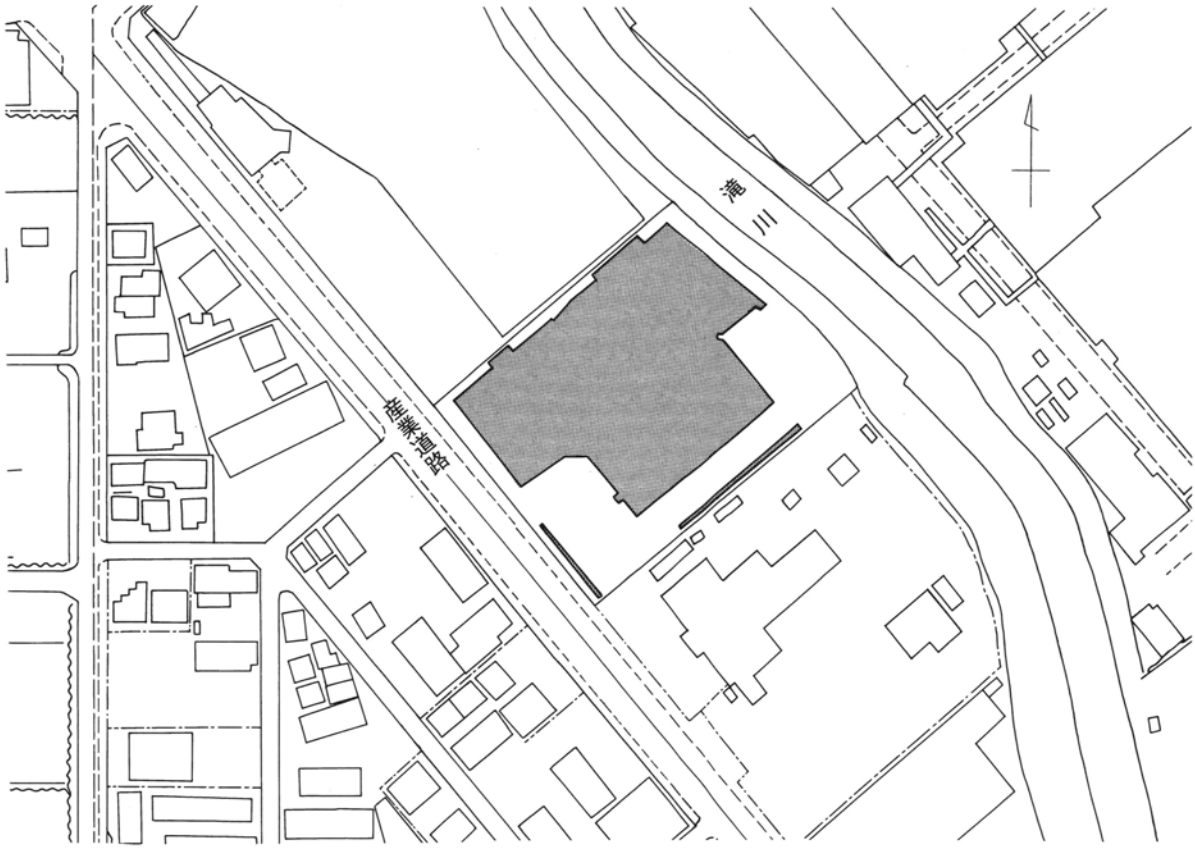
平成14年５月

５月２日、８日には調査区東側の河川（滝川）の護岸工事の下見に、石井設計事務所の職員が来跡した。５月13日には、作業員の健康診断を実施した。22日には県警の岡部氏他２名が現場の視察・挨拶に見えた。29日には、竈構築材の石材を鑑定するために、飯島静男氏（群馬地質研究会）が来跡した。

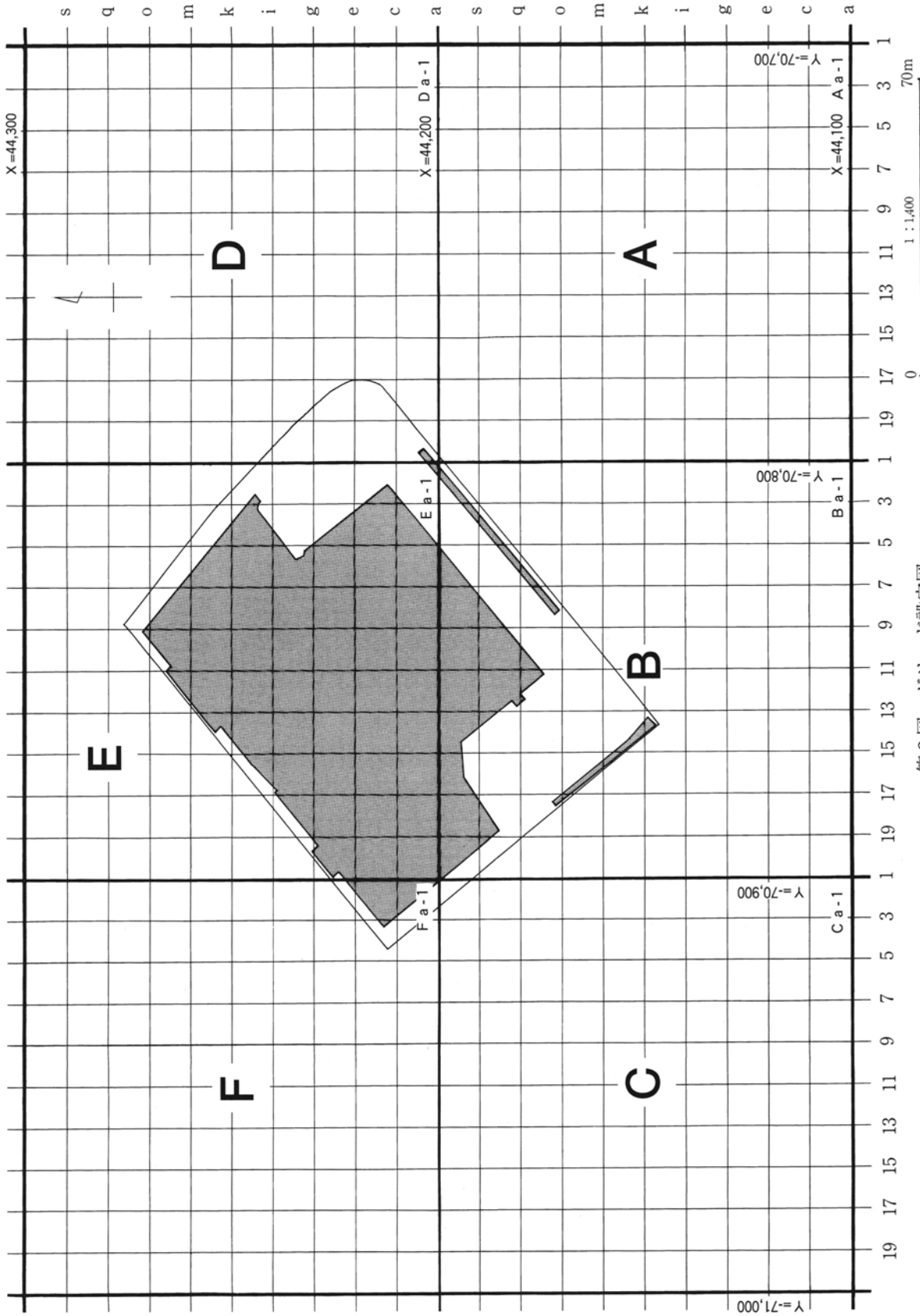
平成14年６月～７月

４日から、６月中に調査を終了させるために作業員25名が増員された。７日には、前橋地建株式会社の真下氏が滝川の流木処理の打ち合わせに来跡した。調査に支障が出ないように、流木の運搬には、調査区の北側の工事用道路を使用することになった。18日には、上毛新聞の記者石垣氏が取材のため来跡した。19日には県警職員４名が来跡し、工事用の看板を南西隅に立てた。20日には、測量会社に委託し、平成14年度調査区（2,500㎡）の空中写真撮影を実施した。24日から重機による埋め戻し作業を開始し、28日に完了した。25日には出土遺物約65箱を事業団へ搬入した。平成14年度の調査では、住居47軒、土坑20基、ピット約30基が検出された。28日にはすべての現場作業を終了した。７月第１週は、図面・写真類の整理等の残務処理、発掘器財・事務用品等の搬出、産業廃棄物の処理等を実施した。第２週には事務所・電気・水道等の撤去が完了した。

７月15日に警察本部へ調査区を引き渡した。



第２図　調査区図（１：2,500）


X=44,300
X=44,200
X=44,100
Y=-70,700
Y=-70,800
Y=-70,900
Y=-71,000
Aa-1
Ba-1
Ca-1
Da-1
Ea-1
Fa-1
A
B
C
D
E
F
1 : 1,400
0
70m

第３図　グリッド設定図

第３節　調査の方法

（１）調査・整理方法

調査区及びグリッド設定

遺構・遺物の記録保存方法として、グリッド設定による調査方法を基本とした。基準点測量・ベンチマーク設置は平成14年１月に行った。調査区近辺に三角点がないため、基準点測量を行った。使用した基準点は、前橋市の一級及び二級基準点である。観測はGPS測量とし、新点２点設置した。なお、一級は群馬郡群馬町北原752所在の基３（Ｘ45,567.600、Ｙ－72,756.109）、二級は前橋市岩神町三丁目13-15所在の基２（Ｘ44,951.061、Ｙ－69,453.785）と前橋市総社町総社3060所在の基４（Ｘ43,782.440、Ｙ－71,343.486）を使用した。新点は、調査区西を走る産業道路東沿いの調査区北西隅付近に001（Ｘ44,206.910、Ｙ－70,913.737）、調査区南東250m付近に002（Ｘ43,904.798、Ｙ－70,667.308）を設置した。座標値は国家座標Ⅸ系である。方眼杭は、新点001及び002の座標データを基準に設置した。標高は前橋市下水道築造工事のKBM4-1（Ｈ＝121.283）の標高データを基準にBMを設定した。グリッドは国家座標Ｘ44,100、Ｙ－70,700をAa-1を基準に西へ100ｍごとにＡ・Ｂ・Ｃ、北へ100ｍにＡ・Ｄ、Ｄから西へ100ｍごとにＤ・Ｅ・Ｆとし調査区全域に100ｍの方眼を設定した。さらに、この100ｍ方眼内を５ｍごとに西へ１・２・３～20の数字で、北へａ・ｂ・ｃ～ｔのアルファベットを付した。グリッドの呼称は、南東隅の方角杭番号で表した。

調査手順

調査に際しては、表土部分及び攪乱部分については重機による一括排土方針を行った。その後は、人力による精査及び小トレンチ調査を行い遺構確認、遺構調査を進め、必要に応じてベルトコンベヤー等も使用した。

実測方法

記録図面類は、住居跡1/20・竈1/10、井戸・土坑は1/20、溝は1/40を基準に作成した。平面図は、平板測量を主な手段としたが、竈・土坑は簡易やり方実測を施した。断面図は1/20を基準に竈は1/10で行い、水糸レベルは標高で記すようにした。その他航空測量による全体図作成や一部の図面は業者委託した。

遺物取り上げ

出土遺物は、遺構を重視し遺構内で収束するように番号を付した。遺構外遺物については、グリッドごとに番号を付した。なお、微細片は出土遺構・出土グリッドを明記し取り上げた。

写真撮影

写真は、各遺構に対し担当職員により撮影した。遺構に対しては遺物出土状態、全景、土層断面等各々撮影し、さらに特徴的な遺物出土状態、土層断面については接写を行った。住居跡等の撮影にはローリングタワー２段組で行った。また、広域にわたる遺構等については業者委託によるラジコンヘリによる撮影も行った。使用した主な機種は、カメラはブローニー版（120）一眼レフ６×７（ペンタックス）、ライカ版（135）一眼レフ35㎜（キャノンEOS）。フィルムは、モノクロはKodakTX120ISO400、KodakTX135-36ISO400及びリバーサルはKodachrome36ISO200である。

基本整理

調査途中より、出土遺物の洗浄・注記、図面・写真整理を行い、整理事業段階の省力化を図った。図面写真への番号は事業団資料管理取扱要項に準じて行った。

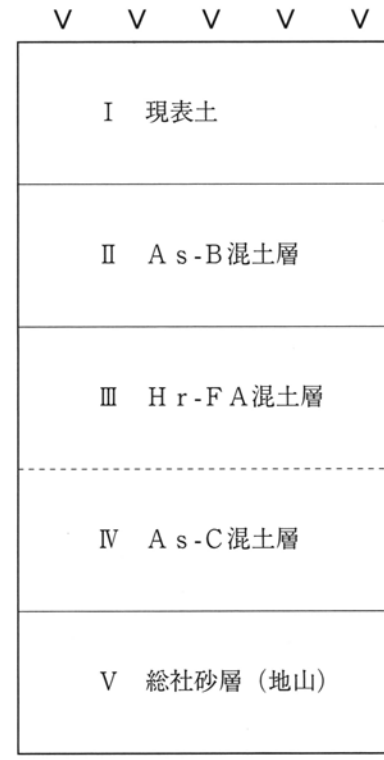
整理方法

実測図・写真・記述の三つの方法を用いて行う。視覚的な方法を主に記述で補足し、わかりやすく、簡潔で、正確な報告書を目指して作業を進めた。

（２）基本土層

発掘調査で確認された遺構の時期を決定する上で、その遺構がどのような土層の面で確認されたかが重要な鍵となる。その点では、本遺跡の周辺には浅間山と榛名山の火山活動による噴出物の堆積が見られ、地質学と考古学の両者の研究によって、それらの形成された時期がほぼ明らかにされている。

本遺跡の北東部に設定したＥトレンチ（第４節トレンチ調査参照）から観察される地層は、基本的には、大きく二つに分類できる。上位の厚さ１ｍほどの暗褐色土層と下位に堆積するラミナ（縞目）状の硬く締まった砂とシルトとの互層（総社砂層）である。ここでは上位に堆積する暗褐色土層を模式図に示しておきたい。調査によって確認された土層は、上位から第Ⅰ層：現表土、第Ⅱ層：As-B混土層、第Ⅲ層：Hr-FA（以下FAと略）混土層、第Ⅳ層：As-C混土層、第Ⅴ層：総社砂層（地山）である。昭和60年代まで工場用地、その後群馬県庁の見学者用駐車場として使用していたため、覆土は非常に硬く締まってる。第Ⅰ層の表土は、工場建設に伴う造成のために、重機等で硬く踏み固められている。また、中央部には工場（建物）の基礎部分と砕石・鉄骨廃材・古タイヤなどの産業廃棄物が大量に埋められた攪乱が広がっていた。第Ⅱ層は暗灰色土でAs-B軽石が混じる。第Ⅲ層は暗褐色土でFA軽石が混じる。第Ⅳ層は暗褐色土でAs-C軽石が混じる。第Ⅴ層は地山で総社砂層に対比される層である。第Ⅲ層と第Ⅳ層は分層が困難で、調査時にはⅢ層とⅣ層をあわせて、FA・As-C混土層として扱った。Ⅲ～Ⅴ層は暗灰～暗褐色土と色調が似かよっている。遺構のほとんどがⅢ～Ⅴ層を掘り込み、Ⅲ～Ⅴ層を起源とする土が遺構の覆土となるため、プラン確認は困難を極めた。土層の詳細については、第５章第１節自然科学分析「稲荷塚道東遺跡におけるテフラ分析」を参照されたい。



第４図　基本土層図

基本土層写真（Ｄトレンチ）

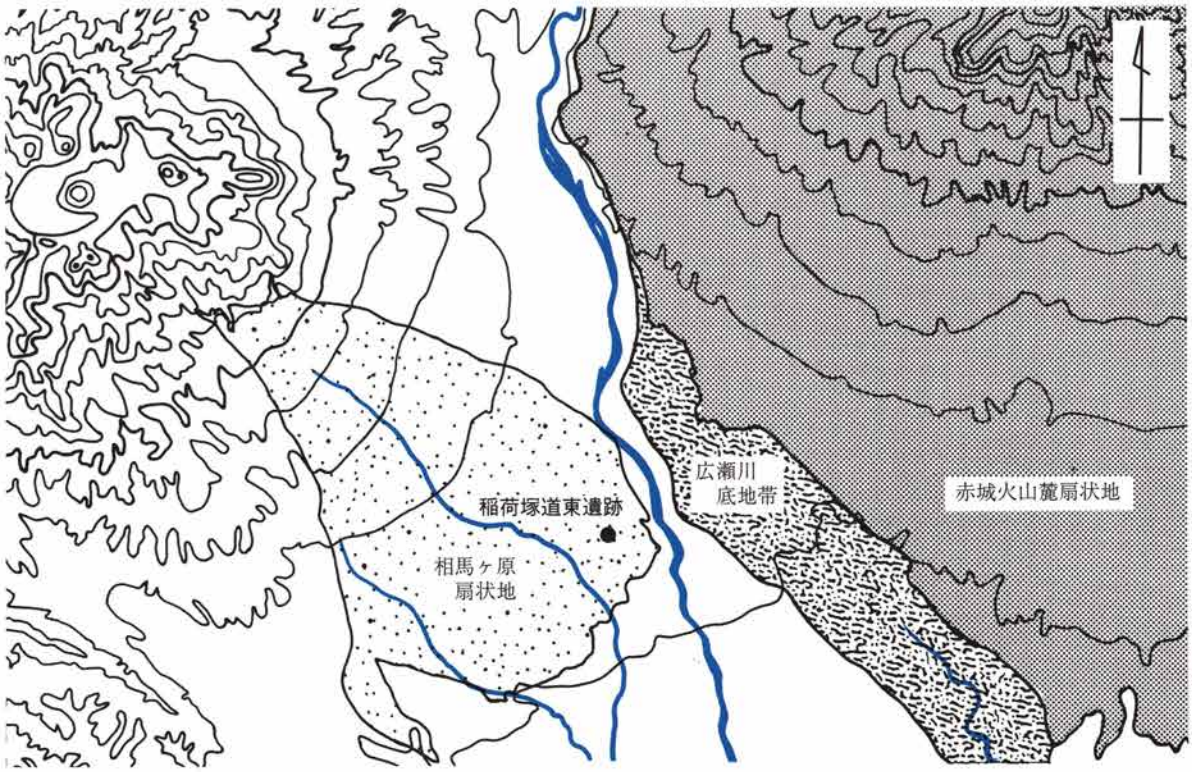
第２章　周辺の環境

第１節　遺跡の立地

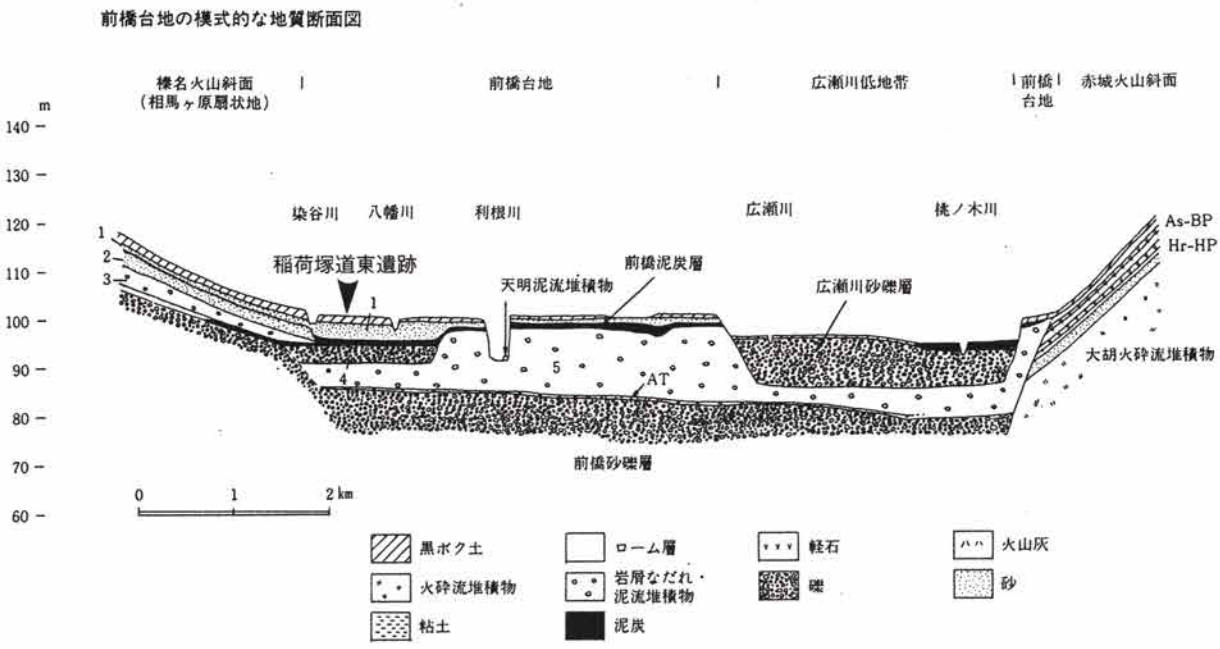
本遺跡は、前橋市中心部から西へ約３kmの前橋市総社町に所在する。標高は約120mである。遺跡地の周囲には主要幹線道路が縦横に走っている。西側には市道大友町西通線（通称、産業道路）、北側約300mには前橋・箕郷線が東西に、南側約１kmには国道17号バイパスが東西に走り、また、約200m東にはJR上越線が南北に走っている。そして、これらの主要幹線道路に沿って市街化が進み、工場や住宅街が遺跡地を取り囲むように立ち並んでいる。榛東村に源を発する八幡川と、江戸時代初期、総社藩主秋元長朝により開削された天狗岩用水が遺跡地の北約150m地点で合流し、滝川と名前を変えた後、遺跡地のすぐ東側を通り、利根川と並行する形でさらに流下していく。

本遺跡は、榛名山東南麓に広がる相馬ヶ原扇状地の扇端が前橋台地に移行する付近に立地する。相馬ヶ原扇状地は、榛名山東南麓に約1.4万年前に形成された扇状地であり、堆積物が岩塊層と基質層の組み合わせからなることから山体崩落に伴う岩屑なだれの堆積物に由来していると考えられている。この堆積物には、粗粒の斜長石と斜方輝石を斑晶として含む灰色の安山岩が多く認められる。その範囲は、標高600m付近を扇頂として、扇端地は標高110m付近に達し、北は渋川市南部から榛東村、吉岡町、箕郷町北東部、群馬町にわたる。この扇状地の傾斜変換線に当たる標高150m前後の地点には各所に湧水点がある。これらの湧水は榛名山の標高260～280m付近（榛東村）に源を持つ。前橋台地は利根川が赤城山と榛名山の山麓の間から関東平野に流れ出した場所に広がる約２万年前に形成された緩斜面の台地である。層位や分布域、含まれる岩石の特徴から、浅間山の山体崩落に由来していることが明らかにされている。この台地は、旧利根川の流域である桃ノ木川と烏川との間に広がる広大な台地面である。台地面は多少の起伏はあるが、ほとんどが平坦地形である。総社砂層は利根川右岸の前橋台地の上位に堆積しており、総社町の市街地がのる扇状地を形成している。相馬ヶ原扇状地上には縄文時代のある時期に堆積した砂層が存在するが、この砂層が総社砂層と連続している可能性が高く、総社砂層は相馬ヶ原扇状地上も含めて幅広く堆積しているのではないかと考えられている。遺跡地の自然科学分析では、相馬ヶ原扇状地堆積物の上層から総社砂層堆積物に対比される可能性が高い水成堆積物層が確認された。また、この厚い水成堆積物の堆積開始時期は、この層の基底から検出されたテフラが約8,200年前に浅間山火山から噴火した浅間藤岡軽石（As-F0）に同定される可能性が高いので、約8,000年前と考えられる。相馬ヶ原扇状地堆積物層と総社砂層に対比される層の間には、浅間板鼻黄色軽石（As-Yp、約1.3～1.4万年前）、浅間総社軽石（As-Sj、約1.1万年前）の指標テフラが検出された。本遺跡の総社砂層に対比される層の上面には、下位より浅間Ｃ軽石（As-C）、榛名二ッ岳渋川テフラ（Hr-FA）、浅間Ｂテフラ（As-B）などを含む黒褐色土が覆っている。基本土層については、本報告書の第１章第３節（２）基本土層、第５章第１節自然科学分析（Ｉ．テフラ分析）を参照されたい。

引用・参考文献
2001　『元総社西川遺跡』（（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団）
1995　『大屋敷遺跡Ⅲ』（前橋市埋蔵文化財発掘調査団）
1980　『群馬県史　通史編１』
1998　『群馬町誌　資料編１』
2001　『群馬町誌　通史編上』



第５図　遺跡周辺の地質図



1：総社砂層，2：相馬ヶ原扇状地堆積物，3：陣場岩屑なだれ堆積物，4：元利根川段丘堆積物，5：前橋泥流堆積物．

第６図　地質断面図

第２節　周辺の遺跡

今回の調査によって、検出された主な遺構は古墳時代から中近世にかけてであるが、調査区の出土遺物の中には縄文時代早期後半～後期の土器片も若干検出されている。ここでは本遺跡地周辺の歴史的環境を時代別に概観してみたい。

本遺跡周辺は、上野国府跡（９）、上野国分僧寺跡（７）、国分尼寺跡（８）、山王廃寺跡（６）、総社古墳群等周知の遺跡の存在する古代上野国にあっては中枢的地域である。

旧石器時代　旧石器時代の遺構は、本遺跡周辺では現在まで検出されていない。

縄文時代　縄文時代では、早期押型文土器を検出した熊野谷遺跡、前期末葉の包含層調査の高井桃ノ木遺跡（50）等があげられる。また、上野国分僧寺・尼寺中間地域（11）や清里長久保遺跡等では、前期の住居跡も検出している。中期になると遺構量が増え、上野国分僧寺・尼寺中間地域を初め、北原遺跡（13）、大屋敷遺跡（５）、沼南遺跡の集落跡のほか、産業道路東遺跡（２）では石囲い炉、長久保大畑遺跡では配石遺構が検出されている。後期では、産業道路西遺跡（３）で石囲い炉が検出されている。本遺跡では縄文時代の遺構は検出されなかったが、早期後半の条痕文系土器片・打製石斧などの石器が数点出土している。

弥生時代　弥生時代では、県内平野部で水田跡が検出されている。周辺の遺跡では、中期後半の環濠集落が検出された清里・庚申塚遺跡や後期集落・方形周溝墓の検出された上野国分僧寺・尼寺中間地域がある。弥生時代は、本遺跡周辺では遺物の散布は見られるものの遺構はほとんど検出されていない。本遺跡では弥生時代の遺構は検出されなかったが、２号溝から石鏃１点が出土している。

古墳時代　古墳時代では、この地域も上毛野の他地域同様多くの古墳が存在する地域である。本遺跡周辺の総社古墳群には、王山古墳（39）、薬師様古墳（42）、遠見山古墳（43）、蛇穴山古墳（44）、宝塔山古墳（45）、大小路山古墳（46）、稲荷山古墳（47）、愛宕山古墳（48）、総社二子山古墳（49）、等が存在する。王山古墳は、榛名山二ッ岳火山灰（FA）の上に構築されており、６世紀初めとされ、当初円墳を構築した後に前方部を構築したことが明らかとなっている。宝塔山古墳は、７世紀後半の方墳で石室は複室横穴式両袖型で、輝石安山岩と角閃石安山岩が使用されており、漆喰が塗布されている。玄室には脚部に格狭間をくり込んだ家形石棺が安置されており、仏教文化の影響が推測されている。蛇穴山古墳は、県内でも最も新しい７世紀末葉の古墳である。

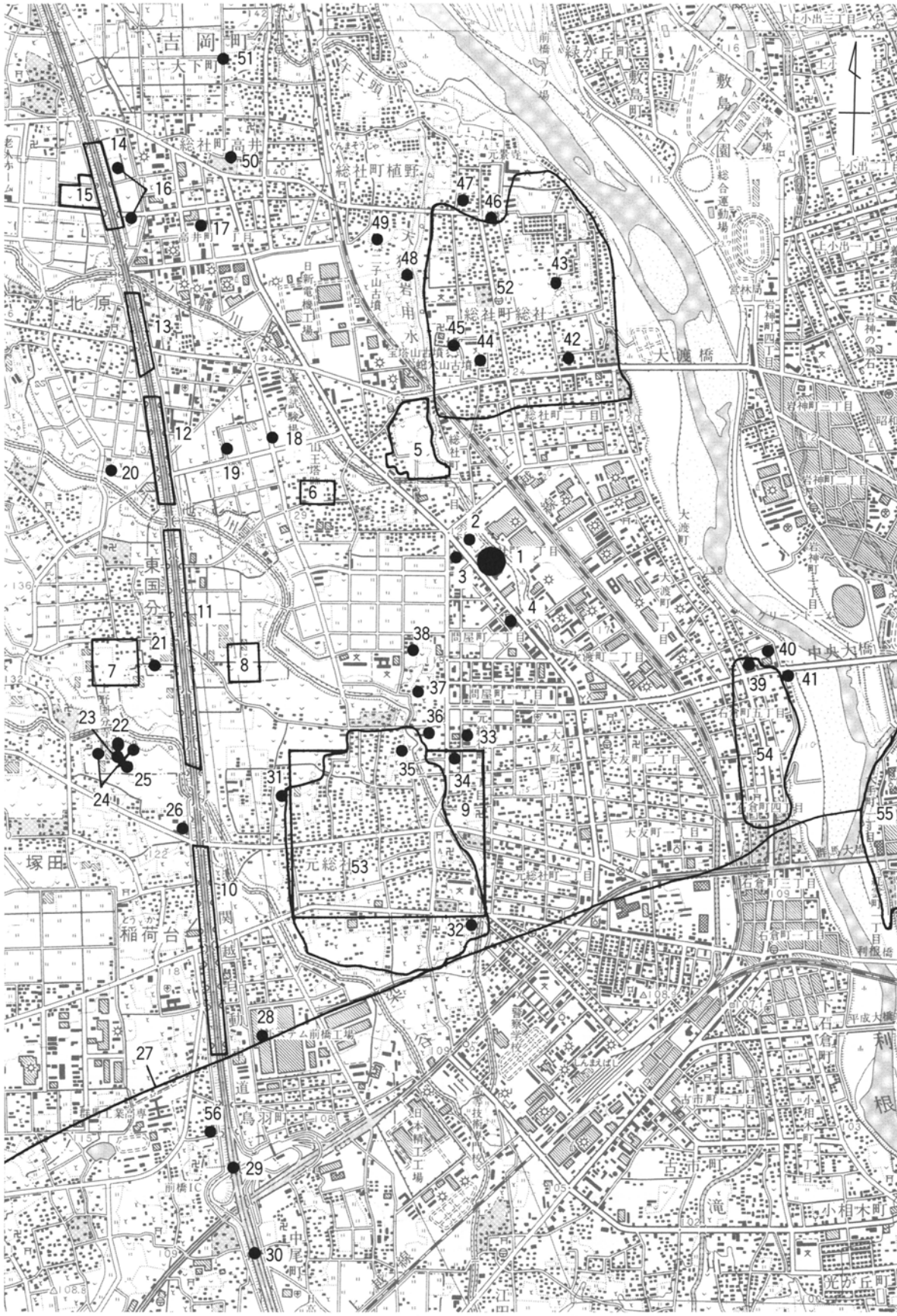
その他の遺構では、元総社西川遺跡（22）で、古墳時代初頭の竪穴住居跡４軒とAs-C直下の畠跡が検出されている。他には、前期の集落跡としては、新保遺跡、熊野堂遺跡、保渡田荒神前遺跡、寺屋敷Ⅰ遺跡、保渡田Ⅶ遺跡、上野国分僧寺・尼寺中間地域、鳥羽遺跡（10）などがあげられる。古墳時代中期～後期になると、周辺には県内を代表する遺跡が分布する。三ッ寺Ⅰ遺跡の居館跡は、全国で初めて発見された古墳時代首長層の館である。周辺で発見されたHr-FA下水田、1000軒を超える竪穴住居跡、二子山・八幡塚・薬師塚古墳の三つの前方後円墳を擁する保渡田古墳群との関連が指摘され、５世紀中頃から６世紀にかけて、高度な技術力と大量の労働力を駆使できた巨大な権力者が存在したことを明らかにした。本遺跡では、前期４軒、中期11軒、後期14軒の竪穴住居跡が検出された。

奈良・平安時代　本遺跡の西へ1250mには上野国分尼寺、西へ1750mには上野国分寺、北西750mには山王廃寺、南へ750mには上野国府跡、また、南へ1750mには推定東山道（27）が存在し、遺跡地周辺がこの時代の上野国の政治・文化・宗教の中枢を担った地域であったことが伺える。そのため、周辺地域には奈良・平安時代の多くの遺跡が発見されている。特に、関越自動車道（新潟線）に伴う発掘調

査では、中尾遺跡（29）約250軒、鳥羽遺跡約1000軒、上野国分僧寺・尼寺中間地域約1200軒、国分境遺跡（12）約130軒、北原遺跡約100軒と多数の竪穴住居跡が検出されている。また、前橋市の調査でも、弥勒遺跡（28）、閑泉樋南遺跡（34）、総社閑泉明神北Ⅱ遺跡（36）、総社甲稲荷塚大道西遺跡（37）などで竪穴住居跡が検出されている。上野国分僧寺は、1980年から史跡の整備保存に伴って県教委が発掘調査し、寺域と主要建物の構成が明らかになった。周辺では、上野国分二寺中間地域（21）、元総社西川遺跡、元総社西川・塚田中原遺跡（23）、国分寺参道遺跡（24）、国府南部遺跡群（25）、塚田村東遺跡（26）などが調査され、築垣で囲まれた寺域とその周辺の様子が研究されている。上野国分尼寺は、確認調査が実施されただけでその全貌は明らかではないが、講堂は調査が実施されている。山王廃寺は、白鳳期に建立され平安時代中期（７世紀後半～11世紀）まで存続した「放光寺」であろうと考えられている。７世紀後半は宝塔山古墳、蛇穴山古墳が築造された時期で、共通の石材加工技術の存在が想定されることから、並行して造営が進められていたことが指摘されている。また、鳥羽遺跡、大屋敷遺跡Ⅲ（５）では、該期の遺跡内の竪穴住居跡の竈に使用したと思われる構築材（凝灰岩）を採掘した痕が多数検出されている。本遺跡でも、49軒の竪穴住居跡、約130基の竈構築材採掘痕群、溝、井戸が検出された。

中世以降　平安時代の末期、国衙役人の力が衰えたとはいえ、国府周辺は、地方の中心都市であり、軍事的・政治的に重要な位置に置かれていた。周辺遺跡では、鎌倉時代を限定する調査例がなく、中世といっても、大半が室町時代以降のものである。本遺跡の周辺にも、総社城跡（52）、蒼海城跡（53）、石倉城跡（54）、前橋城跡（55）、金尾城跡（56）等の城跡があり、他にも微高地にはいくつもの中世城館が存在していたと思われる。室町時代に入ると、上野守護は上杉氏、守護代は主に長尾氏で戦国時代まで続く。長尾景行（総社長尾氏）は、永享元年（1429年）に上野国府跡に蒼海城を築き、国府は完全に姿を消す。その後、長尾景行の子忠房は、文明17年（1485年）に現在の利根川右岸に石倉城を築城する。やがて、戦国時代に入ると、強力な戦国大名の成長しなかった上野国は、北条・武田・上杉の戦国大名の争奪の場となり、100余年もの長い間各地で戦乱が続いた。この間、西上州では箕輪城を本城とする長野氏が勢力を伸ばしたが、遺跡周辺の菅谷城、蒼海城は長野氏にとって重要な砦であった。長野氏は最後まで上杉管領体制を守りぬいて、北条、武田の両雄に対抗するが、武田信玄により滅ばされる。その後は、この地は武田、織田、北条、徳川の重臣が封ぜられる。延徳元年（1489年）には、厩橋城（前橋城）が長野氏によって築造された。前橋城は、徳川家康が「関東の華」と称した名城で、酒井、松平氏と譜代大名が配置された。戦国の世を経て、江戸時代（17世紀初め）になると秋元長朝が総社城を築き、天狗岩用水を開削し、新田の開発を行った。前述の遠見山古墳はこの総社城の物見台に利用されていた。城跡以外では、上野国分僧寺・尼寺中間地域で寺院跡と推定される溝・土壙墓、元総社西川遺跡では上幅６ｍ、深さ２ｍの大溝が検出されている。本遺跡では、溝１条、数基の土坑が検出された。

引用・参考文献
2001　『元総社西川遺跡』（（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団）
2000　『長久保大畑・新田入口遺跡』（（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団）
1997　『前橋城遺跡Ⅰ』（（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団）
1995　『大屋敷遺跡Ⅲ』（前橋市埋蔵文化財発掘調査団）
1987　『下東西遺跡』（（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団）
1971　『前橋市史』
1971　『群馬県古城墨趾の研究　上巻』山崎一



第７図　周辺遺跡図（国土地理院１：25,000「前橋・渋川」使用）

第１表　周辺遺跡一覧表

No.	遺　跡　名	時　代	主　な　文　献	No.	遺　跡　名	時　代	主　な　文　献
1	稲荷塚道東遺跡	古墳～中世	本報告書	29	中尾遺跡	古墳～中世	『中尾遺跡』 県埋文事業団　1983・1984
2	産業道路東遺跡	縄文前～中	『前橋市史』 前橋市教育委員会　1971	30	吹屋遺跡	縄文～中世	『元島名Ｂ・吹屋遺跡』 県埋文事業団　1982
3	産業道路西遺跡	縄文前～中	『前橋市史』 前橋市教育委員会　1971	31	草作遺跡	縄文～中・近世	『草作遺跡』 前橋市埋文調査団　1985
4	稲荷山古墳 （総社町稲荷塚）	古墳	『群馬県遺跡台帳』Ⅰ（東毛編） 群馬県教育委員会　1971	32	元総社寺田遺跡	縄文～中・近世	『元総社寺田遺跡』Ⅰ～Ⅲ 県埋文事業団　1993・1994・1996
5	大屋敷遺跡群	縄文中・古墳前 ～中世	『大屋敷遺跡』Ⅰ～Ⅳ 前橋市埋文調査団　1993～1996	33	関泉樋遺跡	奈良・平安	『関泉樋遺跡』 前橋市教育委員会　1983
6	山王廃寺	白鳳～平安	『山王廃寺跡発掘調査概報』 前橋市教育委員会　1976～1982	34	関泉樋南遺跡	古墳～奈良・平安	『関泉樋南遺跡』 前橋市教育委員会　1986
7	上野国分僧寺	奈良～	『史跡上野国分寺跡発掘調査報告書』 群馬県教育委員会　1989	35	総社関泉明神北遺跡	古墳～中・近世	『総社関泉明神北遺跡』 前橋市教育委員会　1999
8	上野国分尼寺	奈良～	『上野国分尼寺跡調査報告書』 群馬県教育委員会　1969・1970	36	総社関泉明神北Ⅱ遺跡	平安	『総社関泉明神北Ⅱ遺跡』 前橋市教育委員会　2001
9	上野国府推定域	奈良～	『関泉樋南遺跡』 前橋市教育委員会　1983	37	総社甲稲荷塚大道西遺跡	平安	『総社甲稲荷塚大道西遺跡』 前橋市教育委員会　2001
10	鳥羽遺跡	古墳～中近世	『鳥羽遺跡』 県埋文事業団　1986・1988・1990・1992	38	総社甲稲荷塚大道西 Ⅱ遺跡	平安	『総社甲稲荷塚大道西Ⅱ遺跡』 前橋市教育委員会　2001
11	上野国分僧寺尼寺 中間地域	縄文中～中・近世	『上野国分僧寺尼寺中間地域(1)～(8)』 県埋文事業団　1987～1992	39	王山古墳	古墳後	『群馬県遺跡台帳』Ⅰ（東毛編） 群馬県教育委員会　1971
12	国分境遺跡	古墳後～平安	『国分境遺跡』 県埋文事業団　1990	40	墳墓	古墳	『群馬県遺跡台帳』Ⅰ（東毛編） 群馬県教育委員会　1971
13	北原遺跡	縄文中・弥生 古墳後～平安	『北原遺跡』 群馬町教育委員会　1986	41	墳墓	古墳	『群馬県遺跡台帳』Ⅰ（東毛編） 群馬県教育委員会　1971
14	下東西遺跡	縄文前～中世	『下東西遺跡』 県埋文事業団　1987	42	薬師様古墳	古墳	『群馬県遺跡台帳』Ⅰ（東毛編） 群馬県教育委員会　1971
15	下東西清水上遺跡	縄文～中・近世	『下東西清水上遺跡』 県埋文事業団　1998	43	逸見山古墳	古墳中	『東国古墳時代の研究』 右島和夫　1994
16	清里南部遺跡群 （下東西遺跡）	古墳・奈良・平安	『清里南部遺跡群Ⅲ』 前橋市教育委員会　1986	44	蛇穴山古墳	古墳終	『群馬県史　資料編３』 群馬県教育委員会　1981
17	柿木遺跡	縄文～中・近世	『柿木遺跡』 前橋市教育委員会　1984	45	宝塔山古墳	古墳終	『群馬県史　資料編３』 群馬県教育委員会　1981
18	国分境Ⅱ遺跡	古墳後～奈良	『国分境Ⅱ遺跡』 前橋市教育委員会　1992	46	大小路山古墳	古墳	『群馬県遺跡台帳』Ⅰ（東毛編） 群馬県教育委員会　1971
19	国分境Ⅳ遺跡	縄文中・古墳後 ～平安	『国分境Ⅳ遺跡』 群馬町教育委員会　1998	47	稲荷山古墳 （総社町総社）	古墳	『群馬県遺跡台帳』Ⅰ（東毛編） 群馬県教育委員会　1971
20	国分境Ⅲ遺跡	縄文中・古墳後 ～平安	『国分境Ⅲ遺跡』 群馬町教育委員会　1993	48	愛宕山古墳	古墳後	『前橋市総社古墳群の形成過程とその画期』右島和夫、群馬県史研究第22号
21	上野国分二寺中間 地域	奈良・平安	『上野国分尼寺跡・上野国分二寺中間地域』　県埋文事業団・県教委　1993	49	総社二子山古墳	古墳後	『前橋市総社古墳群の形成過程とその画期』右島和夫、群馬県史研究第22号
22	元総社西川遺跡	古墳～中世	『元総社西川遺跡』 県埋文事業団　2001	50	高井桃ノ木遺跡	縄文前～中世	『高井桃ノ木遺跡』 大友町西通線遺跡調査会　1999
23	元総社西川・塚田中 原遺跡	古墳～中世	『元総社西川・塚田中原遺跡』 県埋文事業団　2003	51	新田入口遺跡	縄文中～中近世	『長久保大畑遺跡・新田入口遺跡』 県埋文事業団　2000
24	上野国分寺参道遺跡	古墳～平安	『上野国分寺参道遺跡』 前橋市埋文調査団　1997	52	総社城跡	近世	『群馬県古城墓址の研究』 山崎一　1971
25	国府南部遺跡群	古墳後～平安	『国府南部遺跡群』 群馬町教育委員会　1997	53	蒼海城跡	中世	『群馬県古城墓址の研究』 山崎一　1971
26	塚田村東遺跡	平安	『塚田村東遺跡調査概報』 群馬町教育委員会　1986	54	石倉城跡	中世	『群馬県古城墓址の研究』 山崎一　1971
27	推定東山道	奈良～	『推定東山道』 群馬町教育委員会　1986	55	前橋城遺跡	縄文～近世	『前橋城遺跡Ⅰ』 県埋文事業団　1997
28	弥勒遺跡	古墳・奈良・平安	『弥勒遺跡』 前橋市埋文調査団　1990	56	金尾城（中尾城）	中世	『群馬県古城墓址の研究』 山崎一　1971

第３章　検出された遺構と遺物

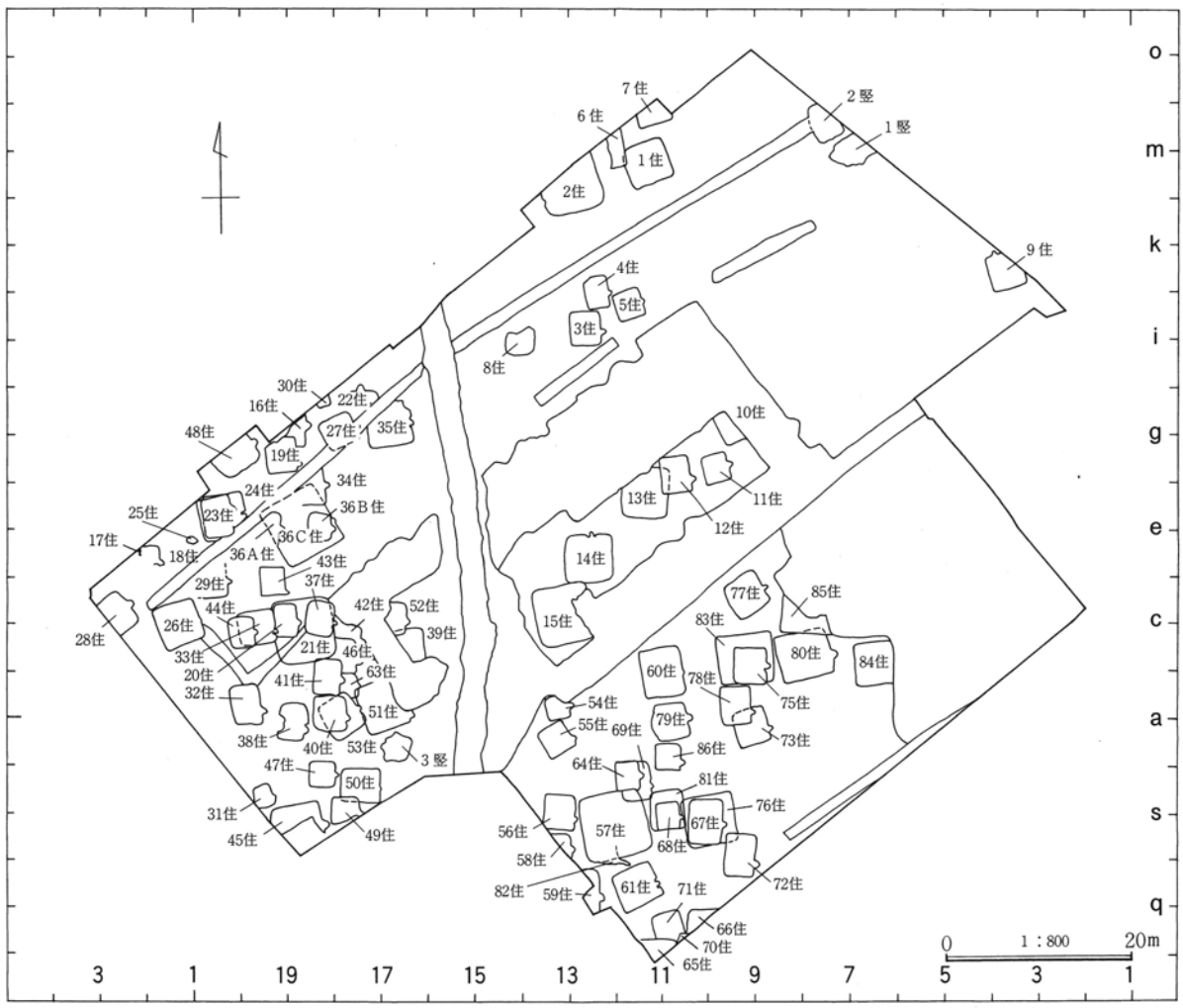
第１節　竪穴住居、竪穴状遺構

竪穴住居、竪穴状遺構の概要

調査により古墳時代前期４軒・中期11軒・後期14軒、８世紀13軒・８世紀末～９世紀初２軒・９世紀10軒・９世紀末～10世紀初１軒・10世紀20軒・10世紀末～11世紀初２軒・11世紀１軒、時期不明６軒、計84軒の竪穴住居が検出された。

このことから、４世紀～11世紀にかけて、本地域には、途切れることなく人々が生活を営んでいたことが明らかとなった。また、古墳時代中期11軒のうち、３軒は竈がなく、残りの８軒には竈が付設される住居であった。本地域の竪穴住居に竈が出現する社会的な画期を物語る重要な遺構である。検出された竪穴住居は、後世の撹乱や他の住居との重複により遺構の残存が悪いものが多かった。竈は使用面がはっきりしないものが多く、人為的に壊したと思われるものもあった。

また、調査時に竪穴住居跡として認定されなかった、竪穴状遺構３軒も本節で報告したい。３軒は、撹乱などのため削平され残存が悪く、出土遺物も少ないため、遺構の性格が不明なものである。



第８図　竪穴住居跡・竪穴状遺構全体図

（１）竪穴住居

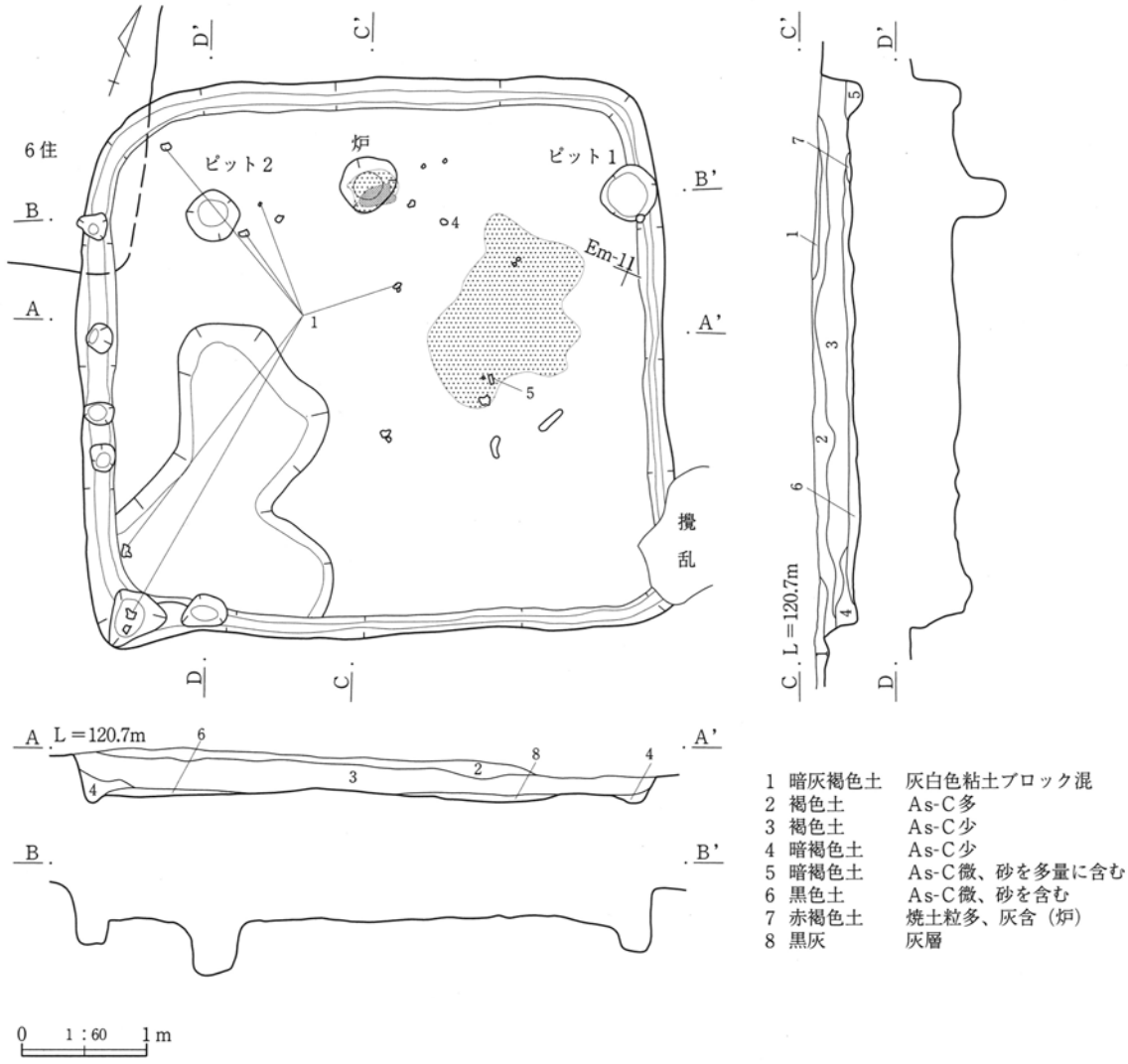
１号住居跡（第９・10図、ＰＬ２・30）

位置　Ｅｌ～ｍ－10～11　**重複**　６号住居と重複している。本遺構が古い。　**形状**　長軸4.8ｍ、短軸4.5ｍの隅丸方形を呈する。　**面積**　16.88㎡

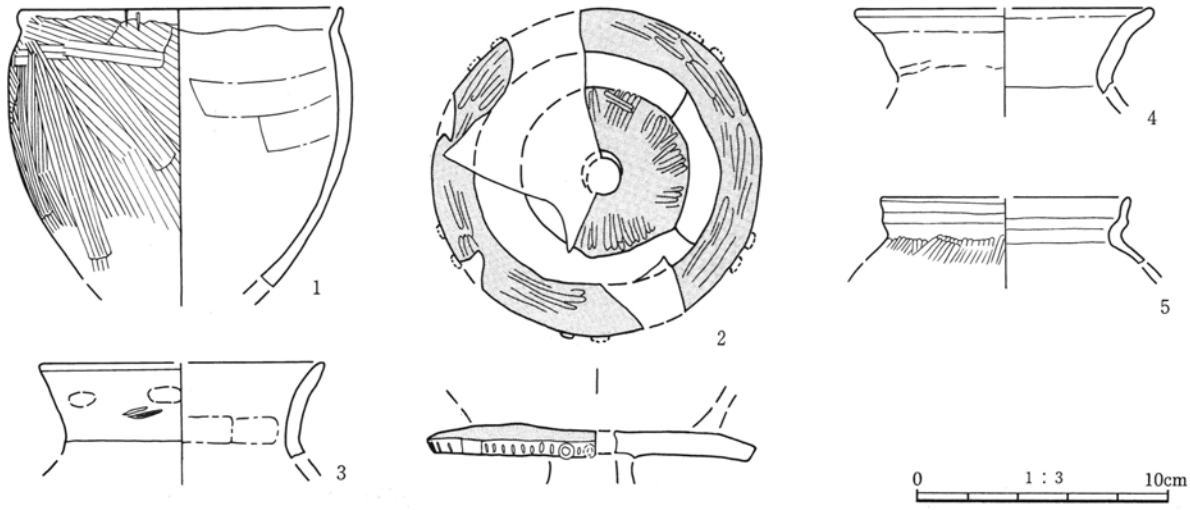
方位　Ｎ－69°－Ｅ　**床面**　遺構確認面より22cm掘り込んで床面となる。床面の標高は平均120.15ｍを測る。東側中央付近に灰・炭化物の分布を確認した。　**壁溝**　幅約18cm、深さ約７cmの壁溝が一周している。凹凸が多く、壁溝内に大小７基のピットが検出された。　**貯蔵穴**　検出されなかった。

柱穴　柱穴と思われるピットは２基検出された。ピット１は、径48cm・深さ17cm。ピット２は、径42cm・深さ38cmを測る。　**炉**　北側のほぼ中央部に設置。規模は、径48cm・深さ15cmを測る。

遺物　土師器鉢、小型壺、Ｓ字状口縁台付甕、赤色塗彩のある特殊器台の器受部片が出土している。他に土師器片1.2kg、須恵器片110ｇ出土。　**所見**　出土遺物から４世紀中葉と考えられる。



第９図　１号住居跡



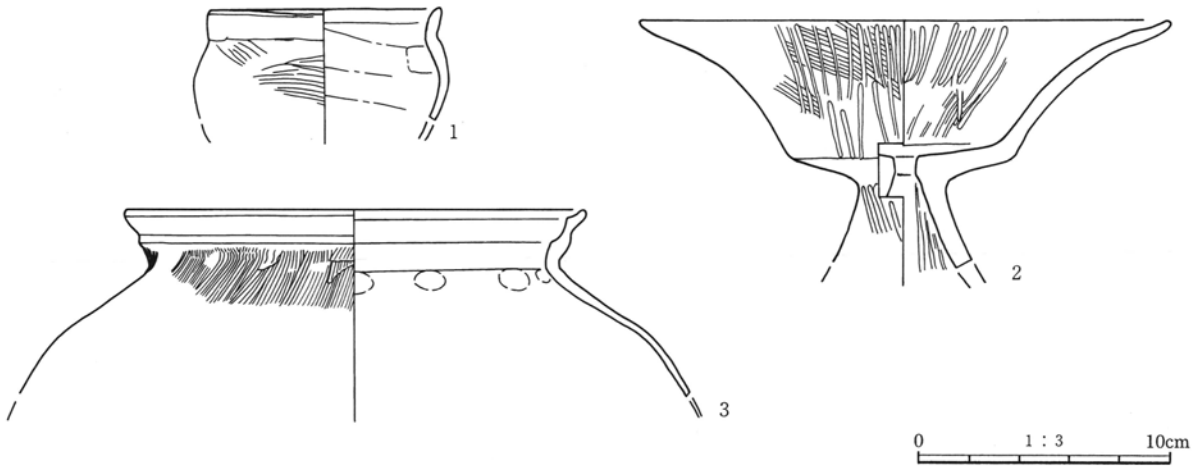
第10図　１号住居跡出土遺物

２号住居跡（第11・12図、ＰＬ２・30）

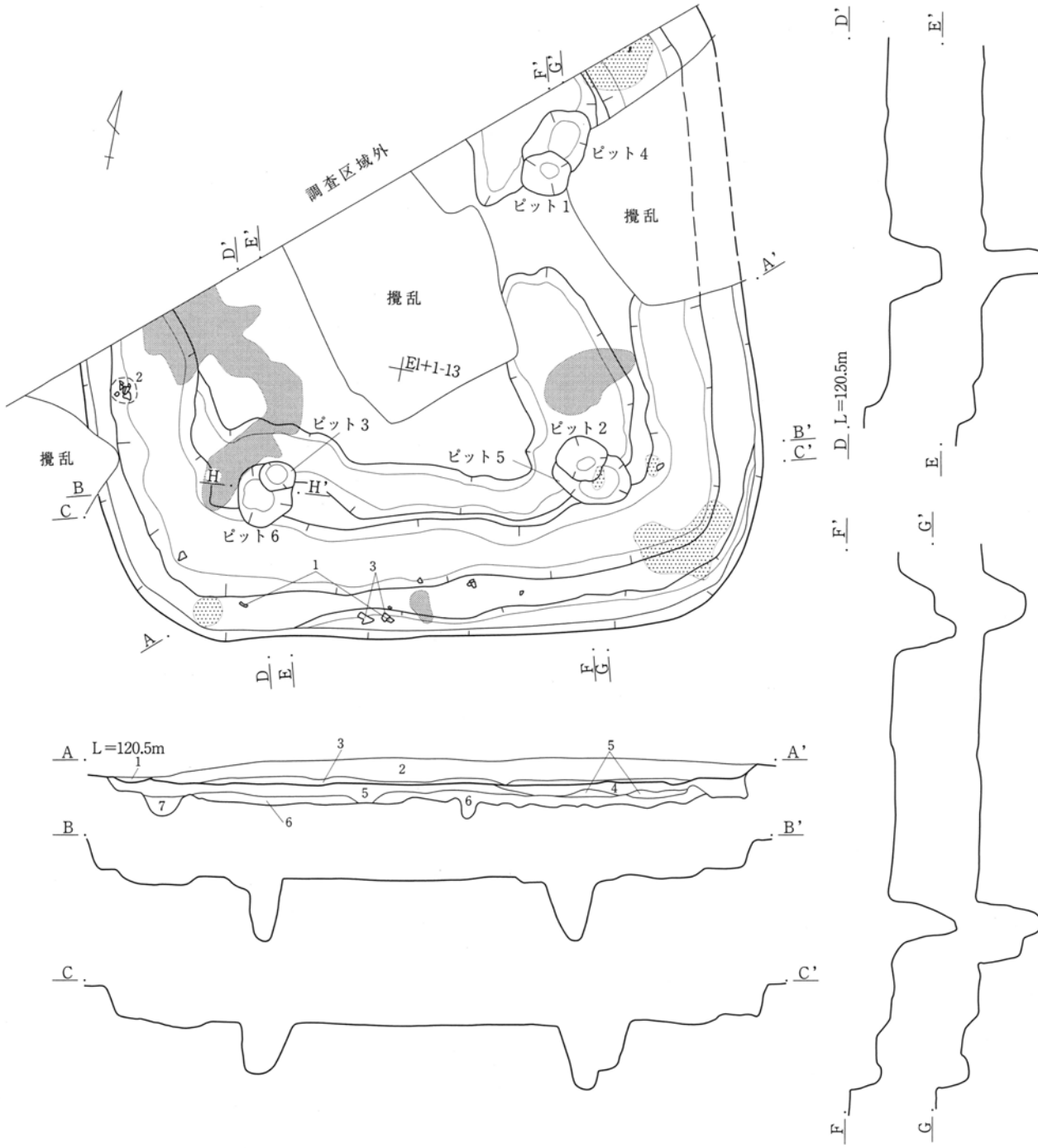
位置　Ｅｋ～ｌ－12～13　**重複**　なし。　**形状**　長軸6.5m、短軸（5.5）ｍの隅丸方形。　**面積**　（26.56）㎡。　**方位**　Ｎ－77°－Ｅ　**床面**　遺構確認面より12cm掘り込んで床面となる。床面の標高は平均120.29mを測る。西側中央部に焼土分布、東側・壁溝付近に灰・炭化物の分布を確認した。　**壁溝**　幅約26cm、深さ約11cmの壁溝が一周している。

貯蔵穴　検出されなかった。　**柱穴**　柱穴と思われるピットは６基検出された。ピット１は、径48cm・深さ85cm。ピット２は、径50cm・深さ91cm。ピット３は、径38cm・深さ82cm。ピット４は、径74cm・深さ87cm。ピット５は、径80cm・深さ70cm。ピット６は、径62cm・深さ71cmを測る。同じ場所に新旧関係のわかる二つの柱穴が確認されたことから、住居の建て替えが行われた可能性が考えられる。　**炉**　検出されなかった。

遺物　土師器高坏、小型壺、Ｓ字状口縁台付甕が出土している。他に土師器片710ｇ、須恵器片82ｇ出土。　**所見**　住居の北側は調査区域外で、攪乱も多く、全容は明らかにできなかった。出土遺物から４世紀中葉と考えられる。



第11図　２号住居跡出土遺物



1 暗褐色土　As-C混、焼土ブロック多
2 暗褐色土　As-C含、焼土粒・灰粒混
3 黒褐色土　As-C少、粘質土ブロック混、灰粒含、硬化
4 黒褐色土　As-C少、暗灰褐色シルトブロック多
5 黒褐色土　As-C少、粘質土、灰色ブロック・焼土粒含
6 黒褐色土　暗灰褐色シルトブロック含、粘質土
7 黒褐色土　As-C少、灰色ブロック・焼土粒少

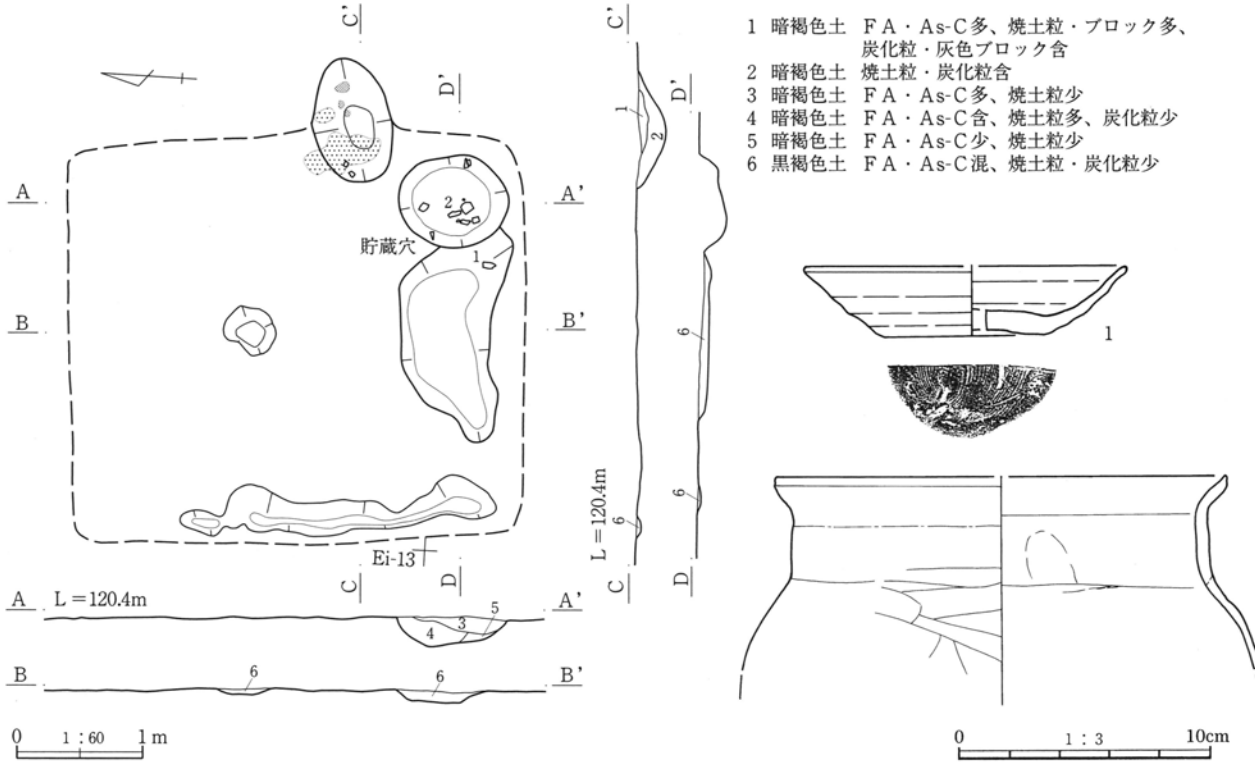
ピット6
1 暗褐色土　As-C微
2 淡褐色土と黒褐色土の混土
3 暗褐色土　As-C少
4 黄褐色土　黒褐色土を含む
5 暗褐色土　黒褐色土を含む
6 暗褐色土　５層に比べ色調明るい

0　1:60　1m

第12図　２号住居跡

３号住居跡（第13図、ＰＬ３・30）

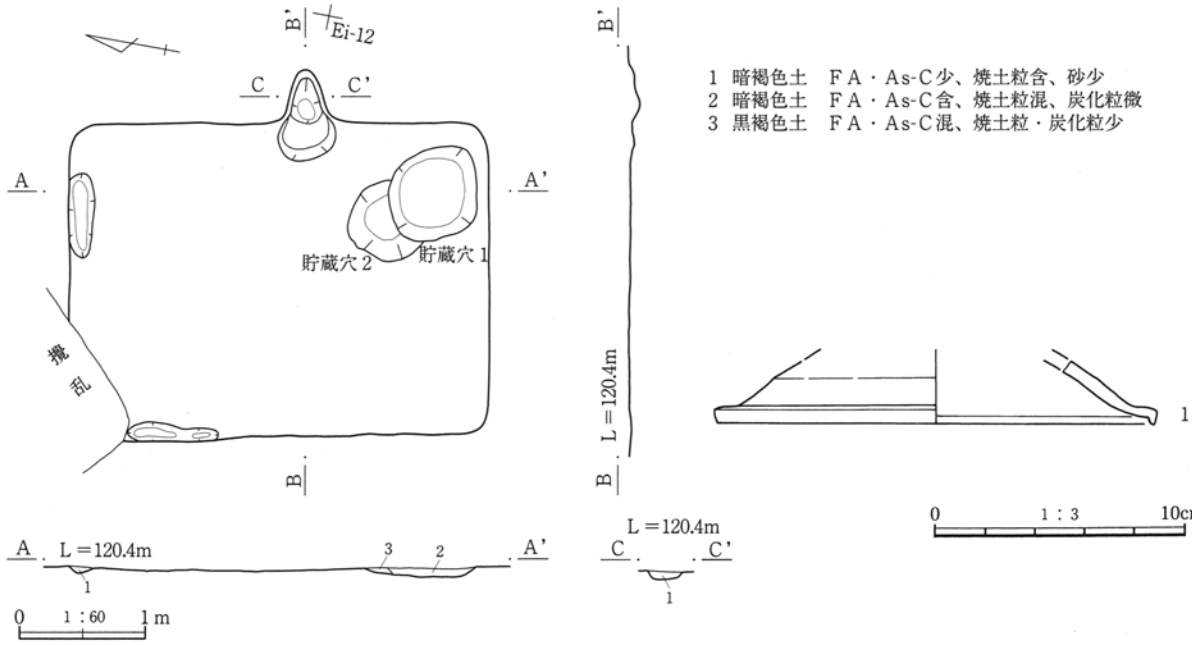
位置　Ｅｈ～ｉ－12　**重複**　なし。　**形状**　長軸3.6m、短軸3.3mの隅丸方形を呈する。　**面積**　(11.50)㎡　**方位**　Ｎ－80°－Ｗ　**床面**　攪乱のため床面は検出できなかったため、焼土・炭化物の分布状況から、竈・貯蔵穴を認定し、住居範囲を想定した。掘り方面の標高は平均120.35mを測る。　**壁溝**　幅約25cm、深さ約５cm、長さ約２mの壁溝が西側で検出された。　**貯蔵穴**　住居の南東隅に設置。径89cm・深さ22cmの楕円形を呈する。　**柱穴**　検出されなかった。　**竈**　東壁面の南寄りを掘り込んで造られている。残存状態が悪く、掘り方のみ検出。燃焼部に焼土粒・炭化物が残っていた。両袖方向24cm、煙道方向50cmを測る。　**遺物**　貯蔵穴から土師器甕、須恵器坏が出土している。他に土師器片600ｇ、須恵器片40ｇ出土。　**所見**　出土遺物から９世紀中葉と考えられる。



第13図　３号住居跡、出土遺物

４号住居跡（第14図、ＰＬ３・30）

位置　Ｅｉ～ｊ－12　**重複**　なし。　**形状**　長軸3.4m、短軸2.6mの隅丸長方形を呈する。　**面積**　8.18㎡　**方位**　Ｎ－84°－Ｅ　**床面**　攪乱のため床面は検出できなかったため、焼土・炭化物の分布状況から、竈・貯蔵穴を認定し、住居範囲を想定した。掘り方面の標高は平均120.29mを測る。　**壁溝**　幅約20cm、深さ約４cm、長さ約70cmの壁溝が北西側と北側で２カ所検出された。　**貯蔵穴**　住居の南東隅に設置。新旧と思われる２基を検出。貯蔵穴１は径90cm・深さ11cmの隅丸方形、貯蔵穴２は径70cm・深さ８cmの円形を呈する。貯蔵穴１が新しいと考える。　**柱穴**　検出されなかった。　**竈**　東壁面のほぼ中央を掘り込んで造られている。残存状態が悪く、掘り方のみ検出。両袖方向14cm、煙道方向38cmを測る。　**遺物**　貯蔵穴から須恵器蓋が出土している。他に土師器片170ｇ、須恵器片30ｇ出土。　**所見**　出土遺物から９世紀と考えられる。

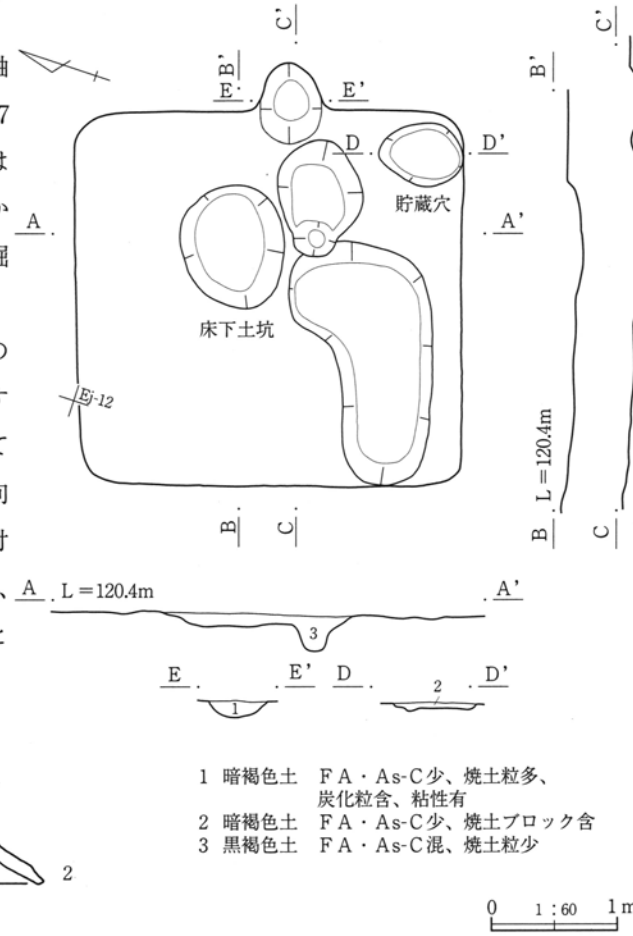


第14図　４号住居跡、出土遺物

５号住居跡（第15図、ＰＬ３・30）

位置　Ｅｉ～ｊ－11～12　**重複**　なし。　**形状**　長軸3.2m、短軸3.0mの隅丸方形を呈する。**面積**　9.07㎡　**方位**　Ｎ－69°－Ｅ　**床面**　撹乱のため床面は検出できなかったため、焼土・炭化物の分布状況から、竈・貯蔵穴を認定し、住居範囲を想定した。掘り方面の標高は平均120.25mを測る。

壁溝・柱穴　検出されなかった。　**貯蔵穴**　住居の南東隅に設置。径66cm・深さ11cmの楕円形を呈する。　**竈**　東壁面のほぼ中央を掘り込んで造られている。残存状態が悪く、掘り方のみ検出。両袖方向28cm、煙道方向32cmを測る。　**遺物**　土師器台付甕、須恵器坏が出土している。他に土師器片290ｇ、須恵器片60ｇ出土。　**所見**　出土遺物から８世紀と考えられる。



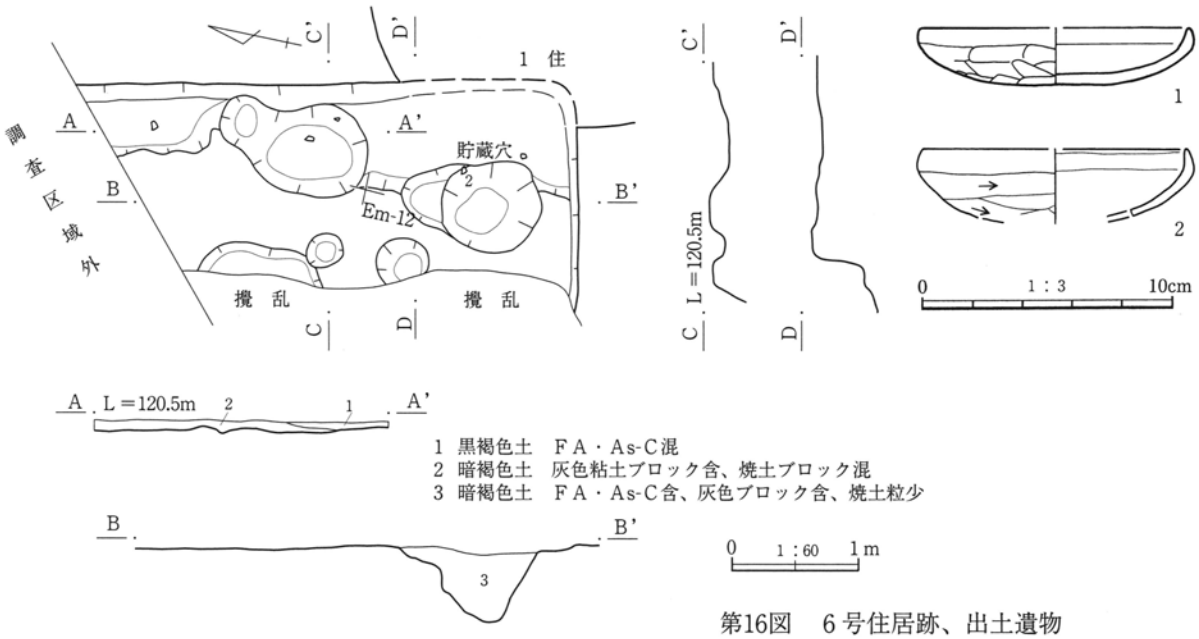
第15図　５号住居跡、出土遺物

６号住居跡（第16図、ＰＬ３・30）

位置　Ｅｌ～ｍ－11～12　**重複**　１号住居と重複している。本遺構が新しい。　**形状**　長軸（4.2）ｍ、短軸（1.8）ｍを測る。　**面積**　（4.97）㎡　**方位**　測定不可能。　**床面**　攪乱のため床面は検出できなかった。掘り方面の標高は平均120.40ｍを測る。

壁溝・竈　検出されなかった。　**柱穴**　検出されなかったが、浅いピットが２基確認された。

貯蔵穴　住居の南東に設置。径90cm・深さ59cmの楕円形を呈する。　**遺物**　土師器坏２点が出土している。他に土師器片570ｇ出土。　**所見**　住居の北側は調査区域外で、西側は攪乱で壊されており、全容は明らかにできなかった。出土遺物から７世紀後半と考えられる。

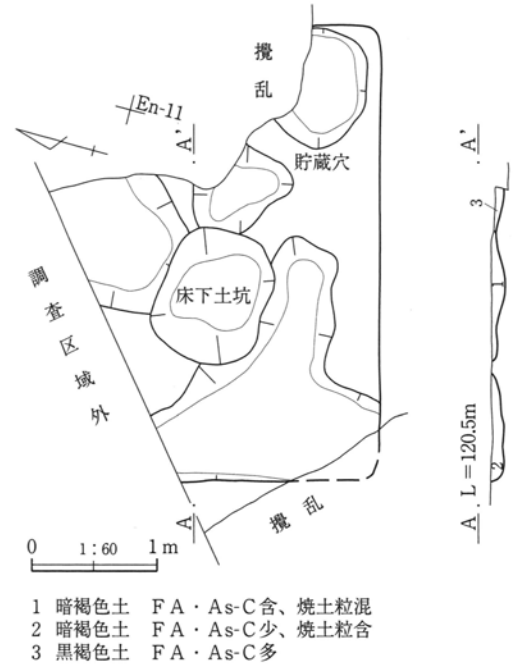


第16図　６号住居跡、出土遺物

７号住居跡（第17図、ＰＬ３）

位置　Ｅｍ～ｎ－10～11　**重複**　なし。　**形状**　長軸3.7ｍ、短軸（2.7）ｍを測る。　**面積**　（5.94）㎡　**方位**　測定不可能。　**床面**　攪乱のため、確認面は使用面下までおよんでおり、掘り方面しか検出できなかった。掘り方面の標高は平均120.32ｍを測る。掘り方下層は旧河川砂層。　**壁溝・柱穴**　検出されなかった。　**貯蔵穴**　住居の南東に設置。径94cm・深さ５cmの楕円形を呈する。　**竈**　検出されなかったが、焼土・灰が少量確認されたため、東側に竈は設置されていたと思われる。　**遺物**　掲載遺物はないが、土師器片250ｇが出土している。

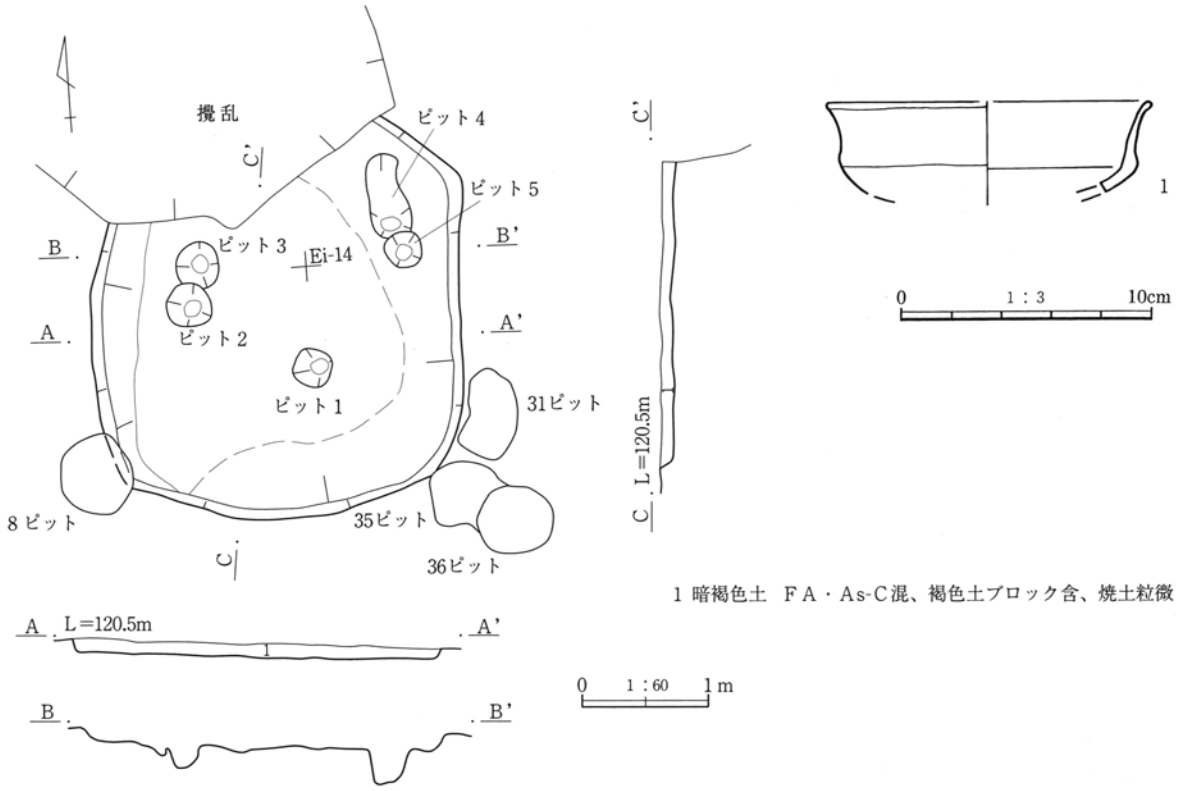
所見　住居の北側は調査区域外で、東側・西側は攪乱で壊されており、全容は明らかにできなかった。時期は不明である。



第17図　７号住居跡

８号住居跡（第18図、ＰＬ３・30）

位置　Ｅｈ～ｉ－13～14　**重複**　８号ピットと重複。　**形状**　長軸（3.1）ｍ、短軸3.0ｍを測る。　**面積**　(6.58) ㎡　**方位**　測定不可能。　**床面**　遺構確認面から12cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.31ｍを測る。　**壁溝・貯蔵穴**　検出されなかった。　**柱穴**　柱穴と思われるピットは５基検出された。ピット１は、径32cm・深さ28cm。ピット２は、径36ｃｍ・深さ22ｃｍ。ピット３は、径37cm・深さ16cm。ピット４は、長径66cm・深さ13cm。ピット５は、径31cm・深さ27cmを測る。　**竈**　検出されなかった。調査時、35・36号ピットが竈の可能性があると想定されたが、確証は得られなかった。また、住居の北側が攪乱で壊されており、北竈の可能性も考えられる。　**遺物**　土師器坏が出土している。他に土師器片110ｇ、須恵器片２ｇ出土。　**所見**　住居の北側は攪乱で壊されており、全容は明らかにできなかった。出土遺物から７世紀前半と考えられる。



1 暗褐色土　ＦＡ・As-C混、褐色土ブロック含、焼土粒微

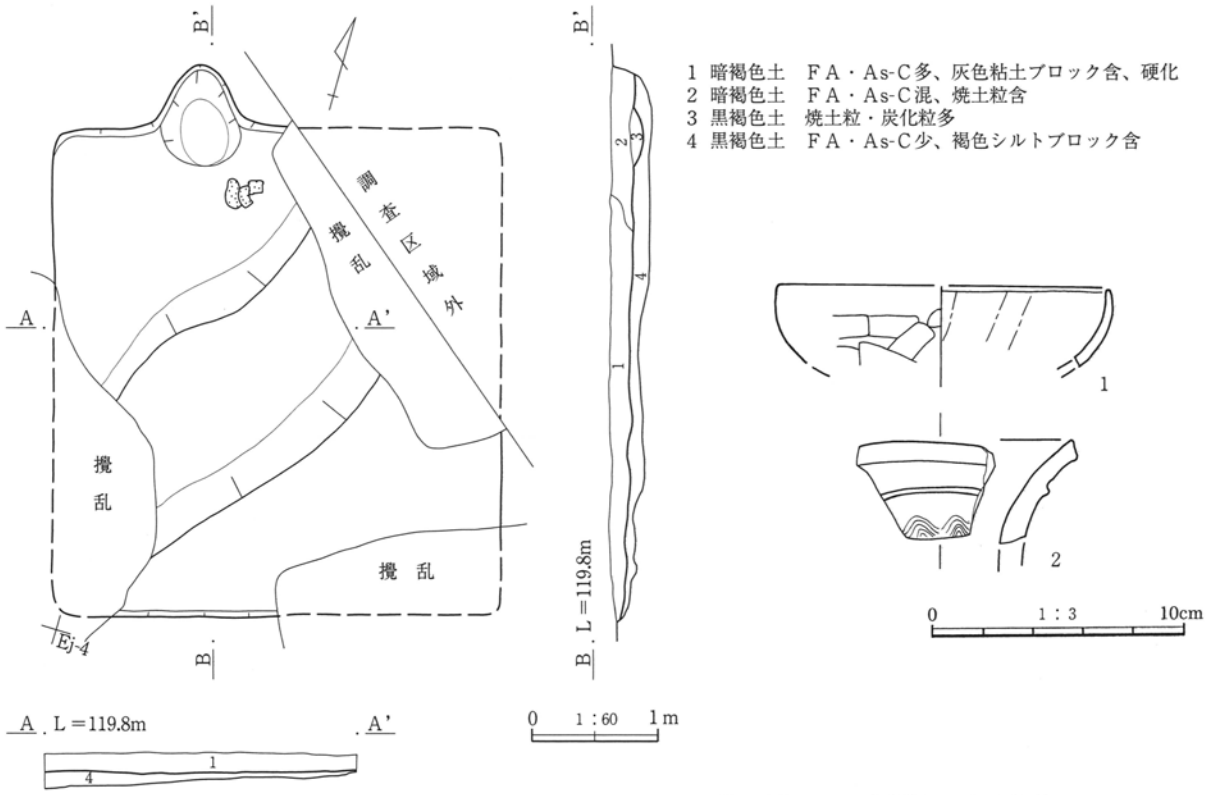
第18図　８号住居跡、出土遺物

９号住居跡（第19図、ＰＬ３・30）

位置　Ｅｊ－３～４　**重複**　なし。　**形状**　長軸4.0ｍ、短軸（3.2）ｍの隅丸長方形を呈する。

面積　(7.96) ㎡　**方位**　Ｎ－16°－Ｗ　**床面**　攪乱のため、確認面は使用面下までおよんでおり、掘り方面しか検出できなかった。掘り方面の標高は平均119.44ｍを測る。掘り方下層は旧河川砂層。

壁溝・貯蔵穴・柱穴　検出されなかった。　**竈**　北壁面の西寄りを掘り込んで造られている。残存状態が悪く、掘り方のみ検出。袖部・支脚に使用されたと思われる石が３点出土。両袖方向48cm、煙道方向48cmを測る。　**遺物**　土師器坏、須恵器壺が出土している。他に土師器片430ｇ、須恵器片120ｇ出土。　**所見**　住居の北東側は調査区域外で、南東側・南西側は攪乱で壊されており、全容は明らかにできなかった。出土遺物から６～７世紀と考えられる。



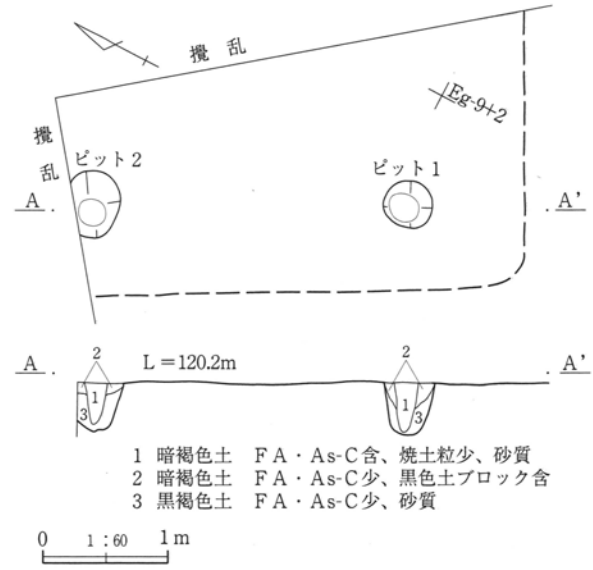
第19図　９号住居跡、出土遺物

10号住居跡（第20図、ＰＬ４）

位置　Ｅｆ～ｇ－９　**重複**　なし。　**形状**　長軸（3.8）ｍ、短軸（2.1）ｍを測る。　**面積**　（6.89）㎡　**方位**　測定不可能。　**床面**　確認面は使用面下までおよんでおり、掘り方面しか検出できなかった。焼土・炭化物の分布、２基の柱穴から住居の範囲を想定した。掘り方面の標高は平均120.14ｍを測る。

壁溝・貯蔵穴　検出されなかった。　**柱穴**　柱穴と思われるピットは２基検出された。ピット１は、径40cm・深さ47cm。ピット２は、径54cm・深さ37cmを測る。　**竈**　検出されなかった。

遺物　掲載遺物はないが、土師器片70ｇが出土している。　**所見**　住居の北側、東側は撹乱で壊されており、全容は明らかにできなかった。時期は不明。



第20図　10号住居跡

11号住居跡（第21図、ＰＬ４）

位置　Ｅｆ－９～10　**重複**　なし。　**形状**　長軸（3.0）ｍ、短軸（2.5）ｍの隅丸方形を呈する。

面積　（7.95）㎡　**方位**　Ｎ－82°－Ｅ　**床面**　確認面は使用面下のため、掘り方面しか検出できなかった。焼土・炭化物の分布から住居の範囲を想定した。掘り方面の標高は平均120.15ｍを測る。

壁溝・貯蔵穴・柱穴　検出されなかった。　**竈**　東壁面のほぼ中央を掘り込んで造られている。残存状

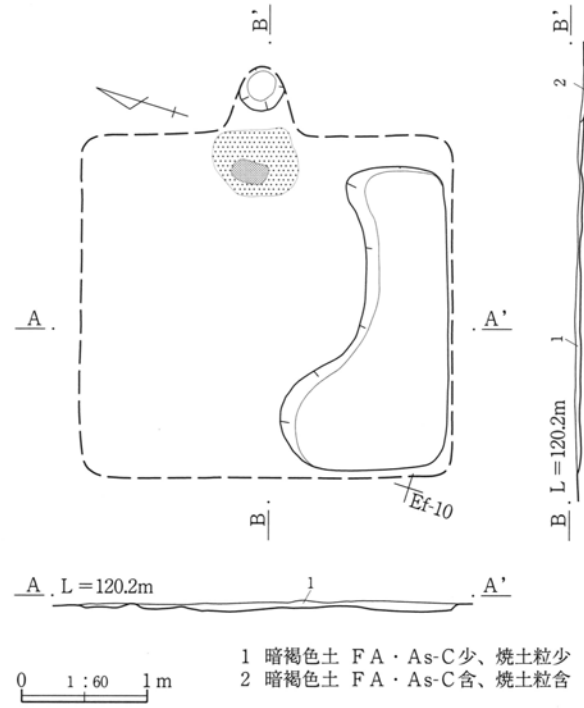
態が悪く、掘り方のみ検出した。両袖方向22cm、煙道方向34cmを測る。　**遺物**　掲載遺物はないが、土師器片20ｇ、須恵器片５ｇが出土している。

所見　時期不明。

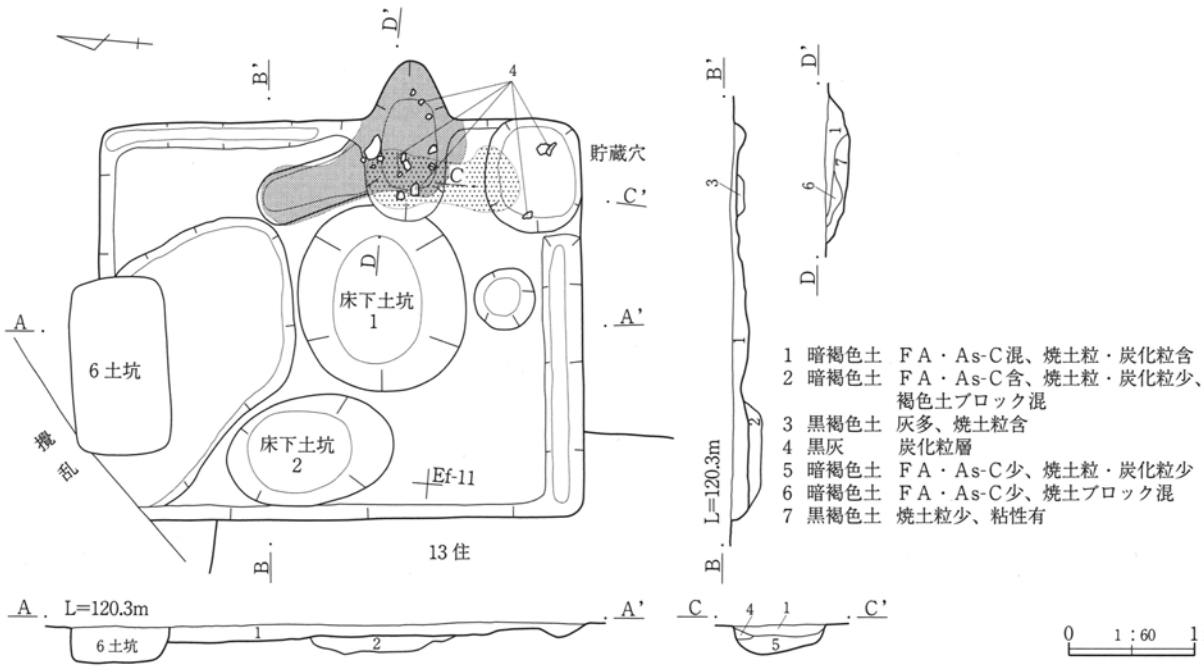
12号住居跡（第22・23図、ＰＬ４・30）

位置　Ｅｅ～ｆ－10～11　**重複**　13号住居と６号土坑と重複。本遺構が６号土坑より古く、13号住居より新しい。　**形状**　長軸3.8m、短軸3.2mの隅丸長方形を呈する。　**面積**　（10.60）㎡　**方位**　Ｎ－89°－Ｅ　**床面**　遺構確認面から６cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.11mを測る。

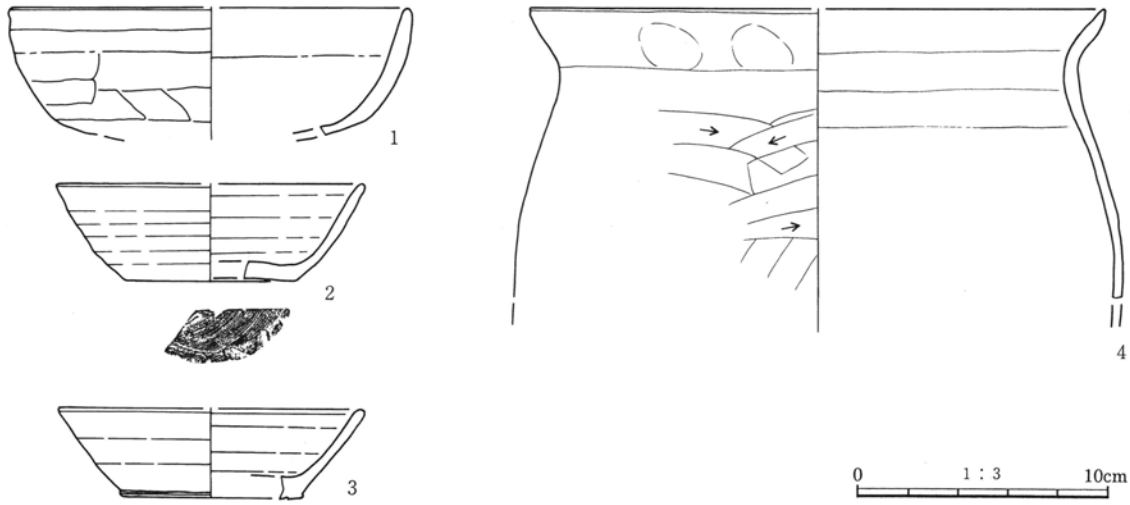
壁溝　幅約26cm、深さ約９cm、長さ約２mの壁溝が南側、東側で２カ所検出された。　**貯蔵穴**　住居の南東隅に設置。長径90cm・深さ25cmの長楕円形を呈する。　**柱穴**　検出されなかった。　**竈**　東壁面の南寄りを掘り込んで造られている。残存状態が悪く、掘り方のみ検出した。燃焼部に焼土粒・炭化物が残っていた。両袖方向42cm、煙道方向62cmを測る。　**遺物**　竈から土師器鉢・甕、貯蔵穴から須恵器坏２点が出土している。他に、土師器片1.81kg、須恵器片240ｇが出土。　**所見**　出土遺物から８世紀後半と考えられる。



第21図　11号住居跡



第22図　12号住居跡



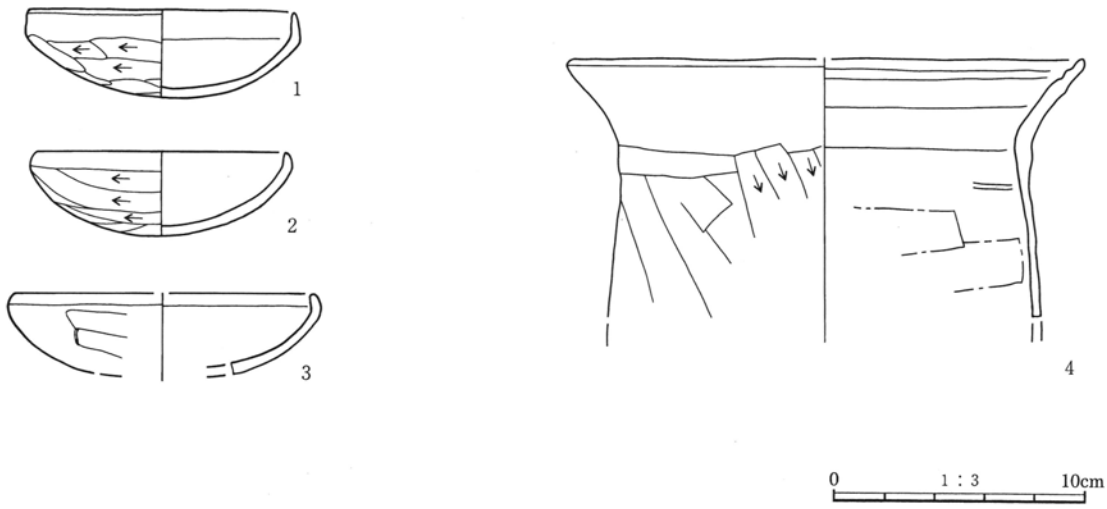
第23図　12号住居跡出土遺物

13号住居跡（第24・25図、ＰＬ４・30）

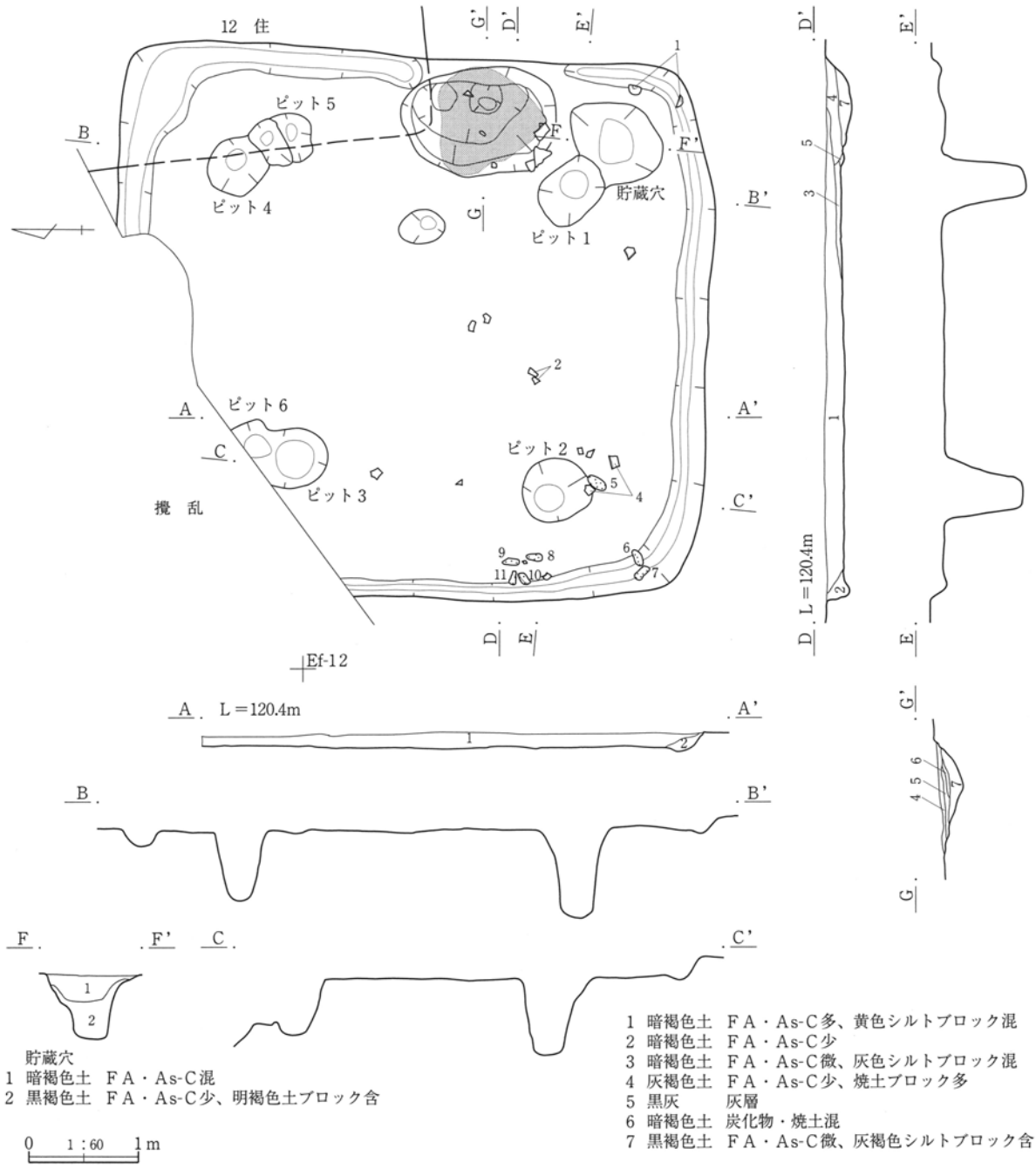
位置　Ｅｅ～ｆ－10～11　**重複**　12号住居と重複。本遺構が古い。　**形状**　長軸5.6m、短軸5.0mの隅丸方形を呈する。　**面積**　(21.38) ㎡　**方位**　Ｎ－86°－Ｗ　**床面**　遺構確認面から12cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.14mを測る。

壁溝　幅約28cm、深さ約８cmの壁溝が一周している。壁溝から土器片やこも編み石が出土。

貯蔵穴　住居の南東に設置。長径103cm・深さ64cmの楕円形を呈する。　**柱穴**　柱穴と思われるピットは６基検出された。ピット１は、径66cm・深さ78cm。ピット２は、径66cm・深さ75cm。ピット３は、径63cm・深さ42cm。ピット４は、長径58cm・深さ62cm。ピット５は、径48cm・深さ61cm。ピット６は、径42cm・深さ43cmを測る。ピット４と５、ピット３と６は柱の立て替えと思われる。　**竈**　東壁面の南寄りを掘り込んで造られている。残存状態が悪く、煙道部は確認できなかった。燃焼部に焼土粒・炭化物が残っていた。両袖方向約95cmを測る。　**遺物**　土師器坏・甕、こも編み石が出土している。他に土師器片5.2kg、須恵器片200ｇ出土。　**所見**　住居の北西側は攪乱で壊されており、全容は明らかにできなかった。出土遺物から７世紀後半と考えられる。



第24図　13号住居跡出土遺物

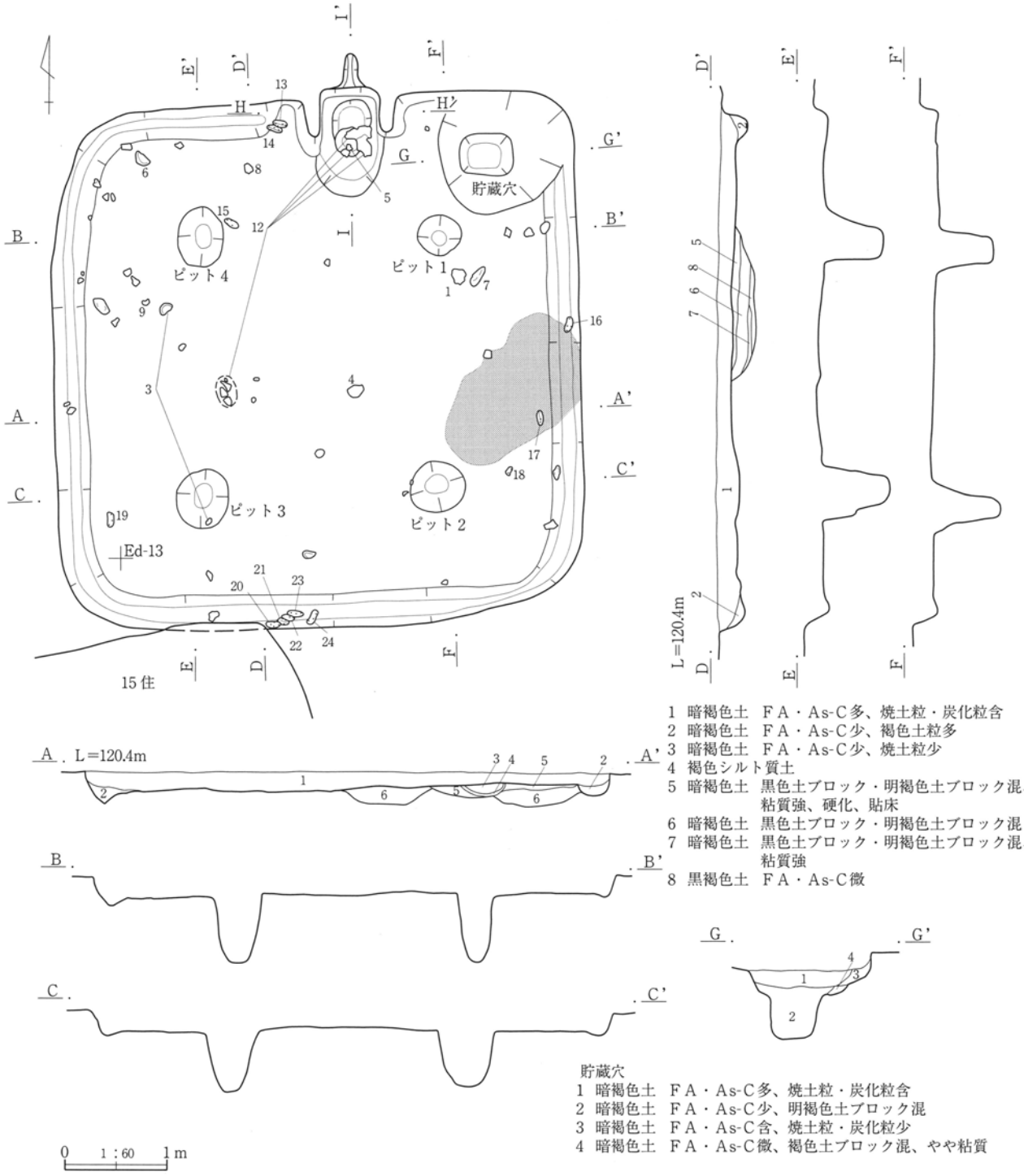


第25図　13号住居跡

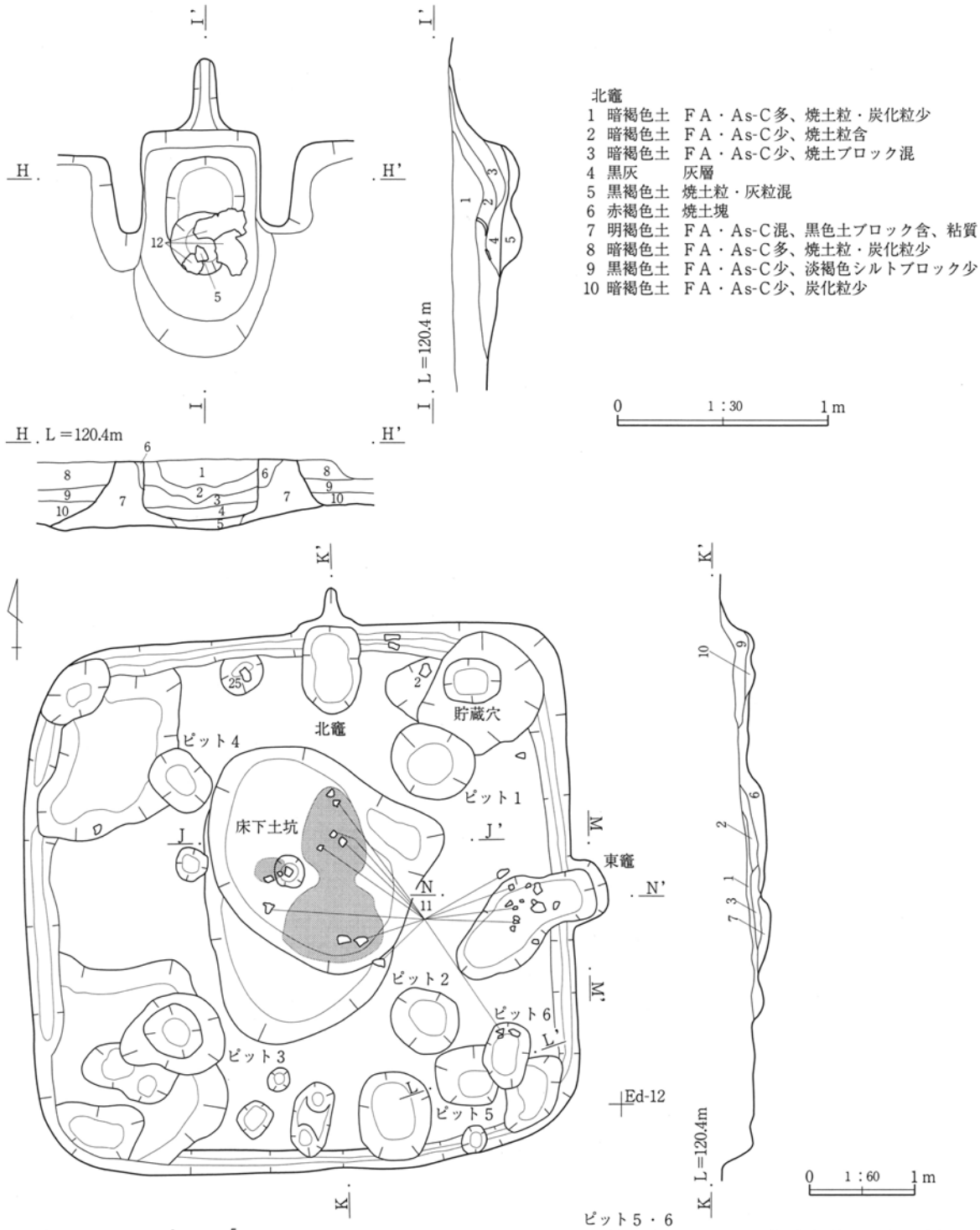
14号住居跡（第26～30図、ＰＬ５・30・31）

位置　Ｅｃ～ｄ－12～13　**重複**　15号住居と重複。本遺構が古い。　**形状**　長軸5.1m、短軸4.9mの隅丸方形を呈する。　**面積**　23.79㎡　**方位**　Ｎ－３°－Ｗ（北竈）、Ｎ－87°－Ｅ（東竈）　**床面**　遺構確認面から12cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.11mを測る。　**壁溝**　幅約31cm、深さ約７cmの壁溝が一周している。壁溝から土器片やこも編み石が出土。　**貯蔵穴**　北竈の住居の貯蔵穴は、北東隅に設置。長径110cm・深さ74cmの楕円形を呈する。東竈の住居の貯蔵穴と思われるピット５・６は、南東隅に設置。ピット５は径70cm・深さ55cmの楕円形、ピット６は径62cm・深さ63cmの楕円形を呈する。　**柱穴**　柱穴と思われるピットは４基検出された。ピット１は、径42cm・深さ66cm。ピット２は、径51cm・深さ53cm。ピット３は、径58cm・深さ58cm。ピット４は、径

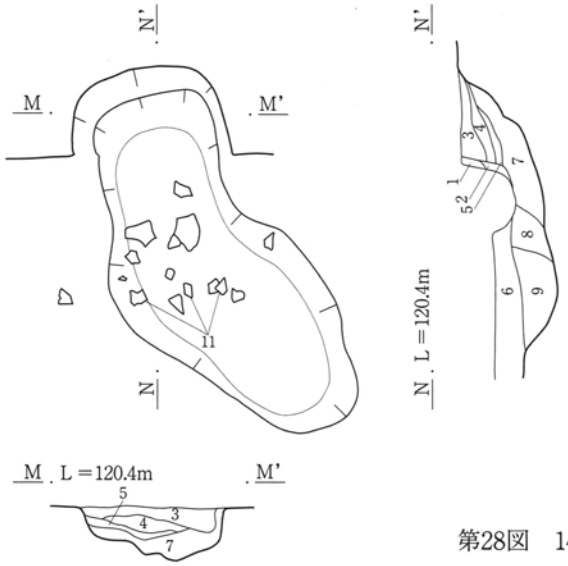
58cm・深さ67cmを測る。　**北竈**　北壁面のほぼ中央を掘り込んで造られている。両袖は石材ではなく、粘質土を張り付けて造られていた。燃焼部内から土師器甕、須恵器坏が出土した。両袖方向60cm、煙道方向100cmを測る。　**東竈**　東壁面のほぼ中央を掘り込んで造られている。残存状態が悪く、掘り方のみ検出。燃焼部内から土師器甕が出土した。両袖方向50cm、煙道方向40cmを測る。　**遺物**　土師器坏・皿・甕、須恵器坏・有台坏・高坏・長頸壺、こも編み石が出土。他に土師器片8.89kg、須恵器片1.17kg出土。　**所見**　出土遺物から８世紀前半と考えられる。



第26図　14号住居跡



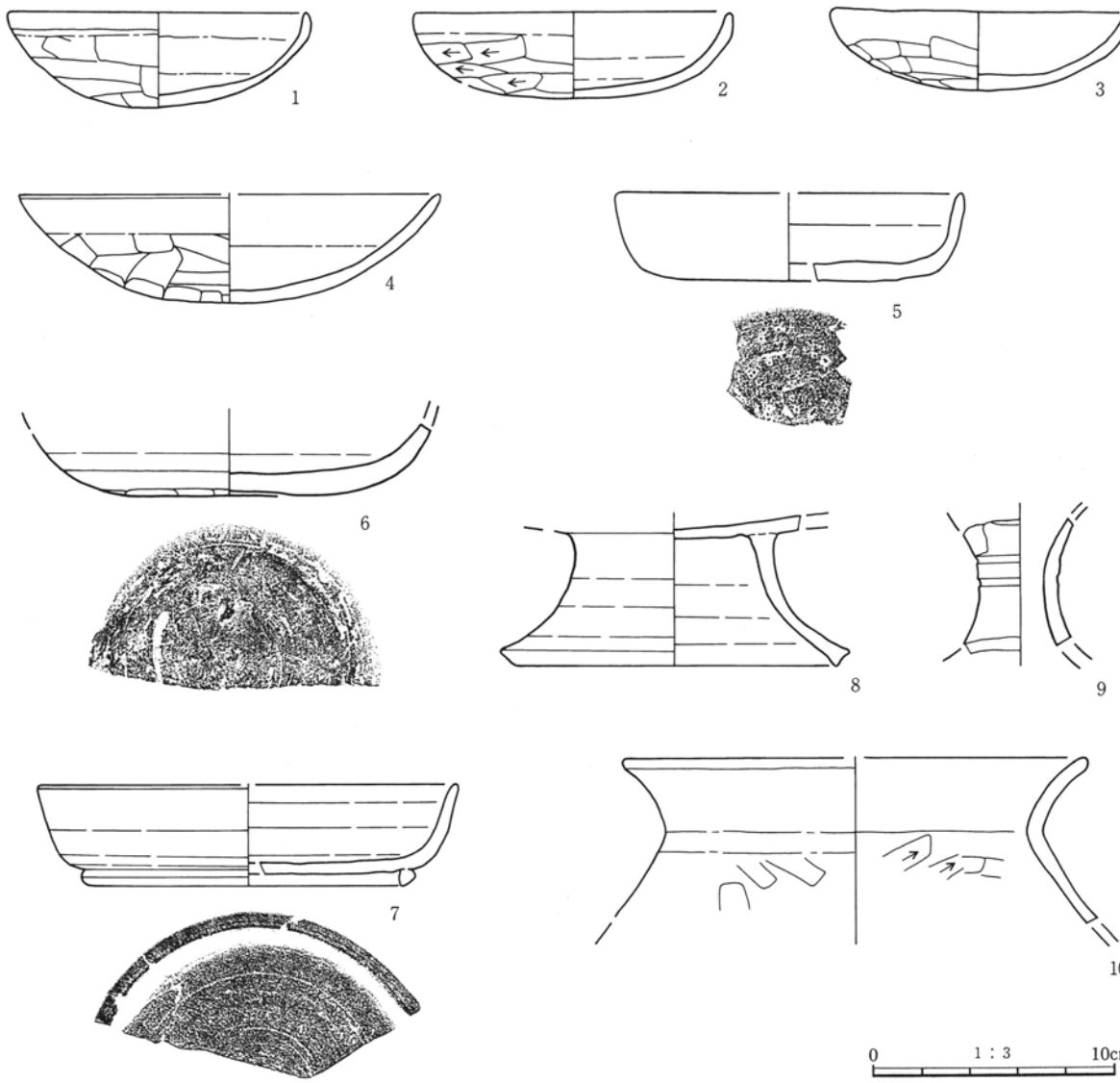
第27図　14号住居跡北竈、掘り方



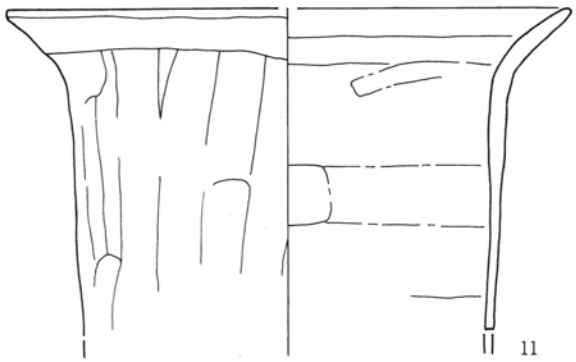
東竈
1 暗褐色土　ＦＡ・As-C多、焼土粒・炭化粒含、（住居覆土）
2 暗褐色土　ＦＡ・As-C少、（周溝覆土）
3 暗褐色土　ＦＡ・As-C混、焼土粒含
4 暗褐色土　焼土ブロック多
5 黒灰色土　灰層
6 暗褐色土　ＦＡ・As-C少、焼土粒・炭化粒少
7 黒褐色土　ＦＡ・As-C少、焼土粒少
8 黒褐色土　ＦＡ・As-C少、焼土ブロック混
9 黒褐色土　ＦＡ・As-C微、焼土粒少

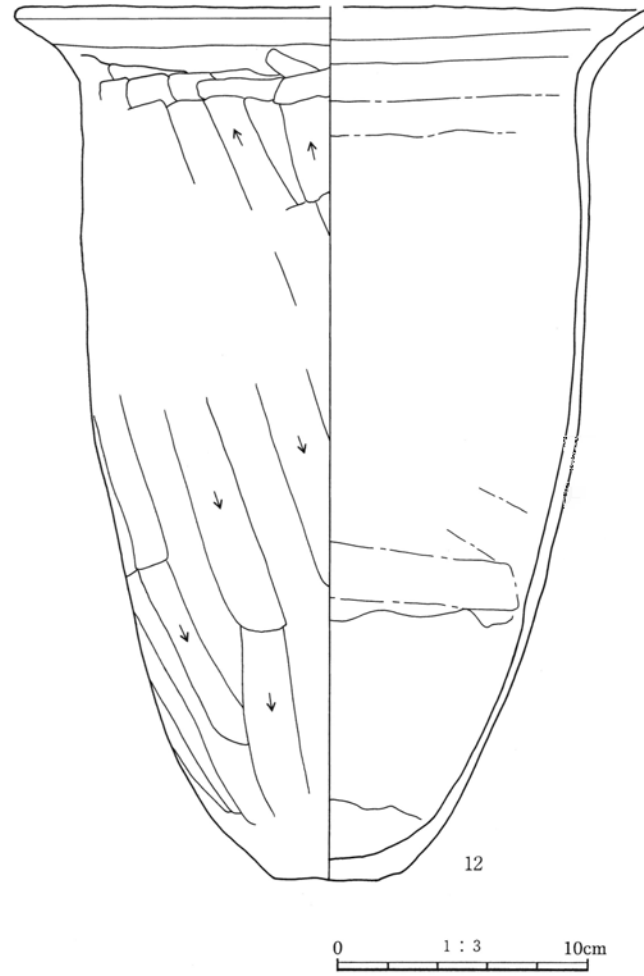
0　1：30　1m

第28図　14号住居跡東竈



第29図　14号住居跡出土遺物（１）



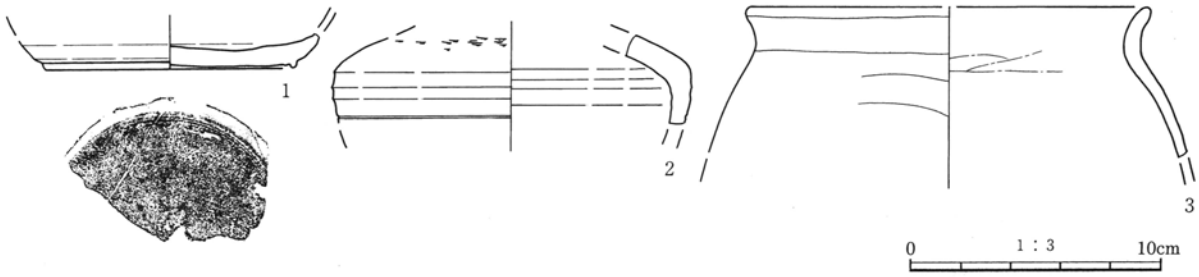


第30図　14号住居跡出土遺物（２）

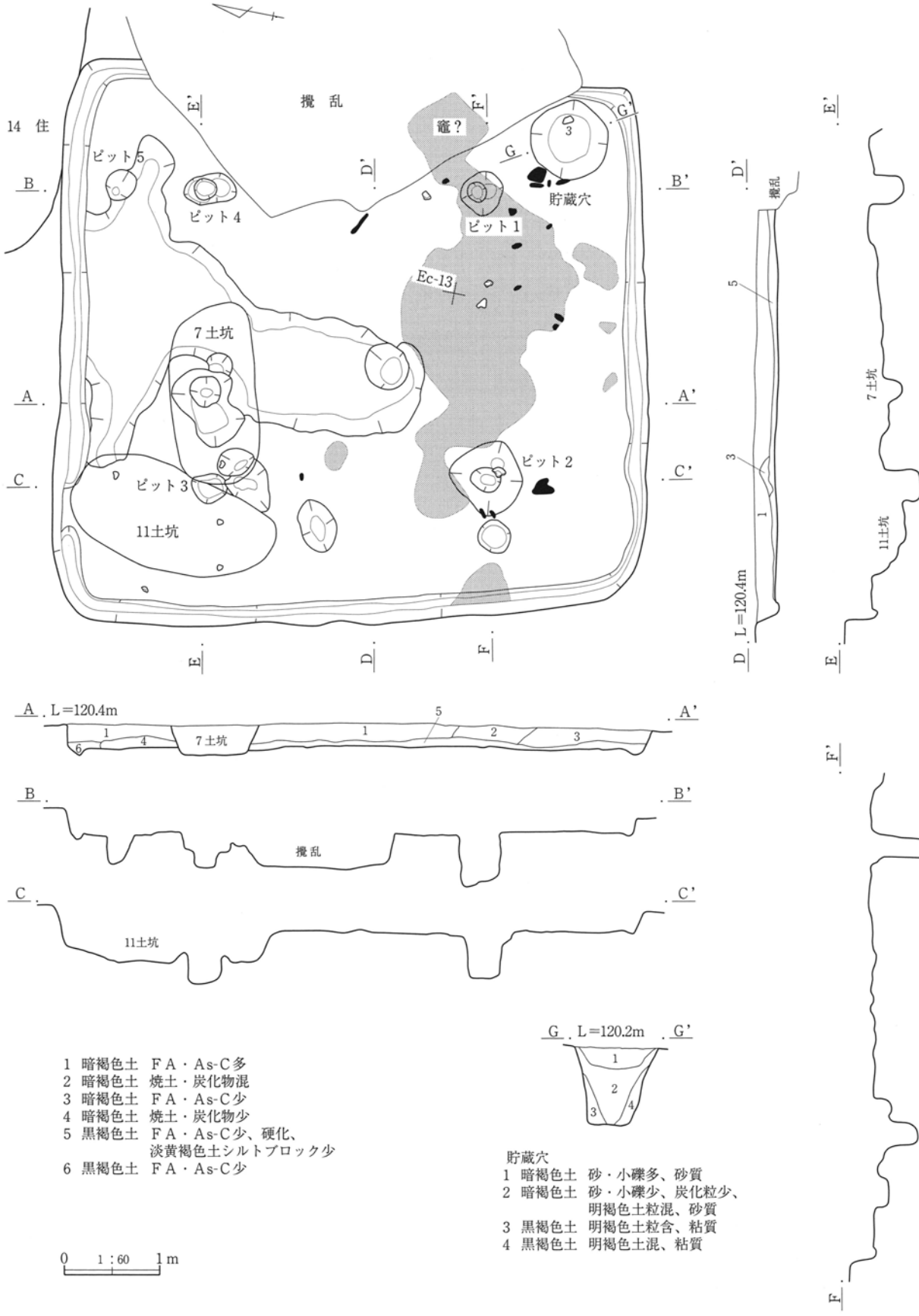
15号住居跡（第31～32図、ＰＬ６・31）

位置　Ｅｂ～ｃ－12～13　**重複**　14号住居・７・11号土坑と重複。本遺構が14号住居より新しく、７・11号土坑より古い。　**形状**　長軸6.3ｍ、短軸5.9ｍの隅丸方形を呈する。　**面積**　(29.76) ㎡　**方位**　Ｎ－83°－Ｅ　**床面**　遺構確認面から17cm掘り込んで、床面になる。床面は一部貼床構造で、明褐色土ブロックを含む黒褐色粘質土で固く踏み固められていた。標高は平均120.11ｍを測る。床面の南半分には炭・炭化物・焼土が多量に分布していた。　**壁溝**　幅約24cm、深さ約５cmの壁溝がほぼ一周しているが、レベルが一定せず、凹凸が多い。　**貯蔵穴**　住居の北東隅に設置。径85cm・深さ82cmの円形を呈する。土師器小型甕が出土。　**柱穴**　柱穴と思われるピットは４基検出された。ピット１は、径45cm・深さ68cm。ピット２は、径78cm・深さ53cm。ピット３は、径39cm・深さ59cm。ピット４は、長径55cm・深さ45cmを測る。　**竈**　焼土・炭化物の分布から、東壁面の南寄りに設置してあったと推定されるが、攪乱のため検出できなかった。　**遺物**　須恵器有台坏・長頸壺、土師器小型甕が出土している。他に土師器片1.03kg、須恵器片680ｇ出土。

所見　住居の東側は攪乱で壊されており、全容は明らかにできなかった。出土遺物から８世紀中葉と考えられる。



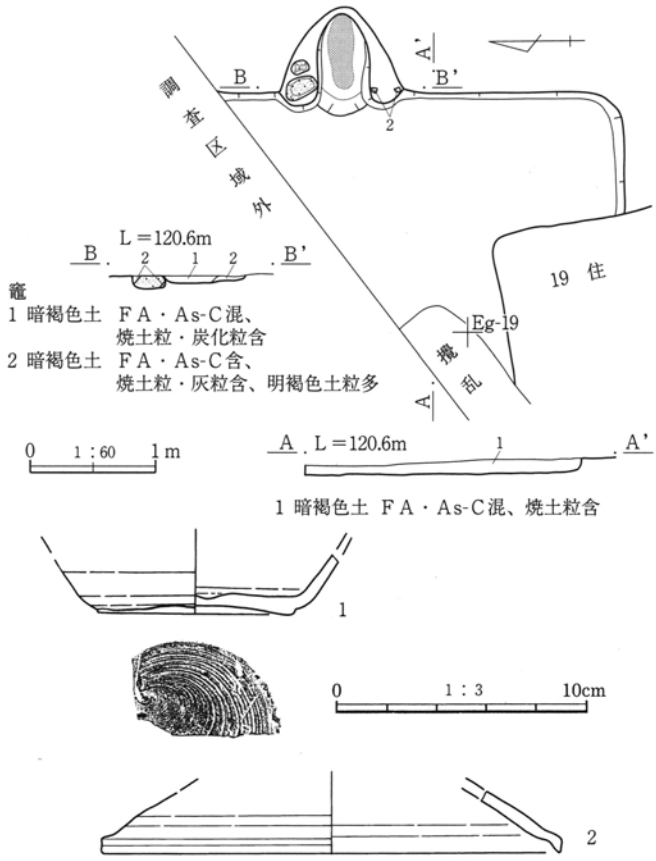
第31図　15号住居跡出土遺物


14 住
撹 乱
竈？
ピット5
ピット4
ピット1
貯蔵穴
Ec-13
7土坑
ピット2
ピット3
11土坑
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
F
F'
G
G'
L=120.4m
L=120.2m
撹乱
1 暗褐色土　ＦＡ・As-C多
2 暗褐色土　焼土・炭化物混
3 暗褐色土　ＦＡ・As-C少
4 暗褐色土　焼土・炭化物少
5 黒褐色土　ＦＡ・As-C少、硬化、
淡黄褐色土シルトブロック少
6 黒褐色土　ＦＡ・As-C少
貯蔵穴
1 暗褐色土　砂・小礫多、砂質
2 暗褐色土　砂・小礫少、炭化粒少、
明褐色土粒混、砂質
3 黒褐色土　明褐色土粒含、粘質
4 黒褐色土　明褐色土混、粘質
0　1:60　1m

第32図　15号住居跡

16号住居跡（第33図、ＰＬ６・31）

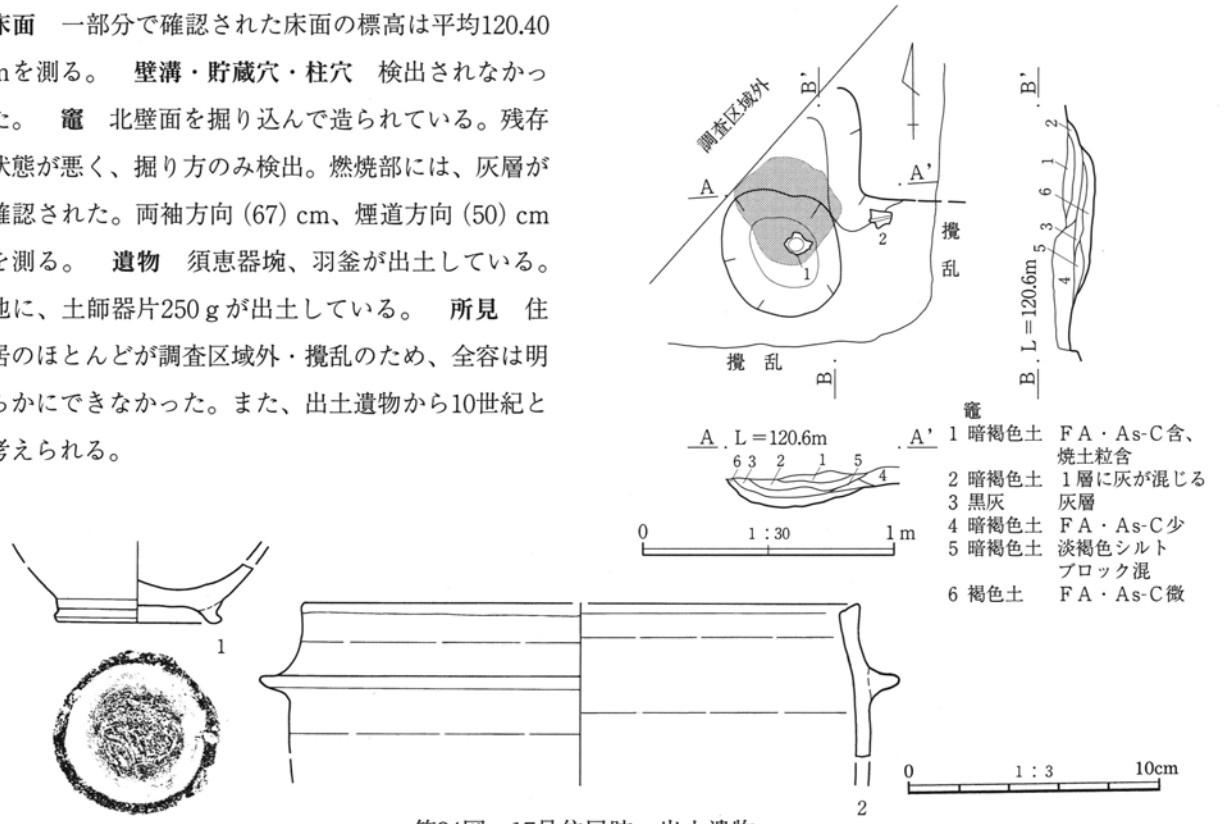
位置　Ｅｆ～ｇ－18　**重複**　19号住居と重複。本遺構が古い。　**形状**　長軸（3.28）ｍ、短軸（0.98）ｍ。**面積**　（3.53）㎡　**方位**　Ｎ－90°　**床面**　遺構確認面から５cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.44ｍを測る。　**壁溝・貯蔵穴・柱穴**　検出されなかった。　**竈**　東壁面を掘り込んで造られている。残存状態が悪く、掘り方のみ検出。左袖部には竈構築材採掘痕から掘り出されたと思われる凝灰岩が使用されていた。右袖部内から須恵器蓋が出土した。両袖方向32cm、煙道方向76cmを測る。　**遺物**　須恵器坏、蓋が出土している。他に、土師器片210ｇ、須恵器片150ｇが出土している。　**所見**　住居の半分以上が調査区域外・攪乱のため、全容は明らかにできなかった。出土遺物から８～９世紀と考えられる。



第33図　16号住居跡、出土遺物

17号住居跡（第34図、ＰＬ６・31）

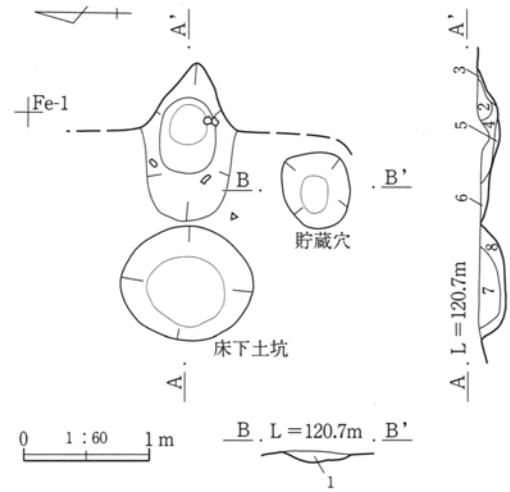
位置　Ｆｄ－２　**重複**　なし。　**形状**　竈のみの検出。　**面積**　測定不可能。　**方位**　Ｎ－２°－Ｅ　**床面**　一部分で確認された床面の標高は平均120.40ｍを測る。　**壁溝・貯蔵穴・柱穴**　検出されなかった。　**竈**　北壁面を掘り込んで造られている。残存状態が悪く、掘り方のみ検出。燃焼部には、灰層が確認された。両袖方向（67）cm、煙道方向（50）cmを測る。　**遺物**　須恵器埦、羽釜が出土している。他に、土師器片250ｇが出土している。　**所見**　住居のほとんどが調査区域外・攪乱のため、全容は明らかにできなかった。また、出土遺物から10世紀と考えられる。



第34図　17号住居跡、出土遺物

18号住居跡（第35図、ＰＬ６）

位置　Ｅｄ－20～Ｆｄ－１　**重複**　なし。**形状**　竈・貯蔵穴・床下土坑のみを検出した。　**面積**　測定不可能。　**方位**　Ｎ－89°－Ｗ　**床面**　遺構確認面から５cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.58mを測る。焼土・炭化物の分布から竈・貯蔵穴・床下土坑を確認した。**壁溝・柱穴**　検出されなかった。　**貯蔵穴**　住居の南東隅に設置。径76cm・深さ８cmの楕円形を呈する。　**竈**　東壁面を掘り込んで造られている。残存状態が悪く、掘り方のみ検出。燃焼部からは土師器片が出土した。両袖方向44cm、煙道方向62cmを測る。　**遺物**　掲載遺物はないが、土師器片250ｇが出土している。**所見**　住居のほとんどが攪乱のため、全容は明らかにできなかった。また、出土遺物も少なく、時期は不明。

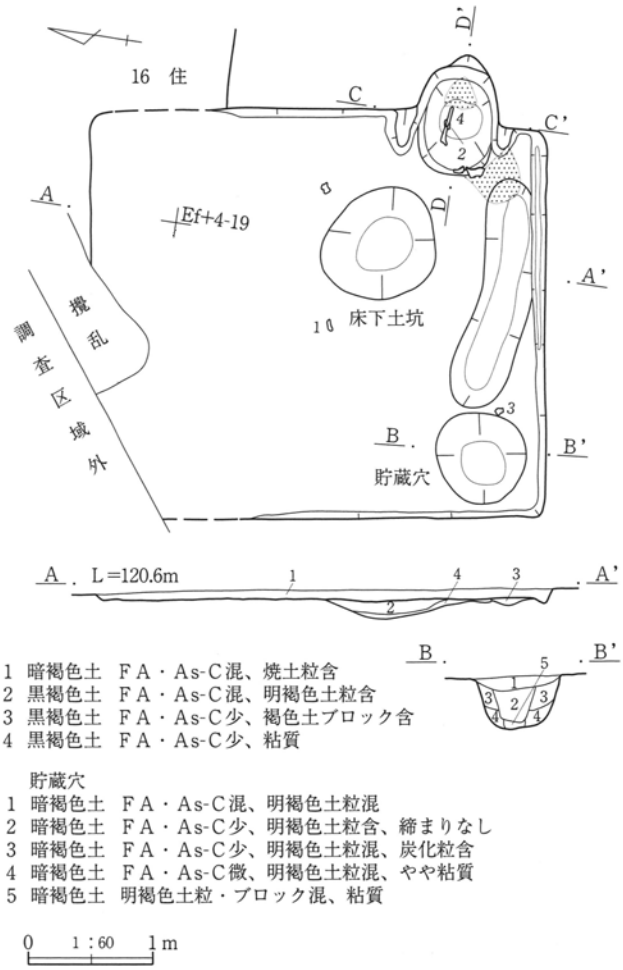


1 暗褐色土　ＦＡ・As-C少、焼土ブロック混
2 暗褐色土　ＦＡ・As-C混、焼土粒少
3 暗褐色土　ＦＡ・As-C含、焼土ブロック微、褐色ブロック含
4 暗褐色土　ＦＡ・As-C含、焼土粒・炭化粒含
5 黒褐色土　ＦＡ・As-C微、焼土粒少、粘質
6 暗褐色土　ＦＡ・As-C混
7 暗褐色土　ＦＡ・As-C少、明褐色土ブロック多
8 暗褐色土　ＦＡ・As-C混、明褐色土粒含

第35図　18号住居跡

19号住居跡（第36～37図、ＰＬ７・31）

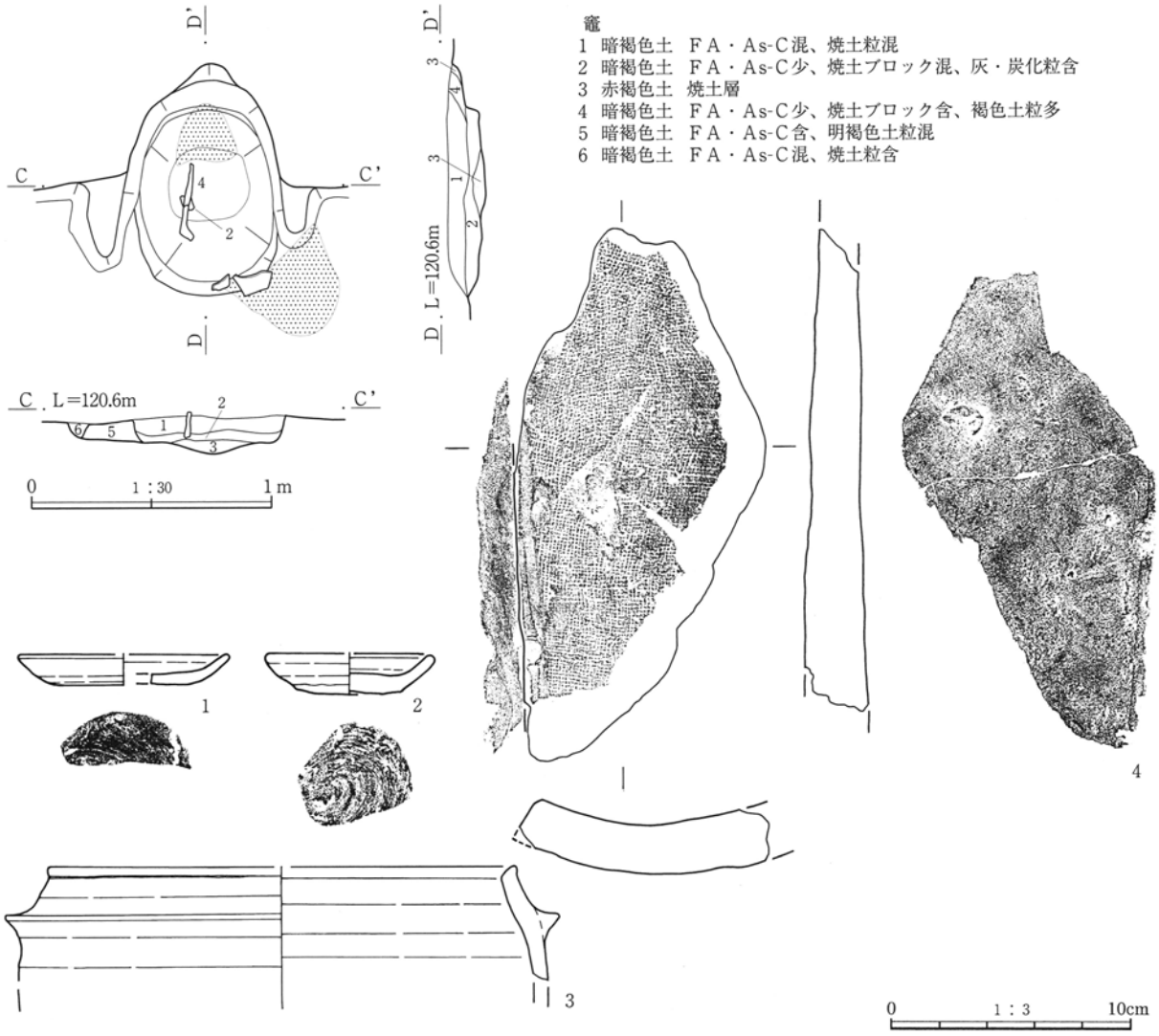
位置　Ｅｆ－18～19　**重複**　16号住居と重複。本遺構が新しい。　**形状**　長軸3.7m、短軸3.3mの隅丸方形を呈する。　**面積**　（10.67）㎡　**方位**　Ｎ－86°－Ｅ　**床面**　遺構確認面から５cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.47mを測る。燃焼部に焼土・炭化物が分布していた。　**壁溝**　幅約10cm、深さ約５cm、長さ1.8mの壁溝が南東で確認された。**貯蔵穴**　住居の南西隅に設置。径77cm・深さ43cmの楕円形を呈する。　**柱穴**　検出されなかった。**竈**　東壁面の南寄りを掘り込んで造られている。両袖は石材ではなく、粘質土を張り付けて造られていた。燃焼部内から須恵器坏、平瓦が出土した。瓦は天井材などの補強に用いられたと思われる。両袖方向70cm、煙道方向76cmを測る。　**遺物**　須恵器皿・坏・羽釜・瓦が出土している。他に、土師器片630ｇ、須恵器片410ｇが出土している。　**所見**　出土遺物から10世紀末～11世紀初頭と考えられる。



1 暗褐色土　ＦＡ・As-C混、焼土粒含
2 黒褐色土　ＦＡ・As-C混、明褐色土粒含
3 黒褐色土　ＦＡ・As-C少、褐色土ブロック含
4 黒褐色土　ＦＡ・As-C少、粘質

貯蔵穴
1 暗褐色土　ＦＡ・As-C混、明褐色土粒混
2 暗褐色土　ＦＡ・As-C少、明褐色土粒含、締まりなし
3 暗褐色土　ＦＡ・As-C少、明褐色土粒混、炭化粒含
4 暗褐色土　ＦＡ・As-C微、明褐色土粒混、やや粘質
5 暗褐色土　明褐色土粒・ブロック混、粘質

第36図　19号住居跡

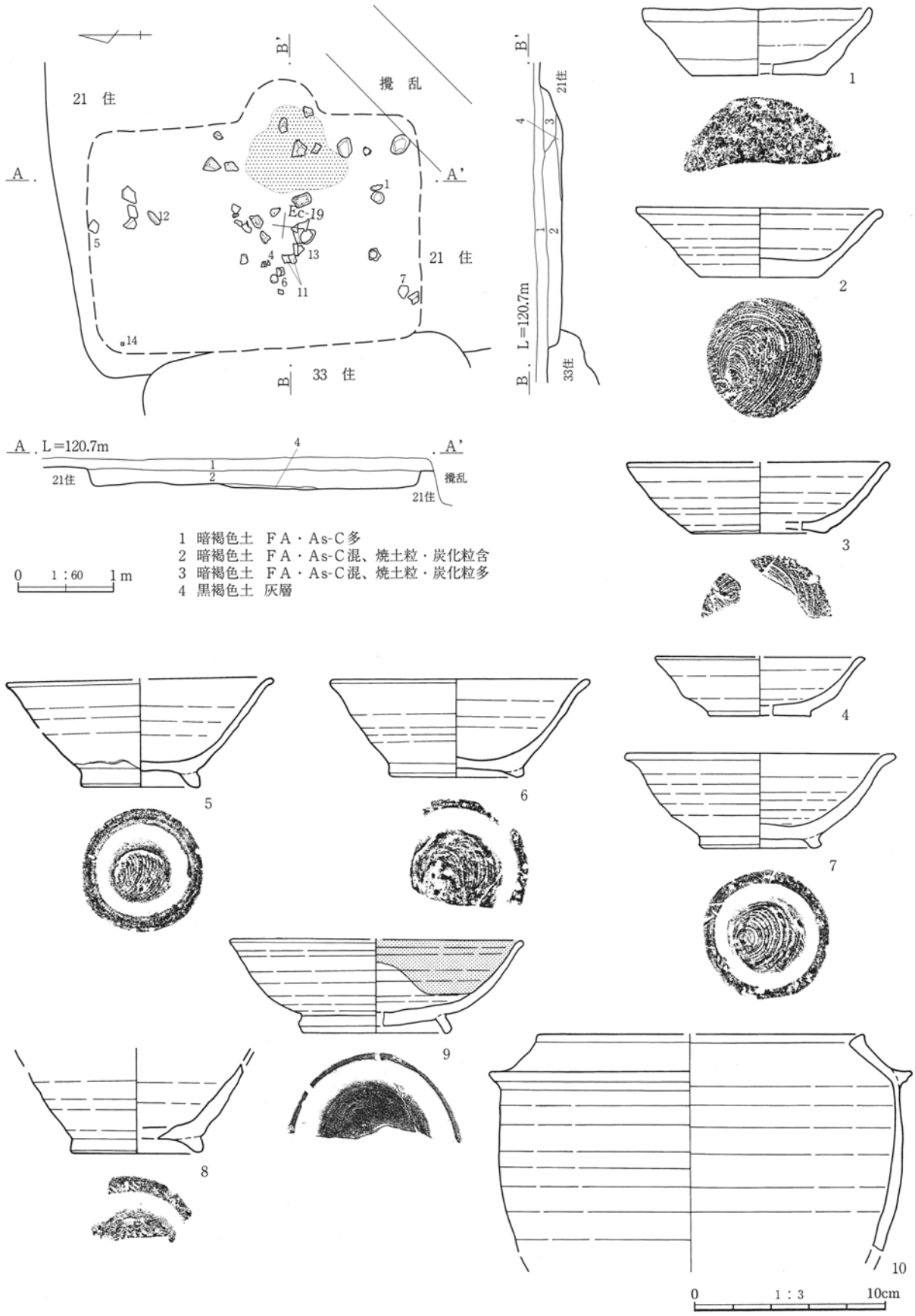


第37図　19号住居跡竈、出土遺物

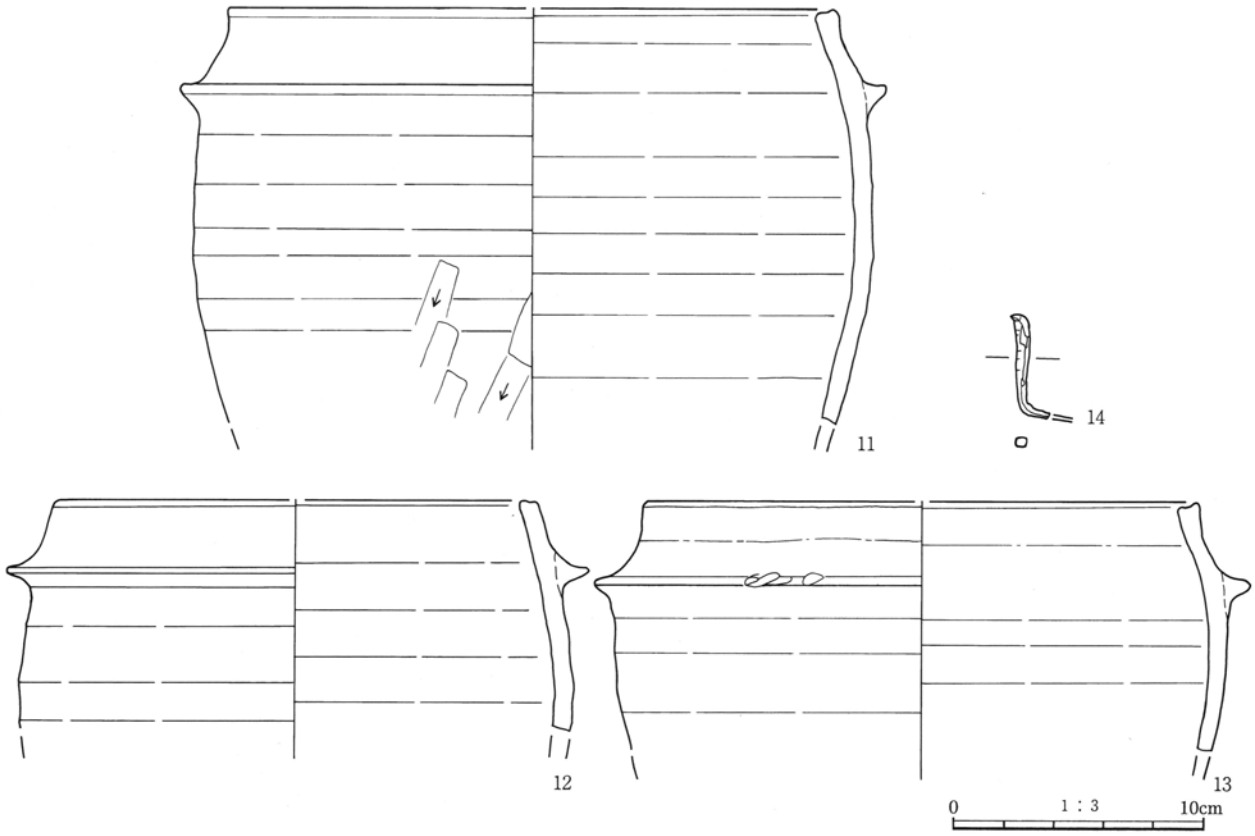
20号住居跡（第38～39図、ＰＬ７・31・32）

位置　Ｅｂ～ｃ－18～19　**重複**　21・33号住居と重複。本遺構が新しい。　**形状**　長軸（3.6）ｍ、短軸（2.4）ｍを測る。　**面積**　（8.19）m^2　**方位**　Ｎ－83°－Ｅ　**床面**　遺構確認面から25cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.40ｍを測る。

壁溝・貯蔵穴・柱穴　検出されなかった。　**竈**　東壁面を掘り込んで造られていたと思われる。焼土・炭化物の分布範囲等から竈と確認した。燃焼部の前に灰層が確認され、竈の袖部などの構築材として用いられたと思われる凝灰岩が散乱していた。凝灰岩はいずれも被熱し赤化していた。両袖方向（70）cm、煙道方向（28）cmを測る。　**遺物**　土師器坏、須恵器坏・埦・羽釜、灰釉陶器埦、鉄釘が出土している。他に、土師器片4.65kg、須恵器片1.56kgが出土している。　**所見**　調査時は、21号住居と同時に調査したため、竈のみ検出された。土層断面と遺物の分布・標高から床面を認定し、住居範囲を決定した。出土遺物から10世紀前半と考えられる。



第38図　20号住居跡、出土遺物（１）

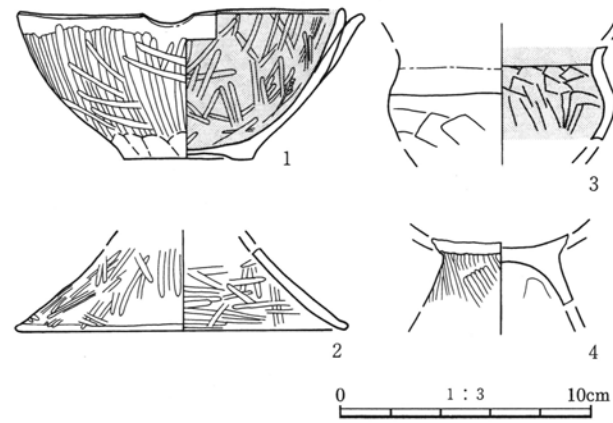


第39図　20号住居跡出土遺物（２）

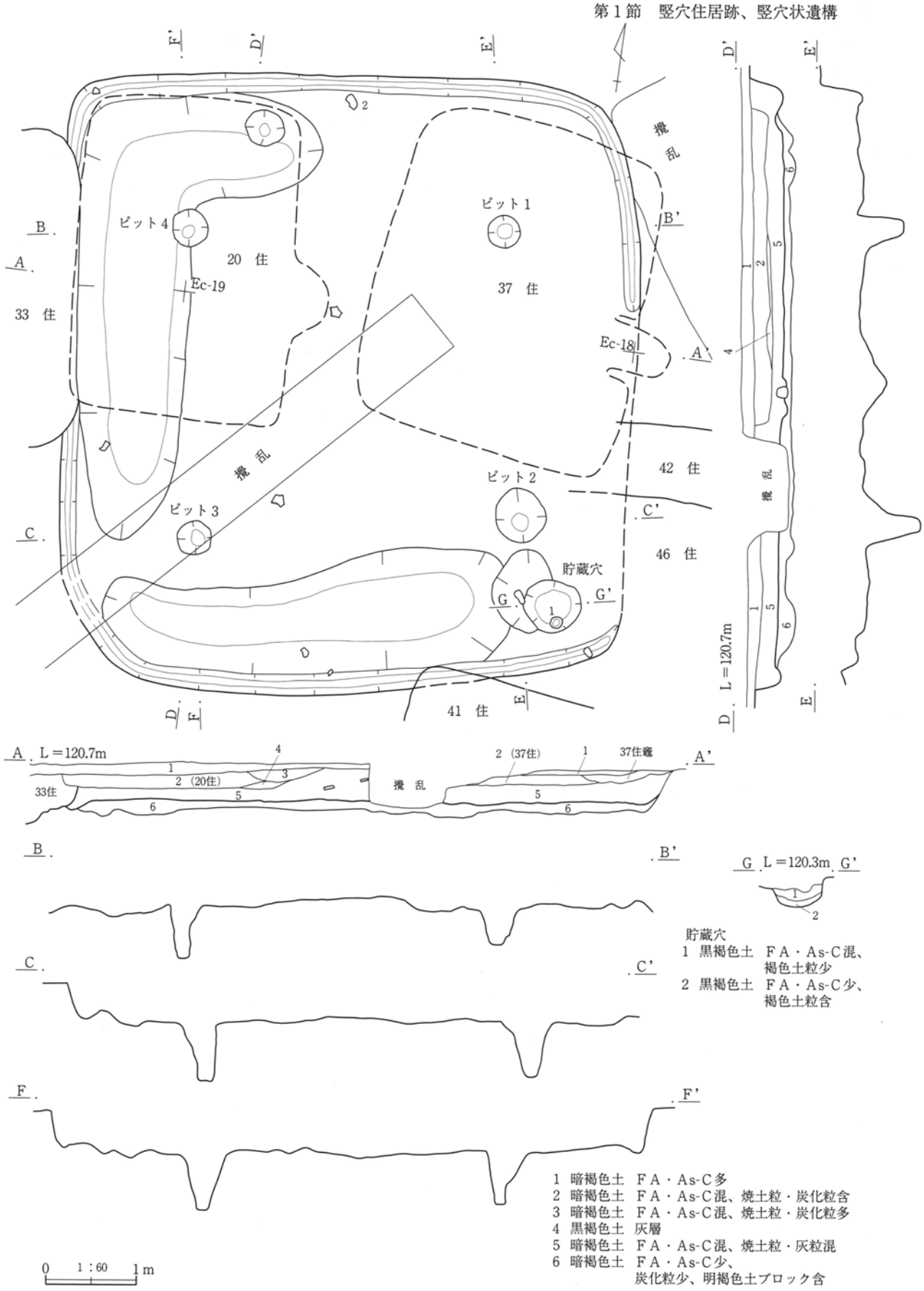
21号住居跡（第40～41図、ＰＬ７・32）

位置　Ｅｂ～ｃ－17～19　**重複**　20・33・37・41・42・46号住居と重複。本遺構が古い。　**形状**　長軸6.8m、短軸6.6mの隅丸方形を呈する。　**面積**　39.00㎡　**方位**　Ｎ－７°－Ｗ　**床面**　遺構確認面から40cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.23ｍを測る。　**壁溝**　幅約20cm、深さ約８cmの壁溝がほぼ一周している。　**貯蔵穴**　住居の南東に設置。径70cm・深さ28cmの楕円形を呈する。完形の片口鉢が１点出土。　**柱穴**　柱穴と思われるピットは４基検出された。ピット１は、径42cm・深さ30cm。ピット２は、径64cm・深さ60cm。ピット３は、径40cm・深さ23cm。ピット４は、径43cm・深さ59cmを測る。　**炉**　検出されなかった。　**遺物**　赤色塗彩のある土師器片口鉢・坩・器台・台付甕が出土している。他に、古墳時代前期の古式土師器の台付甕・壺などの破片1.2kgが出土している。

所見　出土遺物から４世紀前半と考えられる。調査時は４世紀、７世紀、９世紀、10世紀の各時代の土器が出土したため、いくつもの住居の重複が予想された。４世紀前半の本住居を壊して、33号住居（７世紀）、37号住居（９世紀）、20号住居（10世紀）が造られたと考えられる。そのため、古墳時代前期の土器の出土量は多いが、破片資料が多く、掲載できなかった。



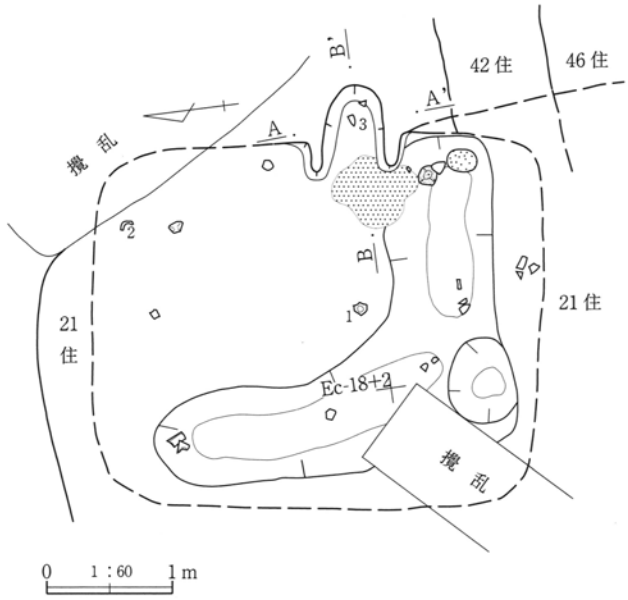
第40図　21号住居跡出土遺物

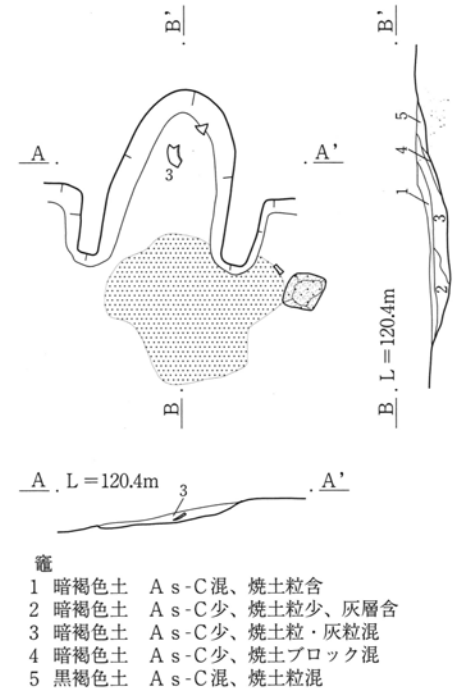

ピット1
ピット2
ピット3
ピット4
20 住
33 住
37 住
41 住
42 住
46 住
Ec-18
Ec-19
撹乱
貯蔵穴
L＝120.7m
L＝120.3m
33住
2（20住）
2（37住）
37住竈
貯蔵穴
1 黒褐色土　ＦＡ・As-C混、褐色土粒少
2 黒褐色土　ＦＡ・As-C少、褐色土粒含
1 暗褐色土　ＦＡ・As-C多
2 暗褐色土　ＦＡ・As-C混、焼土粒・炭化粒含
3 暗褐色土　ＦＡ・As-C混、焼土粒・炭化粒多
4 黒褐色土　灰層
5 暗褐色土　ＦＡ・As-C混、焼土粒・灰粒混
6 暗褐色土　ＦＡ・As-C少、炭化粒少、明褐色土ブロック含
0　1：60　1m

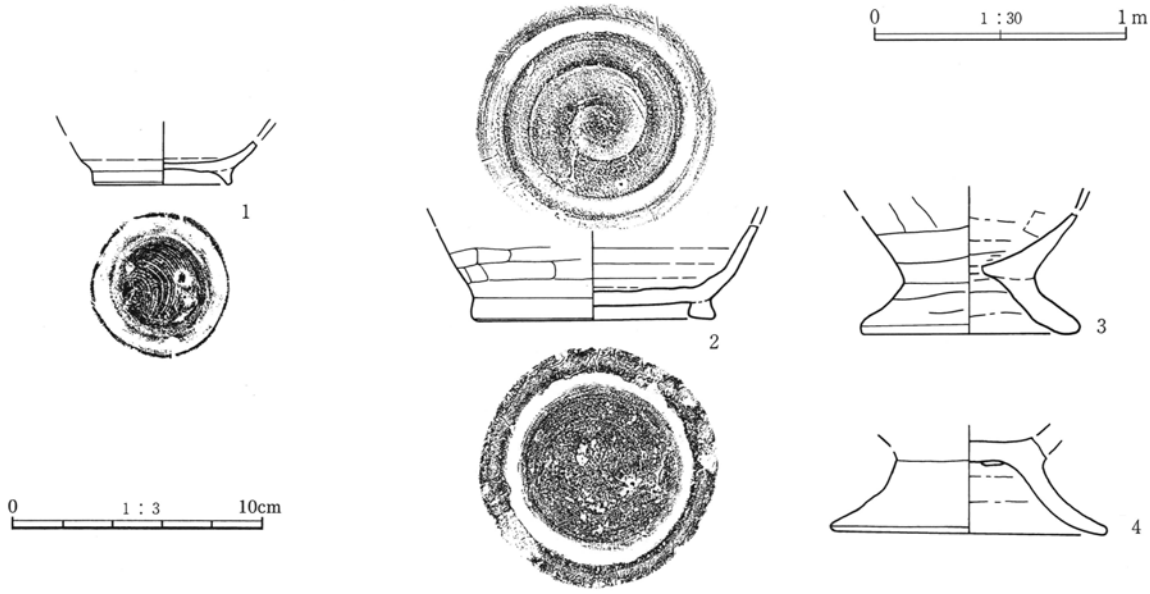
第41図　21号住居跡

37号住居跡（第42図、ＰＬ７・35）

位置　Ｅｂ～ｃ－17～18　**重複**　21・42・46号住居と重複。21号住居より本遺構が新しい。42・46号住居と重複関係は不明。　**形状**　長軸（3.6）ｍ、短軸（3.0）ｍを測る。　**面積**　（10.24）㎡　**方位**　Ｎ－80°－Ｗ　**床面**　掘り方面の標高は平均120.25ｍを測る。　**竈**　東壁面を掘り込んで造られている。竈内から土師器台付甕が出土した。燃焼部前に灰層が確認され、袖部に用いられたと思われる凝灰岩が出土した。両袖方向35cm、煙道方向71cmを測る。　**遺物**　土師器台付甕、須恵器埦、長頸壺が出土している。他に、土師器片440ｇ、須恵器片2.03kgが出土。　**所見**　調査時は、21号住居と同時に調査したため、竈のみ検出されたが、掘り方面の調査と出土遺物の分布・標高から住居範囲を認定した。出土遺物から９世紀と考えられる。







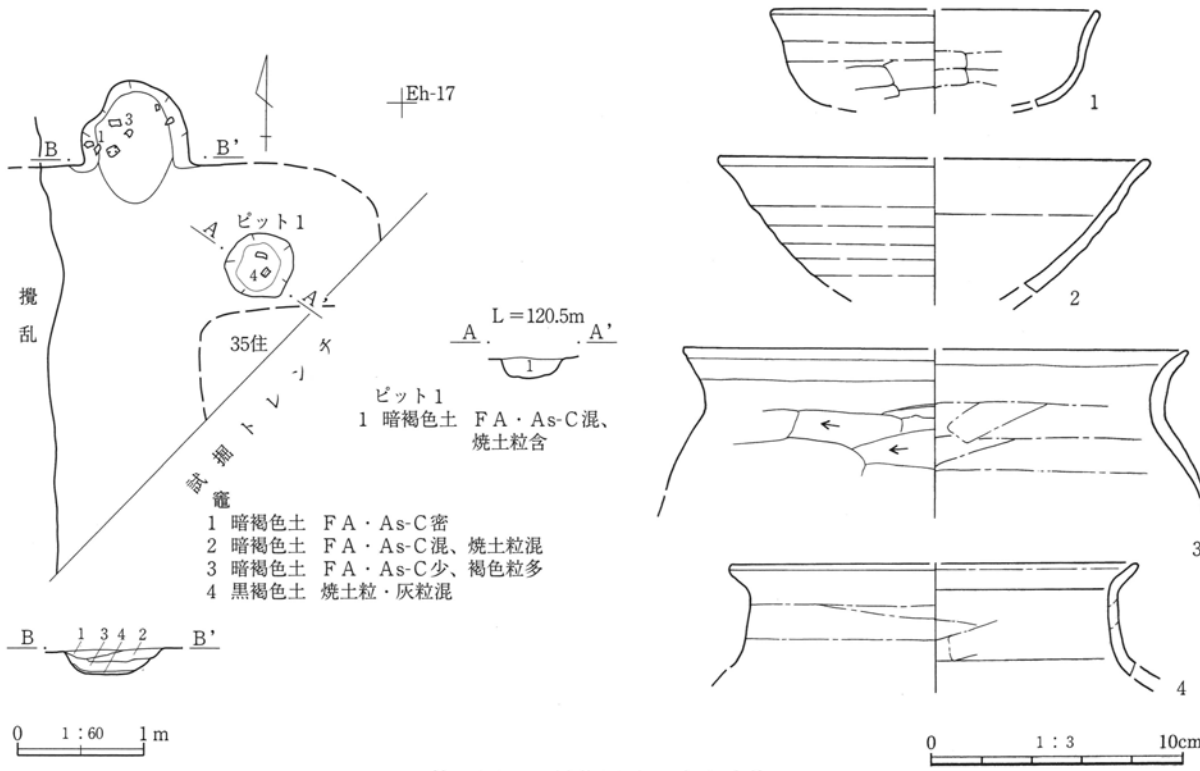
第42図　37号住居跡・竈、出土遺物

22号住居跡（第43図、ＰＬ８・32）

位置　Ｅｇ～ｈ－17　**重複**　35号住居と重複。本遺構が新しい。　**形状**　長軸（2.8）ｍ、短軸（2.1）ｍを測る。　**面積**　（4.76）㎡　**方位**　Ｎ－２°－Ｗ　**床面**　床面の標高は平均120.38ｍを測る。

壁溝・貯蔵穴　検出されなかった。　**柱穴**　ピット１は径55cm・深さ13cmを測り、土師器甕が出土している。　**竈**　北壁面を掘り込んで造られている。残存悪く、焼土・炭化物の分布範囲等から竈と確認した。燃焼部からは土師器坏・甕、凝灰岩が出土している。両袖方向58cm、煙道方向68cmを測る。

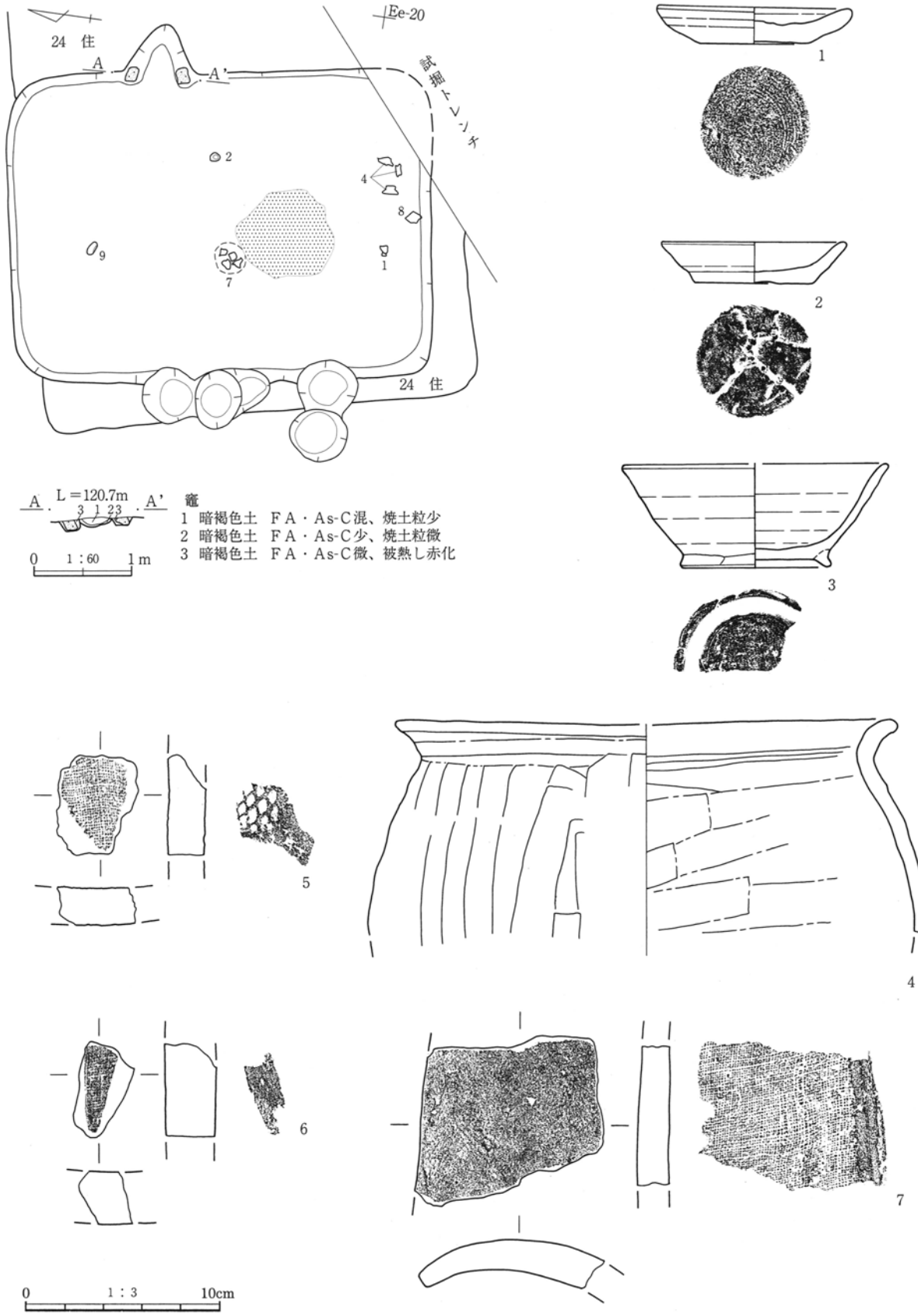
遺物　土師器坏・甕、須恵器埦が出土している。他に、土師器片290ｇ、須恵器片30ｇが出土。　**所見**　攪乱や試掘トレンチのため、全容は明らかにできなかった。出土遺物から９世紀前半と考えられる。



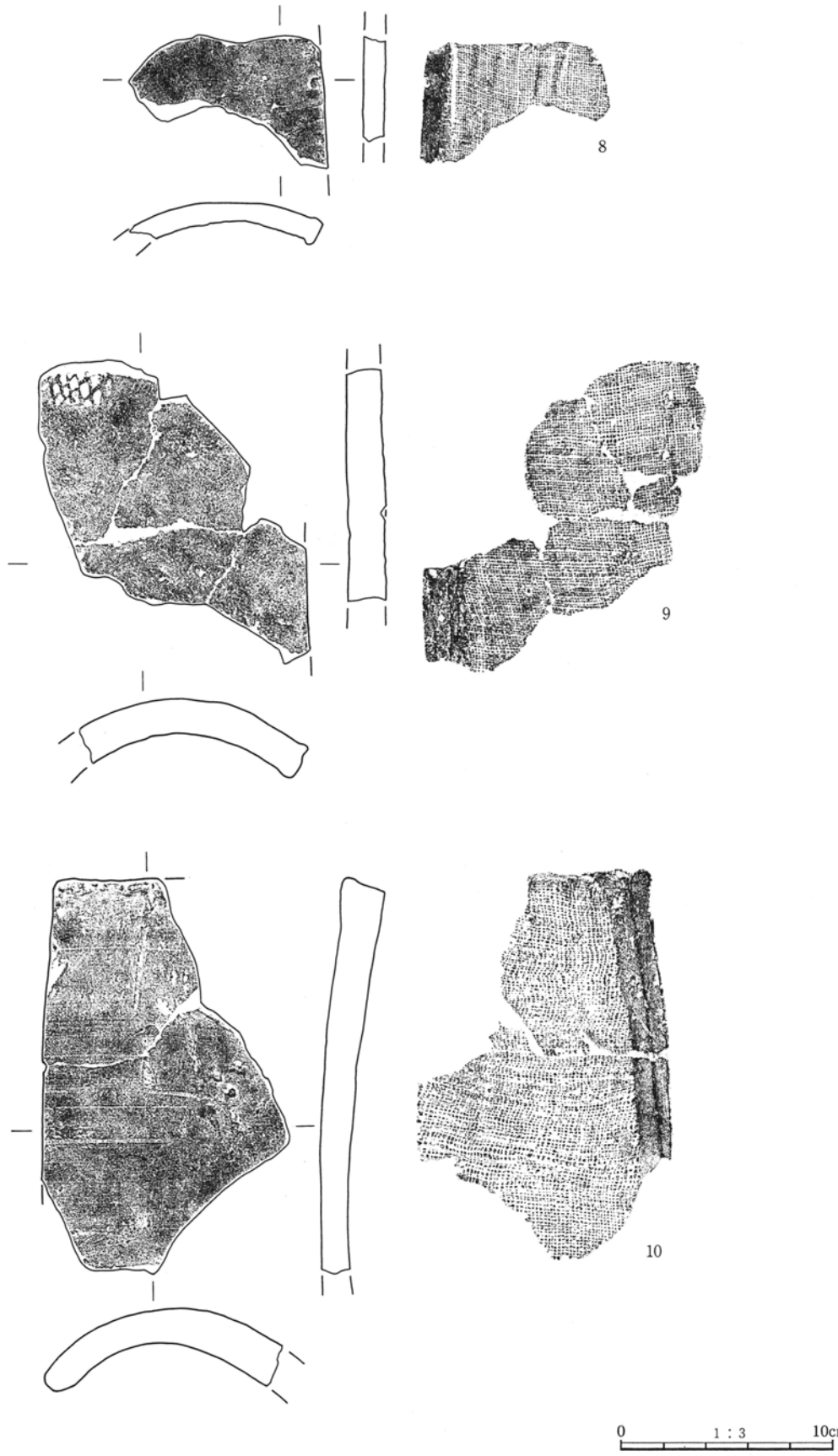
第43図　22号住居跡、出土遺物

23号住居跡（第44・45図、ＰＬ８・32）

位置　Ｅｅ－20　**重複**　24号住居と重複している。本住居が新しい。　**形状**　長軸4.2ｍ、短軸2.9ｍの隅丸長方形を呈する。　**面積**　（11.74）㎡　**方位**　Ｎ－87°－Ｅ　**床面**　調査時は、24号住居内で竈のみ検出。袖石に用いられた凝灰岩、焼土・灰の分布、出土遺物の広がり等から住居範囲を認定した。床面の標高は平均120.50ｍを測る。　**壁溝・貯蔵穴・柱穴**　検出されなかった。　**竈**　東壁面の北寄りを掘り込んで造られている。左右の袖石に用いられた凝灰岩２点が出土した。凝灰岩は被熱し赤化していた。両袖方向36cm、煙道方向62cmを測る。　**遺物**　須恵器皿・埦、土師器土釜、瓦が出土している。他に、土師器片1.58kg、須恵器250ｇが出土。　**所見**　出土遺物から10世紀末～11世紀初頭と考えられる。



第44図　23号住居跡、出土遺物（１）



第45図　23号住居跡、出土遺物（２）

24号住居跡（第46～48図、ＰＬ８・32・33）

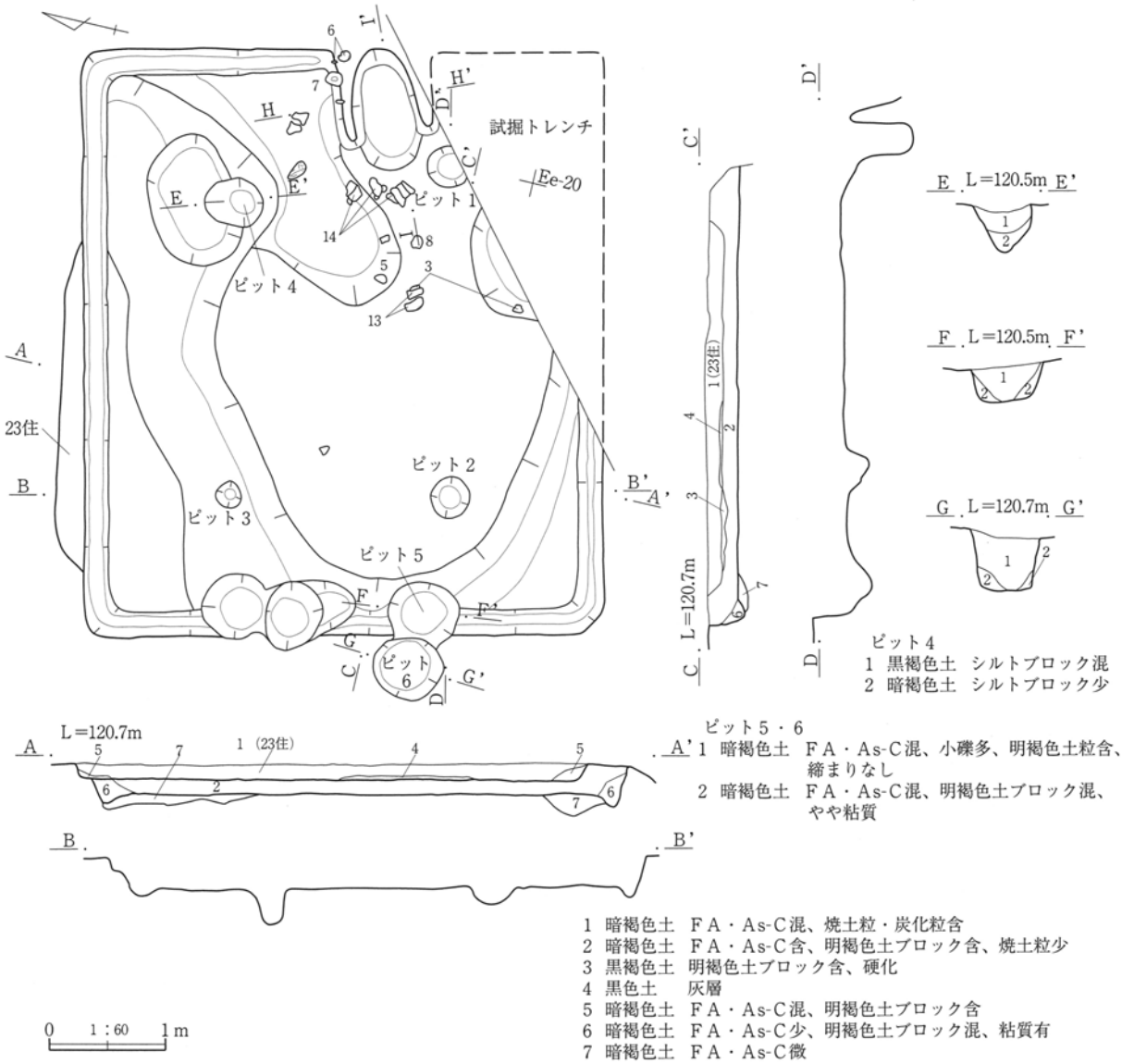
位置　Ｅｄ～ｅ－19～20　**重複**　23号住居と重複している。本住居が古い。　**形状**　長軸5.6m、短軸4.8mの長方形を呈する。　**面積**　（18.61）㎡　**方位**　Ｎ－78°－Ｅ　**床面**　遺構確認面から26cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.37mを測る。

壁溝　幅約22cm、深さ約５cmの壁溝がほぼ一周している。西側壁溝内に３基のピットを確認。

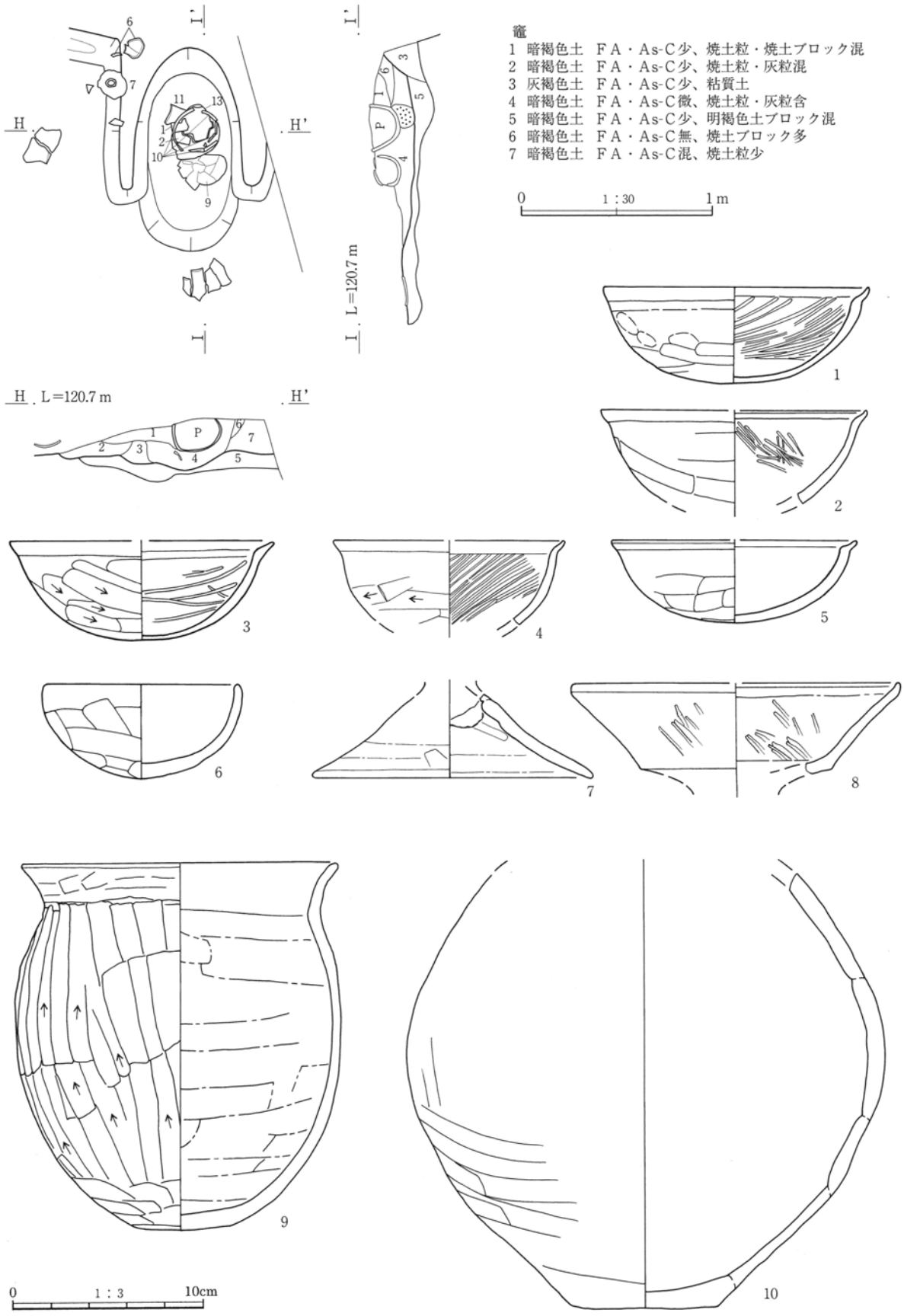
貯蔵穴　貯蔵穴は、南東隅にあったと思われるが、試掘トレンチによって壊され検出されなかった。

柱穴　柱穴と思われるピットは４基検出された。ピット１は、径36cm・深さ53cm。ピット２は、径34cm・深さ34cm。ピット３は、径22cm・深さ23cm。ピット４は、径49cm・深さ24cmを測る。

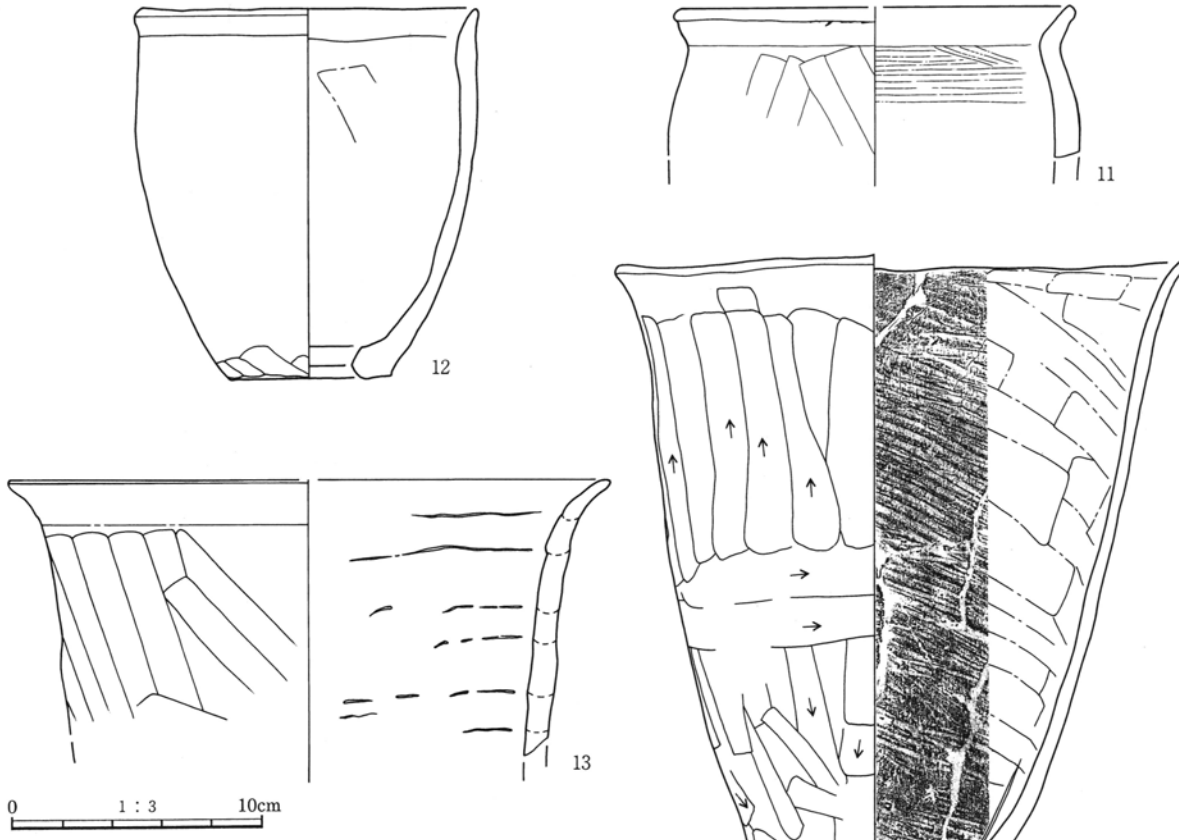
竈　東壁面のほぼ中央部を掘り込んで造られている。燃焼部は住居内にあり、袖部は石材ではなく、粘質土を張り付けて造られていた。燃焼部内から土師器坏・甕・甑が出土した。両袖方向43cm、煙道方向78cmを測る。　**遺物**　土師器坏・鉢・高坏・甕・甑が出土している。他に、土師器片2.9kg、須恵器片390ｇが出土。　**所見**　出土遺物から５世紀末～６世紀初頭と考えられる。



第46図　24号住居跡



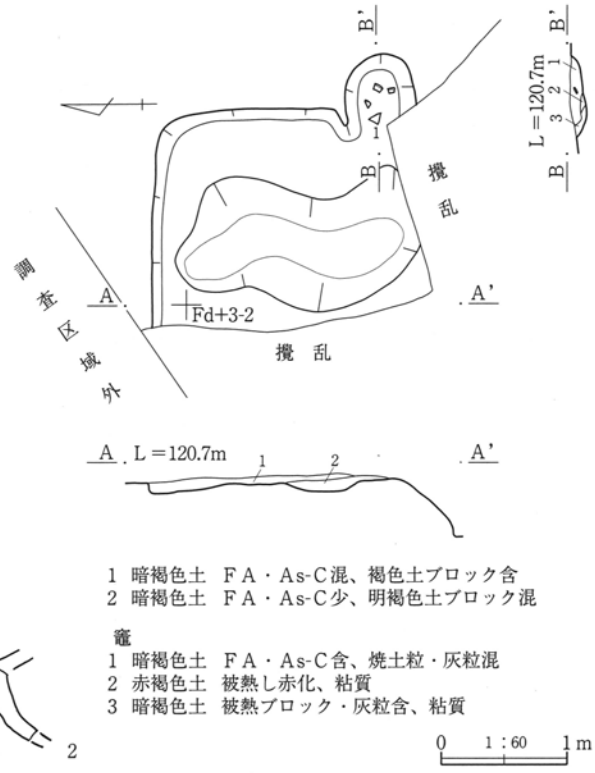
第47図　24号住居跡竈、出土遺物（１）

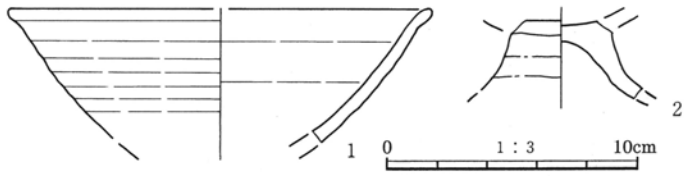


第48図　24号住居跡出土遺物（２）

25号住居跡（第49図、ＰＬ８・33）

位置　Ｅｄ－１～２　**重複**　なし。　**形状**　長軸（2.2）ｍ、短軸（1.9）ｍを測る。　**面積**　（3.14）㎡　**方位**　Ｎ－88°－Ｗ　**床面**　遺構確認面から10cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.39ｍを測る。　**壁溝・貯蔵穴・柱穴**　検出されなかった。　**竈**　東壁面を掘り込んで造られている。燃焼部内から土師器台付甕、須恵器埦が出土した。両袖方向34cm、煙道方向64cmを測る。　**遺物**　土師器台付甕、須恵器埦が出土している。他に、土師器片50ｇが出土。　**所見**　住居の南側・西側は、攪乱や調査区域外のため、全容は明らかにできなかった。出土遺物から９世紀と考えられる。

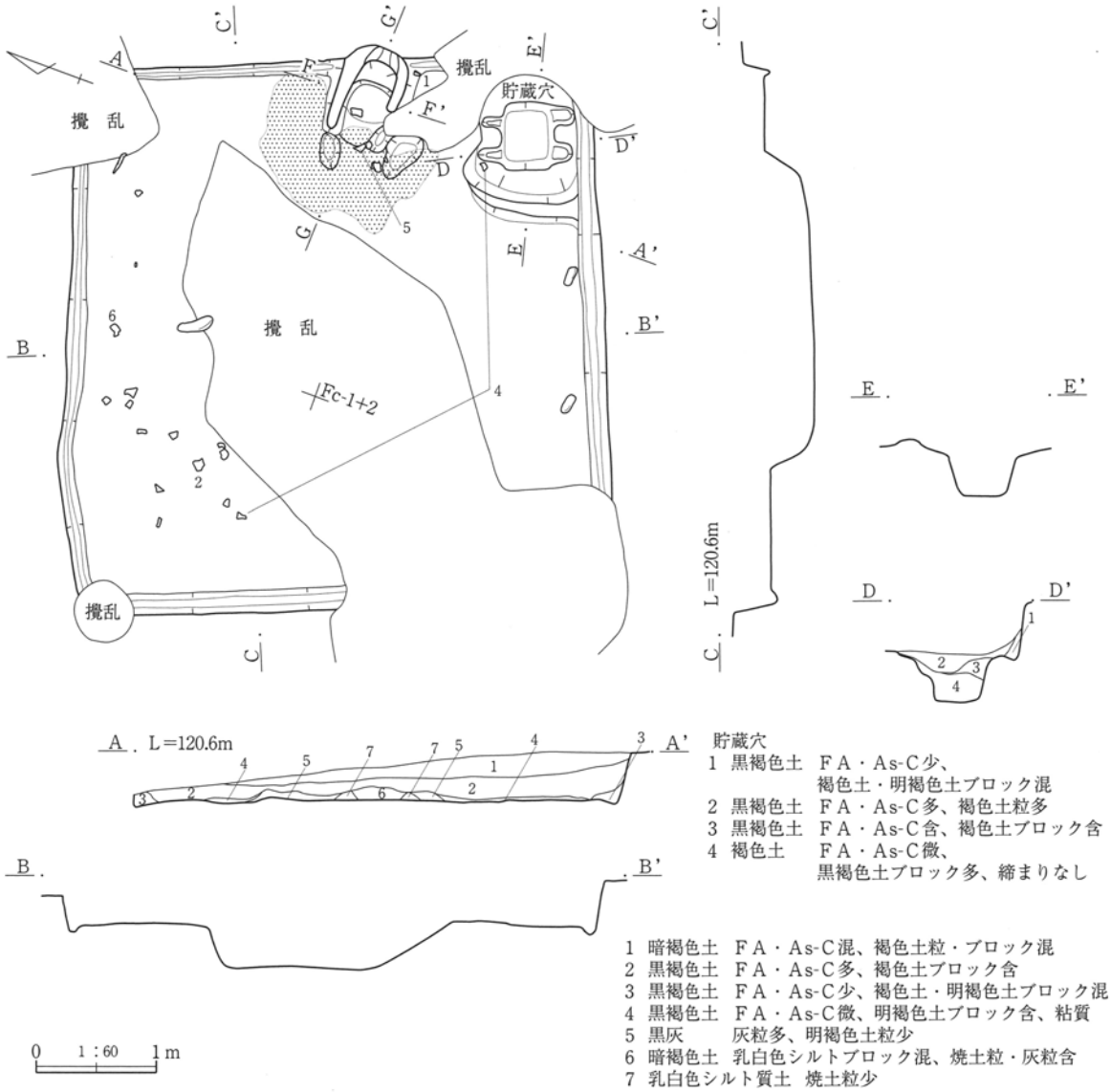




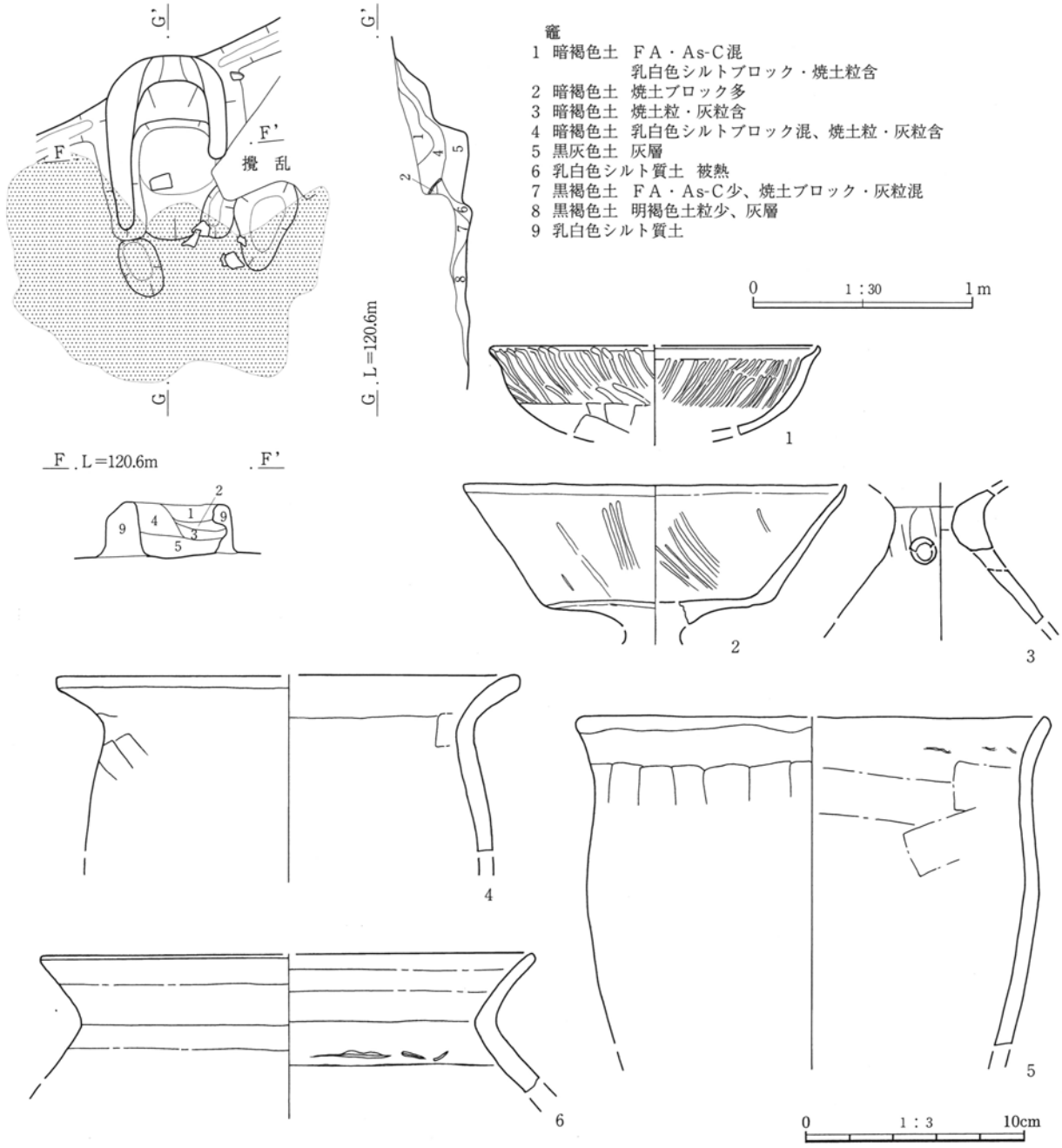
第49図　25号住居跡、出土遺物

26号住居跡（第50・51図、ＰＬ９・33）

位置　Ｅｂ～ｃ－20、Ｆｂ～ｃ－１　**重複**　なし。**形状**　長軸（4.7）ｍ、短軸（4.6）ｍの方形を呈する。　**面積**　（11.94）㎡　**方位**　Ｎ－78°－Ｅ　**床面**　遺構確認面から31cm掘り込んで、床面になる。床面は貼床構造で、明褐色ブロックを含む黒褐色粘質土で固く踏み固められていた。標高は平均120.18ｍを測る。　**壁溝**　幅約16cm、深さ約６cmの壁溝が一周している。　**貯蔵穴**　住居の南東に設置。南側、北側に２つずつ小穴が確認され、板状の蓋をした痕跡と考えられる。長軸55cm・短軸41cm・深さ42cmの長方形を呈する。　**柱穴**　検出されなかった。　**竈**　東壁面の南寄りを掘り込んで造られている。燃焼部は住居内にあり、袖部は石材ではなく、粘質土を張り付けて造られていた。竈の前に灰層が広範囲で確認され、燃焼部内から土師器甕が出土した。両袖方向34cm、煙道方向80cmを測る。　**遺物**　土師器坏・高坏・器台・甕が出土している。他に、土師器片2.62kgが出土。　**所見**　住居の西側は、攪乱のため、全容は明らかにできなかった。出土遺物から６世紀前半と考えられる。



第50図　26号住居跡



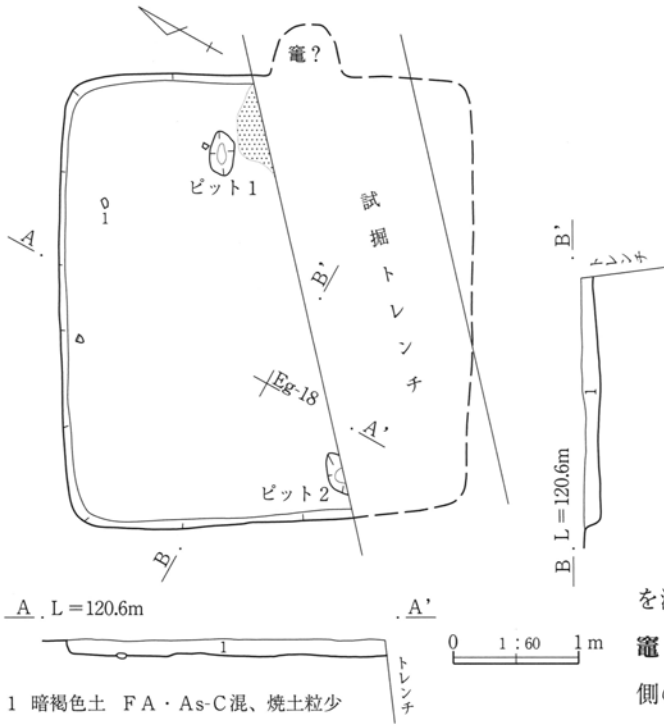
第51図　26号住居跡竈、出土遺物

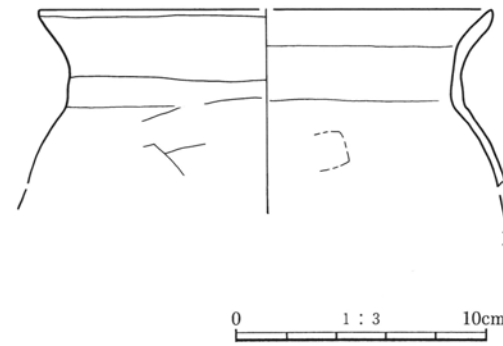
27号住居跡（第52図、ＰＬ９・33）

位置　Ｅｆ～ｇ－17～18　**重複**　なし。　**形状**　長軸3.6m、短軸（2.3）mの長方形を呈する。

面積　（6.27）㎡　**方位**　測定不可能。　**床面**　遺構確認面から６cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.41mを測る。　**壁溝・貯蔵穴・柱穴**　検出されなかった。ピット１は、径36cm・深さ11cm。ピット２は、径35cm・深さ10cmを測る。ピット１・２の性格は不明。　**竈**　検出されなかったが、焼土・灰の分布状況から東壁面に設置されていたと思われる。　**遺物**　土師器甕が出土している。

所見　住居の南側は、試掘トレンチのため、全容は明らかにできなかった。出土遺物から８世紀中葉と考えられる。





第52図　27号住居跡、出土遺物

を測る。 **壁溝・貯蔵穴・柱穴**　検出されなかった。

竈　東壁面の中央部を掘り込んで造られている。右側の袖部からは袖石に用いられたと思われる凝灰岩が出土した。凝灰岩は被熱し赤化していた。また、燃焼部内からは羽釜などを含む土器片が多量に出土した。両袖方向44cm、煙道方向76cmを測る。

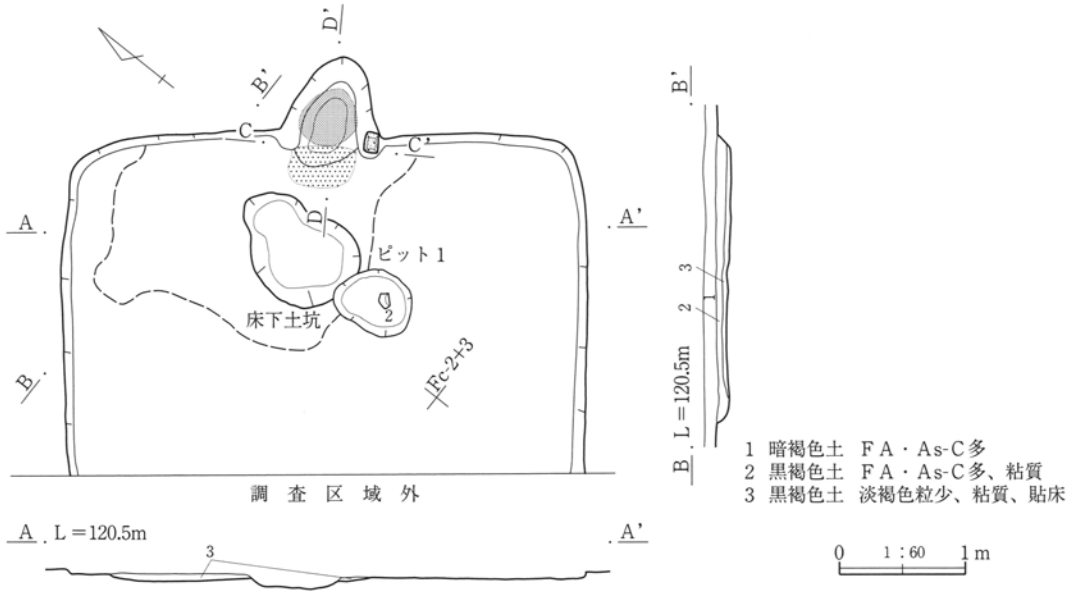
遺物　灰釉陶器埦、須恵器埦・羽釜が出土している。他に、土師器片1.38kg、須恵器片830ｇが出土。

所見　住居の西側は、調査区域外のため、全容は明らかにできなかった。出土遺物から10世紀前半と考えられる。

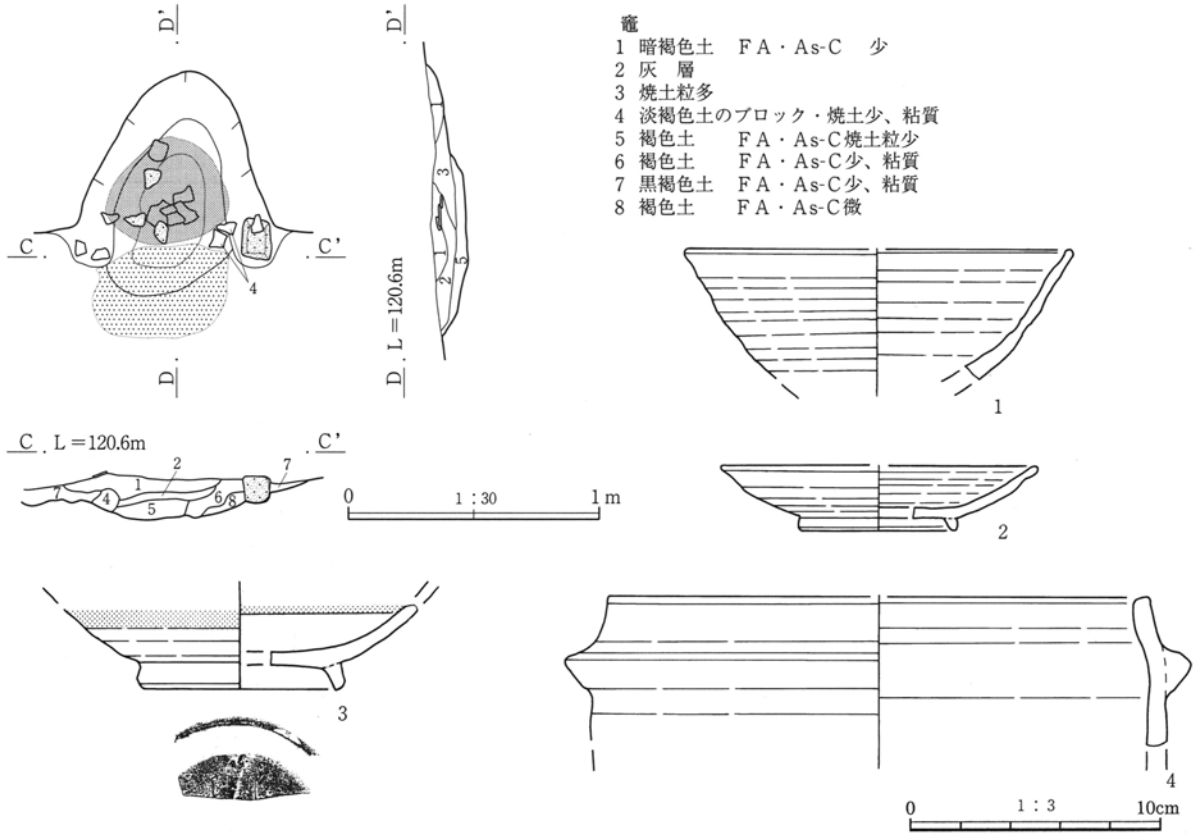
28号住居跡（第53・54図、ＰＬ９・33）

位置　Ｆｂ～ｃ－２～３　**重複**　なし。　**形状**　長軸6.2m、短軸（3.9）mの長方形を呈する。

面積　（6.27）㎡　**方位**　Ｎ－58°－Ｅ　**床面**　遺構確認面から７cm掘り込んで、床面になる。北側の床面は貼床構造で、淡褐色粒を含む黒褐色粘質土で固く踏み固められていた。その貼床の下からは不定形の床下土坑が確認された。標高は平均120.40m



第53図　28号住居跡



第54図　28号住居跡竈、出土遺物

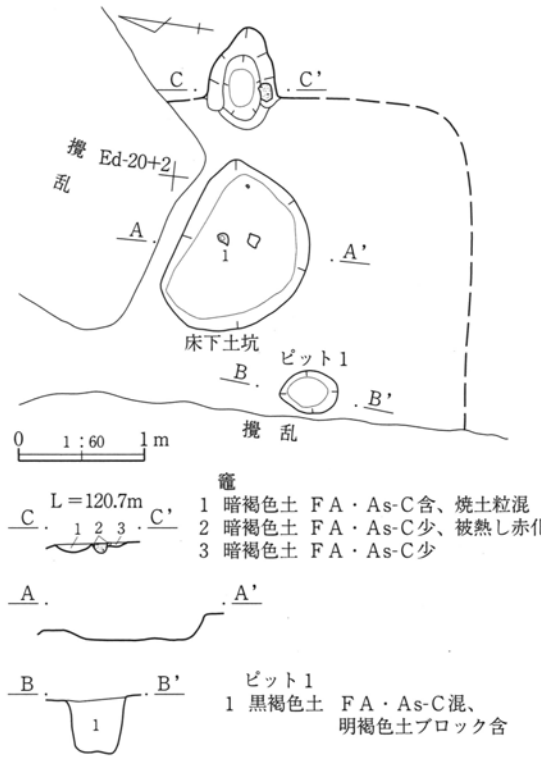
29号住居跡（第55・56図、ＰＬ９・33）

位置　Ｅｃ－20　**重複**　なし。　**形状**　長軸（2.5）m、短軸（2.2）mを測る。　**面積**　（6.36）m²

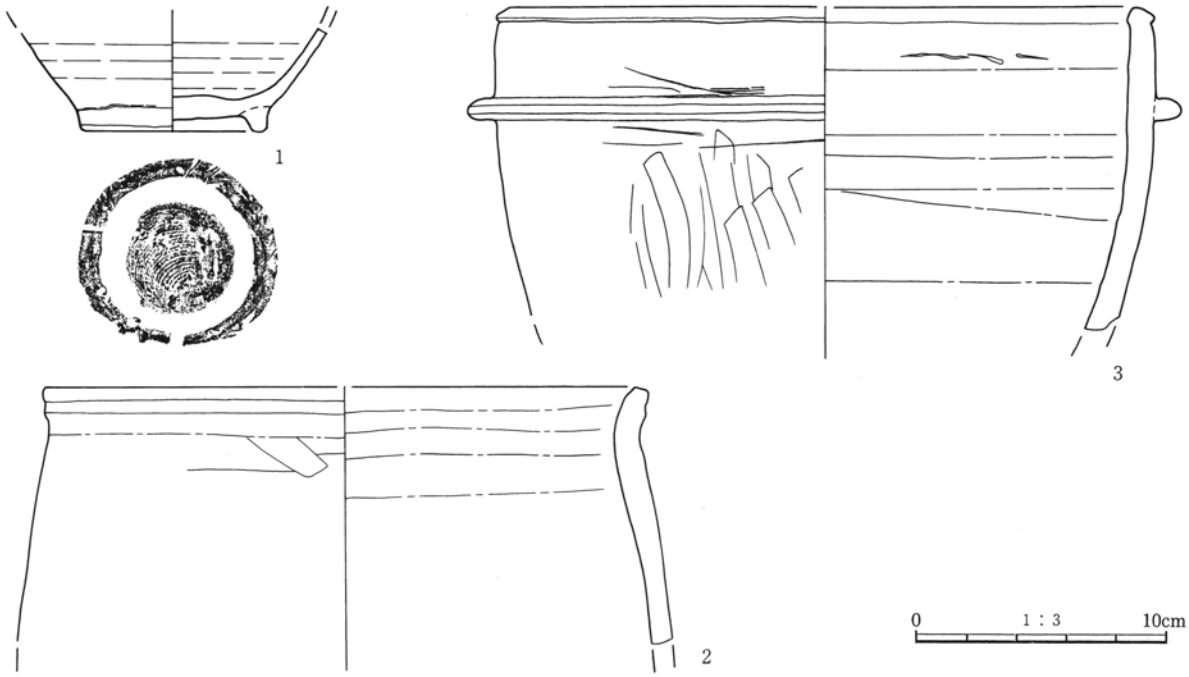
方位　Ｎ－83°－Ｅ　**床面**　攪乱のため床面は検出できなかったため、袖石と思われる凝灰岩、焼土・炭化物の分布状況から、竈を認定し、住居範囲を想定した。床下土坑から須恵器埦が出土した。

壁溝・貯蔵穴　検出されなかった。　**柱穴**　柱穴と思われるピット１は、径46cm・深さ44cmを測る。

竈　東壁面を掘り込んで造られている。右側の袖部からは袖石に用いられたと思われる凝灰岩が出土した。凝灰岩は被熱し赤化していた。両袖方向30cm、煙道方向62cmを測る。　**遺物**　土師器土釜、須恵器埦・羽釜が出土している。他に、土師器片70ｇ、須恵器片10ｇが出土。　**所見**　攪乱のため、住居の全容は明らかにできなかった。出土遺物から10世紀後半と考えられる。



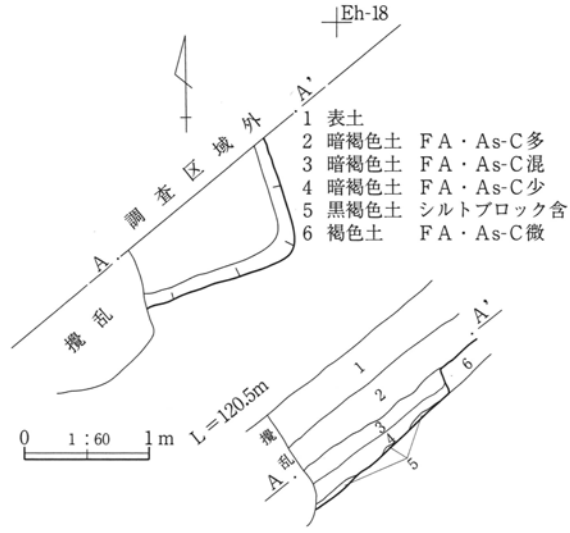
第55図　29号住居跡



第56図　29号住居跡出土遺物

30号住居跡（第57図、ＰＬ10）

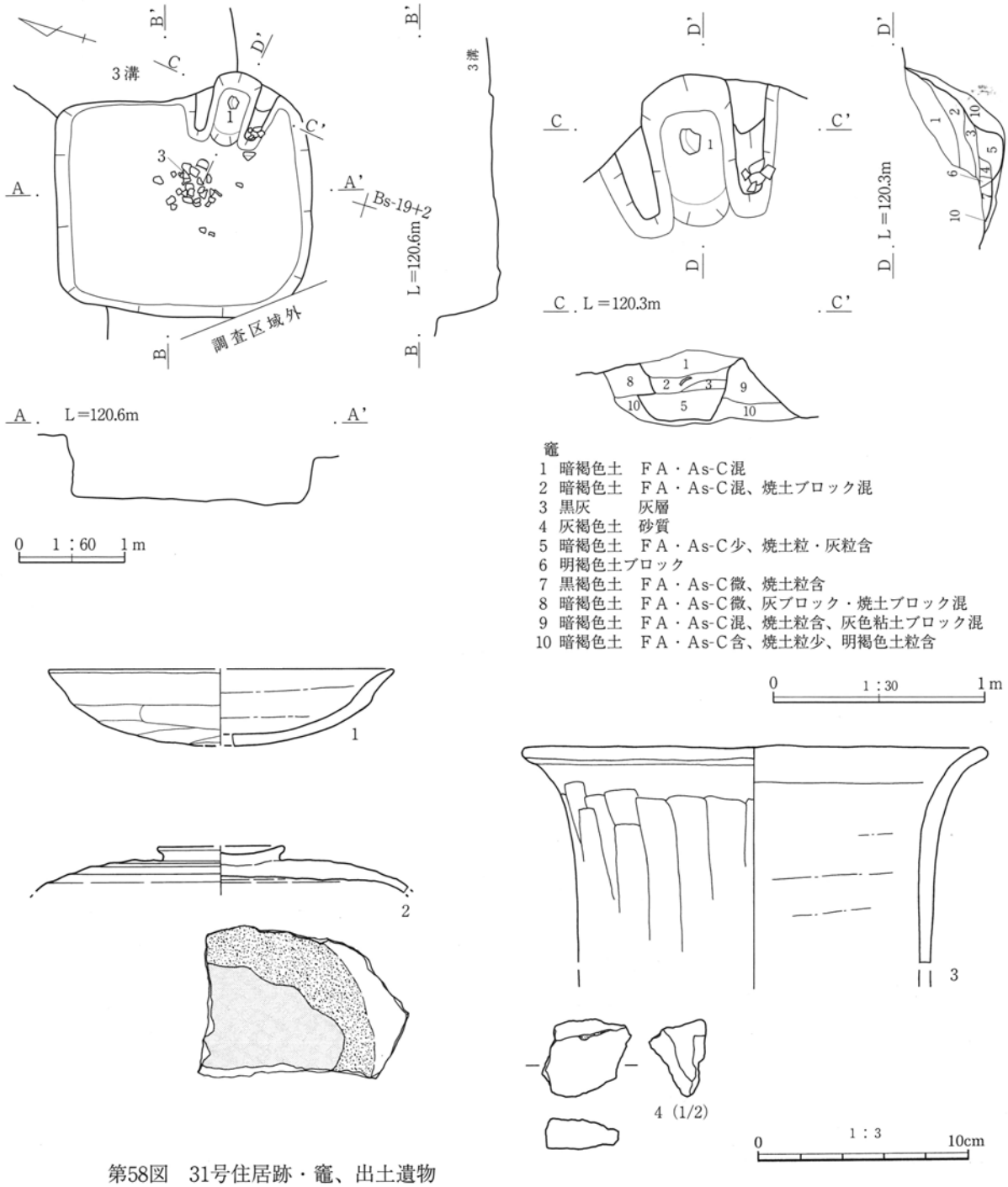
位置　Ｅｇ－18　**重複**　なし。　**形状**　長軸（1.3）m、短軸（0.8）mを測る。　**面積**　（0.73）m²　**方位**　測定不可能。　**床面**　遺構確認面から６cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.31mを測る。　**壁溝・貯蔵穴・柱穴・竈**　検出されなかった。　**遺物**　土師器片10ｇが出土している。　**所見**　住居の本体が調査区域外のため全容は明らかにできなかった。時期は不明。



第57図　30号住居跡

31号住居跡（第58図、ＰＬ10・34）

位置　Ｂｓ－19　**重複**　３号溝と重複している。本遺構が古い。　**形状**　長軸2.4m、短軸2.4mの隅丸方形を呈する。　**面積**　3.95m²　**方位**　Ｎ－71°－Ｅ　**床面**　遺構確認面から52cm掘り込んで、床面になる。床面は貼床構造で、明褐色土ブロックを含む黒褐色粘質土で固く踏み固められていた。標高は平均119.86mを測る。中央部付近から土器片が多量に出土した。　**壁溝・貯蔵穴・柱穴**　検出されなかった。　**竈**　東壁面の南寄りを掘り込んで造られている。燃焼部は住居内にあり、袖部は石材ではなく、粘質土を張り付けて造られていた。竈の前に灰層が確認され、燃焼部内から土師器皿が出土した。両袖方向27cm、煙道方向70cmを測る。　**遺物**　土師器皿・甕、須恵器蓋（朱墨と思われる赤色の残る転用硯）が出土している。他に、土師器片1.88kg、須恵器片180ｇが出土。　**所見**　出土遺物から７世紀後半と考えられる。



第58図　31号住居跡・竈、出土遺物

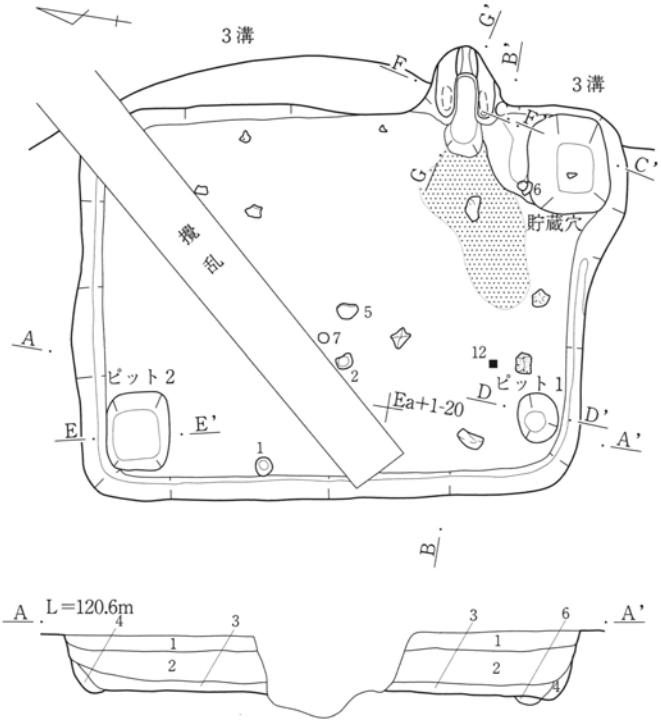
32号住居跡（第59・60図、ＰＬ10・34）

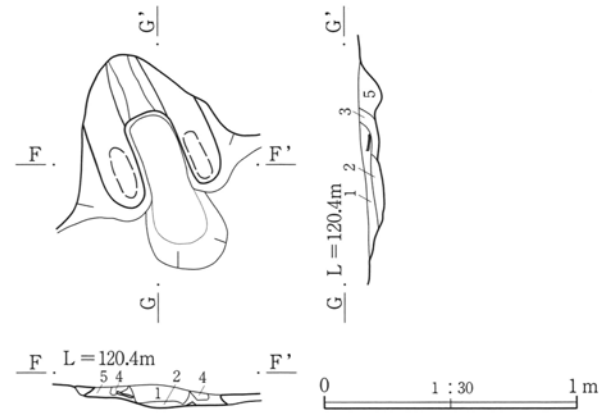
位置　Ｂｔ・Ｅａ－19～20　**重複**　３号溝と重複している。本遺構が古い。　**形状**　長軸4.3m、短軸3.6mの隅丸長方形を呈する。　**面積**　11.13㎡

方位　Ｎ－77°－Ｅ　**床面**　遺構確認面から43cm掘り込んで、床面になる。床面は貼床構造で、明褐色ブロックを含む黒褐色粘質土で固く踏み固められていた。標高は平均120.03mを測る。　**壁溝**　幅約８cm、深さ約５cmの壁溝が南側・西側・北側を巡っている。　**貯蔵穴**　住居の南東に設置。長軸59cm・短軸48cm・深さ26cmの長方形を呈する。

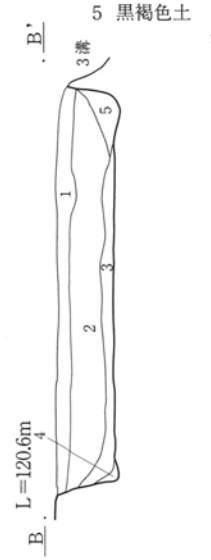
柱穴　柱穴と思われるピットは２基検出された。ピット１は、径40cm・深さ22cm。ピット２は、径

64cm・深さ29cmを測る。　**竈**　東壁面の南寄りを掘り込んで造られている。竈上面を３号溝によって壊されており、残存が悪い。住居内からは袖石に用いられたと思われる凝灰岩が出土した。凝灰岩は被熱し赤化していた。両袖方向46cm、煙道方向63cmを測る。　**遺物**　土師器甕、須恵器坏・埦・皿・蓋、灰釉陶器皿、鉄製紡錘車が出土している。他に、土師器片1.57kg、須恵器片1.25kgが出土。　**所見**　出土遺物から９世紀後半と考えられる。



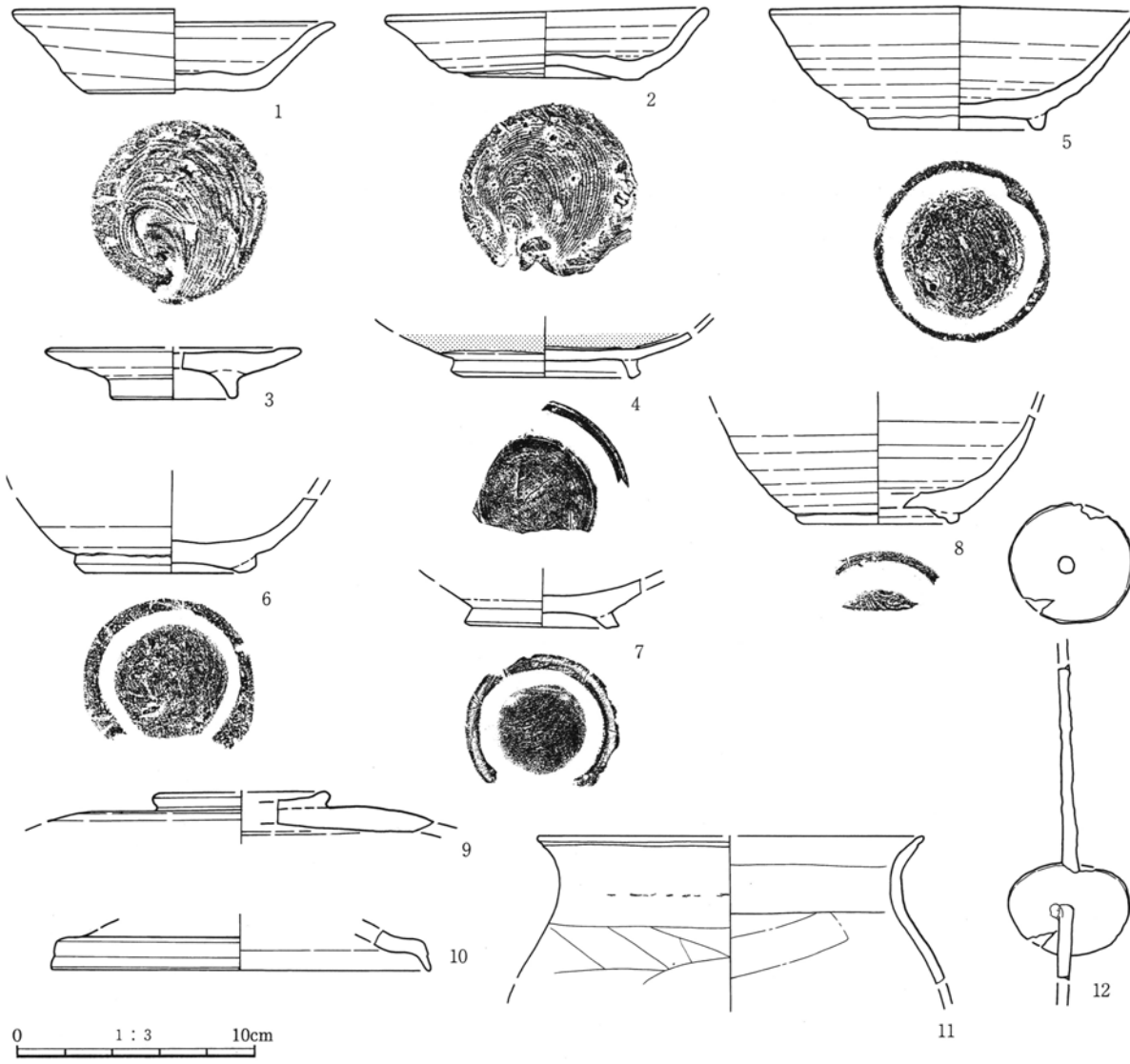


竈
1 黒褐色土　焼土ブロック・灰粒混
2 黒灰　灰層
3 暗褐色土　ＦＡ・As-C少、焼土ブロック含
4 黄褐色土　シルトブロック
5 黒褐色土　ＦＡ・As-C混、黒色土ブロック含、焼土粒少、粘質



貯蔵穴
1 黒色土　灰層
2 赤褐色土　焼土ブロック
3 暗褐色土　焼土粒・灰粒混
4 黒褐色土　ＦＡ・As-C少、黄褐色土粒

第59図　32号住居跡・竈



第60図　32号住居跡出土遺物

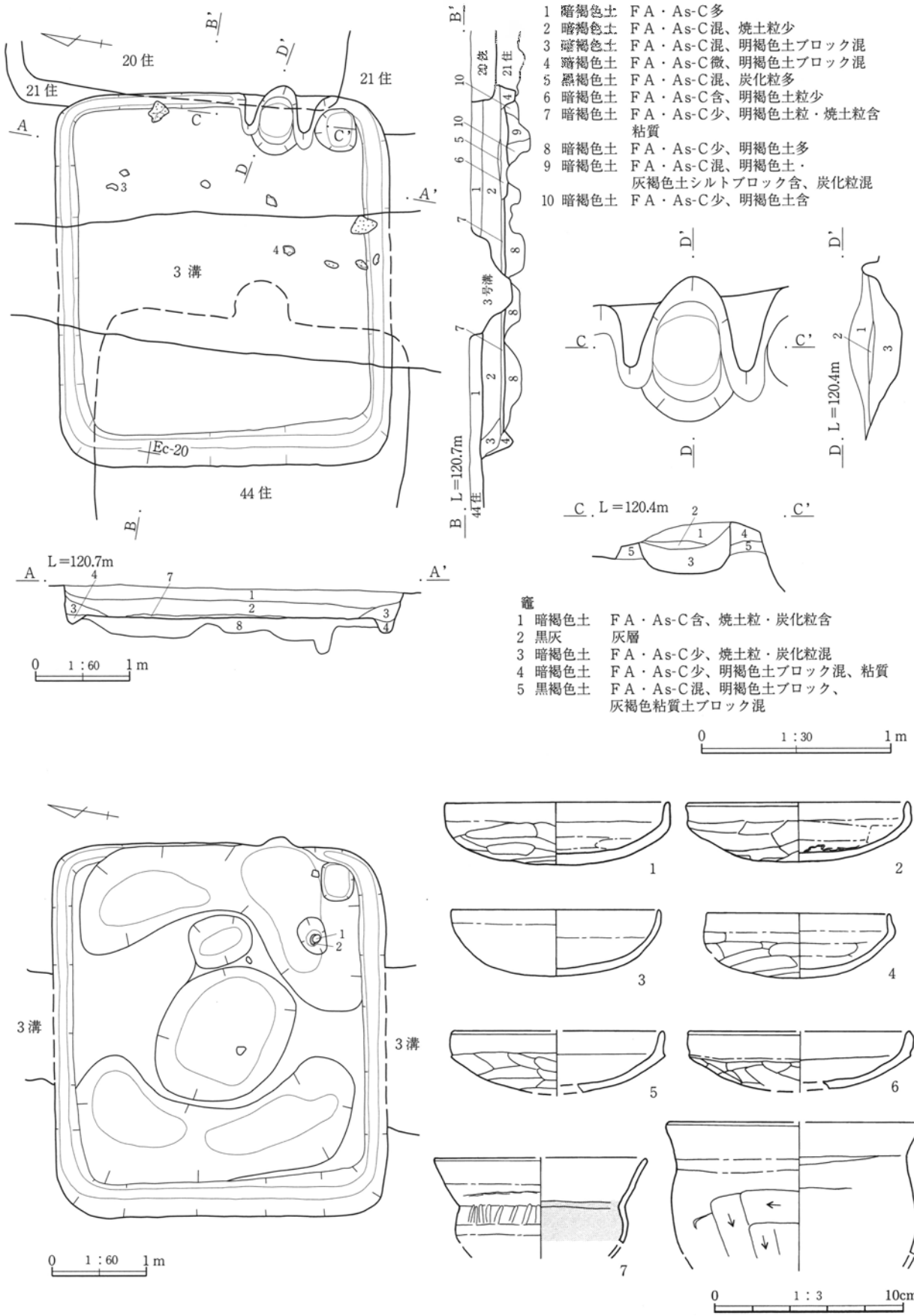
33号住居跡（第61図、ＰＬ10・34）

位置　Ｅｂ～ｃ－19～20　**重複**　20・21・44号住居、３号溝と重複している。本遺構が20・44号住居、３号溝より古く、21号住居より新しい。　**形状**　長軸4.1m、短軸3.6mの隅丸方形を呈する。

面積　12.46㎡　**方位**　Ｎ－88°－Ｅ　**床面**　遺構確認面から24cm掘り込んで、床面になる。床面は貼床構造で、明褐色土粒を含む暗褐色粘質土で固く踏み固められていた。標高は平均120.30mを測る。

壁溝　幅約28cm、深さ約12cmの壁溝が一周している。　**貯蔵穴**　住居の南東に設置。径44cm・深さ60cmの楕円形を呈する。　**柱穴**　検出されなかった。　**竈**　東壁面の南寄りを掘り込んで造られている。竈上面を20号住居によって壊されており、残存が悪い。燃焼部は住居内にあり、袖部は石材ではなく、粘質土を張り付けて造られていたと思われる。両袖方向36cm、煙道方向60cmを測る。　**遺物**　土師器坏６点（内完形２点）・小型甕１点・赤色顔料の付着した坩１点が出土している。坩は覆土からの出土で、21号住居（４世紀）からの混入遺物と思われる。他に、土師器片740ｇ、須恵器片380ｇが出土。

所見　本住居は、上面を20・44号住居、３号溝によって壊されていたが、床面（掘り方面）の深度が深かったので、比較的残存が良好であった。出土遺物から７世紀中葉と考えられる。

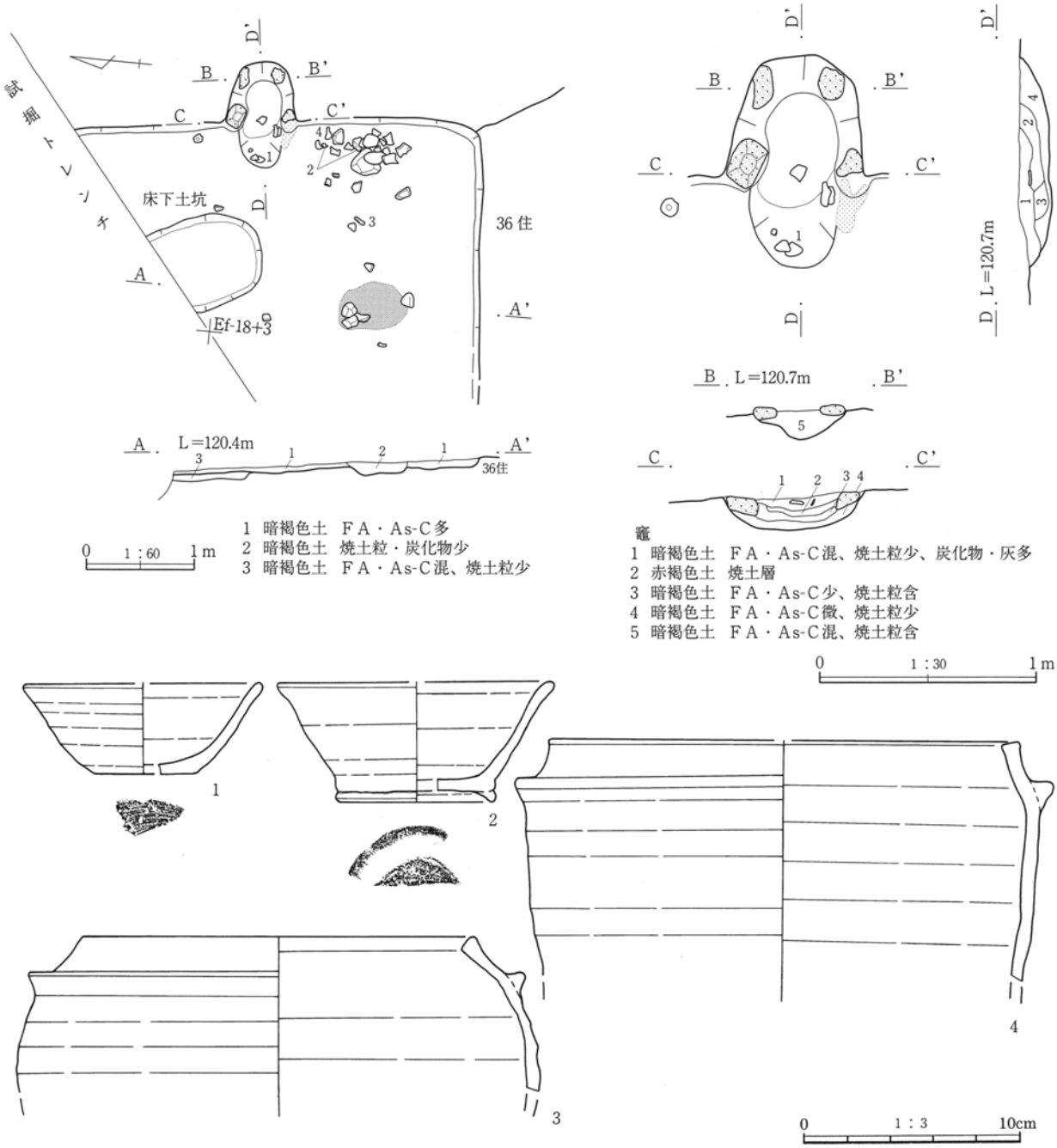


第61図　33号住居跡・竈・掘り方、出土遺物

34号住居跡（第62図、ＰＬ12・34）

位置　Ｅｅ～ｆ－18　**重複**　36号住居と重複している。本住居が新しい。　**形状**　長軸（3.9）ｍ、短軸（2.3）ｍを測る。　**面積**　（7.01）m^2　**方位**　Ｎ－84°－Ｅ　**床面**　遺構確認面から３cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.25ｍを測る。

壁溝・貯蔵穴・柱穴　検出されなかった。　**竈**　東壁面を掘り込んで造られている。竈には竈構築材採掘痕から掘り出されたと思われる凝灰岩が４点袖石・煙道部の構築材として使用されていた。凝灰岩は被熱し赤化していた。両袖方向30cm、煙道方向60cmを測る。　**遺物**　須恵器坏・埦・羽釜が出土している。他に、土師器片580ｇ、須恵器片1.05kgが出土。　**所見**　試掘トレンチのため、住居の全容は明らかにできなかった。出土遺物から10世紀中葉～後葉と考えられる。



第62図　34号住居跡・竈、出土遺物

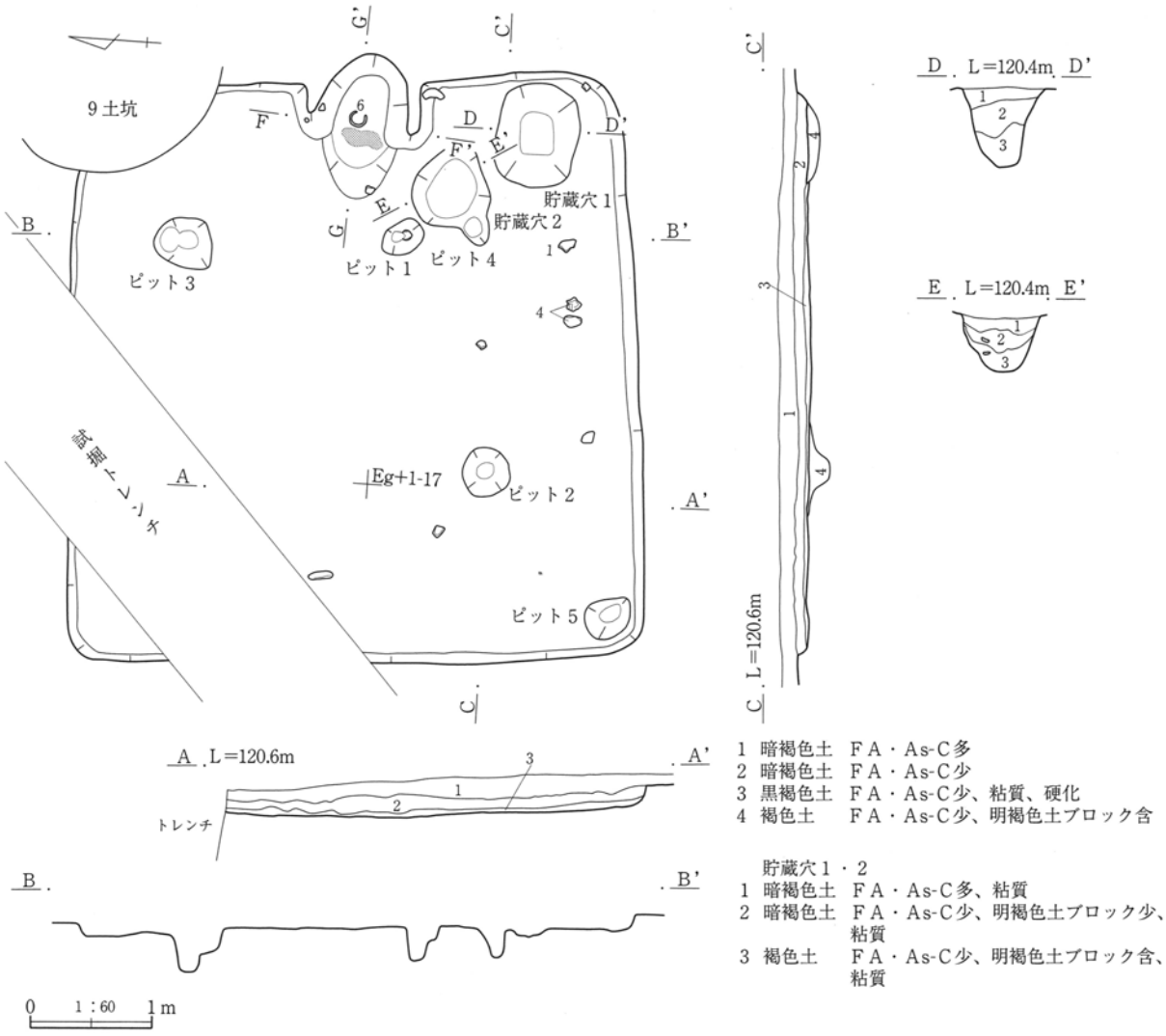
35号住居跡（第63・64図、ＰＬ11・34）

位置　Ｅｆ～ｇ－16～17　**重複**　９号土坑と重複している。本住居が古い。　**形状**　長軸4.8m、短軸4.0mの隅丸方形を呈する。　**面積**　（17.06）㎡　**方位**　Ｎ－85°－Ｅ　**床面**　遺構確認面から17cm掘り込んで、床面になる。床面は貼床構造で、明褐色土ブロックを含む黒褐色粘質土で固く踏み固められていた。標高は平均120.29mを測る。　**壁溝**　検出されなかった。　**貯蔵穴**　住居の南東に設置。貯蔵穴１は長軸92cm・短軸68cm、深さ64cmの楕円形、貯蔵穴２は径68cm・深さ37cmの楕円形を呈する。貯蔵穴２から土師器坏・鉢が出土した。

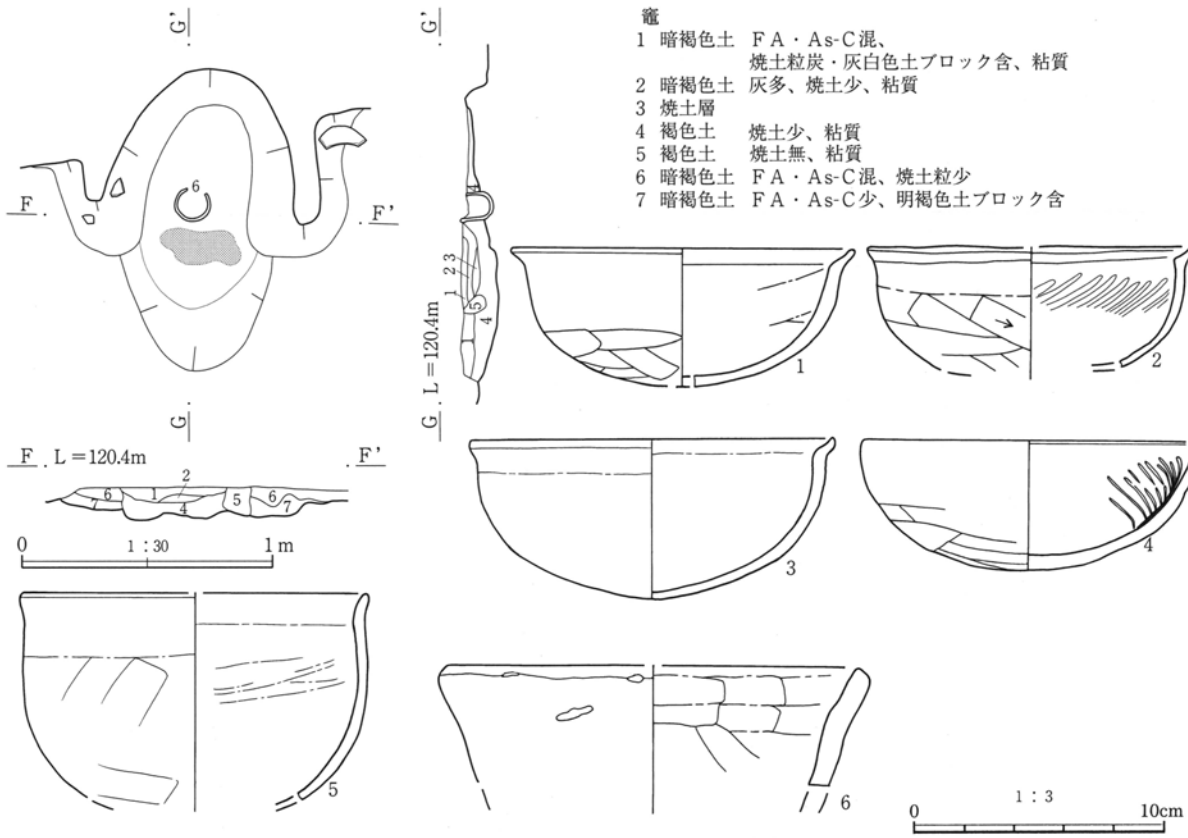
柱穴　柱穴と思われるピットは４基検出された。ピット１は、径36cm・深さ29cm。ピット２は、径38cm・深さ30cm。ピット３は、径47cm・深さ38cm。ピット４は、径24cm・深さ22cmを測る。

竈　東壁面の中央部を掘り込んで造られている。削平され残存悪いが、燃焼部は住居内にあり、袖部は石材ではなく、粘質土を張り付けて造られていたと思われる。支脚石は検出されなかったが、燃焼部中央から土師器甑が出土した。両袖方向40cm、煙道方向74cmを測る　**遺物**　土師器坏・甑が出土している。他に、土師器片1.12kg、須恵器片10ｇが出土。

所見　試掘トレンチのため、住居の全容は明らかにできなかった。出土遺物から５世紀末～６世紀初頭と考えられる。



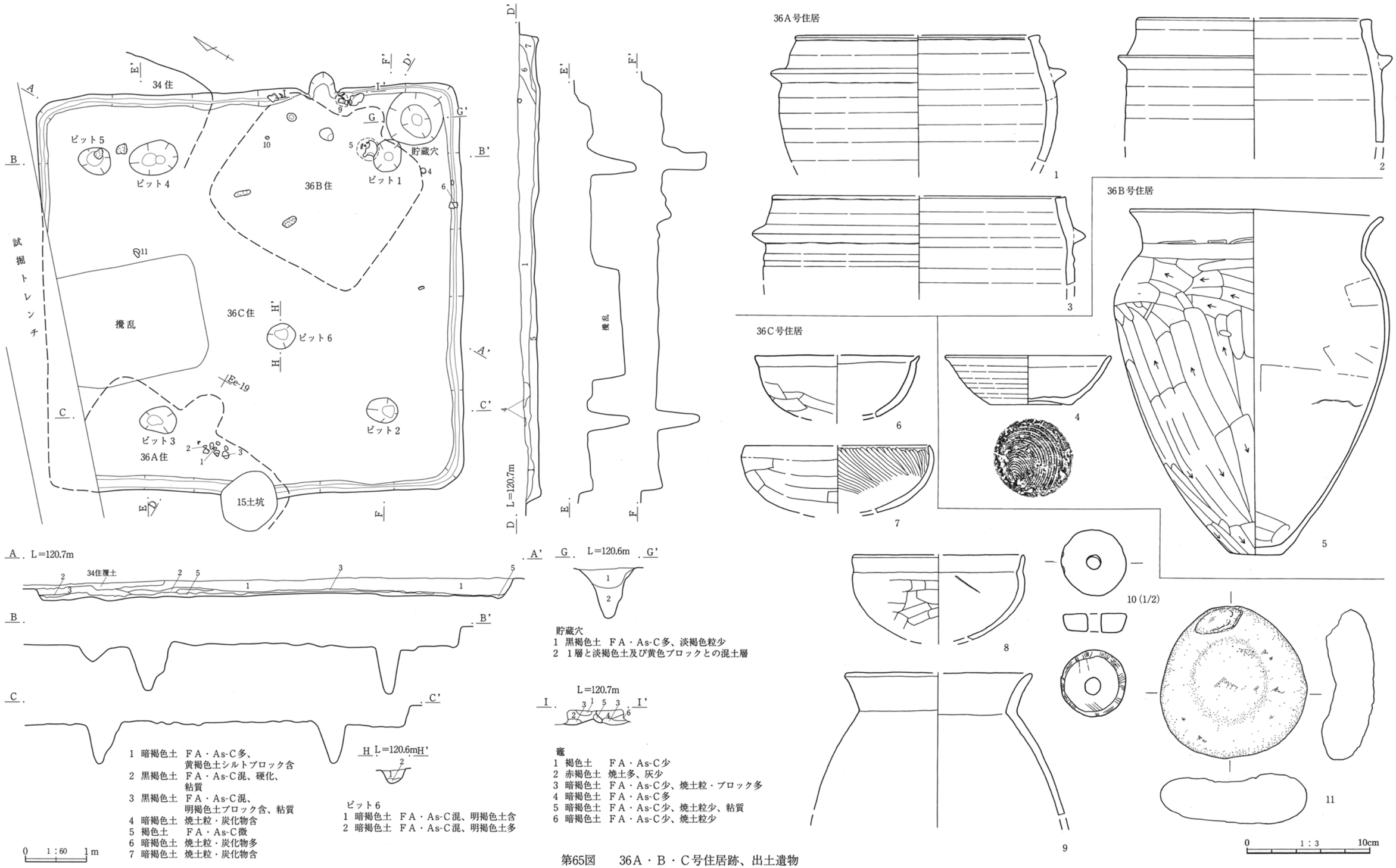
第63図　35号住居跡



第64図　35号住居跡竈、出土遺物

36Ａ・Ｂ・Ｃ号住居跡（第65図、ＰＬ12・34・35）

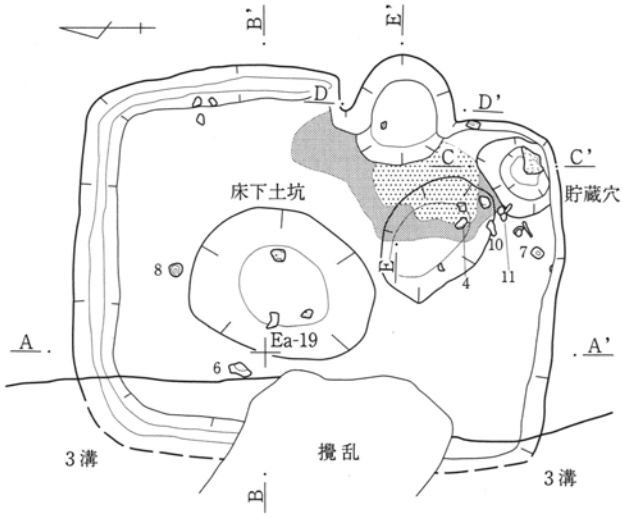
位置　Ｅｄ～ｅ－17～19　**重複**　34号住居、15号土坑と重複。本住居が古い。　**形状**　長軸7.1ｍ、短軸6.8ｍの隅丸方形を呈する。　**面積**　(35.60) ㎡　**方位**　Ｎ－58°－Ｅ　**床面**　遺構確認面から30cm掘り込んで、床面になる。床面は一部貼床構造で、明褐色土ブロックを含む黒褐色粘質土で固く踏み固められていた。標高は平均120.18ｍを測る。　**壁溝**　幅約20cm、深さ約6cmの壁溝が一周している。　**貯蔵穴**　住居の南東に設置。貯蔵穴は長軸92cm・短軸78cmの楕円形を呈する。　**柱穴**　柱穴と思われるピットは４基検出された。ピット１は、径52cm・深さ68cm。ピット２は、径51cm・深さ56cm。ピット３は、径60cm・深さ67cm。ピット４は、径80cm・深さ72cmを測る。性格不明なピット５は、径56cm・深さ22cm。ピット６は、径50cm・深さ15cmを測る。　**竈**（36Ｃ住）　東壁面の南寄りを掘り込んで造られている。削平され残存悪いが、袖部は石材ではなく、粘質土を張り付けて造られていたと思われる。支脚石は検出されなかったが、右袖部から土師器甕が出土。両袖方向34cm、煙道方向42cmを測る。　**遺物**　土師器坏・甕、須恵器坏・羽釜、石製紡錘車が出土している。１～３の羽釜は36Ａ住、４の須恵器坏・５の土師器甕は36Ｂ住、他は36Ｃ住の出土遺物。他に、土師器片440g、須恵器片2.0kgが出土。　**所見**　出土遺物から36Ｃ住居は５世紀末～６世紀初頭、36Ｂ住居は９世紀、36Ａ住居は10世紀と考えられる。36Ｃ住居を壊して、９世紀と10世紀の住居が造られたと考えられる。調査時、４・５の遺物が出土した周辺には焼土・灰が分布し、竈の構築材と思われる凝灰岩も出土した。また、１～３の遺物出土付近にも焼土・灰が確認できた。それぞれ36Ｂ・Ａ住居の竈と思われるため、破線で住居範囲を想定した。

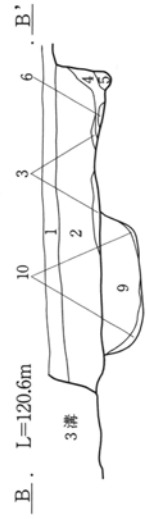


第65図　36A・B・C号住居跡、出土遺物

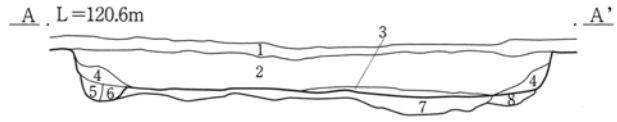
38号住居跡（第66・67図、ＰＬ11・35）

位置　Ｂｔ・Ｅａ－18～19　**重複**　３号溝と重複している。本遺構が古い。　**形状**　長軸4.1ｍ、短軸3.2ｍの隅丸長方形を呈する。　**面積**　(8.97) ㎡　**方位**　Ｎ－90°　**床面**　遺構確認面から33cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.06ｍを測る。床面は一部貼床構造で、明褐色土ブロックを含む黒褐色粘質土で固く踏み固められていた。中央部に長軸150cm・短軸110cm・深さ約32cmの床下土坑を検出した。　**壁溝**　幅約26cm、深さ約５cmの壁溝が北側を巡っている。壁溝は南側では検出されなかった。　**貯蔵穴**　住居の南東に設置されている。径72cm・深さ25cmの楕円形を呈する。　**柱穴**　検出されなかった。　**竈**　東壁面の南寄りを掘り込んで造られている。住居内からは袖石に用いられたと思われる凝灰岩が出土しており、袖部等の構築材として用いられていたと思われる。凝灰岩は被熱し赤化していた。両袖方向50cm、煙道方向65cmを測る。**遺物**　土師器甕、須恵器坏・埦、灰釉陶器埦が出土している。他に、土師器片1.9kg、須恵器片2.2kgが出土。　**所見**　出土遺物から９世紀末～10世紀初頭と考えられる。

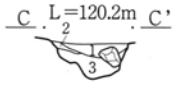




竈
1 暗褐色土　ＦＡ・As-C混、焼土粒多
2 暗褐色土　灰層、焼土粒含
3 暗褐色土　焼土ブロック混、褐色粘質ブロック含
4 暗褐色土　ＦＡ・As-C微、明褐色土粒含、焼土粒・灰粒混、締まりなし
5 暗褐色土　ＦＡ・As-C少、焼土粒少、粘性有
6 暗褐色土　ＦＡ・As-C混、明褐色土ブロック含、焼土粒少
7 暗褐色土　灰色、灰層、焼土粒少
8 暗褐色土　ＦＡ・As-C微、焼土粒少、明褐色土粒含
9 暗褐色土　ＦＡ・As-C少、焼土粒・炭化物混
10 暗褐色土　ＦＡ・As-C微、焼土粒少、明褐色土粒混

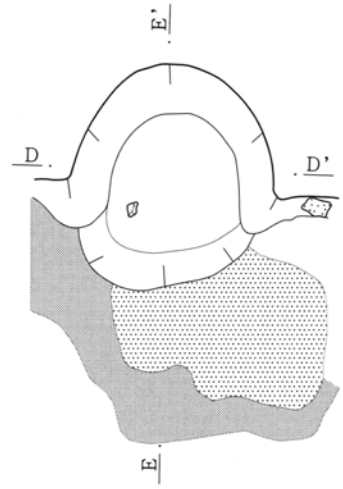


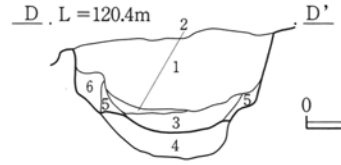
1 暗褐色土　ＦＡ・As-C多
2 暗褐色土　ＦＡ・As-C混、焼土粒含、褐色土ブロック混
3 黒褐色土　ＦＡ・As-C少、明褐色土粒含、粘質、硬化
4 暗褐色土　ＦＡ・As-C微、明褐色土粒含
5 黒褐色土　ＦＡ・As-C無、粘質
6 暗褐色土　明褐色土粒多、締まりなし
7 暗褐色土　明褐色土ブロック混
8 暗褐色土　ＦＡ・As-C含、明褐色土粒・焼土粒含
9 黄褐色土　黒色土ブロックを斑状に含む（床下土坑）
10 黒色土　粘性有、９層に混じる土（床下土坑）



貯蔵穴
1 暗褐色土　ＦＡ・Ａｓ－Ｃ少、明褐色土粒少、焼土粒含
2 黒灰　灰多、焼土粒含
3 暗褐色土　ＦＡ・Ａｓ－Ｃ微、明褐色土粒含・焼土粒少

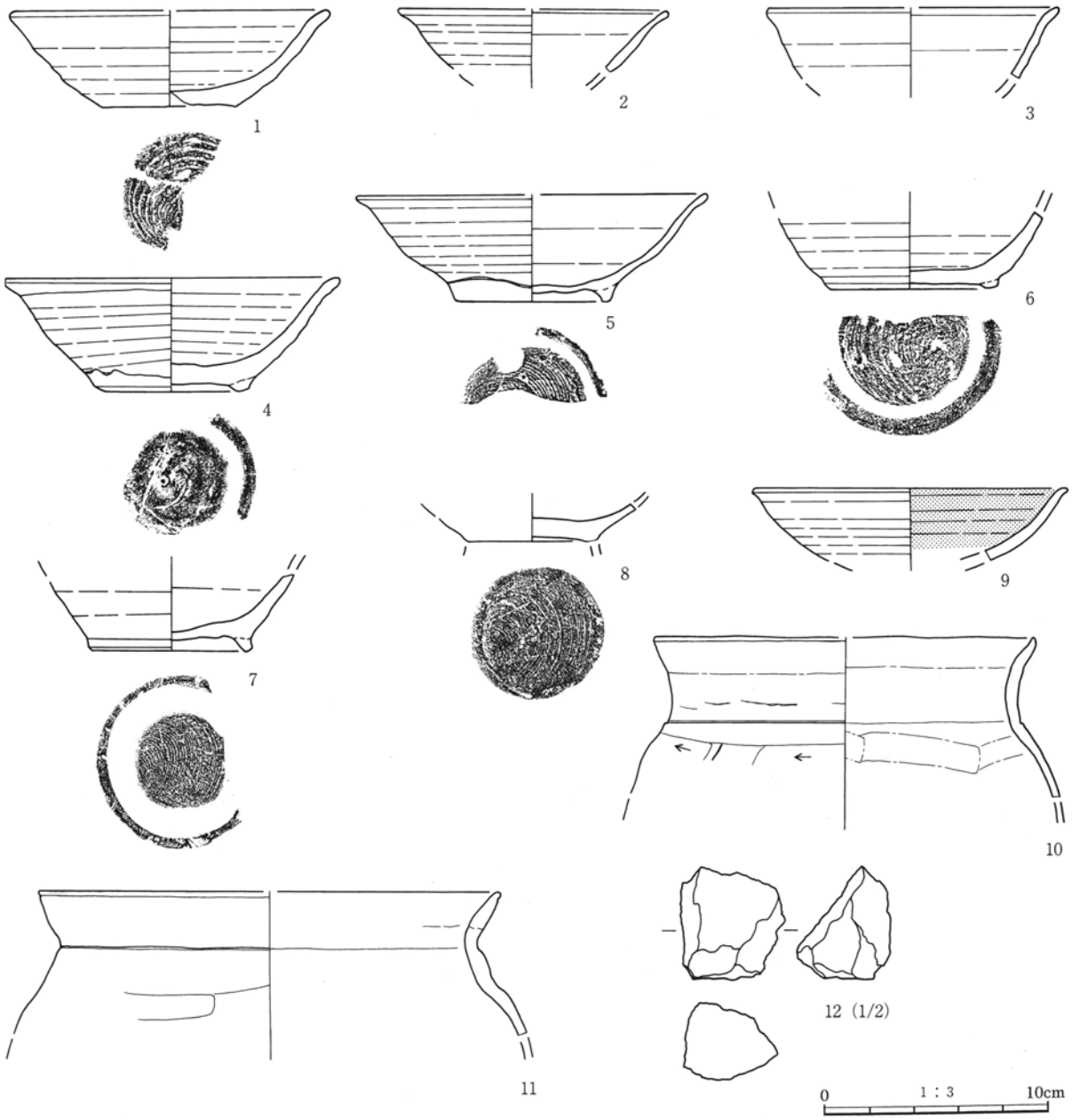
0　1：60　1ｍ





0　1：30　1ｍ

第66図　38号住居跡・竈



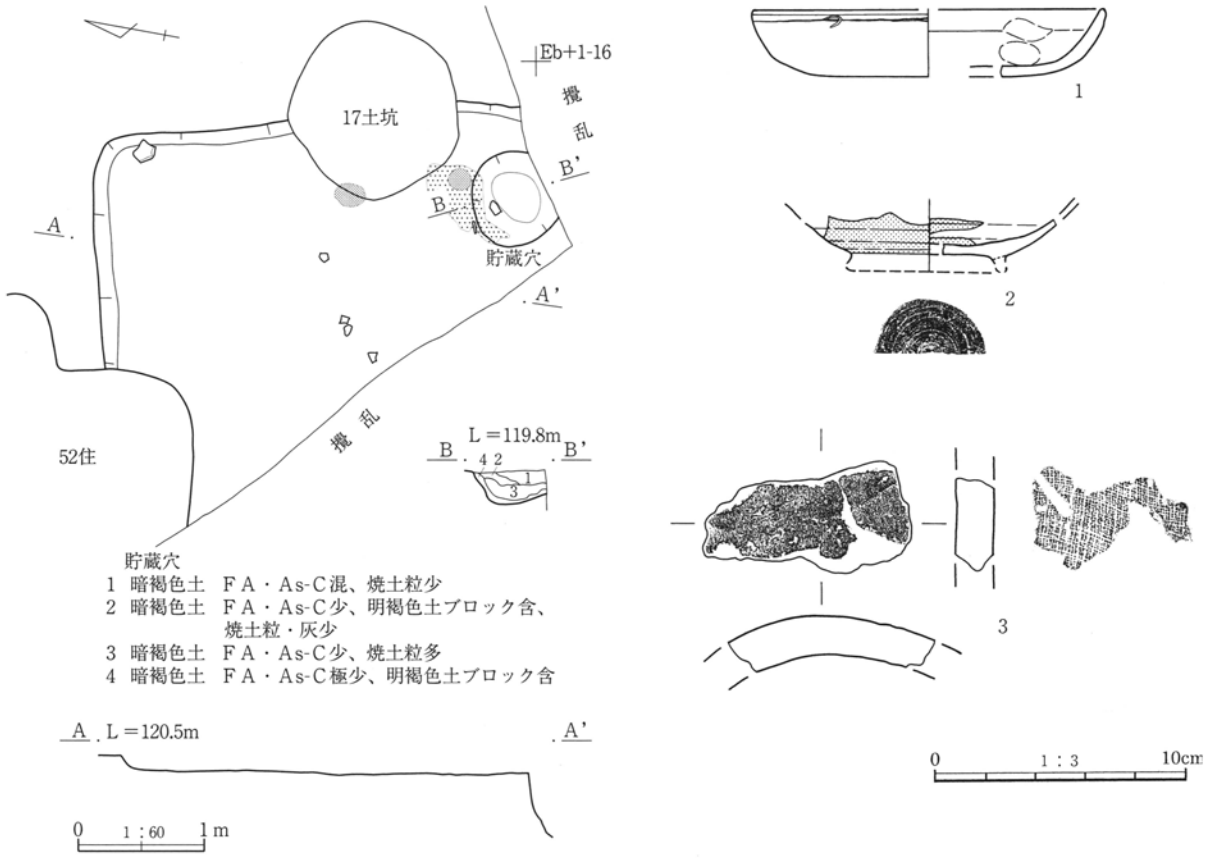
第67図　38号住居跡出土遺物

39号住居跡（第68図、ＰＬ11・35・36）

位置　Ｅｂ－16　**重複**　52号住居、17号土坑と重複している。本住居が古い。　**形状**　長軸（3.8）ｍ、短軸（2.8）ｍを測る。　**面積**　（6.51）㎡　**方位**　（Ｎ－88°－Ｅ）　**床面**　遺構確認面から12cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.25mを測る。

壁溝・柱穴　検出されなかった。　**貯蔵穴**　住居の南東に設置。径78cm・深さ27cmの楕円形を呈する。

竈　17号土坑に壊され、検出できなかった。焼土・灰の分布状況から竈は東壁面の南寄りに設置されていたと思われる。　**遺物**　土師器坏、灰釉陶器埦、丸瓦が出土している。他に、土師器片790ｇ、須恵器片540ｇが出土。　**所見**　住居の半分以上が攪乱や他の遺構に壊され、全容は明らかにできなかった。また、出土遺物も少なく、時期は不明。



第68図　39号住居跡、出土遺物

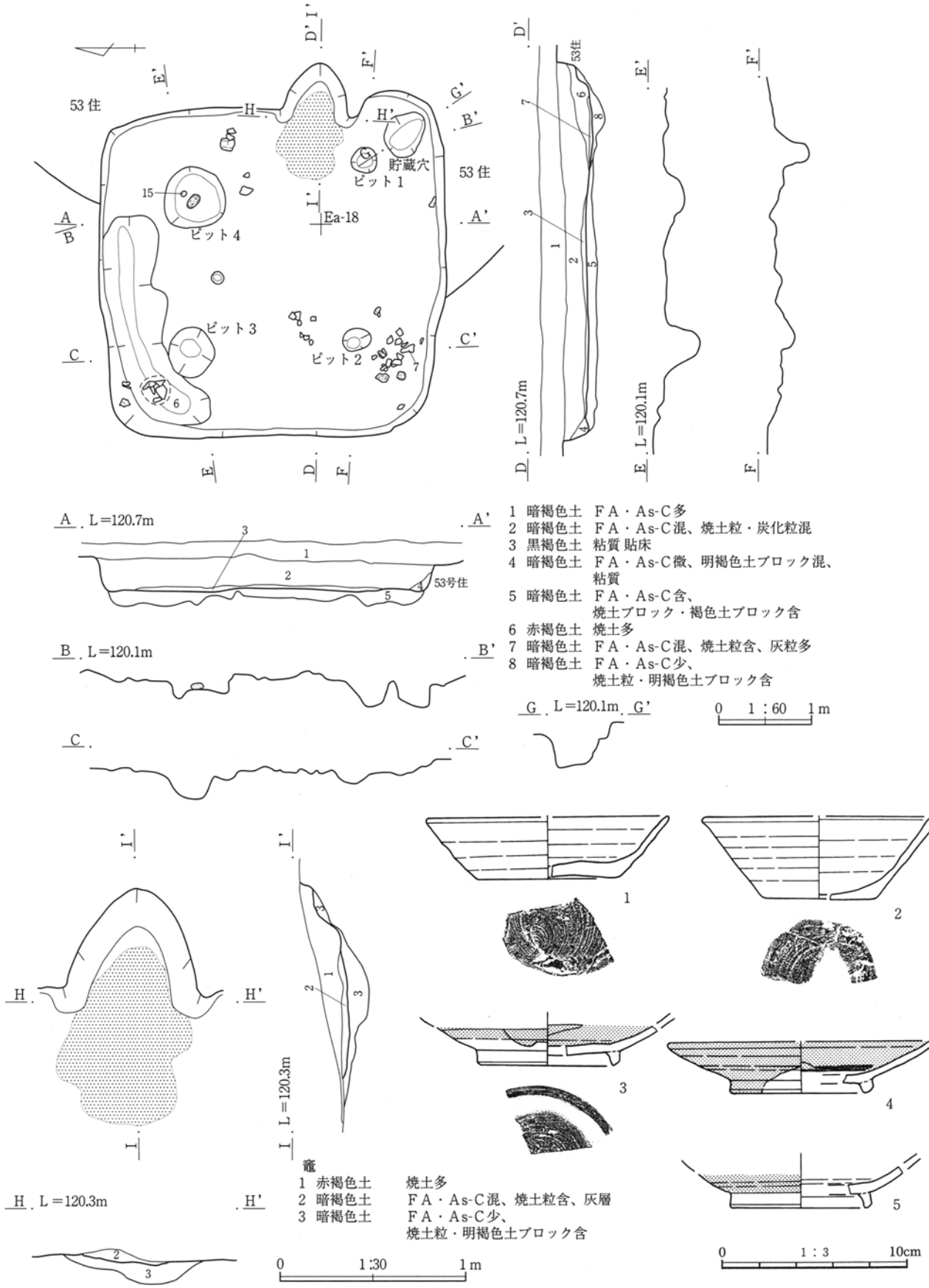
40号住居跡（第69・70図、ＰＬ13・36）

位置　Ｂｔ・Ｅａ－17～18　**重複**　53号住居と重複している。本住居が新しい。　**形状**　長軸3.8ｍ、短軸3.5ｍの隅丸方形を呈する。　**面積**　11.46㎡　**方位**　Ｎ－89°－Ｅ　**床面**　遺構確認面から34cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.03ｍを測る。床面は一部貼床構造で、明褐色土ブロックを含む黒褐色粘質土で固く踏み固められていた。

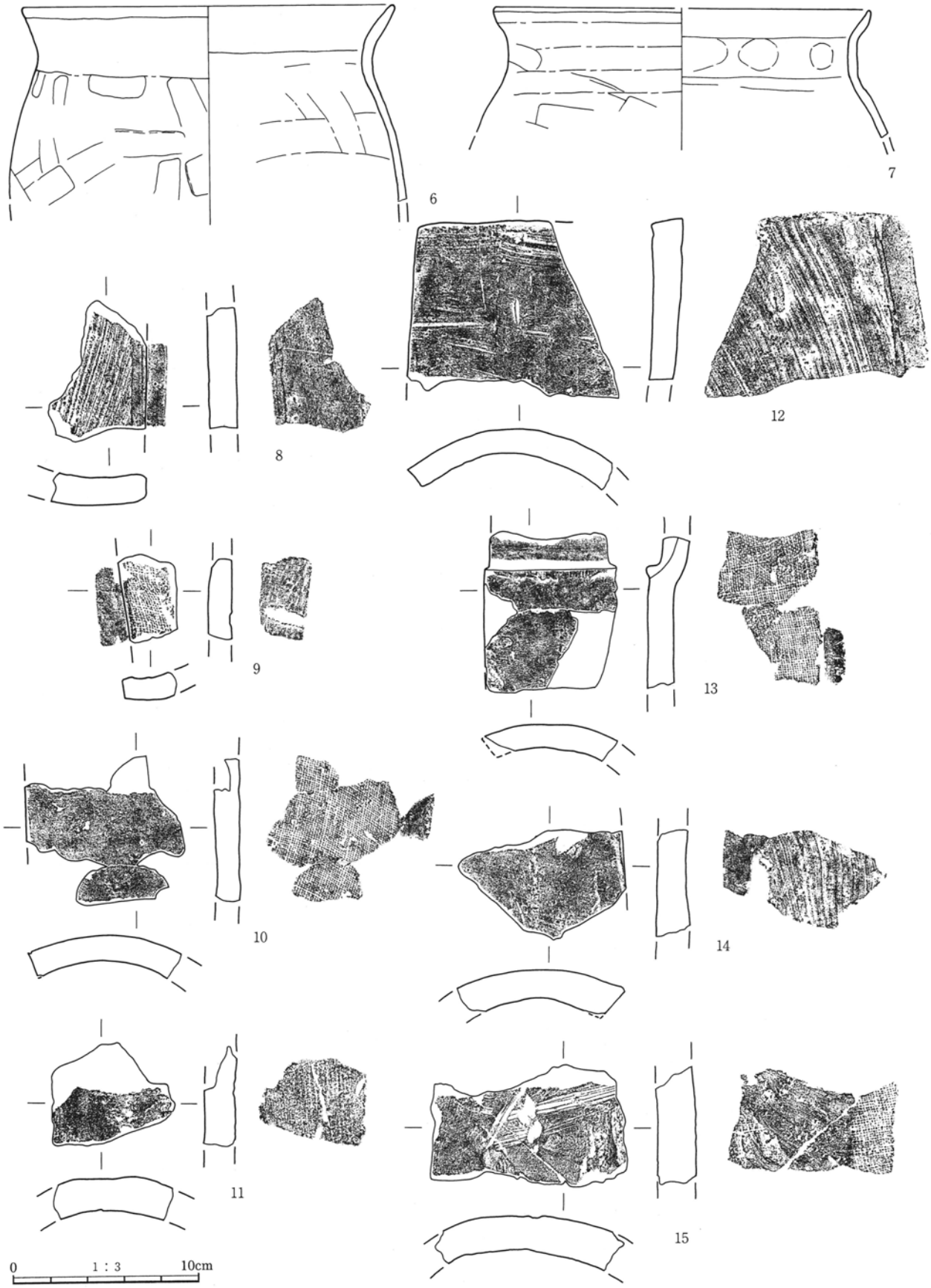
壁溝　検出されなかった。　**貯蔵穴**　住居の南東に設置。径51cm・深さ27cmの楕円形を呈する。

柱穴　柱穴と思われるピットは４基検出された。ピット１は、径30cm・深さ29cm。ピット２は、径30cm・深さ25cm。ピット３は、径52cm・深さ22cm。ピット４は、径68cm・深さ15cmを測る。

竈　東壁面の南寄りを掘り込んで造られている。削平されて、残存が悪い。住居内からは竈構築材に用いられたと思われる凝灰岩が出土しており、袖部等の構築材として用いられていたと思われる。凝灰岩は被熱し赤化していた。両袖方向45cm、煙道方向68cmを測る。　**遺物**　土師器甕、須恵器坏、灰釉陶器埦・皿、瓦が出土している。他に、土師器片5.5kg、須恵器片2.2kg、竈構築材採掘痕から掘り出されたと思われる未加工の直方体を呈する凝灰岩（掲載番号16、写真図版PL36）が出土。　**所見**　出土遺物から９世紀後半と考えられる。



第69図　40号住居跡・竈、出土遺物（１）

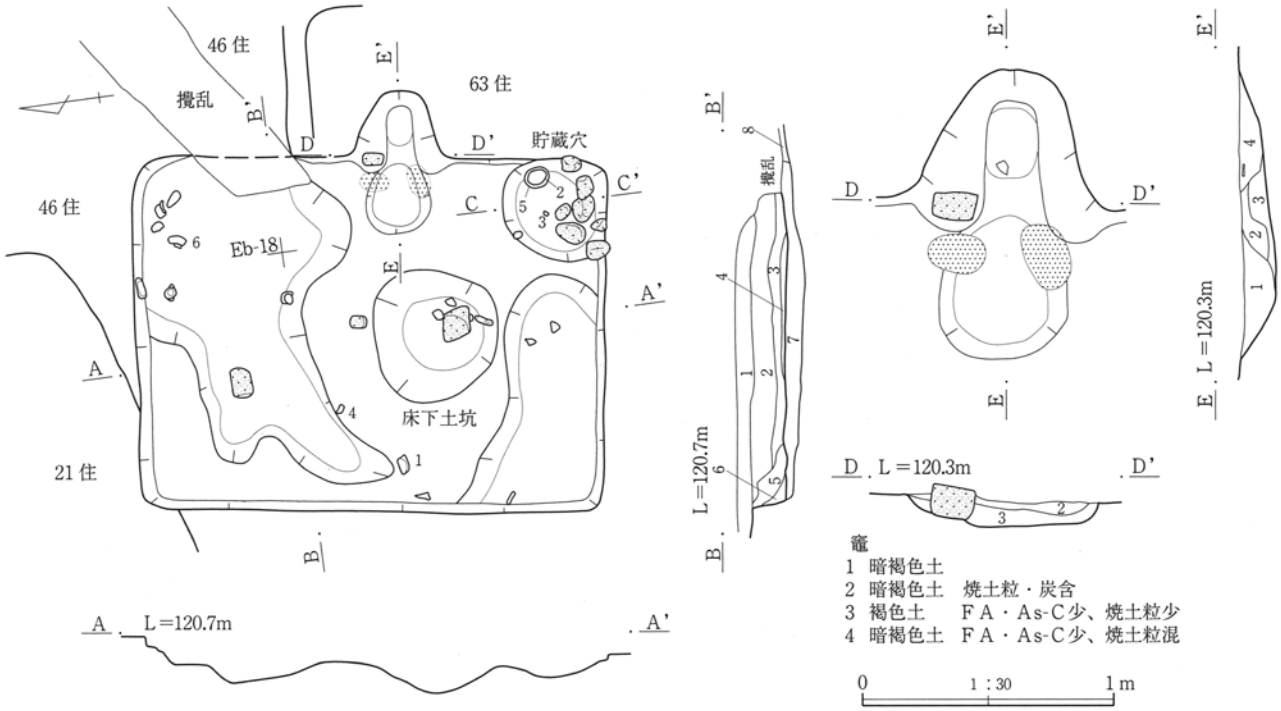


第70図　40号住居跡出土遺物（２）

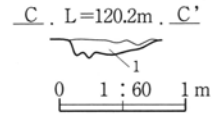
41号住居跡（第71・72図、ＰＬ13・36）

位置　Ｅａ～ｂ－17～18　**重複**　21・46・63号住居と重複している。本住居が新しい。　**形状**　長軸3.5m、短軸2.9mの隅丸方形を呈する。　**面積**　9.44㎡　**方位**　Ｎ－87°－Ｗ　**床面**　遺構確認面から32cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.2mを測る。　**壁溝・柱穴**　検出されなかった。

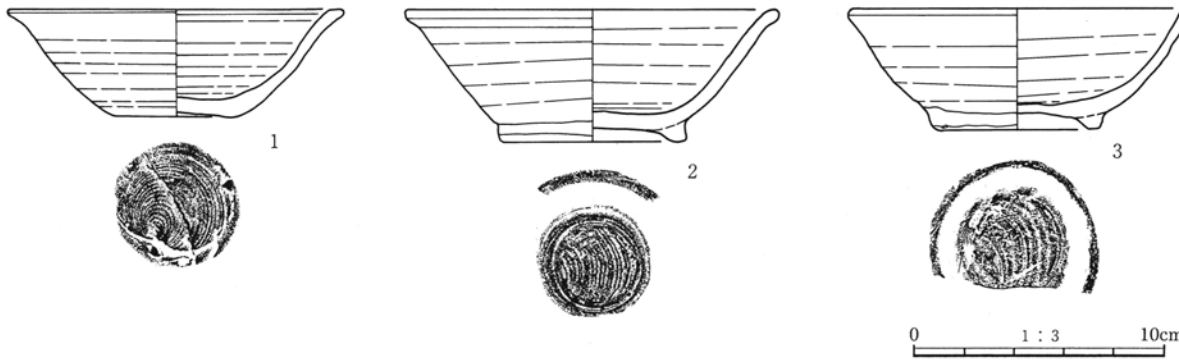
貯蔵穴　住居の南東に設置。径90cm・深さ18cmの楕円形を呈する。須恵器埦３点、凝灰岩７点が出土した。　**竈**　東壁面の中央部を掘り込んで造られている。左側の袖部からは袖石に用いられたと思われる凝灰岩が出土した。凝灰岩は被熱し赤化していた。両袖方向26cm、煙道方向65cmを測る。　**遺物**　須恵器坏・埦・羽釜、灰釉陶器長頸壺、瓦が出土している。他に、土師器片1.69kg、須恵器片1.71kgが出土。　**所見**　出土遺物から10世紀後半と考えられる。



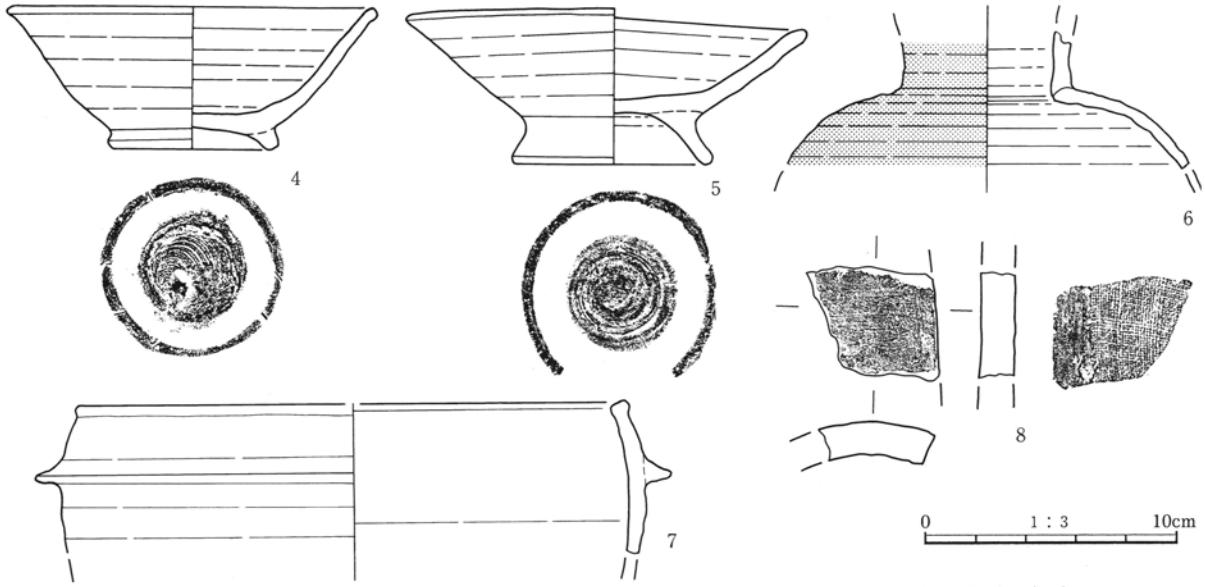
1 暗褐色土　ＦＡ・As-C多
2 暗褐色土　ＦＡ・As-C混、焼土粒含
3 暗褐色土　ＦＡ・As-C微、焼土粒含
4 暗褐色土　ＦＡ・As-C微、焼土粒・灰粒混
5 暗褐色土　ＦＡ・As-C少、明褐色土粒含
6 暗褐色土　ＦＡ・As-C少、明褐色土粒含
7 暗褐色土　ＦＡ・As-C少、明褐色土ブロック混
8 黒褐色土　ＦＡ・As-C混



貯蔵穴
1 暗褐色土　ＦＡ・As-C少、明褐色土ブロック含



第71図　41号住居跡・竈、出土遺物（１）

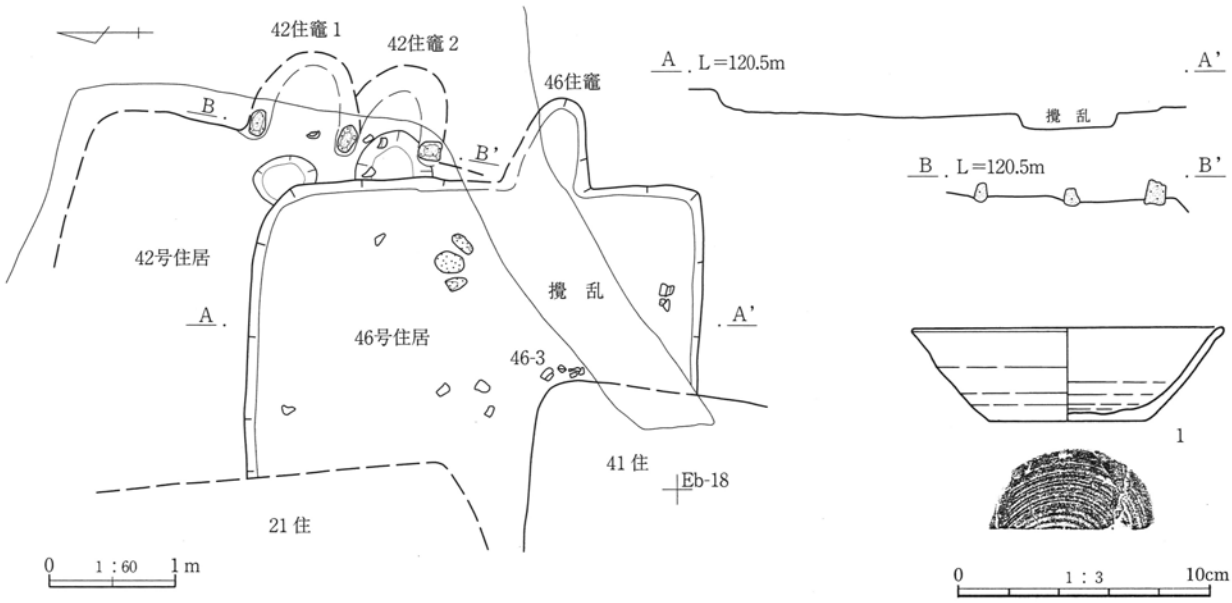


第72図　41号住居跡出土遺物（２）

42号住居跡（第73図、ＰＬ13・36）

位置　Ｅｂ－17　**重複**　21・46号住居と重複している。21・46号住居より本住居が新しい。　**形状**　長軸（2.4）ｍ、短軸（2.0）ｍを測る。　**面積**　（4.32）㎡　**方位**　Ｎ－70°－Ｗ　**床面**　床面の標高は平均120.35ｍを測る。　**壁溝・貯蔵穴・柱穴**　検出されなかった。　**竈**　東壁面を掘り込んで造られている。竈構築材採掘痕から掘り出されたと思われる３点の凝灰岩が一直線に並んで出土した。凝灰岩は竈の袖石で、焼土・灰の分布状況などから竈は新旧の２基あったと思われる。凝灰岩は被熱し赤化していた。竈１は両袖方向53cm、煙道方向（65）cm。竈２は両袖方向48cm、煙道方向（70）cmを測る。

遺物　須恵器坏が出土している。他に、土師器片1.08kg、須恵器片390ｇが出土。　**所見**　後世の撹乱のため、住居の全容は明らかにできなかった。出土遺物から９世紀前半と考えられる。



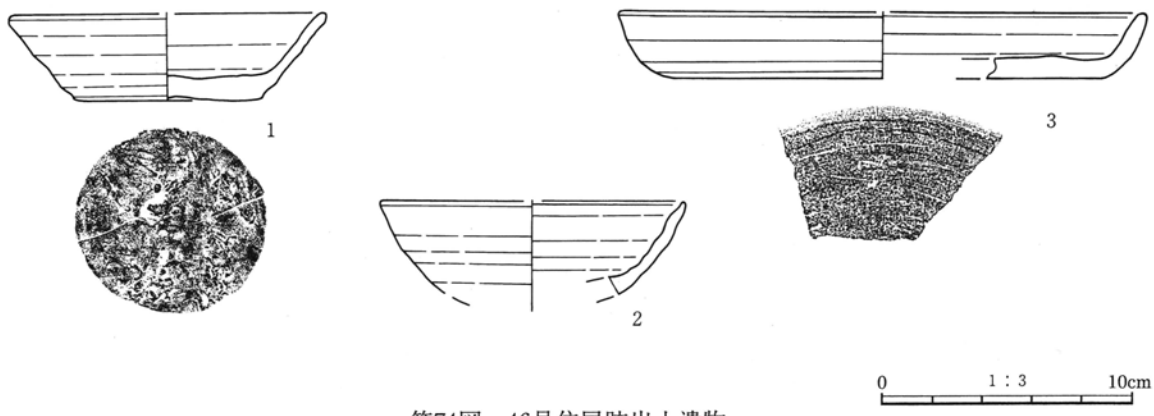
第73図　42・46号住居跡、42号住居跡出土遺物

46号住居跡（第73・74図、ＰＬ13・37）

位置　Ｅａ～ｂ－17　**重複**　21・41・42号住居と重複している。21号住居より本住居が新しく、41・42号住居より古い。　**形状**　長軸3.7ｍ、短軸（3.2）ｍを測る。　**面積**　（6.72）㎡　**方位**　Ｎ－88°－Ｗ　**床面**　床面の標高は平均120.14ｍを測る。

壁溝・貯蔵穴・柱穴　検出されなかった。　**竈**　東壁面の南寄りを掘り込んで造られている。攪乱で削平され残存悪い。袖部は石材ではなく、粘質土を張り付けて造られていたと思われる。支脚石等は検出されなかった。両袖方向42cm、煙道方向71cmを測る。　**遺物**　須恵器坏・埦・盤が出土している。他に、土師器片550ｇ、須恵器片280ｇが出土。

所見　攪乱や住居の重複が激しく、住居の全容は明らかにできなかった。出土遺物から８世紀前半と考えられる。

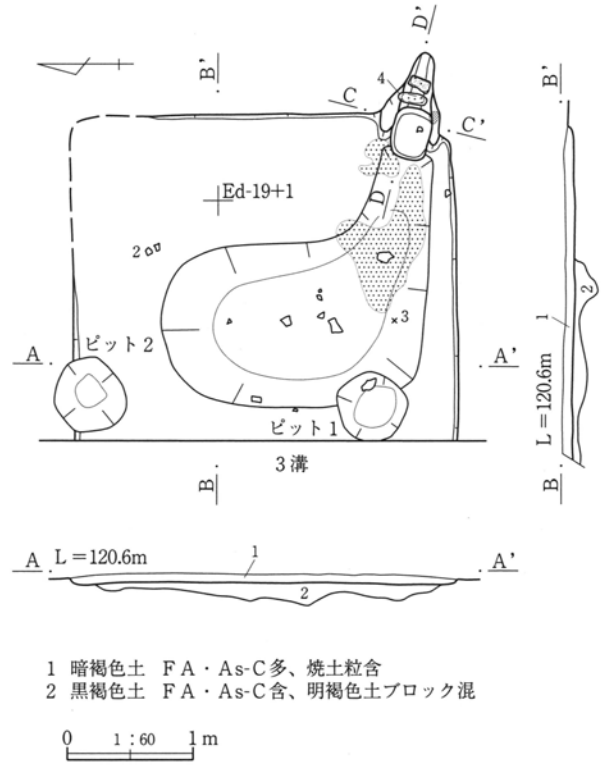


第74図　46号住居跡出土遺物

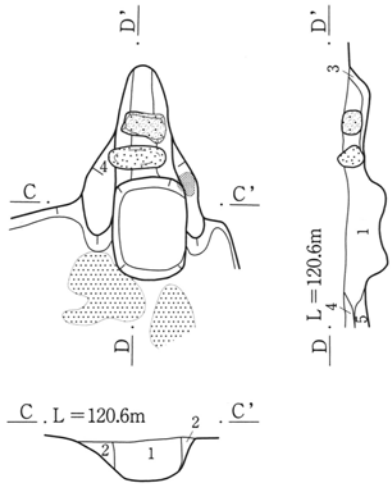
43号住居跡（第75・76図、ＰＬ14・36）

位置　Ｅｃ～ｄ－18～19　**重複**　３号溝と重複している。本住居が古い。　**形状**　長軸3.08ｍ、短軸（2.84）ｍの隅丸方形を呈する。　**面積**　（7.57）㎡　**方位**　Ｎ－88°－Ｗ　**床面**　遺構確認面から13cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.47ｍを測る。

壁溝・貯蔵穴　検出されなかった。　**柱穴**　柱穴と思われるピットは２基検出された。ピット１は、径56cm・深さ14cm。ピット２は、径60cm・深さ32cmを測る。　**竈**　東壁面の南隅を掘り込んで造られている。煙道部には構築材に用いられたと思われる凝灰岩と川原石（支脚に使用されたと思われる）が出土した。凝灰岩は被熱し赤化していた。両袖方向27cm、煙道方向74cmを測る。　**遺物**　須恵器坏・羽釜、土錘が出土している。他に、土師器片1.12kg、須恵器片690ｇが出土。　**所見**　出土遺物から10世紀と考えられる。

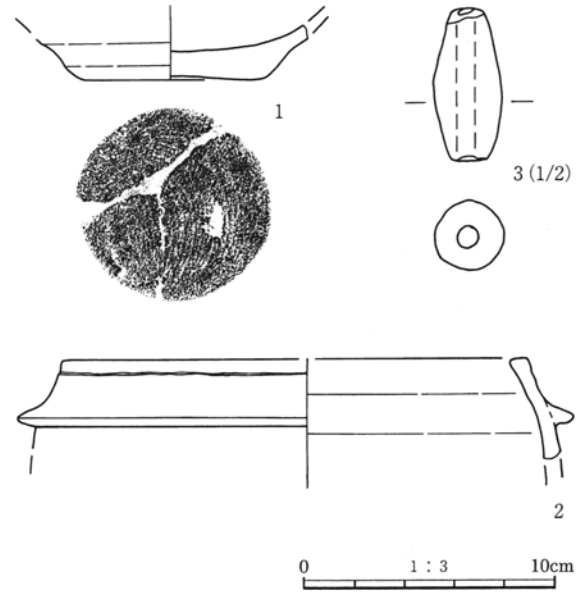


第75図　43号住居跡



竈
1 暗褐色土　焼土粒含、炭化粒少、明褐色土粒混
2 暗褐色土　ＦＡ・As-C含、明褐色土ブロック多、焼土粒少
3 暗褐色土　ＦＡ・As-C含、焼土ブロック混
4 黒褐色土　ＦＡ・As-C含、焼土粒含、灰混
5 黒褐色土　ＦＡ・As-C少、焼土粒混、灰粒含

0　1：30　1m



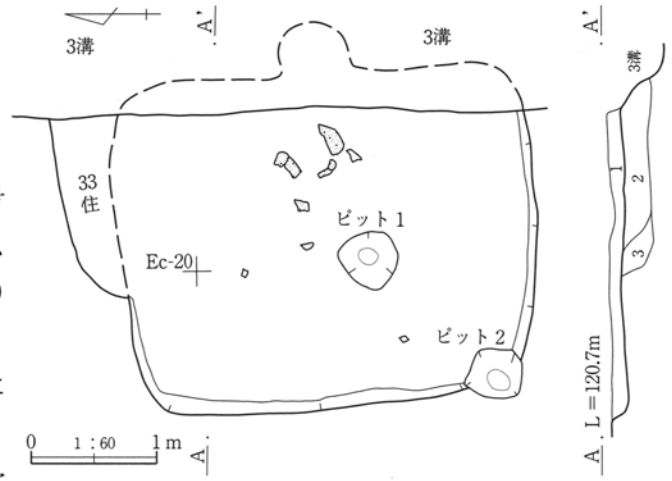
第76図　43号住居跡竈、出土遺物

44号住居跡（第77図、ＰＬ14・36）

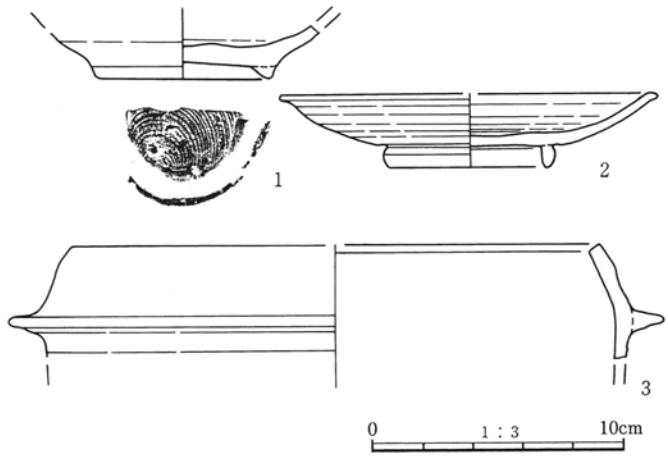
位置　Ｅｂ～ｃ－19～20　**重複**　33号住居、３号溝と重複している。本住居が33号住居より新しく、３号溝より古い。　**形状**　長軸3.2m、短軸（1.6）mを測る。　**面積**　（7.81）m²　**方位**　Ｎ－90°

床面　遺構確認面から８cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.50mを測る。

壁溝・貯蔵穴　検出されなかった。　**柱穴**　柱穴と思われるピットは２基検出された。ピット１は、径44cm・深さ31cm。ピット２は、径46cm・深さ12cmを測る。　**竈**　東壁面を掘り込んで造られていたと思われるが、３号溝によって削平され、検出されなかった。構築材に用いられたと思われる凝灰岩が散乱していた。凝灰岩は被熱し赤化していた。　**遺物**　須恵器坏・羽釜、灰釉陶器皿が出土している。他に、土師器片10ｇ、須恵器片10ｇが出土。　**所見**　出土遺物から10世紀前半と考えられる。



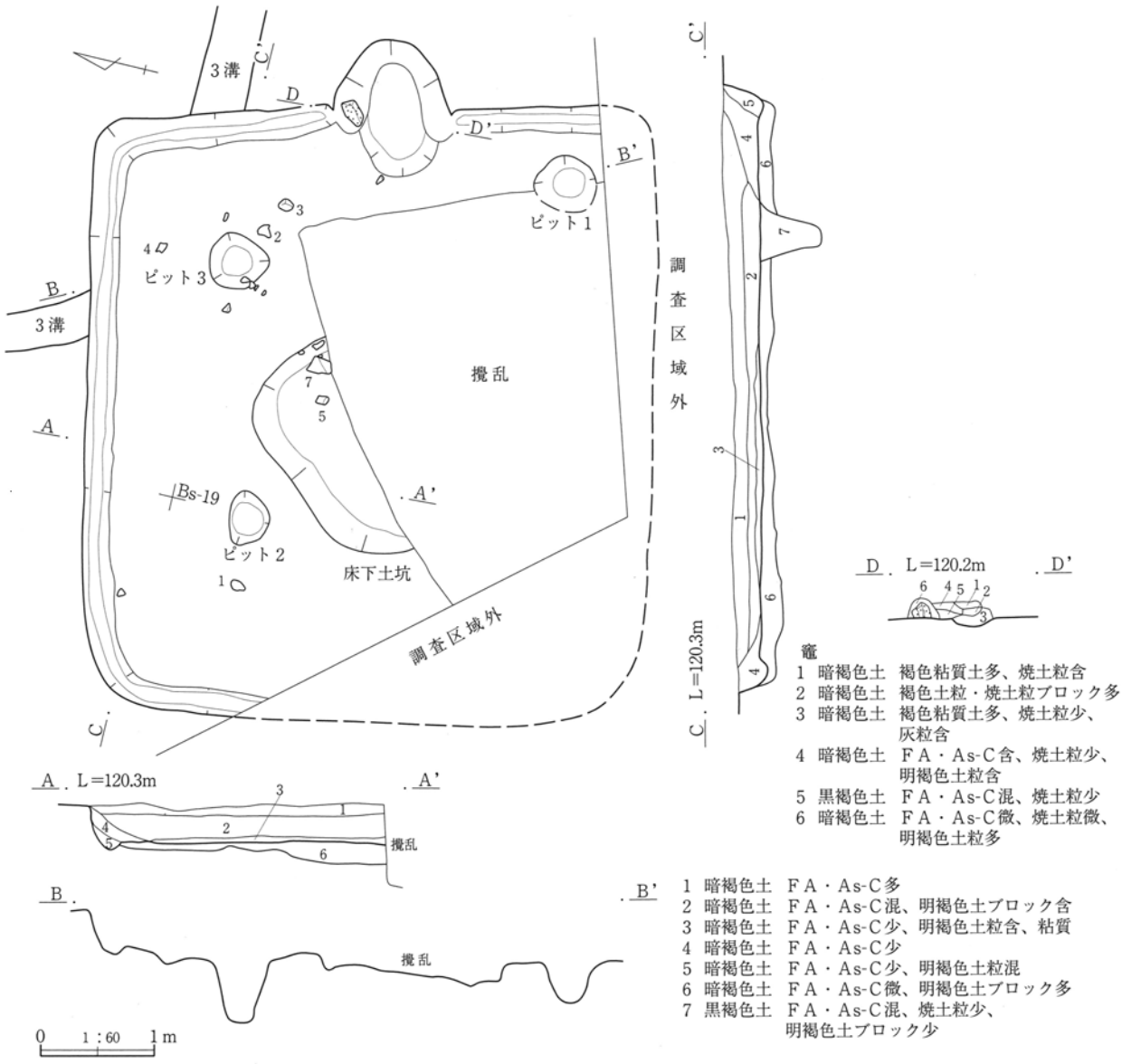
1 暗褐色土　ＦＡ・As-C多
2 暗褐色土　ＦＡ・As-C混、焼土粒少
3 暗褐色土　ＦＡ・As-C混、明褐色土ブロック混



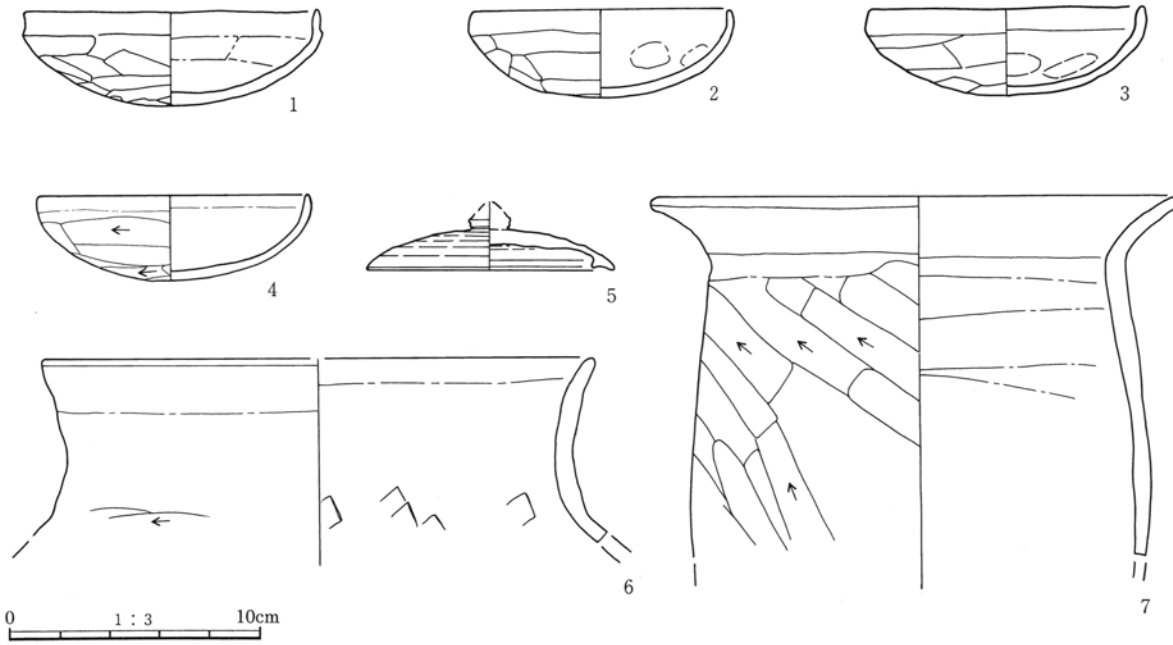
第77図　44号住居跡、出土遺物

45号住居跡（第78・79図、ＰＬ14・37）

位置　Ｂｒ～ｓ－18～19　**重複**　３号溝と重複している。本住居が古い。　**形状**　長軸5.3ｍ、短軸(3.9) ｍを測る。　**面積**　(13.16) ㎡　**方位**　Ｎ－75°－Ｅ　**床面**　遺構確認面から25cm掘り込んで、床面になる。標高は平均119.8ｍを測る。床面は貼床構造で、明褐色土ブロックを含む黒褐色粘質土で固く踏み固められていた。　**壁溝**　幅約26cm、深さ約６cmの壁溝が一周している。　**貯蔵穴**　検出されなかった。　**柱穴**　柱穴と思われるピットは３基検出された。ピット１は、径53cm・深さ20cm。ピット２は、径49cm・深さ10cm。ピット３は、径52cm・深さ30cmを測る。　**竈**　東壁面の中央部を掘り込んで造られている。左側の袖部からは袖石に用いられたと思われる石材が出土した。両袖方向44cm、煙道方向82cmを測る。　**遺物**　土師器坏・甕、須恵器蓋が出土している。他に、土師器片1.36kg、須恵器片70ｇが出土。　**所見**　住居の北西部分が攪乱や調査区域外のため、全容は明らかにできなかった。出土遺物から７世紀後半と考えられる。



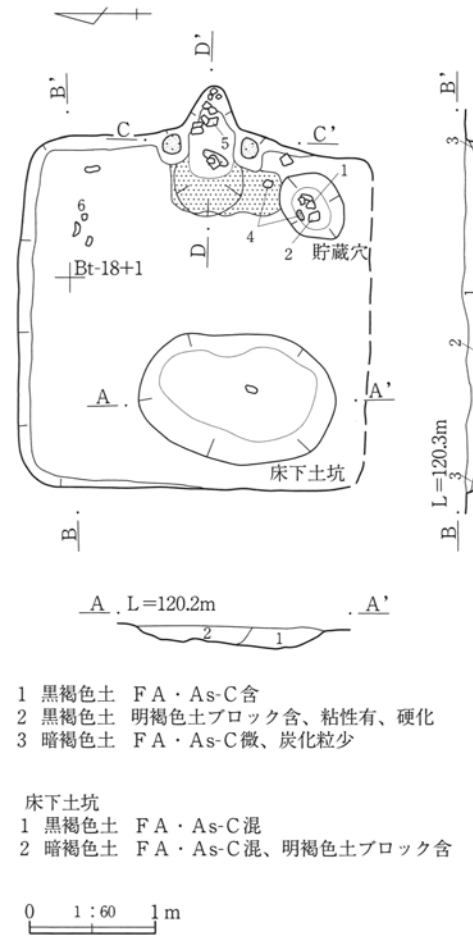
第78図　45号住居跡



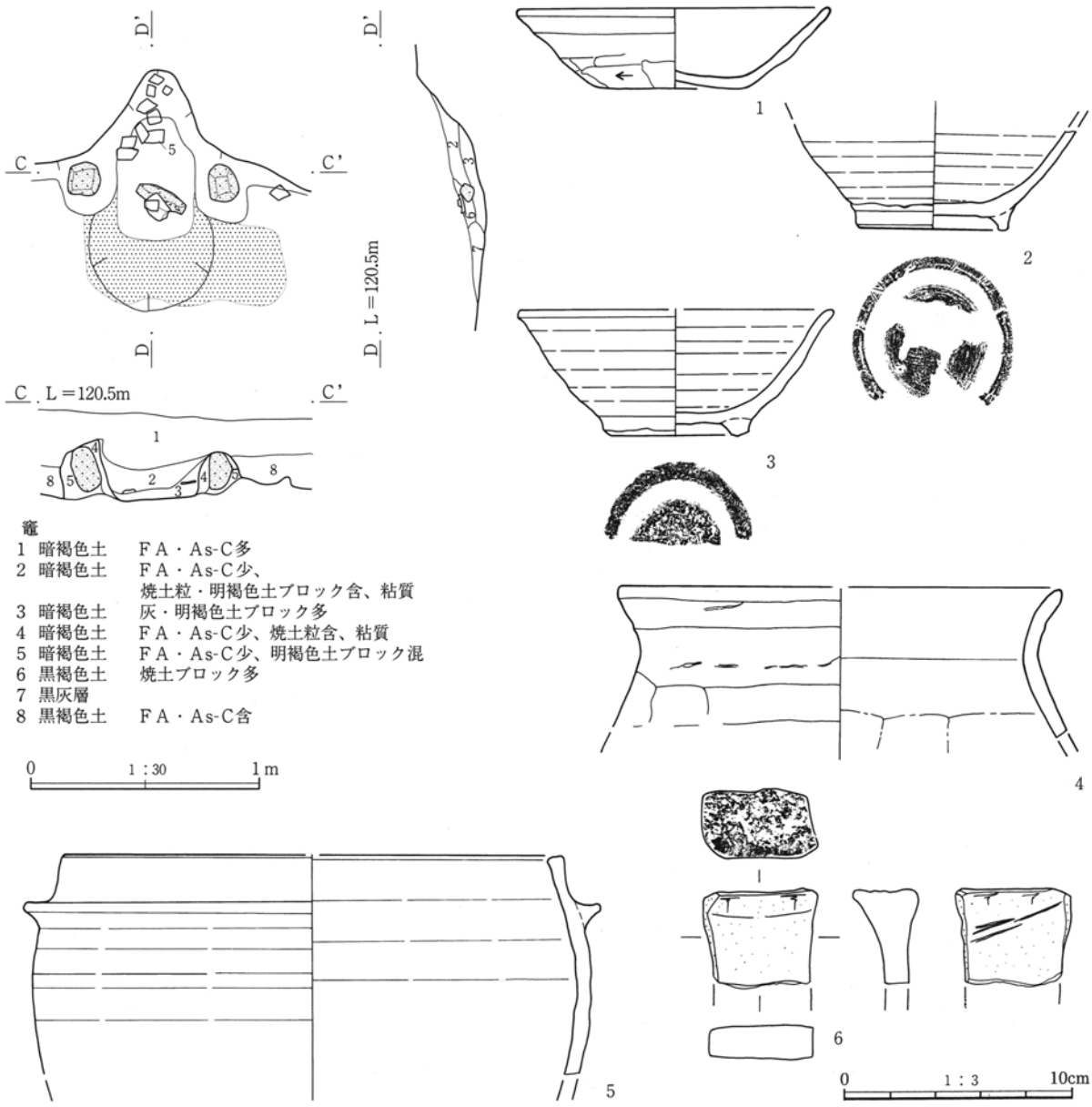
第79図　45号住居跡出土遺物

47号住居跡（第80・81図、ＰＬ14・37）

位置　Ｂｓ～ｔ－17～18　**重複**　なし。　**形状**　長軸2.8m、短軸2.7mの隅丸方形を呈す。　**面積**　6.82㎡　**方位**　Ｎ－85°－Ｗ　**床面**　遺構確認面から18cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.12mを測る。床面は一部貼床構造で、明褐色ブロックを含む暗褐色粘質土で固く踏み固められていた。**壁溝・柱穴**　検出されなかった。　**貯蔵穴**　住居の南東に設置。径64cm・深さ22cmの楕円形を呈する。須恵器坏・埦、土師器甕が出土した。　**竈**　東壁面の中央部を掘り込んで造られている。左右の袖部・燃焼部からは、袖石・支脚に用いられたと思われる凝灰岩が出土した。凝灰岩は被熱し赤化していた。また、燃焼部・煙道部内からは羽釜などの多量の土器片が出土。両袖方向34cm、煙道方向64cmを測る。**遺物**　土師器甕、須恵器坏・埦・羽釜、砥石が出土している。他に、土師器片2.34kg、須恵器片1.55kgが出土。　**所見**　出土遺物から10世紀前半と考えられる。



第80図　47号住居跡

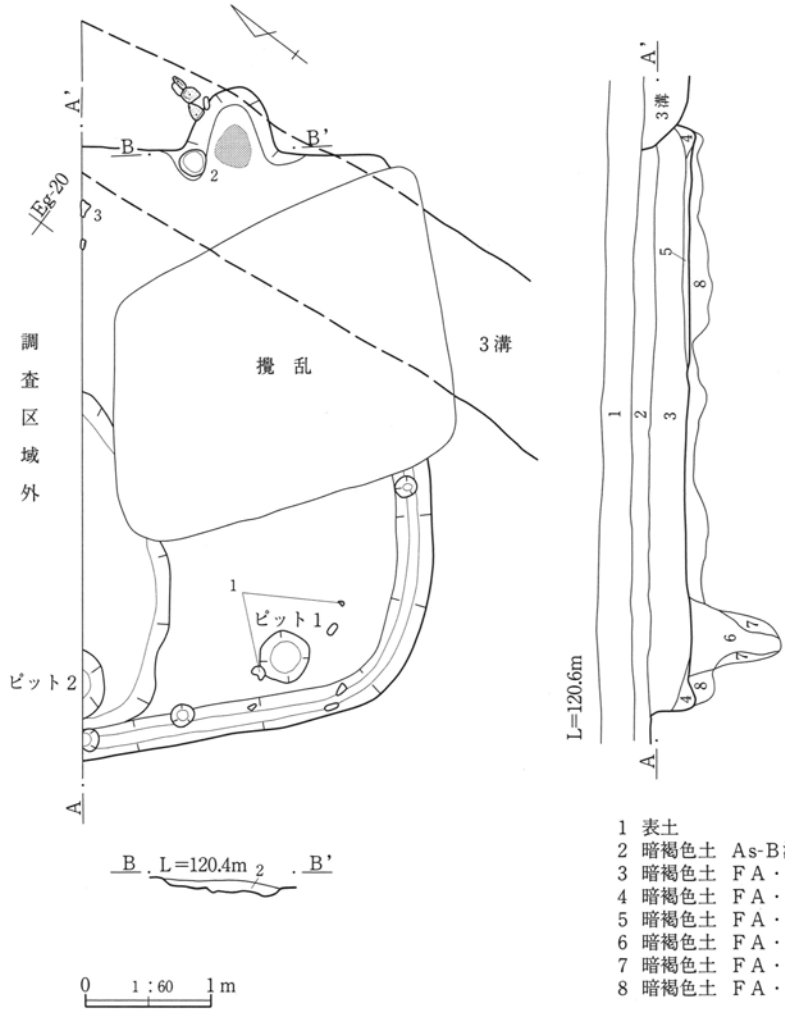


第81図　47号住居跡竈、出土遺物

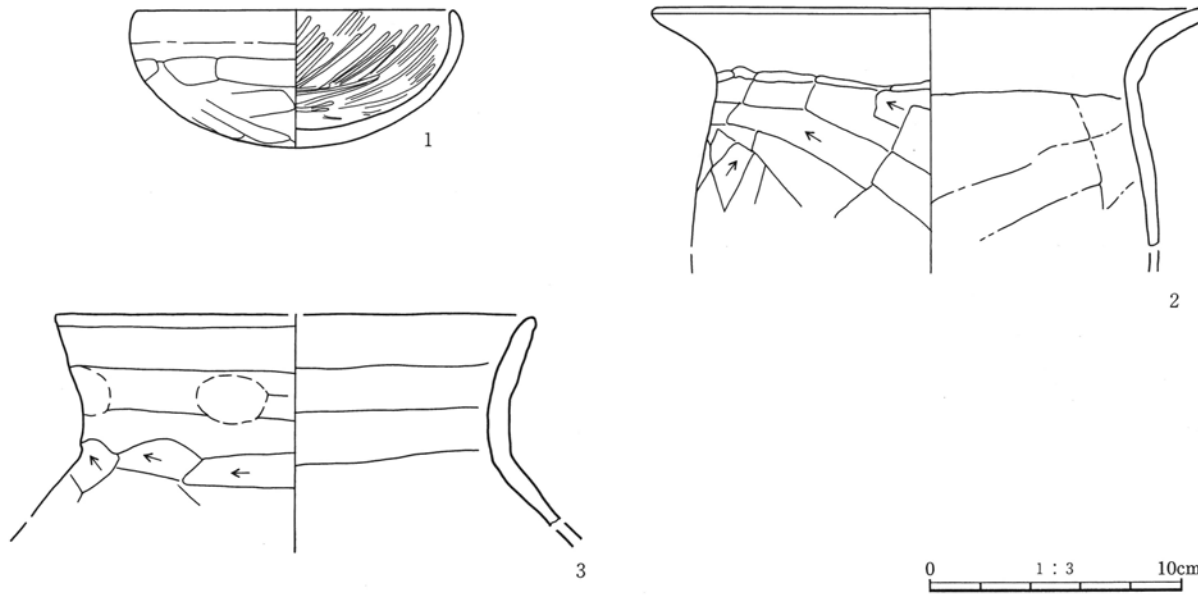
48号住居跡（第82図、ＰＬ14・37）

位置　Ｅｆ－19～20　**重複**　３号溝と重複している。本住居が古い。　**形状**　長軸（4.7）ｍ、短軸（2.6）ｍを測る。　**面積**　（6.34）㎡　**方位**　Ｎ－35°－Ｅ　**床面**　遺構確認面から13cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.34ｍを測る。床面は一部貼床構造で、明褐色土ブロックを含む暗褐色粘質土で固く踏み固められていた。　**壁溝**　幅約26cm、深さ約６cmの壁溝が巡る。　**貯蔵穴**　検出されなかった。　**柱穴**　柱穴と思われるピットは２基検出された。ピット１は、径39cm・深さ26cm。ピット２は、径44cm・深さ46cmを測る。　**竈**　東壁面を掘り込んで造られている。燃焼部には焼土・灰が分布していた。左側の袖部からは構築材に転用されたと思われる、土師器甕が出土した。また、煙道部の北から礫５点が出土した。礫は被熱し赤化していたので、竈の構築材として用いられたと考えられる。両袖方向44cm、煙道方向72cmを測る。　**遺物**　土師器坏・甕が出土している。他に、土師器片10ｇが

出土。　**所見**　攪乱や調査区域外のため、住居の全容は明らかにできなかった。出土遺物から６世紀前半と考えられる。



1　表土
2　暗褐色土　As-B混
3　暗褐色土　ＦＡ・As-C混、焼土粒含
4　暗褐色土　ＦＡ・As-C含、焼土粒・灰白色シルトブロック含
5　暗褐色土　ＦＡ・As-C混、明褐色土ブロック含、粘性有
6　暗褐色土　ＦＡ・As-C少、明褐色土粒含
7　暗褐色土　ＦＡ・As-C微、明褐色土ブロック多
8　暗褐色土　ＦＡ・As-C少、明褐色土ブロック混

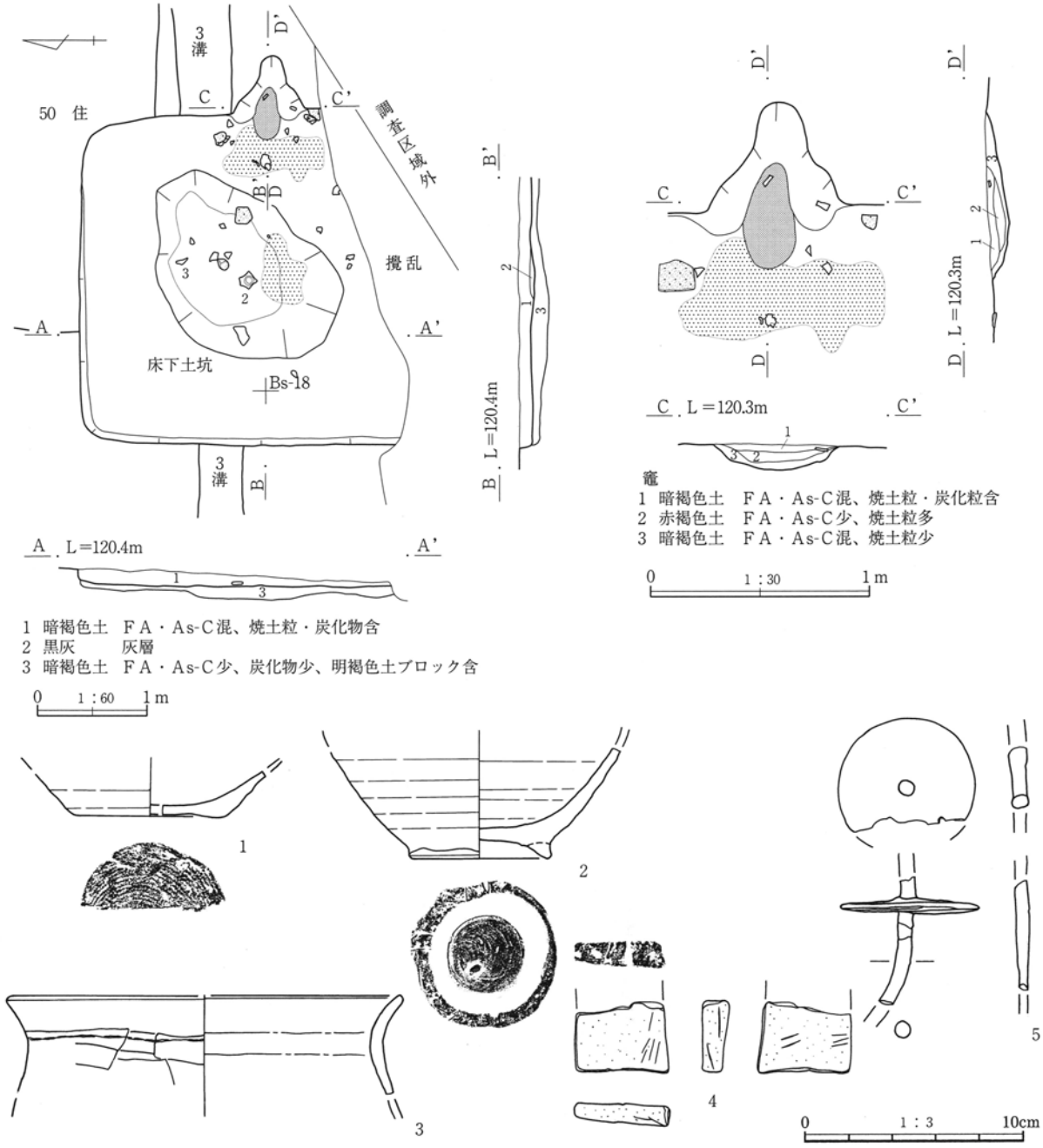


第82図　48号住居跡、出土遺物

49号住居跡（第83図、ＰＬ14・37）

位置　Ｂｒ～ｓ－17～18　**重複**　３号溝、50号住居と重複している。本住居が３号溝より古く、50号住居より新しい。　**形状**　長軸2.8m、短軸（2.6）ｍの隅丸方形を呈する。　**面積**　（7.50）㎡　**方位**　Ｎ－90°　**床面**　遺構確認面から23cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.17ｍを測る。

壁溝・貯蔵穴・柱穴　検出されなかった。　**竈**　東壁面を掘り込んで造られている。左右の袖部の近くからは構築材に使用された凝灰岩が出土した。凝灰岩は被熱し赤化していた。両袖方向24cm、煙道方向59cmを測る。　**遺物**　土師器甕、須恵器坏・埦、鉄製紡錘車、砥石が出土している。他に、土師器片1.03kg、須恵器片1.00kgが出土。　**所見**　住居の南側は、攪乱や調査区域外のため、調査できなかった。出土遺物から９世紀後半と考えられる。

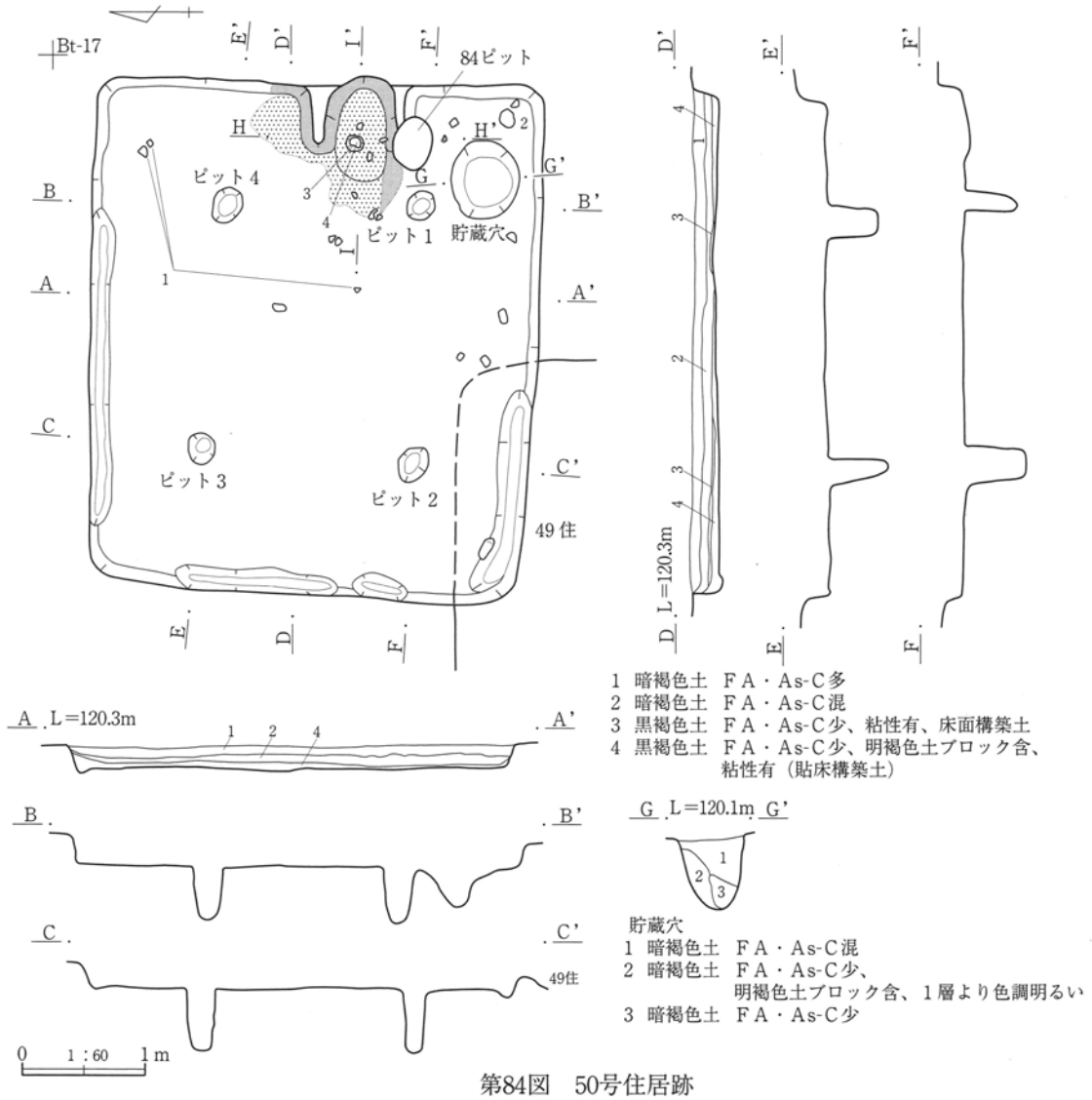


第83図　49号住居跡・竈、出土遺物

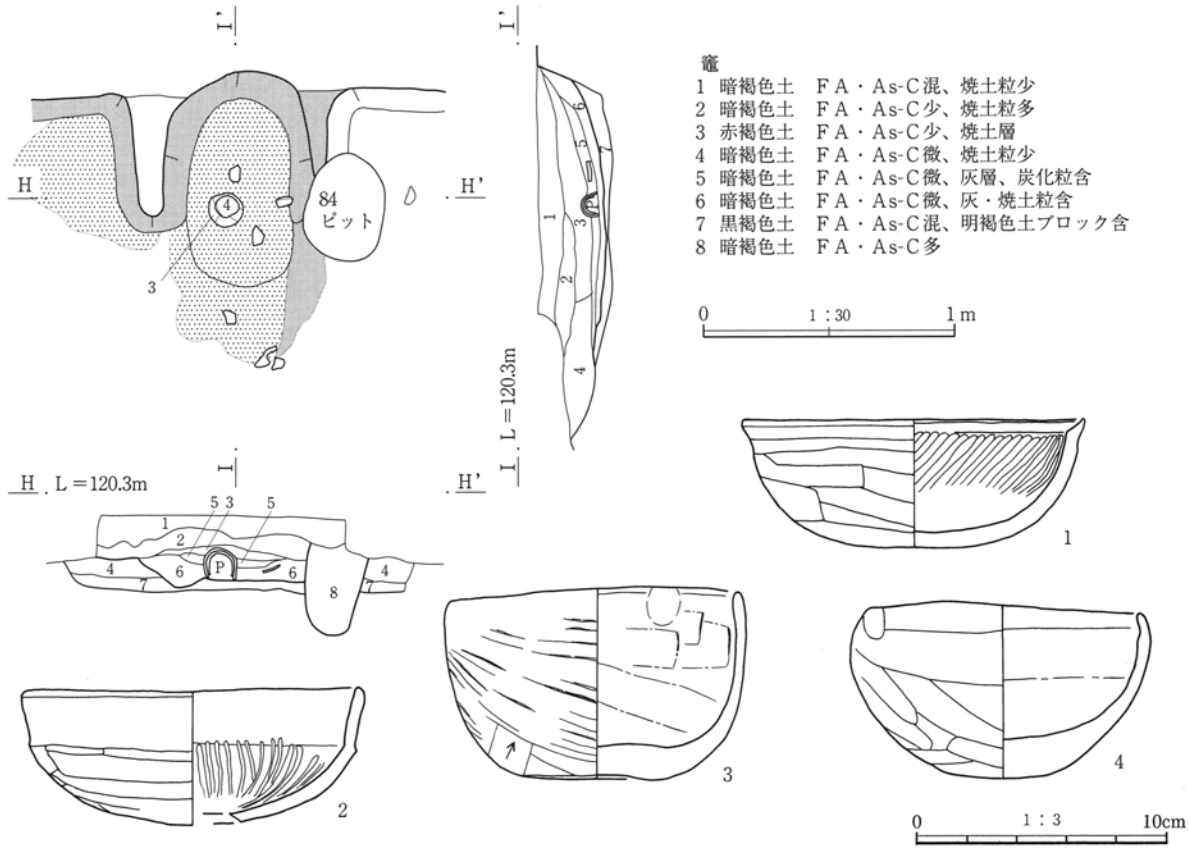
50号住居跡（第84・85図、ＰＬ15・37）

位置　Ｂｓ－17　**重複**　49号住居、84号ピットと重複している。本住居が古い。　**形状**　長軸4.2ｍ、短軸3.7ｍの隅丸方形を呈す。　**面積**　13.85㎡

方位　Ｎ－89°－Ｗ　**床面**　遺構確認面から16cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.01ｍを測る。床面は貼床構造で、明褐色ブロックを含む黒褐色粘質土で固く踏み固められていた。　**壁溝**　幅約20cm、深さ約６cm、全長約５ｍの壁溝が南西側、西側、北側の４カ所検出された。　**貯蔵穴**　住居の南東に設置。径64cm・深さ58cmの楕円形を呈する。**柱穴**　柱穴と思われるピットは４基検出された。ピット１は、径25cm・深さ45cm。ピット２は、径26cm・深さ53cm。ピット３は、径32cm・深さ46cm。ピット４は、径32cm・深さ43cmを測る。**竈**　東壁面の中央部を掘り込んで造られている。燃焼部からは、支脚に用いられたと思われる土師器鉢が重なった状態で２点出土した。土器は一部被熱し赤化していた。袖部は石材ではなく、粘質土を張り付けて造られていたと思われる。また、右袖部は84号ピットで壊されていた。両袖方向40cm、煙道方向60cmを測る。　**遺物**　土師器坏・鉢が出土している。他に、土師器片2.49kg、須恵器片100ｇが出土。　**所見**　出土遺物から６世紀前半と考えられる。



第84図　50号住居跡



第85図　50住居跡竈、出土遺物

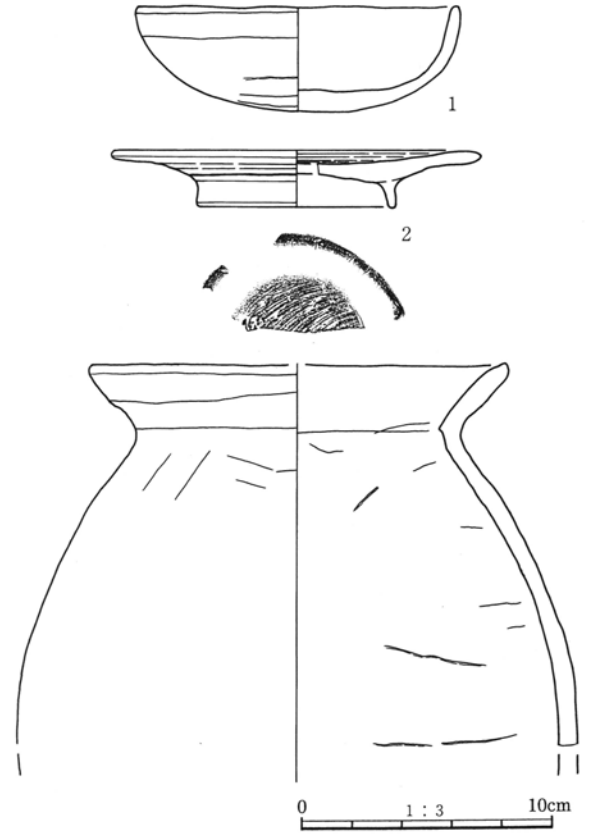
51号住居跡（第86・87図、ＰＬ15・37）

位置　Ｂｔ・Ｅａ－16～17　**重複**　53号住居、79号ピットと重複している。本住居が古い。　**形状**　長軸5.4m、短軸（4.1）mの隅丸方形を呈する。

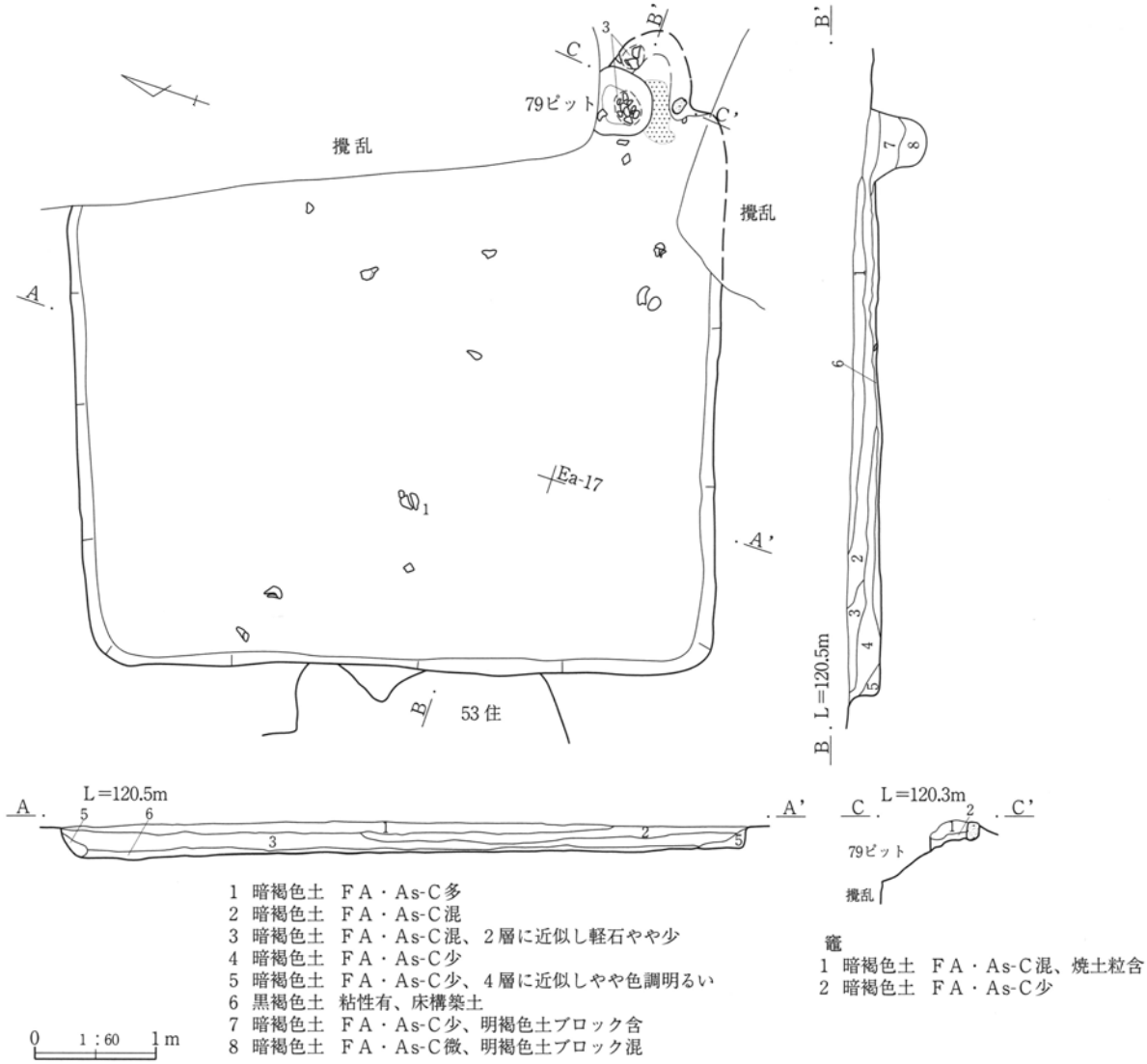
面積　(20.58) m²　**方位**　Ｎ－75°－Ｅ　**床面**　遺構確認面から22cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.12mを測る。床面は貼床構造で、明褐色土ブロックを含む黒褐色粘質土で固く踏み固められていた。　**壁溝・貯蔵穴・柱穴**　検出されなかった。

竈　東壁面の南隅を掘り込んで造られている。右袖部には構築材に用いられたと思われる凝灰岩が出土した。凝灰岩は被熱し赤化していた。左袖部は79号ピットによって壊されていた。両袖方向32cm、煙道方向74cmを測る。　**遺物**　土師器坏・甕、須恵器皿が出土している。須恵器皿（９世紀）は混入遺物。他に、土師器片3.05kg、須恵器片450ｇが出土。

所見　出土遺物から７世紀後半と考えられる。



第86図　51号住居跡出土遺物

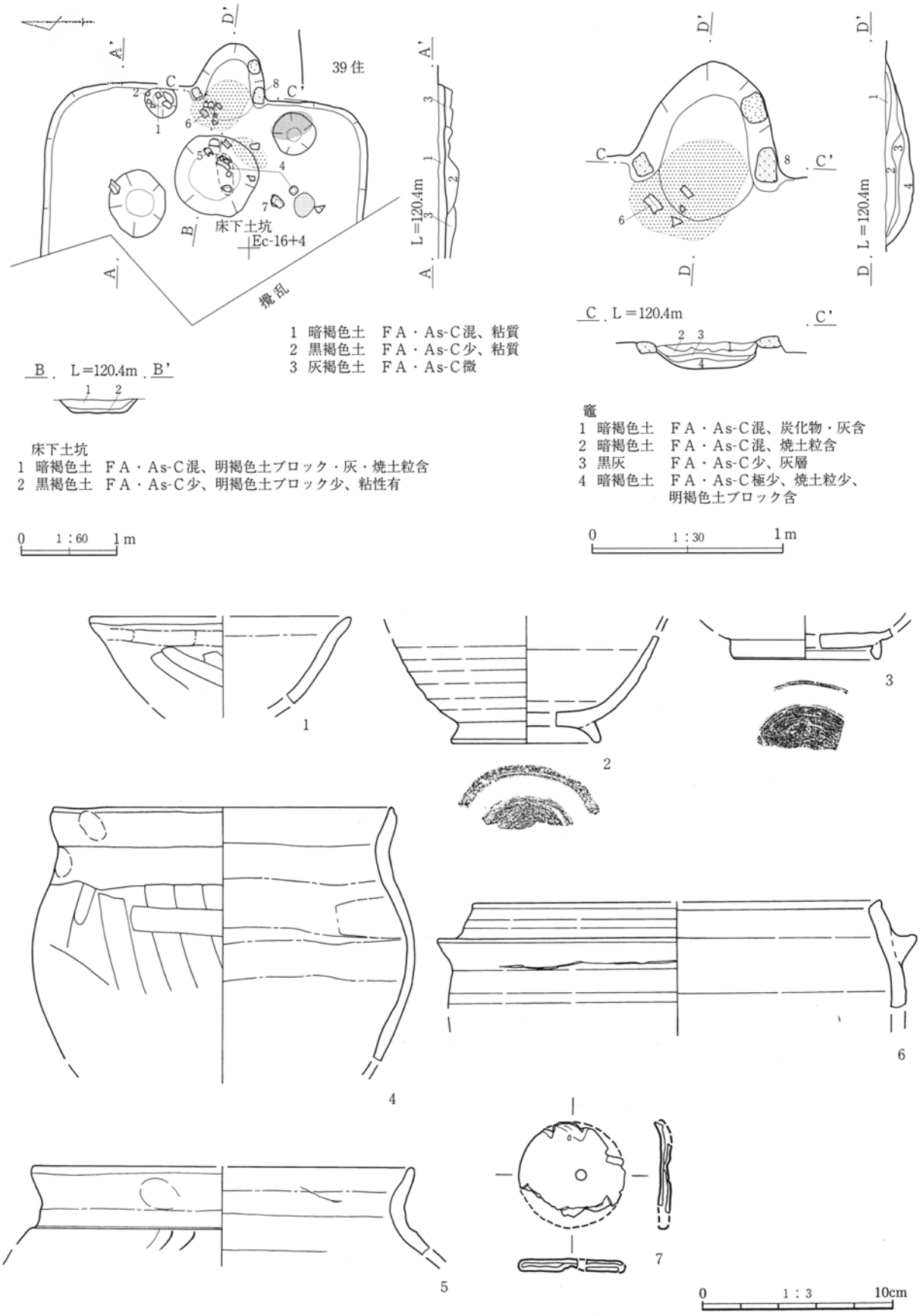


第87図　51号住居跡

52号住居跡（第88図、ＰＬ15・37・38）

位置　Ｅｂ～ｃ－16　**重複**　39号住居と重複している。本住居が新しい。　**形状**　長軸3.2ｍ、短軸（1.8）ｍを測る。　**面積**　（5.79）㎡　**方位**　Ｎ－81°－Ｗ　**床面**　遺構確認面から11cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.29ｍを測る。中央部から、径96cm・深さ18cmの床下土坑を検出した。

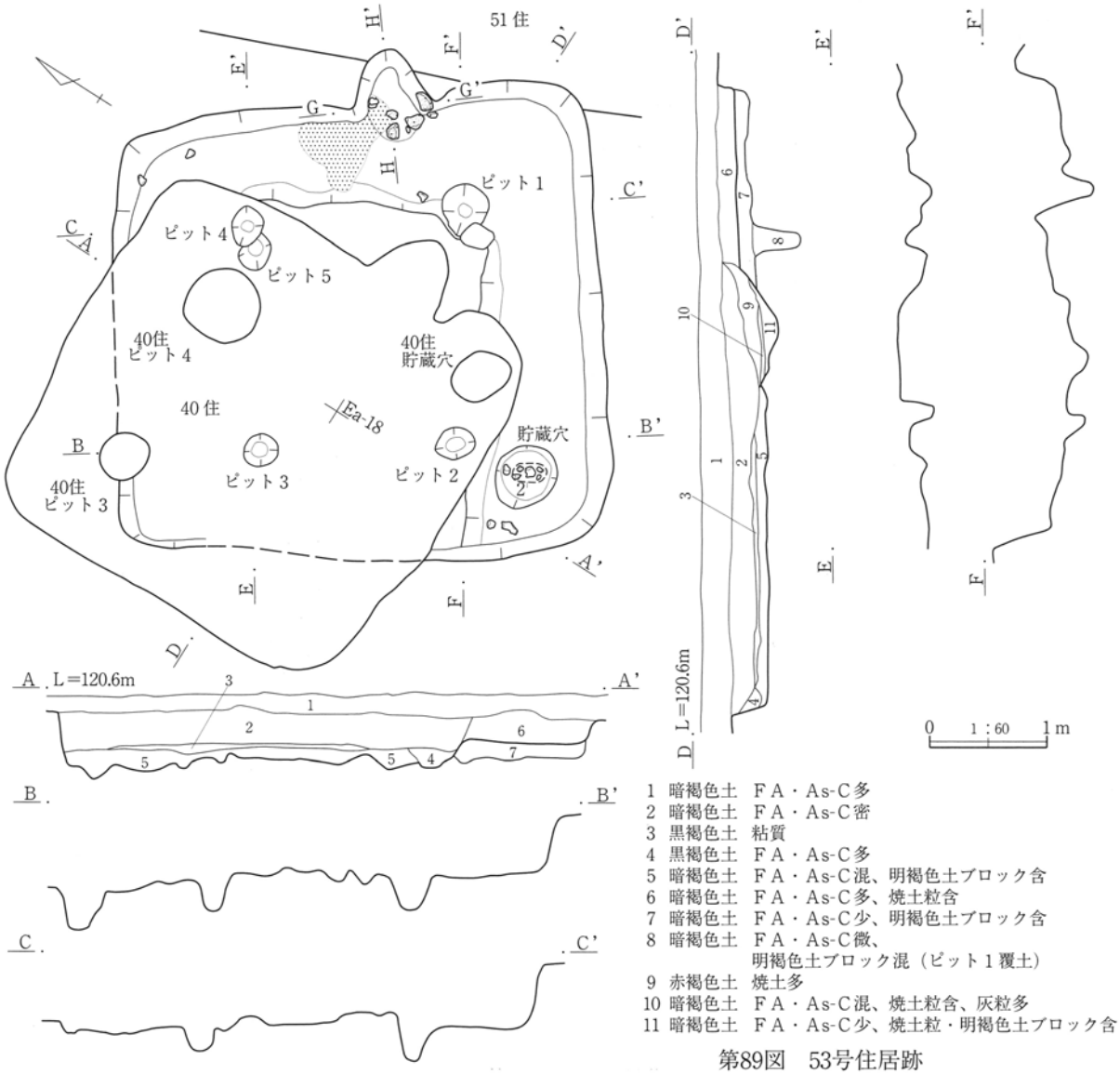
壁溝・貯蔵穴・柱穴　検出されなかった。　**竈**　東壁面の中央部を掘り込んで造られている。左右の袖部からは、構築材に使用された凝灰岩が出土した。凝灰岩は被熱し赤化していた。燃焼部からは羽釜などの土器片が出土した。両袖方向44cm、煙道方向63cmを測る。　**遺物**　土師器坏・甕、須恵器埦・羽釜、灰釉陶器皿が出土している。他に、土師器片750ｇ、須恵器片500ｇが出土。　**所見**　住居の西側が撹乱のため、全容は明らかにできなかった。出土遺物から10世紀前半と考えられる。



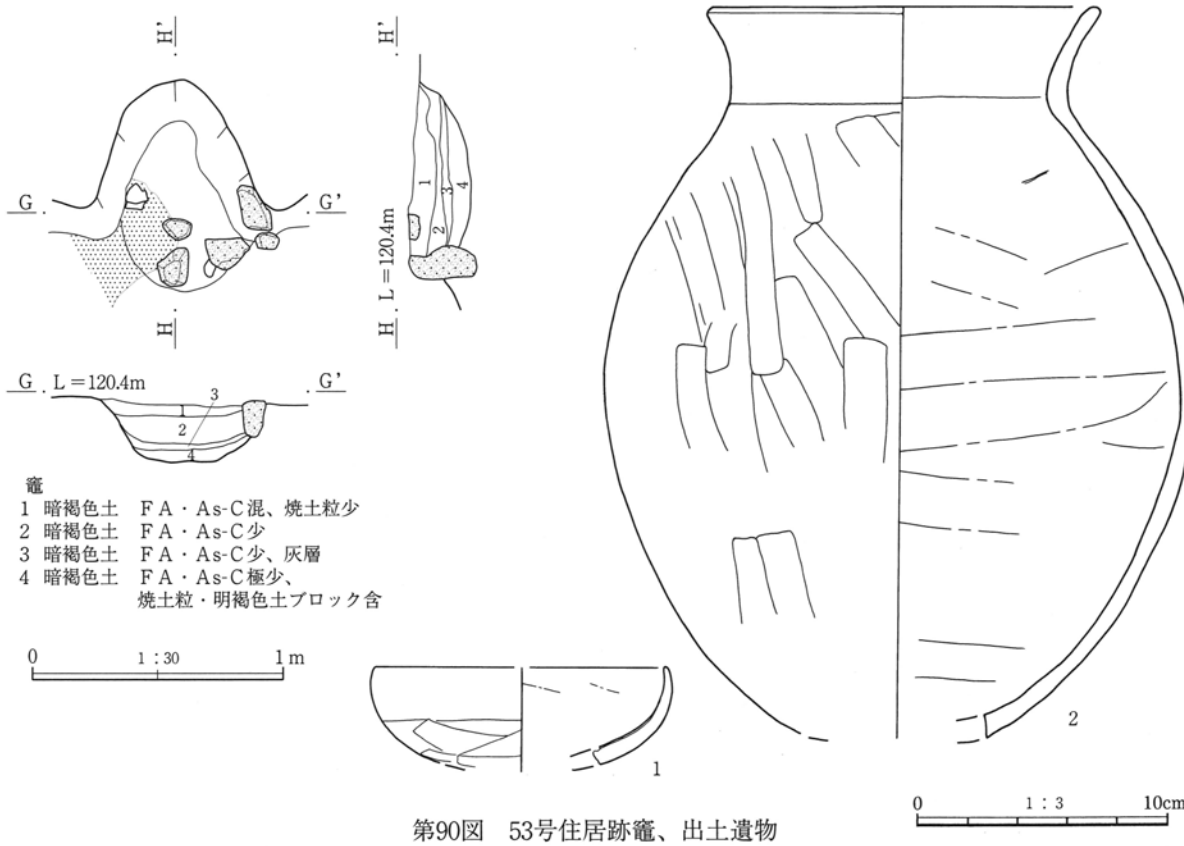
第88図　52号住居跡・竈、出土遺物

53号住居跡（第89・90図、ＰＬ16・38）

位置　Ｂｔ・Ｅａ－17～18　**重複**　40・51号住居と重複している。本住居が古い。　**形状**　長軸4.4m、短軸4.0mの隅丸方形を呈する。　**面積**　(15.00)㎡　**方位**　Ｎ－55°－Ｅ　**床面**　遺構確認面から31cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.05mを測る。　**壁溝**　検出されなかった。　**貯蔵穴**　住居の南隅に設置。径60cm・深さ40cmの楕円形を呈する。貯蔵穴内から土師器甕が出土。　**柱穴**　柱穴と思われるピットは５基検出された。ピット１は、径47cm・深さ28cm。ピット２は、径34cm・深さ18cm。ピット３は、径36cm・深さ20cm。ピット４は、径31cm・深さ23cm。ピット５は、径33cm・深さ12cmを測る。　**竈**　北東壁面の中央部を掘り込んで造られている。袖部・燃焼部から、被熱し赤化した凝灰岩が５点出土した。右袖部・支脚には、凝灰岩が構築材に用いられたと思われる。凝灰岩は被熱し赤化していた。両袖方向39cm、煙道方向60cmを測る。　**遺物**　土師器坏・甕が出土している。他に、土師器片1.57kg、須恵器片150ｇが出土。　**所見**　40号住居（平安時代）に半分以上を壊されており、全容は明らかにできなかった。出土遺物から７世紀前半と考えられる。



第89図　53号住居跡



第90図　53号住居跡竈、出土遺物

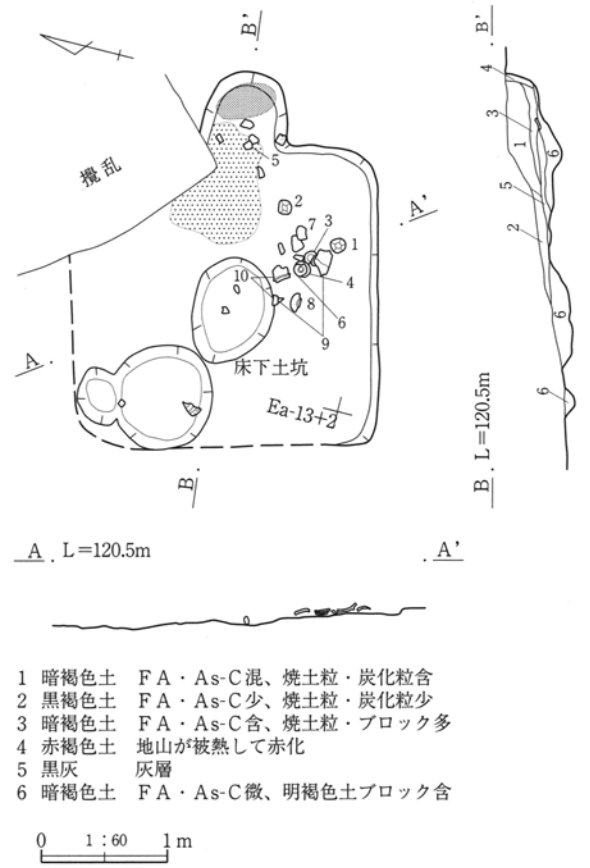
54号住居跡（第91・92図、ＰＬ16・38）

位置　Ｂｔ・Ｅａ－12～13　**重複**　なし。

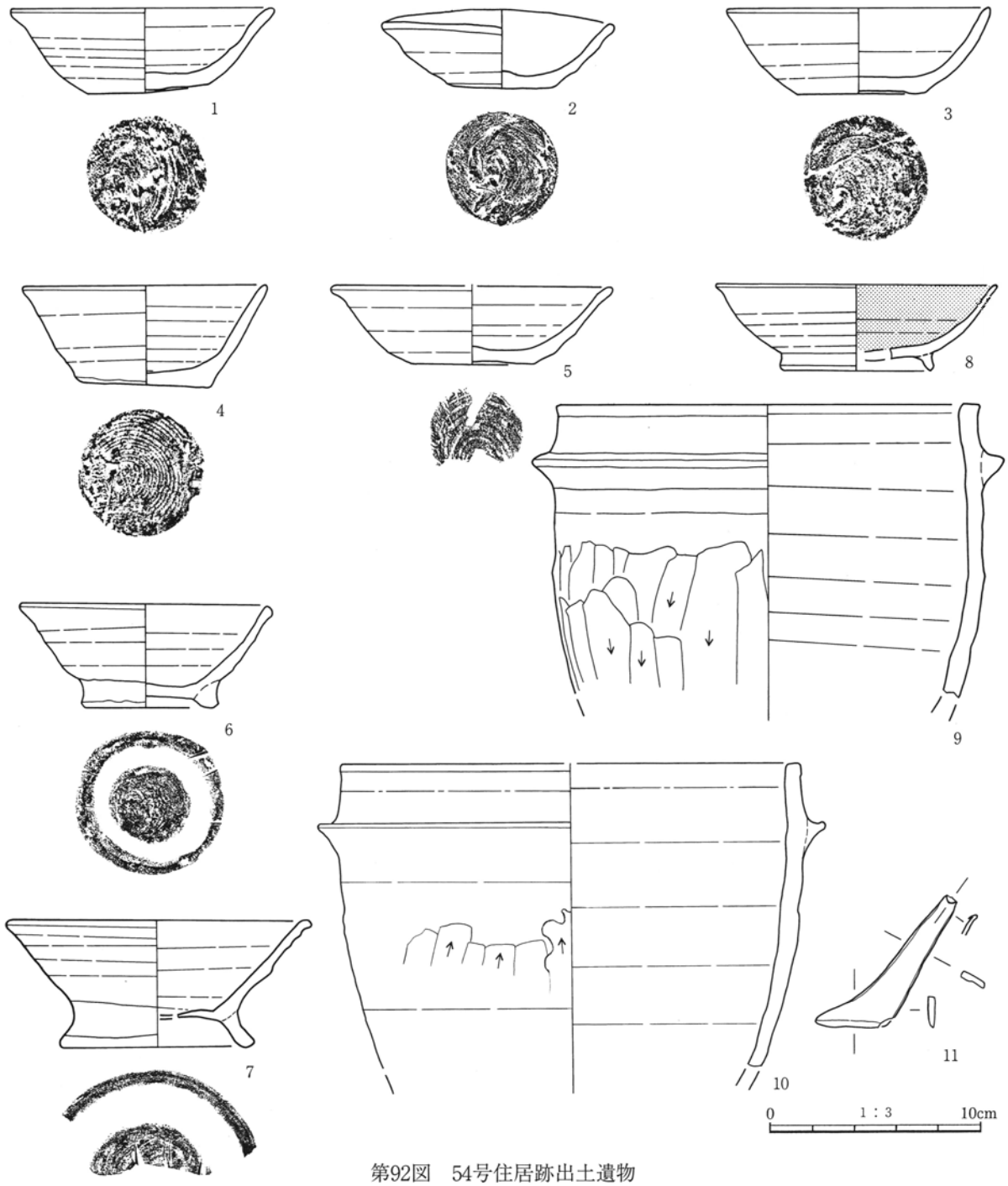
形状　長軸2.3m、短軸(2.3)mの隅丸方形を呈する。

面積　(4.98)㎡　**方位**　Ｎ－87°－Ｅ　**床面**　攪乱のため削平されて、床面は南側半分のみで検出された。遺構確認面から19cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.13mを測る。中央部から、長径98cm・短径63cm・深さ18cmの床下土坑を検出した。　**壁溝・貯蔵穴・柱穴**　検出されなかった。

竈　東壁面を掘り込んで造られている。右袖部には構築材に用いられたと思われる凝灰岩が出土した。凝灰岩は被熱し赤化していた。左袖部は攪乱によって壊されていた。両袖方向50cm、煙道方向62cmを測る。　**遺物**　須恵器坏・埦・羽釜、灰釉陶器埦、鉄製品（刃器）が出土している。他に、土師器片540ｇ、須恵器片610ｇが出土。　**所見**　出土遺物から10世紀中葉と考えられる。



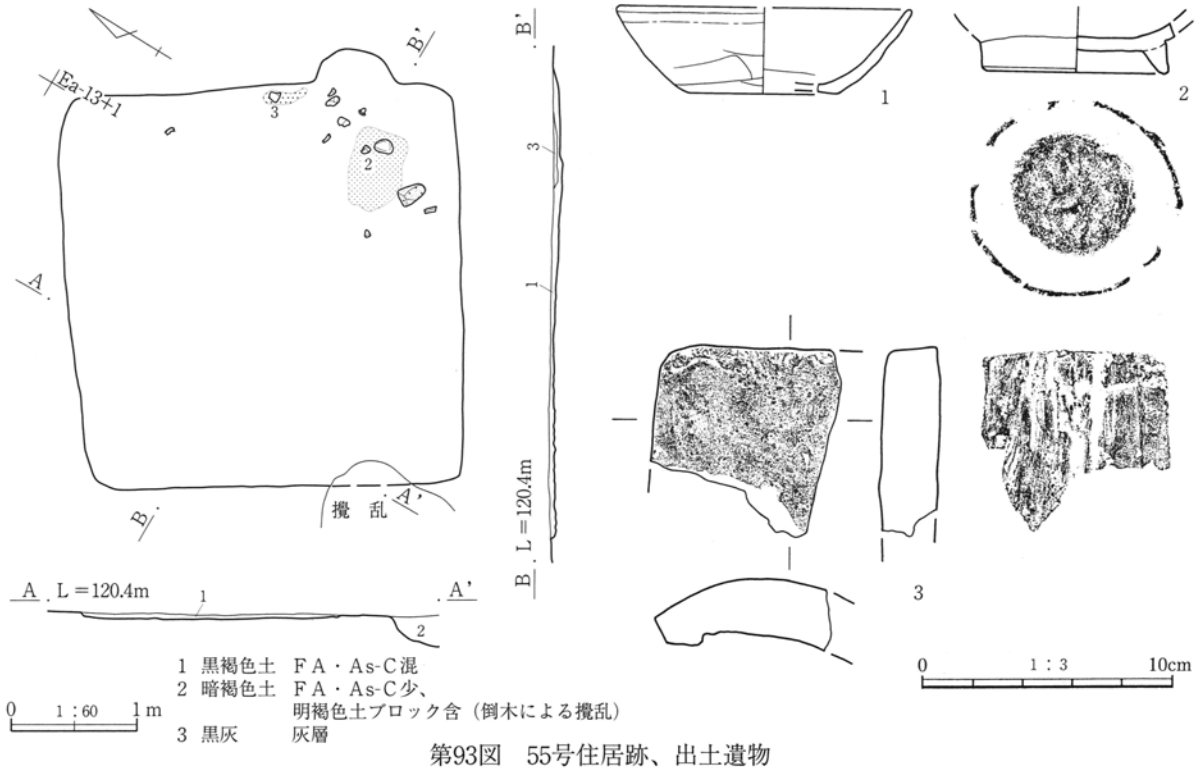
第91図　54号住居跡



第92図　54号住居跡出土遺物

55号住居跡（第93図、ＰＬ16・38）

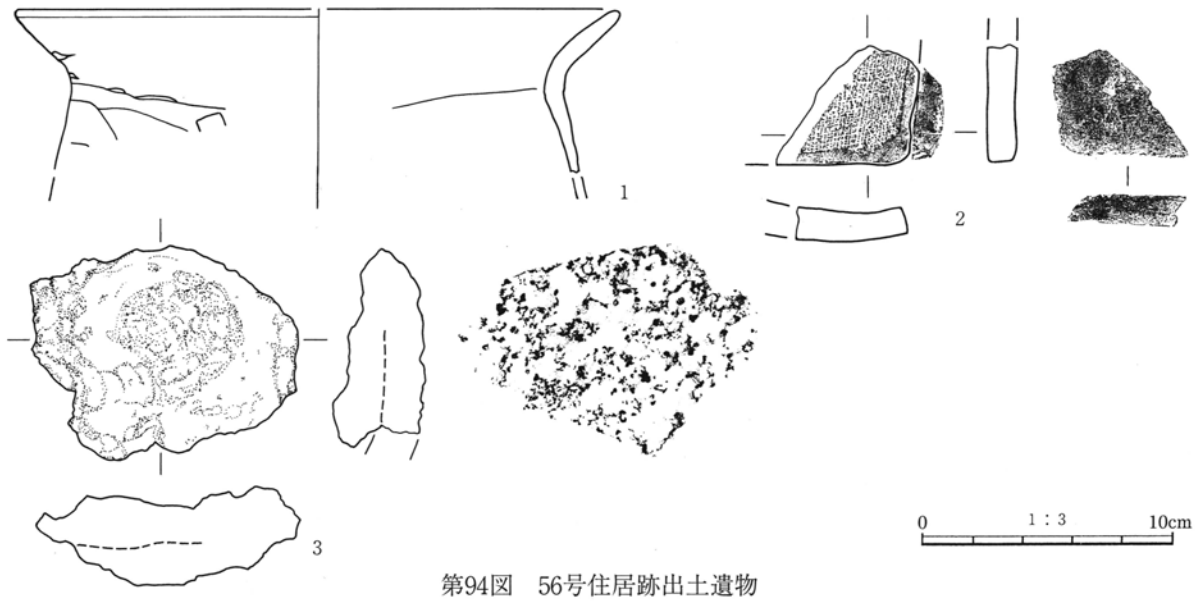
位置　Ｂｔ－12～13　**重複**　なし。　**形状**　長軸3.3m、短軸3.2mの隅丸方形を呈する。　**面積**　9.70㎡　**方位**　Ｎ－59°－Ｅ　**床面**　遺構確認面から２cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.21mを測る。　**壁溝・貯蔵穴・柱穴**　検出されなかった。　**竈**　東壁面の南寄りを掘り込んで造られている。削平され残存悪い。袖部などの構築材として用いられたと思われる凝灰岩１点が床面から出土した。凝灰岩は被熱し赤化していた。両袖方向54cm、煙道方向24cmを測る。　**遺物**　土師器坏、須恵器埦、瓦が出土している。他に、土師器片260ｇ、須恵器片270ｇが出土。　**所見**　出土遺物から10世紀後半と考えられる。



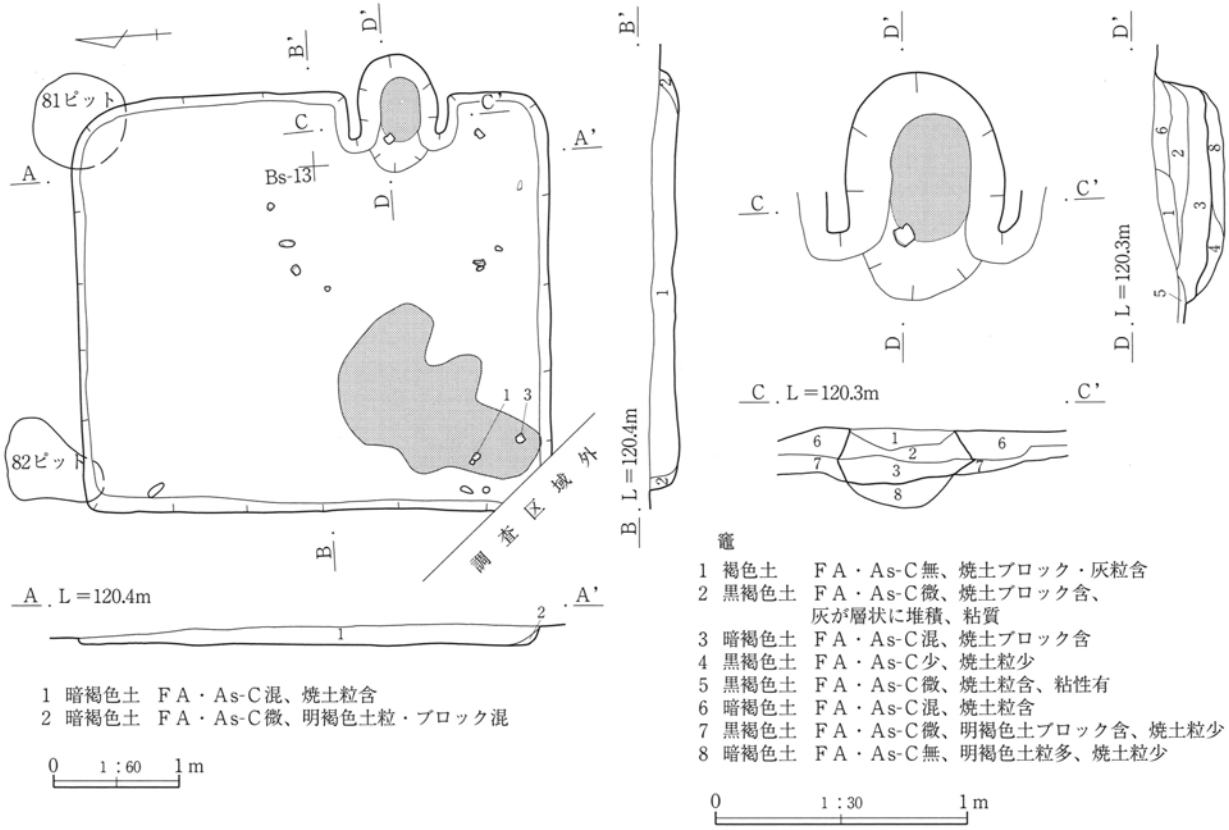
第93図　55号住居跡、出土遺物

56号住居跡（第94・95図、ＰＬ17・38）

位置　Ｂｒ～ｓ－12～13　**重複**　81・82号ピットと重複している。本住居が新しい。　**形状**　長軸3.8m、短軸3.3ｍの隅丸方形を呈する。　**面積**　11.07㎡　**方位**　Ｎ－88°－Ｗ　**床面**　遺構確認面から12cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.12ｍを測る。　**壁溝・貯蔵穴・柱穴**　検出されなかった。　**竈**　東壁面の南寄りを掘り込んで造られている。袖部は石材ではなく、粘質土を張り付けて造られていたと思われる。支脚石等は検出されなかった。両袖方向31cm、煙道方向75cmを測る。　**遺物**　土師器甕、鉄滓、瓦が出土している。他に、土師器片2.81kg、須恵器片800ｇが出土。　**所見**　出土遺物から８世紀と考えられる。



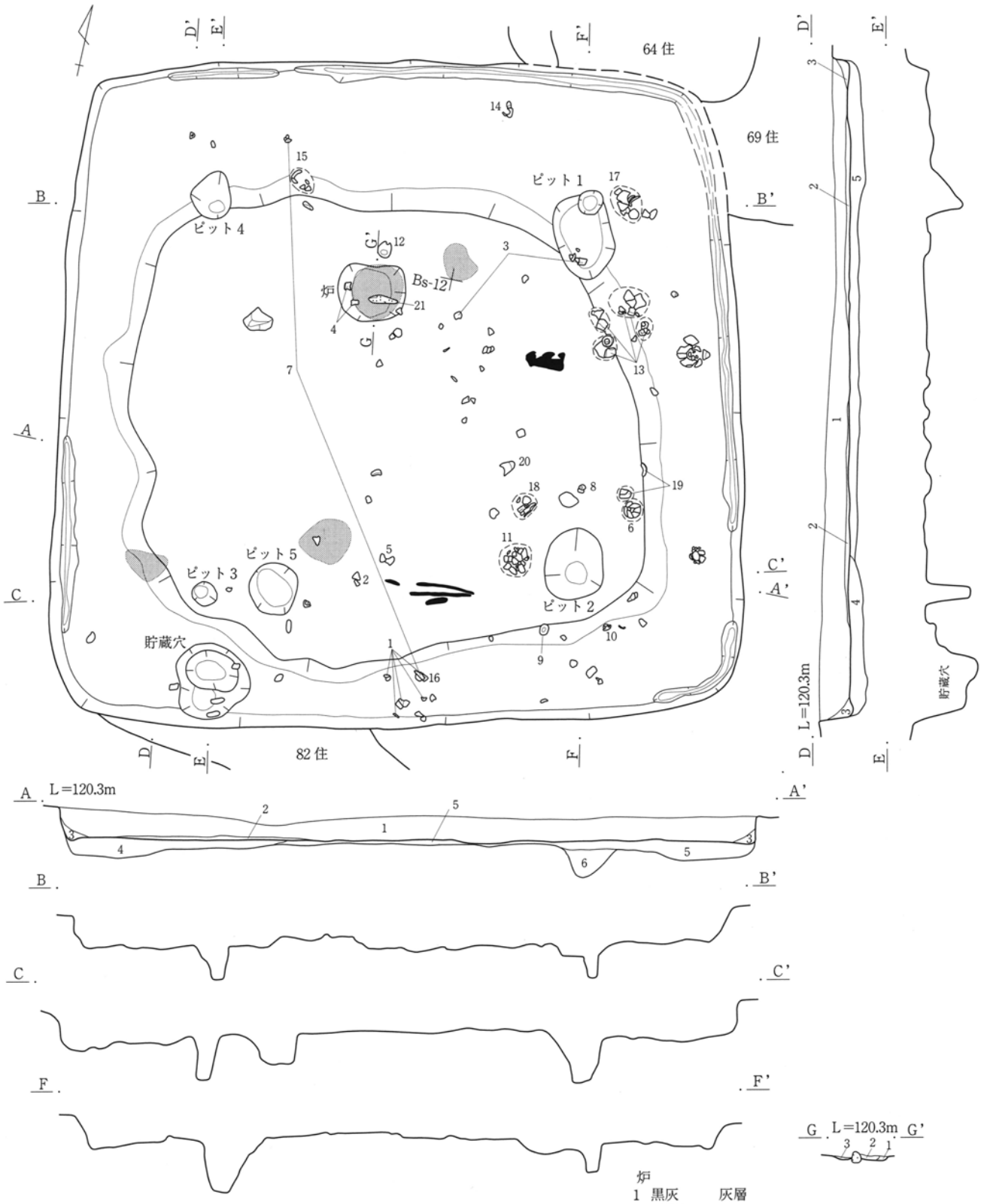
第94図　56号住居跡出土遺物



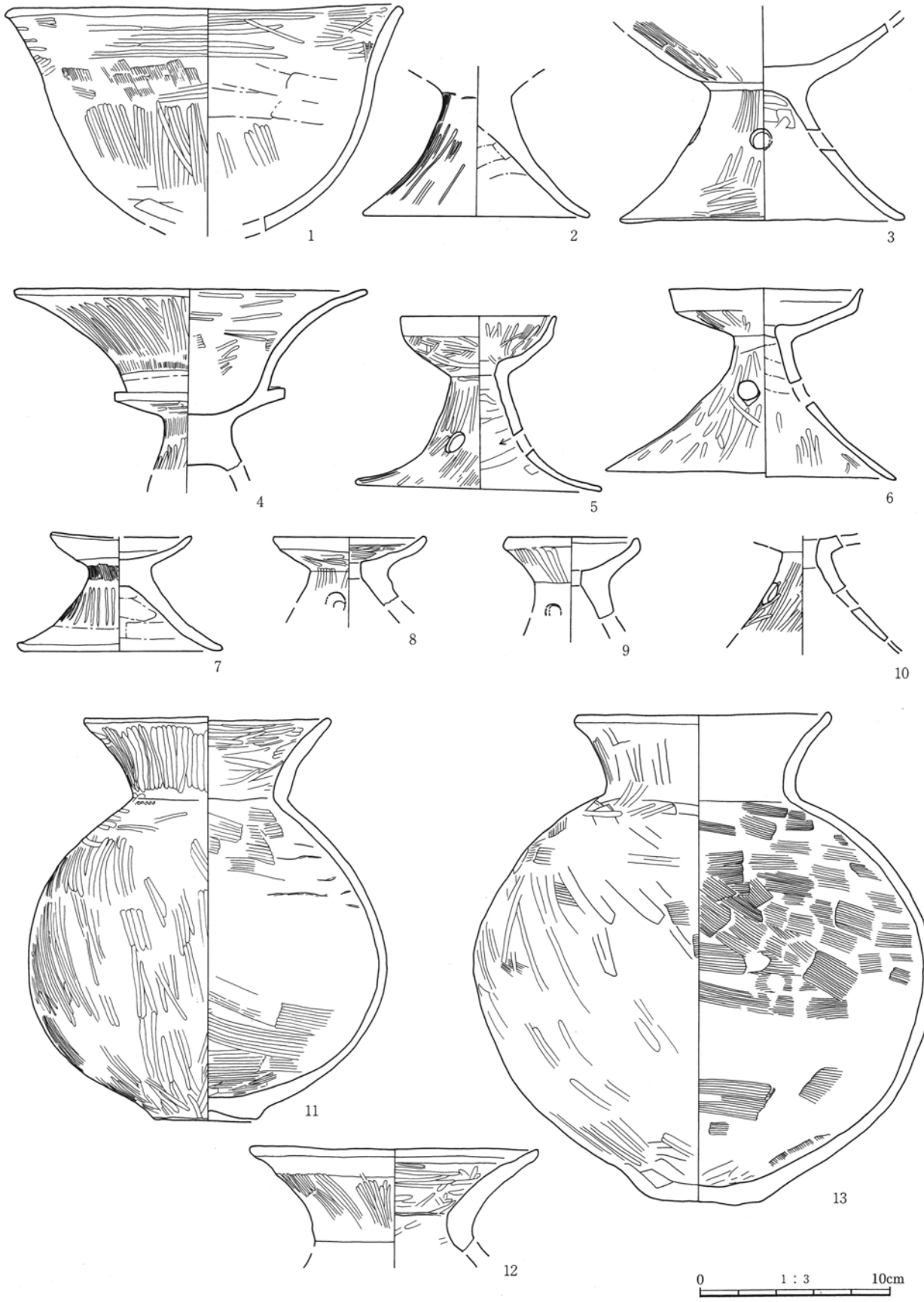
第95図　56号住居跡・竈

57号住居跡（第96～98図、ＰＬ17・39・40）

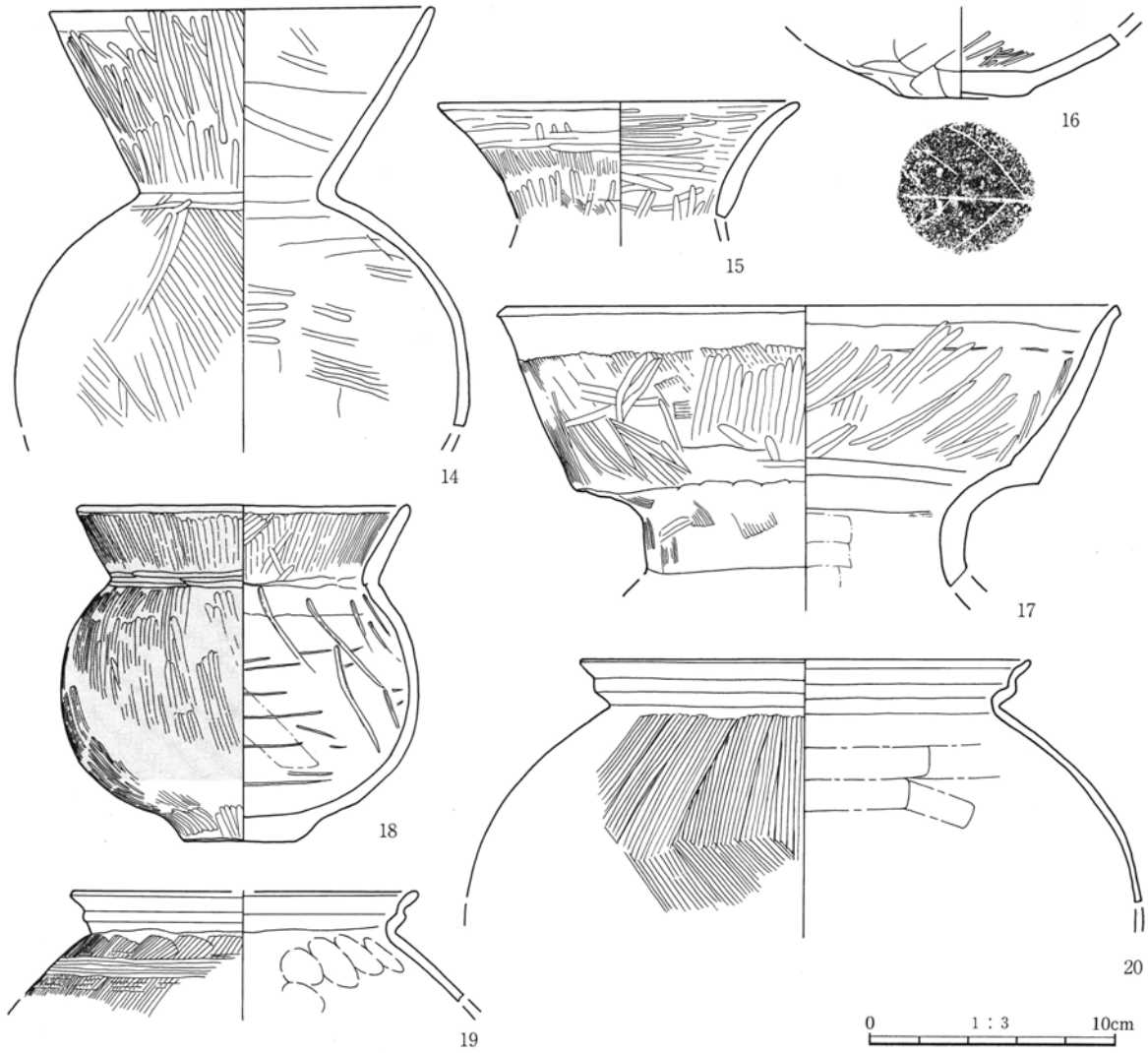
位置　Ｂｑ～ｓ－11～12　**重複**　64・69・82号住居と重複している。本住居が古い。　**形状**　長軸7.4ｍ、短軸7.1ｍの隅丸方形を呈する。　**面積**　46.76㎡　**方位**　Ｎ－５°－Ｗ　**床面**　遺構確認面から26cm掘り込んで、床面になる。標高は平均119.91ｍを測る。床面は貼床構造で、明褐色土ブロックを含む黒褐色粘質土で固く踏み固められていた。また、床面上に、多量の炭化材が検出され、焼失住居の可能性もある。　**壁溝**　幅約18cm、深さ約６cmの壁溝が、全長約12ｍ検出された。　**貯蔵穴**　住居の南西に設置。径84cm・深さ43cmの楕円形を呈する。土師器片、礫が出土。　**柱穴**　柱穴と思われるピットは５基検出された。ピット１は、径30cm・深さ56cm。ピット２は、径70cm・深さ54cm。ピット３は、径34cm・深さ50cm。ピット４は、径50cm・深さ60cm。ピット５は、径52cm・深さ31cmを測る。　**炉**　住居の中央部北壁寄りで検出された。炉石に使用されたと思われる石も出土した。炉石は被熱し赤化していた。また、土師器高坏などの土器片が出土した。　**遺物**　土師器鉢・器台・高坏・壺・直口壺・小型甕・台付甕が出土している。他に、土師器片6.97kg、須恵器片500ｇが出土。　**所見**　出土遺物から４世紀前半と考えられる。


64住
69住
82住
ピット1
ピット2
ピット3
ピット4
ピット5
炉
Bs-12
貯蔵穴
L=120.3m
1 暗褐色土　As-C混、明褐色土ブロック・焼土粒・炭化粒少
2 黒褐色土　As-C微、明褐色土ブロック含、粘性強
3 黒褐色土　As-C少、明褐色土ブロック含、締まり弱
4 黒褐色土　褐灰色土ブロック混
5 褐色土　明褐色土ブロック混
6 暗褐色土　明褐色土ブロック含、締まりなし
炉
1 黒灰　灰層
2 暗褐色土　As-C少、明褐色土ブロック含、焼土少
3 赤褐色土　焼土層
0　1:60　1m

第96図　57号住居跡



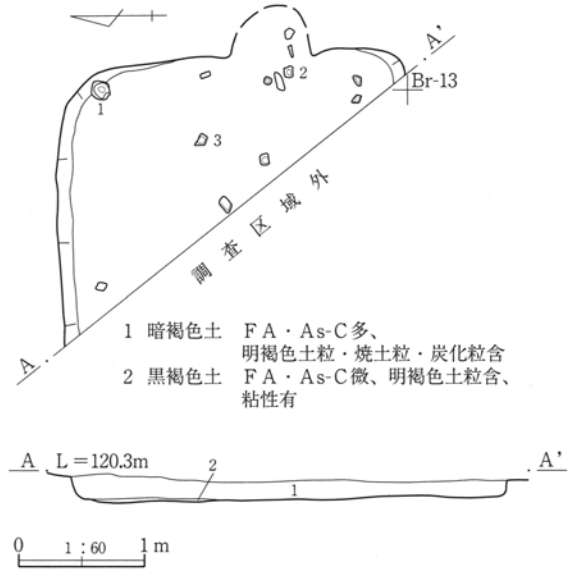
第97図　57号住居跡出土遺物（１）



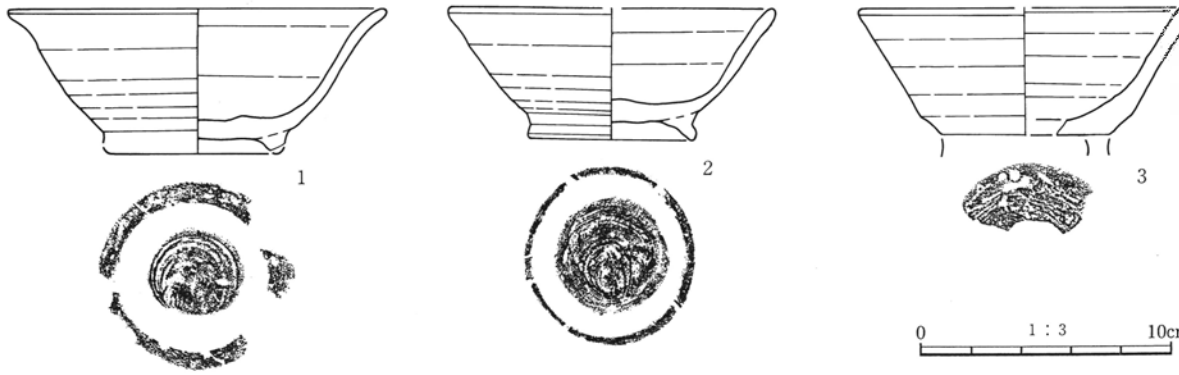
第98図　57号住居跡出土遺物（２）

58号住居跡（第99・100図、ＰＬ16・40）

位置　Ｂｒ－12～13　**重複**　なし。　**形状**　長軸2.7m、短軸（2.1）ｍを測る。　**面積**　（3.03）m^2　**方位**　Ｎ－88°－Ｗ　**床面**　遺構確認面から６cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.14ｍを測る。　**壁溝・貯蔵穴・柱穴**　検出されなかった。　**竈**　東壁面を掘り込んで造られていたと思われるが、削平され残存状態悪い。支脚石等は検出されなかった。　**遺物**　須恵器埦が出土している。他に、土師器片550ｇ、須恵器片350ｇが出土。　**所見**　住居の南西半分が調査区域外のため、全容は明らかにできなかった。出土遺物から10世紀と考えられる。



第99図　58号住居跡

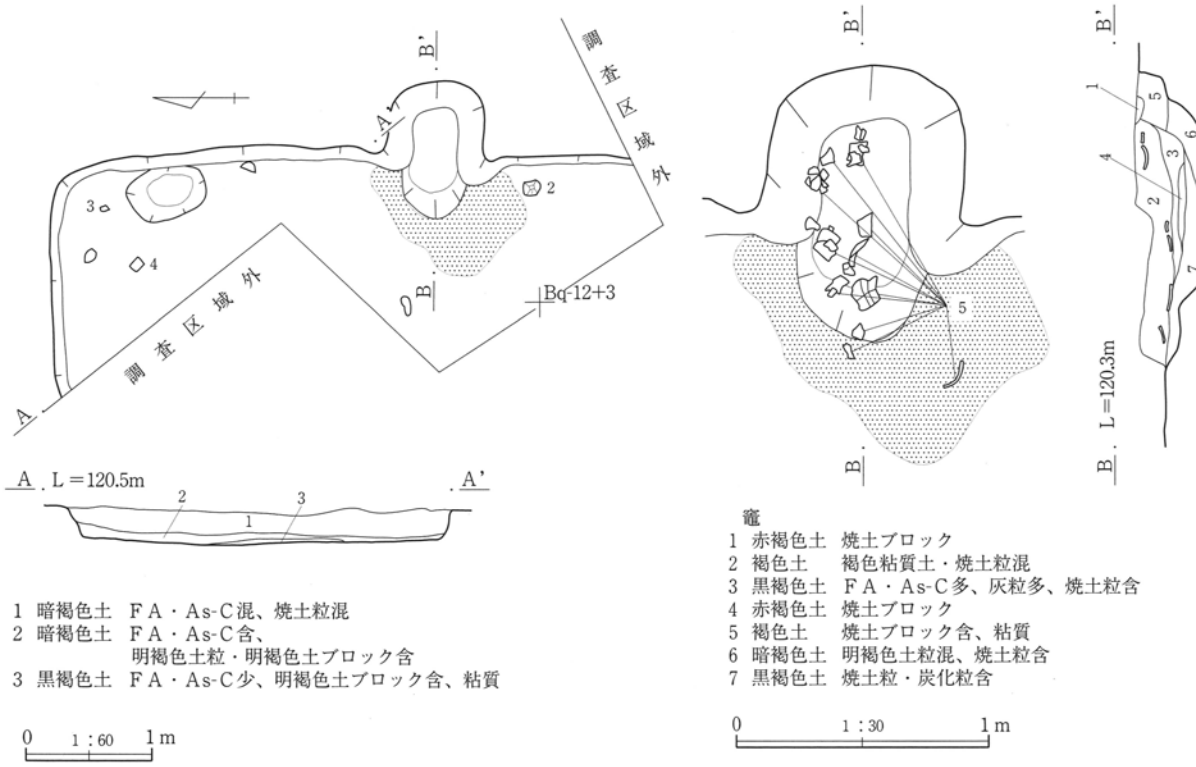


第100図　58号住居跡出土遺物

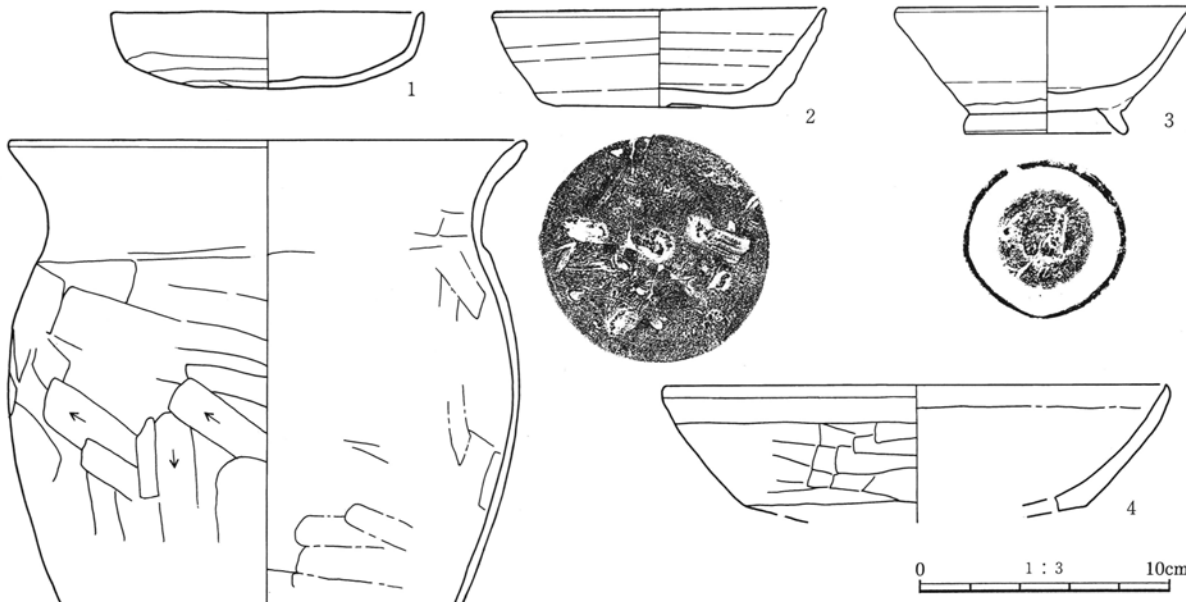
59号住居跡（第101・102図、ＰＬ18・40）

位置　Ｂｐ～ｑ－12　**重複**　なし。　**形状**　長軸(4.8) m、短軸(1.8) mを測る。　**面積**　(4.99) m^2　**方位**　Ｎ－89°－Ｅ　**床面**　遺構確認面から15cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.06mを測る。床面は一部貼床構造で、明褐色土ブロックを含む黒褐色粘質土で固く踏み固められていた。

壁溝・貯蔵穴・柱穴　検出されなかった。　**竈**　東壁面を掘り込んで造られている。袖部は石材ではなく、粘質土を張り付けて造られており、両袖部は熱を受け赤化していた。支脚石等は検出されなかったが、土師器甕などの土器片が多量に出土した。両袖方向34cm、煙道方向80cmを測る。　**遺物**　土師器坏・甕、須恵器坏・埦が出土している。他に、土師器片1.00kg、須恵器片450ｇが出土。　**所見**　住居の西半分が調査区域外のため、全容は明らかにできなかった。出土遺物から８世紀前半と考えられる。



第101図　59号住居跡・竈



第102図　59号住居跡出土遺物

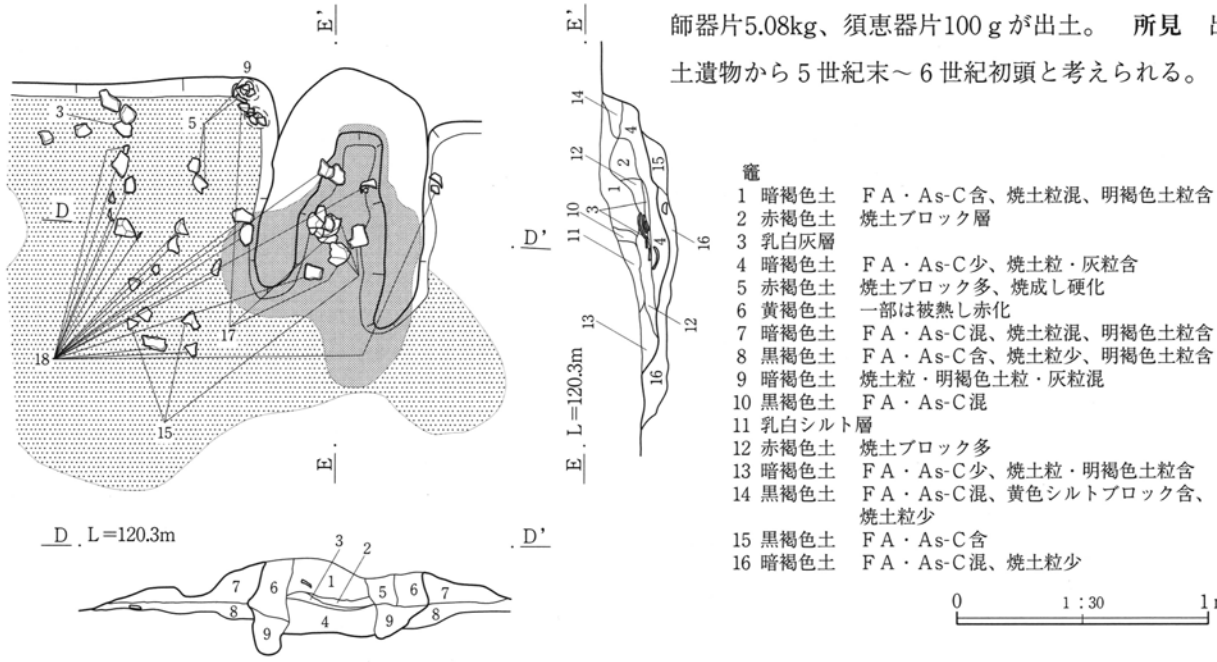
60号住居跡（第103～105図、ＰＬ18・40・41）

位置　Ｅａ～ｂ－10～11　**重複**　なし。　**形状**　長軸5.1ｍ、短軸4.4ｍの隅丸方形を呈する。

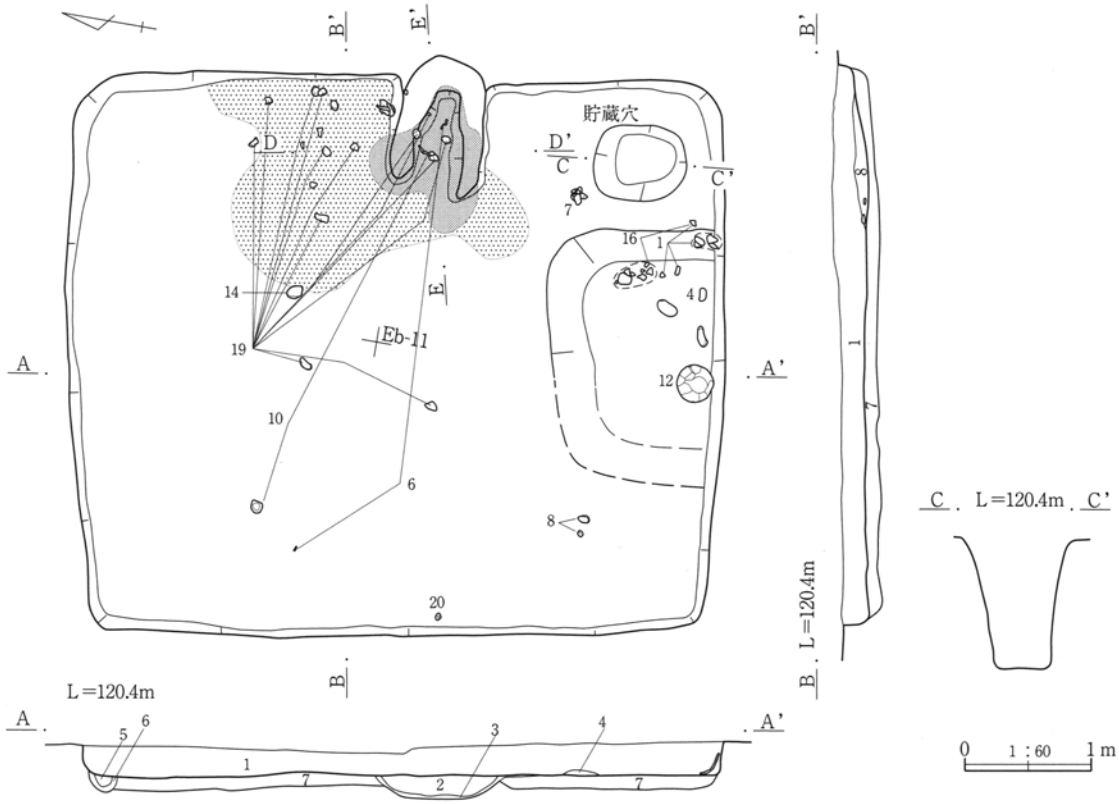
面積　21.24㎡　**方位**　Ｎ－88°－Ｅ　**床面**　遺構確認面から21cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.01ｍを測る。南側に、コの字状の明褐色土ブロックを含む暗褐色粘質土で固く踏み固めた部分を検出した。住居の出入り口と思われる。

壁溝・柱穴　検出されなかった。　**貯蔵穴**　住居の南東に設置。径74cm・深さ90cmの楕円形を呈する。

竈　東壁面の中央部を掘り込んで造られている。袖部は石材ではなく、粘質土を張り付けて造られており、両袖部・煙道部は熱を受け赤化していた。支脚石等は検出されなかったが、土師器甕・壺などの土器片が多量に出土した。両袖方向25cm、煙道方向114cmを測る。　**遺物**　土師器坏・鉢・高坏・壺・甕、石製紡錘車が出土している。遺物は竈内・竈北側、出入り口部分から集中して出土した。他に、土師器片5.08kg、須恵器片100ｇが出土。　**所見**　出土遺物から５世紀末～６世紀初頭と考えられる。

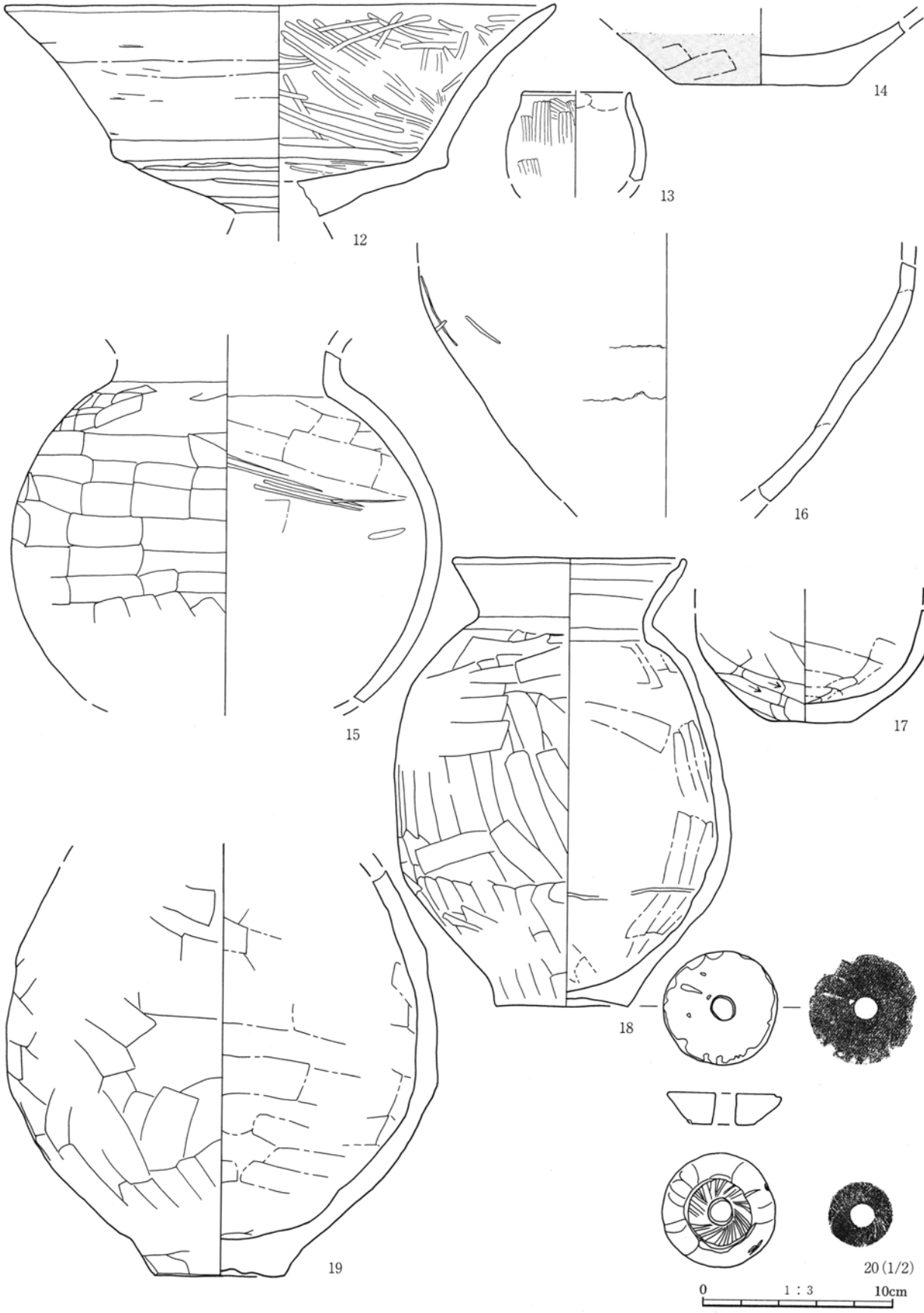


第103図　60号住居跡竈



1 暗褐色土　ＦＡ・As-C多、黒色土ブロック混、焼土粒・明褐色土粒含
2 黒褐色土　ＦＡ・As-C少、黒色土小ブロック・明褐色土粒含
3 黄褐色土　明褐色土ブロック貼付層
4 暗褐色土　ＦＡ・As-C微、明褐色土ブロック多
5 褐色土　ＦＡ・As-C微
6 黒褐色土　ＦＡ・As-C少
7 黒褐色土　褐色粘質土ブロック多
8 黒灰　灰粒多

第104図　60号住居跡、出土遺物（１）



第105図　60号住居跡出土遺物（２）

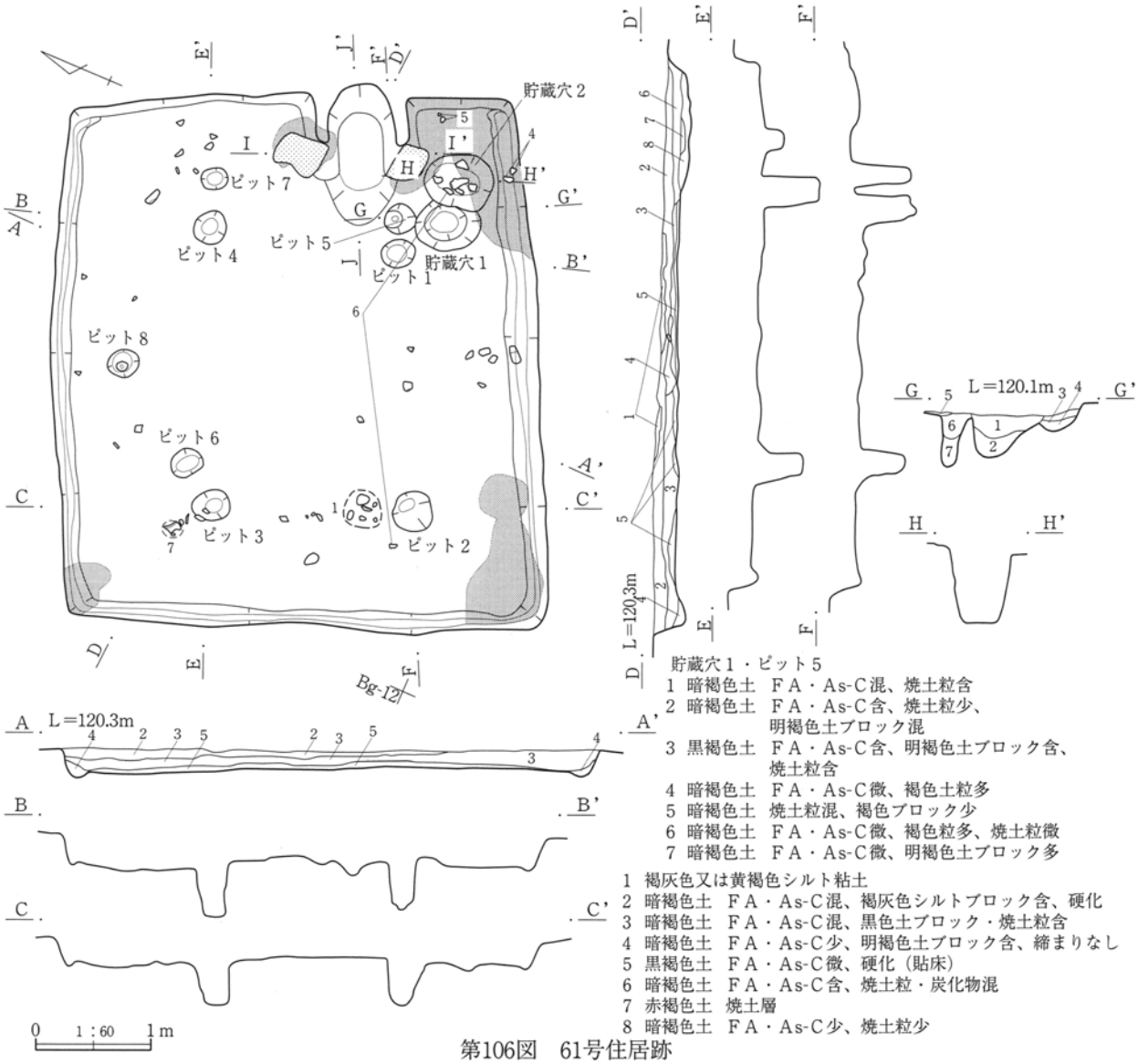
61号住居跡（第106・107図、ＰＬ19・41）

位置　Ｂｐ～ｑ－10～12　**重複**　なし。　**形状**　長軸5.0m、短軸4.3mの隅丸方形を呈する。

面積　19.11㎡　**方位**　Ｎ－67°－Ｅ　**床面**　遺構確認面から16cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.01mを測る。床面は貼床構造で、明褐色土ブロックを含む黒褐色粘質土で固く踏み固められていた。　**壁溝**　幅約22cm、深さ約５cmの壁溝がほぼ一周している。　**貯蔵穴**　住居の南東から２基検出された。貯蔵穴１は径56cm・深さ40cm、貯蔵穴２は径60cm・深さ75cmの楕円形を呈する。貯蔵穴２からは、土師器壺・坏などの土器片が出土した。

柱穴　柱穴と思われるピットは５基検出された。ピット１は、径30cm・深さ44cm。ピット２は、径39cm・深さ43cm。ピット３は、径34cm・深さ41cm。ピット４は、径31cm・深さ45cm。ピット５は、径26cm・深さ46cmを測る。他のピットは深度も浅く、性格は不明。　**竈**　東壁面の南よりを掘り込んで造られている。袖部は石材ではなく、粘質土を張り付けて造られており、両袖部は熱を受け赤化していた。両袖部からは崩落した粘土が検出された。両袖方向40cm、煙道方向88cmを測る。

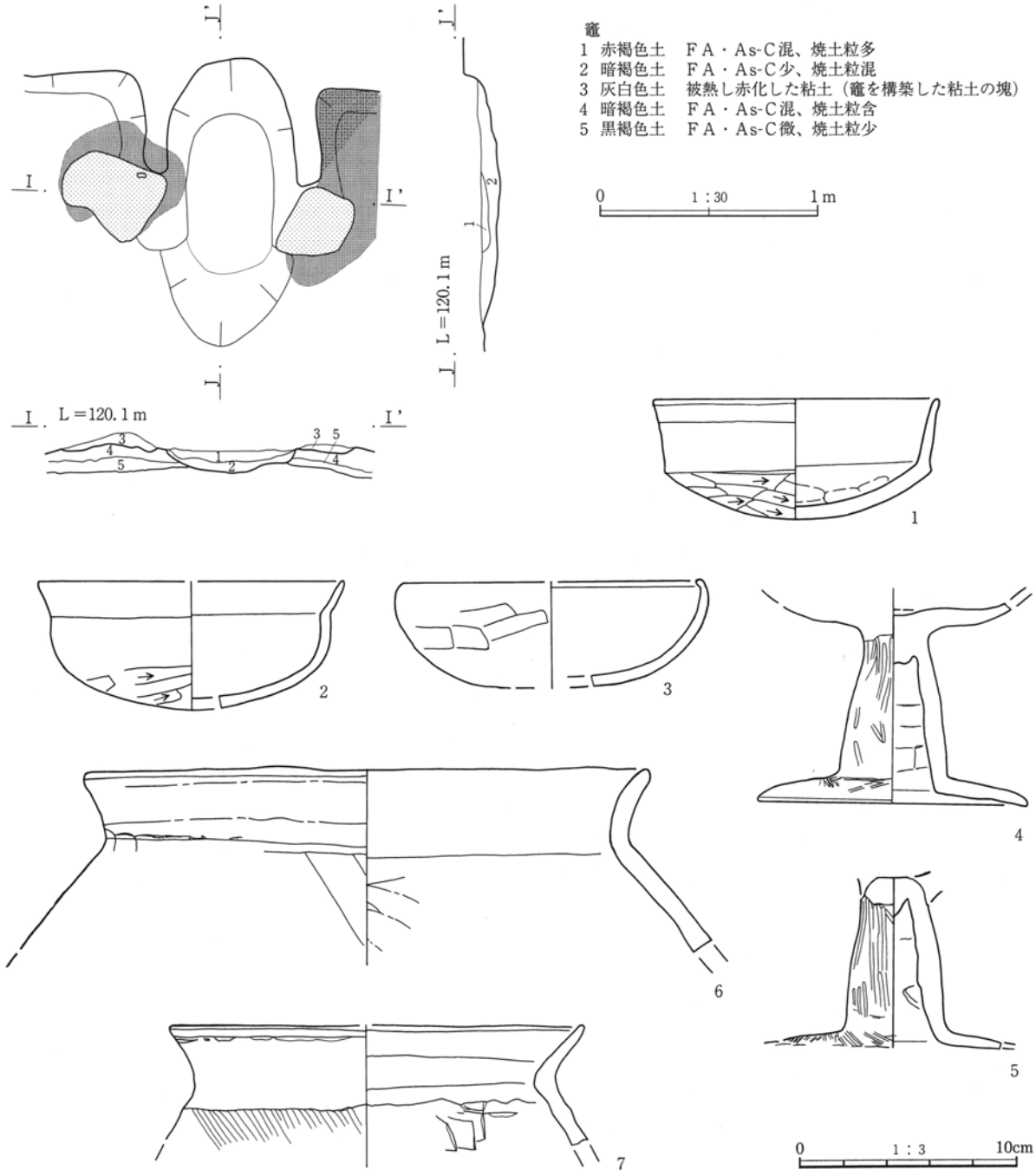
遺物　土師器坏・高坏・壺・甕が出土している。他に、土師器片4.52kgが出土。　**所見**　出土遺物から６世紀前半と考えられる。



貯蔵穴１・ピット５
1 暗褐色土　ＦＡ・As-C混、焼土粒含
2 暗褐色土　ＦＡ・As-C含、焼土粒少、明褐色土ブロック混
3 黒褐色土　ＦＡ・As-C含、明褐色土ブロック含、焼土粒含
4 暗褐色土　ＦＡ・As-C微、褐色土粒多
5 暗褐色土　焼土粒混、褐色ブロック少
6 暗褐色土　ＦＡ・As-C微、褐色粒多、焼土粒微
7 暗褐色土　ＦＡ・As-C微、明褐色土ブロック多

1 褐灰色又は黄褐色シルト粘土
2 暗褐色土　ＦＡ・As-C混、褐灰色シルトブロック含、硬化
3 暗褐色土　ＦＡ・As-C混、黒色土ブロック・焼土粒含
4 暗褐色土　ＦＡ・As-C少、明褐色土ブロック含、締まりなし
5 黒褐色土　ＦＡ・As-C微、硬化（貼床）
6 暗褐色土　ＦＡ・As-C含、焼土粒・炭化物混
7 赤褐色土　焼土層
8 暗褐色土　ＦＡ・As-C少、焼土粒少

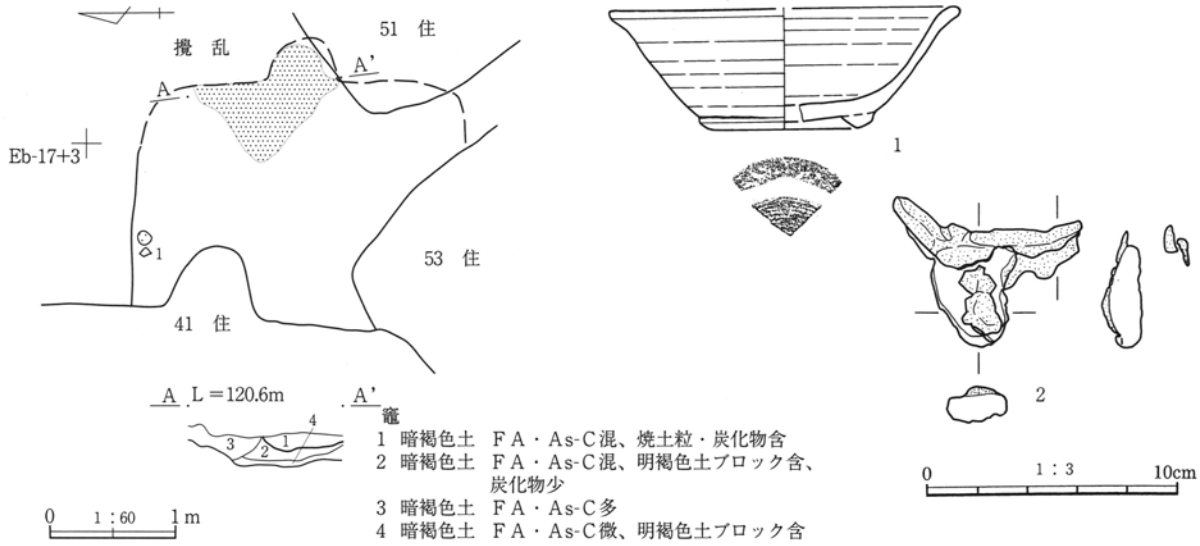
第106図　61号住居跡



第107図　61号住居跡竈、出土遺物

63号住居跡（第108図、ＰＬ19・41）

位置　Ｅａ－17　**重複**　41・51・53号住居と重複している。本住居の出土遺物が少なく、時期不明のため、新旧関係は不明。　**形状**　長軸（2.6）m、短軸（1.8）mを測る。　**面積**　（3.25）m²　**方位**　Ｎ－90°　**床面**　床面の標高は平均120.19mを測る。　**壁溝・貯蔵穴・柱穴**　検出されなかった。　**竈**　東壁面を掘り込んで造られている。残存状態が悪く、焼土・炭化物の分布状況で認定した。両袖方向50cm、煙道方向35cmを測る。　**遺物**　須恵器埦、金属製品（銅・鉄製品）が出土している。他に、土師器片200ｇ、須恵器片40ｇが出土。　**所見**　住居の重複・攪乱多く、全容は明らかにできなかった。また、出土遺物も少なく、時期は不明。



第108図　63号住居跡、出土遺物

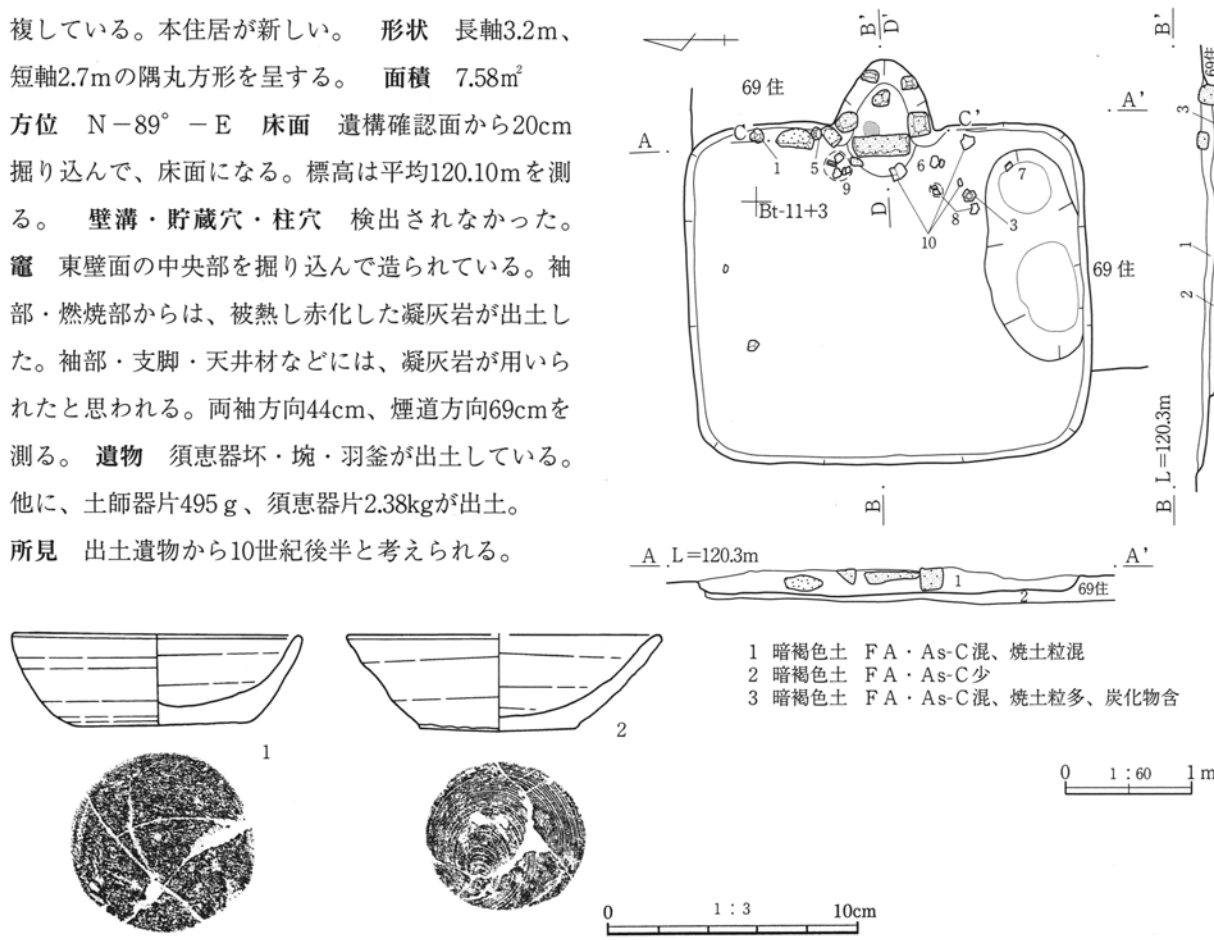
64号住居跡（第109・110図、ＰＬ20・21・41・42）

位置　Ｂｓ～ｔ－11～12　**重複**　57・69号住居と重複している。本住居が新しい。　**形状**　長軸3.2m、短軸2.7mの隅丸方形を呈する。　**面積**　7.58m²

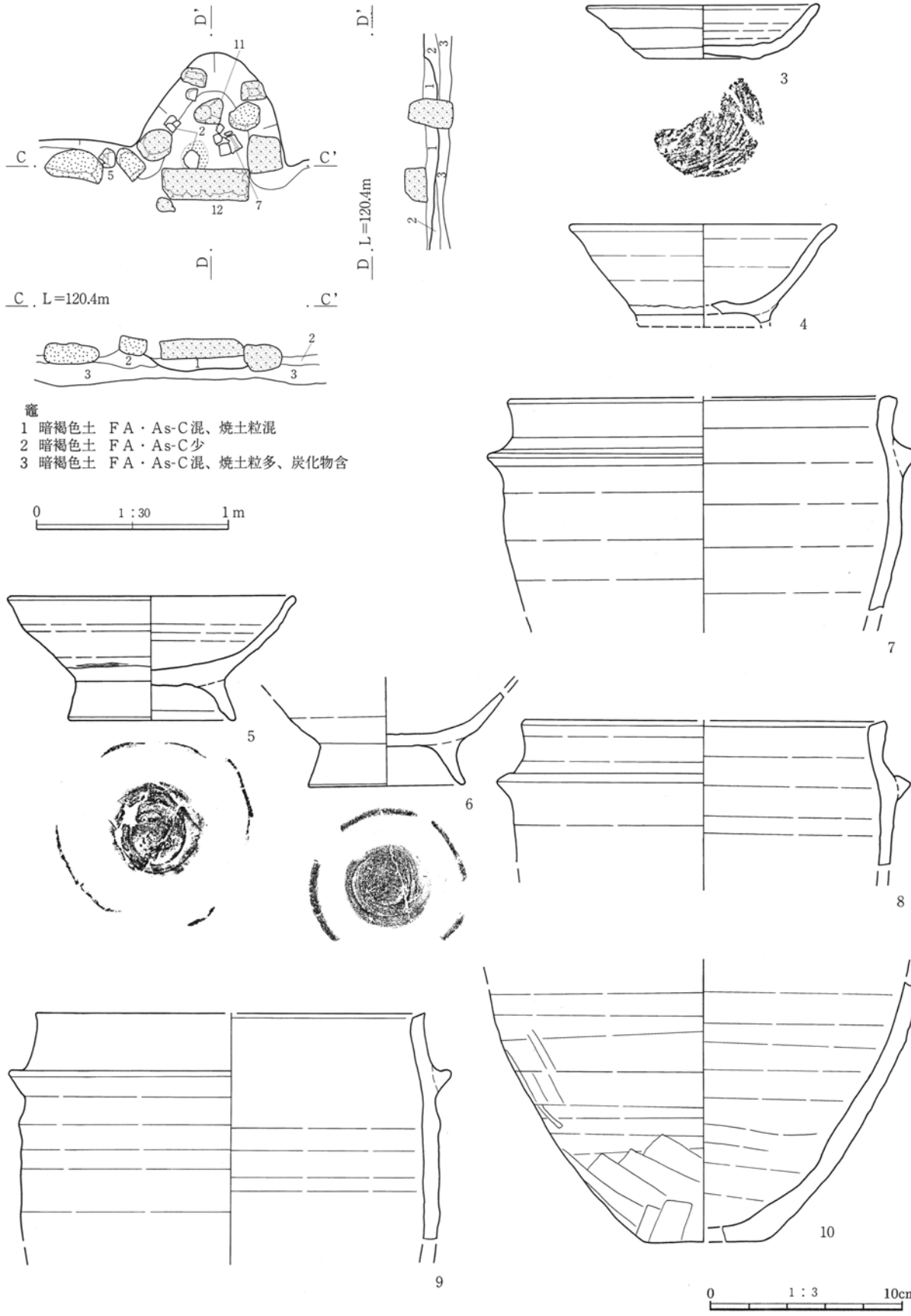
方位　Ｎ－89°－Ｅ　**床面**　遺構確認面から20cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.10mを測る。　**壁溝・貯蔵穴・柱穴**　検出されなかった。

竈　東壁面の中央部を掘り込んで造られている。袖部・燃焼部からは、被熱し赤化した凝灰岩が出土した。袖部・支脚・天井材などには、凝灰岩が用いられたと思われる。両袖方向44cm、煙道方向69cmを測る。　**遺物**　須恵器坏・埦・羽釜が出土している。他に、土師器片495ｇ、須恵器片2.38kgが出土。

所見　出土遺物から10世紀後半と考えられる。



第109図　64号住居跡、出土遺物（１）



第110図　64号住居跡竈、出土遺物（２）

65号住居跡（第111・112図、ＰＬ19・42）

位置　Ｂｏ～ｐ－10～11　**重複**　70・71号住居と重複している。70号住居より古く、71号住居より新しい。　**形状**　長軸（1.6）ｍ、短軸（0.4）ｍを測る。　**面積**　（4.43）㎡　**方位**　測定不可能。　**床面**　遺構確認面から26cm掘り込んで、床面になる。標高は平均119.89ｍを測る。　**壁溝**　幅約20cm、深さ約３cmの壁溝が、全長２ｍ検出された。

貯蔵穴・柱穴　検出されなかった。　**竈**　東壁面に設置されていたと思われるが、調査区域外のため検出されなかった。　**遺物**　土師器坏・台付甕・甕、須恵器有台坏（転用硯）、灰釉陶器埦が出土している。他に、土師器片1.05kg、須恵器片170ｇが出土。

所見　住居の重複・調査区域外が多く、全容は明らかにできなかった。出土遺物から７世紀後半～８世紀前半と考えられる。

70号住居跡（第111・112図、ＰＬ19・42）

位置　Ｂｐ－10　**重複**　65・66・71号住居と重複している。本住居が新しい。　**形状**　長軸（1.3）ｍ、短軸（0.6）ｍを測る。　**面積**　（0.28）㎡

方位　測定不可能。　**床面**　遺構確認面から20cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.86ｍを測る。　**壁溝・貯蔵穴・柱穴・竈**　検出されなかった。

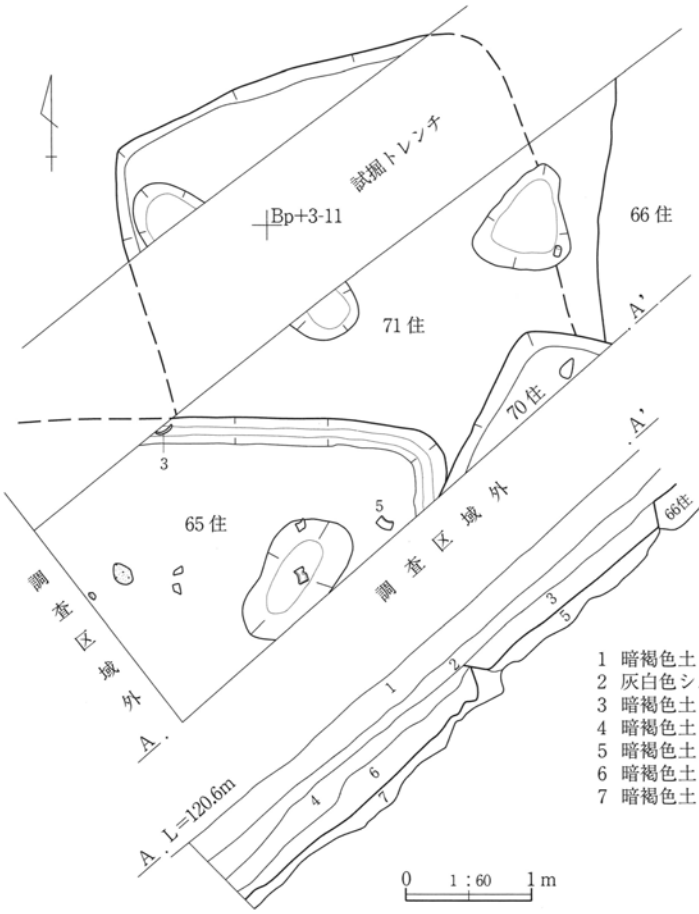
遺物　覆土から須恵器坏が出土している。

所見　住居のほとんどが調査区域外のため、全容は明らかにできなかった。時期は出土遺物から10世紀か。

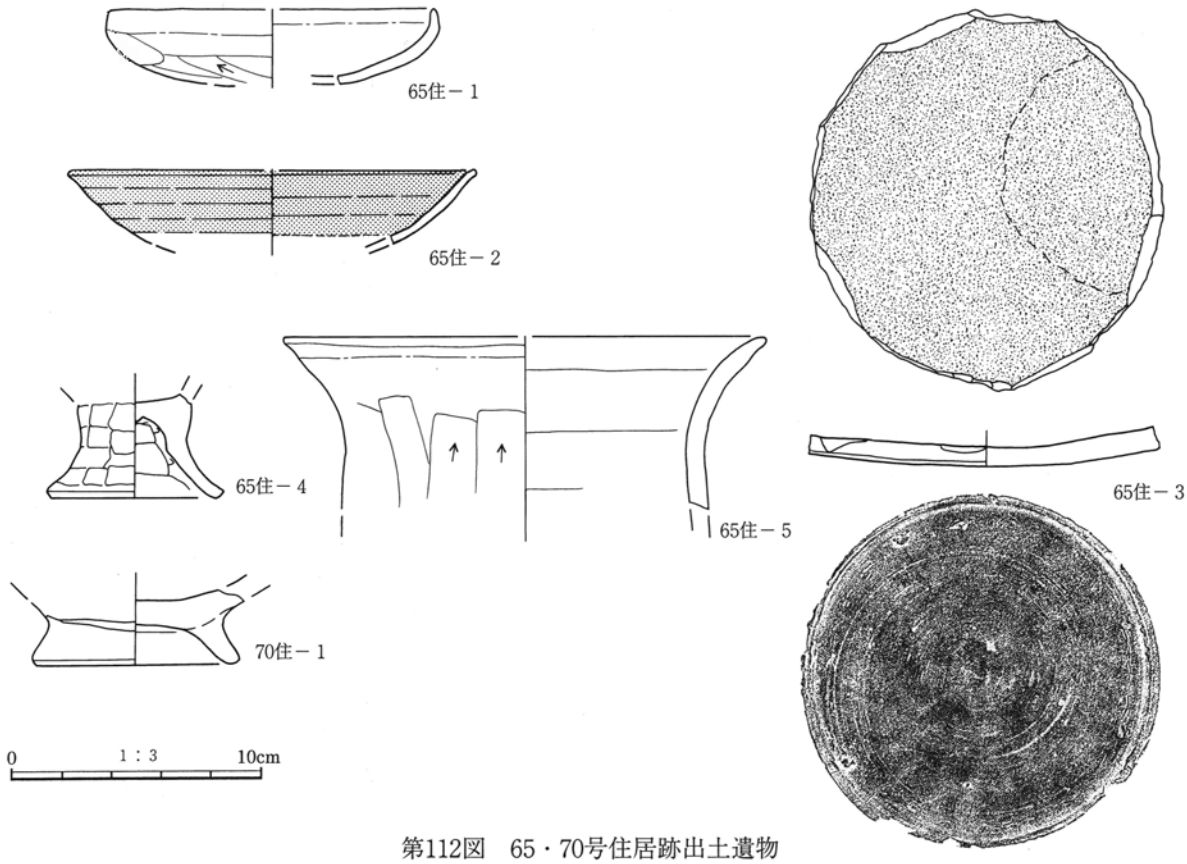
71号住居跡（第111図、ＰＬ19）

位置　Ｂｐ－10～11　**重複**　65・70号住居と重複している。本住居が古い。　**形状**　長軸（2.7）ｍ、短軸（2.5）ｍを測る。　**面積**　（3.05）㎡　方位測定不可能。　**床面**　遺構確認面から６cm掘り込んで、床面になる。標高は平均119.96ｍを測る。

壁溝・貯蔵穴・柱穴　検出されなかった。　**竈**　東壁面に設置されていたと思われる。削平され残存状態非常に悪い。　**遺物**　掲載遺物なし。覆土から、土師器片130ｇ、須恵器片35ｇが出土。　**所見**　住居のほとんどが試掘トレンチや攪乱のため、全容は明らかにできなかった。出土遺物も少なく、時期は不明。



第111図　65・70・71号住居跡

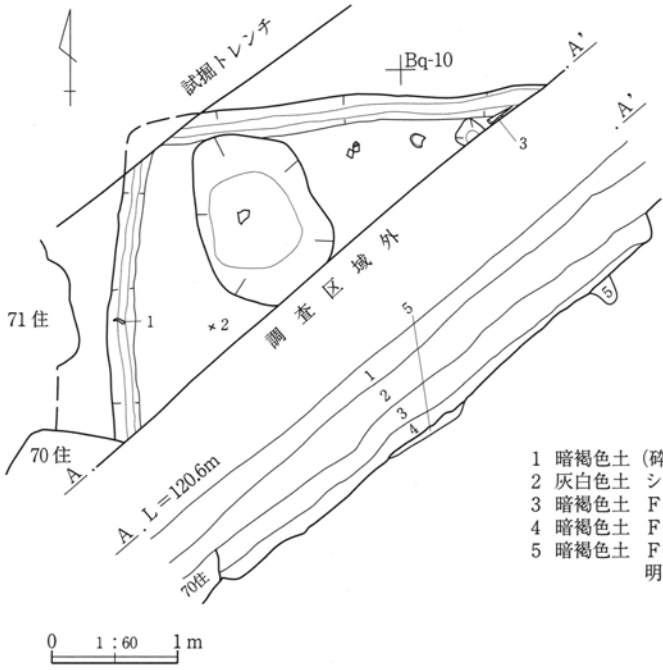


第112図　65・70号住居跡出土遺物

66号住居跡（第113・114図、ＰＬ19・42）

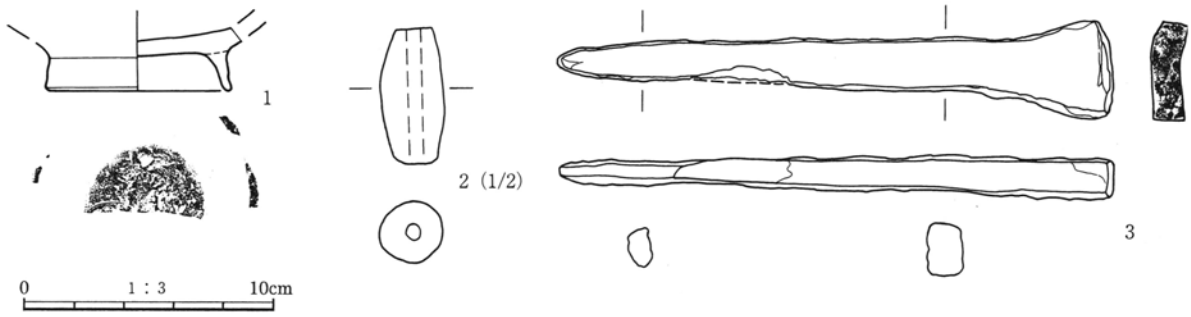
位置　Ｂｐ－９～10　**重複**　70号住居と重複している。本住居が古い。　**形状**　長軸（2.8）ｍ、短軸（2.2）ｍを測る。　**面積**　（3.72）m^2　**方位**　測定不可能。　**床面**　遺構確認面から27cm掘り込んで、床面になる。標高は平均119.79ｍを測る。

壁溝　幅約20cm、深さ約３cmの壁溝が、全長4.7ｍ検出された。　**貯蔵穴・柱穴**　検出されなかった。　**竈**　北壁面で検出されなかったので、調査区域外の東壁面に設置されていたと思われる。　**遺物**　須恵器埦、土錘、鉄釘（鑿）が出土している。他に、土師器片380ｇ、須恵器片490ｇが出土。　**所見**　住居の南東側は調査区域外のために、全容は明らかにできなかった。出土遺物から９世紀と考えられる。



1　暗褐色土（砕石・軽石混）表土
2　灰白色土　シルト 表土
3　暗褐色土　ＦＡ・As-Ｃ多
4　暗褐色土　ＦＡ・As-Ｃ少、明褐色土ブロック含
5　暗褐色土　ＦＡ・As-Ｃ少、焼土粒含、明褐色土ブロック混

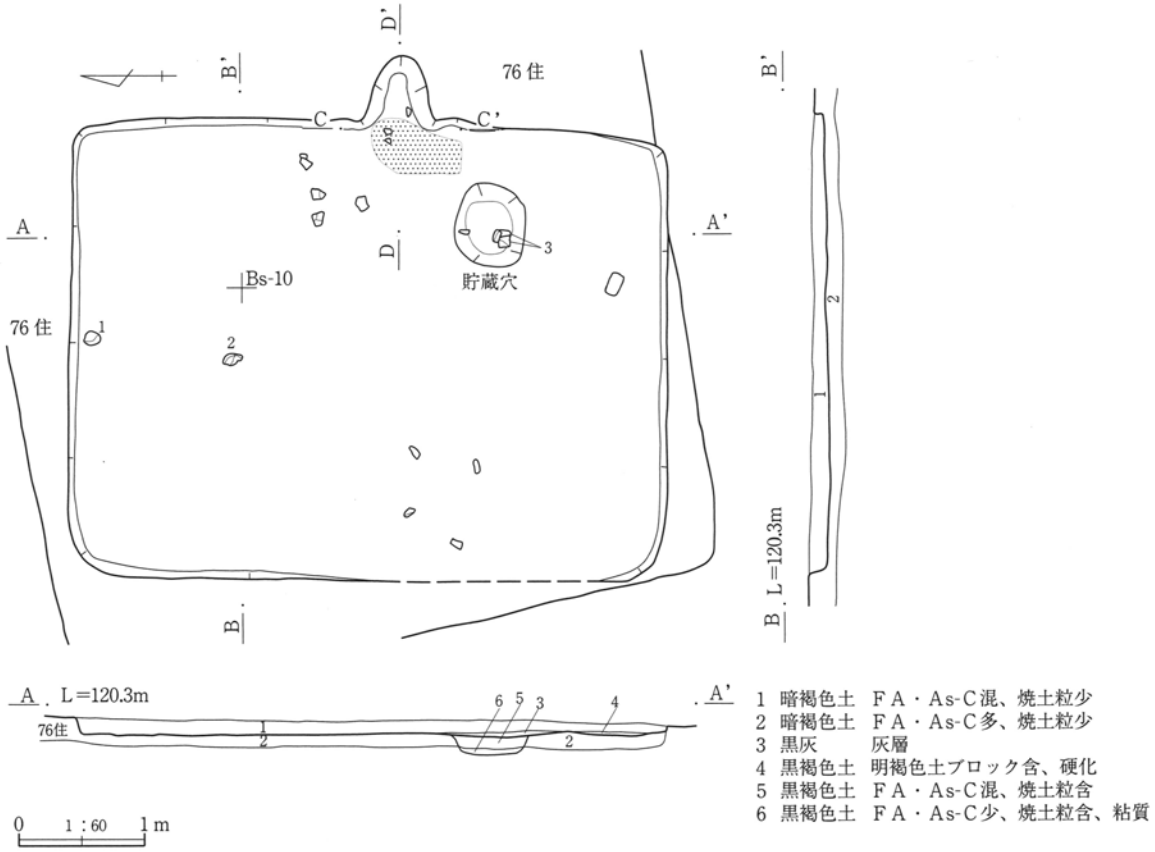
第113図　66号住居跡



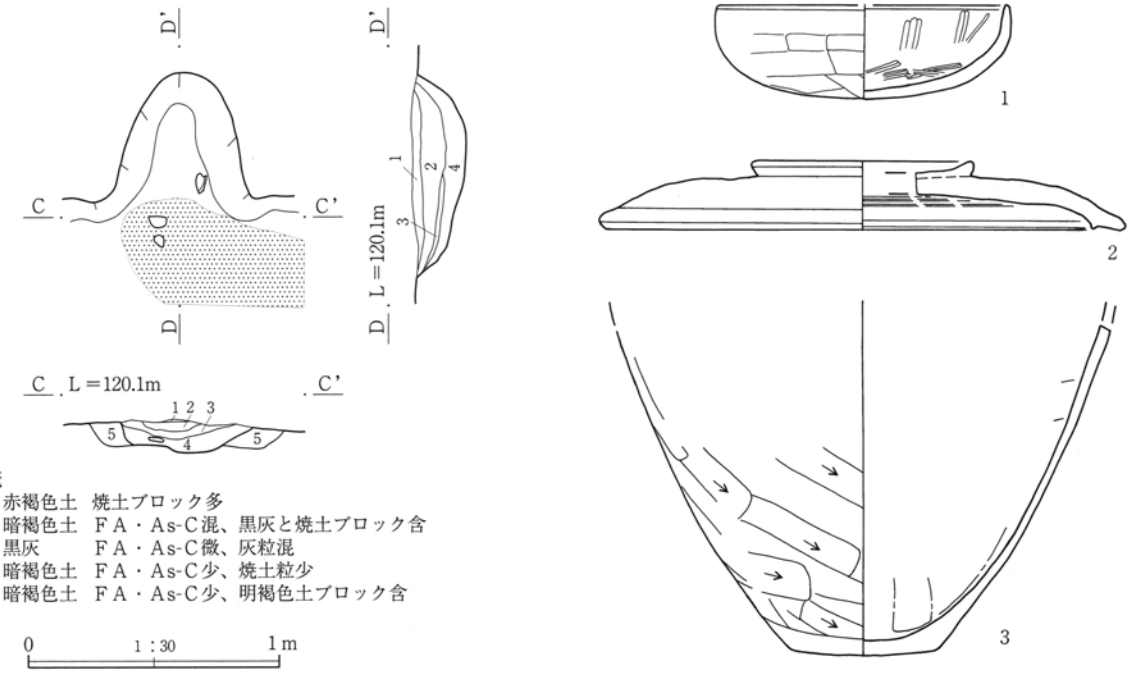
第114図　66号住居跡出土遺物

67号住居跡（第115・116図、ＰＬ21・42）

位置　Ｂｒ～ｓ－９～10　**重複**　76号住居と重複している。本住居が新しい。　**形状**　長軸4.7ｍ、短軸3.7ｍの隅丸長方形を呈する。　**面積**　16.40㎡　**方位**　Ｎ－87°－Ｅ　**床面**　遺構確認面から13cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.09ｍを測る。　**壁溝・柱穴**　検出されなかった。　**貯蔵穴**　住居の南東に設置。径71cm・深さ20cmの楕円形を呈する。土師器甕が出土。　**竈**　東壁面の中央部を掘り込んで造られている。削平され残存悪いが、袖部は石材ではなく、粘質土を張り付けて造られていたと思われる。支脚石等は検出されなかった。両袖方向28cm、煙道方向59cmを測る。　**遺物**　土師器坏・甕、須恵器蓋が出土している。他に、土師器片4.23kg、須恵器片230ｇが出土。　**所見**　出土遺物から８世紀前半と考えられる。



第115図　67号住居跡



第116図　67号住居跡竈、出土遺物

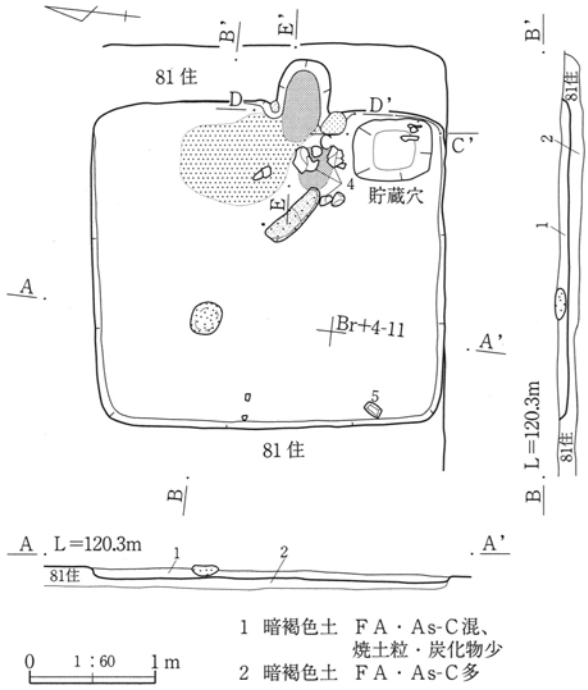
68号住居跡（第117・118図、ＰＬ21・42）

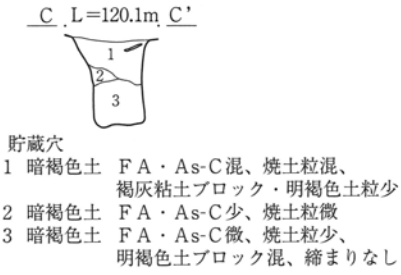
位置　Ｂｒ～ｓ－10～11　**重複**　81号住居と重複している。本住居が新しい。　**形状**　長軸3.0m、短軸2.8mの隅丸方形を呈する。　**面積**　6.73㎡

方位　Ｎ－87°－Ｅ　**床面**　遺構確認面から５cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.02mを測る。

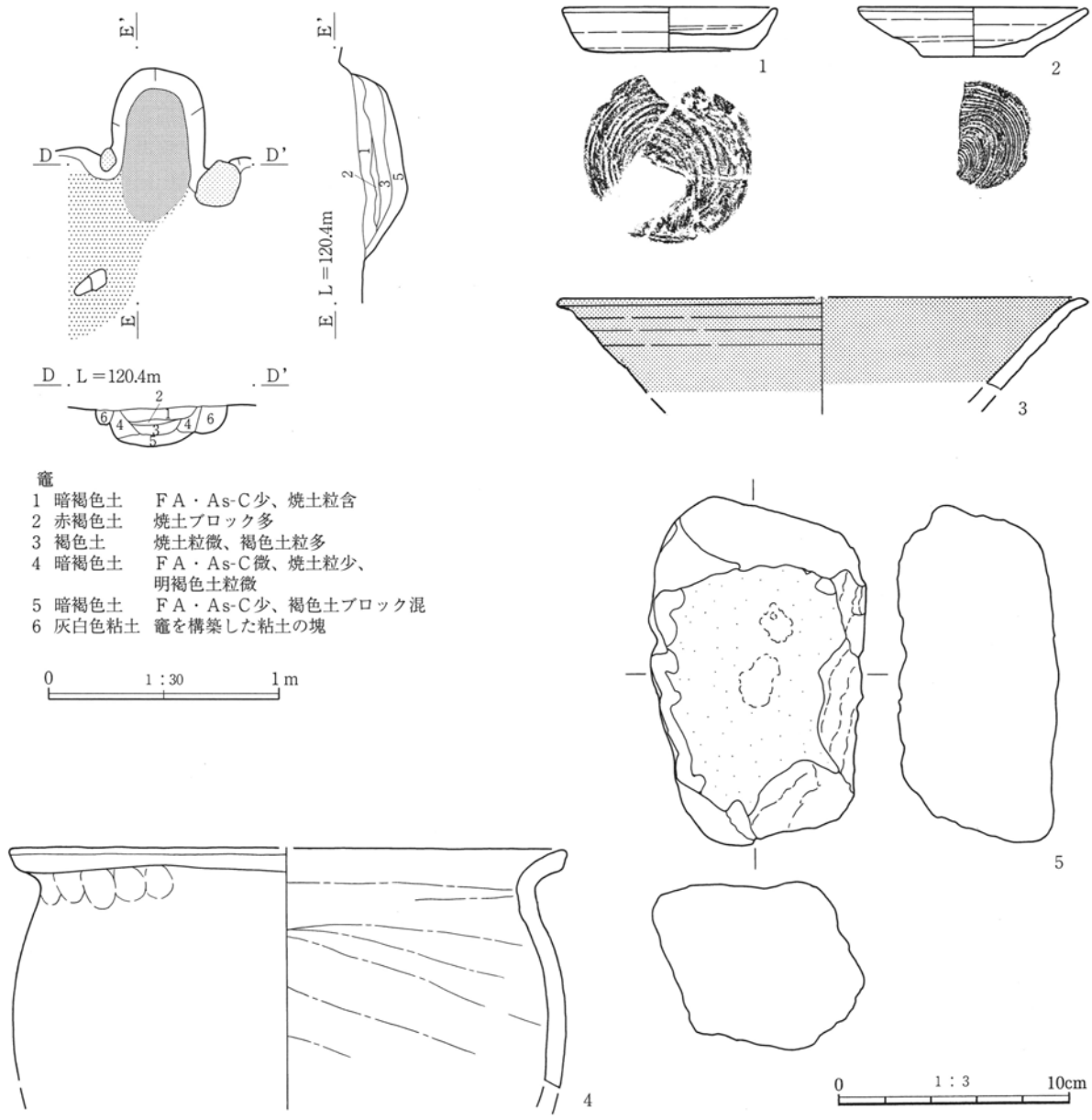
壁溝・柱穴　検出されなかった。　**貯蔵穴**　住居の南東に設置。径56cm・深さ68cmの楕円形を呈する。

竈　東壁面の中央部を掘り込んで造られている。袖部は石材ではなく、粘質土を張り付けて造られていた。支脚石等は検出されなかったが、竈の構築材（天井材か）に使用されたと思われる凝灰岩が出土した。凝灰岩は被熱し赤化しており、長さ53cm、幅14cm、厚さ11cmを測る。両袖方向25cm、煙道方向50cmを測る。　**遺物**　須恵器皿、灰釉陶器埦、土師器土釜、磨石が出土している。他に、土師器片2.34kg、須恵器片280ｇが出土。　**所見**　出土遺物から11世紀前半と考えられる。





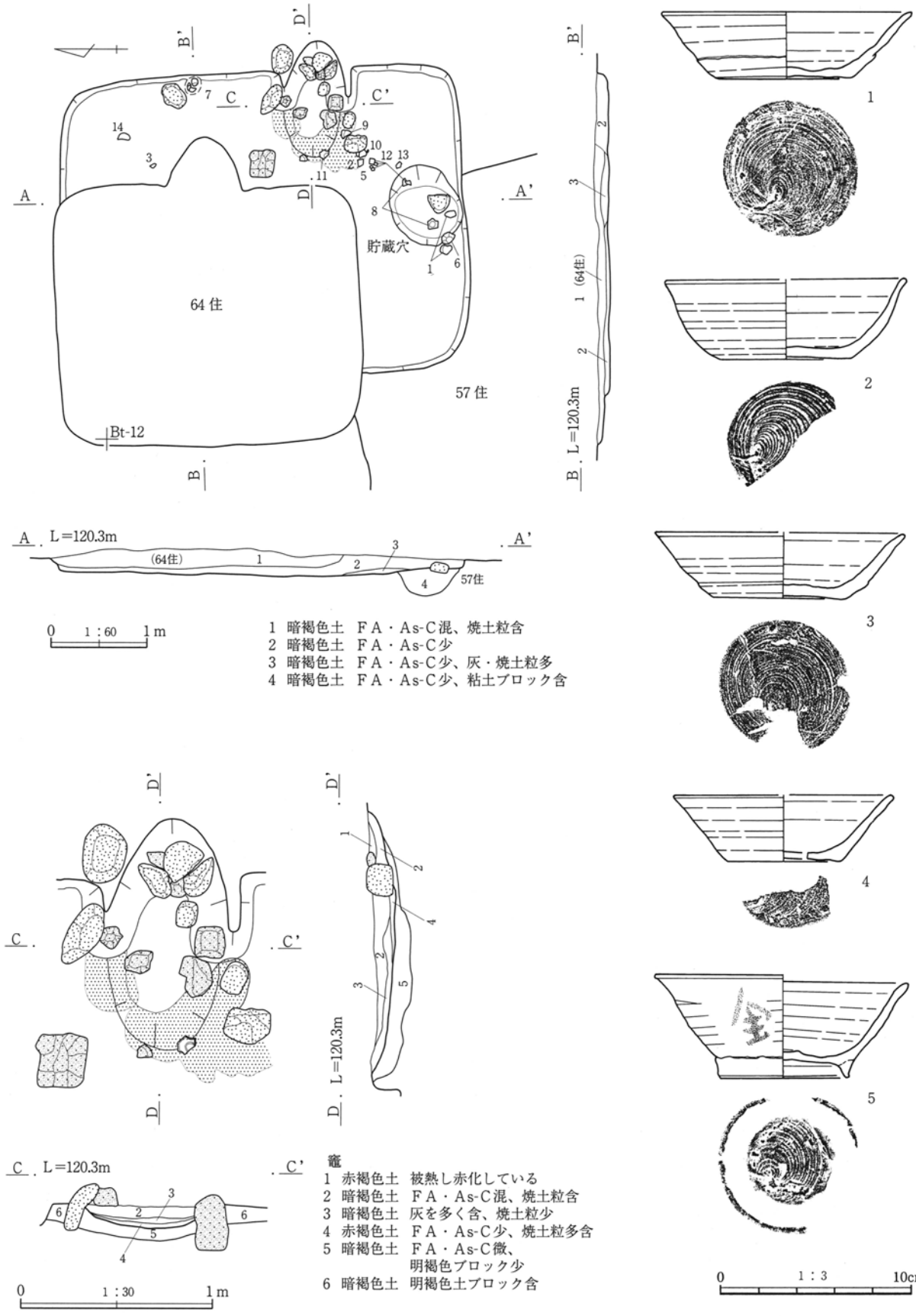
第117図　68号住居跡



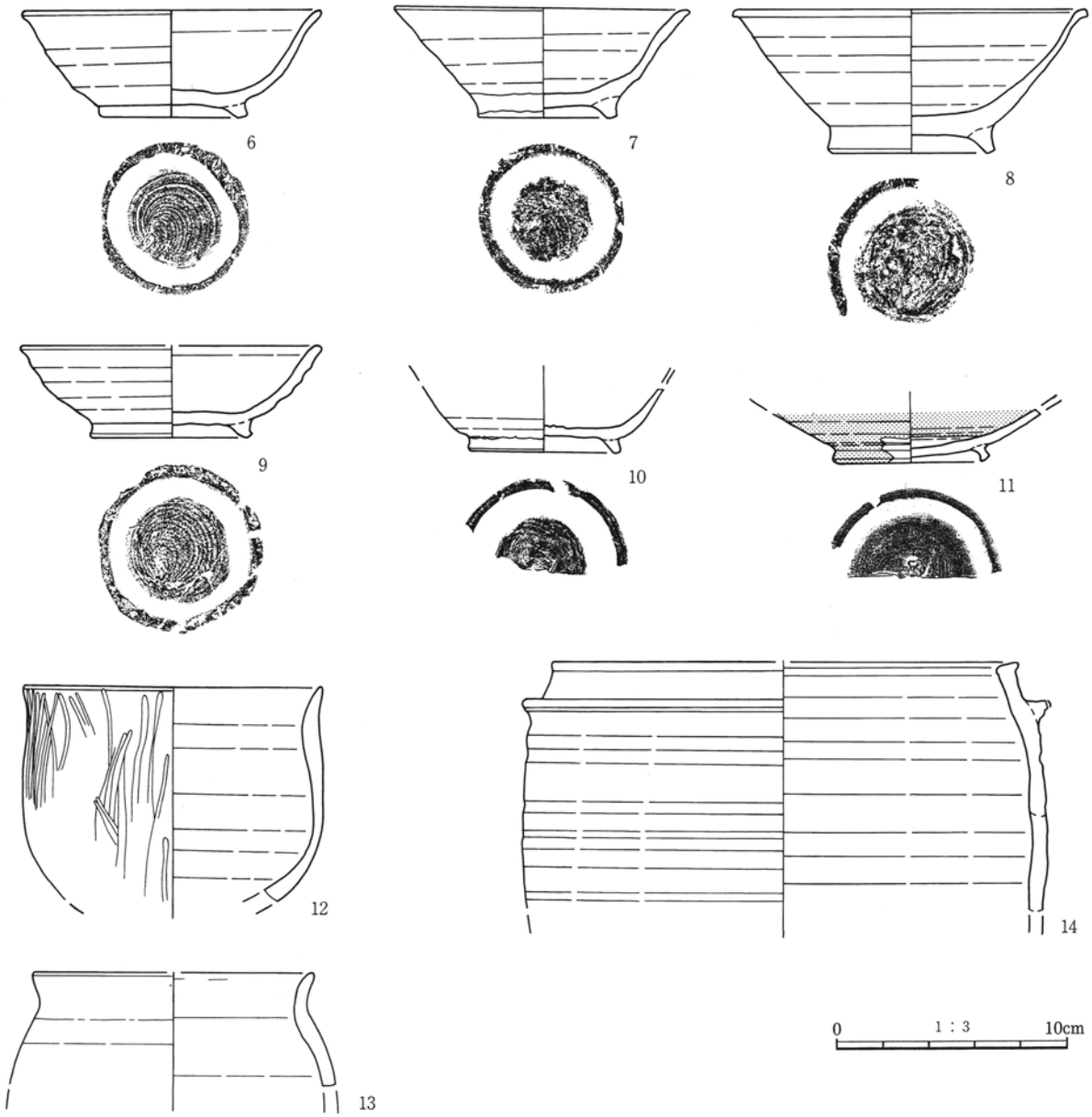
第118図　68号住居跡竈、出土遺物

69号住居跡（第119・120図、ＰＬ20・21・42）

位置　Ｂｓ～ｔ－11　**重複**　57・64号住居と重複している。本住居が57号住居より新しく、64号住居より古い。　**形状**　長軸4.2m、短軸3.2mの隅丸長方形を呈する。　**面積**　(6.26) ㎡　**方位**　Ｎ－87°－Ｅ　**床面**　遺構確認面から10cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.20mを測る。　**壁溝・柱穴**　検出されなかった。　**貯蔵穴**　住居の南隅に設置。径85cm・深さ22cmの楕円形を呈する。須恵器坏・埦が出土。　**竈**　東壁面の南寄りを掘り込んで造られている。袖部・燃焼部からは、被熱し赤化した凝灰岩と川原石が出土した。袖部などの構築材には、凝灰岩や川原石が用いられたと思われる。両袖方向32cm、煙道方向74cmを測る。　**遺物**　須恵器坏・埦・鉢・小型甕・羽釜、灰釉陶器皿が出土している。他に、土師器片950ｇ、須恵器片1.49kgが出土。　**所見**　出土遺物から10世紀前半と考えられる。



第119図　69号住居跡・竈、出土遺物（１）

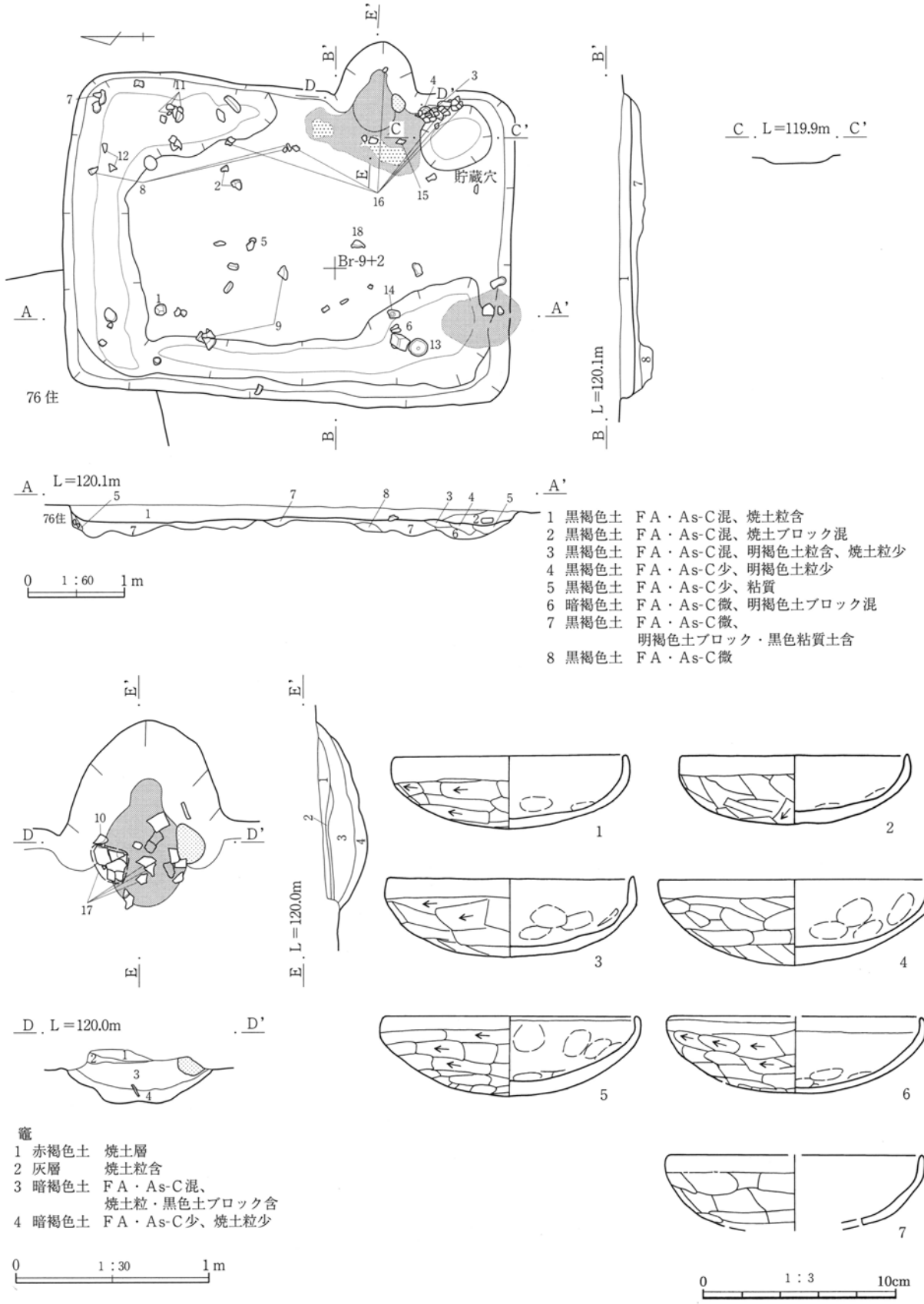


第120図　69号住居跡出土遺物（２）

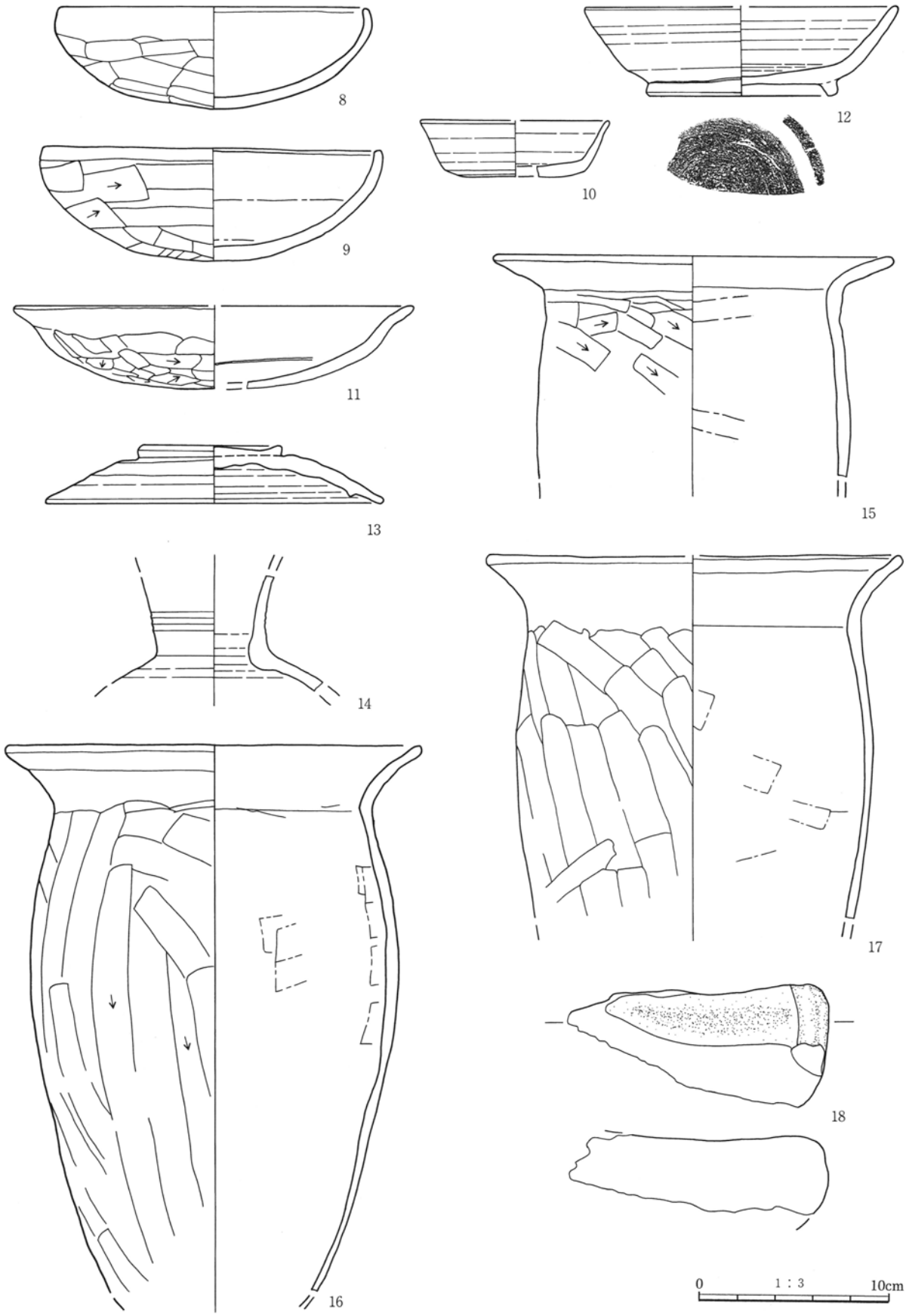
72号住居跡（第121・122図、ＰＬ22・42・43）

位置　Ｂｑ～ｒ－８～９　**重複**　76号住居と重複している。本住居が新しい。　**形状**　長軸4.2ｍ、短軸3.2ｍの隅丸長方形を呈する。　**面積**　13.37㎡　**方位**　Ｎ－85°－Ｗ　**床面**　遺構確認面から16cm掘り込んで、床面になる。標高は平均119.81ｍを測る。　**壁溝・柱穴**　検出されなかった。　**貯蔵穴**　住居の南隅に設置。径73cm・深さ10cmの楕円形を呈する。土師器甕が出土。　**竈**　東壁面の南寄りを掘り込んで造られている。袖部は石材ではなく、粘質土を張り付けて造られていたと思われる。両袖部は熱を受け赤化していた。支脚石等は検出されなかったが、土師器甕、須恵器坏などの土器片が多量に出土した。両袖方向45cm、煙道方向75cmを測る。

遺物　土師器坏・甕、須恵器坏・埦・蓋・長頸壺、石皿が出土している。他に、土師器片4.17kg、須恵器片1.08kgが出土。　**所見**　出土遺物から８世紀前半と考えられる。



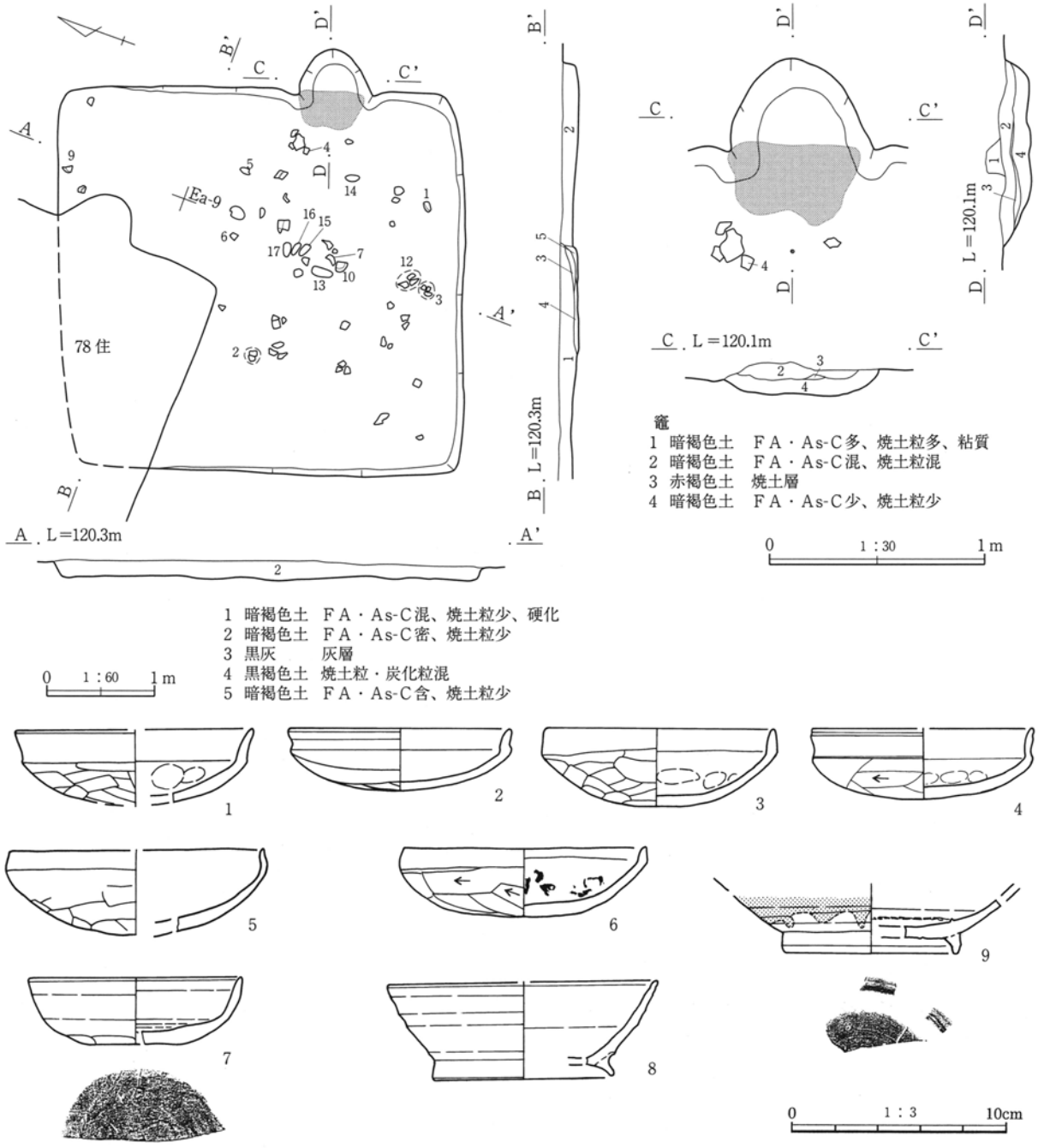
第121図　72号住居跡・竈、出土遺物（１）



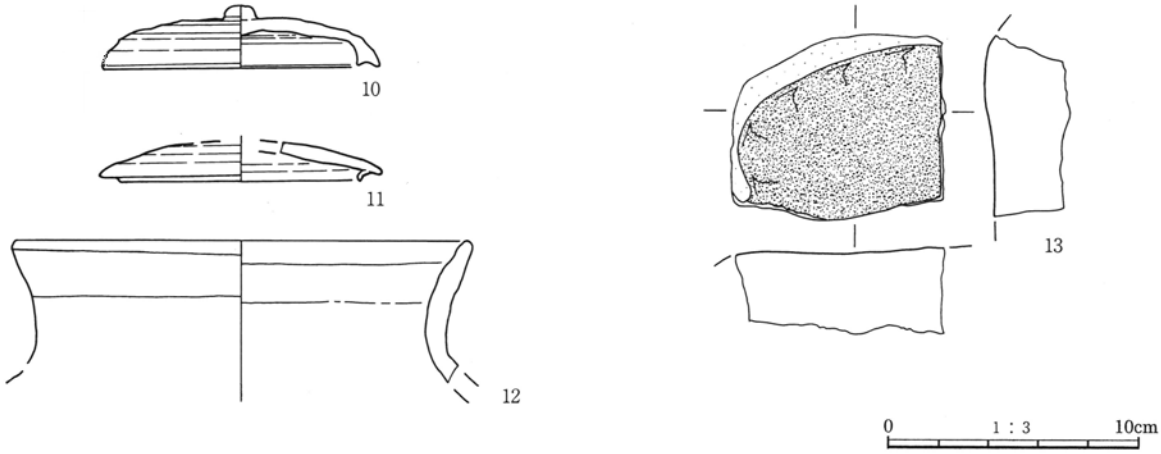
第122図　72号住居跡出土遺物（２）

73号住居跡（第123・124図、ＰＬ22・43）

位置　Ｂｔ・Ｅａ－８～９　**重複**　78号住居と重複している。本住居が古い。　**形状**　長軸3.7m、短軸3.5mの隅丸方形を呈する。　**面積**　（10.11）㎡　**方位**　Ｎ－69°－Ｅ　**床面**　遺構確認面から10cm掘り込んで、床面になる。標高は平均119.95mを測る。　**壁溝・貯蔵穴・柱穴**　検出されなかった。　**竈**　東壁面の南寄りを掘り込んで造られている。袖部は石材ではなく、粘質土を張り付けて造られていたと思われる。支脚石等は検出されなかった。両袖方向40cm、煙道方向55cmを測る。　**遺物**　土師器坏・甕、須恵器坏・埦・蓋、灰釉陶器埦、磨石、こも編み石が出土している。他に、土師器片3.88kg、須恵器片340ｇが出土。　**所見**　出土遺物から７世紀後半と考えられる。



第123図　73号住居跡・竈、出土遺物（１）



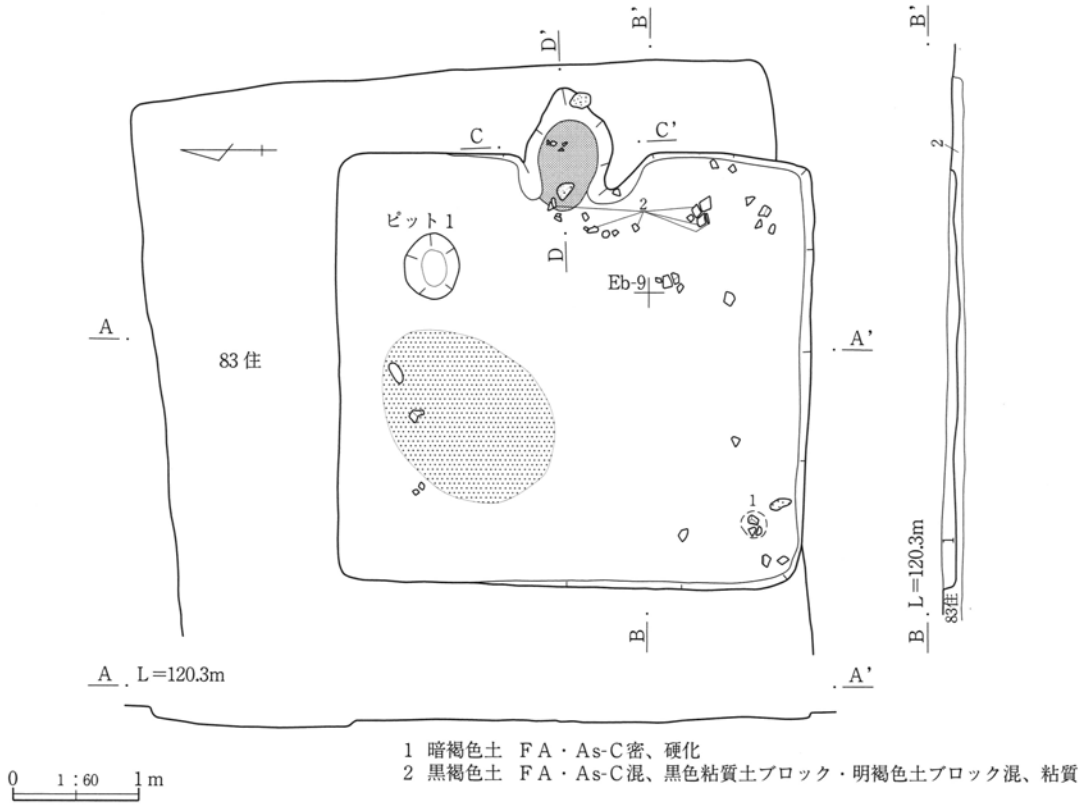
第124図　73号住居跡出土遺物（２）

75号住居跡（第125・126図、ＰＬ23・44）

位置　Ｅａ～ｂ－８～９　**重複**　83号住居と重複している。本住居が新しい。　**形状**　長軸3.9m、短軸3.5mの隅丸方形を呈する。　**面積**　12.20m²

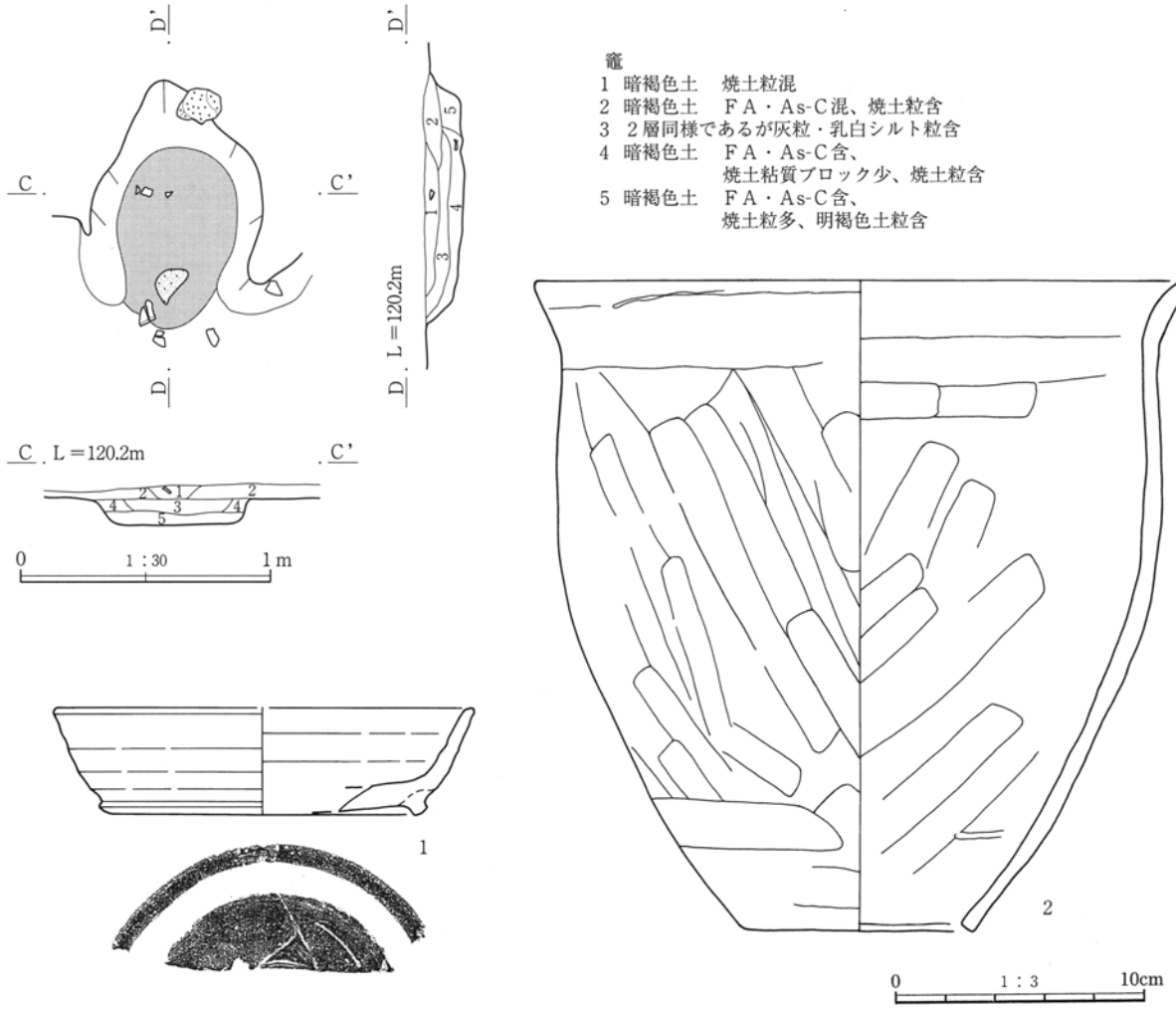
方位　Ｎ－90°　**床面**　遺構確認面から12cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.01mを測る。

壁溝・貯蔵穴・柱穴　検出されなかった。　**竈**　東壁面の中央部を掘り込んで造られている。袖部は石材ではなく、粘質土を張り付けて造られていたと思われる。支脚石等は検出されなかったが、煙道部から川原石が出土した。燃焼部からは土師器甑などの土器片が出土した。両袖方向48cm、煙道方向90cmを測る。　**遺物**　土師器甑、須恵器有台坏が出土している。他に、土師器片4.46kg、須恵器片140ｇが出土。　**所見**　出土遺物から８世紀前半と考えられる。



1　暗褐色土　ＦＡ・As-C密、硬化
2　黒褐色土　ＦＡ・As-C混、黒色粘質土ブロック・明褐色土ブロック混、粘質

第125図　75号住居跡

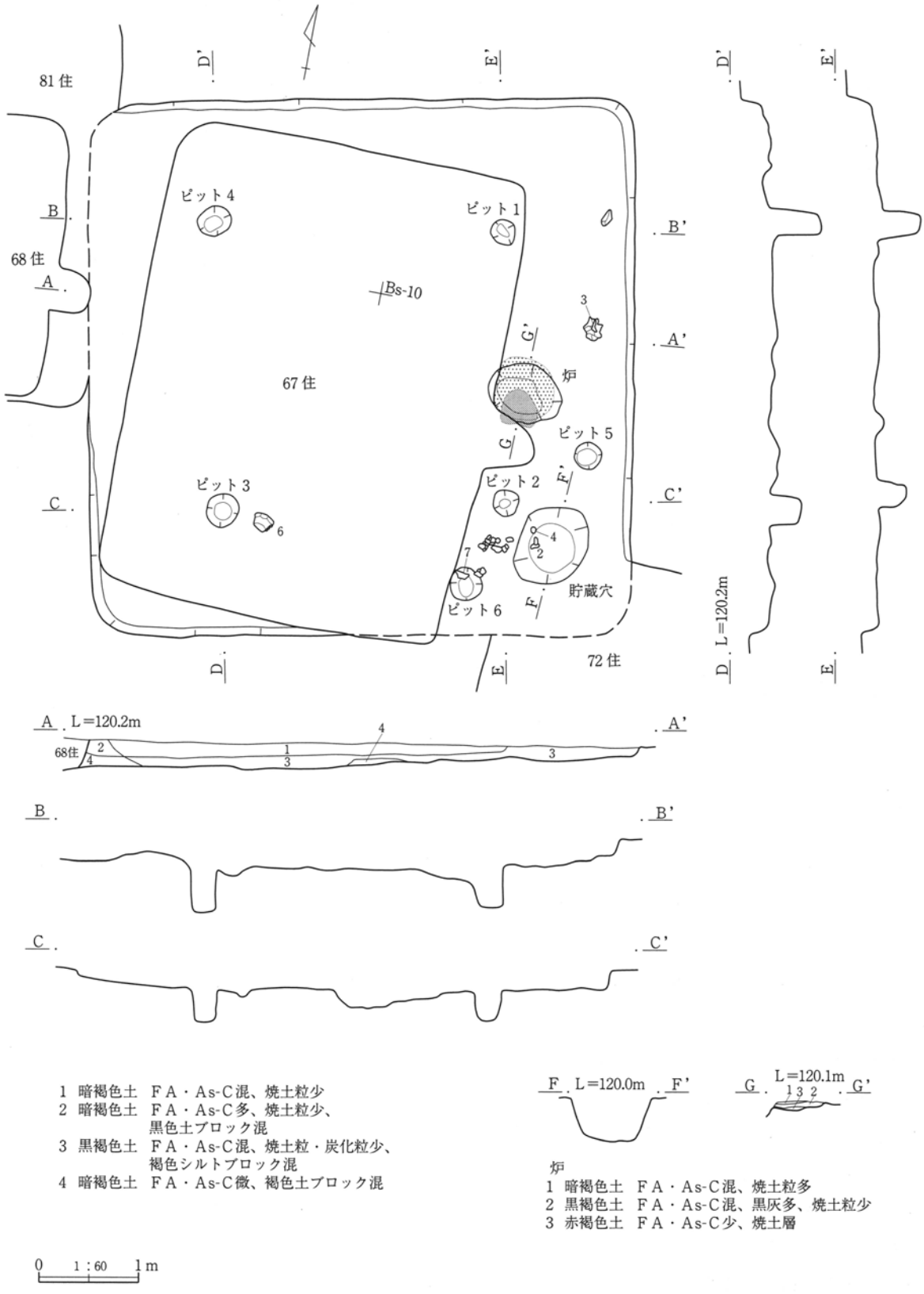


第126図　75号住居跡竈、出土遺物

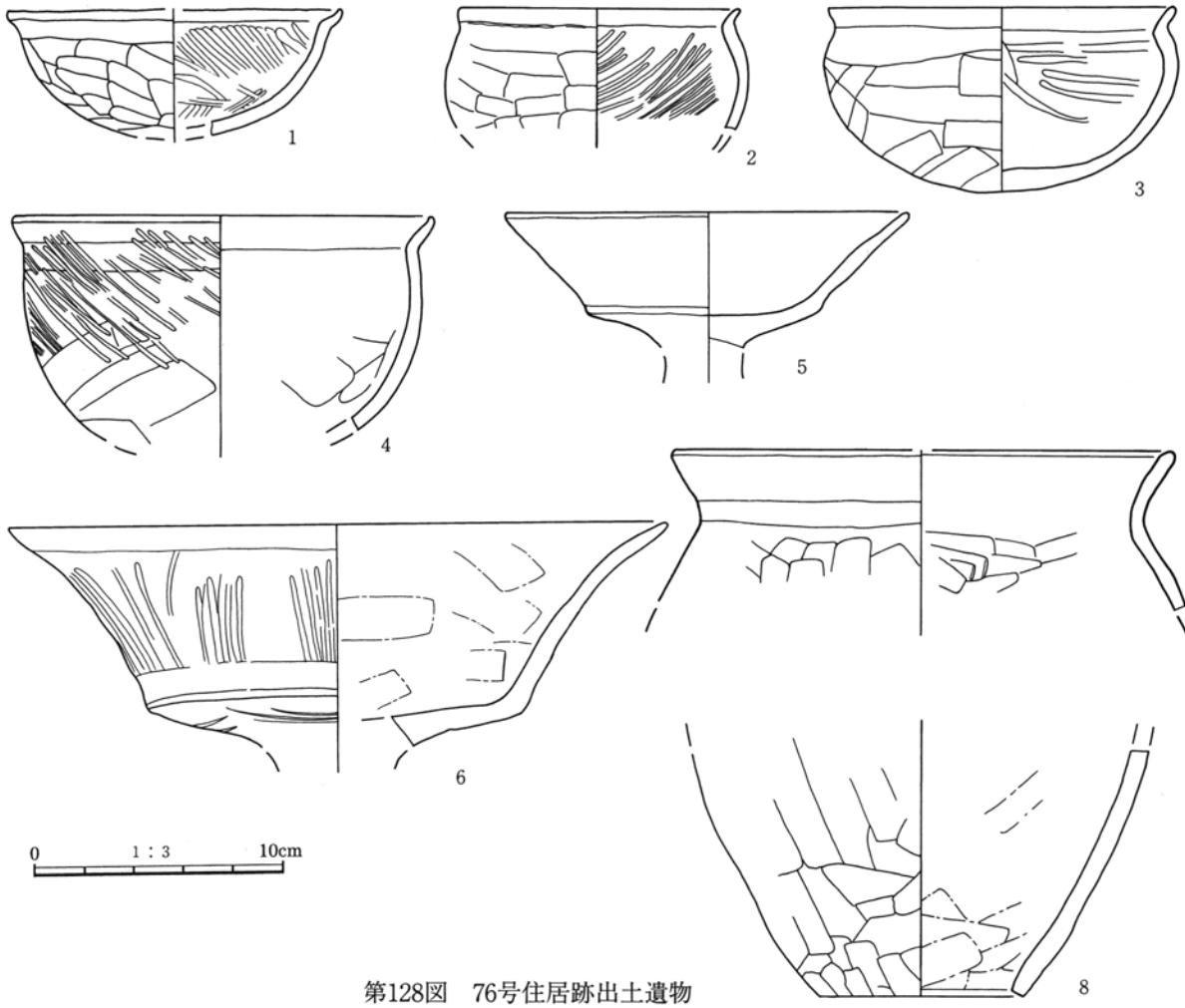
76号住居跡（第127・128図、ＰＬ23・44）

位置　Ｂｒ～ｓ－９～10　**重複**　67・68・72・81号住居と重複している。本住居が67・68・72号住居より古い。81号住居との重複関係は不明。　**形状**　長軸5.5m、短軸5.4mの隅丸方形を呈する。　**面積**　(28.33)㎡　**方位**　Ｎ－５°－Ｗ　**床面**　遺構確認面から20cm掘り込んで、床面になる。標高は平均119.81mを測る。　**壁溝**　検出されなかった。　**貯蔵穴**　住居の南東に設置。径92cm・深さ42cmの楕円形を呈する。土師器坏・鉢が出土。　**柱穴**　柱穴と思われるピットは６基検出された。ピット１は、径27cm・深さ30cm。ピット２は、径28cm・深さ30cm。ピット３は、径36cm・深さ33cm。ピット４は、径33cm・深さ31cm。ピット５は、径26cm・深さ23cm。ピット６は、径33cm・深さ18cmを測る。　**炉**　東側のほぼ中央部に設置。規模は、径68cm・深さ６cmを測る。　**遺物**　土師器坏・鉢・高坏・甕・甑が出土している。他に、Ｓ字状口縁台付甕などの土師器片430ｇが出土。

所見　住居の半分以上を67号住居によって壊されているため、全容は明らかにできなかった。出土遺物から５世紀中～後葉と考えられる。



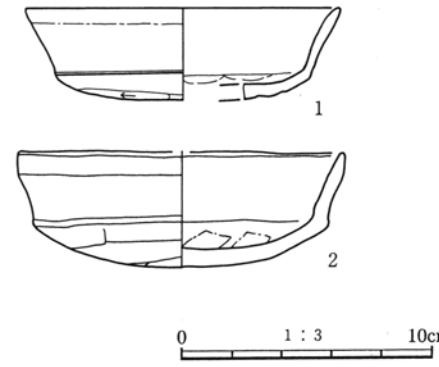
第127図　76号住居跡



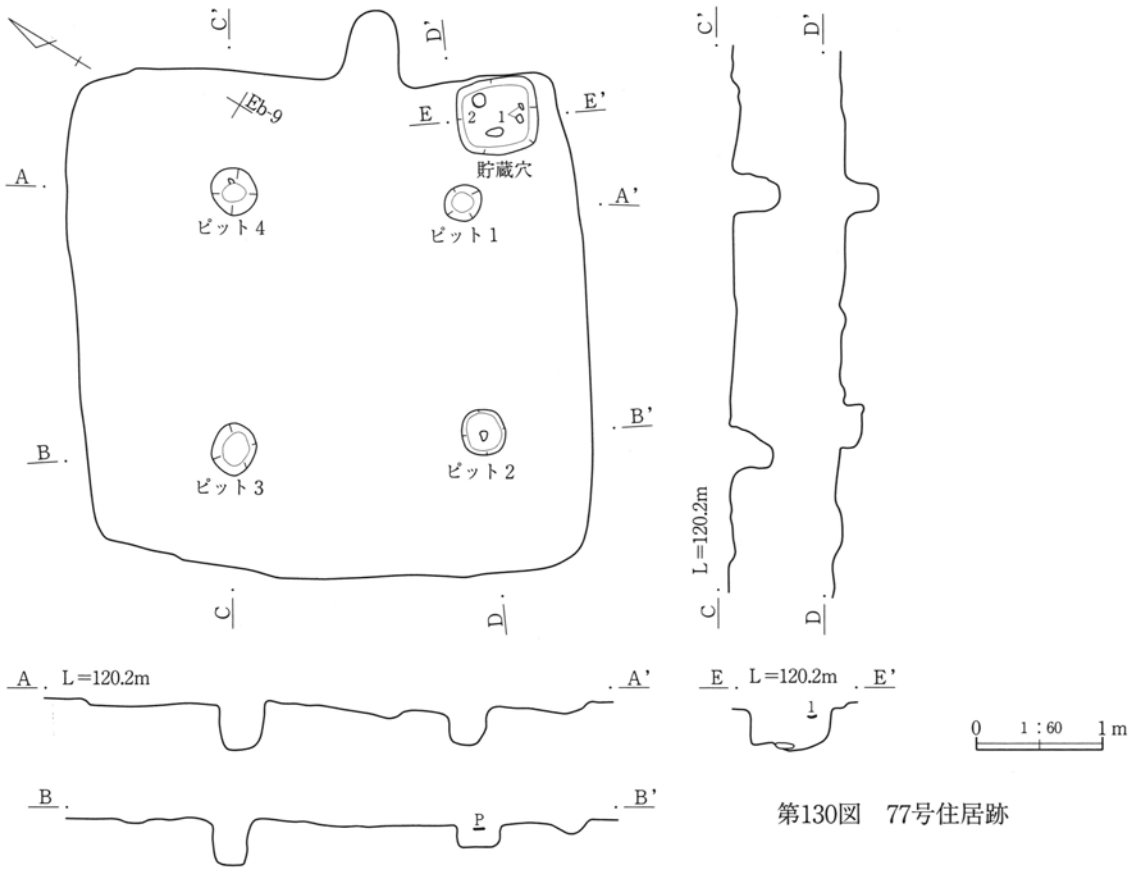
第128図　76号住居跡出土遺物

77号住居跡（第129・130図、ＰＬ23・44）

位置　Ｅｃ～ｄ－８～９　**重複**　なし。　**形状**　長軸4.1m、短軸3.9mの隅丸方形を呈する。　**面積**　15.77㎡　**方位**　Ｎ－64°－Ｅ　**床面**　攪乱のため、確認面は使用面下までおよんでおり、貯蔵穴・柱穴しか検出できなかった。一部検出された床面の標高は平均120.06ｍを測る。　**壁溝**　検出されなかった。　**貯蔵穴**　住居の南東に設置。長軸67cm・短軸60cm・深さ33cmの隅丸方形を呈する。土師器坏・礫が出土。　**柱穴**　柱穴と思われるピットは４基検出された。ピット１は、径28cm・深さ26cm。ピット２は、径32cm・深さ20cm。ピット３は、径38cm・深さ34cm。ピット４は、径33cm・深さ38cmを測る。　**竈**　東壁面の南寄りに設置されていたと思われる。削平され残存状態は悪いが、焼土・灰が少量確認された。両袖方向46cm、煙道方向56cmを測る。　**遺物**　土師器坏が出土している。他に、土師器片195ｇが出土。　**所見**　出土遺物から６世紀中葉と考えられる。



第129図　77号住居跡出土遺物



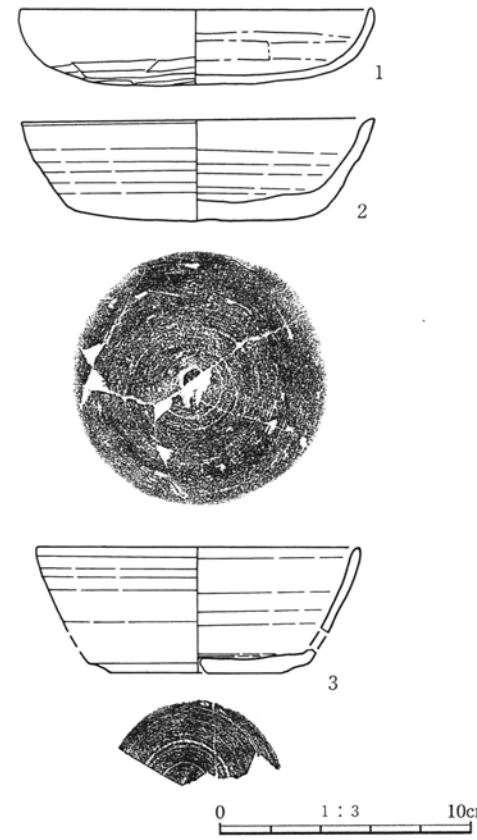
第130図　77号住居跡

78号住居跡（第131・132図、ＰＬ23・44）

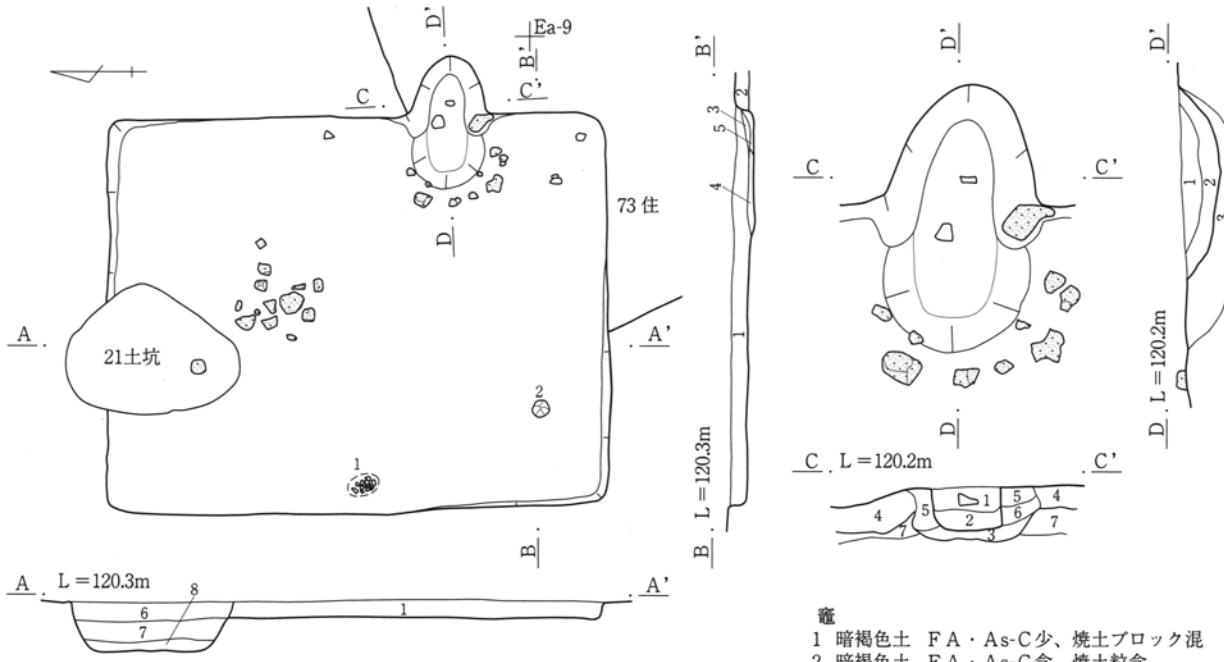
位置　Ｂｔ・Ｅａ－９　**重複**　73号住居・21号土坑と重複している。本住居が73号住居より新しく、21号土坑より古い。　**形状**　長軸4.2ｍ、短軸3.4ｍの隅丸長方形を呈する。　**面積**　11.50㎡　**方位**　Ｎ－90°　**床面**　遺構確認面から８cm掘り込んで、床面になる。標高は平均119.95ｍを測る。

壁溝・貯蔵穴・柱穴　検出されなかった。　**竈**　東壁面の南寄りを掘り込んで造られている。袖部の前からは、被熱し赤化した凝灰岩が出土した。袖部・支脚・天井材などには、凝灰岩が構築材に用いられたと思われる。両袖方向30cm、煙道方向60cmを測る。　**遺物**　土師器坏が出土している。他に、土師器片1.57kg、須恵器片272ｇが出土。

所見　出土遺物から８世紀中葉と考えられる。



第131図　78号住居跡出土遺物

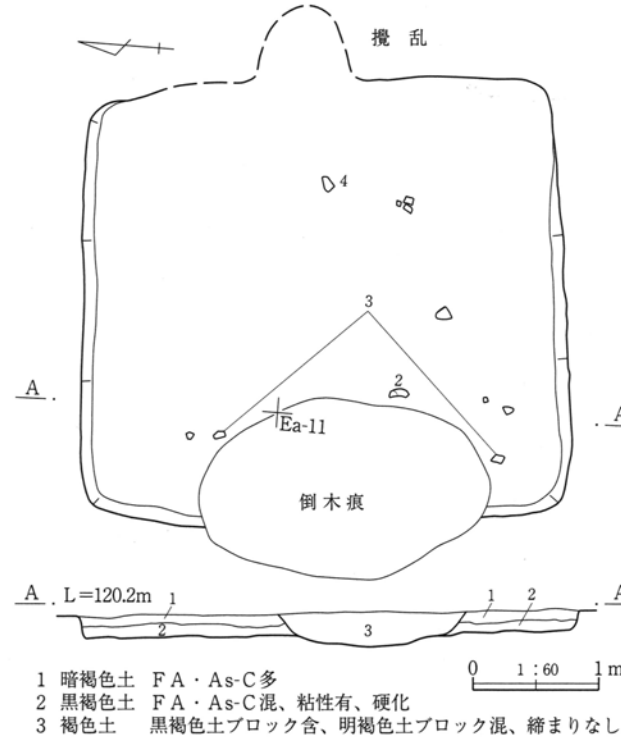


第132図　78号住居跡・竈

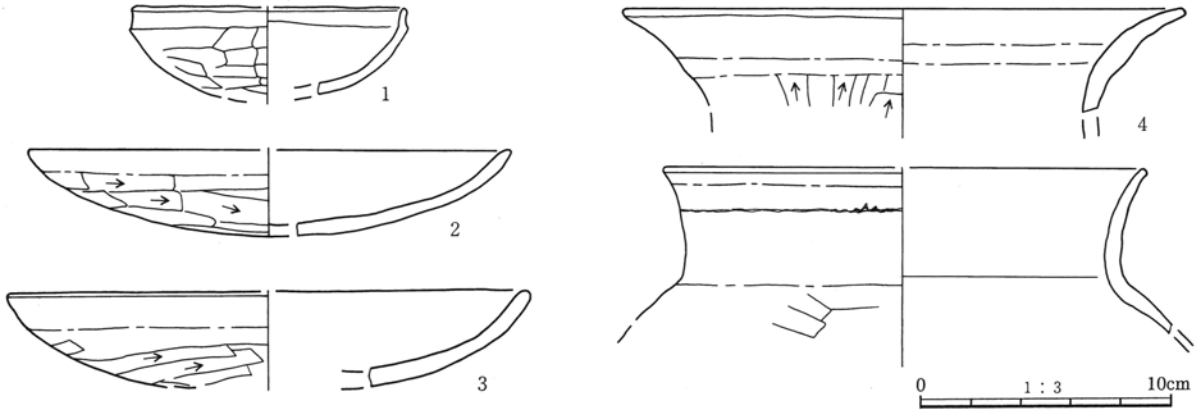
79号住居跡（第133・134図、ＰＬ23・44）

位置　Ｂｔ・Ｅａ－10～11　**重複**　なし。　**形状**　長軸3.8m、短軸3.2mの隅丸方形を呈する。

面積　(10.51) ㎡　**方位**　Ｎ－80°－Ｅ　**床面**　遺構確認面から20cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.00mを測る。　**壁溝・貯蔵穴・柱穴**　検出されなかった。　**竈**　東壁面に設置されていたと思われる。攪乱で削平され残存悪いが、焼土・灰が少量確認された。両袖方向（70）cm、煙道方向（58）cmを測る。　**遺物**　土師器坏・皿・甕が出土している。他に、土師器片2.93kg、須恵器片380ｇが出土。　**所見**　攪乱や倒木痕で壊されているため、全容は明らかにできなかった。出土遺物から７世紀後半と考えられる。



第133図　79号住居跡

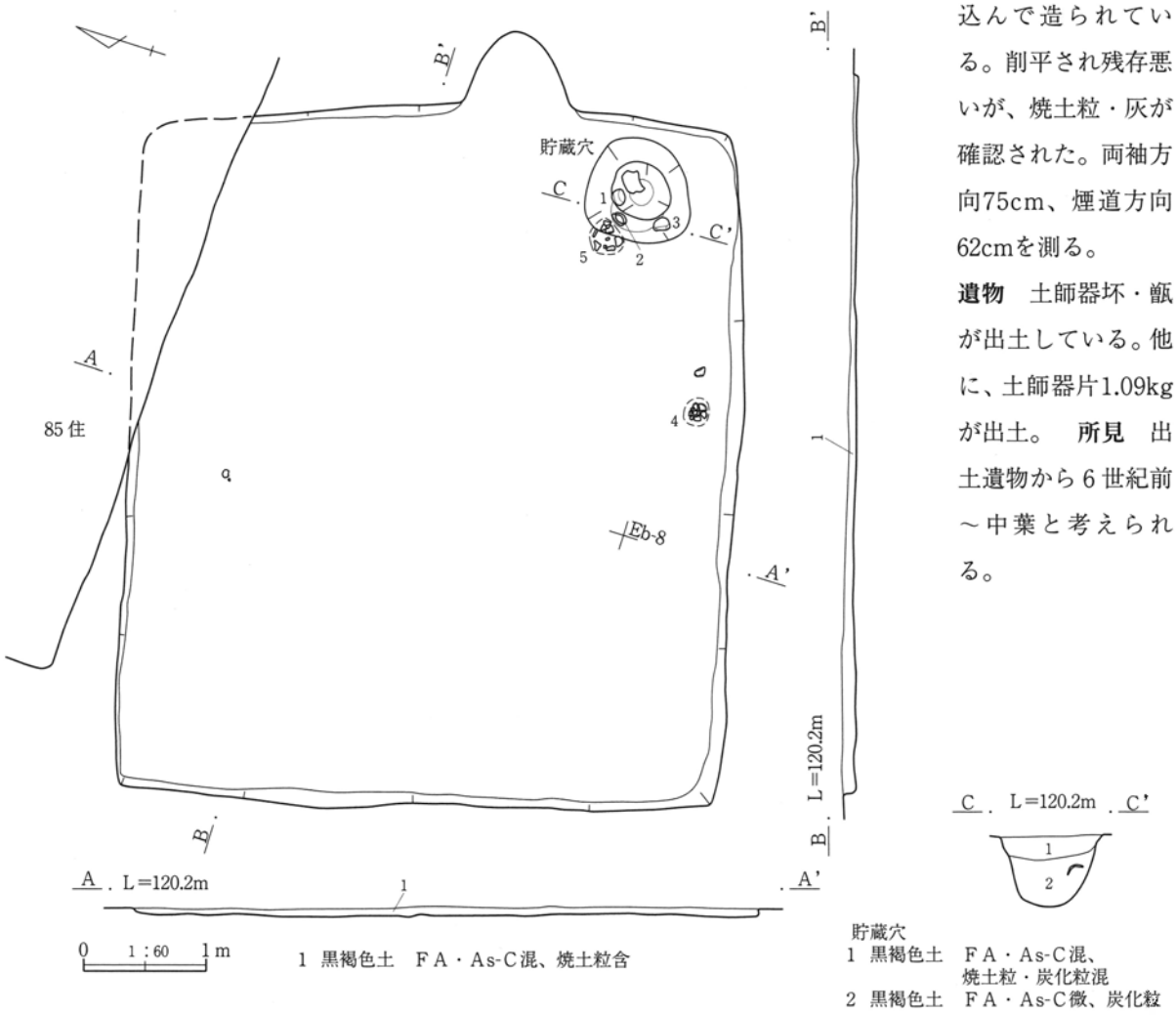


第134図　79号住居跡出土遺物

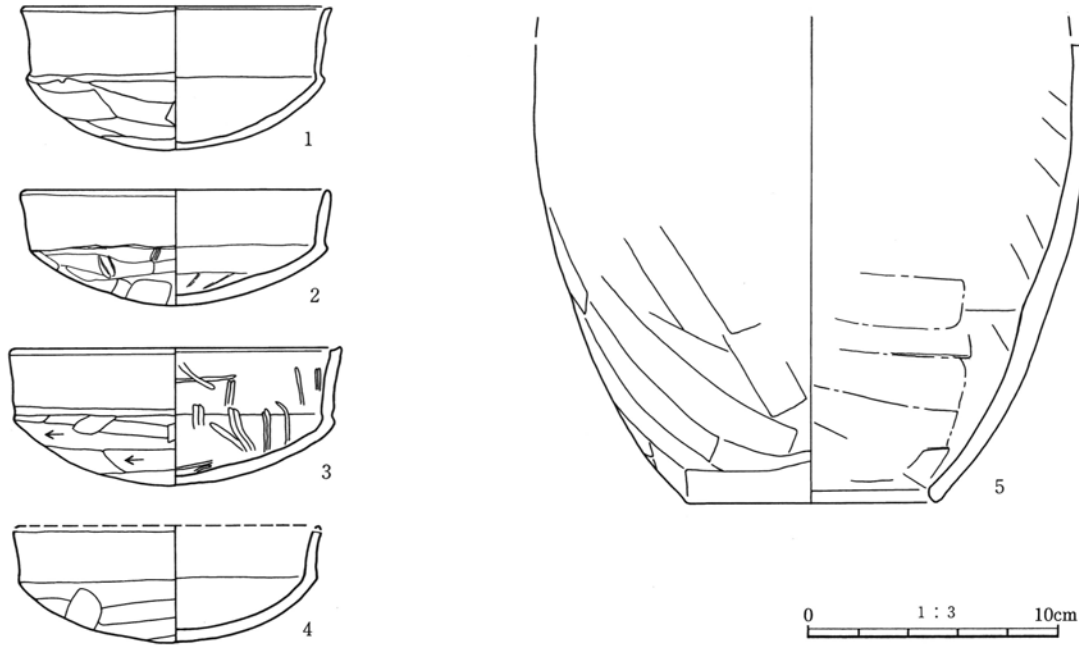
80号住居跡（第135・136図、ＰＬ24・44）

位置　Ｅａ～ｂ－７～８　**重複**　85号住居と重複している。本住居が古い。　**形状**　長軸5.6ｍ、短軸4.8ｍの隅丸長方形を呈する。　**面積**　(25.38) ㎡　**方位**　Ｎ－78°－Ｅ　**床面**　遺構確認面から５cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.00ｍを測る。　**壁溝・柱穴**　検出されなかった。　**貯蔵穴**　住居の南東に設置。径90cm・深さ72cmの楕円形を呈する。土師器坏が３点出土。　**竈**　東壁面の南寄りを掘り込んで造られている。削平され残存悪いが、焼土粒・灰が確認された。両袖方向75cm、煙道方向62cmを測る。

遺物　土師器坏・甑が出土している。他に、土師器片1.09kgが出土。　**所見**　出土遺物から６世紀前～中葉と考えられる。



第135図　80号住居跡



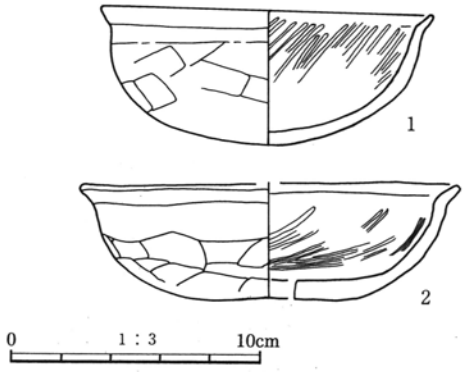
第136図　80号住居跡出土遺物

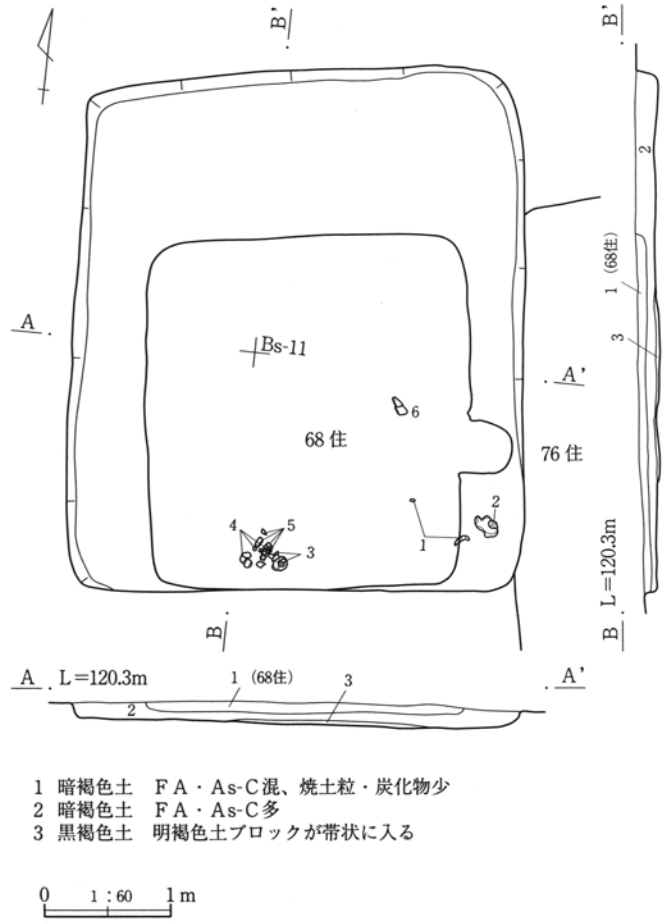
81号住居跡（第137・138図、ＰＬ44・45）

位置　Ｂｒ～ｓ－10～11　**重複**　68・76号住居と重複している。本住居が68号住居より古い。76号住居との重複関係は不明。　**形状**　長軸4.1ｍ、短軸3.5ｍの隅丸長方形を呈する。　**面積**　13.99m²

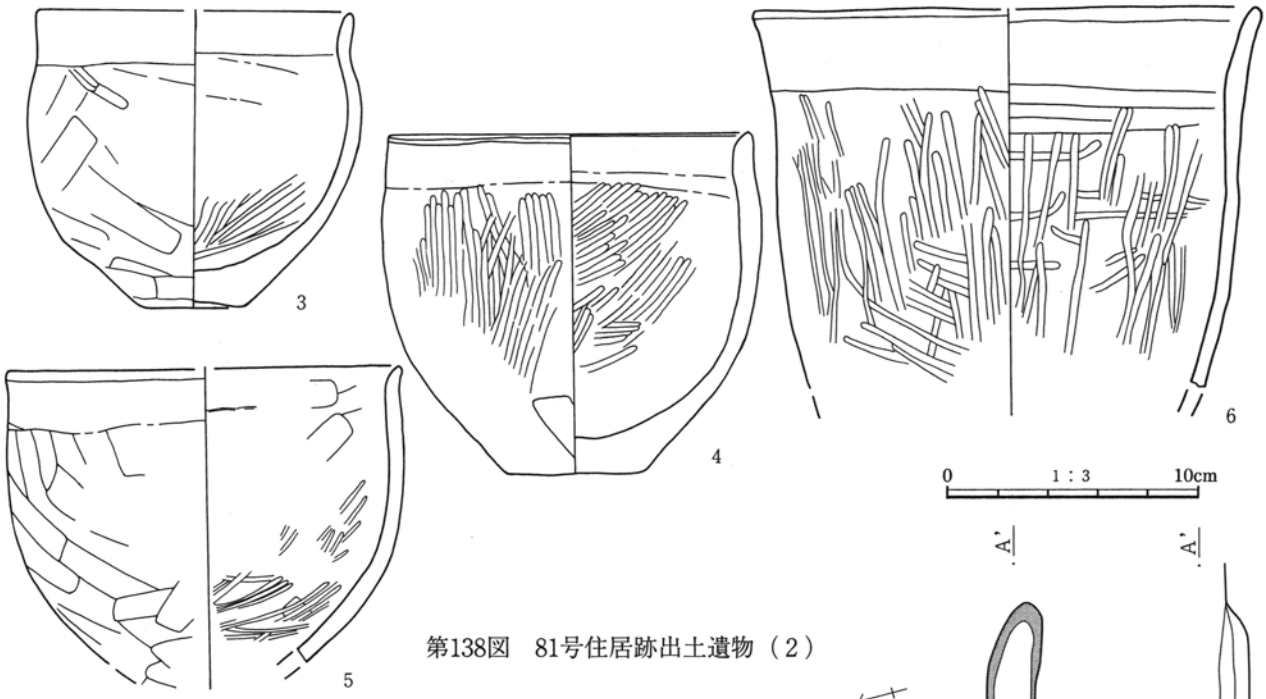
方位　Ｎ－２°－Ｗ　**床面**　遺構確認面から20cm掘り込んで、床面になる。標高は平均119.90ｍを測る。　**壁溝・貯蔵穴・柱穴・炉**　検出されなかった。

遺物　土師器坏・鉢・甑が出土している。他に土師器片が多量に出土。　**所見**　本住居は、調査時に68号住居と同時に調査したが、出土遺物・土層断面等を検討した結果、別の住居として掲載することにする。出土遺物から５世紀中～後葉と考えられる。





第137図　81号住居跡、出土遺物（１）



第138図　81号住居跡出土遺物（２）

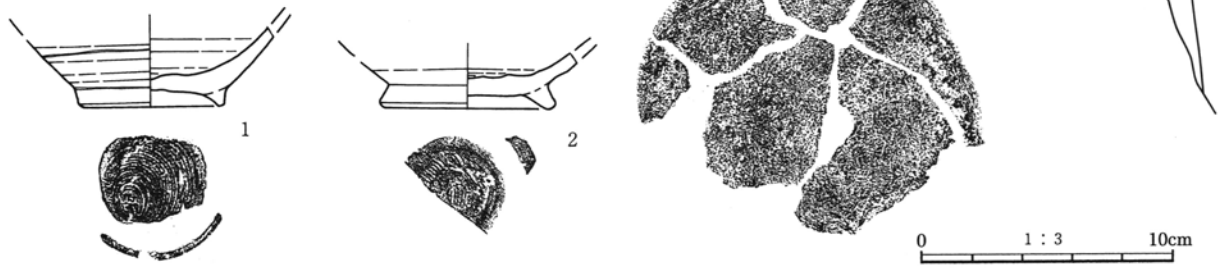
82号住居跡（第139図、ＰＬ24・45）

位置　Ｂｑ～ｒ－11～12　**重複**　57号住居と重複している。本住居が新しい。　**形状**　竈のみ検出。

面積　測定不可能。　**方位**　Ｎ－74°－Ｗ　**床面**　一部分で確認された床面の標高は平均120.15ｍを測る。　**壁溝・貯蔵穴・柱穴**　検出されなかった。

竈　東壁面南隅を掘り込んで造られている。煙道部は熱を受け赤化していた。燃焼部には、灰層が確認され、支脚に使用されたと思われる川原石が出土した。両袖方向30cm、煙道方向110cmを測る。

遺物　須恵器埦、土師器土釜、支脚石（熱を受け割れている）が出土している。他に、土師器片190ｇ、須恵器片350ｇが出土している。　**所見**　本住居は、調査時に57号住居を先行して調査したため、竈のみの検出になってしまった。出土遺物から10世紀と考えられる。



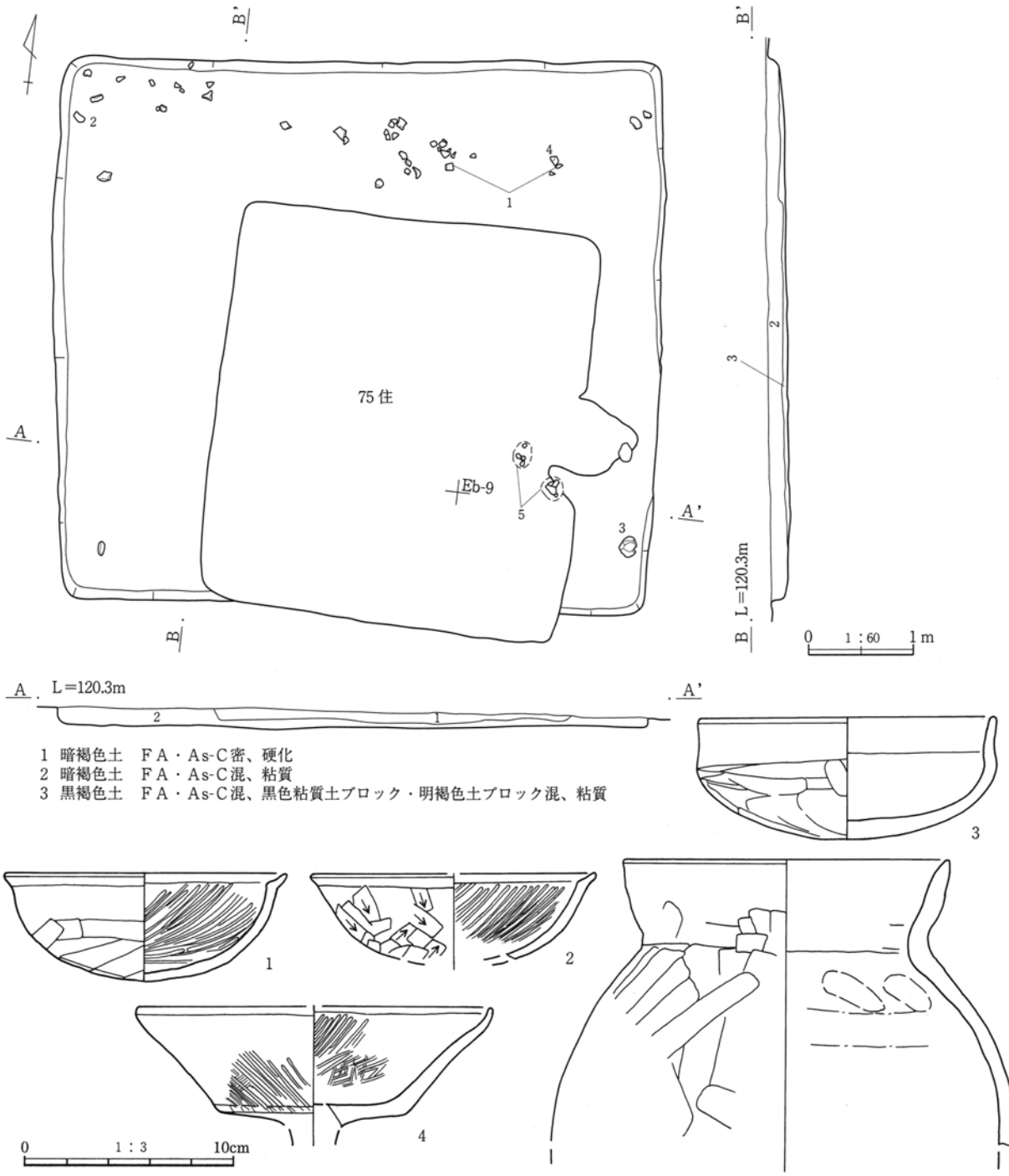
第139図　82号住居跡竈、出土遺物

83号住居跡（第140図、ＰＬ24・45）

位置　Ｅａ～ｂ－８～９　**重複**　75号住居と重複している。本住居が古い。　**形状**　長軸5.7ｍ、短軸5.5ｍの隅丸方形を呈する。　**面積**　（14.85）㎡　**方位**　Ｎ－５°－Ｗ　**床面**　遺構確認面から９cm掘り込んで、床面になる。標高は平均119.92ｍを測る。　**壁溝・貯蔵穴・柱穴・炉**　検出されなかった。

遺物　土師器坏・高坏・甕が出土している。他に、Ｓ字状口縁台付甕などの土師器片950ｇが出土。

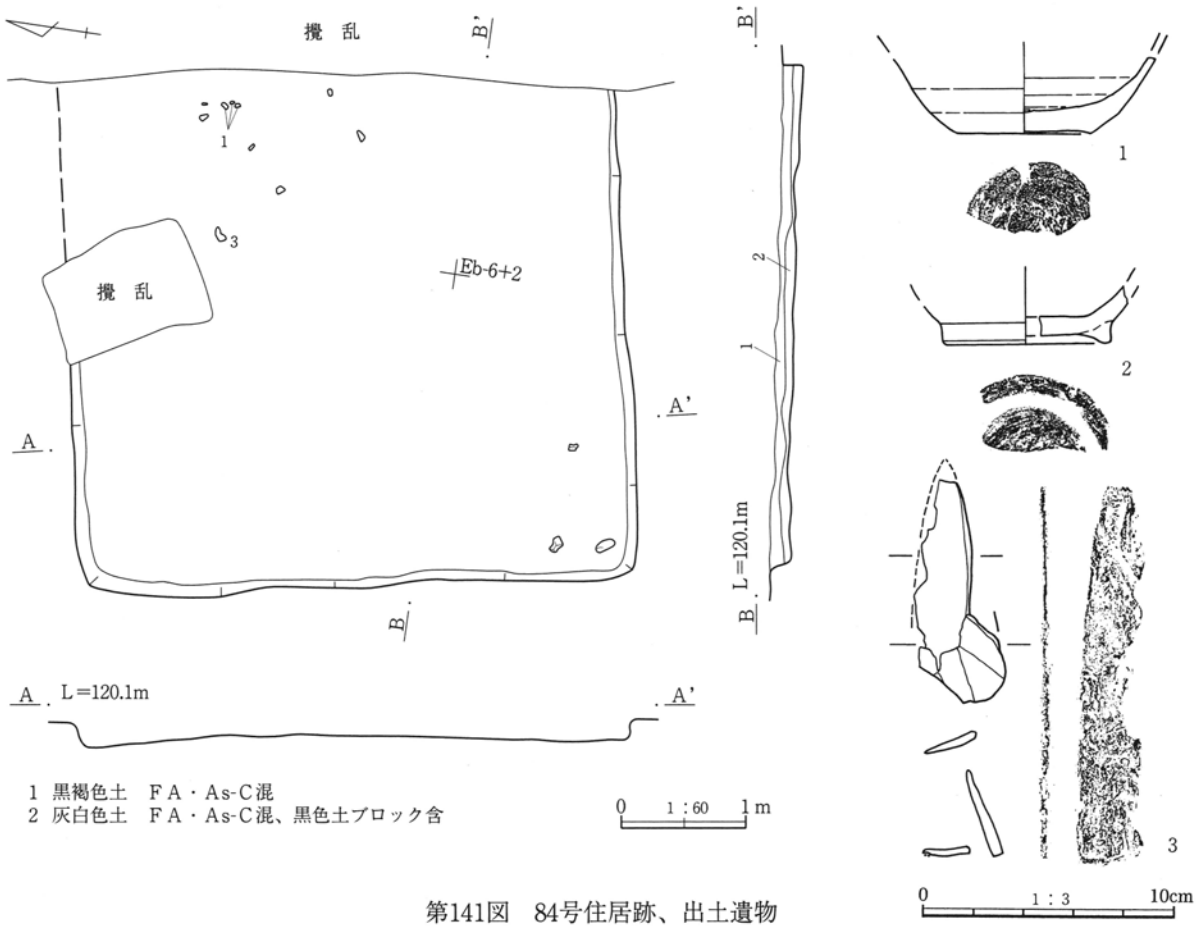
所見　住居の半分以上を75号住居によって壊されているため、全容は明らかにできなかった。出土遺物から５世紀中～後葉と考えられる。



第140図　83号住居跡、出土遺物

84号住居跡（第141図、ＰＬ24・45）

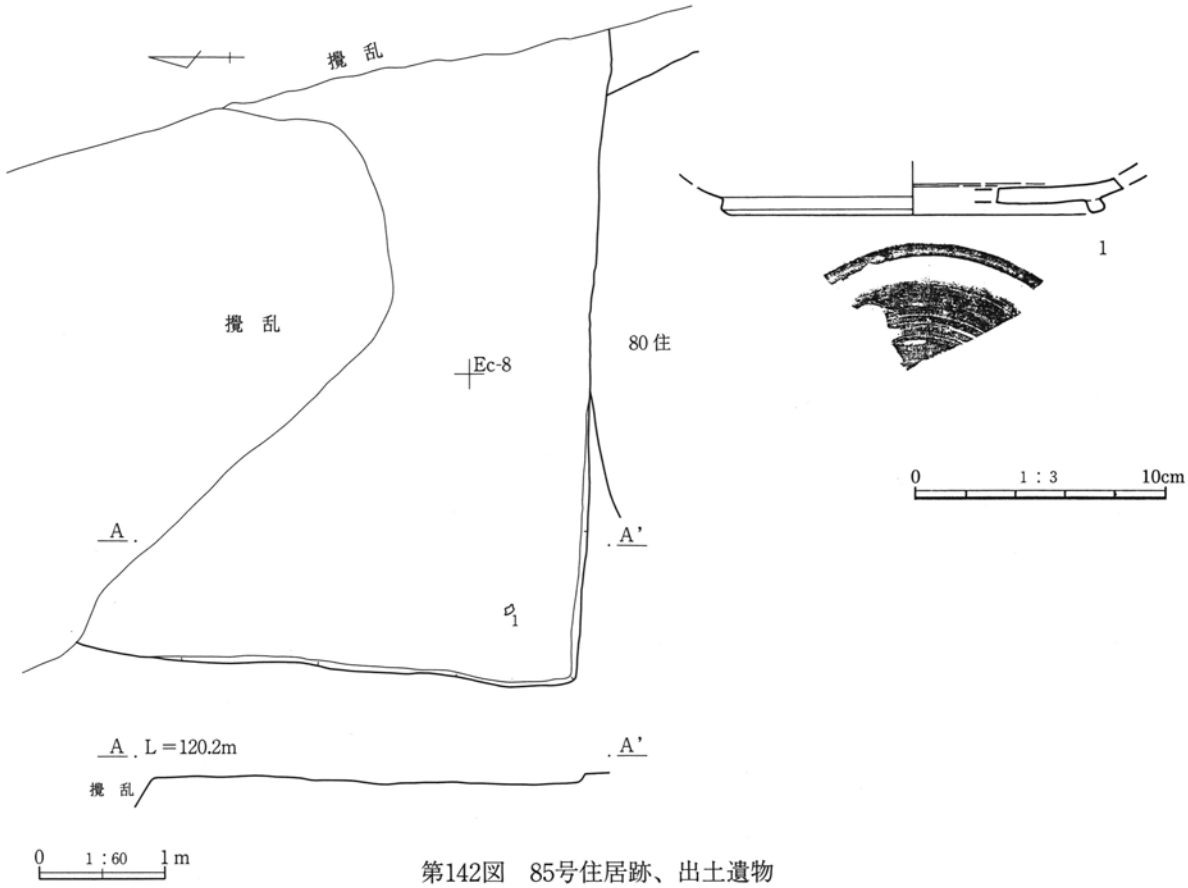
位置　Ｅａ～ｂ－６　**重複**　なし。　**形状**　長軸（5.4）ｍ、短軸4.5ｍを測る。　**面積**　（16.35）㎡　**方位**　測定不可能。　**床面**　遺構確認面から12cm掘り込んで、床面になる。標高は平均119.81ｍを測る。　**壁溝・貯蔵穴・柱穴**　検出されなかった。　**竈**　攪乱のため、検出されなかったが、東壁面に設置されていたと思われる。　**遺物**　須恵器坏・埦、鉄製品（腰刀）が出土している。他に、土師器片1.12kg、須恵器片520ｇが出土。　**所見**　東側が攪乱によって壊されているため、全容は明らかにできなかった。出土遺物から10世紀と考えられる。



第141図　84号住居跡、出土遺物

85号住居跡（第142図、ＰＬ24・45）

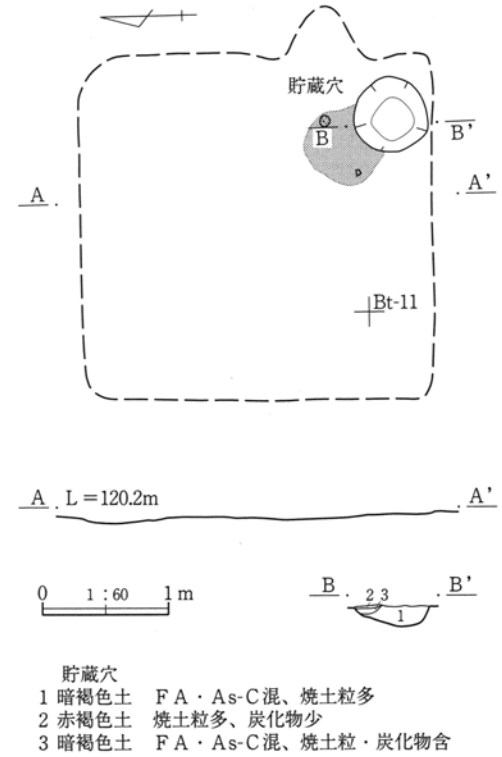
位置　Ｅｂ～ｃ－７～８　**重複**　80号住居と重複している。本住居が古い。　**形状**　長軸（5.3）ｍ、短軸（4.0）ｍを測る。　**面積**　（12.08）㎡　**方位**　測定不可能。　**床面**　遺構確認面から５cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.01ｍを測る。　**壁溝・貯蔵穴・柱穴・竈**　検出されなかった。　**遺物**　須恵器有台坏が出土している。他に、土師器片120ｇ、須恵器片10ｇが出土。　**所見**　住居の大部分が攪乱によって壊されているため、全容は明らかにできなかった。出土遺物から８世紀前半と考えられる。

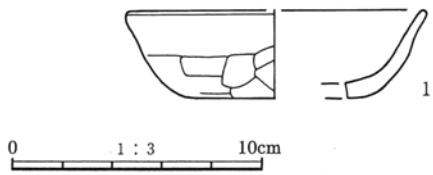


第142図　85号住居跡、出土遺物

86号住居跡（第143図、ＰＬ24・45）

位置　Ｂｓ～ｔ－10～11　**重複**　なし。　**形状**　長軸（2.8）ｍ、短軸（2.8）ｍの隅丸方形を呈する。**面積**　(7.55) ㎡　**方位**　Ｎ－90°　**床面**　撹乱のため、確認面は使用面までおよんでおり、貯蔵穴・竈しか検出できなかった。一部検出された床面の標高は平均120.13ｍを測る。　**壁溝・貯蔵穴・柱穴**　検出されなかった。　**竈**　東壁面に設置されていたが、残存悪い。焼土・灰の分布から竈と認定した。両袖方向 (50) cm、煙道方向 (40) cmを測る。　**遺物**　土師器坏が出土している。他に、須恵器片80ｇが出土。**所見**　出土遺物から10世紀と考えられる。





第143図　86号住居跡、出土遺物

（２）竪穴状遺構

１号竪穴状遺構（第144図、ＰＬ45）

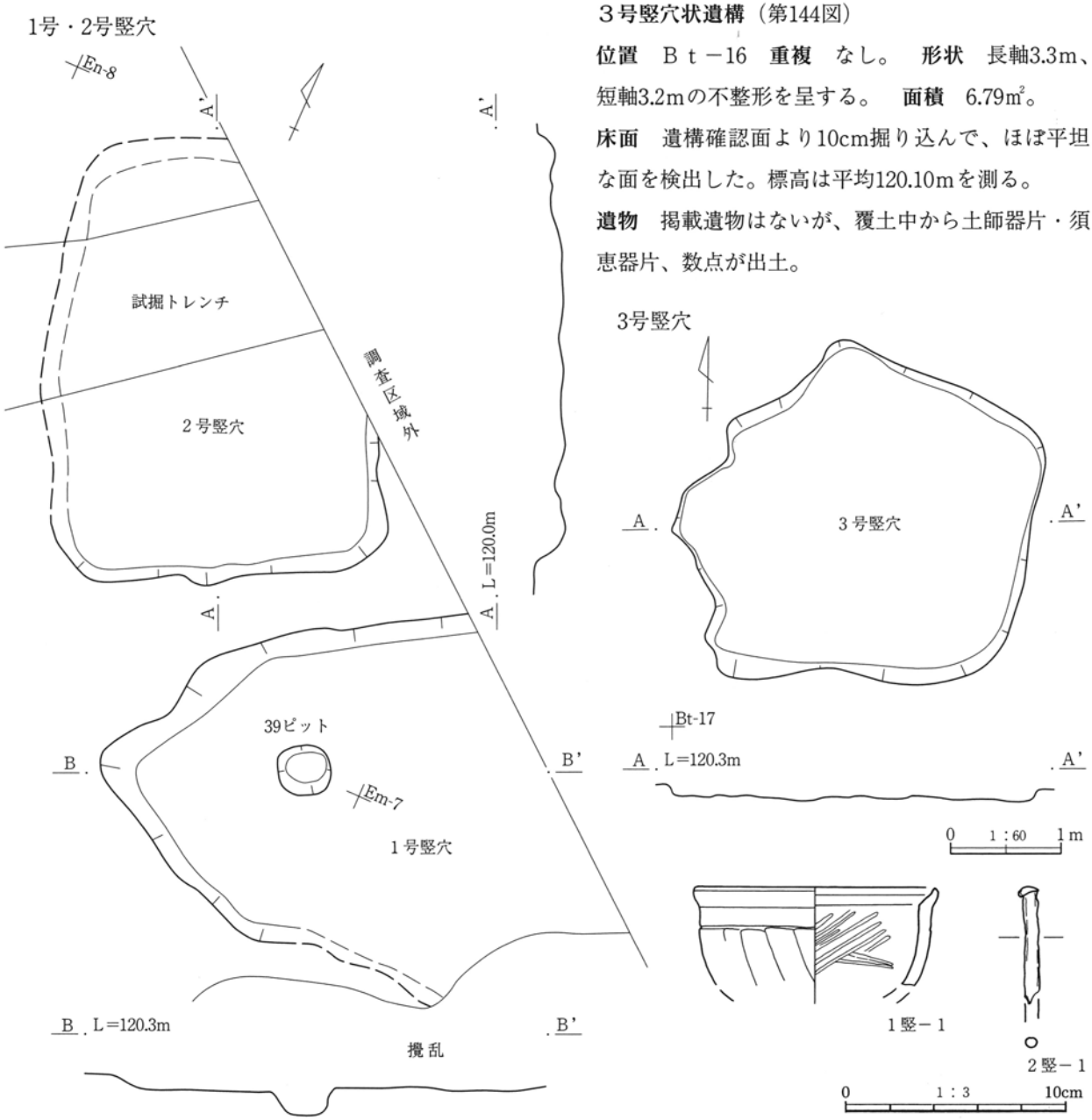
位置　Ｅｌ～ｍ－６～７　**重複**　39号ピットと重複。本遺構が古い。　**形状**　長軸5.1ｍ、短軸3.6ｍの不整形を呈する。　**面積**　8.94㎡。　**床面**　遺構確認面より10cm掘り込んで床面らしい平坦な面を検出した。標高は平均119.80ｍを測る。　**遺物**　土師器坏が出土している。他に土師器片360ｇが出土。

２号竪穴状遺構（第144図、ＰＬ45）

位置　Ｅｍ－７　**重複**　なし。　**形状**　長軸4.0ｍ、短軸3.0ｍの隅丸長方形を呈する。　**面積**　8.37㎡。　**床面**　遺構確認面より30cm掘り込んで、ほぼ平坦な面を検出した。標高は平均119.50ｍを測る。　**遺物**　鉄釘が出土している。他に土師器片110ｇ、須恵器片10ｇが出土。

３号竪穴状遺構（第144図）

位置　Ｂｔ－16　**重複**　なし。　**形状**　長軸3.3ｍ、短軸3.2ｍの不整形を呈する。　**面積**　6.79㎡。　**床面**　遺構確認面より10cm掘り込んで、ほぼ平坦な面を検出した。標高は平均120.10ｍを測る。　**遺物**　掲載遺物はないが、覆土中から土師器片・須恵器片、数点が出土。



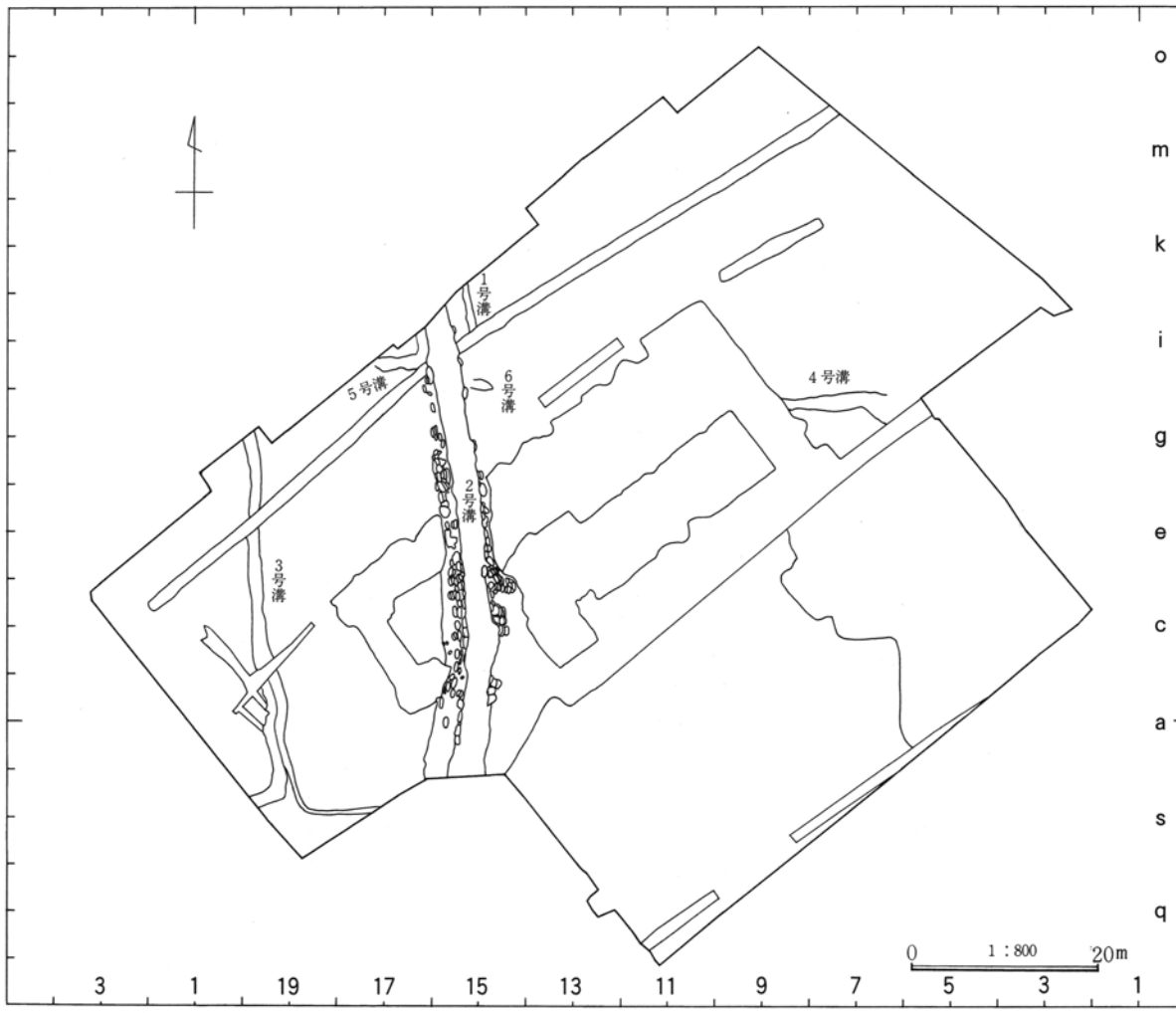
第144図　１～３号竪穴状遺構、出土遺物

第２節　溝・竈構築材採掘痕群

溝・竈構築材採掘痕群の概要

本遺跡の調査で検出された溝は、６条である。２号溝は、上幅約3.5m、深さ約2.0mの薬研堀状の古代の溝である。上流の河川（古利根川）等の水源地から取水し、中・下流の水田域を潤した用水路と思われる。２号溝の走向方向南約１kmには上野国府推定域が存在し、何らかの関連も考えられる。３号溝は、中～近世の館（屋敷）に伴う区画溝と考えられたが、内部施設等は検出されなかった。

また、２号溝の両端で検出された竈構築材採掘痕群も本節で報告する。竈構築材採掘痕は２号溝両側で約130基検出され、竈の構築材（凝灰岩）を採掘した痕である。本遺跡のように、大規模な竈構築材採掘痕群とその構築材を用いた竈を持つ住居群がセットで検出されたのは、あまり例がなく、貴重な発見である。なお、２号溝と竈構築材採掘痕群の平面図は付図１を参照されたい。



第145図　溝・竈構築材採掘痕群全体図

（１）溝

１号溝（第146図）

位置　Ｅｊ－15～Ｅｉ－15　**重複**　なし。

規模　確認全長4.64ｍ、上端0.56～0.88ｍ、下端0.24～0.40ｍ、深さ0.10～0.30ｍを測る。　**走向**　北から南へ走向（Ｎ－10°－Ｗ）　**断面形**　法面の緩やかな椀状を呈する。　**覆土**　灰褐色シルトブロックを少量含む黒褐色土で、下層に砂が堆積していた。　**遺物**　掲載遺物はないが、覆土から土師器片60ｇ、須恵器片60ｇが出土している。　**所見**　出土遺物少なく、覆土中の軽石等も特定できなかったので、時期は不明。

２号溝（付図１・第147～149図、ＰＬ25・45・46）

位置　Ｅｉ－15～Ｂｔ－14・15　**重複**　竈構築材採掘痕群、１号井戸、５・６号溝と重複している。本遺構が古い。　**規模**　確認全長45.92ｍ、上端2.36～3.44ｍ、下端0.20～0.68ｍ、深さ1.82～2.04ｍを測る。　**走向**　北から南へ走向（Ｎ－９°－Ｗ）、Ｅｃ－15Ｇでやや西（Ｎ－８°－Ｅ）に走向を変える。　**断面形**　薬研堀状（Ｖ字状）を呈する。　**覆土**　上層はAs-Bを含む暗褐色土、下層はシルト・砂・小礫を含む褐灰色土。　**遺物**　土師器高坏・甑、須恵器坏・皿・埦・高坏・甕・羽釜、灰釉陶器皿・埦・長頸壺、陶器甕、砥石、瓦、鉄製品が出土している。他に、覆土から土師器片8.06kg、須恵器片30.82kgが出土。　**所見**　第５章第１節では「２号溝の層位については、FAより上位で、As-Bより下位にあると考えられる」とある。したがって、時期は古墳時代後期～平安時代と考えられる。２号溝は、土層断面・覆土・出土遺物等から、２つの溝があったと考えられる。西側に上端1.24～3.60ｍ、下端0.32～0.40ｍ、深さ0.80ｍを測る溝があり、その溝を掘り直して２号溝が造られたと想定される。底部には砂や礫が堆積し、埋没以前は水が流れていたと考えられ、水田等に伴う用水路と思われる。

３号溝（第146・150図、ＰＬ25・46）

位置　Ｅｇ－19～Ｂｓ－17・18・19　**重複**　31・32・33・38・43・44・45・48・49号住居と重複している。本遺構が新しい。　**規模**　確認全長67.76ｍ、上端0.36～2.00ｍ、下端0.20～0.80ｍ、深さ0.27～0.90ｍを測る。　**走向**　北から南へ走向で確認され、Ｅａ－19Ｇで二股に分かれる。主流は北から南へ走向（Ｎ－９°－Ｗ）で、Ｂｓ－19Ｇで東から西へ走向（Ｎ－58°－Ｅ）を変える。もう一つの溝は、Ｅａ－19Ｇで二股に分かれ、北から南へ走向（Ｎ－24°－Ｗ）で、Ｂｓ－18Ｇで西から東へ走向（Ｎ－89°－Ｅ）を変える。　**断面形**　法面の緩やかなＶ字状を呈する。　**覆土**　As-Ａ・シルトブロックを含む淡黄褐色シルト。　**遺物**　須恵器広口壺、陶器碗・皿・染付皿、青磁碗・皿、瓦、鉄製品（楔）が出土している。また、覆土から土師器片1.71kg、須恵器片2.33kg、陶磁器片1.44kgが出土。　**所見**　出土遺物から、中～近世と考えられる。溝の形状がＶ字状で、ほぼ方形に曲がって走向していることなどから、館（屋敷）に伴う区画溝と考えられたが、内部施設等は検出されず、溝の用途は不明である。

４号溝（第147・150図、ＰＬ25・46）

位置　Ｅｇ－８～Ｅｇ－６　**重複**　37・41号ピットと重複している。本遺構が新しい。　**規模**　確認全長11.44ｍ、上端0.88～2.84ｍ、下端0.44～2.40ｍ、深さ0.16～0.28ｍを測る。　**走向**　西から東へ走向（Ｎ－89°－Ｅ）で、東端で消滅する。　**断面形**　法面の緩やかな椀状を呈する。　**覆土**　FA・As-Cを含む暗褐色土で、下層に砂質土が堆積していた。　**遺物**　軟質陶器鉢が出土している。他に土師器片980ｇ、須恵器片370ｇが出土。　**所見**　時期は古墳～平安時代か。

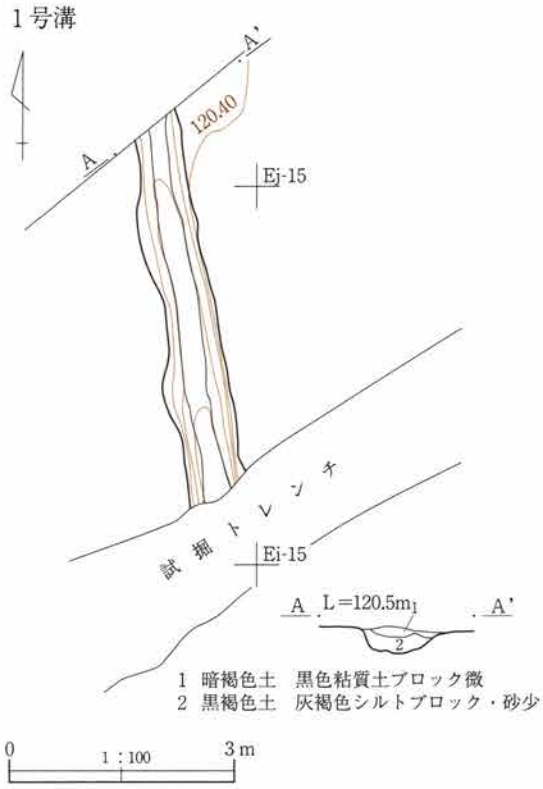
５号溝（第147図、ＰＬ26）

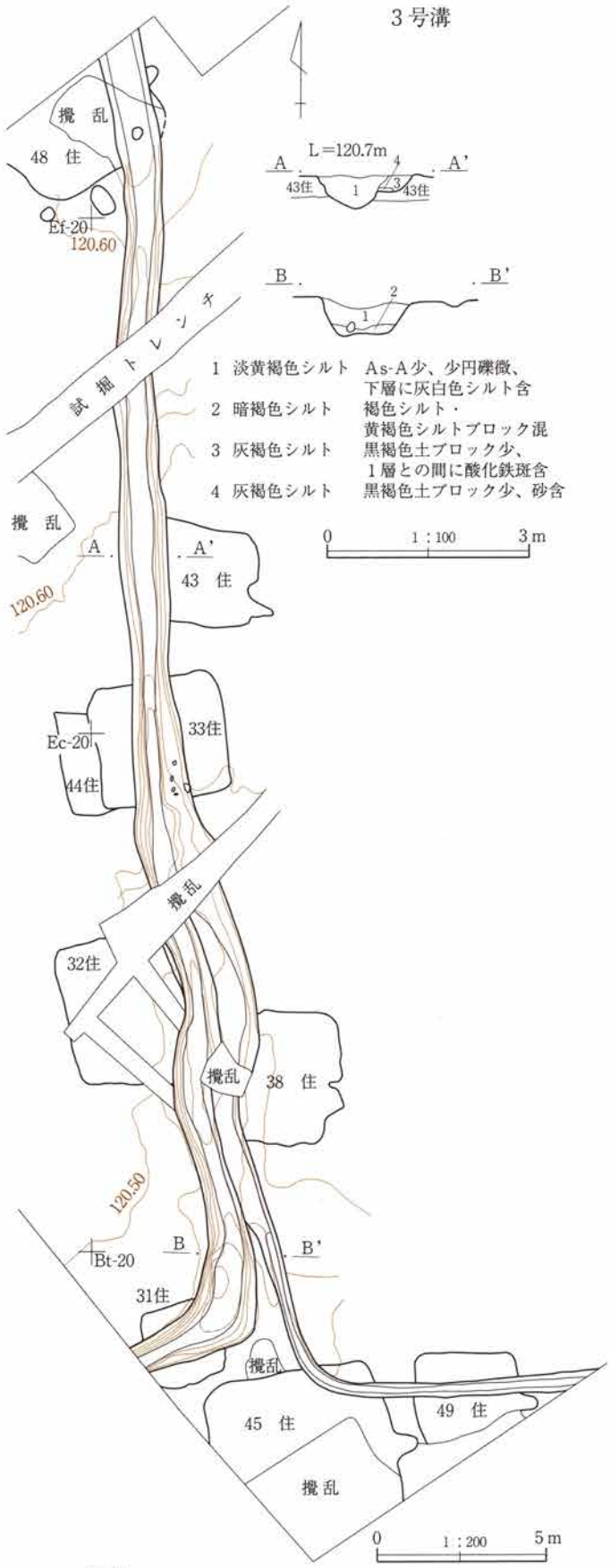
位置　Ｅｈ－17～Ｅｈ－16　**重複**　２号溝と重複している。本遺構が新しい。　**規模**　確認全長4.32ｍ、

上端0.96～1.48m、下端0.64～1.44m、深さ0.20～0.22mを測る。　**走向**　西から東へ走向（N－89°－W）で、２号溝に合流する。　**断面形**　法面の緩やかなＶ字状を呈する。　**覆土**　As-Bを含む暗褐色土。　**遺物**　掲載遺物はないが、覆土から土師器片20ｇが出土。　**所見**　時期は、As-B降下以降と考えられる。

６号溝（第147図、ＰＬ26）

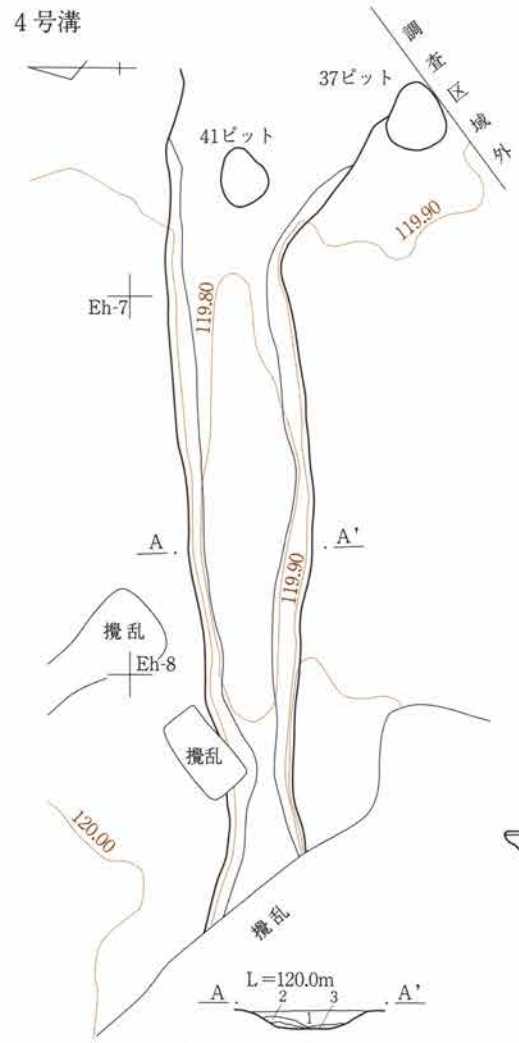
位置　Ｅｇ－14～Ｅｈ－15　**重複**　２号溝と重複している。本遺構が新しい。　**規模**　確認全長2.40m、上端0.88～1.08m、下端0.60～0.72m、深さ0.42～0.52mを測る。　**走向**　東から西へ走向（N－74°－W）で、２号溝に合流する。　**断面形**　法面の緩やかな皿状を呈する。　**覆土**　As-Bを含む暗褐色土。　**遺物**　掲載遺物はないが、覆土から土師器片10ｇが出土。　**所見**　時期は、As-B降下以降と考えられる。





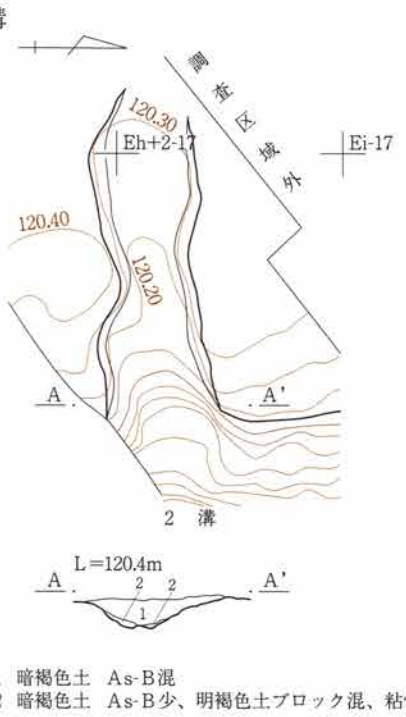
第146図　１・３号溝

４号溝

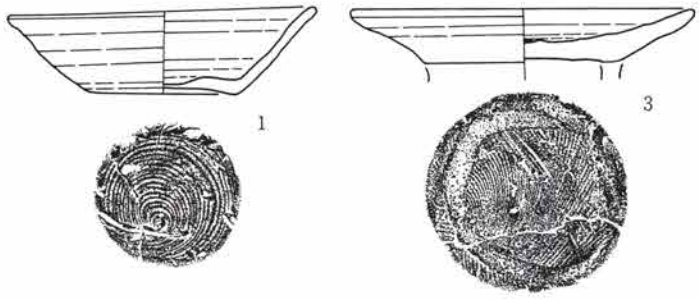


1 暗褐色土　FA・As-C含、粘質
2 暗褐色土　FA・As-C少、砂質
3 暗褐色土　FA・As-C微、灰色シルト混

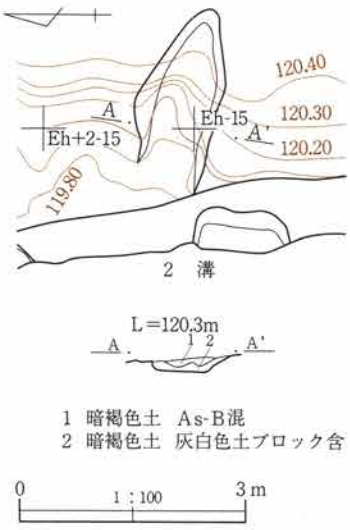
５号溝



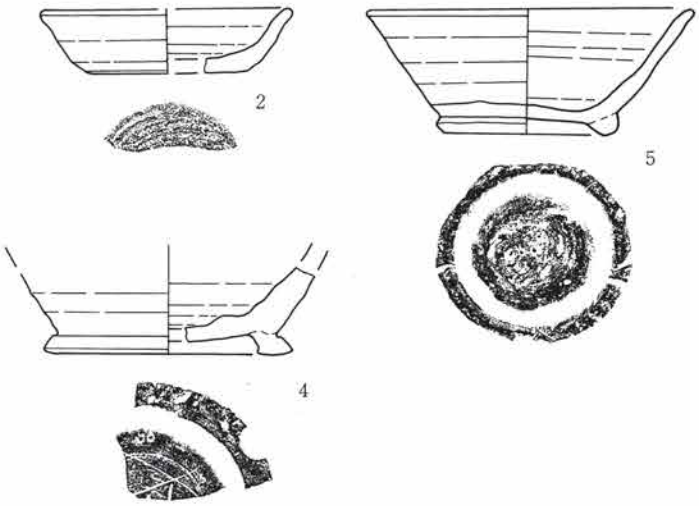
1 暗褐色土　As-B混
2 暗褐色土　As-B少、明褐色土ブロック混、粘性有

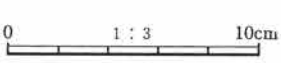


６号溝

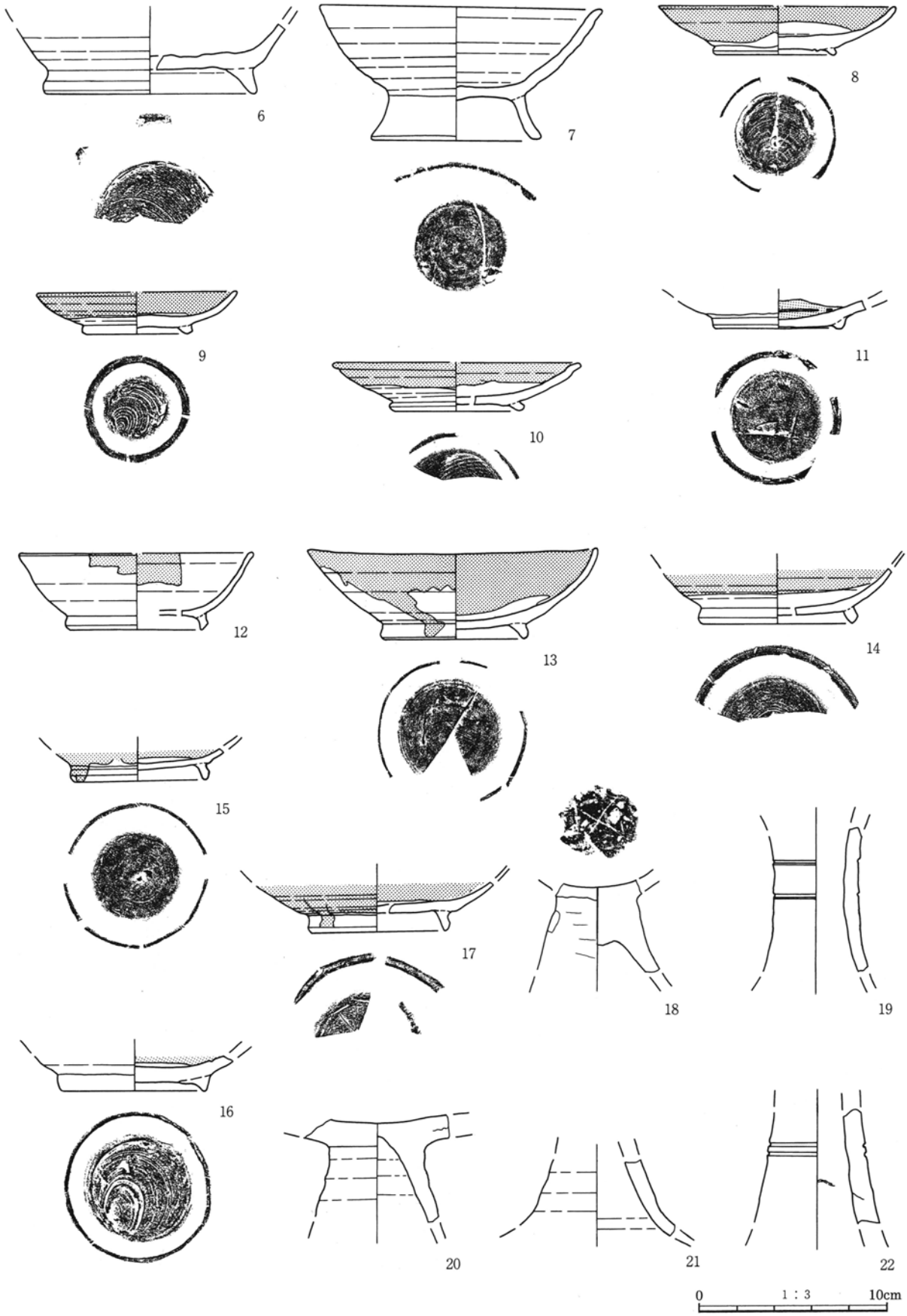


1 暗褐色土　As-B混
2 暗褐色土　灰白色土ブロック含

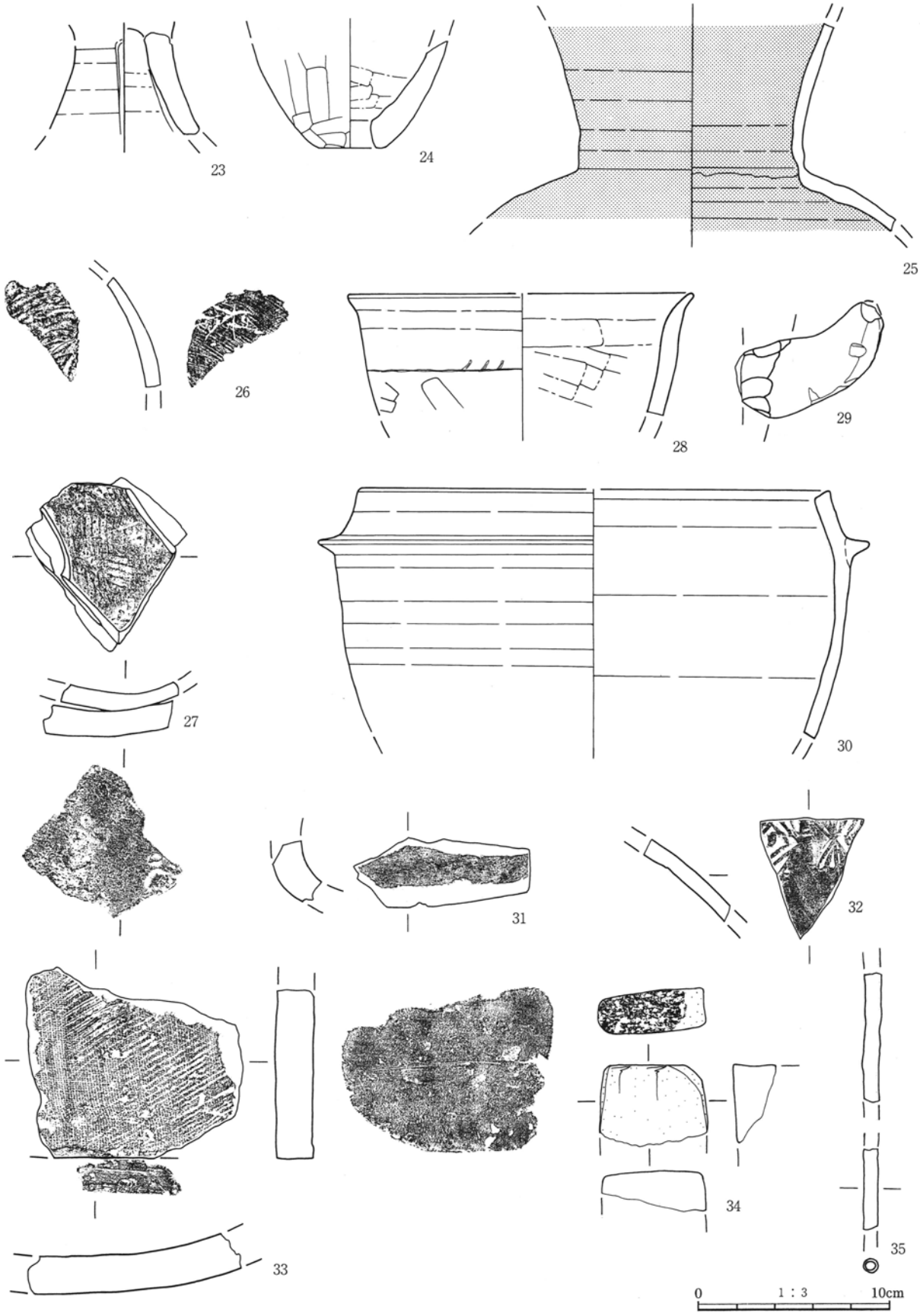




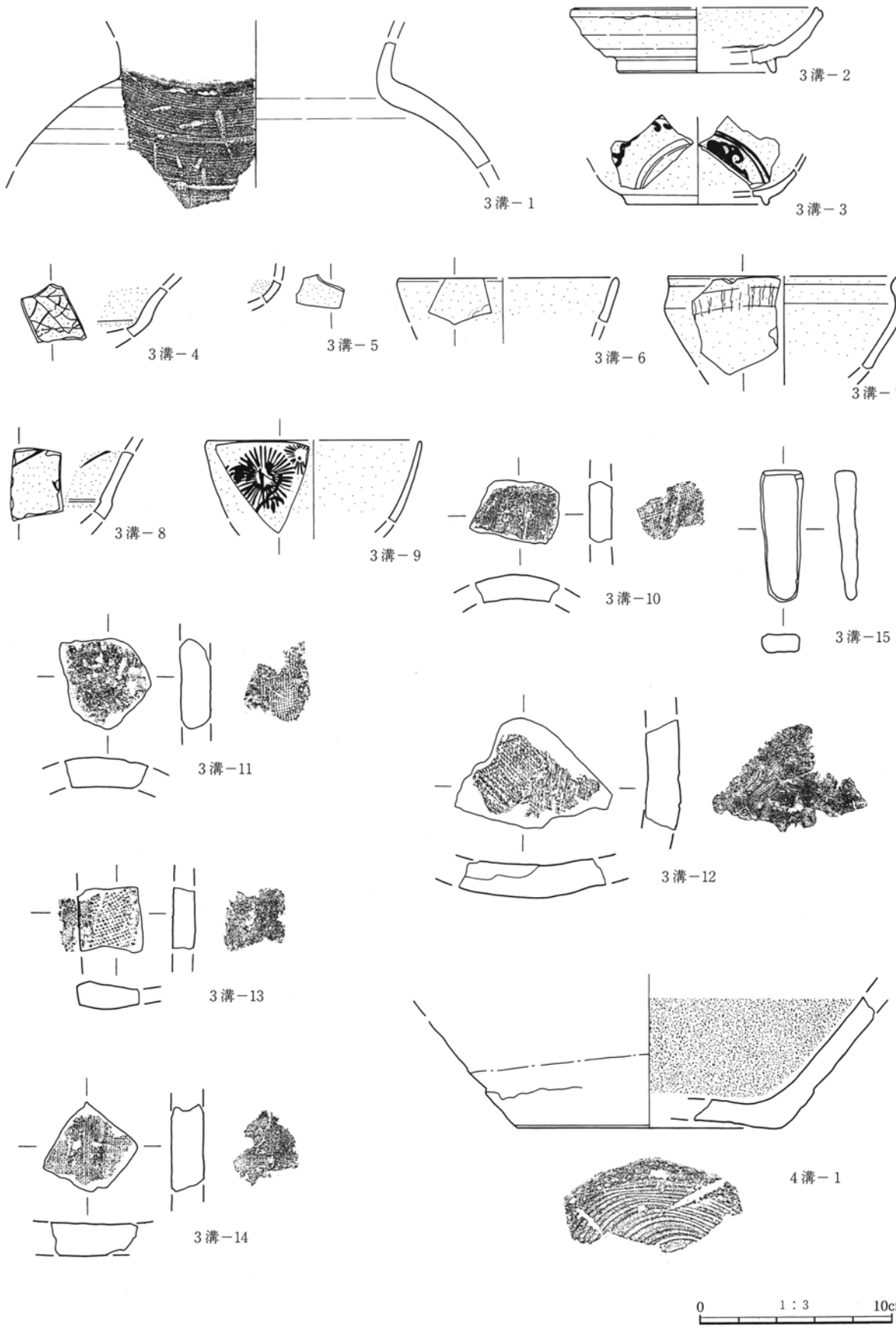
第147図　４～６号溝、２号溝出土遺物（１）



第148図　２号溝出土遺物（２）



第149図　２号溝出土遺物（３）



第150図　３・４号溝出土遺物

（２）竈構築材採掘痕群

１　竈構築材採掘痕群（付図１、ＰＬ26）

位置　Ｂｔ－14～16からＥｉ－15・16で、南北に走向する２号溝の両側に、幾重にも重複して採掘された痕跡130基が検出された。　**重複**　２号溝と重複している。２号溝は、２回掘削されており、古い方の溝より、本遺構が新しく、薬研堀状の新しい溝より古い。　**規模**　長軸１ｍ以上39基、１ｍ未満～0.8ｍ50基、0.8ｍ未満～0.6ｍ29基、0.6ｍ未満12基。平均値は、長軸が0.88ｍ、短軸0.36ｍ、深さ0.15ｍ。検出面積は約93㎡にも及ぶ。　**掘り方**　平面形が長方形を呈するもの128基、正方形を呈するもの２基。**覆土**　As-Bを含む暗褐色土。　**遺物**　掲載遺物はないが、覆土から土師器・須恵器片が出土。

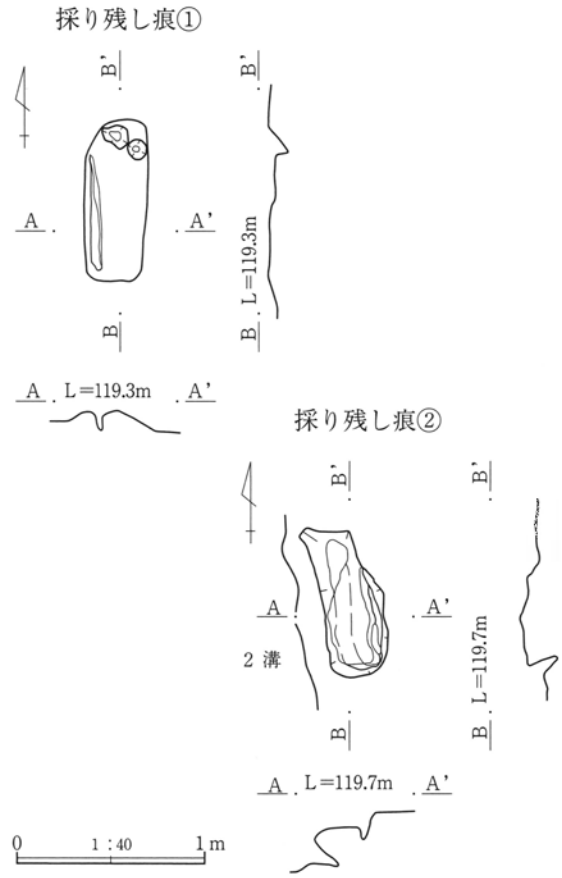
採掘方法　採り残しや底面の切れ込みから判断すると、垂直方向に切れ込みを入れた後に、水平方向に切り進んだと考えられる。また、ほとんどの採掘痕の長軸が溝に沿って並んでいることから、短軸を溝に並行に採掘するより、切れ込む作業量が少なく、効率を図ったと言える。さらに、採掘痕が階段状に幾重にも重なっていることから、連続して切り出しを行っていることが看取できた。　**所見**　科学的な根拠は得られていないが、本遺跡で検出されている奈良・平安時代の竪穴住居跡の竈に使用する構築材を採掘した痕と思われる。採掘時期を決定する遺物はないが、竈構築材を使用した竈を持つ竪穴住居跡が奈良・平安時代であることから、採掘時期もほぼ同時期と考えられる。竈構築材の石材等の詳細は、第５章付編第２節を参照されたい。

２　竈構築材採り残し痕①（第151図、ＰＬ26）

位置　Ｅｃ－15　**重複**　なし。　**規模**　長軸0.84ｍ、短軸0.28ｍ、深さ0.12ｍを測る。　**掘り方**　平面形は長方形を呈する。　**覆土**　As-Bを含む暗褐色土。**遺物**　なし。　**採掘方法**　古い方の溝の底部で平坦化された面を利用した平面採掘。　**所見**　２号溝の西側平らな面から竈の構築材を採掘しようとした痕（竈構築材採り残し痕）である。垂直方向に切れ込みを入れた後に、何らかの原因で構築材の切り出しを放棄したものと思われる。

３　竈構築材採り残し痕②（第151図、ＰＬ26）

位置　Ｅｅ－14　**重複**　なし。　**規模**　長軸0.80ｍ、短軸0.36ｍ、深さ0.21ｍを測る。　**掘り方**　平面形はほぼ長方形を呈する。　**覆土**　As-Bを含む暗褐色土。　**遺物**　なし。　**採掘方法**　新しい方の溝の壁面を利用して垂直に切り出す採掘方法。　**所見**　２号溝の東側の縁から竈の構築材を採掘しようとした痕（竈構築材採り残し痕）である。垂直方向と水平方向に途中までの切れ込みを入れた後に、何らかの原因で構築材の切り出しを放棄したものと思われる。調査時に、移植ごてを用いて採掘したら、数分で構築材が採取できた。



第151図　竈構築材採り残し痕①・②

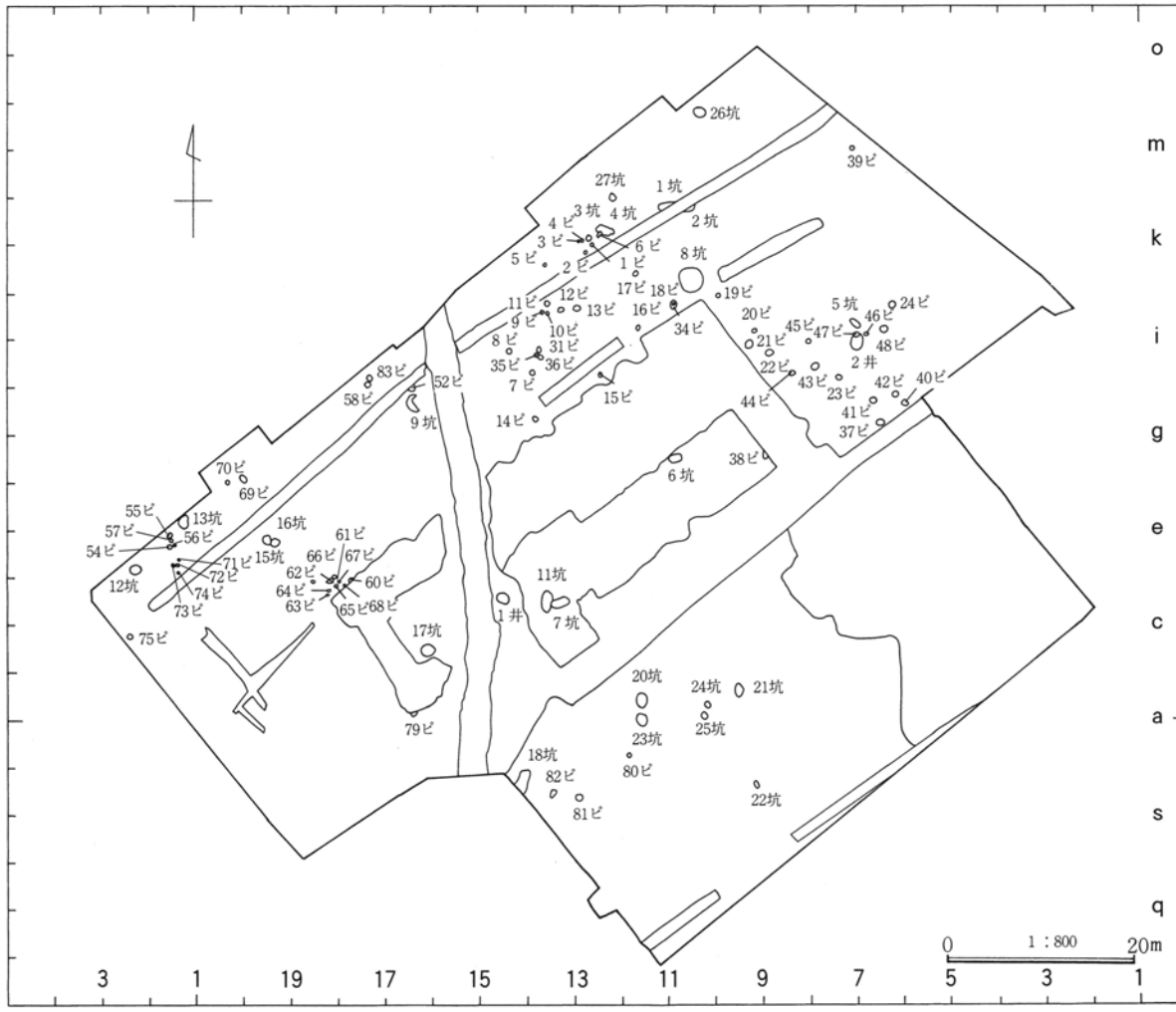
第３節　井戸、土坑、ピット

井戸・土坑・ピットの概要

本遺跡で検出された井戸は、２基である。２基とも、人力で約１ｍ掘削した後、完掘するには危険を伴うので、業者に掘削工事・調査を委託した。そのため、所見は古井戸掘削調査報告書を参考にした。

本遺跡で検出された土坑は、24基である。土坑の多くは時期認定の決め手になる遺物が含まれていなかったため、覆土や形状から時期を判別したが、概ね古墳時代から平安時代（中世が６基、１・２・６・７・８・11号土坑）の所産と思われる。また、26・27号土坑は覆土から住居の竈の残骸かとも思われ、調査時は焼土遺構と名付けたが、住居プランもはっきりせず、遺物もほとんど出土しなかったため、土坑扱いとした。なお、10・14・19号土坑（計３基）は欠番である。

また、本遺跡で検出されたピットは、66基である。ピットのほとんどは覆土から、概ね古墳時代から平安時代の所産と思われる。25～30・32・33・49～51・53・59・76～78号ピット（計16基）は欠番である。ピットは、掲載遺物がある６基を報告する。土坑は、24基すべてを報告する。詳細については計測表を参照されたい。



第152図　井戸・土坑・ピット全体図

（１）井戸

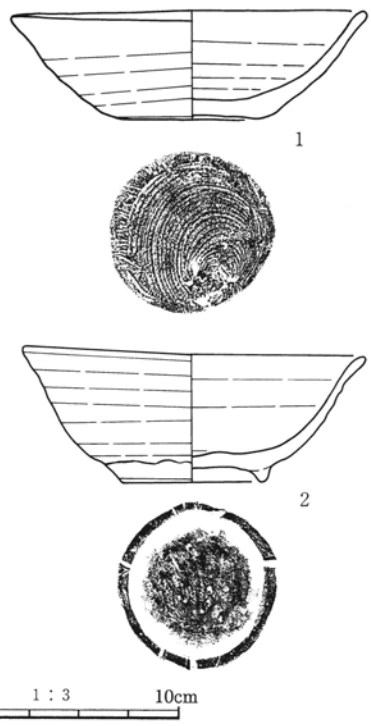
１号井戸（第153・154図、ＰＬ27・46）

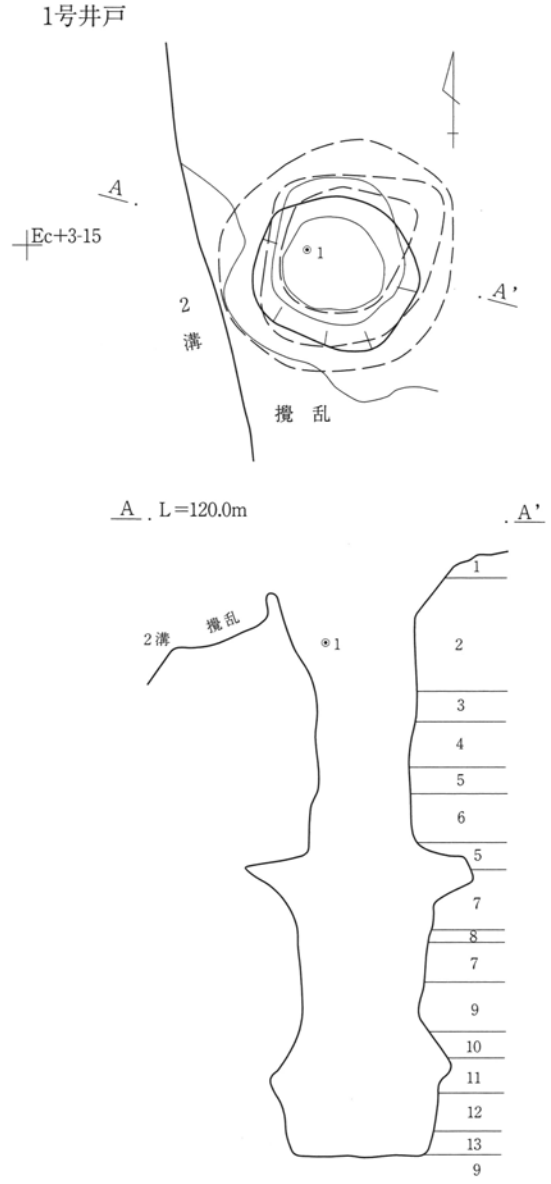
位置　Ｅｃ－１４グリッド　**重複**　竈構築材採掘痕と重複している。　**規模**　長軸×短軸　上面1.32ｍ×1.16ｍ、下面1.18ｍ×1.05ｍ　**深さ**　4.47ｍ

掘り方　地山井筒円筒型。　**内部施設**　確認されなかった。　**覆土**　上層は明褐色土ブロックを多量に含む褐色砂質土（人為的埋土）、中層は井壁崩落土を含む灰色シルト（自然埋土）、下層は井壁崩落土（軽石を多量に含む）と暗灰色シルト（自然堆積土）

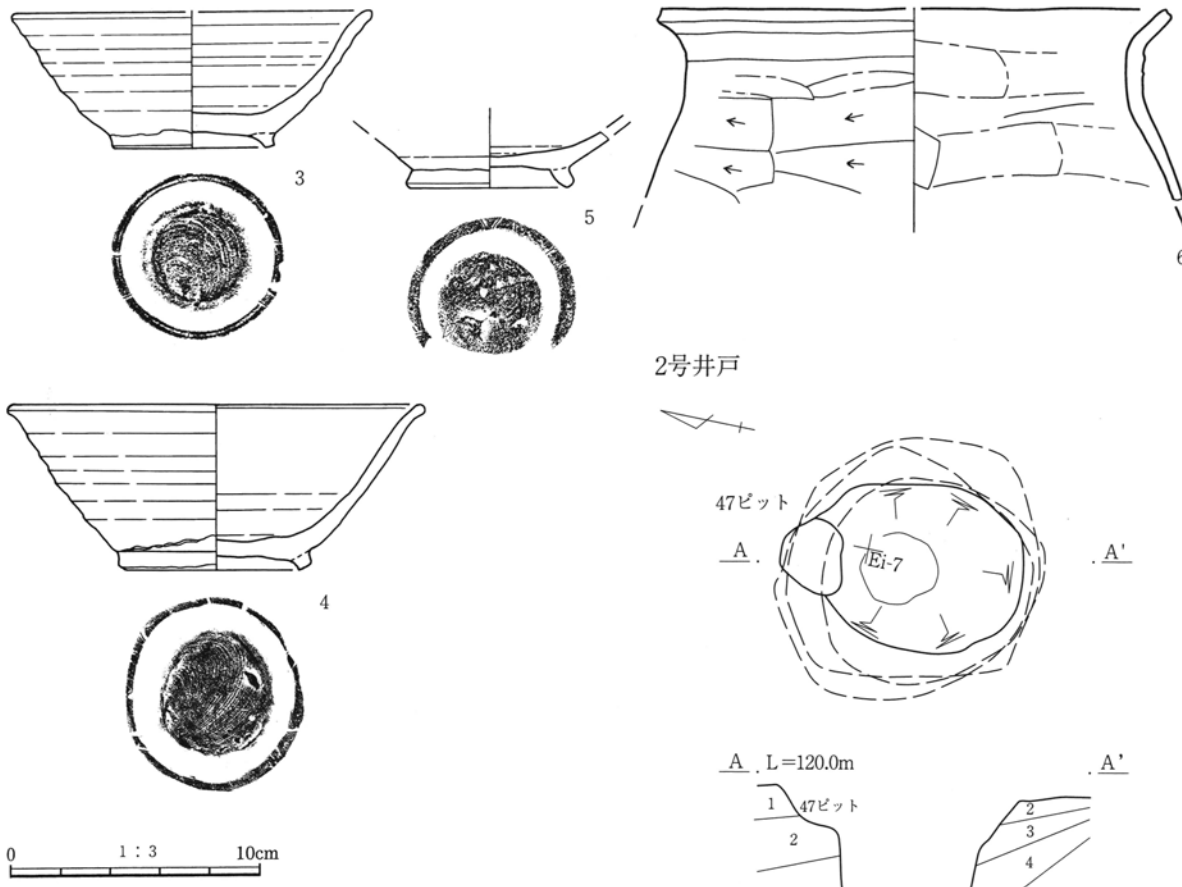
遺物　土師器甕、須恵器坏・埦が出土している。他に、土師器片290ｇ、須恵器片620ｇ、礫が出土。

所見　「アグリ」の大きさから長期間使用した井戸と思われる。湧水量については、湧水層の軽石層の荒れ方の少なさから、少なかったと思われる。「タナ落ち」は、帯水時に軟らかい土砂にて埋め戻し、その土砂が長い年月に収縮するときに「アグリ」となっていた上の層を引きはがして起きたものと思われる。出土遺物・覆土から、９世紀後半～10世紀前半と思われる。





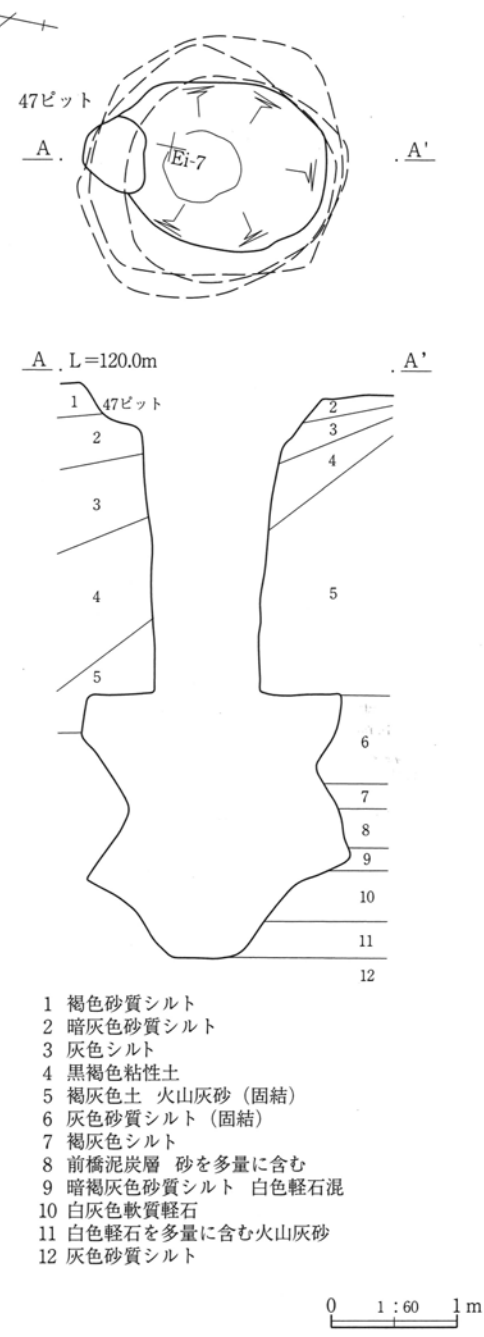
第153図　１号井戸、出土遺物（１）



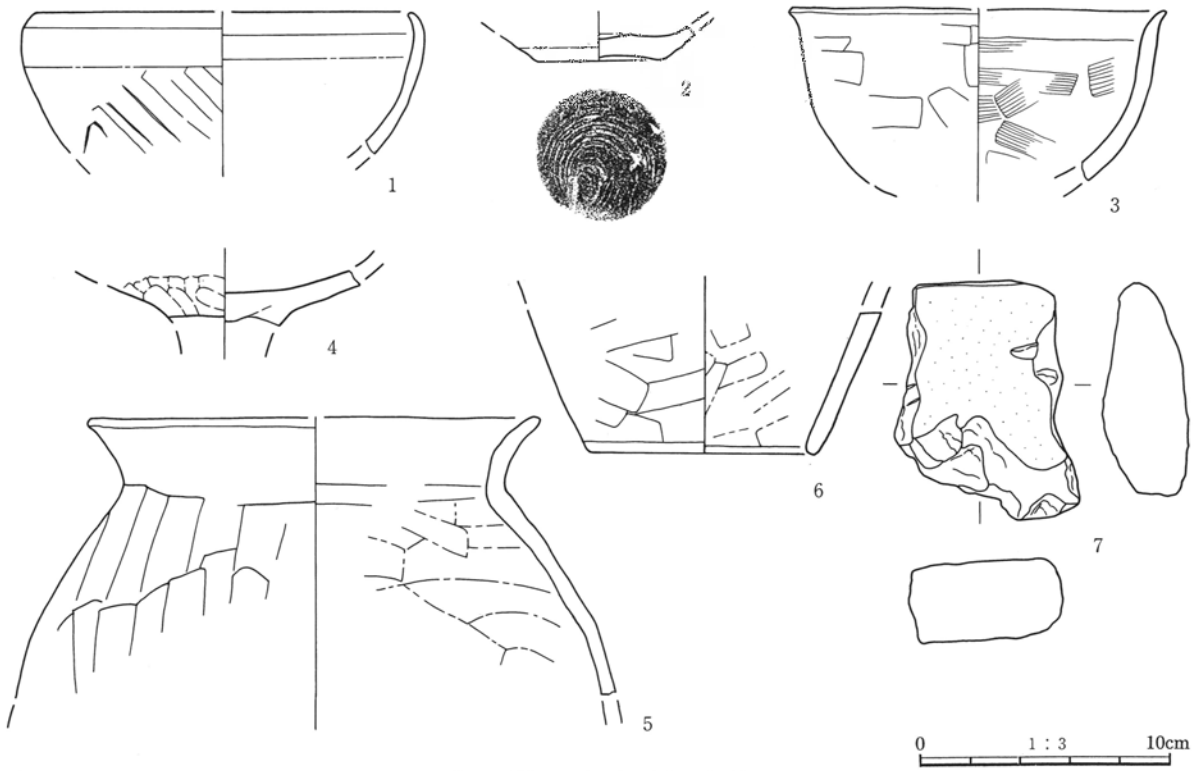
第154図　１号井戸出土遺物（２）

２号井戸（第155・156図、ＰＬ27・46・47）

位置　Ｅｈ－６グリッド　**重複**　47号ピットと重複している。本遺構が古い。　**規模**　長軸×短軸　上面1.76m×1.34m、下面0.61m×0.56m　**深さ**　4.40m　**掘り方**　地山井筒朝顔型。　**内部施設**　確認されなかった。　**覆土**　上層は黒色火山灰砂土（人為的埋土）、中層は井壁崩落土（褐灰色シルト）と黒褐色土（人為的埋土）、下層は白色軽石粒混じりの青灰色シルト（自然堆積土）。　**遺物**　土師器坏・器台・甕・甑、須恵器埦、磨石が出土している。他に、土師器片930ｇ、須恵器片460ｇ、礫が多数出土。**所見**　湧水量については、湧水層の軽石層の荒れ方の少なさから、少なかったと思われる。井壁調査時、2.8mの深さで東西方向に地層の段差を検出したが、古い時代の自然河道（縄文晩期～弥生前期）と思われる。出土遺物・覆土から、５世紀後半～６世紀前半と思われる。

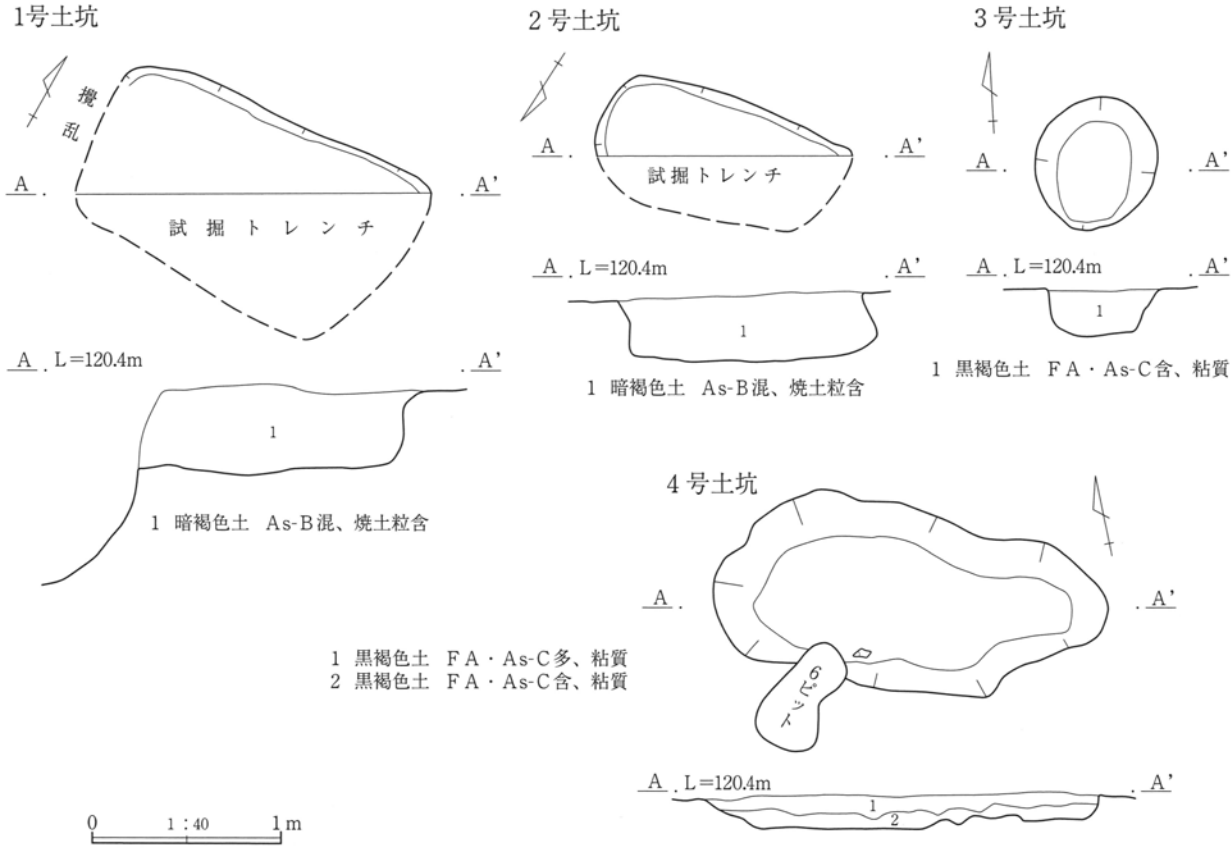


第155図　２号井戸



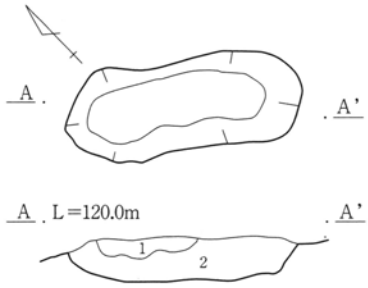
第156図　２号井戸出土遺物

（２）土坑（第157～162図、ＰＬ27・28・47）



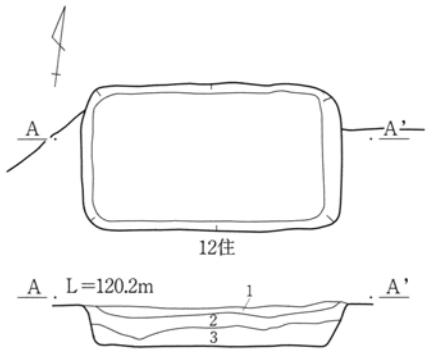
第157図　１～４号土坑

５号土坑



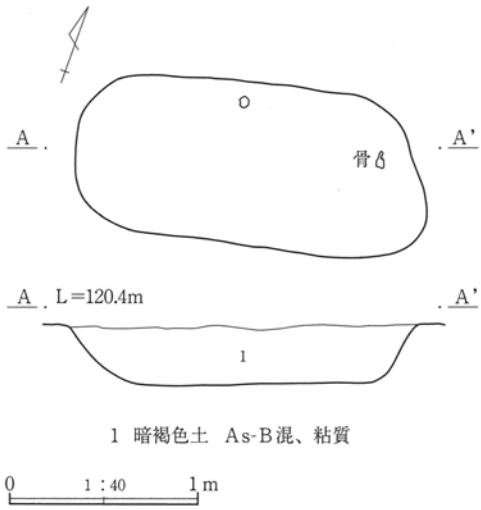
1 暗褐色土　ＦＡ・As-C多、
　　焼土粒・炭化物含、粘質
2 暗褐色土　ＦＡ・As-C含、粘質

６号土坑



1 暗褐色土　As-B 多
2 暗褐色土　As-B含、黒色土ブロック混
3 暗褐色土　As-B少

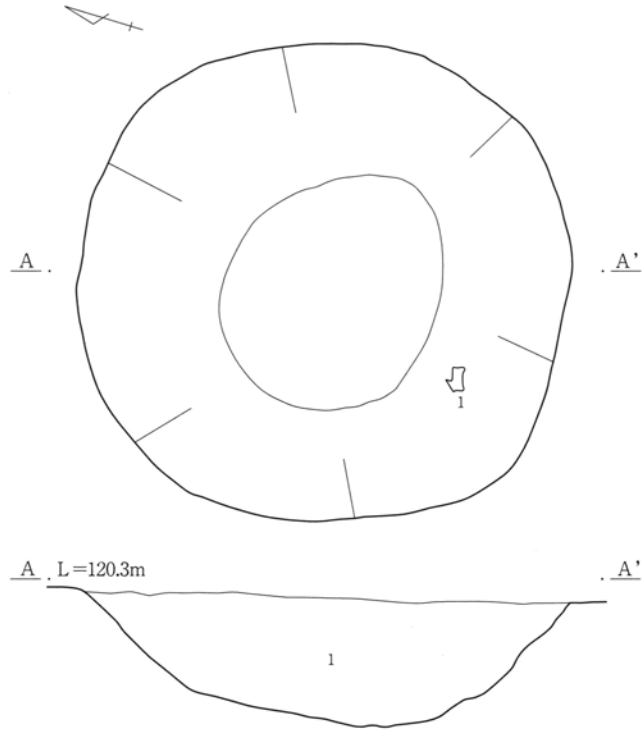
７号土坑



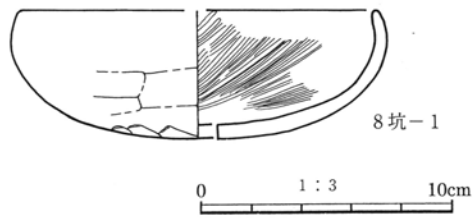
1 暗褐色土　As-B混、粘質

0　1：40　1m

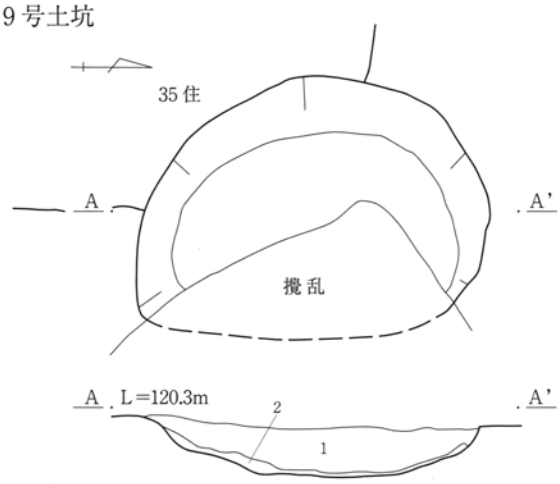
８号土坑



1 暗褐色土　As-B混、焼土少、砂質



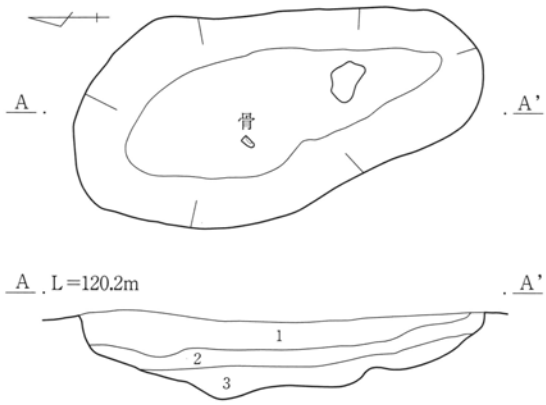
９号土坑



1 黒褐色土　ＦＡ・As-C混、砂粒
2 黒褐色土　ＦＡ・As-C少、
　　明褐色土ブロック含、粘性有

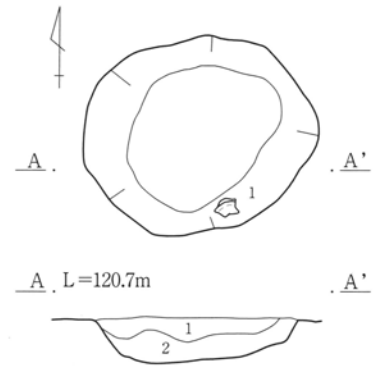
第158図　５～９号土坑、出土遺物

11号土坑



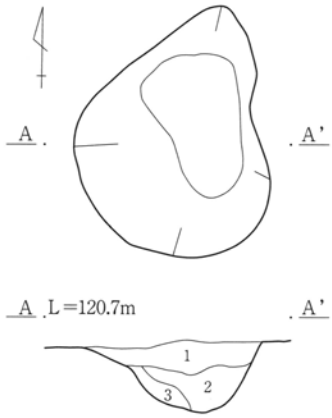
1　暗褐色土　　As-B多、淡褐色・黄色シルトブロック混
2　暗褐色土　　As-B含、淡褐色シルトブロック少
3　褐色土　　As-B少、淡褐色シルトブロック多

12号土坑



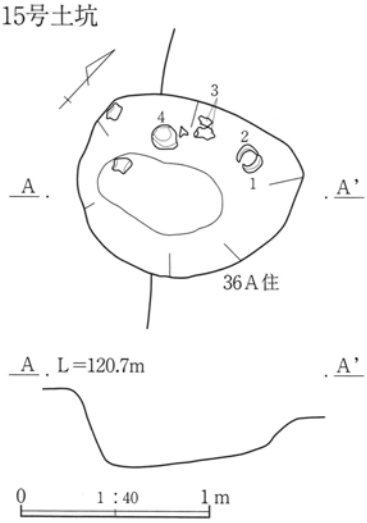
1　暗褐色土　ＦＡ・As-C多
2　暗褐色土　ＦＡ・As-C混、
　　明褐色土ブロック・焼土粒含

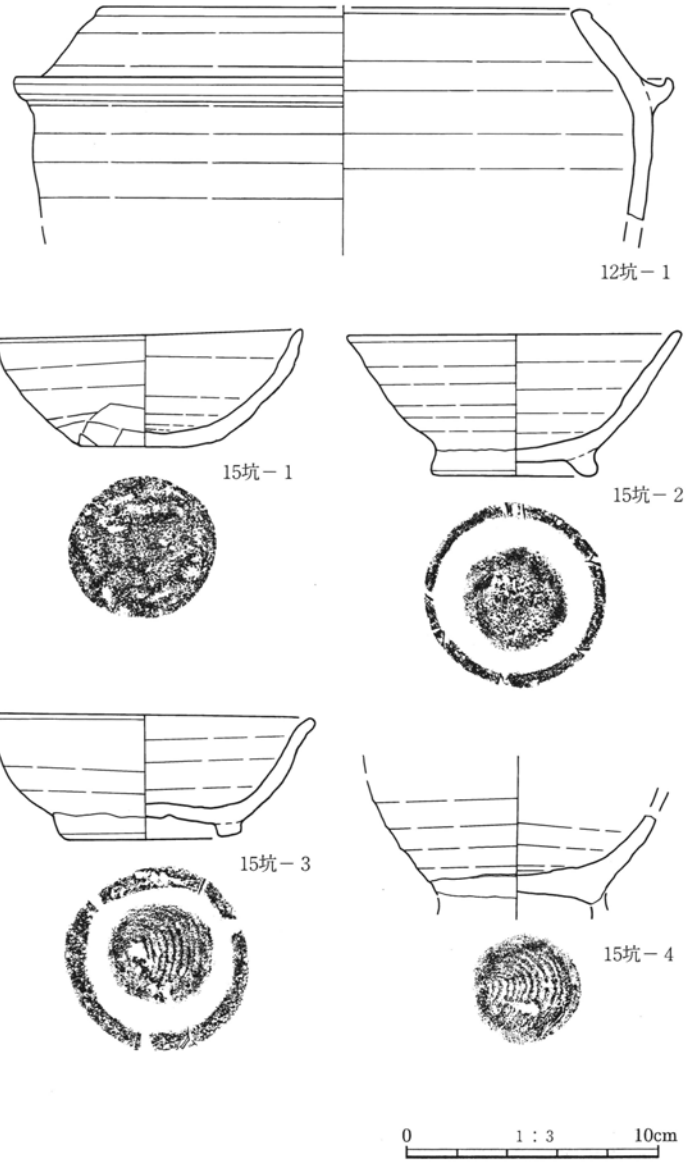
13号土坑



1　暗褐色土　ＦＡ・As-C混、
　　褐色土ブロック・明褐色土ブロック含
2　黒褐色土　ＦＡ・As-C微、粘質
3　褐色土　　粘質

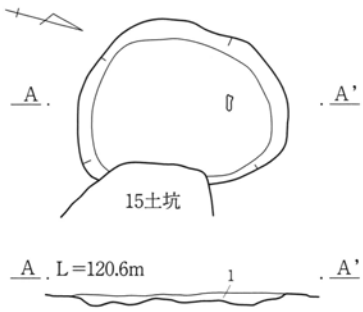
15号土坑





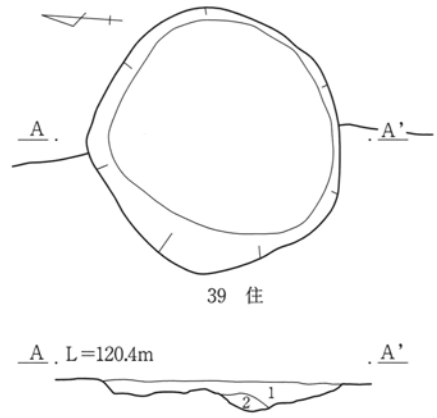
第159図　11～13・15号土坑、出土遺物

16号土坑



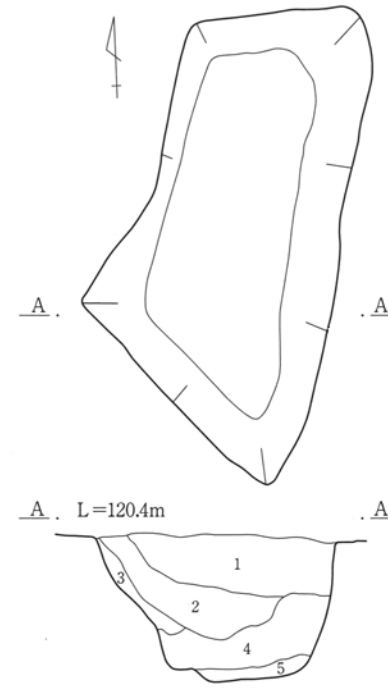
1　黒褐色土　ＦＡ・As-C混、粘質

17号土坑



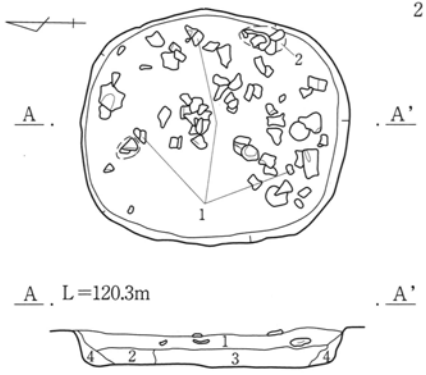
1　暗褐色土　ＦＡ・As-C多
2　暗褐色土　ＦＡ・As-C少、焼土粒含

18号土坑



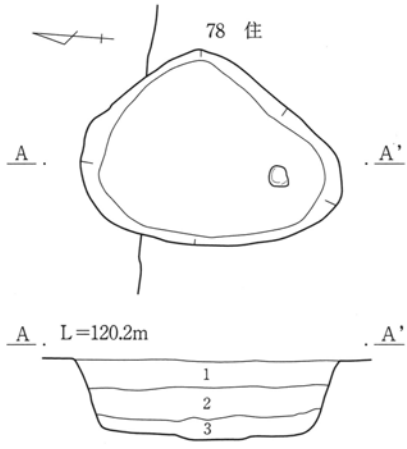
1　暗褐色土　ＦＡ・As-C混、明褐色土粒含
2　暗褐色土　褐色土粒多、地山褐灰ブロック含
3　褐色土　しまり無
4　暗褐色土　褐色土粒・ブロック混
5　褐色土　明褐色土粒・ブロック混

20号土坑



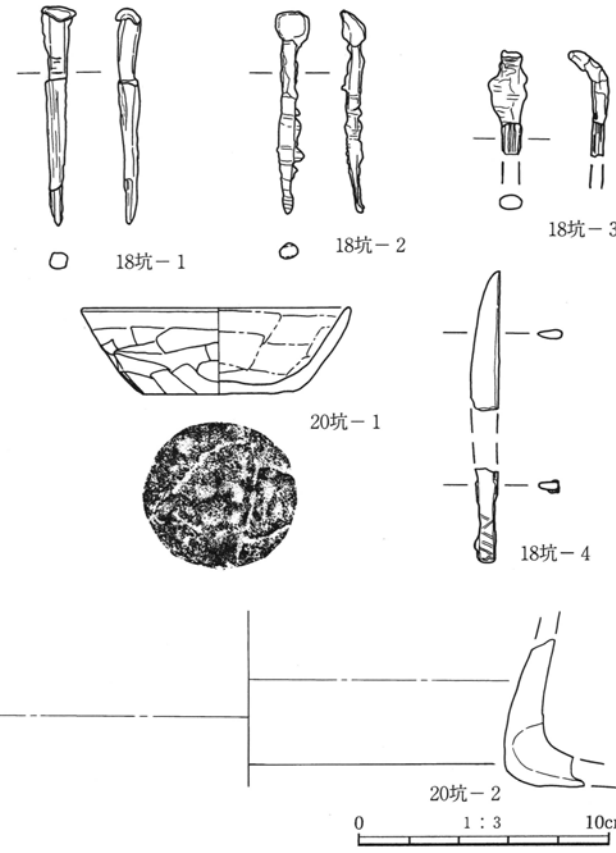
1　暗褐色土　ＦＡ・As-C混、炭化物混、
　　下層に暗褐色粘質層含
2　暗褐色土　ＦＡ・As-C含、炭化粒含、焼土粒少
3　暗褐色土　ＦＡ・As-C少、黒色粘質土ブロック混、
　　炭化粒少、焼土粒微
4　暗褐色土　ＦＡ・As-C微、褐色土粒多

21号土坑



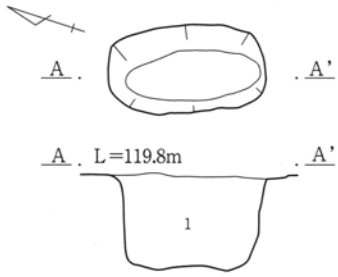
1　暗褐色土　ＦＡ・As-C多、硬化
2　暗褐色土　ＦＡ・As-C含、焼土粒・褐色土粒含
3　暗褐色土　ＦＡ・As-C少、赤褐色砂質粒混

0　1：40　1m



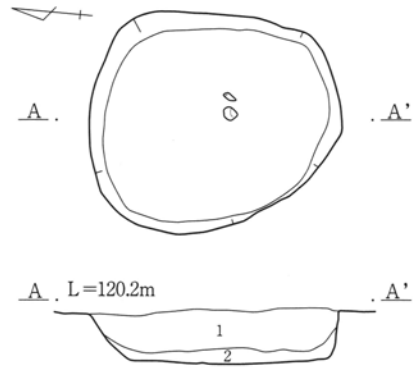
第160図　16～18・20・21号土坑、出土遺物

22号土坑



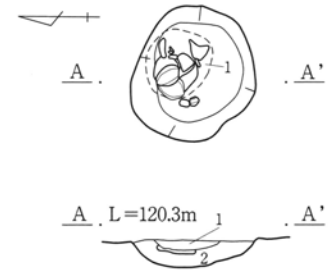
1 黒褐色土　ＦＡ・As-Ｃ混、粘質

23号土坑



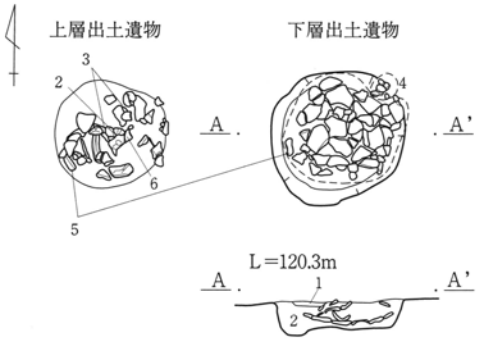
1 暗褐色土　ＦＡ・As-Ｃ混、炭化粒・焼土粒混
2 黒褐色土　炭化物含、粘質

24号土坑



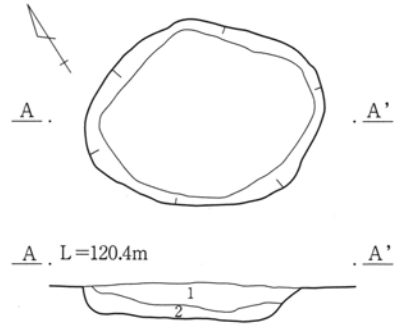
1 赤褐色土　焼土多、灰・炭化物含
2 暗褐色土　ＦＡ・As-Ｃ混、
焼土・炭化物含

25号土坑



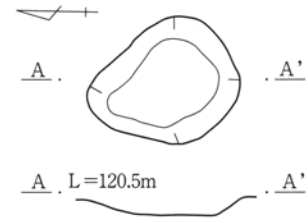
1 暗褐色土　ＦＡ・As-Ｃ混、焼土粒多、炭化物含
2 暗褐色土　ＦＡ・As-Ｃ少、焼土粒・炭化粒少

26号土坑

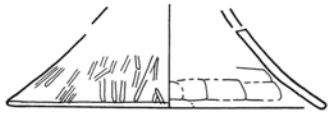


1 暗褐色土　ＦＡ・As-Ｃ混、焼土粒多
2 黒褐色土　焼土粒含

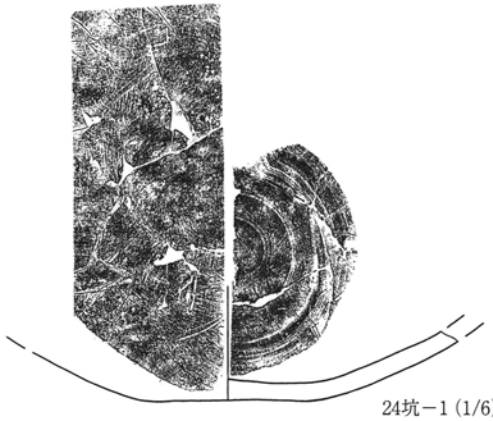
27号土坑



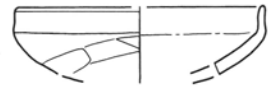
0　1：40　1m



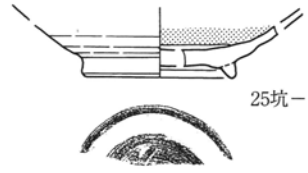
22坑－１



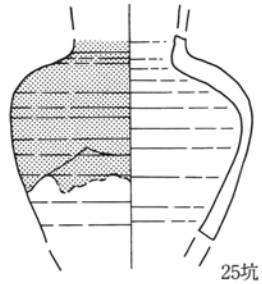
24坑－１(1/6)



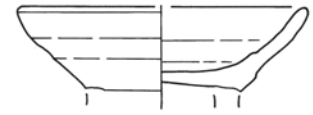
25坑－１



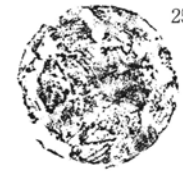
25坑－３

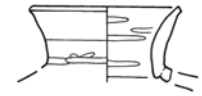


25坑－４



25坑－２

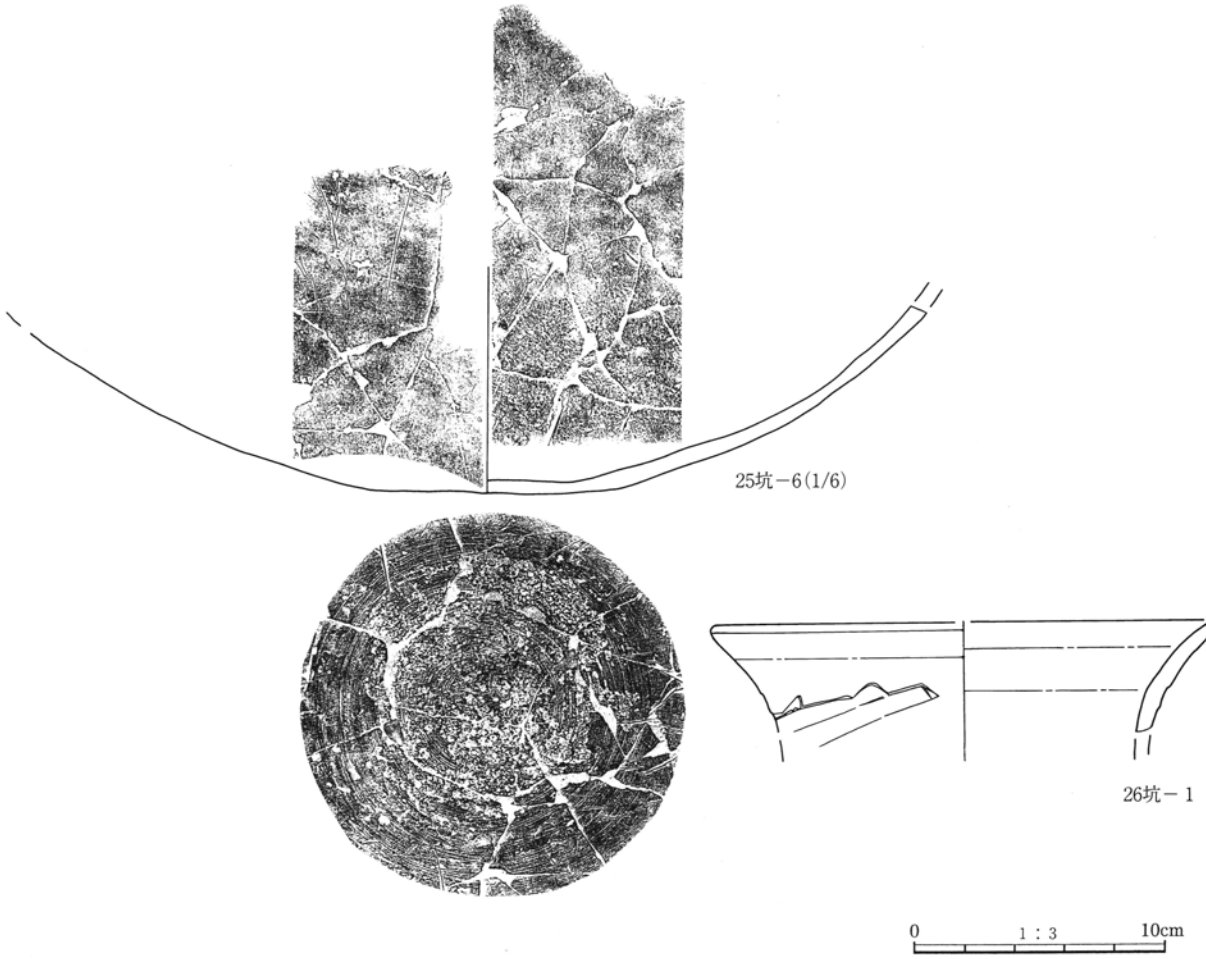




25坑－５

0　1：3　10cm

第161図　22～27号土坑、出土遺物（１）



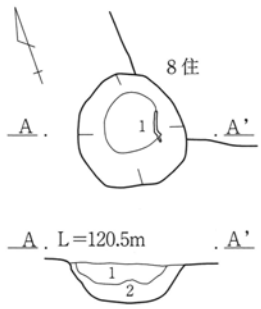
第162図　25・26号土坑出土遺物（２）

第２表　土坑計測表

番号	位置(グリッド)	形　状	規模(長軸×短軸×深さ)	長軸方位	出土遺物（掲載遺物は除く）	覆　土	重複関係
1	Ek－10・11	隅丸長方形	1.71×(0.83)×0.68	N－87°－W	土師器片10ｇ	As-B混土	なし
2	Ek－10	隅丸長方形	1.28×(0.54)×0.36	N－85°－E	なし	As-B混土	なし
3	Ek－12	円形	0.72×0.68×0.28		土師器片10ｇ	FA・As-C混土	なし
4	Ek－12	隅丸長方形	2.16×1.04×0.19	N－77°－W	土師器片140ｇ	FA・As-C混土	なし
5	Ei－7	隅丸長方形	1.24×0.52×0.23	N－48°－W	土師器片10ｇ	FA・As-C混土	12号住
6	Ef－10	隅丸長方形	1.48×0.88×0.21	N－82°－E	土師器片50ｇ	As-B混土	なし
7	Ec－13	隅丸長方形	1.92×0.92×0.33	N－83°－E	馬歯	As-B混土	15号住
8	Ej－10	円形	2.68×2.64×0.66		土師器片1.1kg、須恵器片50ｇ	As-B混土	なし
9	Eg－16	不整形	1.92×(1.52)×0.27	N－23°－W	土師器片80ｇ、須恵器片150ｇ	FA・As-C混土	36号住
11	Ec－13	不整形	2.24×1.08×0.44	N－3°－E	土師器片160ｇ	As-B混土	15号住
12	Fd－2	楕円形	1.36×1.14×0.23	N－78°－E	土師器片90ｇ、須恵器片40ｇ	FA・As-C混土	なし
13	Fe－1	不整形	1.36×1.08×0.44	N－17°－E	なし	FA・As-C混土	なし
15	Ed－19	楕円形	1.20×0.96×0.38	N－45°－E	土師器片220ｇ、須恵器片170ｇ	FA・As-C混土	16号土坑
16	Ed－19	楕円形	1.14×0.88×0.06	N－24°－E	土師器片50ｇ、須恵器片10ｇ	FA・As-C混土	15号土坑
17	Eb－16	楕円形	1.42×1.36×0.30	N－9°－E	土師器片30ｇ	FA・As-C混土	39号住
18	Bs－14	方形	2.56×1.28×0.80	N－13°－E	土師器片120ｇ、須恵器片180ｇ	FA・As-C混土	なし
20	Ea－11	隅丸方形	1.48×1.32×0.40	N－4°－E	土師器片270ｇ、須恵器片3.34kg	FA・As-C混土	なし
21	Ea－9	楕円形	1.40×1.02×0.45	N－12°－E	礫１点	FA・As-C混土	78号住
22	Bs－9	隅丸方形	0.84×0.44×0.51	N－17°－W	土師器片50ｇ	FA・As-C混土	なし
23	B・E－11	楕円形	1.40×1.16×0.29	N－40°－W	土師器片160ｇ、須恵器片30ｇ	FA・As-C混土	なし
24	Ea－10	楕円形	0.80×0.68×0.28	N－48°－W	土師器片85ｇ、須恵器片80ｇ	FA・As-C混土	なし
25	Ea－10	隅丸方形	0.88×0.68×0.34	N－41°－E	土師器片120ｇ、須恵器片2.73kg	FA・As-C混土	なし
26	Em－10	楕円形	1.28×1.04×0.19	N－75°－W	土師器片270ｇ	FA・As-C混土	なし
27	Ek－12	楕円形	0.88×0.68×0.11	N－15°－W	なし	FA・As-C混土	なし

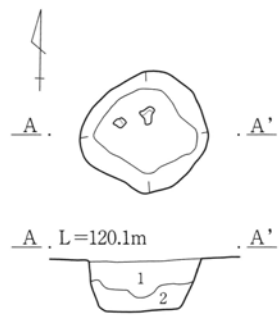
（３）ピット（第163図、ＰＬ28・47）

8号ピット



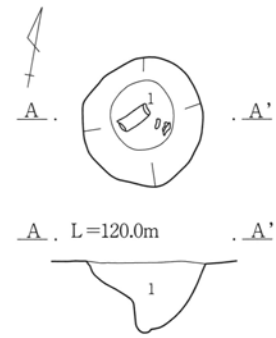
1 暗褐色土　ＦＡ・As-C混、粘質
2 黒褐色土　ＦＡ・As-C含、粘質

22号ピット



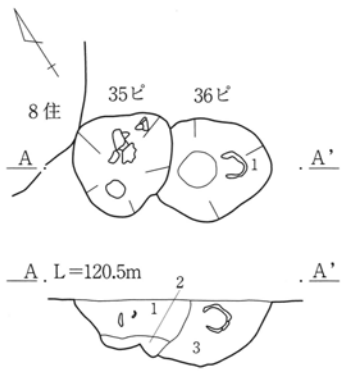
1 暗褐色土　ＦＡ・As-C混、粘質
2 暗褐色土　ＦＡ・As-C微、砂含、粘質

24号ピット



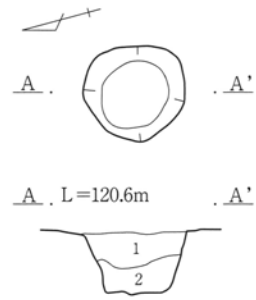
1 暗褐色土　ＦＡ・As-C混、砂含、粘質

35号・36号ピット



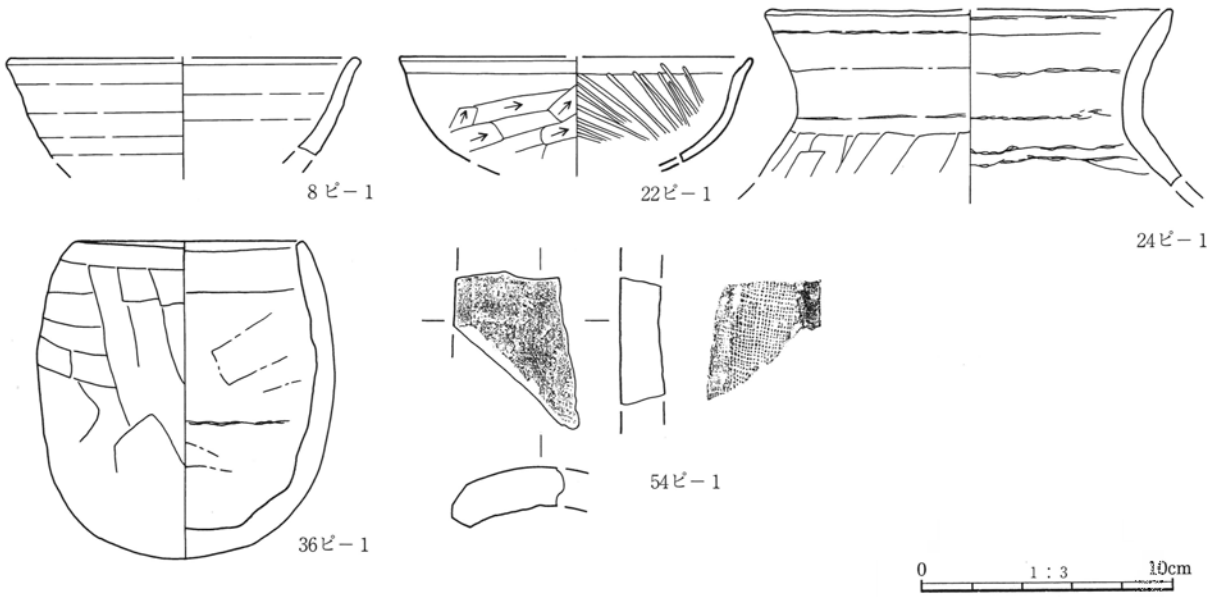
1 暗褐色土　ＦＡ・As-C混、焼土粒混
2 暗黒褐色土　ＦＡ・As-C少、黒色粘質土ブロック含
3 暗黒褐色土　ＦＡ・As-C含、焼土粒・黒色粘質土ブロック含

54号ピット



1 暗褐色土　ＦＡ・Ａｓ-Ｃ混、少礫多
2 黒褐色土　ＦＡ・Ａｓ-Ｃ含、褐色土ブロック混

0　1：40　1m



第163図　8・22・24・35・36・54号ピット、出土遺物

第３表　ピット計測表

番号	位置(グリッド)	形　状	規模(長軸×短軸×深さ)	長軸方位	出土遺物（掲載遺物は除く）	覆　土	重複関係
1	Ej－12	円形	0.36m×0.36m×0.12m		なし	FA・As-C混土	
2	Ej－12	円形	0.36m×0.32m×0.15m		須恵器片60g	FA・As-C混土	
3	Ek－12	円形	0.32m×0.28m×0.12m		なし	FA・As-C混土	
4	Ek－12	円形	0.32m×0.28m×0.16m		なし	FA・As-C混土	
5	Ej－13	楕円形	0.44m×0.32m×0.18m	N－10°－W	なし	FA・As-C混土	
6	Ek－12	楕円形	0.76m×0.48m×0.24m	N－21°－E	なし	FA・As-C混土	４号土坑
7	Eh－13	円形	0.64m×0.64m×0.16m		なし	FA・As-C混土	
8	Eh－14	楕円形	0.68m×0.60m×0.19m	(N－10°－W)	なし	FA・As-C混土	８号住居
9	Ei－13	円形	0.36m×0.36m×0.17m		なし	FA・As-C混土	
10	Ei－13	円形	0.40m×0.36m×0.13m		なし	FA・As-C混土	
11	Ei－13	楕円形	0.64m×0.48m×0.21m	N－87°－W	なし	FA・As-C混土	
12	Ei－13	楕円形	0.72m×0.52m×0.18m	(N－71°－E)	なし	FA・As-C混土	
13	Ei－12	楕円形	0.80m×(0.68)m×0.20m	N－88°－E	なし	FA・As-C混土	
14	Eg－13	楕円形	0.52m×0.44m×0.15m	N－62°－E	なし	FA・As-C混土	
15	Eh－12	楕円形	0.44m×0.36m×0.08m	N－56°－W	なし	FA・As-C混土	
16	Ei－11	楕円形	0.60m×0.52m×0.40m	N－28°－E	土師器片140g	FA・As-C混土	
17	Ej－11	円形	0.64m×0.60m×0.42m		土師器片20g	FA・As-C混土	
18	Ei－10	隅丸方形	0.84m×0.76m×0.36m	N－12°－E	土師器片130g	FA・As-C混土	34号ピット
19	Ei－9	円形	0.52m×0.48m×0.26m		なし	FA・As-C混土	
20	Ei－9	円形	0.44m×0.40m×0.23m		なし	FA・As-C混土	
21	Eh－9	楕円形	1.04m×0.80m×0.11m	N－6°－E	なし	FA・As-C混土	
22	Eh－8	円形	0.72m×0.72m×0.27m		土師器片60g	FA・As-C混土	
23	Eh－7	楕円形	0.56m×0.44m×0.18m	N－72°－W	なし	FA・As-C混土	
24	Ei－6	楕円形	0.80m×0.72m×0.35m	N－11°－E	土師器片350g	FA・As-C混土	
31	Eh－13	楕円形	0.76m×(0.48)m×0.06m	N－4°－E	なし	FA・As-C混土	８号住居、35号ピット
34	Ei－10	楕円形	深さ0.34m		土師器片80g	FA・As-C混土	18号ピット
35	Eh－13	不整形	0.72m×0.60m×0.30m	N－8°－E	土師器片360g	FA・As-C混土	８号住居、31・36号ピット
36	Eh－13	不整形	(0.60)m×0.60m×0.35m	N－62°－W	土師器片10g	FA・As-C混土	35号ピット
37	Eg－6	楕円形	0.92m×0.80m×0.53m	N－82°－W	土師器片20g	FA・As-C混土	４号溝
38	Ef－8	半円形	深さ0.30m		土師器片110g	FA・As-C混土	
39	Em－7	円形	0.52m×0.48m×—		土師器片30g	FA・As-C混土	１号竪穴状遺構
40	Eg－5	不整形	0.84m×0.68m×0.10m	N－59°－W	土師器片30g	FA・As-C混土	
41	Eg－6	楕円形	0.76m×0.64m×0.20m	N－80°－E	なし	FA・As-C混土	４号溝
42	Eg－6	円形	0.64m×0.60m×0.32m		土師器片10g	FA・As-C混土	
43	Eh－7	円形	0.76m×0.72m×0.36m		土師器片350g	FA・As-C混土	
44	Eh－8	楕円形	0.64m×0.52m×0.10m	(N－85°－W)	土師器片20g	FA・As-C混土	
45	Eh－8	円形	0.44m×0.40m×0.28m		土師器片70g	FA・As-C混土	
46	Ei－6	円形	0.32m×0.28m×0.18m		なし	FA・As-C混土	
47	Ei－7	楕円形	0.60m×0.52m×0.32m	N－58°－E	なし	FA・As-C混土	２号井戸
48	Ei－6	円形	0.76m×0.72m×0.26m		土師器片80g	FA・As-C混土	
52	Eh－16	半円形	深さ0.40m		土師器片20g	FA・As-C混土	
54	Fd－1	円形	0.56m×0.52m×0.32m		土師器片80g、須恵器片20g	FA・As-C混土	18号住居
55	Fd－1	不整形	0.68m×0.44m×0.44m	N－25°－E	土師器片10g	FA・As-C混土	18号住居
56	Fd－1	不整形	0.36m×0.24m×0.25m	N－62°－W	なし	FA・As-C混土	18号住居
57	Fd－1	楕円形	0.40m×0.32m×0.21m	N－20°－W	なし	FA・As-C混土	18号住居
58	Eh－17	楕円形	0.72m×0.60m×0.19m	N－59°－E	土師器片30g、須恵器片10g	FA・As-C混土	22号住居
60	Ec－17	不整形	0.62m×(0.40)m×0.86m		土師器片30g、須恵器片60g	FA・As-C混土	
61	Ed－18	円形	0.34m×0.32m×0.55m		なし	FA・As-C混土	
62	Ec－18	楕円形	0.34m×0.30m×0.30m		なし	FA・As-C混土	
63	Ec－18	円形	0.28m×0.24m×0.12m		なし	FA・As-C混土	
64	Ec－18	円形	0.40m×0.38m×0.29m		土師器片30g	FA・As-C混土	
65	Ec－17	円形	0.48m×0.44m×0.34m		なし	FA・As-C混土	
66	Ec－18	不整形	0.80m×0.40m×0.69m		土師器片30g、須恵器片50g	FA・As-C混土	
67	Ec－17	円形	0.32m×0.32m×0.39m		なし	FA・As-C混土	
68	Ec－17	楕円形	0.40m×0.28m×0.28m	(N－76°－W)	なし	FA・As-C混土	
69	Ef－19	楕円形	0.44m×0.34m×0.48m	(N－32°－W)	なし	FA・As-C混土	
70	Ef－20	楕円形	0.44m×0.38m×0.34m		土師器片55g	FA・As-C混土	
71	Fd－1	円形	0.24m×0.20m×0.20m		なし	FA・As-C混土	
72	Fd－1	不整形	0.48m×0.38m×0.40m	(N－85°－W)	なし	FA・As-C混土	
73	Fd－1	楕円形	0.38m×0.30m×0.22m		なし	FA・As-C混土	
74	Fd－1	楕円形	0.30m×0.24m×0.30m	(N－86°－E)	なし	FA・As-C混土	
75	Fb－2	楕円形	0.62m×0.56m×0.24m		土師器片10g	FA・As-C混土	
79	Ea－16	楕円形	0.66m×0.58m×0.72m	(N－25°－E)	なし	FA・As-C混土	51号住居
80	Bt－11	楕円形	0.52m×0.44m×0.23m	(N－46°－W)	なし	FA・As-C混土	
81	Bs－12	円形	0.76m×0.72m×0.14m		土師器片50g、須恵器片10g	FA・As-C混土	56号住居
82	Bs－13	不整形	0.86m×0.58m×0.21m	N－44°－E	なし	FA・As-C混土	56号住居
83	Eh－17	不整形	0.75m×0.55m×0.07m	N－88°－E	土師器片90g、須恵器片20g	FA・As-C混土	

第４節　トレンチ調査

調査区の南側、西南側に幅約1.5mの建造物（塀）が建設されるために、発掘調査をすることになった。しかし、調査区の幅が狭いため、トレンチ調査（Ｂ・Ｄトレンチ）を実施した。また、Ｅ区東側に旧河道（縄文時代後・晩期）下の遺構確認・旧河道埋没土内の遺物確認のため深堀トレンチ（Ｅトレンチ）を入れ、調査した。

１　Ｂトレンチ（第164図、ＰＬ29）

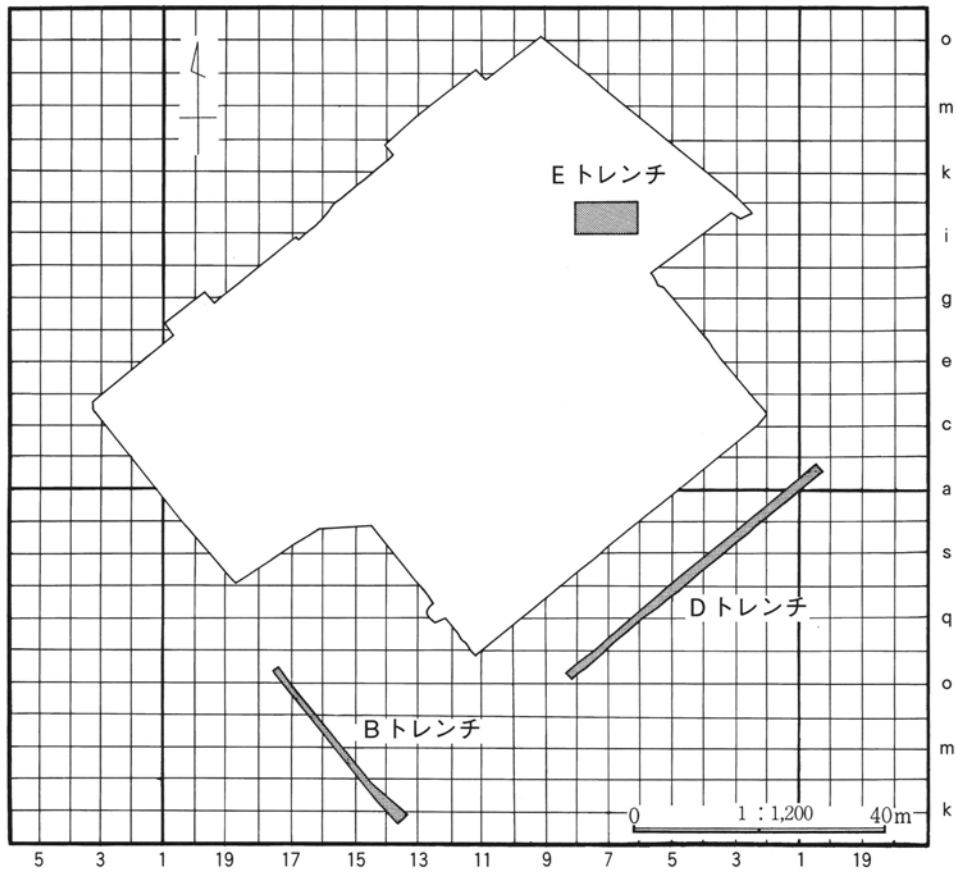
調査区の西南側に、幅1.0～1.5m、長さ31m、深さ1.3～1.6mのＢトレンチを重機により掘削した。断面観察の結果、２号溝の立ち上がりと思われる落ち込みが検出された。また、覆土から少量の土師器・須恵器片が出土した。

２　Ｄトレンチ（第164図、ＰＬ29）

調査区の南側に、幅約1.5m、長さ51m、深さ0.7～1.0mのＤトレンチを重機により掘削した。断面観察の結果、竪穴住居跡３軒、土坑４基、ピット３基が検出された。その内、１軒の竪穴住居跡は、竈の状況・壁の立ち上がりも明瞭に確認できた。また、覆土から土師器・須恵器片が出土した。

３　Ｅトレンチ（第164図、ＰＬ29）

平成12年10月の県教委保護課試掘調査の結果、八幡川（滝川）の旧河道を構成する埋没谷が確認されている。その河道に埋没した木器などの遺物確認・その下層の遺構確認のため、幅５m、長さ10m、深さ約３mのＥトレンチを重機により掘削した。その結果、遺構・遺物は確認されなかったが、下位より浅間板鼻黄色軽石（As-YP、約1.3～1.4万年前）、浅間総社軽石（As-Sj、約1.1万年前）、浅間藤岡軽石（As-Fo、約8,200年前）、As-C軽石、Hr-FA、As-B軽石などを検出することができた。詳細は、第５章付編第１節自然科学分析を参照されたい。



第164図　Ｂ・Ｄ・Ｅトレンチ全体図

第５節　遺構外出土遺物

本節では、住居跡・溝・土坑等の遺構出土以外の遺物を扱う。また、表土掘削時出土のものや、遺構出土ながら帰属の不詳なものを取り上げた。縄文時代の土器・石器から中世以降の陶磁器まで幅広い時期の遺物が出土した。

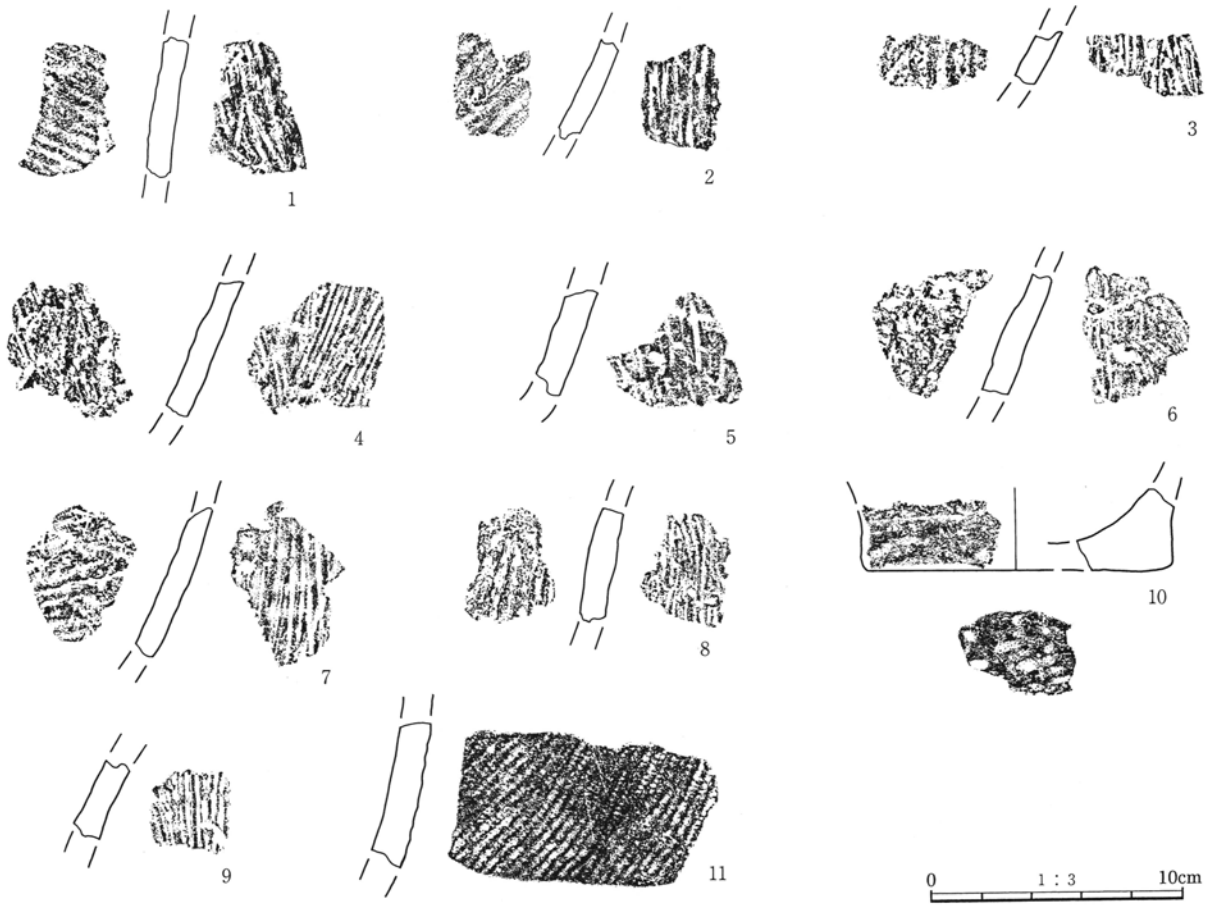
１　縄文（弥生）時代（第165・166図、ＰＬ47・48）

本遺跡では、旧石器・縄文・弥生時代の遺構は検出されなかった。遺物番号１～９は、縄文時代早期後半の条痕文系土器の深鉢片である。10は後期の深鉢の底部片で底部に僅かに網代痕が見られる。11は中期後半の深鉢の胴部片である。

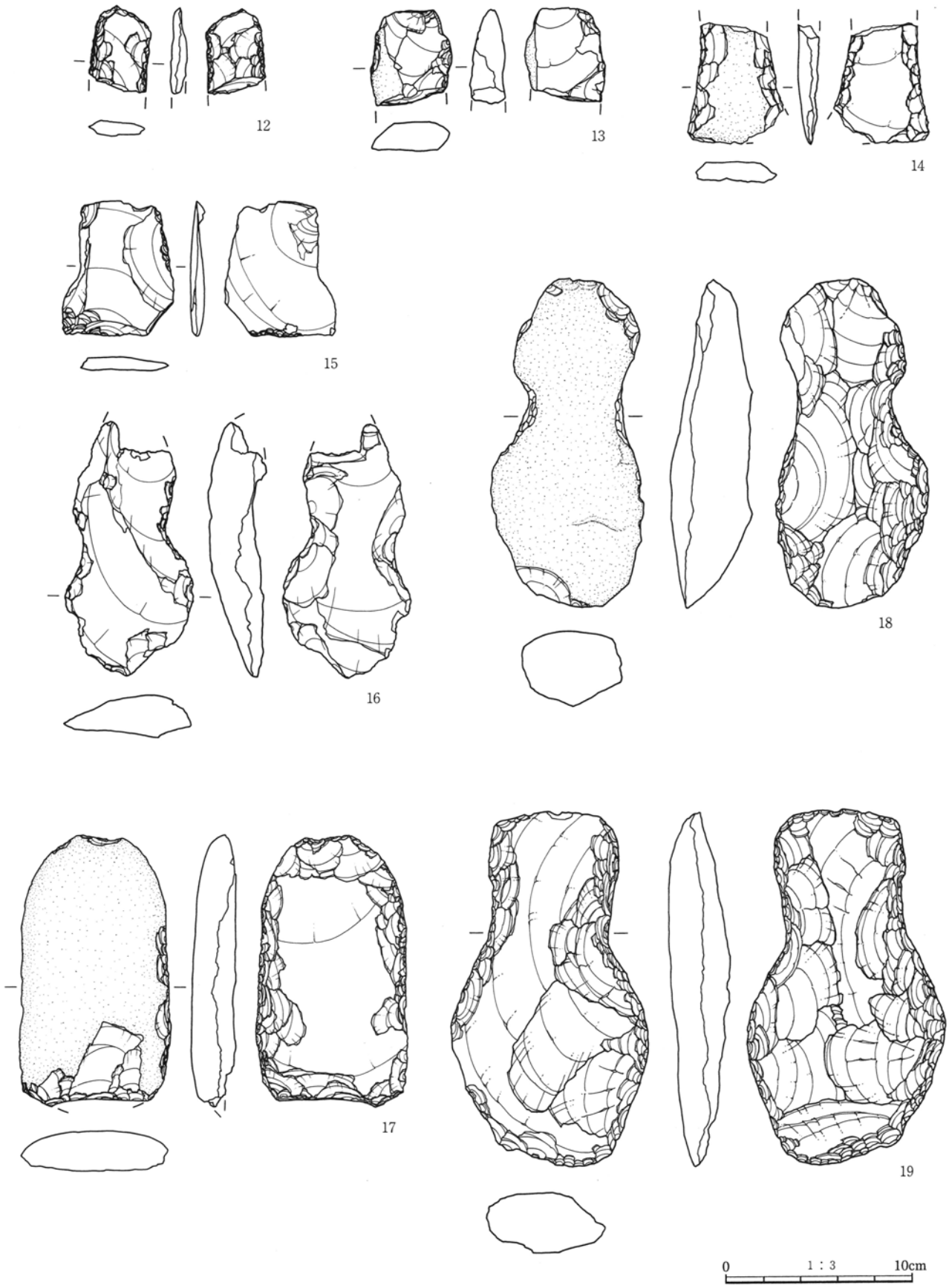
石器では、遺物番号12・13・17・18は打製石斧、14・16は打製石斧の未製品、15はスクレイパー、19は石鏃（弥生時代）である。掲載した石器以外で、出土した剥片類の石材・量をまとめたものが第４表である。

第４表　剥片類の石材・量

石　　材	破片数	重さ（g）
黒色頁岩	15点	390 g
珪質頁岩	11点	140 g
細粒輝石安山岩	１点	120 g
黒色安山岩	２点	20 g
粗粒輝石安山岩	１点	18 g
砂質頁岩	１点	10 g



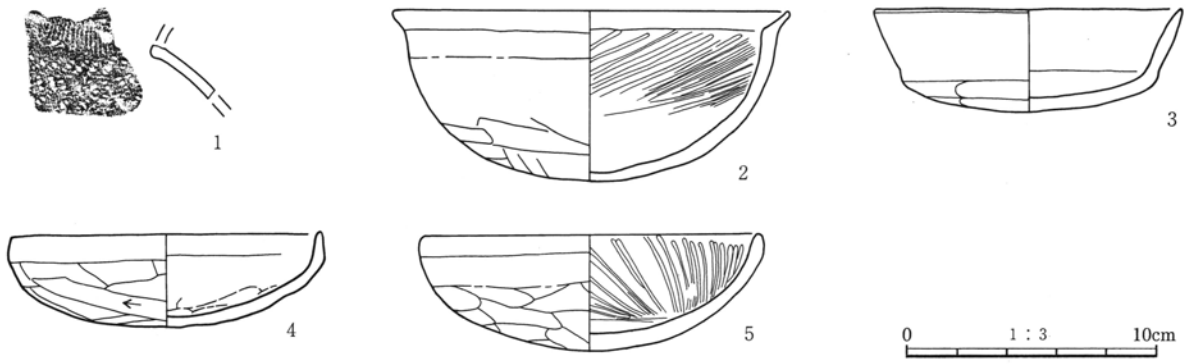
第165図　縄文（弥生）時代出土遺物（１）



第166図　縄文（弥生）時代出土遺物（２）

２　古墳時代（第167図、ＰＬ48）

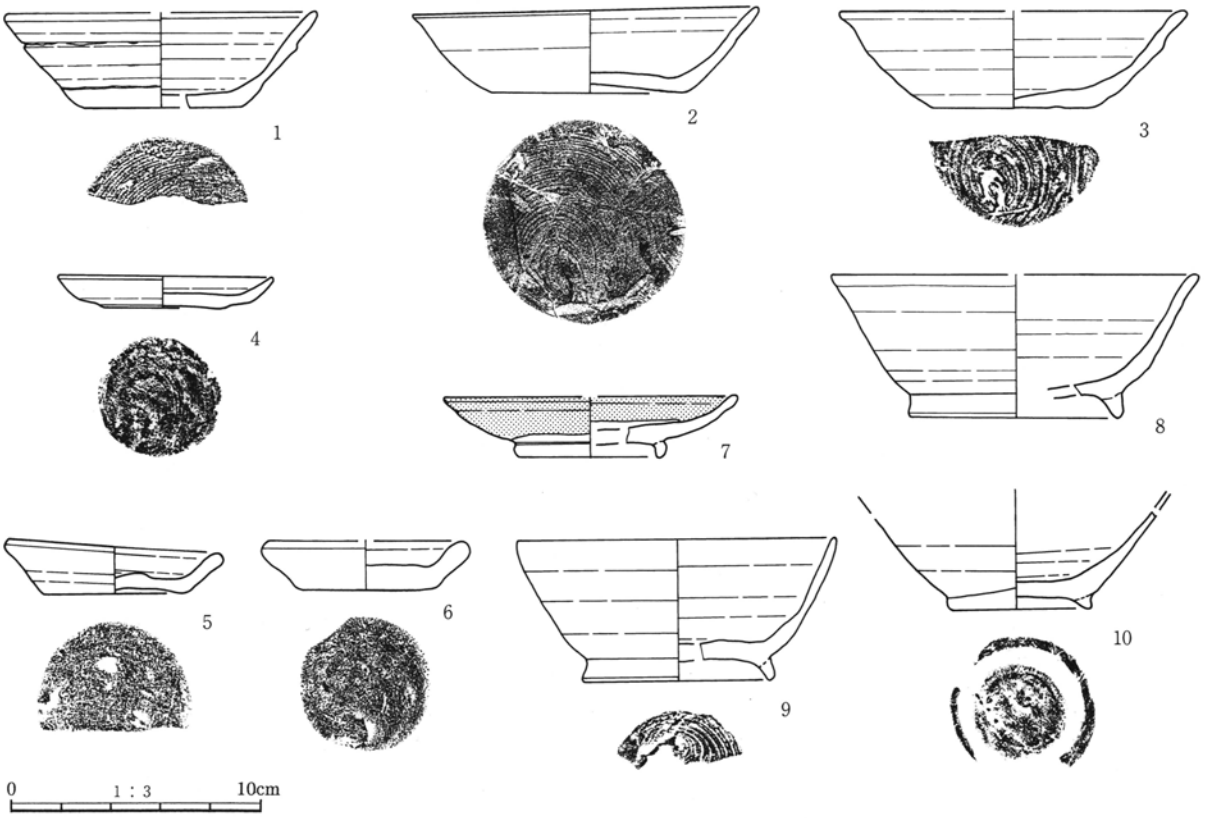
本遺跡からは古墳時代前期４軒・中期11軒・後期14軒の竪穴住居跡が検出されているため、古墳時代の出土遺物は比較的多い。遺物番号１は、前期の土師器壺肩部片、２は中期の土師器坏、３・４・５は後期の土師器坏である。



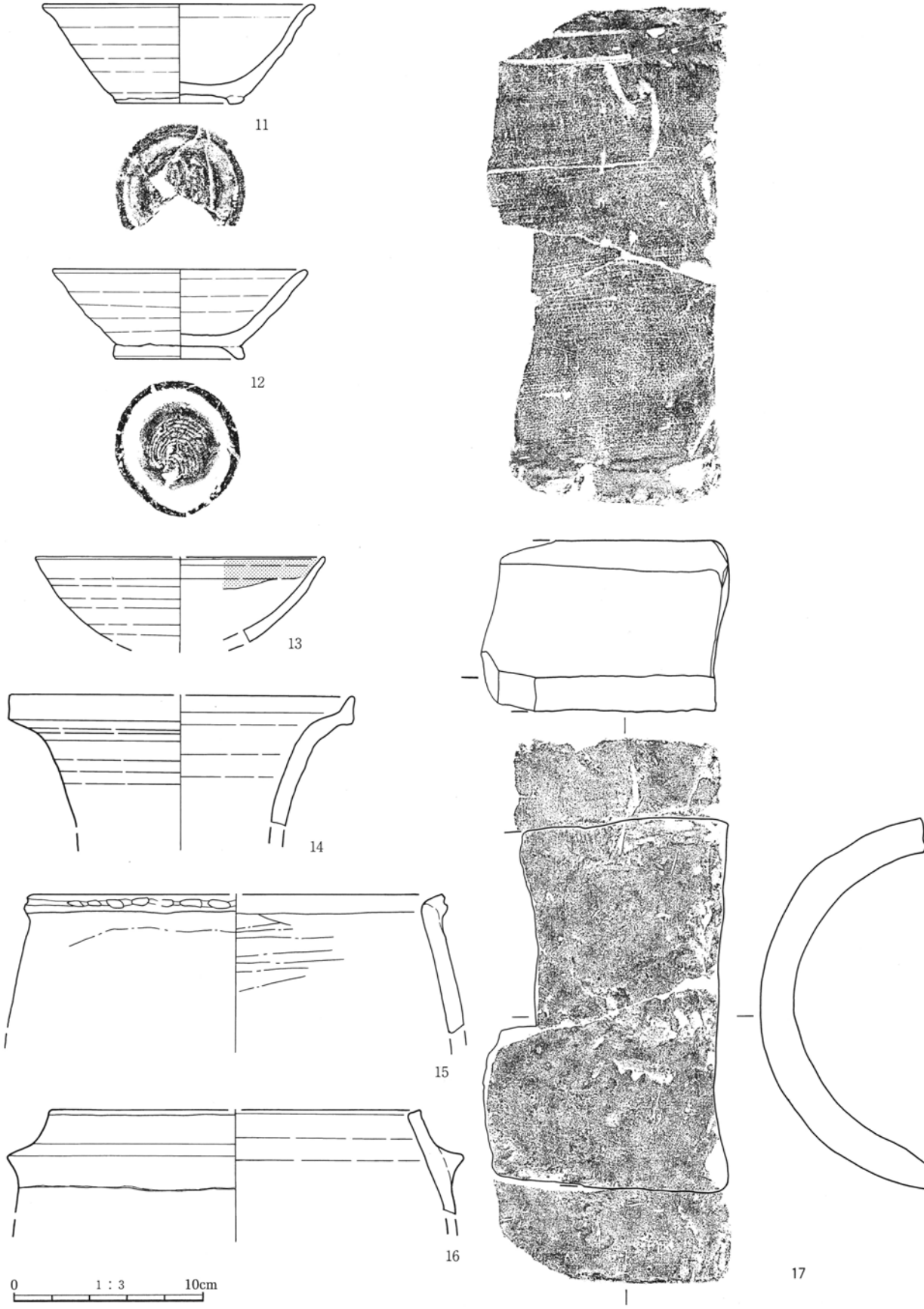
第167図　古墳時代出土遺物

３　奈良・平安時代（第168～170図、ＰＬ48）

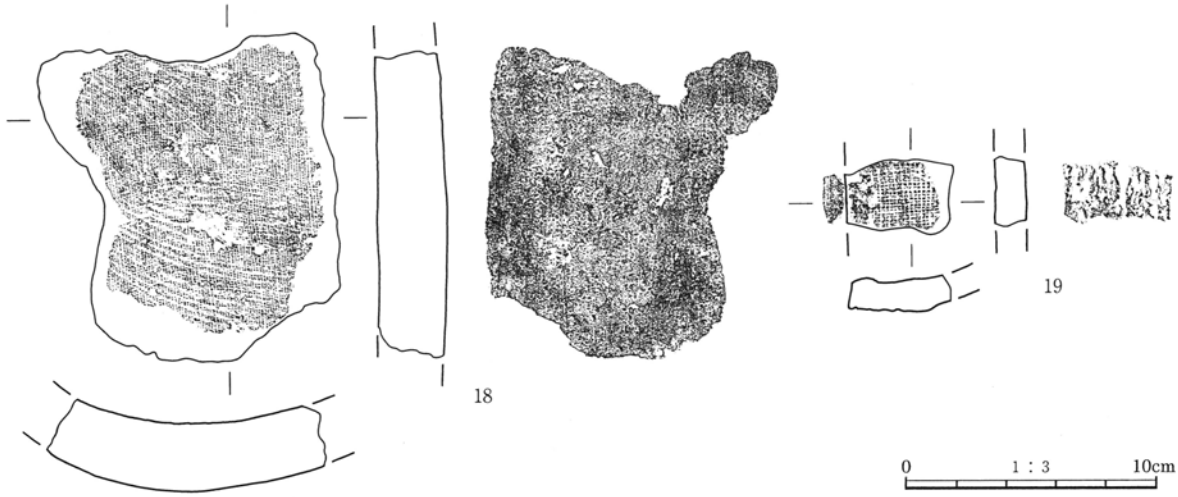
本遺跡の調査区全域から、49軒の８世紀～11世紀の竪穴住居跡が検出されているため、奈良・平安時代の出土遺物は、土師器土釜、須恵器坏・埦・壺・羽釜、灰釉陶器皿・埦、瓦と大変多い。また、出土遺物の中には、住居のすぐ近くのグリッドから出土し、その住居に伴うと思われる遺物も何点かあった。



第168図　奈良・平安時代出土遺物（１）



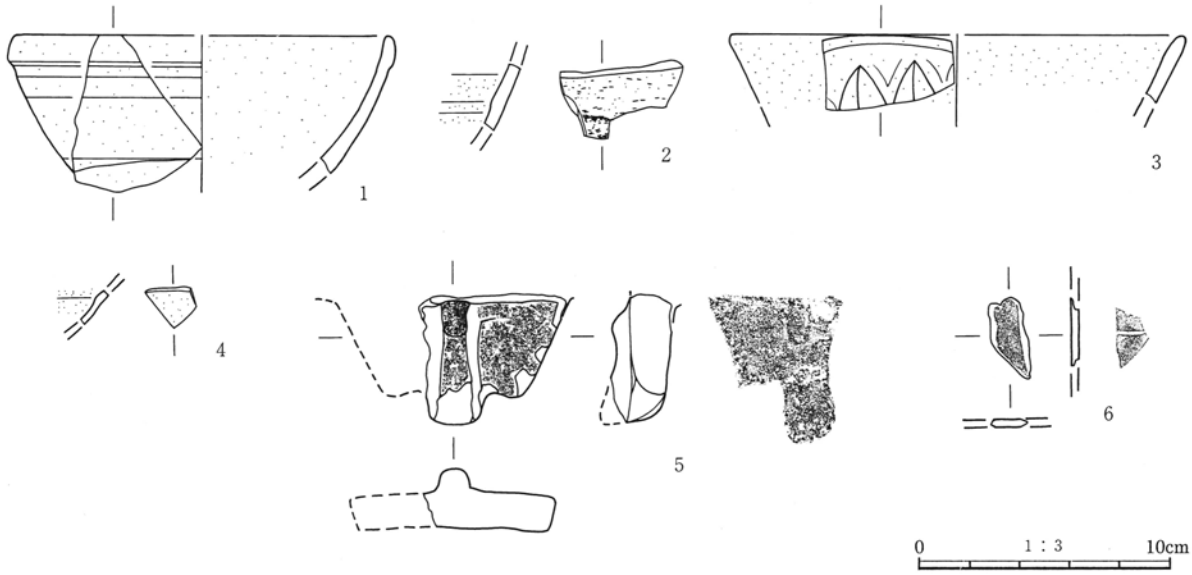
第169図　奈良・平安時代出土遺物（２）



第170図　奈良・平安時代出土遺物（３）

4　中世以降（第171図、ＰＬ48）

本遺跡で検出された中世以降の遺構は、３号溝、１・２・６・７・８・11号土坑である。ここでは、遺構外から出土した、中国産、国内産の陶磁器などを報告したい。



第171図　中世以降出土遺物

第４章　調査の成果

第１節　稲荷塚道東遺跡出土施釉陶器

神谷　佳明

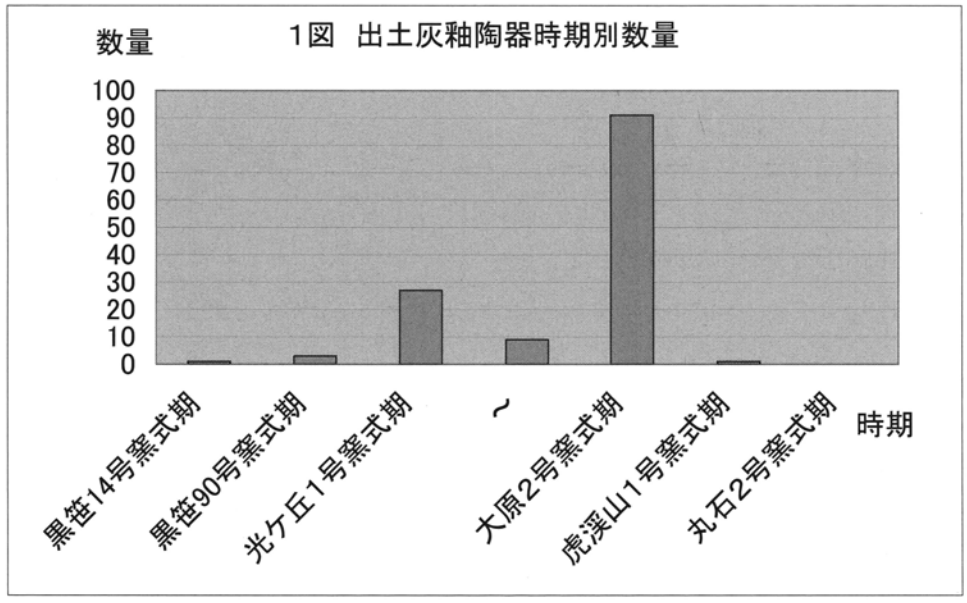
１．はじめに

稲荷塚道東遺跡は上野国府、上野国分僧寺・尼寺、山王廃寺など古代上野国の中枢地域に隣接する集落遺跡である。住居は古墳時代前期４世紀代から平安時代11世紀前半代まで継続的に営まれている。発掘調査範囲では近年の開発によって遺構が削平された箇所が存在するが４世紀から９世紀までは概ね１世紀あたり10軒ほどで推移しているが10世紀代には住居が20軒ほどに増加している。しかし、この増加傾向も10世紀代だけで11世紀代の住居は１軒だけと集落が終息してしまう。

こうした10世紀代の集落が多く存在することから稲荷塚道東遺跡では多少の施釉陶器が出土している。こうした施釉陶器について若干の検討を行い平安時代における国府周辺集落の様相について明らかにする。

２．出土した灰釉陶器

稲荷塚道東遺跡から出土した施釉陶器は全て灰釉陶器で緑釉陶器などの出土はみられなかった。出土した灰釉陶器は図化できなかったものも含めると総点数223点である。このうち椀・皿など食膳具が180点、長頸壺、小瓶などの貯蔵具が43点である。これら灰釉陶器の器種は椀・皿などの食膳具が椀134点、稜椀１点、輪花椀１点、皿26点、段皿１点、折縁皿１点、椀・皿類であるが小片で詳細なものが16点である。長頸壺・小瓶などの貯蔵具は長頸壺36点、小瓶３点、広口壺１点、平瓶１点、小片で詳細なものが３点である。出土した灰釉陶器は数量的にみると椀が60％、皿が11.7％と椀皿類で70％以上を占めている。その他の器種を見ると食膳具の中では稜椀、輪花椀、段皿、折縁皿が各１点、貯蔵具の中でも長頸壺が76％を占め小瓶３点、広口壺と平瓶が各１点



1図　出土灰釉陶器時期別数量

ずつしか見られない。こうした傾向は周辺の集落遺跡と大きな相違は見られない。（注１）

出土した灰釉陶器の産地は大部分が東濃古窯跡群からの製品であるが猿投古窯跡群の製品も68号住居３、32号住居（未図化）、58号住居（未図化）から計３点ほど出土している。

これらの灰釉陶器の時期は猿投古窯跡群が黒笹14号窯式期から黒笹90号窯式期、東濃古窯跡群が光ケ丘１号窯式期から虎渓山１号窯式期にかけてである。東濃古窯跡群の製品のうち時期を判定できたものの推移は１図のとおりである。（注２）

３．灰釉陶器を出土した遺構について

稲荷塚道東遺跡で灰釉陶器を出土した遺構は１表のとおり竪穴住居34軒、溝３条、井戸１基、土坑３基である。そして竪穴住居からの出土量は116点、１軒あたりは１点から14点で平均2.6点になる。ただし、灰釉陶器を出土した竪穴住居（以降「住居」と略す）には灰釉陶器生産以前の古墳時代や奈良時代の住居（住居の年代は出土した土器を主に判断した）も見られることから灰釉陶器生産以降の９世紀以降の竪穴住居１軒あたりにすると3.4点になる。他遺構からの出土量は溝が２号溝70点、３号溝７点、４号溝１点、井戸が２号井戸２点、土坑が13号土坑１点、24号土坑２点、25号土坑７点である。

灰釉陶器を出土した住居は34軒であるが、住居の年代は前述のように古墳時代４世紀から平安時代11世紀まで幅広い時期の住居からである。しかし、灰釉陶器はその生産年代が９世紀から11世紀前半までの間であることは明らかである。８世紀以前の住居からの出土は埋没過程のなかで破損などにより使用できなくなったものを廃棄した結果によるか後世の耕作などによる攪拌で混入したものである。

灰釉陶器生産段階の９世紀から11世紀前半代に比定される住居は21軒が相当する。この21軒の住居のうち灰釉陶器の時期より古い年代に比定される住居は４号住居、49号住居の２軒で他の住居は灰釉陶器の生産時期と同じ年代か新しい年代で生産時期と住居の年代に大きな矛盾は見られない。しかし、23号住居や68号住居は出土灰釉陶器の生産時期と住居の時期が１世紀近く離れていることから後世の攪拌などによる混入の可能性も考えられる。また、38号住居や39号住居、42号住居のように住居年代と同様な時期の灰釉陶器とそれよりやや新しい時期の灰釉陶器が共伴して出土する例が見られる。こうした例は

１表　灰釉陶器出土遺構の時期と出土灰釉陶器の時期

遺　構	時　　期	黒笹14号	黒笹90号	光ケ丘1号	大原2号	虎渓山1号	丸石2号
４号住居	９C.代				○		
９号住居	６～７C.代				○		
15号住居	８C.中葉				○		
18号住居	－				○		
20号住居	10C.Ⅰ		○	○	○		
21号住居	４C.中葉			○			
23号住居	10C.末～11C.初頭			○			
24号住居	５C.末～６C.初頭				○		
28号住居	10C.前半代				○		
32号住居	９C.Ⅳ		○	○			
33号住居	７C.中葉				○		
36号住居	５C.末～６C.初頭				○		
38号住居	９C.Ⅳ			○	○		
39号住居	９C.後半代			○	○		
40号住居	９C.Ⅲor11C.前半代			○	○		
41号住居	10C.Ⅱ			○	○		
42号住居	９C.前半代			○	○		
44号住居	10C.前半代			○			
47号住居	10C.前半代			○	○		
49号住居	９C.後半代				○		
51号住居	７C.後半代				○		
52号住居	10C.Ⅱ						
53号住居	10C.後半代				○		
54号住居	10C.Ⅰ				○		
58号住居	９C.Ⅳ		○				
65号住居	７C.Ⅳ			○			
68号住居	11C.前半代	○		○			
69号住居	10C.Ⅰ			○			
73号住居	７C.Ⅲ				○		
78号住居	８C.中葉				○		
79号住居	７C.後半代				○		
82号住居	９C.後半～10C.中葉				○		
83号住居	５C.後半代				○		
84号住居	10C.前半代				○		
２号井戸	６C.代						
13号土坑	－				○		
24号土坑	－				○		
25号土坑	10C.代				○		
２号溝	８C.～11C.	○		○	○	○	
３号溝	中世				○		
４号溝	中世				○		

住居年代より新しい灰釉陶器が混入したか住居年代を再検討する必要がある可能性が考えられるが稲荷塚道東遺跡では近年の攪乱が激しく各住居でその住居の年代と異なる土器が共伴する事例が多々見られることから詳細な土器編年を行うことが難しいため今後の課題としたい。

灰釉陶器の時期と住居の年代とで妥当な共伴関係を見ることができる住居は12軒である。これらの住居では灰釉陶器の時期と住居の年代が同一であるもの、同一であるが１時期古い灰釉陶器も共伴するもの、１時期古い灰釉陶器を共伴するものとが見られる。こうした傾向は筆者や筆者等（注３）が以前に行った傾向と同様なものである。

なお、２号溝からは70点と稲荷塚道東遺跡から出土した灰釉陶器の３分の１を占めているが出土した灰釉陶器は黒笹14号窯式期から虎渓山１号窯式期までと幅広い時期の製品が出土しているがこれは周辺の竪穴住居などから２号溝へ破損して使用が不可能になった灰釉陶器を廃棄した結果と見られる。

４．他の遺跡との比較

稲荷塚道東遺跡は国府や山王廃寺といった上野国の中枢地域に近接する遺跡であるがこうした立地条件のため周囲の集落遺跡からも多くの施釉陶器が出土していることが知られている。また、施釉陶器のなかでも灰釉陶器は平安時代の集落遺跡から出土しない例は皆無であるといえる。こうした状況から緑釉陶器については小片でも報告されるのに対して灰釉陶器はある程度の残存状態でないと報告されないのが実状である。このため稲荷塚道東遺跡と比較検討できる報告は少ないが以前筆者が「下東西清水上遺跡」、「下芝五反田遺跡」で出土した灰釉陶器の全点を対象に分析・検討を行っているのでこの資料と比較を行ってみた。

下東西清水上遺跡は稲荷塚道東遺跡の北北西約３㎞に位置する。遺跡は７世紀から10世紀の集落と８世紀初頭の比較的規模の大きな豪族居宅を中心に構成されている。その立地は山王廃寺の北側で総社古墳群の西側であることから山王廃寺に関係する豪族層なりこれらに付随する集落と想定される。施釉陶器は奈良三彩陶器１点、緑釉陶器51点、灰釉陶器1162点が出土している。灰釉陶器が生産された時期の住居は80軒ほどが見つかっている。灰釉陶器の出土傾向は稲荷塚道東遺跡と同様に椀皿などの食膳具が大部分を占める。生産された時期も大原２号窯式期のものが圧倒的に多いが、その後の虎渓山１号窯式期のものも若干見られる。これを住居年代による軒数の差を考えないで割り戻すと１軒あたり14点になる。

下芝五反田遺跡は箕郷町下芝に所在する古墳時代中期と奈良平安時代の集落である。奈良平安時代の集落は６世紀代に起きた榛名二ツ岳の噴火に伴う土石流などが４ｍほど堆積した上に構築されている。発掘調査では住居141軒、建物６棟が見つかっている。住居は８世紀代は７軒と少なく残りの134軒が施釉陶器の生産時期に比定されるものである。施釉陶器は5459点が出土し、その内訳は緑釉陶器24点、灰釉陶器5435点である。灰釉陶器の出土傾向は稲荷塚道東遺跡と同様に椀皿などの食膳具が大部分を占める。生産された時期も10世紀代の住居が多いことから大原２号窯式期のものが圧倒的に多いが、その後の虎渓山１号窯式期のものも多く見られる。これを住居年代による軒数の差を考えないで割り戻すと１軒あたり40点になる。

以上のように２遺跡と比べると稲荷塚道東遺跡での灰釉陶器使用率は非常に少ない状態である。この状態は下東西清水上が施釉陶器の時期の富民層や富豪層に伴う居宅遺構は見つかっていないものの山王廃寺に関係する豪族に付随するような富豪に伴う集落であること、下芝五反田遺跡が律令制崩壊期の土地開発に関わる集落でその開発には大きな権力が背景に存在したと見られることから施釉陶器の出土量の多さの背景が窺える。しかし、数量的には明らかではないが稲荷塚道東遺跡と同様の国府周辺遺跡と比較して少ないと見られる。

５．まとめ

以上のように２から４項で稲荷塚道東遺跡から出土した灰釉陶器について分析・検討を行ってきた。この結果、灰釉陶器は検出した住居の盛衰と同様の出土傾向が見られること、他の遺跡と比較すると出土量が少ないことなどが明らかになった。こうした状況から稲荷塚道東遺跡は古墳時代から継続的に営まれている集落であることなどから国府関連の集落ではなく古墳時代から総社古墳群に被葬、山王廃寺創建、維持に関わる豪族層に支配された末端の農村的集落と見られる。

以上、稲荷塚道東遺跡から出土した灰釉陶器、およびこれを基にした検討を行ったが発掘調査は遺跡の一部であり近年の開発による攪乱によって欠落している部分もあり不明な点も多く存在している。しかし、こうした個々の遺跡での分析を重ねることにより古代上野国についてのより一層の解明が可能であると考える。

注

注１　拙稿「第３節　下東西清水上遺跡出土の施釉陶器について」『下東西清水上遺跡』1998(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団の分析結果による。

注２　灰釉陶器の生産時期については古代の土器研究会「古代の土器研究－律令的土器様式の西・東３施釉陶器」1994を基にしている。

注３　拙稿「第３節　下東西清水上遺跡出土の施釉陶器について」『下東西清水上遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1998、拙稿「２．出土施釉陶器について」『下芝五反田遺跡－奈良平安時代以降編－』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1999をもとにした。

参考文献

斉藤孝正　「施釉陶器年代論」『論争・学説日本の考古学』６歴史時代　雄山閣出版　1987
「東海地方の施釉陶器－猿投窯を中心に－」『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東３施釉陶器』古代の土器研究会　1994
高橋照彦　「東国の施釉陶器」『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東３施釉陶器』古代の土器研究会　1994
綿貫邦男・神谷佳明・桜岡正信　「群馬における灰釉陶器の様相について（１）－消費地からのアプローチ－」『研究紀要』９(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1992
拙稿　「第３節　下東西清水上遺跡出土の施釉陶器について」『下東西清水上遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1998
拙稿　「２．出土施釉陶器について」『下芝五反田遺跡－奈良平安時代以降編－』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1999
拙稿　「緑釉陶器にみる古代上野国」『研究紀要』19(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2001

第２節　竈構築材採掘痕について

今井　和久

１．はじめに

稲荷塚道東遺跡（位置図１）２号溝の両側で検出された竈構築材採掘痕は、竈構築材採掘痕群とその竈構築材を利用したと考えられる竪穴住居跡群がセットで発見された例としては、当事業団が関越自動車道建設に伴い調査した鳥羽遺跡０・Ｌ区（1990）（位置図２）（注１）、前橋市埋蔵文化財発掘調査団が土地区画整理に伴い調査した大屋敷遺跡Ⅲ（1995）（位置図３）に次ぐ、（大規模な例としては、県内では３例目となる）貴重な発見となった。そこで、３遺跡の竈構築材採掘痕について比較・検討してみたい。なお、小規模な例としては、上野国分僧寺・尼寺中間地域（７）Ⅰ区（1992）で、「竈の袖石等の部材を切り出した痕跡と考えられる土坑」３基が報告されている。（注２）３基は、「部材の切り出しに成功してはおらず、途中で放棄された状態である」とも報告されている。このような途中で部材の切り出しを放棄した跡は、上記の３遺跡でも発見されている。

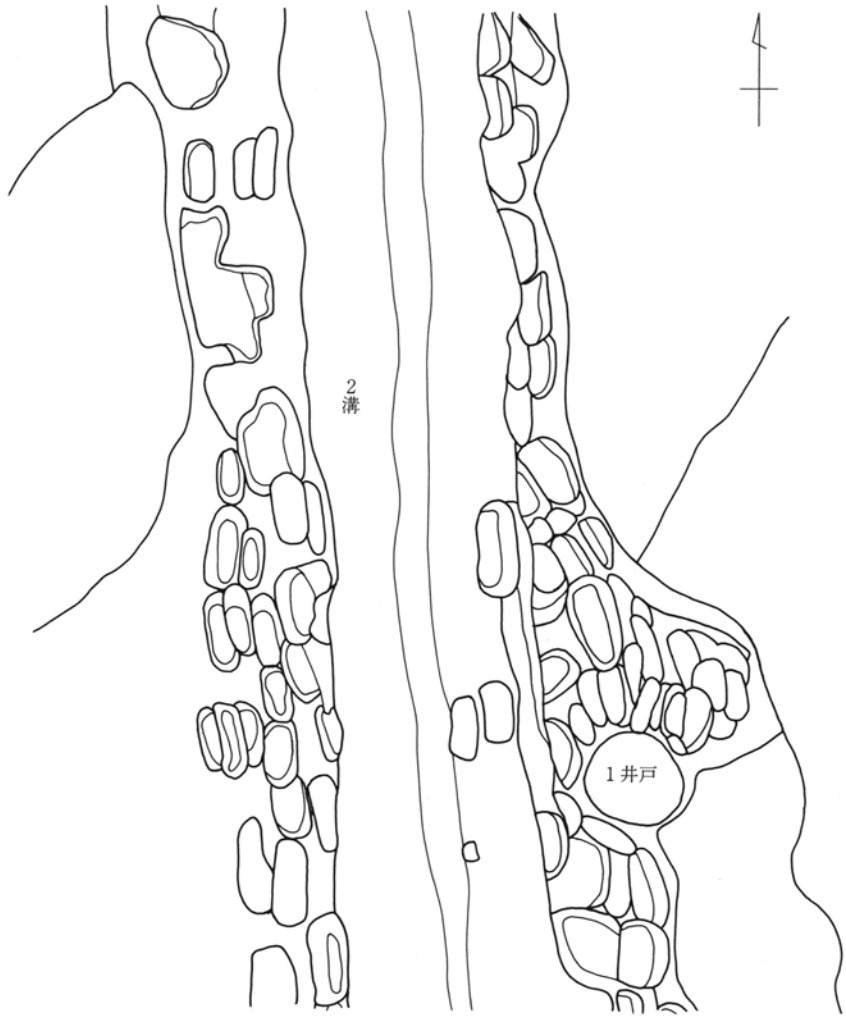
第１図　位置図（国土地理院5万分の1「前橋」使用）

２．立地環境（採掘場所）

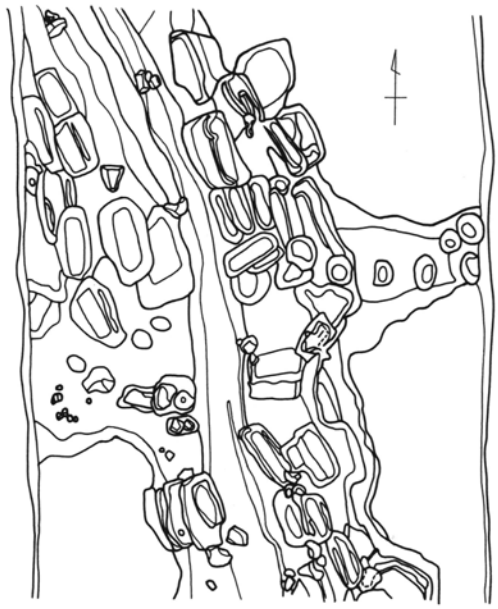
鳥羽遺跡、大屋敷遺跡で検出された竈構築材採掘痕も本遺跡同様に凝灰岩質層から構築材を切り出している。３遺跡ともに、榛名山南東麓に広がる相馬ヶ原扇状地の末端部と前橋台地の接する場所に立地している。また、山麓を流れる河川（鳥羽遺跡は染谷川、大屋敷遺跡と本遺跡は八幡川）の段丘上に位置している点にも共通性が見られる。標高は、鳥羽遺跡が約122m、大屋敷遺跡が約125m、稲荷塚道東遺跡約120mと差がない。特に、本遺跡と大屋敷遺跡は第１図からも分かるように、直線距離約200mの近距離にあり、同一地質上に位置している。

３．採掘方法（採掘工程）

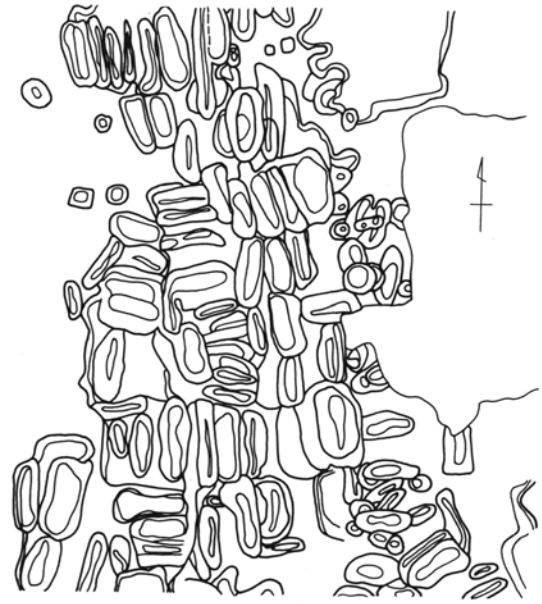
採掘方法は、稲荷塚道東遺跡・大屋敷遺跡では、溝縁を利用して、凝灰岩質層を切り出し採掘している。溝によって表土が削られ凝灰岩質層が露出した場所で採掘するのは、溝縁以外の場所では凝灰岩質層までの到達が深いため採掘を行うのが困難なためである。鳥羽遺跡では、台地縁辺部の凝灰岩質層の露出している場所を中心に大規模な採掘を行っている。３遺跡ともに、表土を除去することなしに凝灰岩質層の採掘可能な地点を選んで切り出している点が共通している。また、３遺跡ともに「途中で構築材の切り出しを放棄した跡＝竈構築材採り残し痕」（本報告書第３章（２）竈構築材採掘痕・採り残し痕①②参照）が検出されており、その採掘工程が同じ方法をとっていることが看取できた。まず垂直方向に切り込み、次に水平方向に切り出して採掘を行っている。



稲荷塚道東遺跡



大屋敷遺跡Ⅲ



鳥羽遺跡Ｌ区

第２図　３遺跡の竈構築材採掘痕

0　1：100　2.5 m

４．検出数・面積・規模・掘り方（平面形）

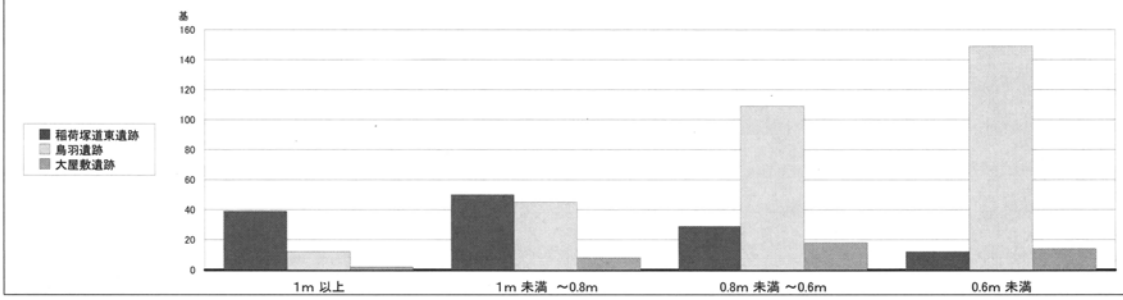
検出数・面積は、本遺跡が130基・約93㎡、鳥羽遺跡が315基・約211㎡（０区93㎡、Ｌ区84㎡、その他34㎡）、大屋敷遺跡が42基・約35㎡である。

また、３遺跡の竈構築材採掘痕の規模は第１表の通りである。第１表を分かり易くするために、グラフ化したのが第３図である。検出された竈構築材採掘痕の平均値は、本遺跡が長軸0.88m、短軸0.36m。鳥羽遺跡が長軸0.61m、短軸0.17m。大屋敷遺跡が長軸0.64m、短軸0.19m。掘り方（平面形）は、第２図からも分かるように、３遺跡ともほとんどが長方形を呈し、方形のものは少ない。以上のように、鳥羽・大屋敷の両遺跡の竈構築材採掘痕の規模は、平均値が長軸約0.60m、短軸約0.20mと小規模なのに対して、本遺跡では、長軸約0.88m、短軸約0.36mとやや大きめな部材を採掘しているところが相違点である。

第１表　３遺跡の竈構築材採掘痕の規模

長軸 遺跡名	１m以上	１m未満 ～0.8m	0.8m未満 ～0.6m	0.6m未 満～
本遺跡	39基	50基	29基	12基
鳥羽	12基	45基	109基	149基
大屋敷	２基	８基	18基	14基

第３図　３遺跡の竈構築材採掘痕の規模



５．採掘時期

鳥羽遺跡では、「同遺跡内で検出される奈良～平安期にかけての竪穴住居跡に付設される竈に用いられる構築材がこれにあたると考えている」と報告されていることにより、奈良・平安時代に採掘が行われたと言えよう。また、鳥羽遺跡では、同時期の遺物を伴う竈構築材採掘に従事した人々の仮設的炉跡と考えられる遺構も発見されている。大屋敷遺跡では、「６世紀代の竪穴住居跡に竈構築材が用いられており、採掘は６世紀代から始められたこと」、「竈構築材採掘痕の検出された溝の覆土上層にAs-B軽石が認められることから12世紀には採掘が行われなくなったこと」が報告されている。一方、本遺跡では、第２表・写真１のように竈構築材と思われる石材（凝灰岩）が28の住居内から出土している。表からもわかるように、本遺跡では、竈構築材採掘痕群から採掘した構築材を、７世紀前半から11世紀（古墳時代後期から平安時代）の竪穴住居跡の竈に使用している。また、大屋敷遺跡と同様、本遺跡でも竈構築材採掘痕の検出された２号溝の覆土上層にAs-B軽石が認められたことから、12世紀には採掘が行われなくなったと考えられる。

６．採掘実験とまとめ

奈良・平安時代の竪穴住居跡に付設される竈を造るときに、構築材（補強材）として、粘土、土器、瓦、川原石、また本遺跡のように凝灰岩を用いる例は、他の遺跡でもよくみられる。凝灰岩を竈構築材に利用したのは、川原石などに比べて、目的に応じて自由に加工できる点が最大の利点と思われる。また、被熱しても瓦・川原石のように割れない点も利点である。しかし、瓦・川原石は遺跡地周辺にあるものを採集すればよいが、凝灰岩は採掘場所を選んで採掘するために、時間がかかる欠点もある。そこ

第２表　稲荷塚道東遺跡竈構築材（凝灰岩）出土住居一覧

	住居番号	時　　期	出土数	出土位置	使用目的	主な構築材の大きさ 長軸×短軸×厚さ(cm)	備　　考
1	16号住居	８～９世紀	5	竈	左の袖石	24×11×８	
2	20号住居	10世紀前半	13	竈付近、床	不明	19×16×９	
3	23号住居	10～11世紀	2	竈	左右の袖石	20×10×11	
4	28号住居	10世紀前半	1	竈	右の袖石	12×６×４	
5	32号住居	９世紀後半	2	床	不明	16×12×７	
6	34号住居	10世紀中～後	4	竈	左右の袖石 煙道部	21×17×８	
7	36号住居	A住10世紀 B住９世紀後半	3	覆土	不明	22×12×13	
8	37号住居	９世紀	1	竈付近	右の袖石？	11×10×７	
9	38号住居	９世紀後半	2	覆土	不明	20×11×10	
10	40号住居	９世紀後半	2	覆土	加工前の原石	26×17×10	掲載番号16
11	41号住居	10世紀後半	12	竈、貯蔵穴	左の袖石	18×12×11	
12	42号住居	９世紀前半	3	竈	袖石	18×15×12	
13	43号住居	10世紀	1	竈	天井石？	24×12×11	
14	44号住居	10世紀前半	5	床	不明	23×12×15	
15	47号住居	10世紀前半	2	竈	左右の袖石	25×17×12	
16	49号住居	９世紀後半	2	竈、床	袖石？	18×11×10	
17	51号住居	７世紀後半	1	竈	右の袖石	13×10×４	
18	52号住居	10世紀前半	3	竈	左右の袖石	17×10×６	掲載番号８
19	53号住居	７世紀前半	4	竈	袖石、支脚石	27×16×10	
20	54号住居	10世紀中	1	竈	右の袖石	10×６×５	
21	55号住居	10世紀後半	1	覆土	不明	22×18×16	
22	64号住居	10世紀後半	7	竈	右の袖石 天井石 支脚石	18×16×13 43×16×10 22×13×９	 掲載番号12 掲載番号11
23	65号住居	８世紀前半	1	覆土	不明	10×８×６	
24	68号住居	11世紀前半	1	床	不明	53×14×11	原石か？
25	69号住居	10世紀前半	3	竈	左右の袖石	29×15×11	
26	75号住居	８世紀前半	1	竈覆土	不明	16×14×10	
27	78号住居	８世紀中	1	竈、床	袖石？	28×17×４	
28	86号住居	10世紀	1	覆土	不明	10×８×６	
計	28住	時期７世紀前半～11世紀	85	竈、床、覆土	袖石、天井石 支脚石	平均 23×14×10	

で、発掘調査に使用する手鍬（鉄製）を用いて、本遺跡の竈構築材採掘痕の平均値（0.88×0.36×0.20m）の大きさの凝灰岩採掘実験（写真２・協力中沢悟氏）を試みた。その結果、採掘時間約15分で採掘することができ、それほどの時間は要しないことがわかった。この採掘実験では、平面採掘だったため15分間要したが、溝の縁辺部を利用して採掘すれば10分程で採掘できると考えられる。本遺跡では、大型の鉄鑿（釘）とも思われる鉄製品も出土しており、採掘には鉄器を使用したと思われる。また、竈構築材採掘痕や住居内から出土した凝灰岩からは、３～４ｃｍの工具痕も看取できた。

このように、本遺跡と大屋敷遺跡、鳥羽遺跡では、遺跡の立地環境・採掘方法に多くの共通点があげられると同時に、採掘の規模・時期については相違点がみられる。つまり、本遺跡の竈構築材採掘痕１基の規模が、他の２遺跡に比べて大きいこと。採掘を始める時期が３遺跡で多少ずれていることの２点である。また、「３遺跡とも、竈構築材採掘痕から切り出した部材を、本当に遺跡内の住居の竈構築材に利用したのか」という疑問も残る。この点は、鳥羽遺跡、大屋敷遺跡ともに「切り出した材の用途については科学的な証明（直接の証明）は得られてないが」と前置きしながら、遺跡内で検出された竪穴住居跡の竈に用いられた構築材がこれにあたると報告している。

本遺跡の竈構築材採掘痕の規模が大きいのは、「初めは他の目的で採掘した」「周辺遺跡への竈構築材の供給地だった」とは考えられないだろうか。凝灰岩はもろくて崩れやすいので、古墳の石室の材料などには不向きだと思われるが、「初めに、直方体に切り出し→何かの目的に利用（１次利用）→竈構築材に利用（２次利用）したこと」「本遺跡の北西200～300ｍに位置する総社甲稲荷塚大道西Ⅱ・総社閑泉明神北Ⅱ遺跡（位置図は本書11頁参照）では、竈の構築材とし凝灰岩を用いている住居が検出されており、本遺跡は竈構築材の供給地だった」と考えると、本遺跡の竈構築材採掘痕が他の２遺跡より規模が大きい証明になる。２点目の採掘時期のずれは、３遺跡とも、溝・台地縁辺部の凝灰岩質層の露出している場所を選定して採掘していることから考えて、溝・台地縁辺部の凝灰岩質層の露出する時期の違いと思われる。つまり、大屋敷遺跡では６世紀、本遺跡では７世紀、鳥羽遺跡では奈良時代（８世紀）から採掘が始められたと想定される。本遺跡周辺で、６世紀代の住居の竈構築材に凝灰岩を使用した遺跡は、総社甲稲荷塚大道西Ⅱ・元総社明神Ⅴ・大友屋敷Ⅲ遺跡（前橋市の調査）と大屋敷遺跡の４例のみである。したがって、上記の３遺跡には、大屋敷遺跡で採掘した凝灰岩が供給された可能性が高い。

現在までに、竪穴住居跡の竈に、構築材として凝灰岩が使用されている例は、富岡市本宿・郷土遺跡、渋川市有馬条里遺跡、群馬町北原遺跡、伊勢崎市波志江中野面遺跡など県内各地で見つかっている。周辺の遺跡（位置図は本書11頁参照）では、山王廃寺・国分境Ⅳ・上野国分尼寺・下東西・元総社西川・弥勒・塚田村東・中尾遺跡などで使用されている。最近では、前橋長瀞線に伴う調査の綿貫小林前・下滝天水遺跡でも検出されている。しかし、両遺跡とも凝灰岩を採掘した痕は発見されてない。綿貫小林前・下滝天水遺跡は井野川の両側に広がる遺跡なので、おそらく井野川によって浸食され、露出した凝灰岩質層から構築材を切り出したのだろう。このように、凝灰岩質層の広がる地域では構築材の採掘が可能であるため、今後の発掘事例の増加に伴い、竈構築材採掘痕の一層の解明が進むことを期待して、本稿のまとめとしたい。

注１　「鳥羽遺跡」の竈構築材採掘痕については、発掘担当者の友廣氏・新倉氏、整理担当者の綿貫氏にご教示頂いた。
注２　「上野国分僧寺・尼寺中間地域（７）」の竈構築材採掘痕については、発掘・整理担当者の木津氏・桜岡氏にご教示頂いた。

引用・参考文献
『鳥羽遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1990
『大屋敷遺跡Ⅲ』前橋市埋蔵文化財発掘調査団1995
『上野国分僧寺・尼寺中間地域（７）』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1992

写真１　稲荷塚道東遺跡出土竈構築材（凝灰岩）

写真２　採掘実験で採取した構築材（凝灰岩）

第５章　付　　編

第１節　自然科学分析

株式会社　古環境研究所

Ⅰ．稲荷塚道東遺跡におけるテフラ分析

１．はじめに

群馬県域に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、赤城、榛名、浅間など北関東地方とその周辺の火山、中部地方や中国地方さらには九州地方などの火山に由来するテフラ（火山砕屑物、いわゆる火山灰）が多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

そこで、年代が不明な土層が検出された稲荷塚道東遺跡においても、地質調査を行い土層層序を記載するとともに、テフラ分析や屈折率測定を行って指標テフラの層位を把握し、土層の年代に関する資料を収集することになった。調査分析の対象となった地点は、Ej-10グリッド、Ej-7グリッド、Ej-9グリッド、２号溝脇（壁面）、２号溝SPB西側、東西トレンチ中部、東西トレンチ東部、En-8グリッド、Eb-18グリッド、20号住居址、28号住居址、２号溝北壁の12地点である。

２．土層層序

（１）Ej-10グリッド

Ej-10グリッド、Ej-7グリッド、Ej-9グリッドでは、遺跡が位置する台地を構成する地層の良好な断面を観察することができた。Ej-10グリッドでは、下位より灰色シルト層（層厚４cm以上）、成層したテフラ層（層厚27.3cm）、円磨された白色軽石に富む黄白色シルト層（層厚18cm、軽石の最大径17mm）、円磨された白色軽石混じり桃白色シルト質砂層（層厚23cm、軽石の最大径12mm）、黄灰色砂層（層厚18cm）、砂混じり暗灰色泥層（層厚３cm）、黒灰褐色泥層（層厚10cm）、灰色軽石に富む暗灰色泥層（層厚８cm、軽石の最大径９mm）、黒泥層（層厚８cm）、黄灰色粗粒火山灰層（層厚0.1cm）、黒泥層（層厚0.5cm）、黄灰色シルト層（層厚0.3cm）、黒泥層（層厚0.1cm）が認められる（図１）。さらにその上位には成層した厚い水成層が認められる。

成層したテフラ層は、下位より黄白色軽石層（層厚16cm、軽石の最大径19mm、石質岩片の最大径３mm）、灰色粗粒火山灰混じり桃灰色細粒軽石層（層厚８cm、軽石の最大径５mm、石質岩片の最大径２mm）、黄灰色細粒火山灰層（層厚0.3cm）、白色軽石混じり桃色細粒火山灰層（層厚３cm）からなる。このテフラ層は、その層相から、約1.3～1.4万年前*1に浅間火山から噴出した浅間板鼻黄色軽石（As-YP、新井、1962、町田・新井、1992）に同定される。また暗灰色泥層中に多く含まれる灰色軽石については、その岩相から、約1.1万年前に浅間火山から噴出した浅間総社軽石（As-Sj、早田、1991）に由来すると考えられる。

（２）Ej-7グリッド

Ej-7グリッドでは、下位より黄灰色砂層（層厚10cm以上）、灰色砂質土（層厚６cm）、黒泥層（層厚８cm）、灰色軽石に富む暗灰色泥層（層厚７cm、軽石の最大径５mm）、黒泥層（層厚８cm）が認められる。これらの

土層は、Ej-10グリッドにおいてAs-YPより上位にある。暗灰色泥層中に多く含まれる灰色軽石については、その岩相からAs-Sjに由来すると考えられる。

その上位には、Ej-10グリッドでもみられた成層した厚い水成層が認められる。Ej-7グリッドにおいて、この地層は下位よりラミナが発達した黄灰色シルト層（層厚18cm）、ラミナが発達した灰色砂層（層厚51cm）、桃灰色シルト層（層厚5cm）、暗灰色泥層（層厚1cm）、黄白色軽石混じりでラミナが発達した灰色砂層（層厚14cm）、スコリア質黒灰色岩片や黄白色あるいは灰白色軽石混じり灰色砂質泥流堆積物（層厚56cm、軽石の最大径33mm、岩片の最大径55mm）、ラミナが発達した灰色砂層（層厚20cm）、黄色軽石混じり灰色砂質泥流堆積物（層厚8cm、軽石の最大径8mm）、灰色シルト層（層厚4cm）、暗灰色泥層（層厚1cm）、黄色軽石混じりで固結した灰色砂質泥流堆積物（層厚33cm、軽石の最大径18mm）の連続が認められる（図2）。これらの水成層は、埋没谷によって切られている。ここでは、谷を埋没させた褐色砂礫層（層厚92cm）が最上位に認められる。

（3）Ej-9グリッド

Ej-9グリッドでは、埋没谷の堆積物をよく観察することができた（図3）。谷を埋めた堆積物は、下位より亜円礫混じり灰色砂層（層厚150cm以上、礫の最大径61mm）、灰色の砂とシルトの互層（層厚16cm）、褐色亜円礫層（層厚5cm、礫の最大径31mm）、桃灰色シルト層（層厚3cm）、灰色シルト層（層厚6cm）、黄灰色シルト質砂層（層厚3cm）、灰色砂礫層（層厚64cm、礫の最大径61mm）、ラミナが発達した亜円礫混じり灰色砂層（層厚49cm、礫の最大径35mm）、灰色砂層（層厚9cm）、砂混じり暗灰褐色土（層厚2cm）、正の級化構造が発達した灰色砂層（層厚19cm）、砂混じり灰褐色土（層厚1cm）、灰色砂層（層厚3cm）、砂混じり暗灰褐色土（層厚10cm）、灰色砂層（層厚32cm）、砂混じり暗灰褐色土（層厚4cm）、灰色砂層（層厚18cm）からなる。

（4）2号溝脇（壁面）

2号溝脇（壁面）では、下位より灰色砂層（層厚22cm以上）、灰色砂質泥流堆積物（層厚41cm、礫の最大径44mm）、ラミナが発達した灰色砂層（層厚26cm）、亜円礫混じりでラミナが発達した黄灰色砂層（層厚7cm、礫の最大径19mm）、ラミナが発達した灰色砂層（層厚17cm）、灰色砂質シルト層（層厚8cm）、亜円礫を含む灰色砂質泥流堆積物（層厚51cm、礫の最大径288mm）、ラミナが発達した黄灰色砂層（層厚21cm）、黄灰色砂層（層厚13cm）、黄色砂層（層厚19cm）、灰色砂層（層厚15cm）、黒灰色土（層厚23cm）が認められる（図4）。

（5）2号溝SPB西側

2号溝SPB西側では、下位より褐色土（層厚3cm以上）、暗褐色土（層厚11cm）、黒褐色土（層厚17cm）、黄灰色軽石に富む暗褐色土（層厚14cm、軽石の最大径5mm）が認められる（図5）。

（6）東西トレンチ中部

東西トレンチ中部では、下位より黄色軽石やスコリア質黒灰色岩片混じり黄灰色砂層（層厚34cm以上、軽石の最大径26mm、岩片の最大径48mm）、灰色砂質土（層厚9cm）、灰白色粗粒火山灰を多く含む黒褐色土（層厚38cm）、亜円礫混じり灰色砂層（層厚17cm、礫の最大径13mm、下部8cmは黄灰色シルト）が認められる（図6）。これらのうち、灰白色粗粒火山灰を多く含む黒褐色土からは、縄文時代中期の土器が検出されている。

（7）東西トレンチ東部

東西トレンチ東部では、下位より亜円礫混じり黒灰色土（層厚25cm以上、礫の最大径21mm）、灰色砂層

（層厚15cm）が認められる（図７）。灰色砂層の上面では、７世紀以降の奈良・平安時代の住居址が検出されている。

（８）En-8グリッド

En-8グリッドでは、下位より暗灰褐色土（層厚10cm以上）、灰色砂層（層厚22cm）、黒褐色土（層厚14cm）、亜円礫混じり灰褐色土（層厚17cm、礫の最大径38mm）、盛土（層厚58cm）が認められる（図８）。

（９）Eb-18グリッド

Eb-18グリッドでは、21号住居址の覆土を観察することができた（図９）。下位より黄灰色軽石混じり暗褐色土（層厚８cm、軽石の最大径７mm）、黄灰色軽石に富む黒褐色土（層厚21cm、軽石の最大径13mm）、黄灰色軽石混じり暗褐色土（層厚７cm、軽石の最大径６mm）からなる。

（10）20号住居址

20号住居址の覆土は、下位より黄灰色軽石混じり暗褐色土（層厚17cm、軽石の最大径14mm）、黄灰色軽石に富む黒褐色土（層厚９cm、軽石の最大径10mm）、黄灰色軽石混じり暗褐色土（層厚９cm、軽石の最大径６mm）からなる（図10）。

（11）28号住居址

少なくとも黒褐色土（層厚５cm以上）の上位に構築された28号住居址土は、貼床構造をもつ（図11）。貼床は、灰白色軽石を少量含む黒褐色土（層厚５cm、軽石の最大径４mm）からなる。覆土は、灰白色軽石混じり暗褐色土（層厚４cm、軽石の最大径６mm）、成層した灰色シルト層（層厚１cm）、灰白色軽石混じり黒褐色土（層厚２cm、軽石の最大径４mm）、灰白色軽石を多く含む暗褐色土（層厚５cm、軽石の最大径４mm）からなる。

（12）２号溝北壁

２号溝北壁では、２号溝の覆土を観察することができた（図12）。２号溝の覆土は、下位より亜円礫混じり灰褐色砂質土（層厚19cm、礫の最大径188mm）、白色軽石混じりで灰色泥流堆積物のブロックを含む砂混じり灰褐色土（層厚22cm、軽石の最大径７mm）、黄灰色軽石混じり暗灰褐色土（層厚24cm、軽石の最大径12mm）、黄灰色軽石（最大径６mm）や白色軽石（最大径８mm）を含む暗灰褐色土（層厚36cm）、黄灰色軽石混じり暗灰褐色土（層厚90cm、軽石の最大径４mm）、黄灰色軽石を多く含む暗灰褐色土（層厚53cm、軽石の最大径12mm）、黄灰色軽石（最大径11mm）および白色軽石（軽石の最大径17mm）混じり暗灰褐色土（層厚24cm）、白色軽石混じり灰褐色土（層厚12cm、軽石の最大径８mm）、表土（層厚27cm）が認められる。

３．テフラ検出分析

（１）分析試料と分析方法

テフラの特徴とその降灰層準を把握するために、２号溝SPB西側、En-8グリッド、Eb-18グリッド、20号住居址、28号住居址、２号溝北壁において採取された試料のうち、36点を対象にテフラ検出分析を行った。分析の手順は次の通りである。

１）試料10gを秤量。

２）超音波洗浄により泥分を除去。

３）80°Cで恒温乾燥。

４）実体顕微鏡下で観察し、テフラ粒子の量や特徴を把握。

（２）分析結果

2号溝SPB西側では、試料3と試料1で、スポンジ状に比較的良く発泡した灰白色軽石（最大径5mm）が比較的多く含まれている。この軽石の斑晶には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。またこれらの試料には、発泡がさほど良くない白色軽石（最大径2.2mm）が少量含まれている。この軽石の斑晶には、角閃石や斜方輝石が認められる。En-8グリッドの試料9および試料5からは、軽石は検出されなかった。

Eb-18グリッドでは、試料7～1にスポンジ状に比較的良く発泡した灰白色軽石（最大径5.8mm）が含まれている。軽石の斑晶には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。またいずれの試料からも、角閃石を検出することができる。20号住居址の覆土についても、試料7～1のいずれからもスポンジ状に比較的良く発泡した灰白色軽石（最大径6.0mm）が検出された。軽石の斑晶には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。ここでも、いずれの試料からも、角閃石を検出することができる。28号住居址では、試料5より上位の試料から、スポンジ状に比較的良く発泡した灰白色軽石（最大径4.7mm）が含まれている。軽石の斑晶には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。また試料5、試料4、試料2には、発泡がさほど良くない白色軽石（最大径2.8mm）が少量ずつ含まれている。この軽石の斑晶には、角閃石や斜方輝石が認められる。

2号溝北壁では、試料56から試料30にかけて、スポンジ状に比較的良く発泡した灰白色軽石（最大径7.0㎜）が認められる。また試料46や試料10には、発泡がさほど良くない白色軽石（最大径2.1mm）が、少量ずつ含まれている。この軽石の斑晶には、角閃石や斜方輝石が認められる。さらに試料30より上位の試料からは、比較的良く発泡した淡褐色軽石（最大径4.7mm）が認められる。軽石の斑晶には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。この軽石は、試料26から試料14にかけて多く含まれており、その産状から試料26付近にこの軽石で特徴づけられるテフラの降灰層準があると考えられる。

4．屈折率測定

（1）測定試料と測定方法

指標テフラとの同定精度を向上させるために、Ej-10グリッドの試料1と試料1'、En-8グリッドの試料5、2号溝北壁の試料56と試料26の合計5試料について、温度一定型屈折率測定法（新井、1972、1993）により、テフラ粒子の屈折率測定を行った。

（2）測定結果

屈折率測定の結果を表2に示す。Ej-10グリッドの試料1には、重鉱物として斜方輝石、単斜輝石、角閃石が含まれている。斜方輝石と角閃石の屈折率（γ、n_2）は、各々1.708-1.712と1.676±である。より純度が高い試料1'には、重鉱物として、斜方輝石や単斜輝石が含まれている。斜方輝石の屈折率（γ）は、1.706-1.711（modal range: 1.707-1.710）である。

En-8グリッドの試料5には、重鉱物として斜方輝石のほか、単斜輝石や角閃石が含まれている。斜方輝石と角閃石の屈折率（γ、n_2）は、各々1.706-1.710と1.675-1.677である。2号溝北壁の試料56に含まれる火山ガラスの屈折率（n）は、1.514-1.521である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石のほか、ごく少量の角閃石が認められる。斜方輝石と角閃石の屈折率（γ、n_2）は、各々1.707-1.711と1.675-1.677である。試料26に含まれる火山ガラスの屈折率（n）は、1.525-1.532である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石のほか、ごく少量の角閃石が認められる。斜方輝石の屈折率（γ）は、1.708-1.710である。

5．考察

Ej-10グリッドの試料1'のテフラは、その層位や重鉱物の組合せ、斜方輝石の層位などから、約8,200年前に

浅間火山から噴出した浅間藤岡軽石（As-Fo、早田、1991、1996）に同定される可能性が高い。したがって、本遺跡における厚い水成堆積物の堆積開始時期については、約8,000年前の可能性が考えられる。なお本遺跡の周辺、榛名山南東部に広がる扇状地の概形は、As-YP降灰までには形成されている（早田、1990）。しかしながら、その上位には、腐植質堆積物を挟んで水成層が認められることが多い。とくに前橋市総社の利根川右岸の露頭で認められる厚い砂質の堆積物については、総社砂層と呼ばれている（早田、1990）。

これら扇状地上の水成層の堆積時期については、これまでいくつかの遺跡において、放射性炭素（^{14}C）年代測定が試みられている。たとえば、砂層直下の腐植質堆積物の^{14}C年代測定結果は、群馬町菅谷石塚遺跡では9,910±70y.BP（Beta-140925、群馬県埋蔵文化財調査事業団、未公表資料）、群馬町冷水村東遺跡では9,630±60y.BP（Beta-81737、古環境研究所、1998a）、前橋市高井桃ノ木遺跡では4,970±60y.BP（Beta-126770）である。とくに高井桃ノ木遺跡では、堆積物直下の腐植質土壌から、約5,400年前＊1に浅間火山から噴出した浅間六合軽石（As-Kn、早田、1991、1996）に由来すると思われるテフラ粒子が検出されているほか（古環境研究所、1999）、縄文時代前期末葉の遺物も検出されている（山武考古学研究所、1999）。また群馬町下東西清水上遺跡では、As-Cの下位の４層準に水成堆積物が検出されており、下位より２層目、３層目、４層目の堆積物の直下の^{14}C年代は、順に6,420±60y.BP（Beta-92776）、5,190±60y.BP（Beta-92775）、4,830±60y.BP（Beta-92774）である（古環境研究所、1998b）。なお、群馬町保渡田Ⅶ遺跡では、As-Sjの上位の砂礫層の上位に縄文時代早期の陥し穴が検出されている（早田、1990）。

したがって現段階において、榛名火山南東麓に拡がる扇状地の付加物である水成層の堆積時期については地点によってばらつきがあると言わざるを得ない。しかしその一方で、同時期に広い範囲で水成層が堆積した可能性も考えられる。緩傾斜の扇状地に分布する完新世の水成層については、今後榛名火山のみならず広い範囲において、層位や年代、分布さらに成因に関する調査研究を総合的に行う必要がある。本遺跡においても、さらに^{14}C年代測定が行われることが望ましい。

En-8グリッドの灰色砂層（試料５）からは、軽石は検出されなかったものの、重鉱物の組合せや、斜方輝石や角閃石の屈折率などから、４世紀中葉＊2に浅間火山から噴出した浅間Ｃ軽石（As-C、荒牧、1968、新井、1979）や、６世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr-FA、新井、1979、坂口、1986、早田、1989、町田・新井、1992）に由来するテフラ粒子が混在していると考えられる。したがって、この砂層の層位は、Hr-FAより上位にあると考えられる。

２号溝北壁の試料56に含まれるテフラは、軽石の特徴、重鉱物の組合せ、火山ガラス、斜方輝石、角閃石の屈折率などから、As-CやHr-FAに由来すると考えられる。また試料26に含まれるテフラは、軽石の特徴、重鉱物の組合せ、火山ガラスや斜方輝石の屈折率などから、1108（天仁元）年に浅間火山から噴出した浅間Ｂテフラ（As-B、荒牧、1968、新井、1979）に由来すると考えられる。したがって、２号溝の層位については、Hr-FAより上位で、As-Bより下位にあると考えられる。

２号SPB西側では、試料３と試料１が採取された土層の基底は、発掘調査の際に遺構確認面とされている。これらの試料からは、灰白色軽石や白色軽石が検出された。岩相から、前者はAs-C、後者はHr-FAに由来すると考えられる。Eb-18グリッドの21号住居址では、貼床構成層から、As-Cに由来する灰白色軽石のほか、Hr-FAに由来すると思われる角閃石が検出される。したがって、その層位はHr-FAより上位にあると考えられる。20号住居址でも、いずれの覆土試料からもFAに由来すると思われる角閃石が検出された。したがって、この20号住居址についても、その層位はHr-FAより上位にあると考えられる。さらに28号住居址でも、貼床構成層から、As-Cに由来する灰白色軽石と、Hr-FAに由来すると思われる白色軽石が検出された。したがって、

この住居址についても、層位はHr-FAより上位にあると考えられる。

6．小結

前橋市稲荷塚道東遺跡において、地質調査、テフラ検出分析、屈折率測定を行った。その結果、下位より浅間板鼻黄色軽石（As-YP、約1.3～1.4万年前＊1）、浅間総社軽石（As-Sj、約1.1万年前＊1）、浅間藤岡軽石（As-Fo、約8,200年前＊1）、浅間C軽石（As-C、4世紀中葉＊2）、榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr-FA、6世紀初頭）、浅間Bテフラ（As-B、1108年）などを検出することができた。2号溝については、Hr-FAより上位で、As-Bより下位にあると考えられる。また、21号住居址、20号住居址、28号住居址の層位は、Hr-FAより上位にあると推定される。

＊1　放射性炭素（^{14}C）年代.

＊2　現在では4世紀を遡るとする説が有力になっているようである（たとえば、若狭、2000）。しかし、具体的な年代観が示された研究報告例はまだない。現段階においては「3世紀後半」あるいは「3世紀終末」と考えておくのが妥当なのかも知れないが、土器をもとにした考古学的な年代観の変更については、考古学研究者による明確な記載を待ちたい。

文献

新井房夫（1962）関東盆地北西部地域の第四紀編年．群馬大学紀要自然科学編，10，p.1-79.
新井房夫（1972）斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定－テフロクロノロジーの基礎的研究．第四紀研究，11，p.254-269.
新井房夫（1979）関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層．考古学ジャーナル，no.53，p.41-52.
新井房夫（1993）温度一定型屈折率測定法．日本第四紀学会編「第四紀試料分析法－研究対象別分析法」，p.138-148.
荒牧重雄（1968）浅間火山の地質．地団研専報，no.45，65p.
古環境研究所（1998a）冷水村東遺跡の放射性炭素年代測定．（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団編「冷水村東遺跡・西国分新田遺跡・金古北十三町遺跡」，p.346.
古環境研究所（1998b）下東西清水上遺跡における放射性炭素年代測定結果．（財）群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団編「下東西清水上遺跡」，p.306-307.
古環境研究所（1999）放射性炭素（^{14}C）年代測定．山武考古学研究所編「高井桃ノ木遺跡」．p.64.
町田　洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス．東京大学出版会，276p.
坂口　一（1986）榛名二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器．群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」，p.103-119.
山武考古学研究所（1999）高井桃ノ木遺跡．65p.
早田　勉（1989）6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害．第四紀研究，27，p.297-312.
早田　勉（1990）群馬県の自然と風土．群馬県史通史編，1，p.39-129.
早田　勉（1991）浅間火山の生い立ち．佐久考古通信，no.53，p.2-7.
早田　勉（1996）関東地方～東北地方南部の示標テフラの諸特徴－とくに御岳第1テフラより上位のテフラについて－．名古屋大学加速器質量分析計業績報告書，7，p.256-267.
早田　勉・能登　健・新井房夫（1988）草津白根火山起源，熊倉軽石層の噴出年代．東北地理，40，p.272-275.
若狭　徹（2000）群馬の弥生土器が終わるとき．かみつけの里博物館編「人が動く・土器も動く－古墳が成立する頃の土器の交流」，p.41-43.

表１　テフラ検出分析結果

地点	試料	軽石・スコリア			火山ガラス		
		量	色調	最大径	量	形態	色調
2号溝SPB西側	1	++	灰白>白	5.0,2.2	+	pm	灰白>白
	3	++	灰白>白	3.1,1.2	+	pm	灰白>白
	5	-	-	-	-	-	-
	7	-	-	-	-	-	-
En-8グリッド	5	-	-	-	-	-	-
	9	-	-	-	-	-	-
Eb-18グリッド	1	+	灰白	2.7	+	pm	灰白
	3	++	灰白	4.1	++	pm	灰白
	5	++	灰白	5.8	++	pm	灰白
	7	++	灰白	5.6	++	pm	灰白
20号住居址	1	++	灰白	4.9	++	pm	灰白
	3	++	灰白	5.1	++	pm	灰白
	5	++	灰白	6.0	++	pm	灰白
	7	+	灰白	5.9	+	pm	灰白
28号住居址	1	++	灰白	2.3	+	pm	灰白
	2	+	灰白>白	4.7,1.3	+	pm	灰白>白
	3	+	灰白	2.0	+	pm	灰白
	4	++	灰白>白	2.1,2.8	+	pm	灰白>白
	5	+	灰白>白	3.1,1.1	+	pm	灰白>白
	6	-	-	-	+	pm	灰白
2号溝北壁	2	+	淡褐	2.3	+	pm	淡褐
	6	+	淡褐	3.3	+	pm	淡褐
	10	++	淡褐>白	3.7,1.1	+	pm	淡褐>白
	14	+++	淡褐	3.9	++	pm	淡褐
	18	+++	淡褐	3.6	++	pm	淡褐
	22	+++	淡褐	4.0	++	pm	淡褐
	26	+++	淡褐	4.7	++	pm	淡褐
	30	++	淡褐,灰白	4.1,4.3	++	pm	淡褐,灰白
	34	++	灰白	5.9	++	pm	灰白>白
	38	++	灰白	3.0	++	pm	灰白>白
	42	++	灰白	3.8	++	pm	灰白>白
	46	+	灰白>白	7.0,2.1	+	pm	灰白>白
	50	+	灰白	2.9	+	pm	灰白>白
	54	+	灰白	3.0	+	pm	灰白>白
	56	+	灰白	2.0	+	pm	灰白>白

++++：とくに多い，+++：多い，++：中程度，+：少ない，-：認められない．最大径の単位は，mm．bw：バブル型，pm：軽石型．

表2　屈折率測定結果

地点	試料	火山ガラス（n）	重鉱物	斜方輝石（γ）	角閃石（n_2）
Ej-10グリッド	1	-	(opx,cpx,ho)	1.708-1.712	1.676±
Ej-10グリッド	1'	-	opx>cpx	1.706-1.711 (1.707-1.710)	-
En-8グリッド	5	-	opx>cpx,ho	1.706-1.710	1.675-1.677
2号溝北壁	26	1.525-1.532	opx>cpx,(ho)	1.708-1.710	-
2号溝北壁	56	1.514-1.521	opx>cpx,(ho)	1.707-1.711	1.675-1.677

屈折率の測定は，温度一定型屈折率測定法（新井，1972，1993）による．屈折率の（）は，modal rangeを示す．opx：斜方輝石，cpx：単斜輝石，ho：角閃石．（）は量が少ないことを示す．

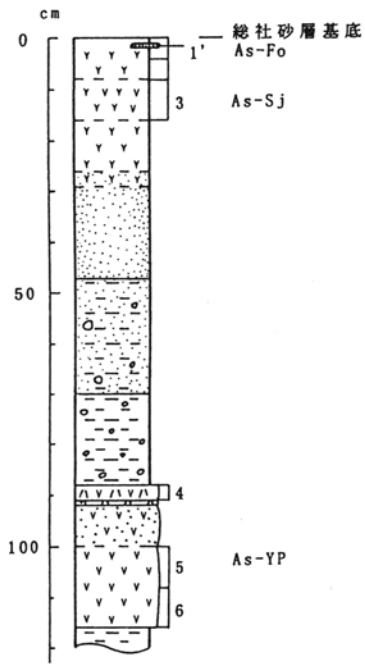


図1　Ｅｊ-10グリッドの土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

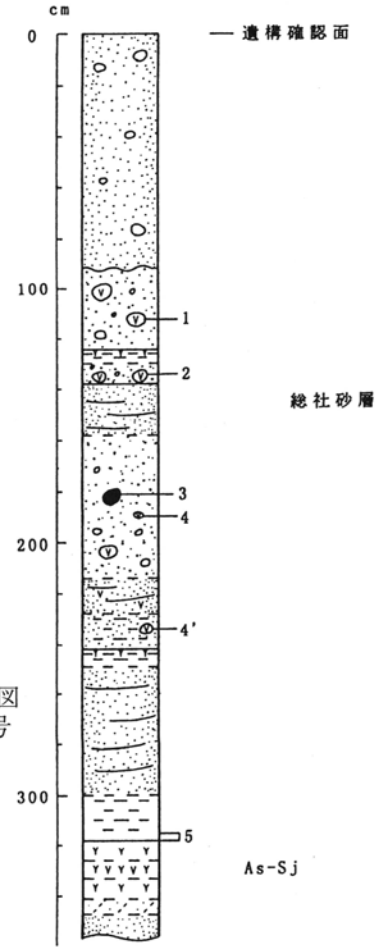


図2　Ｅｊ-7グリッドの土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

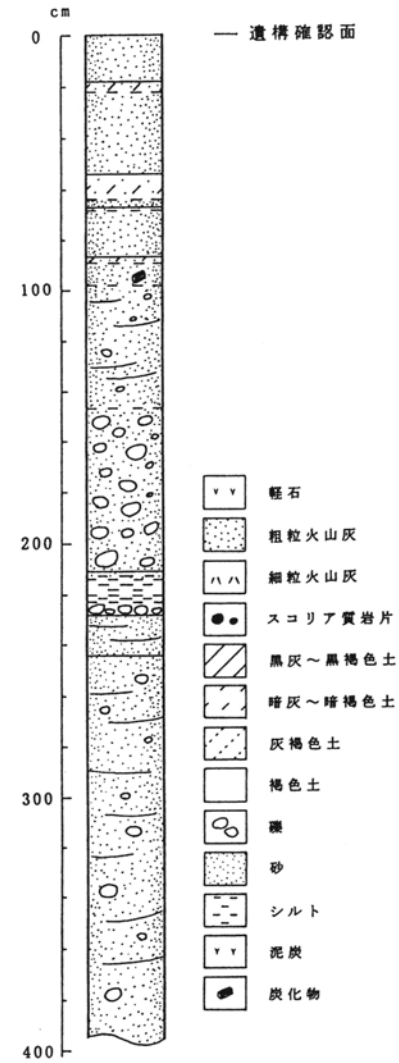


図3　Ｅｊ-9グリッドの土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

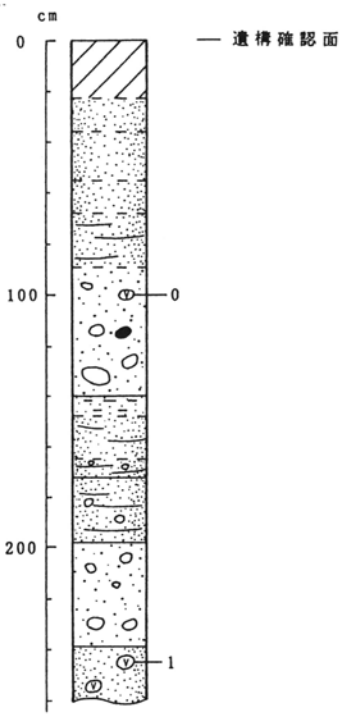


図４　２号溝壁面の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

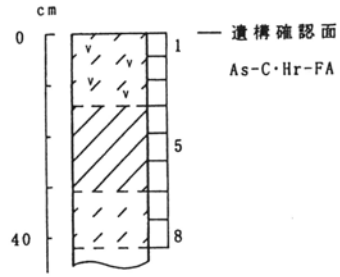


図５　２号溝SPB西側の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

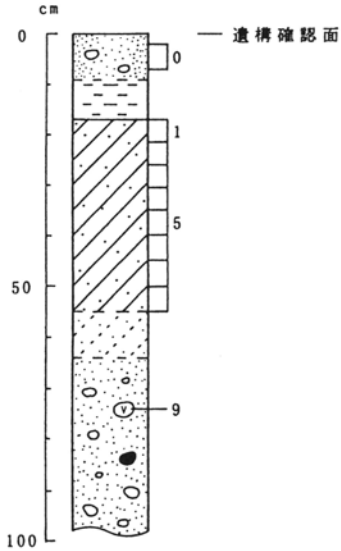


図６　東西トレンチ中部の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

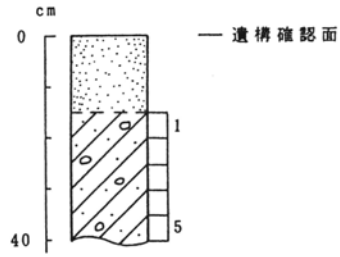


図７　東西トレンチ東部の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

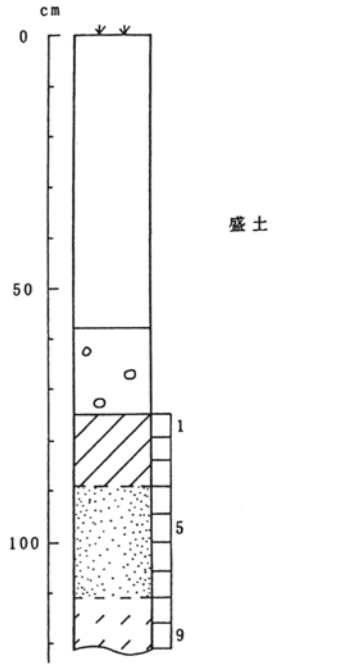


図８　Ｅｎ-8グリッドの土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

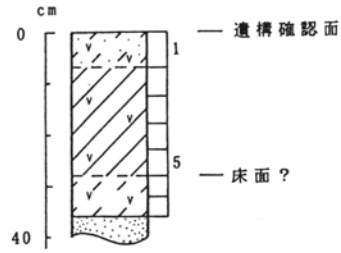


図９　21号住居址の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

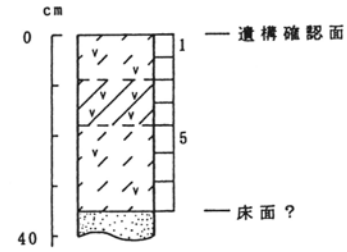


図10　20号住居址の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

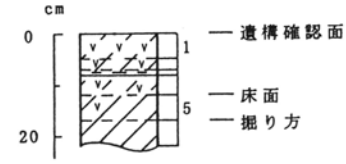


図11　28号住居址の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

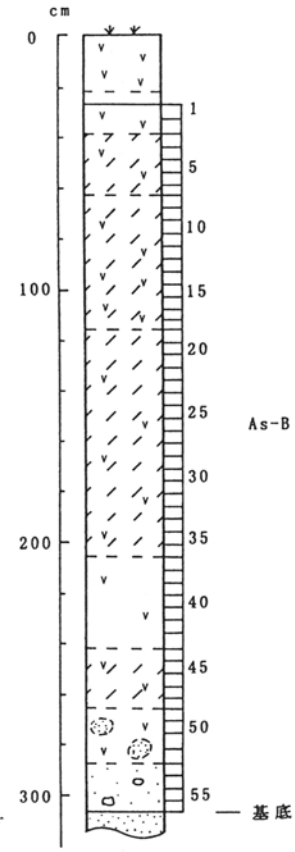


図12　２号溝北壁の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

Ⅱ．稲荷塚道東遺跡における植物珪酸体分析

1．はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸（SiO_2）が蓄積したものであり、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山、2000）。

2．試料

分析試料は、Ｅｊ-10グリッドから採取された２点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

3．分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法（藤原、1976）を用いて、次の手順で行った（杉山、2000）。１）試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）、２）試料約１gに対し直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）、３）電気炉灰化法（550℃・６時間）による脱有機物処理、４）超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散、５）沈底法による20μm以下の微粒子除去、６）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成、７）検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試料１gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料１g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重、単位：10^{-5} g）をかけて、単位面積で層厚１cmあたりの植物体生産量を算出した。ヨシ属（ヨシ）の換算係数は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、クマザサ属（チシマザサ節・チマキザサ節）は0.75、ミヤコザサ節は0.30である。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

4．分析結果

（１）分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表１および図１に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

キビ族型、ヨシ属、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族Ａ（チガヤ属など）、Ｂタイプ

〔イネ科－タケ亜科〕

クマザサ属型（チシマザサ節やチマキザサ節など）、ミヤコザサ節型（おもにクマザサ属ミヤコザサ節）、未分類等

〔イネ科－その他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、茎部起源、未分類等

（２）植物珪酸体の検出状況

As-Sj直下層（試料３）および総社砂層直下（試料１）について分析を行った。その結果、As-Sj直下層（試料３）ではヨシ属が比較的多く検出され、キビ族型、ウシクサ族Ａ、クマザサ属型なども少量検出された。総社砂層直下（試料１）では、ヨシ属が大幅に増加している。おもな分類群の推定生産量によると、各層準ともヨシ属が優勢であり、とくに試料１ではヨシ属が圧倒的に卓越していることが分かる。

５．植物珪酸体分析から推定される植生と環境

浅間総社軽石（As-Sj、約1.1万年前）直下層および総社砂層直下層の堆積当時は、ヨシ属などが生育する湿地の環境であったと考えられ、とくに総社砂層直下層ではヨシ属が繁茂する状況であったと推定される。また、調査区周辺にはキビ族やササ類なども分布していたと考えられる。

文献
杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学．同成社，p.189-213.
藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(１)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，９，p.15-29.

表１　群馬県、稲荷塚道東遺跡における植物珪酸体分析結果

検出密度（単位：×100個/g）

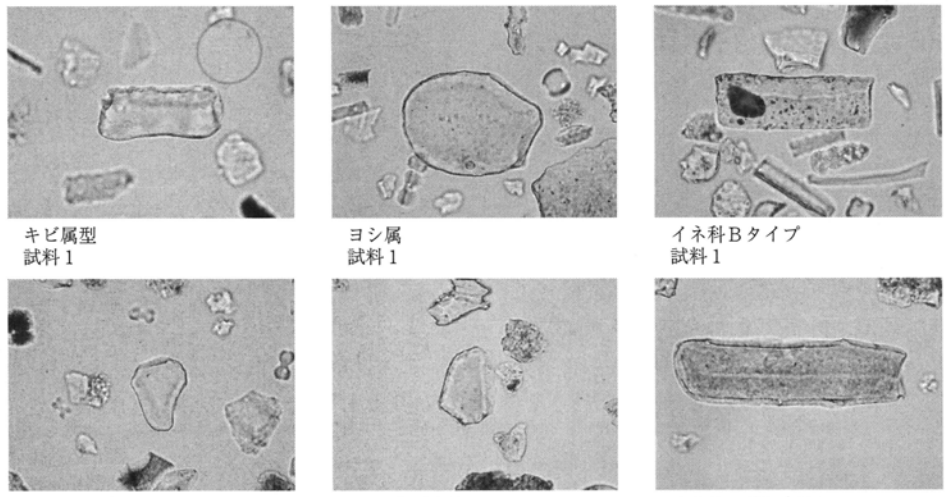
分類群	学名	地点・試料	Ｅｊ-10グリッド 1	3
イネ科	Gramineae (Grasses)			
キビ族型	Paniceae type		7	13
ヨシ属	*Phragmites* (reed)		375	113
ススキ属型	*Miscanthus* type		28	
ウシクサ族Ａ	Andropogoneae A type			7
Ｂタイプ	B type		14	7
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)			
クマザサ属型	*Sasa* (except *Miyakozasa*)			13
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. *Miyakozasa*		7	
未分類等	Others			33
その他のイネ科	Others			
表皮毛起源	Husk hair origin		28	7
棒状珪酸体	Rod-shaped		212	160
茎部起源	Stem origin		50	213
未分類等	Others		496	400
植物珪酸体総数	Total		1218	966

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/㎡・cm）

ヨシ属	*Phragmites* (reed)	23.68	7.14
ススキ属型	*Miscanthus* type	0.35	
クマザサ属型	*Sasa* (except *Miyakozasa*)		0.10
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. *Miyakozasa*	0.02	

タケ亜科の比率（％）

メダケ節型	*Pleioblastus* sect. *Medake*		
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. *Nezasa*		
クマザサ属型	*Sasa* (except *Miyakozasa*)		100
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. *Miyakozasa*	100	



キビ属型
試料１

ヨシ属
試料１

イネ科Ｂタイプ
試料１

ススキ属型
試料１

クマザサ属型
試料３

イネ科の茎部起源
試料３

植物珪酸体（プラント・オパール）の顕微鏡写真　――― 50μm

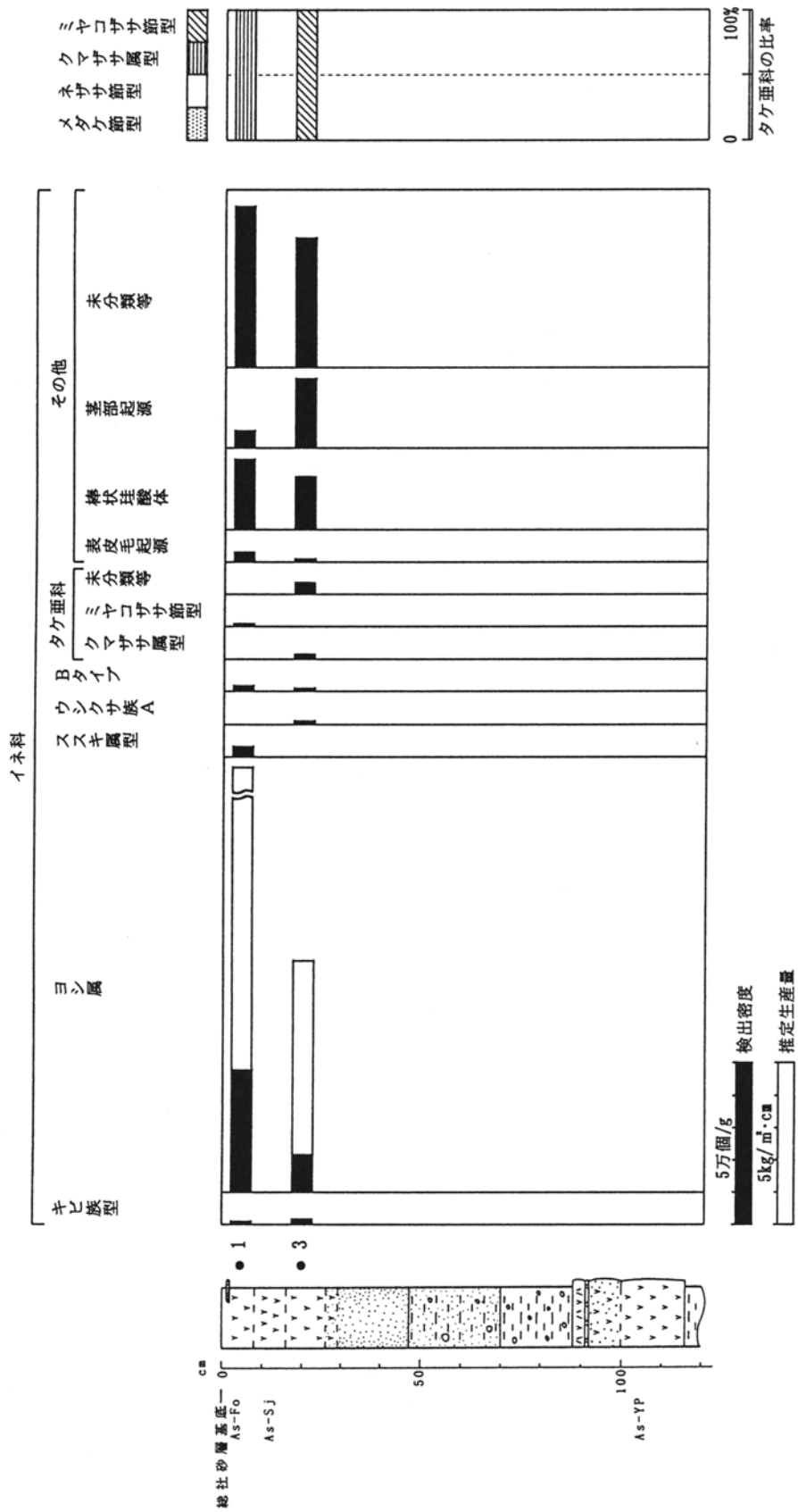


図1　稲荷塚道東遺跡、Ｅｊ-10グリッドにおける植物珪酸体分析結果

Ⅲ．稲荷塚道東遺跡における花粉分析

１．はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象として比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

２．試料

試料は、Ej-10グリッドから採取された２点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

３．方法

花粉粒の分離抽出は、中村（1973）の方法をもとに、以下の手順で行った。

１）５％水酸化カリウム溶液を加えて15分間湯煎

２）水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去

３）25％フッ化水素酸溶液を加えて30分放置

４）水洗処理の後、氷酢酸によって脱水してアセトリシス処理を施す

５）再び氷酢酸を加えて水洗処理

６）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成

７）検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。

４．結果

（１）分類群

出現した分類群は、樹木花粉11、草本花粉９、シダ植物胞子２形態の計22である。分析結果を表１に示し、花粉数が100個以上計数された試料については花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕

ツガ属、マツ属複維管束亜属、スギ、ハンノキ属、カバノキ属、クマシデ属－アサダ、クリ、コナラ属コナラ亜属、ニレ属－ケヤキ

〔草本花粉〕

イネ科、カヤツリグサ科、タデ属サナエタデ節、アカザ科－ヒユ科、アブラナ科、フウロソウ属、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

（２）花粉群集の特徴

As-Si直下層（試料３）では、草本花粉の占める割合が非常に高い。草本花粉では、ヨモギ属が優占しており、イネ科も多い。また、キク亜科、アブラナ科、フウロソウ属、タンポポ亜科も低率に出現する。植物珪酸体分析の結果から、イネ科はおもにヨシ属と考えられる。樹木花粉では、スギ、シイ属、コナラ属コナラ亜属が低率に出現する。

総社砂層直下（試料１）では、樹木花粉よりも草本花粉の占める割合が高く、シダ植物胞子も多い。草本花粉では、カヤツリグサ科、イネ科の出現率が高く、ヨモギ属、タデ属サナエタデ節、アカザ科－ヒユ科も出現する。樹木花粉では、コナラ属コナラ亜属が優占しており、カバノキ属、スギ、マツ属複維管束亜属なども低率に出現する。

５．花粉分析から推定される植生と環境

浅間総社軽石（As-Sj、約1.1万年前）直下層の堆積当時は、ヨシ属などのイネ科植物が生育する湿地的な環境であったと考えられ、周辺にはヨモギ属などが繁茂する乾燥地も分布していたと推定される。森林植生としては、周辺地域にコナラ属コナラ亜属（ナラ類）などが分布していたと考えられる。

総社砂層直下層の堆積当時は、イネ科やカヤツリグサ科などが生育する湿地の環境であったと考えられ、周辺にはヨモギ属やシダ類などが生育する比較的乾燥したところも分布していたと推定される。森林植生としては、周辺地域にコナラ属コナラ亜属（ナラ類）をはじめ、ハンノキ属、カバノキ属、クリなどが分布していたと考えられる。

文献

中村　純（1973）花粉分析．古今書院，p.82-110.
金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法，角川書店，p.248-262.
島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第５集，60p.
中村　純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第13集，91p.

表１　稲荷塚道東遺跡における花粉分析結果

分類群		EJ-10グリッド	
学名	和名	1	3
Arboreal pollen	樹木花粉		
Tsuga	ツガ属	1	
Pinus subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	2	
Cryptomeria japonica	スギ	2	2
Alnus	ハンノキ属	1	
Betula	カバノキ属	2	
Carpinus-Ostrya japonica	クマシデ属-アサダ	1	
Castanea crenata	クリ	1	
Quercus subgen. *Lepidobalanus*	コナラ属コナラ亜属	20	1
Ulmus-Zelkova serrata	ニレ属-ケヤキ	1	
Nonarboreal pollen	草本花粉		
Gramineae	イネ科	24	93
Cyperaceae	カヤツリグサ科	32	3
Polygonum sect. *Persicaria*	タデ属サナエタデ節	3	
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	1	
Cruciferae	アブラナ科		1
Geranium	フウロソウ属		2
Lactucoideae	タンポポ亜科		2
Asteroideae	キク亜科		12
Artemisia	ヨモギ属	10	240
Fern spore	シダ植物胞子		
Monolate type spore	単条溝胞子	374	35
Trilate type spore	三条溝胞子	16	4
Arboreal pollen	樹木花粉	31	3
Nonarboreal pollen	草本花粉	70	353
Total pollen	花粉総数	101	356
Unknown pollen	未同定花粉	2	2
Fern spore	シダ植物胞子	390	39
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)
	明らかな消化残渣	(-)	(-)

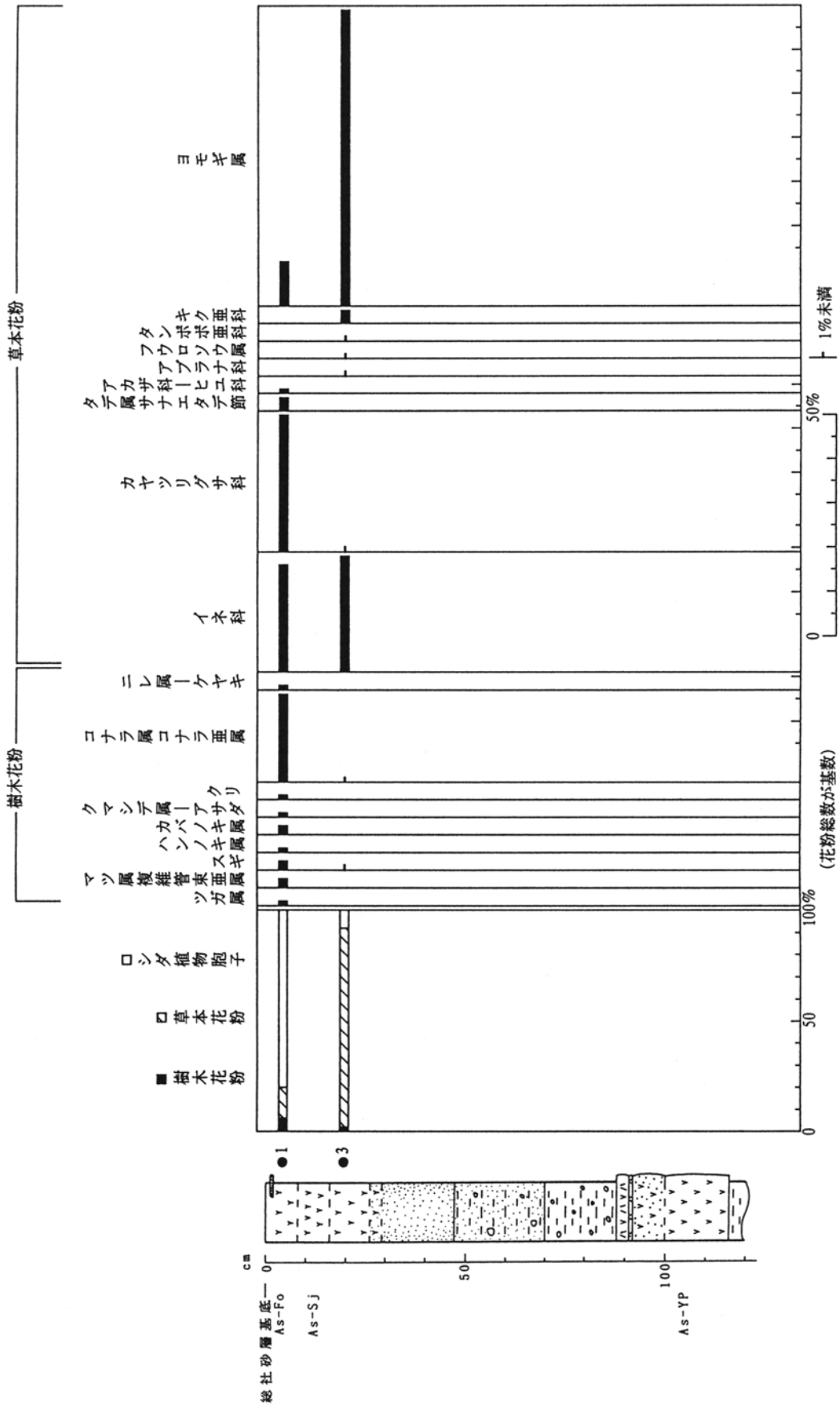
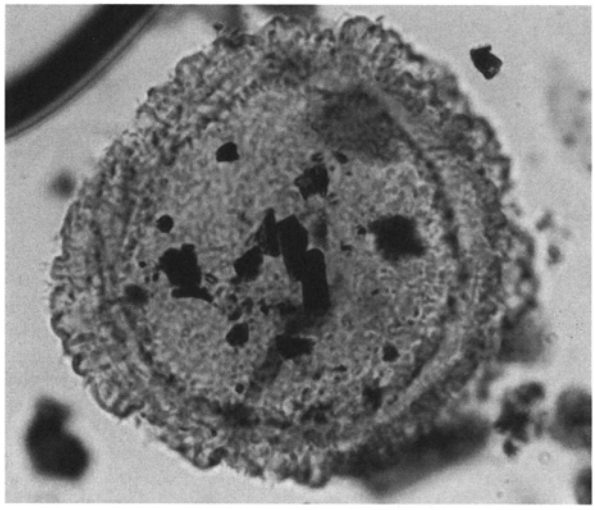
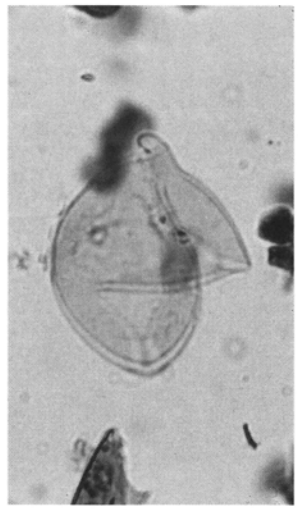


図1　稲荷塚遺跡、Ｅｊ-10グリッドにおける花粉ダイアグラム

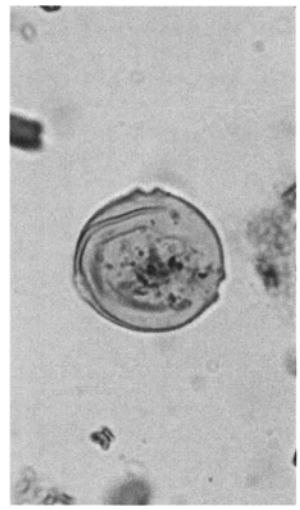
稲荷塚道東遺跡の花粉・胞子



1　ツガ属

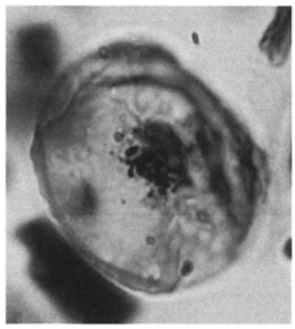


2　スギ

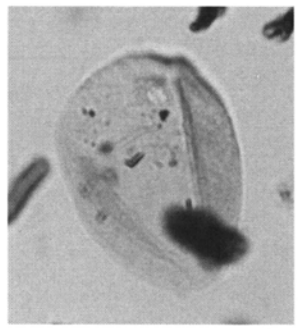


3　クマシデ属―アサダ

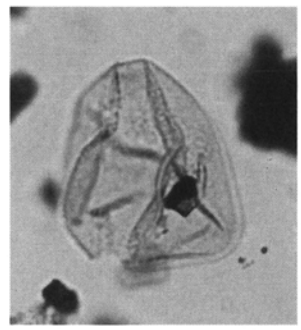
4　コナラ属コナラ亜属



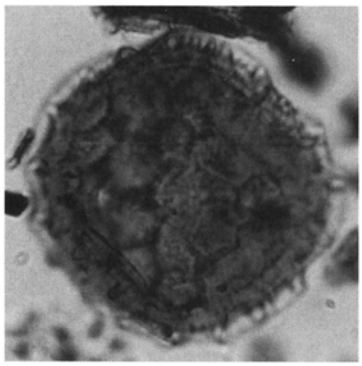
5　ニレ属―ケヤキ



6　イネ科

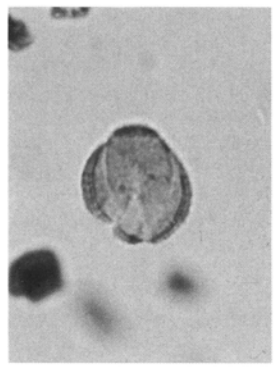


7　カヤツリグサ科

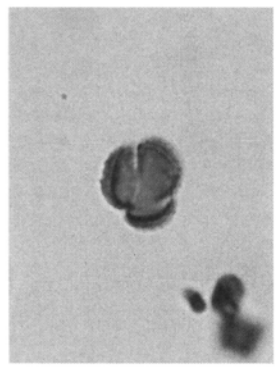


8　タデ属サナエタデ節

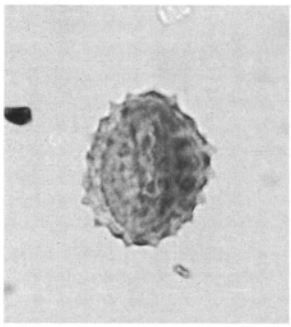
9　アブラナ科



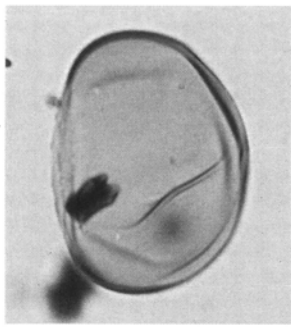
10　ヨモギ属



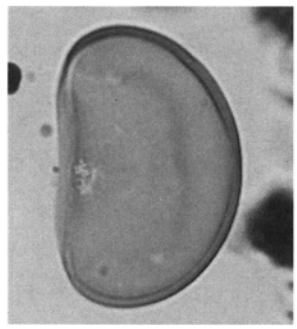
11　ヨモギ属



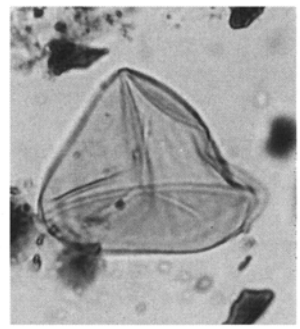
12　キク亜科



13　シダ植物単条溝胞子



14　シダ植物単条溝胞子



15　シダ植物三条溝胞子

―― 10μm

Ⅳ．稲荷塚道東遺跡における蛍光X線分析

1．試料

試料は、稲荷塚道東遺跡の住居跡から出土した4点の土器に付着した赤色顔料である。分析は、21住－3（坩）の赤色部と非赤色部、21住－1（片口鉢）の赤色部、33住－7（坩）の赤色部と非赤色部、60住－14（壷）の赤色部の計6カ所について行った。

2．分析方法

エネルギー分散型蛍光X線分析システム（日本電子㈱製、JSX3201）を用いて、元素の同定およびファンダメンタルパラメータ法（FP法）による定量分析を行った。土器片については、絶乾後、分析装置の固定試料ステージに固定し、測定時間300秒、照射径20mm、電圧30keV、試料室内真空の条件で測定した。X線発生部の管球はロジウム（Rh）ターゲット、ベリリウム（Be）窓、X線検出器はSi（Li）半導体検出器である。

なお、21住－1（片口鉢）は赤色顔料が土器の内側、60住－14（壷）は赤色顔料が土器の湾曲部に付着しており、そのまま測定することは困難であった。そこで、これらの土器については、ごく微量の顔料を粘着テープで採取して測定対象とした。この粘着テープの構成元素は99.8％が炭素であり、水銀や鉛などは含まれていない。

3．分析結果

各元素の定量分析結果（wt％）を、表1に示す。なお、21住－1（片口鉢）と60住－14（壷）については、測定対象が微量であることから、定量分析結果の数値は正確なものではない。

4．考察

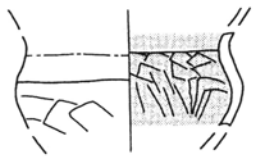
赤色顔料としては、一般的に水銀朱（硫化水銀：HgS）、ベンガラ（酸化第二鉄：Fe203）、鉛丹（酸化鉛：Pb304）が知られている（市毛、1998、本田、1995）。

分析の結果、21住－3（坩）の赤色部、21住－1（片口鉢）の赤色部、33住－7（坩）の赤色部では、Hg（水銀）およびS（イオウ）の明瞭なピークが認められた。HgOの含量は1.5～2.8％、SO3の含量は2.6～7.3％である。比較試料として分析を行った21住－3（坩）と33住－7（坩）の非赤色部では、これらの元素は検出されなかった。なお、各土器の赤色部ではFe（鉄）も検出されたが、非赤色部と比較してFe203の含量にとくに大きな差異は認められなかった。

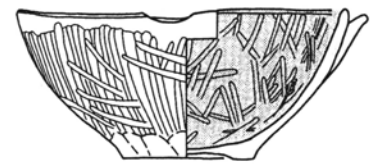
60住－14（壷）の赤色部では、Fe（鉄）の明瞭なピークが認められ、Hg（水銀）やPb（鉛）は検出されなかった。Fe203の含量は31.7％を示しており、その他の試料と比較して明らかに高い値である。

以上の結果から、21住－3（坩）、21住－1（片口鉢）、33住－7（坩）に付着した赤色顔料は水銀朱、60住－14（壷）に付着した赤色顔料はベンガラと推定される。

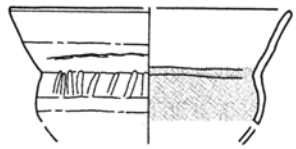
文献
市毛　勲（1998）新版朱の考古学．考古学選書．雄山閣出版
本田光子（1995）古墳時代の赤色顔料．考古学と自然科学．31・32、p.63-79.



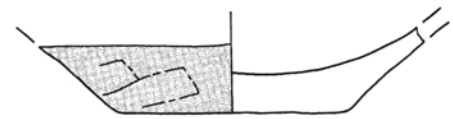
21住－3



21住－1



33住－7



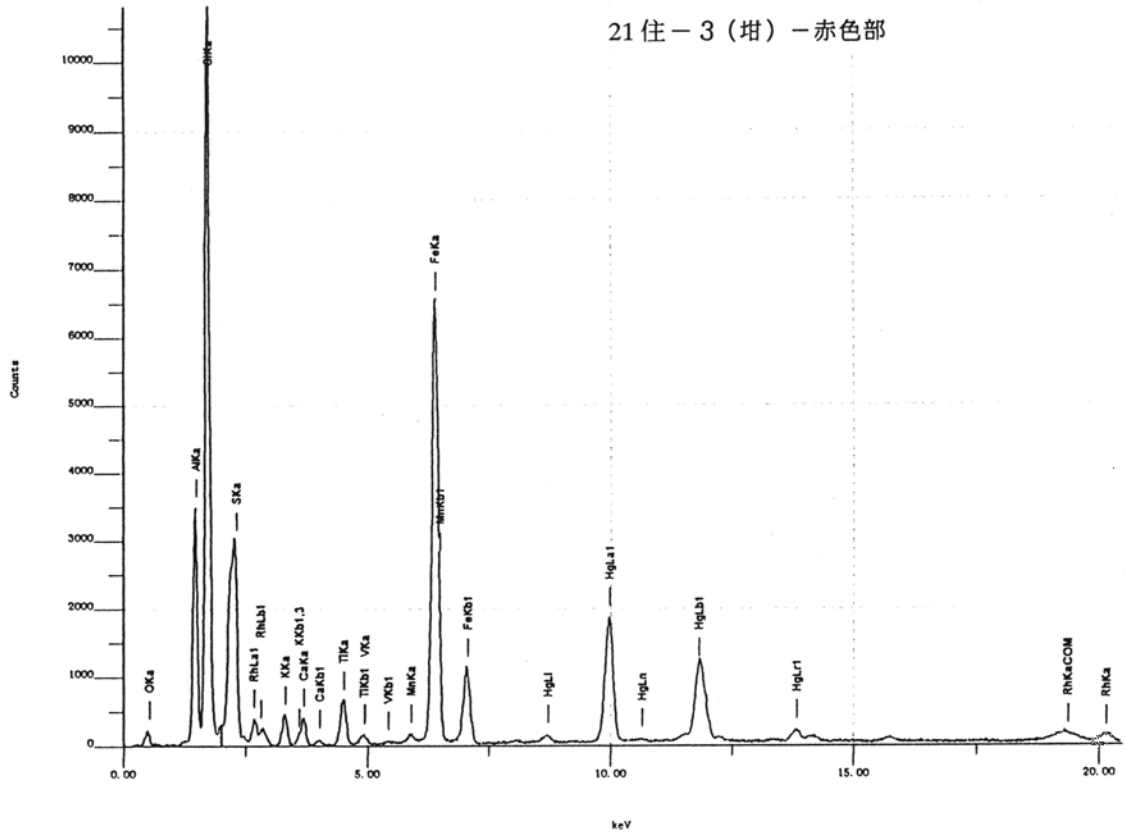
60住－14

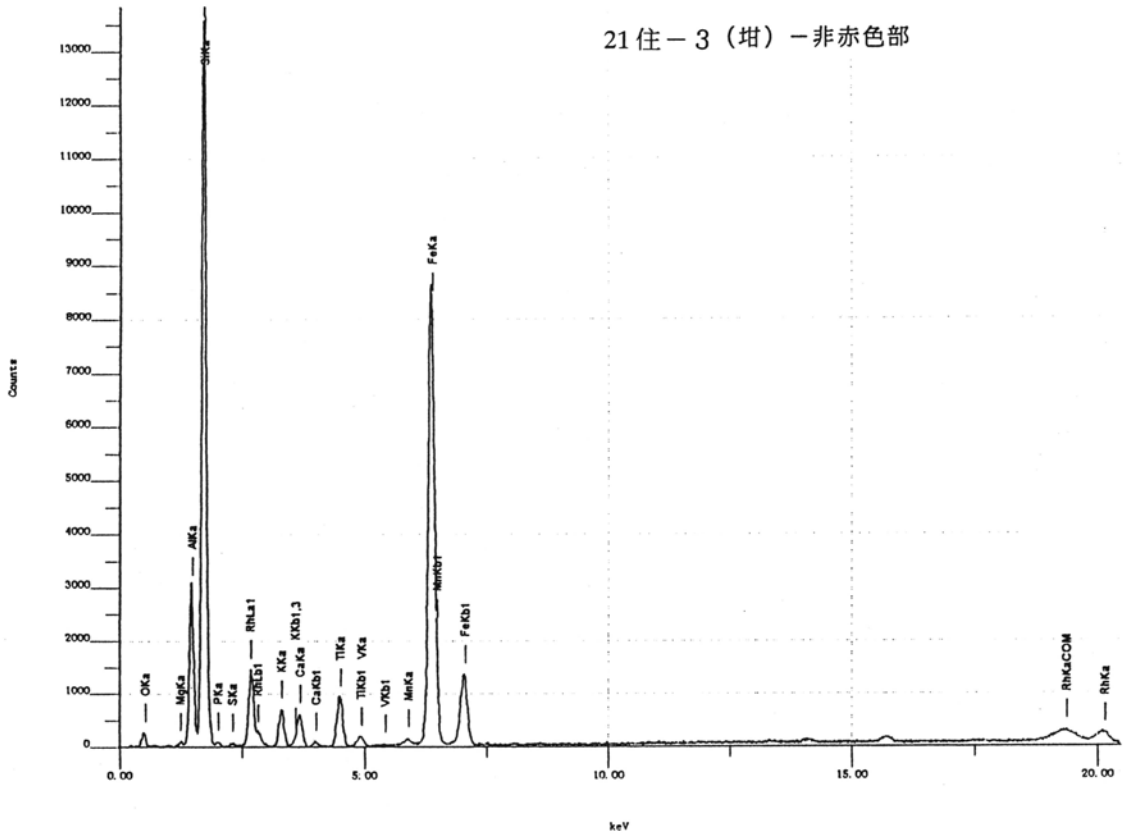
0　5cm

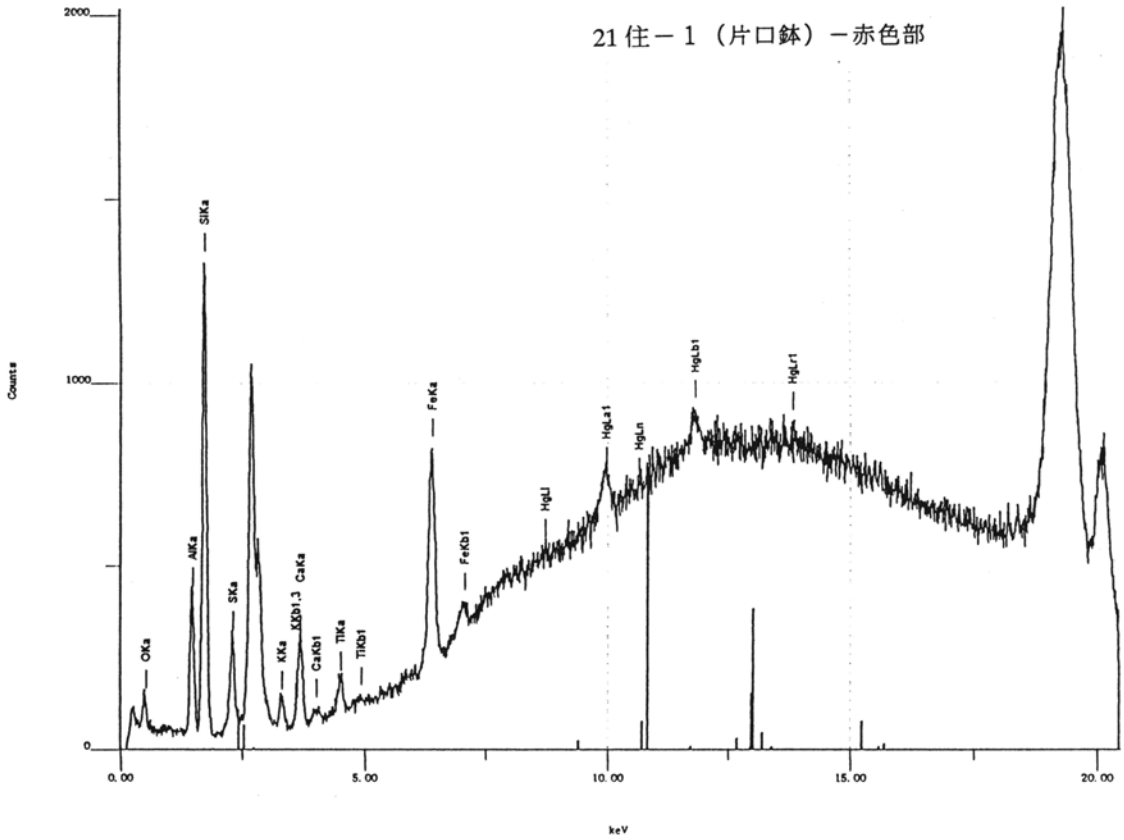
表１　群馬県、稲荷塚道東遺跡から出土した土器の蛍光Ｘ線分析結果

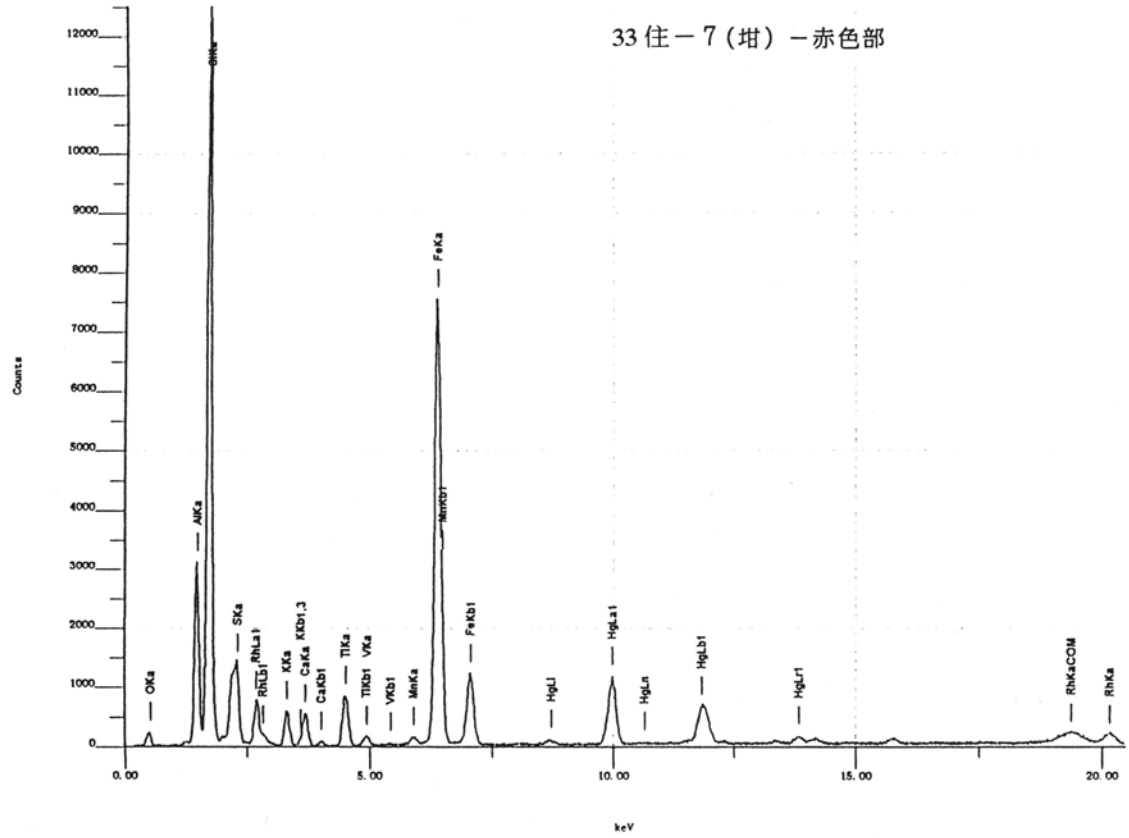
単位：wt(%)

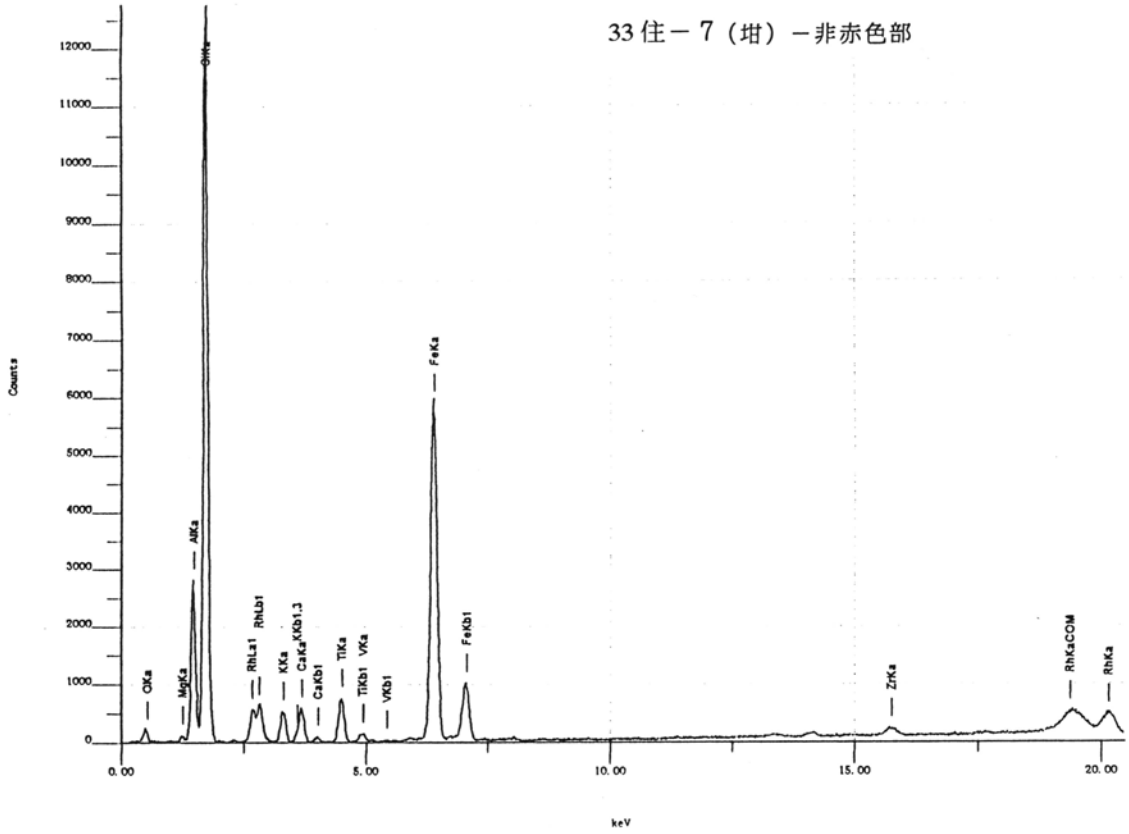
地点・試料		21住－3		21住－1	33住－7		60住－14
		坩		片口鉢	坩		壷
原子No.	化学式	赤色部	非赤色部	赤色部	赤色部	非赤色部	赤色部
12	MgO		0.75			1.42	
13	Al_2O_3	24.00	19.60	22.52	20.73	19.64	10.73
14	SiO_2	57.34	66.93	54.65	63.15	68.86	28.23
15	P_2O_5		0.49				
16	SO_3	5.68	0.00	7.32	2.64		11.79
19	K_2O	1.29	1.75	2.24	1.58	1.59	3.11
20	CaO	1.00	1.32	5.19	1.36	1.42	10.41
22	TiO_2	1.32	1.69	1.79	1.67	1.45	3.56
23	V_2O_5	0.06	0.04		0.06	0.06	
25	MnO	0.24			0.27		
26	Fe_2O_3	6.26	7.42	4.78	6.95	5.50	31.73
30	ZnO						0.45
40	ZrO_2					0.05	
80	HgO	2.82		1.53	1.58		
				※微量			※微量

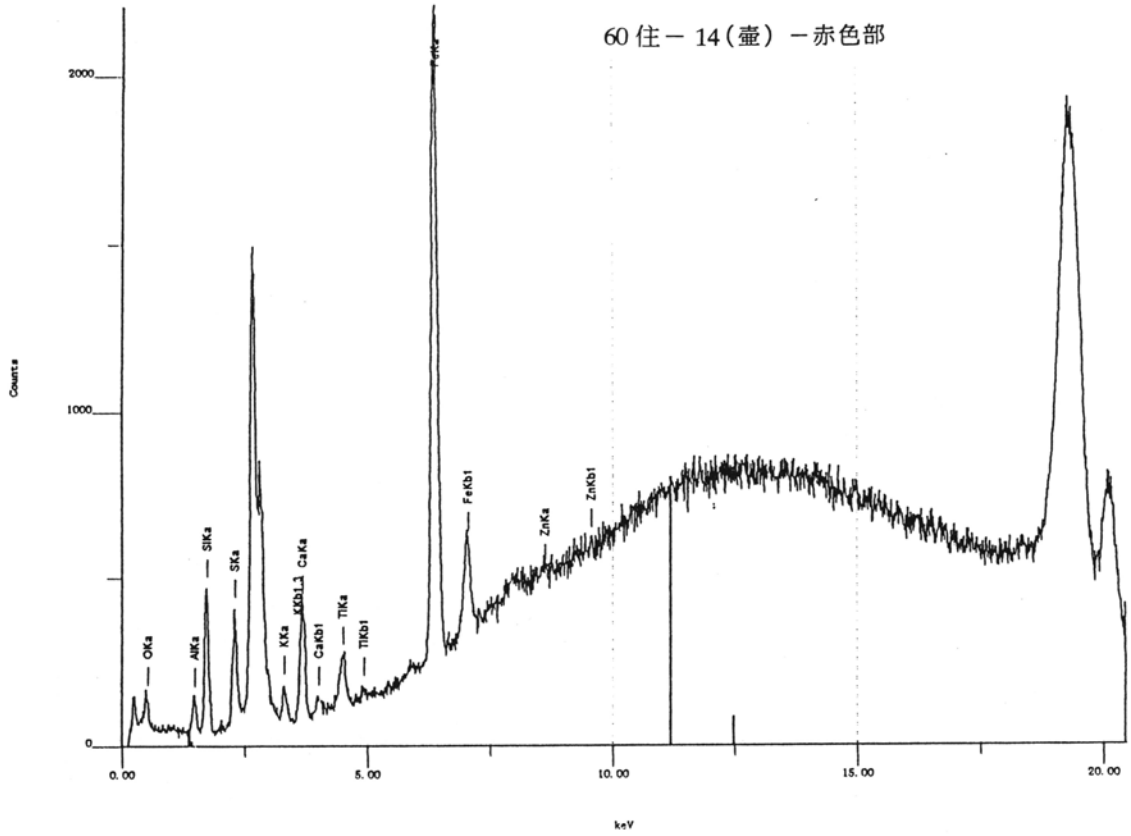

21住－3（坩）－赤色部
Counts
keV
OKa
AlKa
SiKa
SKa
RhLa1
RhLb1
KKa
KKb1,3
CaKa
CaKb1
TiKa
TiKb1
VKa
VKb1
MnKa
FeKa
MnKb1
FeKb1
HgLl
HgLa1
HgLn
HgLb1
HgLr1
RhKaCOM
RhKa


21住－3（坩）－非赤色部
Counts
keV
OKa
MgKa
AlKa
SiKa
PKa
SKa
RhLa1
RhLb1
KKa
KKb1,3
CaKa
CaKb1
TiKa
TiKb1
VKa
VKb1
MnKa
FeKa
MnKb1
FeKb1
RhKaCOM
RhKa


21住－１（片口鉢）－赤色部
Counts
keV
OKa
AlKa
SiKa
SKa
KKa
KKb1,3
CaKa
CaKb1
TiKa
TiKb1
FeKa
FeKb1
HgLl
HgLa1
HgLn
HgLb1
HgLr1


33住－７（坩）－赤色部
Counts
keV
OKa
AlKa
SiKa
SKa
RhLb1
RhLa1
KKa
KKb1,3
CaKa
CaKb1
TiKa
TiKb1
VKa
VKb1
MnKa
FeKa
MnKb1
FeKb1
HgLl
HgLa1
HgLn
HgLb1
HgLr1
RhKaCOM
RhKa


33住－7（坩）－非赤色部
Counts
keV
OKa
MgKa
AlKa
RhLa1
RhLb1
KKa
CaKa
KKb1,3
CaKb1
TiKa
TiKb1
VKa
VKb1
FeKa
FeKb1
ZnKa
RhKaCOM
RhKa


60住－14（壷）－赤色部
Counts
keV
OKa
AlKa
SiKa
SKa
KKa
KKb1,3
CaKa
CaKb1
TiKa
TiKb1
FeKa
FeKb1
ZnKa
ZnKb1

第２節　稲荷塚道東遺跡の土坑より採取した試料について

群馬地質研究会　飯島静男

岩石名：未固結凝灰岩

稲荷塚道東遺跡のかまど材採掘坑より採取した土塊は、固結度が低く、ふつうは岩石とは呼べない。しいて岩石としてみれば未固結凝灰岩である。遺跡内に露出した地層は成層しており、細粒凝灰岩、粗粒凝灰岩、ラピリ質凝灰岩などに相当する粒度の単層が認められた。試料は粗粒凝灰岩層の部分より採取した。

性状：乾燥時は明るい褐灰色を呈し、湿時は暗色となる。粗しょうである。かさ比重は採取後約10ヵ月の室温放置後で、約1.6である。おもに径２～４㎜内外の軽石と、0.5～１㎜内外の結晶および少量の岩片等よりなり、やや粗い黄白色軽石片がわずかに散在する。火砕岩の分類法に従えば、クリスタル（結晶）軽石凝灰岩である。

岩質：両輝石安山岩質である。

通例の火山灰分析法に従って処理した。無色鉱物ではほとんどが斜長石であるが、ごく少量（１パーセント以下）の両錐形石英およびその破片、ならびに融食して丸みをおびた石英などが含まれる。有色鉱物ではしそ輝石が多く、ついで普通輝石、さらに黒色不透明磁性鉱物があり、まれに新鮮な角閃石がみられる。岩片は量的には少ない。おおむね安山岩で、赤褐色、灰色、暗灰色、黒色のものなどがある。鉱物組成からみた、この未固結凝灰岩の岩質は両輝石安山岩質である。外来岩片あるいは異質岩片をほとんど含まず。少量の類質岩片を含むものの、きわめて本質的である。

考状：遺跡の地理的位置は榛名山麓にあたる。しかしながら榛名火山の新規噴出物には有意な量の角閃石が含まれ、古期墳出物にはしばしば粗粒の普通輝石が含まれる。当該試料中にはそのような榛名火山を特徴づけるものが、ほとんど認められない。また現在の利根川の川砂などには、多かれ少なかれ異質岩片が混在しており、当該試料は通常の洪水堆積物とは考え難い。「鳥羽遺跡Ｌ・Ｍ・Ｎ・Ｏ区」報告書の中で、類似の半固結凝灰岩について、新井房夫教授の所見が掲載されており、おそらく浅間火山起源と推定された。記載的性質は必ずしも一致しないが、同様の起源の推定が可能である。

第3節　稲荷塚道東遺跡出土馬歯・馬骨

楢崎修一郎

はじめに

稲荷塚道東遺跡は、群馬県前橋市総社町に位置し、（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団による発掘調査が平成14（2002）年1月7日～同年6月30日まで行われた。この遺跡の、2号溝・3号溝・39号住居・7号土坑・11号土坑・1号井戸の6ヶ所より、馬（ウマ）[*Equus caballus*] の歯及び骨が出土したので以下に報告する。なお、馬歯の計測方法は、von den Driesch（1976）に従った。ちなみに、馬（ウマ）は、恐らく、5世紀の古墳時代に日本に渡来したと考えられている。

1．2号溝出土獣骨（写真1・写真2・表1参照）

時代は、古墳時代～平安時代に比定されている。10に分けて取り上げられているが、残念ながら出土位置が不明である。ここでは、最も保存状態が良かったものについて記載する。

①出土部位

上下顎の馬歯が出土している。

②個体数

重複部位が無いため、個体数は1個体と推定される。

③性別

馬の場合、性別は上下顎にある犬歯の有無あるいは、寛骨により推定できる。従って、性別の推定は難しい。

④死亡年齢

歯高計測値より、死亡年齢は約6歳と推定される。

⑤外傷や病理

出土馬歯には、歯石の付着は認められなかった。しかしながら、同じく2号溝から出土した馬歯の内、下顎歯3本の舌側面に幅約3mmの溝が近遠心方向に認められた。これは、恐らくエナメル質減形成と呼ばれるもので、人間の場合歯の形成時期である乳幼児期に栄養不良や病気（麻疹・水痘・風疹・猩紅熱・ジフテリア・肺炎・結核等）が原因でエナメル質の石灰化不全がおこり、それが線状・小窩状・溝状に痕跡を残す状態である。したがって、この個体は成長時期に何らかの栄養不良や病気にかかっていた可能性が高い。

2．3号溝出土獣骨

時代は、出土遺物より、中世～近世に比定されている。

①出土部位

破損している馬の下顎左第3大臼歯が1本出土している。

②個体数

1本しか出土していないので、個体数は1個体である。

③性別

馬の場合、性別は上下顎にある犬歯の有無あるいは、寛骨により推定できる。従って、性別の推定は難し

い。

④死亡年齢

破損しているため、死亡年齢の推定は不可能である。

⑤外傷や病理

頬側面及び舌側面に、わずかな歯石の付着が認められた。

３．39号住居出土獣骨

時代は、９世紀に比定されている。馬の下顎臼歯片が出土しているが、破片であり、歯種の同定は不可能である。従って、個体数・性別・死亡年齢等の推定も不可能である。

４．７号土坑出土獣骨

７号土坑は、15号住居内に掘り込まれて検出されており、時代は、平安時代～中世前半に比定されている。馬の下顎歯の破片が出土している。破片であるため、歯種の同定は不可能である。従って、個体数・性別・死亡年齢等の推定も不可能である。

５．11号土坑出土獣骨

時代は、平安時代～中世前半に比定されている。馬の上顎臼歯が出土しているが、破損しており、歯種の同定は不可能である。従って、個体数・性別・死亡年齢等の推定も不可能である。

６．１号井戸出土獣骨

時代は、出土遺物より、９世紀後半～10世紀前半に比定されている。

①出土部位

破損している馬の上顎左第３大臼歯１本及び馬骨破片多数が出土している。

②個体数

恐らく、個体数は１個体と推定される。

③性別

馬の場合、性別は上下顎にある犬歯の有無あるいは、寛骨により推定できる。従って、性別の推定は難しい。

④死亡年齢

全歯高が約45mmであるので、死亡年齢は約８歳と推定される。

⑤外傷や病理

歯石の付着は認められなかった。

まとめ

稲荷塚道東遺跡の内、２号溝・３号溝・39号住居・７号土坑・11号土坑・１号井戸の６ヶ所から馬歯・馬骨が出土した。２号溝（古墳時代～平安時代）からは約６歳の馬の上下顎歯が、３号溝（中世～近世）からは馬の下顎左第３大臼歯が、39号住居（９世紀）からは馬の下顎臼歯片が、７号土坑（平安時代～中世前半）からは馬の下顎歯片が、11号土坑（平安時代～中世前半）からは馬の上顎臼歯片が、１号井戸からは馬の上

顎左第3大臼歯及び馬骨片が出土した。溝や井戸から馬歯や馬骨が出土した場合、祈雨祭祀に伴い水神に捧げるためや井戸を埋める際の祭祀のために殉殺した可能性が疑われる。

表1　稲荷塚道東遺跡2号溝出土馬歯計測表

	歯　種	左　右	歯冠長	歯冠幅	頬側歯冠高
上顎	P2(第2小臼歯)	右	−	−	−
		左	−	−	−
	P3(第3小臼歯)	右	−	−	−
		左	28 mm	26 mm	52 mm
	P4(第4小臼歯)	右	−	−	−
		左	27 mm	26 mm	破損
	M1(第1大臼歯)	右	−	−	−
		左	23 mm	26 mm	46 mm
	M2(第2大臼歯)	右	−	−	−
		左	24 mm	24 mm	55 mm
	M3(第3大臼歯)	右	−	−	−
		左	25 mm	21 mm	52 mm
下顎	P2(第2小臼歯)	右	31 mm	14 mm	35 mm
		左	−	−	−
	P3(第3小臼歯)	右	27 mm	16 mm	49 mm
		左	−	−	−
	P4(第4小臼歯)	右	26 mm	15 mm	60 mm
		左	破損	15.5 mm	破損
	M1(第1大臼歯)	右	24.5 mm	13.5 mm	56 mm
		左	24.5 mm	13.5 mm	56 mm
	M2(第2大臼歯)	右	25 mm	13 mm	63 mm
		左	25 mm	13 mm	61 mm
	M3(第3大臼歯)	右	29 mm	12 mm	59 mm
		左	30 mm	12 mm	60 mm

註：「破損」とあるのは、破損で計測できなかったことを示す。

写真１　２号溝出土馬歯右側頬側面観

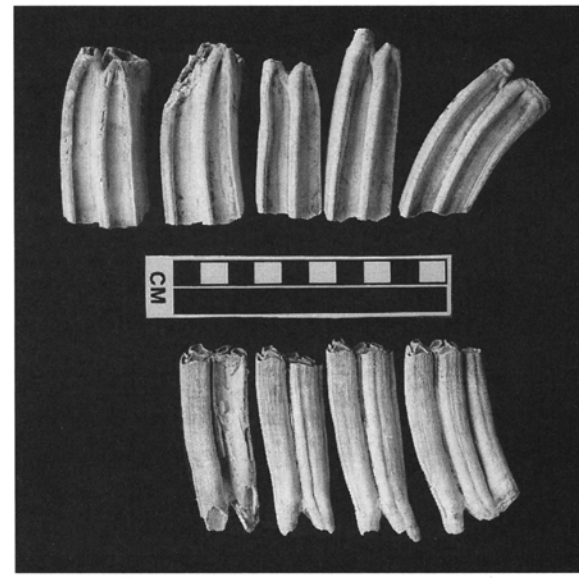


写真２　２号溝出土馬歯左側頬側面観

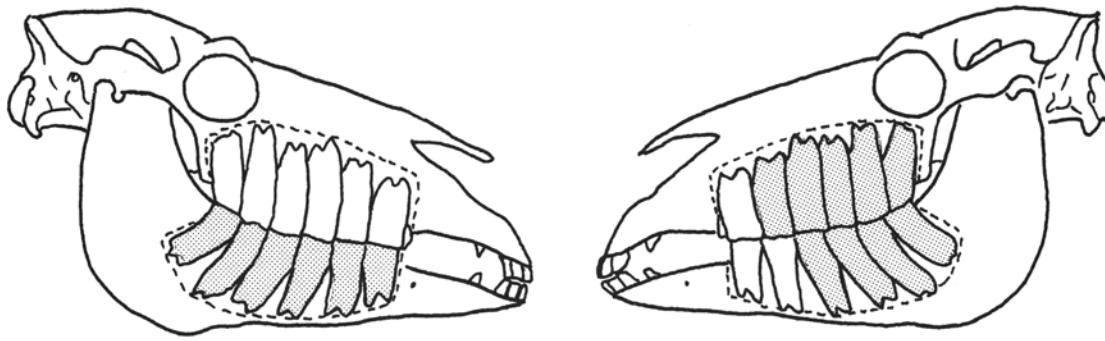


図１　２号溝出土馬歯出土部位

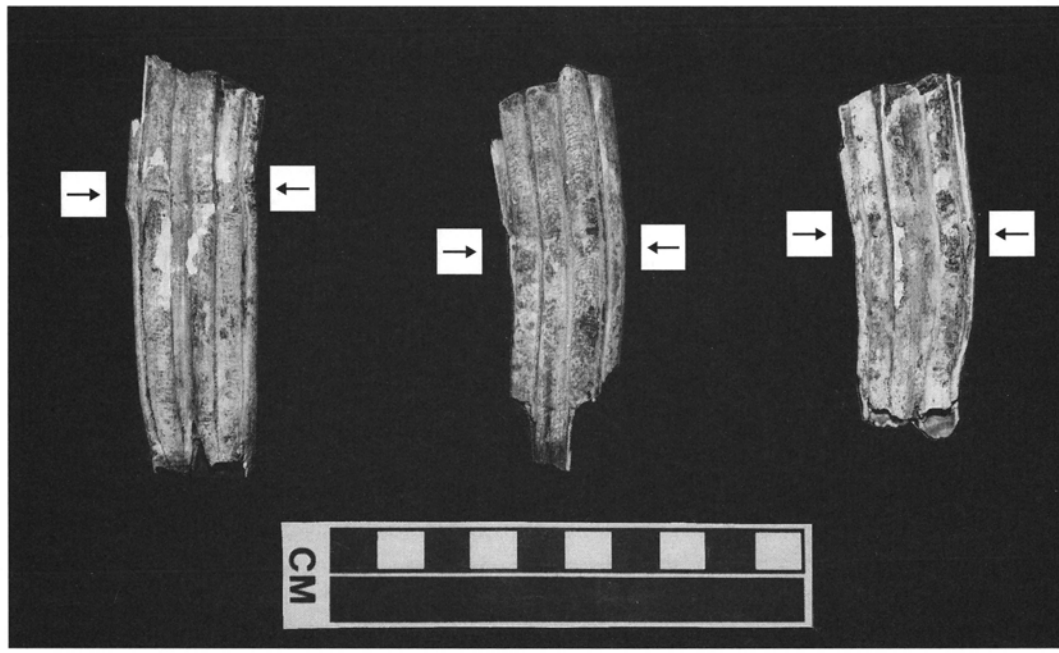


写真３　２号溝出土馬歯［下顎］エナメル質減形成

遺　物　観　察　表

1号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
10－1 PL30	土師器 鉢	床直・掘り方 口～体部1/2	口－(12.8) 底－ 高－(10.9)	①細砂、白色軽石 ②酸化焔 ③にぶい赤褐5YR5/4	体部は丸みを持ち、口縁部は短く外反する。 外面　体部は刷毛目。 内面　口縁から体部はへらナデ。
10－2 PL30	土師器 器台	床直 器受部片	径－12.9 厚－0.6	①細砂、輝石 ②酸化焔 ③にぶい橙7.5YR7/4	外面の周囲に刺突痕と円形の粘土瘤貼付。 上面はへら磨き後、赤色塗彩。
10－3 PL30	土師器 小型壺	覆土 口縁部片	口－(11.2) 底－ 高－(3.8)	①細砂 ②酸化焔 ③にぶい褐7.5YR5/3	口縁部は外反し、指頭圧痕が見られる。 外面　口縁部横ナデ。 内面　口縁部横ナデ。頸部へらナデ。
10－4 PL30	土師器 小型甕	床直 口縁部片	口－(11.8) 底－ 高－(3.3)	①細砂 ②酸化焔 ③橙7.5YR6/8	口縁部は外反する。 口縁部内外面横ナデ。
10－5 PL30	土師器 台付甕	床直 口縁部片	口－(9.8) 底－ 高－(2.5)	①細砂、石英 ②酸化焔 ③橙5YR7/8	頸部から直立気味に立ち上がるＳ字状口縁。 外面　口縁部横ナデ、以下斜め刷毛目。 内面　口縁部横ナデ。

2号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
11－1 PL30	土師器 小型壺	床直～＋6 口～胴部2/3	口－(9.2) 底－ 高－(4.5)	①細砂 ②酸化焔 ③にぶい黄橙10YR7/4	胴部は丸くふくらみ、口縁部はやや外反する。 外面　口縁部刷毛目後横ナデ、以下刷毛目。 内面　口縁部横ナデ、以下へらナデ。
11－2 PL30	土師器 高坏	床直 坏～脚部4/5	口－(20.8) 底－ 高－(9.5)	①細砂、輝石 ②酸化焔　硬質 ③橙7.5YR6/6	坏底部に稜を持ち、口縁部は大きく外反する。 外面　口縁端部は横ナデ、以下刷毛目後へら磨き。 内面　口縁端部は横ナデ、以下へら磨き。
11－3 PL30	土師器 台付甕	＋6 口～頸部片	口－(19.0) 底－ 高－(7.6)	①細砂 ②酸化焔 ③灰黄2.5YR6/2	外反するＳ字状の口縁部。 外面　口縁部は横ナデ。胴部は縦方向刷毛目。 内面　口縁部は横ナデ。頸部に指頭圧痕あり。

3号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
13－1 PL30	須恵器 坏	貯蔵穴 口～底部1/2	口－(12.6) 底－(6.6) 高－2.8	①細砂 ②還元焔 ③灰5Y5/1	口縁部は直線的に開きながら、外傾する。 外面　轆轤痕強く残る。右回転轆轤成形。 底部は右回転糸切り。
13－2 PL30	土師器 甕	貯蔵穴 口～胴部片	口－(17.8) 底－ 高－(7.7)	①細砂、輝石 ②酸化焔　硬質 ③橙5YR6/8	口縁部は［コ］の字状を呈す。 外面　口縁から頸部は横ナデ。胴部はへら削り。 内面　口縁から頸部は横ナデ。頸部に指頭圧痕残る。

4号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
14－1 PL30	須恵器 蓋	貯蔵穴覆土 破片	口－(18.0) 鈕－ 高－(2.5)	①細砂、黒色鉱物 ②還元焔　硬質 ③灰5Y6/1	天井部は直線的に開く。口唇部は折り曲げて直立する。

5号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
15－1 PL30	須恵器 坏	覆土 口～底部片	口－(12.8) 底－(7.4) 高－(3.5)	①細砂、白色軽石 ②還元焔 ③黄灰2.5Y5/1	腰部がやや張り、直線的に立ち上がる。 底部は回転糸切り。
15－2 PL30	土師器 台付甕	覆土 台部片	口－ 底－(9.0) 高－(3.0)	①細砂、輝石 ②酸化焔　硬質 ③褐7.5YR4/3	台部は２段階で外反する器受部。 外面　弱いへら削り。裾部は横ナデ。 内面　裾部は横ナデ。

6号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
16－1 PL30	土師器 坏	貯蔵穴覆土 口～底部1/5	口－(10.8) 底－(4.2) 高－2.3	①細砂 ②酸化焔 ③にぶい橙7.5YR6/4	底部から体部に丸みを持ち、口縁部は短く内湾する。 口縁部内外面横ナデ。 外面　体から底部へら削り。
16－2 PL30	土師器 坏	貯蔵穴 口～体部1/4	口－(10.4) 底－ 高－(2.6)	①細砂、輝石 ②酸化焔　硬質 ③橙5YR6/8	体部は丸みを持ち、口縁部はやや内湾する。 外面　口縁部横ナデ、以下横方向のへら削り。 内面　口縁部横ナデ。

8号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
18－1 PL30	土師器 坏	覆土 口縁部片	口－(12.8) 底－ 高－(3.6)	①細砂 ②酸化焔 ③橙5YR6/8	体部下位に稜を持ち、口縁部は外反する。 内外面とも荒れがひどく調整不明。

9号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
19－1 PL30	土師器 坏	竈 口縁部片	口－13.0 底－ 高－(3.2)	①細砂、輝石 ②酸化焔　硬質 ③明赤褐5YR5/8	内湾する口縁部。 外面　口縁部横ナデ、以下へら削り。 内面　へらナデ。
19－2 PL30	須恵器 甕	竈 口縁部片	口－ 底－ 高－	①細砂、白色軽石 ②還元焔　硬質 ③灰10Y5/1	口縁部は外反し、中位に1条の凸帯を持つ。口唇部は折り返し。外面には波状文。内面に自然釉が見られる。

12号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
23－1 PL30	土師器 坏	貯蔵穴 口～底部片	口－(16.0) 底－ 高－(5.0)	①細砂、輝石 ②酸化焔 ③橙5YR6/6	体部は丸みを帯び、口縁部は直立する。 外面　口縁部横ナデ、以下へら削り。 内面　口縁部横ナデ。
23－2 PL30	須恵器 坏	貯蔵穴 口～底部片	口－(12.0) 底－(6.8) 高－(3.8)	①細砂、黒色鉱物 ②還元焔　やや軟質 ③灰5Y6/1	体部はやや丸みを帯び、直線的に立ち上がる。 右回転轆轤成形。底部は回転糸切り。
23－3 PL30	須恵器 坏	貯蔵穴 口～底部片	口－(12.0) 底－(7.2) 高－(3.5)	①細砂、白色軽石 ②還元焔 ③黄灰2.5Y5/1	体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。 右回転轆轤成形。
23－4 PL30	土師器 甕	竈・貯蔵穴 口～胴部片	口－(22.6) 底－ 高－(11.3)	①細砂、輝石 ②酸化焔 ③橙5YR6/8	口縁部は外反し、胴部は丸みを持つ。口縁部は横ナデ。 胴上半部は横方向・中央部は縦方向のへら削り。

13号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
24－1 PL30	土師器 坏	床直 ほぼ完形	口－10.6 底－丸底 高－3.5	①細砂、小礫 ②酸化焔 ③橙5YR6/6	底部から体部に丸みを持ち、口縁部は直立する。 外面　口縁部横ナデ、以下横方向のへら削り。 内面　口縁部横ナデ。
24－2 PL30	土師器 坏	＋5 1/2	口－10.0 底－丸底 高－3.2	①細砂 ②酸化焔 ③橙7.5YR6/6	底部から体部に丸みを持ち、口縁部は短く内湾する。 外面　口縁部横ナデ、以下横方向のへら削り。 内面　口縁部横ナデ。
24－3 PL30	土師器 坏	覆土 口～底部1/5	口－(12.0) 底－ 高－(3.1)	①細砂 ②酸化焔 ③橙5YR6/6	体部は丸みを持ち、口縁部は短く内湾する。 外面　口縁部横ナデ、以下へら削り。 内面　口縁部横ナデ。
24－4 PL30	土師器 甕	床直～＋8 口縁部1/2	口－(20.2) 底－ 高－(10.2)	①粗砂、輝石 ②酸化焔 ③にぶい黄褐10YR5/4	口縁部は外反し、胴部はあまりふくらまず直線的にのびる。 外面　口縁部横ナデ、以下へら削り。 内面　口縁部横ナデ、以下へらナデ。

13号住居こも編み石計測表

挿図番号 図版番号	出土位置 残存状態	計測値（cm・g） 長さ	幅	厚さ	重量	石　材	挿図番号 図版番号	出土位置 残存状態	計測値（cm・g） 長さ	幅	厚さ	重量	石　材
25－5 PL30	＋9 完形	15.2	6.7	5.2	990	変質安山岩	25－6 PL30	＋6 完形	13.7	7.5	4.9	809	粗粒輝石安山岩
25－7 PL30	床直 完形	16.2	6.9	4.6	884	粗粒輝石安山岩	25－8 PL30	＋9 完形	15.4	5.0	4.8	627	溶結凝灰岩
25－9 PL30	＋10 完形	14.4	5.4	4.3	505	砂岩	25－10 PL30	＋4 完形	13.4	6.9	4.5	608	粗粒輝石安山岩
25－11 PL30	＋7 完形	13.2	5.8	3.6	499	ひん岩							

14号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
29－1 PL30	土師器 坏	＋12 口～底部3/4	口－12.5 底－丸底 高－3.9	①細砂、輝石 ②酸化焔 ③橙5YR6/6	底部から体部に丸みを持ち、口縁部は短く内湾する。 外面　口縁部横ナデ、以下横方向のへら削り。 内面　丁寧な横ナデ。
29－2 PL30	土師器 坏	掘り方 口～底部2/3	口－13.0 底－丸底 高－3.6	①細砂、輝石 ②酸化焔　硬質 ③橙5YR6/6	口縁部は直立し、底部は丸底を呈す。 外面　口縁部横ナデ、以下横方向のへら削り。 内面　口縁から体部まで横ナデ。
29－3 PL30	土師器 坏	＋6・ピット3 口～底部2/3	口－12.3 底－丸底 高－3.4	①細砂、輝石 ②酸化焔 ③橙5YR6/6	底部から体部に丸みを持ち、口縁部は短く内湾する。 外面　口縁部横ナデ、以下横方向のへら削り。 内面　口縁部横ナデ。
29－4 PL30	土師器 坏	床直 口～底部2/5	口－(17.2) 底－丸底 高－(4.5)	①細砂、輝石 ②酸化焔　硬質 ③橙5YR6/6	体部は丸みを持つ。 外面　口縁部横ナデ、以下不定方向のへら削り。 内面　口縁から底部丁寧なナデ。
29－5 PL30	須恵器 坏	掘り方・北竈 口～底部片	口－(14.0) 底－(10.5) 高－3.6	①粗砂 ②還元焔 ③灰5Y5/1	体部は丸みを帯び、口縁部は直線的に立ち上がる。底部は平底を呈す。体から底部の外面は自然釉がかかる。
29－6 PL30	須恵器 坏	＋11 底部1/2	口－ 底－(14.0) 高－(2.8)	①粗砂、白色軽石 ②還元焔 ③黄灰2.5Y6/1	底部は平底を呈し、右回転へら削り。
29－7 PL31	須恵器 有台坏	＋6 口～底部1/4	口－(17.2) 底－(13.0) 高－4.1	①粗砂、黒色鉱物 ②還元焔 ③灰5Y6/1	体部は丸みを帯び、口縁部は直線的に立ち上がる。付高台。 底部は回転へら削り。
29－8 PL31	須恵器 高坏	床直 脚部1/2	口－ 底－(13.2) 高－(5.5)	①緻密、黒色鉱物 ②還元焔 ③灰5Y5/1	脚部は［ハ］の字状に開く。 轆轤成形。
29－9 PL31	須恵器 長頸壺	＋4 頸部片	口－ 底－ 高－(5.4)	①細砂 ②還元焔 ③灰7.5Y6/1	頸部片。頸部中位に２条の沈線巡る。
29－10 PL31	土師器 甕	掘り方 口縁部片	口－(20.0) 底－ 高－(6.5)	①粗砂、輝石 ②酸化焔 ③にぶい橙7.5YR6/4	口縁部は大きく外反し、胴部は丸みを持つ。 外面　口縁から頸部横ナデ、以下へら削り。 内面　胴部へら削り。
30－11 PL31	土師器 甕	床直 口～胴部1/2	口－(22.3) 底－ 高－(12.5)	①粗砂、小礫 ②酸化焔 ③橙7.5Y6/6	胴部は直線的で頸部は括れず、口縁部は外反する。 外面　口縁部横ナデ、以下縦方向のへら削り。 内面　口縁部横ナデ、以下へらナデ。 床直・掘り方・ピット６・東竈・床下土坑出土遺物接合。
30－12 PL31	土師器 甕	床直・北竈 口～底部2/5	口－(25.4) 底－4.0 高－(34.4)	①粗砂、輝石 ②酸化焔 ③にぶい橙5YR6/4	胴部はふくらまず、頸部も括れずに口縁下は外反する。 外面　口縁部は横ナデ、以下縦方向のへら削り。 内面　口縁部は横ナデ、以下へらナデ。

14号住居こも編み石計測表

挿図番号 図版番号	出土位置 残存状態	計測値（cm・g） 長さ	幅	厚さ	重量	石　材	挿図番号 図版番号	出土位置 残存状態	計測値（cm・g） 長さ	幅	厚さ	重量	石　材
26－13 PL31	床直 完形	14.1	6.6	4.5	670	粗粒輝石安山岩	26－14 PL31	床直 完形	13.8	6.0	4.7	722	変質安山岩
26－15 PL31	床直 完形	12.8	6.9	3.8	550	デイサイト	26－16 PL31	壁溝 完形	14.2	5.2	4.6	575	溶結凝灰岩
26－17 PL31	床直 完形	12.8	6.1	4.7	575	石英閃緑岩	26－18 PL31	壁溝 完形	12.1	5.7	3.7	373	石英閃緑岩

遺物観察表

挿図番号 図版番号	出土位置 残存状態	計測値（cm・g） 長さ	幅	厚さ	重量	石　材	挿図番号 図版番号	出土位置 残存状態	計測値（cm・g） 長さ	幅	厚さ	重量	石　材
26－19 PL31	＋4 完形	16.5	6.7	3.0	581	変質安山岩	26－20 PL31	壁溝 完形	12.9	5.2	4.8	477	石英閃緑岩
26－21 PL31	壁溝 完形	12.9	6.9	2.8	398	粗粒輝石安山岩	26－22 PL31	壁溝 完形	10.8	6.3	3.6	297	ひん岩
26－23 PL31	壁溝 完形	13.6	6.8	4.1	571	変質安山岩	26－24 PL31	壁溝 完形	10.2	6.8	5.0	699	粗粒輝石安山岩
27－25 PL31	掘り方 完形	14.5	5.8	4.0	481	珪質変質岩							

15号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
31－1 PL31	須恵器 有台坏	覆土 底部片	口－ 底－(10.0) 高－(1.4)	①細砂、黒色鉱物 ②還元焔 ③灰白7.5Y7/1	底部回転へら削りと削り出し高台。胎土に黒色鉱物が多量に混じる。
31－2 PL31	須恵器 長頸壺	覆土 肩部片	口－ 底－ 高－(3.5)	①細砂、白色軽石 ②還元焔 ③灰N6/	肩部外面に不規則な刺突痕残る。
31－3 PL31	土師器 甕	貯蔵穴 口～胴部片	口－(16.0) 底－ 高－(5.7)	①細砂、輝石 ②酸化焔　やや軟質 ③赤褐5YR4/8	口縁部は外反し、胴部は球状の丸みを持つ。 外面　口縁部は横ナデ。胴部は横方向のへら削り。

16号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
33－1 PL31	須恵器 坏	＋3 胴～底部1/5	口－ 底－(7.8) 高－(2.4)	①細砂、黒色鉱物 ②還元焔 ③灰N4/	体部は直線的に立ち上がる。 底部は右回転糸切り。
33－2 PL31	須恵器 蓋	竈 破片	口－(18.0) 鈕－ 高－(2.4)	①細砂、黒色鉱物 ②還元焔 ③灰5Y6/1	口縁部は折り曲げて直立する。

17号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
34－1 PL31	須恵器 埦	床下土坑 底部片	口－ 底－6.6 高－(2.2)	①粗砂、輝石 ②酸化焔 ③黒5Y2/1	付高台。高台は［ハ］の字状に開く。 底部は右回転糸切りか。
34－2 PL31	須恵器 羽釜	床直 口縁部片	口－(22.0) 底－ 高－(5.9)	①細砂、輝石 ②酸化焔　硬質 ③灰白7.5YR8/2	口縁部は内湾する。鍔は断面三角形を呈し、水平方向を向く。

19号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
37－1 PL31	須恵器 皿	床直 口～底部1/3	口－(8.8) 底－(5.4) 高－1.2	①細砂、輝石 ②酸化焔 ③橙10YR6/6	体部から口縁部は直線的に開く。 底部は回転糸切り(回転方向不明)。
37－2 PL31	須恵器 皿	竈 口～底部1/4	口－(7.0) 底－(4.3) 高－1.6	①細砂、小礫 ②酸化焔 ③にぶい橙7.5YR6/4	器壁が厚く、口縁部はやや内湾する。 底部は右回転糸切り。
37－3 PL31	須恵器 羽釜	床直 口縁部片	口－(19.2) 底－ 高－(4.6)	①細砂、小礫 ②酸化焔　硬質 ③褐7.5YR4/3	口縁部は内湾し、口唇部は外傾して突出する。 鍔は断面三角形を呈し、水平方向を向く。 口縁は内外面横ナデ。
37－4 PL31	平瓦	竈 破片	長－(20.2) 幅－(10.3) 厚－2.1	①鉱物含、重 ②並　還元気味 ③灰黄色2.5Y7/2	製作法は1枚作り。叩き目無文。側部面取り回数２回。 製作地は吉井。時期は８・９世紀。流用元は国府・国分尼寺か山王廃寺。

20号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
38－1 PL31	土師器 坏	床直 口～底部1/2	口－11.8 底－(7.0) 高－3.4	①細砂、輝石 ②酸化焔 ③赤褐2.5YR4/6	直線的に立ち上がり、口縁端部はやや直立する。 外面　口縁端部と内面全面はナデ調整。
38－2 PL31	須恵器 坏	覆土 口～底部3/5	口－12.6 底－6.0 高－3.6	①粗砂、白色軽石 ②還元焔　やや軟質 ③黄灰2.5Y6/1	直線的に立ち上がり、口縁は外反する。 右回転轆轤成形。底部は右回転糸切り。
38－3 PL31	須恵器 坏	覆土 1/4	口－(13.5) 底－(7.2) 高－3.7	①細砂、黒色鉱物 ②還元焔 ③灰10Y6/1	直線的に立ち上がる。 右回転轆轤成形。底部は右回転糸切り。
38－4 PL31	須恵器 坏	床直 口～底部1/5	口－(11.0) 底－(5.3) 高－3.1	①粗砂、輝石 ②酸化焔 ③にぶい黄橙10YR7/3	腰部が張り、口縁部は外反する。 底部は回転糸切り(回転方向不明)。
38－5 PL31	須恵器 埦	床直 口～底部1/2	口－(13.7) 底－6.4 高－5.6	①細砂、輝石 ②酸化焔 ③にぶい黄橙10YR6/3	直線的に立ち上がり、口縁部は外反する。 付高台。右回転轆轤成形。底部は右回転糸切り。
38－6 PL31	須恵器 埦	掘り方 1/2	口－13.4 底－(6.6) 高－5.1	①細砂、白色軽石 ②還元焔 ③灰5Y6/1	直線的に立ち上がり、口縁部は外反する。 付高台。高台は短く［ハ］の字状に開く。 右回転轆轤成形。底部は右回転糸切り。
38－7 PL31	須恵器 埦	床直 口～底部1/4	口－14.0 底－6.4 高－5.0	①細砂 ②酸化焔　硬質 ③にぶい黄橙10YR7/3	体部は丸みを帯び立ち上がり、口縁部は外反する。右回転轆轤成形。付高台。底部は右回転糸切り。
38－8 PL31	須恵器 埦	覆土 底部1/2	口－ 底－(7.0) 高－(4.3)	①細砂、小礫 ②酸化焔 ③にぶい褐7.5YR5/4	体部は直線的に立ち上がり、高台は［ハ］の字状に開く。 付高台。轆轤痕強く残る。
38－9 PL32	灰釉陶器 埦	覆土 口～底部1/3	口－(16.0) 底－8.0 高－5.1	①緻密 ②還元焔　硬質 ③灰白10YR7/1	体部は丸みを持ち、口縁部はやや外反する。 付高台。高台は［ハ］の字状に開く。 施釉方法は漬け掛け。釉調は灰白色。大原２号窯式期。
38－10 PL32	須恵器 羽釜	覆土 口～胴部片	口－(17.0) 底－ 高－(10.9)	①細砂、小礫 ②酸化焔 ③にぶい橙7.5YR6/4	口縁部は内湾し、胴部はゆるい丸みを持つ。鍔は断面三角形を呈し、水平を向く。
39－11 PL32	須恵器 羽釜	床直 口～胴部片	口－(24.0) 底－ 高－(16.2)	①細砂、輝石 ②還元焔　硬質 ③灰10Y6/1	鍔は断面三角形。口縁は内湾する。 外面　口縁は横ナデ。胴中部へら削り。 内面　口縁横ナデ。
39－12 PL32	須恵器 羽釜	床直 口～胴部片	口－(22.0) 底－ 高－(9.6)	①白色細粒、小礫 ②酸化焔　硬質 ③にぶい橙7.5YR6/4	鍔は断面三角形。口縁は内湾する。 外面　口縁部は横ナデ。 内面　口縁部は横ナデ。
39－13 PL31	須恵器 羽釜	床直 口～胴部片	口－(19.2) 底－ 高－(9.1)	①細砂、輝石 ②還元焔 ③灰5Y4/1	胴部は丸みを帯び、口縁部は内湾する。 鍔は細身で断面三角形を呈す。口縁部内外面横ナデ。

挿図番号 図版番号	種　別 器　種	出土位置 残存状態	計測値（cm・g） 長さ	幅	厚さ	重量	特　徴
39－14 PL32	鉄製品 釘	床直	(4.2)	0.4	0.4	1.92	頭部折り曲げ、先端に曲がりあり使用釘。錆色灰色がかり被熱ありか。

21号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
40－1 PL32	土師器 片口鉢	貯蔵穴 完形	口－12.7 底－5.1 高－5.9	①細砂 ②酸化焔 ③にぶい黄褐10YR6/4	平底で体部は丸みを帯び立ち上がる。 外面　口縁端部横ナデ。体部へら磨き。底部指頭圧痕。 内面　口縁端部横ナデ、以下へら磨き。赤色塗彩。
40－2 PL32	土師器 器台	＋11 台部1/2	口－ 底－(13.0) 高－(3.3)	①細砂、輝石 ②酸化焔 ③にぶい橙7.5YR6/4	ラッパ状に開く台部。 内外面へら磨き、裾部は横ナデ。
40－3 PL32	土師器 坩	覆土 頸～胴部片	口－ 底－ 高－(3.6)	①細砂 ②酸化焔 ③灰黄褐10YR5/2	椀状の胴部。 外面　胴上部は横ナデ、以下へら削り。内面へらナデ。 内部に赤色顔料付着、容器に使用したものと考えられる。
40－4 PL32	台付甕	覆土 台部片	口－ 底－ 高－(2.9)	①細砂 ②酸化焔 ③にぶい黄橙10YR7/4	接合部に砂粒を多量に含む粘土を付加。 外面　刷毛目。

22号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
43－1 PL32	土師器 坏	竈 口～底部片	口－(12.6) 底－ 高－(3.8)	①細砂、輝石 ②酸化焔　やや軟質 ③にぶい赤褐5YR5/4	口縁部は外反し、底部は平底を呈す。 外面　口縁部は横ナデ。体部はへら削り。 内面　体部はへらナデ。
43－2 PL32	須恵器 埦	覆土 口～体部1/4	口－(17.0) 底－ 高－(5.2)	①細砂、小礫 ②還元焔　硬質 ③灰白10Y7/1	腰部、体部ともに直線的に立ち上がる。 口縁部は外反する。轆轤成形。
43－3 PL32	土師器 甕	竈 口～頸部片	口－(19.8) 底－ 高－(5.7)	①細砂、輝石 ②酸化焔　硬質 ③褐7.5YR4/6	口縁部は弱い［コ］の字状を呈し、外反する。 外面　口縁から頸部横ナデ、以下横方向へら削り。 内面　口縁から頸部横ナデ、以下へらナデ。
43－4 PL32	土師器 甕	ピット1 口縁部片	口－(16.1) 底－ 高－(4.1)	①細砂、輝石 ②酸化焔　やや軟質 ③明赤褐5YR5/8	口縁部は［コ］の字状を呈し、内外面とも横ナデ。 内面　頸部はへらナデ。

23号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
44－1 PL32	須恵器 皿	床直 口～底部3/5	口－9.6 底－5.4 高－1.9	①粗砂、輝石 ②酸化焔 ③明黄褐10YR7/6	器壁厚く、口縁部は直線的に立ち上がる。底部は右回転糸切り。
44－2 PL32	須恵器 坏	床直 口～底部2/3	口－9.3 底－6.0 高－2.1	①細砂 ②酸化焔 ③橙5YR6/6	外傾しながら直線的に立ち上がる。 底部は右回転糸切り。
44－3 PL32	須恵器 埦	覆土 口～底部1/4	口－(13.6) 底－(7.7) 高－5.7	①細砂 ②酸化焔 ③灰黄褐10YR6/2	体部は丸みを持ち立ち上がり、口縁部はやや外反する。 付高台。高台は［ハ］の字状に開く。 右回転轆轤成形。底部は回転糸切り。
44－4 PL32	土師器 土釜	床直 口～胴上部 1/6	口－(25.6) 底－ 高－(10.9)	①粗砂、白色軽石 ②酸化焔 ③にぶい褐7.5YR5/4	口縁部は短く外反し、胴部は大きくふくらむ。 外面　口縁部横ナデ、以下縦方向のへら削り。 内面　口縁部横ナデ、以下横方向のへらナデ。
44－5 PL32	平瓦	覆土 小破片	長－(5.0) 幅－(4.0) 厚－1.9	①鉱物含、軽 ②硬　還元燻気味 ③にぶい黄褐10YR4/3	製作法は1枚作りか。叩き目格子。側部欠損。製作地は笠懸。時期は8世紀。流用元は国府・国分尼寺か。
44－6 PL32	平瓦	覆土 小破片	長－(4.6) 幅－(2.7) 厚－2.6	①鉱物微、軽 ②軟　酸化 ③にぶい黄橙10YR6/3	製作法は不明。叩き目無文。側部欠損。製作地は不明。時期は7・8世紀。流用元は国府・国分尼寺か山王廃寺。
44－7 PL32	丸瓦	覆土 破片	長－(8.0) 幅－(9.4) 厚－1.6	①鉱物含、軽 ②硬　還元 ③暗灰黄2.5Y4/2	製作法は不明。叩き目無文。側部面取り回数4回。製作地は笠懸。時期は8世紀。流用元は国府・国分尼寺か。
45－8 PL32	丸瓦	覆土 小破片	長－(6.0) 幅－(9.1) 厚－1.0	①鉱物含、重 ②硬　還元気味 ③灰オリーブ5Y6/2	製作法は2枚作り。桶寄木痕あり。回転条痕あり。叩き目無文。側部面取り回数2回。製作地は西毛。時期は7・8世紀。流用元は国府・国分尼寺か山王廃寺。
45－9 PL32	丸瓦	覆土 破片	長－(14.0) 幅－(11.0) 厚－1.7	①鉱物含、軽 ②硬　還元燻気味 ③暗灰黄2.5Y5/2	製作法は不明。叩き目無文。側部面取り回数2回。製作地は笠懸。時期は8世紀。流用元は国府・国分尼寺か。
45－10 PL32	丸瓦	覆土 破片	長－(18.3) 幅－(11.5) 厚－1.5	①鉱物含、重 ②硬　還元気味 ③黄灰2.5Y5/1	製作法は2枚作り。回転条痕あり。叩き目無文。側部面取り回数3回。製作地は東毛。時期は7～9世紀。流用元は国府・国分尼寺か。

24号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
47－1 PL32	土師器 坏	竈 2/3	口－13.8 底－ 高－5.0	①細砂、輝石 ②酸化焔　硬質 ③明赤褐5YR5/8	底部から体部は丸みを持ち、口縁部やや内斜する。 外面　口縁部横ナデ、以下へら削り。体部に指頭圧痕。 内面　口縁部横ナデ、以下へら磨き。
47－2 PL32	土師器 坏	竈 口～体部1/6	口－(13.8) 底－ 高－(4.8)	①細砂、輝石 ②酸化焔 ③明赤褐2.5YR6/6	体部は丸みを帯び立ち上がり、口縁部は内斜する。 外面　口縁部横ナデ、以下へら削り。 内面　口縁部横ナデ。体部はへら磨き。

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
47－3 PL33	土師器 坏	床直 口～底部1/4	口－(13.7) 底－丸底 高－5.2	①細砂、輝石 ②酸化焔 ③にぶい橙7.5YR6/4	口縁部は内斜し、底部は丸底を呈す。 外面　口縁部横ナデ。体から底部へら削り。 内面　口縁部横ナデ、ナデ後へら磨き。
47－4 PL33	土師器 坏	覆土 口～体部片	口－(12.0) 底－ 高－(4.3)	①細砂、輝石 ②酸化焔 ③橙2.5YR6/8	体部は丸みを持ち、口縁部は内斜する。 外面　口縁部は横ナデ、以下へら削り。 内面　口縁部は横ナデ、以下へら磨き。
47－5 PL33	土師器 坏	床直 口～底部1/5	口－(15.8) 底－丸底 高－4.3	①粗砂、輝石 ②酸化焔 ③明赤褐5YR5/6	体部は丸みを持ち、口縁部は内斜する。 外面　口縁横ナデ、以下横方向のへら削り。 内面　口縁横ナデ。
47－6 PL33	土師器 坏	竈 口～底部3/5	口－10.0 底－丸底 高－5.0	①粗砂、白色軽石 ②酸化焔　軟質 ③橙7.5YR6/6	底部から体部は丸くふくらみ、口縁部は内湾する。 外面　体部から底部はへら削り。成形が雑。
47－7 PL33	土師器 高坏	竈 脚部4/5	口－ 底－(14.6) 高－(4.3)	①粗砂、白色軽石 ②酸化焔 ③にぶい黄橙10YR6/4	ラッパ状に開く脚部。裾端部は丸い。裾部は内外面横ナデ。
47－8 PL33	土師器 高坏	床直 坏部破片	口－(17.0) 底－ 高－(4.7)	①細砂、輝石 ②酸化焔 ③明赤褐7.5YR5/8	坏部は直線的に立ち上がり、口縁端部やや受け口状を呈す。 外面　坏部口縁は横ナデ、以下へら磨き。 内面　口縁は横ナデ、以下へら磨き。
47－9 PL33	土師器 甕	竈 ほぼ完形	口－16.3 底－5.0 高－19.0	①細砂、小礫 ②酸化焔 ③にぶい黄橙10YR7/4	口縁部は外反し、胴部は丸くふくらむ。 外面　口縁部横ナデ、以下縦方向のへら削り。 内面　口縁部横ナデ、以下横方向のへらナデ。
47－10 PL33	土師器 甕	竈 胴～底部1/3	口－ 底－7.5 高－(22.5)	①粗砂 ②酸化焔 ③にぶい褐7.5YR5/4	胴部は球状にふくらみ、底部は平底を呈す。 器面の荒れがひどい。胴下半部にへら削り痕見られる。
48－11 PL32	土師器 小型甕	竈 口縁部片	口－(15.8) 底－ 高－(5.9)	①粗砂、輝石 ②酸化焔 ③橙5YR6/8	口縁部は折り返し後、内外面とも横ナデ。折り返し痕残る。 胴部は縦方向のへら削り後、横ナデ。 内面は横方向の刷毛目。
48－12 PL33	土師器 甑	竈 口～底部3/4	口－13.7 底－6.5 高－14.7	①粗砂 ②酸化焔 ③にぶい黄橙10YR6/4	胴部はゆるくふくらみ、口縁部は短く外反する。底部に孔あり。口縁部横ナデ。底部へら削り。器面が荒れている。
48－13 PL33	土師器 甑	床直 口～胴部片	口－(23.8) 底－ 高－(10.2)	①粗砂 ②酸化焔 ③橙7.5YR6/6	外反する口縁、長めの胴部。 外面　縦方向のへら削り、口縁は横ナデ。 内面　ヒビ状の接合痕が残る。
48－14 PL33	土師器 甑	床直～＋6 竈 口～底部3/4	口－22.6 底－9.0 高－24.4	①細砂、小礫 ②酸化焔　軟質 ③浅黄橙10YR8/3	口縁部はやや外反し、胴部はほぼ直線的にすぼまる。 外面　口縁部横ナデ。胴部上位は縦方向・不定方向のへら削り。内面　口縁部横ナデ、以下へらナデ。

25号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
49－1 PL33	須恵器 埦	竈 口～体部片	口－(16.8) 底－ 高－(5.2)	①細砂、輝石 ②酸化焔 ③暗灰黄2.5Y5/2	やや丸みを持ち立ち上がり、口縁部は外反する。 右回転轆轤成形。
49－2 PL33	土師器 台付甕	竈覆土 台部片	口－ 底－ 高－(3.0)	①細砂、輝石 ②酸化焔 ③橙7.5YR7/6	台付甕の台部片。台部端部は［ハ］の字状に開く。 外面は横ナデ。

26号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
51－1 PL33	土師器 坏	竈 口～体部片	口－(15.0) 底－ 高－(4.0)	①細砂、輝石 ②酸化焔 ③明赤褐2.5YR5/6	体部は丸みを持ち、口縁は内斜する。 外面　口縁端部横ナデ。体部へら磨き。底部へら削り。 内面　口縁端部横ナデ。体部へら磨き。
51－2 PL33	土師器 高坏	床直 坏部1/2	口－17.4 底－ 高－(6.4)	①細砂 ②酸化焔 ③橙5YR6/8	坏底部に稜を持ち坏部は外反し、口縁部は短く直立する。 内外面とも荒れている。 内外面一部にへら磨き痕あり。

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
51－3 PL33	土師器 器台	覆土 脚部片	口－ 底－ 高－(6.0)	①細砂 ②酸化焔 ③にぶい黄橙10YR7/4	脚部はラッパ状に開き、円孔３ケ所あり。 外面　へら削り。 内面　裾部横ナデ。
51－4 PL33	土師器 甕	床直 口～頸部片	口－(21.0) 底－ 高－(8.0)	①粗砂 ②酸化焔 ③にぶい黄橙10YR7/4	口縁部は大きく外反し、胴部はややふくらむ。口縁部は横ナデ。胴部はへら削り。
51－5 PL33	土師器 甕	竈 口～胴部1/4	口－(21.6) 底－ 高－(14.9)	①細砂 ②酸化焔 ③橙7.5YR6/6	胴部はややふくらみ、口縁部は外反する。 内外面口縁部横ナデ。外面胴上部へら削り。 内面はへらナデ。胴中部以下は器面の荒れはげしい。
51－6 PL33	土師器 甕	床直 口～頸部片	口－(22.6) 底－ 高－(5.8)	①粗砂、輝石 ②酸化焔 ③橙5YR6/6	口縁部は、頸部から外反して立ち上がる。 口縁部は、内外面横ナデ。 内外面とも摩滅している。

27号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
52－1 PL33	土師器 甕	床直 口縁部片	口－(17.7) 底－ 高－(6.9)	①細砂、輝石 ②酸化焔 ③にぶい赤褐5YR5/4	口縁部は、外反し、胴部はふくらみを持つ。 外面　口縁部横ナデ、以下へら削り。 内面　口縁部横ナデ、以下へらナデ。

28号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
54－1 PL33	須恵器 椀	覆土 口～体部片	口－(15.0) 底－ 高－(5.8)	①細砂、小礫 ②還元焔 ③黄灰2.5Y6/1	やや丸みを帯びて立ち上がり、口縁はやや外反する。 右回転轆轤成形。
54－2 PL33	灰釉陶器 皿	ピット1 口～底部1/4	口－(13.2) 底－(6.6) 高－(2.7)	①緻密 ②還元焔　硬質 ③灰白5Y8/1	やや丸みを帯びて立ち上がり、口縁部は短く外反する。 付高台。施釉方法不明。釉調は灰白色。大原２号窯式期
54－3 PL33	灰釉陶器 椀	覆土 体～底部片	口－ 底－(8.0) 高－(3.3)	①細砂、黒色鉱物 ②還元焔 ③灰白2.5Y7/1	高台は端部に丸みを持ち、やや開く。 施釉方法は不明。釉調は灰白色。 大原２号窯式期。
54－4 PL33	須恵器 羽釜	竈 口縁部片	口－(21.2) 底－ 高－(5.7)	①粗砂、小礫 ②酸化焔　軟質 ③にぶい橙7.5YR6/4	口縁部は内湾し、口唇部はやや直立する。鍔は断面三角形を呈す。鍔は水平方向を向く。

29号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
56－1 PL33	須恵器 椀	床下土坑 体～底部1/3	口－ 底－7.4 高－(3.9)	①細砂、小礫 ②還元焔 ③黄灰2.5Y6/1	体部は丸みを持ち立ち上がる。付高台。右回転轆轤成形。 底部は右回転糸切り。
56－2 PL33	土師器 土釜	覆土 口縁部片	口－(19.4) 底－ 高－(9.6)	①粗砂、輝石 ②酸化焔 ③褐7.5YR4/6	胴部はやや丸みを帯び立ち上がり、口縁部は直立する。 外面　口縁部横ナデ、以下へら削り。 内面　口縁部横ナデ。
56－3 PL33	須恵器 羽釜	覆土 口～胴部片	口－(24.6) 底－ 高－(12.1)	①粗砂、輝石 ②酸化焔 ③橙7.5YR6/6	口縁部は直線的に立ち上がる。鍔は小さく水平方向を向く。 外面　胴部は弱いへら削り。 内面　指ナデ。作りが雑。

31号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
58－1 PL34	土師器 坏	竈 口～底部1/4	口－(16.2) 底－丸底 高－(5.6)	①細砂、輝石 ②酸化焔 ③明褐7.5YR5/8	口縁部は外反し、体部に弱い稜を持つ。 外面　口縁部横ナデ、以下へら削り。 内面　口縁から体部横ナデ。
58－2 PL34	須恵器 蓋	覆土 鈕～天井部 1/6	口－ 鈕－(6.0) 高－(2.3)	①細砂、白色軽石 ②還元焔 ③灰5Y6/1	鈕は輪状を呈す。 天井部の上部半分は、回転へら削り。 内面を転用硯として使用。磨面と朱墨痕あり。

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
58－3 PL34	土師器 長甕	床直 口～胴部片	口－(22.0) 底－ 高－(10.0)	①粗砂、輝石 ②酸化焔 ③にぶい黄橙10YR6/3	口縁部は大きく外反し、胴部は直線的にのびる。 外面　口縁部横ナデ、以下縦方向のへら削り。 内面　口縁部横ナデ、以下へらナデ。

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値（cm・g） 長さ	幅	厚さ	重量	石　材	特　徴
58－4 PL34	石製品 火打石	覆土	2.45	2.3	1.8	11	石英	分割礫。表面上位の稜上に使用によるつぶれあり。

32号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
60－1 PL34	須恵器 坏	＋6 完形	口－13.4 底－7.4 高－3.5	①細砂、白色軽石 ②還元焔 ③黄灰2.5Y6/1	直線的に立ち上がり、口縁部は外反する。 右回転轆轤成形。底部は右回転糸切り。成形時の歪み大きい。
60－2 PL34	須恵器 坏	床直 口～底部4/5	口－13.2 底－7.2 高－3.0	①細砂、黒色鉱物 ②還元焔 ③黄灰2.5Y6/1	腰部が張り、口縁は外反する。右回転轆轤成形。底部は内側で盛り上がり、右回転糸切り。作りが雑で歪みが大きい。
60－3 PL34	須恵器 皿	覆土 口～底部1/4	口－(10.6) 底－(5.4) 高－2.1	①細砂 ②酸化焔 ③灰白2.5Y6/2	体部から口縁部は直線的に開く。付高台。高台は直立ぎみ。 底部は回転糸切り。
60－4 PL34	灰釉陶器 皿	覆土 底部片	口－ 底－(7.4) 高－(2.0)	①緻密 ②還元焔　硬質 ③灰白2.5Y7/1	付高台。高台部は三日月形を呈す。 施釉方法は刷毛塗り。釉調は緑灰色。内面に重ね焼き痕残る。光ヶ丘１号窯式期。
60－5 PL34	須恵器 埦	＋5 口～底部3/4	口－15.7 底－7.2 高－5.1	①細砂、小礫 ②酸化焔 ③灰黄2.5Y7/2	体部は丸みを帯び、口縁部はやや外反する。付高台。右回転轆轤成形。轆轤痕強く残る。底部は右回転糸切り。
60－6 PL34	須恵器 埦	＋21 体～底部1/4	口－ 底－7.2 高－(4.0)	①粗砂、輝石 ②酸化焔　やや軟質 ③にぶい黄橙10YR6/3	高台はやや丸みをもつ断面四角形を呈す。付高台。 底部は右回転糸切り。
60－7 PL34	須恵器 埦	＋7 底部片	口－ 底－6.4 高－(2.0)	①細砂、輝石 ②酸化焔 ③にぶい黄橙10YR7/3	高台は［ハ］の字状に開く。付高台。 底部右回転糸切り。
60－8 PL34	須恵器 埦	覆土 体～底部1/5	口－ 底－(6.6) 高－(4.3)	①細砂、輝石 ②酸化焔 ③灰黄2.5Y7/2	体部は丸みを帯びて立ち上がる。付高台。 高台は段を持ち低い。底部回転糸切り。右回転轆轤成形。
60－9 PL34	須恵器 蓋	覆土 鈕～天井部片	口－ 鈕－(7.4) 高－(1.7)	①細砂、黒色鉱物 ②還元焔 ③灰5Y6/1	鈕は扁平状を呈す。 天井部は回転へら削り。
60－10 PL34	須恵器 蓋	覆土 口縁部片	口－(15.8) 鈕－ 高－(1.9)	①細砂 ②還元焔　硬質 ③灰白2.5GY8/1	轆轤成形。口唇部は折り曲げ。
60－11 PL34	土師器 甕	覆土 口～胴部片	口－(16.0) 底－ 高－(6.0)	①細砂 ②酸化焔 ③にぶい橙7.5YR7/3	口縁部は外反し、胴部は丸みを持つ。 外面　口縁部横ナデ、以下へら削り。 内面　へらナデか。

挿図番号 図版番号	種　別 器　種	出土位置 残存状態	計測値（cm・g） 長さ	径	厚さ	重量	特　徴
60－12 PL34	鉄製品 紡錘車	＋4	(12.9) 軸部	(5.1) 輪部	0.5 輪部	21.1	円形の輪部の少穴と軸部両端調査時欠損。輪部と軸部は直交せず輪部傾く。軸部断面円形。木質などの付着なし。層状剥落少なく遺存良い。

33号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
61－1 PL34	土師器 坏	掘り方 完形	口－11.8 底－丸底 高－3.2	①細砂 ②酸化焔　硬質 ③橙7.5YR6/8	底部から体部は丸みを持ち、口縁部は直立する。 外面　口縁部横ナデ、以下へら削り。 内面　口縁から体部ナデ。
61－2 PL34	土師器 坏	掘り方 ほぼ完形	口－11.8 底－丸底 高－3.1	①細砂 ②酸化焔　硬質 ③橙5YR6/8	底部から体部は丸みを持ち、口縁部は直立する。 外面　口縁部横ナデ、以下へら削り。 内面　口縁から体部ナデ。

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
61－3 PL34	土師器 坏	床直 口～底部3/4	口－11.0 底－丸底 高－3.5	①細砂 ②酸化焔 ③橙5YR6/6	体部は丸みを持ち立ち上がり、口縁部は直立する。底部は丸底を呈す。口縁部内外面、横ナデ。
61－4 PL34	土師器 坏	床直 口～底部3/4	口－(9.6) 底－丸底 高－3.4	①細砂、小礫 ②酸化焔　硬質 ③橙7.5YR6/6	底部から体部は丸みを持ち、口縁部はやや内傾する。 外面　口縁部は横ナデ、以下へら削り。 内面　口縁から体部は横ナデ。
61－5 PL34	土師器 坏	覆土 口～底部片	口－(11.8) 底－丸底 高－(3.1)	①細砂、輝石 ②酸化焔 ③橙5YR6/6	体部は丸みを帯びて立ち上がり、口縁部は直立する。口縁下部に稜を持つ。口縁内外面横ナデ。外面体部から底部へら削り。
61－6 PL34	土師器 坏	覆土 口～底部片	口－(11.8) 底－ 高－(3.0)	①細砂 ②酸化焔 ③橙5YR6/6	体部は丸みを帯び稜を持つ。口縁部は直立する。 口縁部内外面横ナデ。 外面　体部から底部へら削り。
61－7 PL34	土師器 坩	覆土 口縁部片	口－(11.0) 底－ 高－(4.5)	①粗砂、輝石 ②酸化焔　硬質 ③にぶい黄褐10YR4/3	直線的に立ち上がり、外反する口縁部。椀状の胴部。 口縁部横ナデ後、頸部はミガキ調整。 内部に赤色顔料付着、容器に使用したと考えられる。
61－8 PL34	土師器 小型壺	覆土 口～胴部片	口－(14.0) 底－ 高－(4.0)	①粗砂、輝石 ②酸化焔　やや軟質 ③にぶい赤褐5YR4/4	口縁部はやや外反する。 外面　口縁部は横ナデ。胴部はへら削り。 内面　頸部はへらナデ。

34号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
62－1 PL34	須恵器 坏	竈 口～底部1/5	口－(10.8) 底－(4.8) 高－(4.1)	①細砂、小礫 ②酸化焔　やや軟質 ③にぶい黄橙10YR6/3	丸みを持ち立ち上がり、口縁はやや外反する。 轆轤成形。底部は回転糸切り（回転方向不明）。
62－2 PL34	須恵器 埦	床直 口～底部1/4	口－(12.6) 底－(7.2) 高－(5.5)	①細砂 ②酸化焔　やや軟質 ③灰黄褐10YR6/2	体部は直線的に立ち上がり、口縁は外反する。 右回転轆轤成形。付高台。
62－3 PL34	須恵器 羽釜	床直 口縁部1/4	口－18.0 底－ 高－(7.0)	①粗砂、輝石 ②酸化焔　硬質 ③にぶい黄橙10YR5/4	口縁部は強く内湾し、胴部も丸みを持つ。鍔は小さく、上方を向く。
62－4 PL34	須恵器 羽釜	床直 口～胴上部片	口－(21.4) 底－ 高－(10.9)	①粗砂、白色軽石 ②酸化焔　軟質 ③にぶい褐7.5YR5/3	口縁部は内湾する。鍔は断面三角形を呈す。胴部は直線的であまりふくらまない。右回転轆轤成形。

35号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
64－1 PL34	土師器 坏	床直 1/4	口－13.4 底－丸底 高－(5.4)	①粗砂、輝石 ②酸化焔 ③橙7.5YR6/6	口縁部は内斜し、底部は丸底を呈す。 外面　口縁部は横ナデ、底部へら削り。 内面　口縁部は横ナデ、体部の一部へらナデ。
64－2 PL34	土師器 坏	貯蔵穴2覆土 1/5	口－(12.8) 底－ 高－(4.8)	①細砂、輝石 ②酸化焔 ③にぶい赤褐5YR4/4	体部は丸くふくらみ、口縁部は内斜する。 外面　口縁部は横ナデ、以下へら削り。 内面　口縁部は横ナデ、以下へら磨き。
64－3 PL34	土師器 坏	貯蔵穴覆土 口～底部1/4	口－14.4 底－丸底 高－6.3	①細砂 ②酸化焔 ③橙5YR6/8	丸みを帯びた体部。内斜する口縁。口縁部内外面横ナデ。 体部は摩滅し調整不明。
64－4 PL34	土師器 坏	＋16～＋18 口～底部2/3	口－13.0 底－丸底 高－(5.1)	①細砂、輝石 ②酸化焔　硬質 ③明赤褐5Y5/6	底部から体部は丸みを帯び、口縁部はやや内湾する。 外面　口縁部は横ナデ、以下へら削り。 内面　口縁部は横ナデ、体部はへら磨き。
64－5 PL34	土師器 坏	貯蔵穴2覆土 口～体部1/5	口－(6.8) 底－ 高－(8.1)	①細砂 ②酸化焔 ③黄褐10YR5/6	丸みを帯びた体部。内斜する口縁。 外面　口縁部は横ナデ、以下へら削り。 内面　口縁部は横ナデ、以下へらナデ。
64－6 PL34	土師器 甑	竈 口縁部片	口－(16.2) 底－ 高－(5.0)	①粗砂、白色軽石 ②酸化焔 ③灰褐7.5YR4/2	口縁部は２段階に開く。 内面はへらナデ。成形が雑。

36号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
65－1 PL35	須恵器 羽釜	＋16 口～胴上部片	口－(19.6) 底－ 高－(10.1)	①細砂、白色軽石 ②還元焔　やや軟質 ③灰白2.5Y7/1	口縁部はやや内湾し、口唇部は外側に突出する。 胴部は丸みを帯びる。鍔は断面三角形を呈す。 口縁は内外面横ナデ。
65－2 PL35	須恵器 羽釜	＋15～＋19 口～胴部1/4	口－(19.0) 底－ 高－(11.5)	①細砂、小礫 ②酸化焔 ③灰黄褐10YR4/2	口縁はやや内湾する。鍔は断面三角形。 口縁は内外面ともに横ナデ。 右回転轆轤成形。
65－3 PL34	須恵器 羽釜	＋21 口縁部片	口－(23.6) 底－ 高－(7.0)	①細砂、白色軽石 ②還元焔 ③黄灰2.5Y6/1	口縁部はやや内湾し、口唇部は平坦で水平。 鍔は断面三角形を呈し、水平方向を向く。 口縁は内外面横ナデ。
65－4 PL35	須恵器 坏	＋2 口～底部3/4	口－13.2 底－6.8 高－4.0	①細砂 ②還元焔 ③灰オリーブ5Y6/2	体部はやや丸みを持ち立ち上がる。 右回転轆轤成形。底部は右回転糸切り。
65－5 PL35	土師器 甕	＋7 ほぼ完形	口－20.5 底－4.0 高－28.5	①細砂、輝石 ②酸化焔 ③橙5YR6/6	器壁薄く口縁部は外反し胴部は上位でふくらむ。 外面　口縁部横ナデ、以下へら削り。 内面　口縁部横ナデ、以下へらナデ。
65－6 PL35	土師器 埦	＋17 口～底部1/4	口－(13.3) 底－ 高－(5.0)	①細砂 ②酸化焔　硬質 ③にぶい赤褐5YR4/4	口縁部は内斜し、体部は丸くふくらむ。 外面　口縁部は横ナデ、以下へら削り。 内面　口縁部は横ナデ、体部は荒れている。
65－7 PL35	土師器 坏	覆土 口～体部1/5	口－15.0 底－ 高－(5.5)	①細砂、輝石 ②酸化焔 ③橙7.5YR7/6	体部は丸みを持ち、口縁部は内湾する。 外面　口縁部は横ナデ、以下横方向のへら削り。 内面　口縁から体部は丁寧なへら磨き。
65－8 PL35	土師器 坏	覆土 口～底部片	口－(14.0) 底－ 高－(6.9)	①細砂 ②酸化焔 ③明赤褐5YR5/6	体部は丸みを持ち、口縁部は外反する。 外面　口縁は横ナデ、以下へら削り。 内面　口縁は横ナデ。
65－9 PL35	土師器 甕	竈 口～胴部片	口－(15.2) 底－ 高－(11.4)	①細砂、白色軽石 ②酸化焔 ③にぶい橙7.5YR6/4	口縁部は外反し胴部は丸みを帯びる。 口縁部内外面は横ナデ。胴部内外面荒れている。

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値（cm・g） 長さ	厚さ	孔径	重量	石　材	特　徴
65－10 PL35	石製品 紡錘車	＋4 完形	3.5	1.0	0.8	20	蛇紋岩	成形が粗く、雑。
65－11 PL35	石器 凹・磨石	＋6 完形	12.3 長さ	11.8 幅	4.0 厚さ	744	粗粒輝石安山岩	中央部に磨耗と敲打による凹みあり。裏面に研磨部分あり。 磨耗は非金属による。

37号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
42－1 PL35	須恵器 埦	床直 底部のみ	口－ 底－5.5 高－(1.7)	①細砂、白色軽石 ②還元焔 ③灰オリーブ5Y6/2	付高台。高台は、短く［ハ］の字状に開く。 底部右回転糸切り。
42－2 PL35	須恵器 長頸壺	床直 底部	口－ 底－9.6 高－(3.0)	①細砂 ②還元焔 ③灰白5Y8/2	底部・胴下半部は回転へら削り。付高台。 底部内面の一部に自然釉かかる。
42－3 PL35	土師器 台付甕	竈 胴～台部片	口－ 底－(8.5) 高－(5.0)	①細砂 ②酸化焔 ③橙7.5YR4/6	台部は大きく開く。 外面　胴部へら削り。台部横ナデ。 内面　胴部へらナデ。台部横ナデ。
42－4 PL35	土師器 台付甕	覆土 台部1/2	口－ 底－(10.7) 高－(3.7)	①細砂、褐色粒 ②酸化焔 ③褐7.5YR4/6	台部は下半で大きく開く。 台部の内外面ともに横ナデ。

38号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
67－1 PL35	須恵器 坏	掘り方 1/4	口－(14.5) 底－6.0 高－4.3	①粗砂、白色軽石 ②酸化焔 ③にぶい橙7.5YR6/4	体部はやや丸みを帯びて立ち上がり、口縁部は外反する。 右回転轆轤成形。底部は右回転糸切り。

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
67－2 PL35	須恵器 埦	覆土 口～体部片	口－(12.0) 底－ 高－(2.7)	①細砂、輝石 ②酸化焔 ③灰黄褐10YR6/2	直線的に立ち上がり、口縁部は外反する。 右回転轆轤成形。
67－3 PL35	須恵器 埦	掘り方 口～体部片	口－(12.8) 高－(3.1)	①細砂、輝石②酸化焔 ③にぶい褐7.5YR6/3	直線的に立ち上がり、口縁部は外反する。轆轤成形。
67－4 PL35	須恵器 埦	床直 口～底部2/3	口－15.0 底－6.9 高－5.1	①細砂、輝石 ②酸化焔 ③にぶい黄橙10YR7/3	体部は丸みを持ち、口縁部は外反する。 付高台。高台は短い。右回転轆轤成形。 底部は右回転糸切り。
67－5 PL35	須恵器 埦	覆土 口～底部2/5	口－(15.4) 底－(6.4) 高－4.8	①細砂、輝石 ②酸化焔 ③灰黄2.5Y6/2	腰部が張り、口縁は外反する。高台は断面三角形を呈し、 直立する。付高台。底部は回転糸切り。
67－6 PL35	須恵器 埦	＋3 体～底部1/2	口－ 底－(7.8) 高－(3.5)	①細砂、小礫 ②酸化焔 ③灰黄褐10YR6/2	体部は丸みを帯び、高台は短く、断面逆台形を呈す。 付高台。底部は左回転糸切り。
67－7 PL35	須恵器 埦	床直 体～底部1/2	口－ 底－(7.4) 高－(3.5)	①細砂、輝石 ②酸化焔 ③にぶい橙5YR6/4	高台は［ハ］の字状に開く。付高台。右回転轆轤成形。 底部は右回転糸切り。
67－8 PL35	須恵器 埦	床直 底部	底－6.0 高－(1.5)	①細砂、輝石②酸化焔 ③灰黄2.5Y7/2	高台部は欠損。底部は右回転糸切り。
67－9 PL35	灰釉陶器 埦	覆土 口縁部片	口－14.2 底－ 高－(3.3)	①緻密、白色軽石 ②還元焔　硬質 ③灰白5Y7/1	体部はやや丸みを帯びて立ち上がり、口縁部は外反する。 施釉方法は漬け掛け。釉調は灰白色。大原２号窯式期か。
67－10 PL35	土師器 甕	床直 口～胴部片	口－(16.8) 底－ 高－(7.0)	①細砂 ②酸化焔　硬質 ③橙7.5YR6/6	口縁部は［コ］の字状を呈し、肩部はふくらむ。 外面　口縁部横ナデ、以下へら削り。 内面　口縁部横ナデ、以下へらナデ。
67－11 PL35	土師器 甕	床直 口縁部片	口－(20.6) 底－ 高－(6.2)	①細砂 ②酸化焔 ③にぶい橙7.5YR6/4	口縁部は外反し、胴部は丸みを持つ。 口縁部は横ナデ、胴部は横方向のへら削り。

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値（cm・g） 長さ	幅	厚さ	重量	石　材	特　徴
67－12 PL35	石製品 火打石か	覆土	3.4	2.8	2.8	28	石英	礫を分割したもの。裏面に一部自然面残す。稜上には、 使用によるつぶれは見られない。

39号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
68－1 PL35	土師器 坏	覆土 口～底部片	口－(13.8) 底－ 高－(2.6)	①細砂、輝石 ②酸化焔 ③橙5YR6/6	体部から口縁部は丸みを帯びて開き、器高は低い。 口縁部は横ナデ。 内面に指頭圧痕が見られる。
68－2 PL35	灰釉陶器 埦	覆土 底部1/2	口－ 底－ 高－(2.3)	①緻密 ②還元焔　硬質 ③浅黄2.5Y7/3	直線的に立ち上がる。付高台(高台部欠損) 施釉方法は刷毛塗り。釉調は乳白色。 内面底部にも、釉が付着。光ヶ丘１号窯式期。
68－3 PL36	丸瓦	覆土 小破片	長－(3.5) 幅－(8.1) 厚－1.5	①鉱物含、重 ②硬　還元 ③灰7.5Y5/1	製作法は２枚作り。布合せ目なし。回転条痕あり。叩き 目無文。側部欠損。製作地は不明。時期は８・９世紀。 流用元は国府・国分尼寺か山王廃寺。

40号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
69－1 PL36	須恵器 坏	覆土 2/5	口－(13.0) 底－7.8 高－3.3	①細砂 ②還元焔 ③青灰5PB6/1	直線的に立ち上がる。轆轤痕強く残る。右回転轆轤成形。 底部は右回転糸切り。
69－2 PL36	須恵器 坏	覆土 口～底部3/5	口－(12.2) 底－6.0 高－4.4	①細砂 ②酸化焔 ③灰白5Y7/1	直線的に立ち上がり、口縁はやや外反する。 右回転轆轤成形。底部は回転糸切り。
69－3 PL36	灰釉陶器 皿	覆土 底部片	口－ 底－(8.0) 高－(2.0)	①緻密 ②還元焔　硬質 ③灰黄2.5Y7/2	高台は逆台形を呈し、やや開く。付高台。 施釉方法は刷毛塗り。釉調は緑灰色。光ヶ丘１号窯式期。

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
69－4 PL36	灰釉陶器 皿	覆土 口～底部片	口－(14.6) 底－(8.0) 高－(2.9)	①緻密 ②還元焔　硬質 ③褐灰10YR6/1	直線的に立ち上がる。口縁部はやや外反する。 付高台。右回転轆轤成形。施釉方法は漬け掛け。釉調は緑灰色。内面底部に重ね焼き痕あり。大原２号窯式期。
69－5 PL36	灰釉陶器 埦	覆土 底部片	口－ 底－(7.8) 高－(1.9)	①緻密 ②還元焔　硬質 ③灰白5Y8/1	高台は断面四角形を呈し、端部が丸みを持つ。付高台。 施釉方法は漬け掛け。釉調は灰色。大原２号窯式期。
70－6 PL36	土師器 甕	＋25 口～胴部1/2	口－19.8 底－ 高－(11.0)	①細砂、輝石 ②酸化焔 ③にぶい橙5YR6/4	口縁部は外反し、胴部は丸くふくらむ。 外面　口縁から頸部横ナデ、以下へら削り。 内面　口縁から頸部横ナデ、以下へらナデ。
70－7 PL36	土師器 甕	＋10 口縁部片	口－(19.8) 底－ 高－(7.0)	①細砂 ②酸化焔 ③橙5YR6/6	口縁部は［コ］の字状を呈し、胴部は上位でふくらむ。 外面　口縁部から頸部横ナデ、以下へら削り。 内面　口縁部から頸部横ナデ、頸部に指頭圧痕あり。
70－8 PL36	平瓦	覆土 小破片	長－(7.0) 幅－(5.2) 厚－1.5	①鉱物微、重 ②締　還元 ③灰5Y4/1	製作法は２枚作り。回転条痕あり。布目側粘土板糸切痕あり。叩き目無文。側部面取り回数３回。製作地は秋間・観音山。時期は７・８世紀中。流用元は国府・国分尼寺か山王廃寺。
70－9 PL36	平瓦	覆土 小破片	長－(4.6) 幅－(3.0) 厚－1.2	①鉱物微、やや軽 ②軟　酸化気味 ③橙7.5Y7/6	製作法は桶巻作り。布合せ目あり。叩き目縄絡状消し。側部面取り回数１回。製作地は秋間。時期は８・９世紀前。流用元は国府・国分尼寺か山王廃寺。
70－10 PL36	丸瓦	覆土 小破片	長－(7.8) 幅－(8.4) 厚－1.3	①鉱物含、重 ②硬　酸化後還元 ③灰7.5Y5/1	製作法は２枚作り。回転条痕あり。叩き目無文。側部面取り回数１回。裁断のへら切れ目あり。製作地は秋間。時期は７・８世紀。流用元は国府・国分尼寺か山王廃寺。
70－11 PL36	丸瓦	覆土 小破片	長－(5.2) 幅－(6.5) 厚－1.6	①鉱物微、軽 ②軟　弱酸化 ③浅黄橙10YR8/4	製作法は２枚作り。粘土板合せ目あり。叩き目無文。側部欠損。製作地は秋間。時期は７・８世紀。流用元は国府・国分尼寺か山王廃寺。
70－12 PL36	丸瓦	覆土 破片	長－(9.1) 幅－(11.0) 厚－1.3	①鉱物微、重 ②締　還元微燻 ③暗灰黄2.5Y5/2	製作法は２枚作り。回転条痕あり。布目側粘土板糸切痕あり。叩き目無文。側部面取り回数２回。製作地は秋間。時期は７・８世紀。流用元は国府・国分尼寺か山王廃寺。
70－13 PL36	丸瓦 有段	覆土 小破片	長－(8.5) 幅－(7.1) 厚－1.3	①鉱物含、重 ②硬　還元 ③灰7.5Y5/1	製作法は２枚作り。布目側粘土板糸切痕あり。粘土板接合なし。表面無文。撫で痕。側部面取り１回。割れ口に接合面あり。製作地は秋間。時期は８世紀。流用元は国府・国分尼寺か山王廃寺。
70－14 PL36	丸瓦	覆土 小破片	長－(5.6) 幅－(8.8) 厚－1.5	①鉱物含、重 ②硬　還元気味 ③灰黄2.5Y6/2	製作法２枚作り。回転条痕あり。布目側粘土板糸切痕あり。叩き目無文。側部面取り回数２回。製作地秋間。時期７～９世紀。流用元国府・国分尼寺か山王廃寺。
70－15 PL36	丸瓦	覆土 小破片	長－(6.3) 幅－(10.5) 厚－2.0	①鉱物少、やや軽 ②並　微還元 ③灰白2.5Y8/2	製作法は２枚作り。回転条痕あり。叩き目無文。側部欠損。製作地は笠懸。時期は８世紀。流用元は国府・国分尼寺か。

図版番号	器　種	出土位置 残存状態	計測値（cm・g）				石　材
			長さ	幅	厚さ	重量	
PL36	石製品材料	覆土	26.0	16.5	9.5	5700	固結凝灰岩

41号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
71－1 PL36	須恵器 坏	覆土 3/4	口－13.2 底－2.8 高－4.2	①細砂 ②還元焔 ③灰白10Y8/1	やや丸みを持ち立ち上がり、口縁部は外反する。 右回転轆轤成形。底部は右回転糸切り。
71－2 PL36	須恵器 埦	貯蔵穴 口～底部3/4	口－14.5 底－7.2 高－5.2	①細砂、輝石 ②酸化焔 ③暗灰黄2.5Y5/2	腰部が張り、口縁部は外反する。付高台。右回転轆轤成形。底部は右回転糸切り。
71－3 PL36	須恵器 埦	貯蔵穴 口～底部1/2	口－13.6 底－6.6 高－4.8	①細砂、輝石 ②酸化焔 ③にぶい黄褐10YR6/4	丸みを持ち立ち上がり、口縁部はやや外反する。付高台。 右回転轆轤成形。底部は右回転糸切り。
72－4 PL36	須恵器 埦	床直 1/4	口－14.2 底－7.8 高－5.6	①細砂 ②還元焔 ③灰白7.5Y7/2	やや丸みを持ち立ち上がり、口縁部は外反する。付高台。 高台は［ハ］の字状に開く。 底部は右回転糸切り。

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
72－5 PL36	須恵器 埦	貯蔵穴 ほぼ完形	口－15.8 底－7.6 高－6.1	①細砂、白色軽石 ②酸化焔 ③褐7.5YR4/3	直線的に開き、口縁部は外反する。 付高台。高台は長く［ハ］の字状に開く。 右回転轆轤成形。底部は回転糸切り。
72－6 PL36	灰釉陶器 長頸壺	床直 頸～胴部片	口－ 底－ 高－(5.2)	①細砂、黒色鉱物 ②還元焔　硬質 ③灰白2.5Y7/1	胴部は丸みを帯びている。 右回転轆轤成形。外面全体に施釉、施釉方法不明。 釉調は緑白色。
72－7 PL36	須恵器 羽釜	覆土 口縁部片	口－(21.7) 底－ 高－(6.0)	①粗砂、小礫 ②酸化焔　硬質 ③にぶい橙5YR7/3	口縁部は内湾する。鍔は断面三角形を呈し、下方に垂れる。
72－8 PL36	丸瓦	覆土 小破片	長－(4.2) 幅－(4.8) 厚－1.3	①鉱物含、重 ②硬　還元 ③灰黄2.5Y7/2	製作法は２枚作り。回転条痕あり。叩き目無文。側部面取り回数２回。製作地は西毛。時期は７・８世紀。 流用元は国府・国分尼寺か山王廃寺。

42号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
73－1 PL36	須恵器 坏	覆土 口～底部2/5	口－12.2 底－(6.3) 高－3.7	①細砂、白色軽石 ②酸化焔 ③にぶい褐7.5YR5/4	直線的に立ち上がり、口縁部はやや外反する。 底部は回転糸切り(回転方向不明)。

43号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
76－1 PL36	須恵器 坏	掘り方 底部片	口－ 底－7.4 高－(1.7)	①粗砂、黒色鉱物 ②還元焔　やや軟質 ③浅黄橙10YR8/4	器壁が厚く、底部は平底を呈す。 底部は右回転糸切り。
76－2 PL36	須恵器 羽釜	掘り方 口縁部片	口－(18.2) 底－ 高－(3.7)	①細砂、小礫 ②酸化焔 ③にぶい褐7.5YR5/4	口縁部は内湾し、鍔は小さめで下方へ垂れる。器壁は薄い。 外面　口縁部横ナデ。

挿図番号 図版番号	種　別 器　種	出土位置 残存状態	計測値（cm・g） 長さ	厚さ	孔径	重量	特　徴
76－3 PL36	土製品 土錘	掘り方 完形	4.0	1.8	0.5	11	中央部が膨らむ管状土錘。
76－4 PL36	石製品 天井石	竈 完形	26.5	9.9 幅	6.6 厚さ	2670	石材 デイサイト

44号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
77－1 PL36	須恵器 埦	覆土 底部1/4	口－ 底－7.0 高－(2.1)	①細砂、黒色鉱物 ②還元焔 ③灰白5Y8/1	高台は断面三角形を呈し、［ハ］の字状に開く。 付高台。底部は右回転糸切り。
77－2 PL36	灰釉陶器 皿	覆土 口～底部片	口－(15.2) 底－(6.6) 高－3.0	①緻密 ②還元焔　硬質 ③灰白2.5Y7/1	直線的に立ち上がり、口縁部はやや外反する。 付高台。施釉方法刷毛塗り。釉調は灰白色。 光ヶ丘１号窯式期。
77－3 PL36	須恵器 羽釜	覆土 口縁部片	口－(20.8) 底－ 高－(4.5)	①粗砂 ②酸化焔 ③にぶい黄橙10YR7/4	口縁部は内湾し、鍔は細身で長く水平方向を向く。

45号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
79－1 PL37	土師器 坏	床直 完形	口－11.6 底－丸底 高－3.8	①細砂 ②酸化焔 ③明褐7.5YR5/6	底部から体部は丸みを帯び体部は稜を持つ。口縁部は短く、直立する。外面　口縁部横ナデ。以下へら削り。 内面　口縁部横ナデ、以下へらナデ。
79－2 PL37	土師器 坏	＋7 口～底部2/3	口－10.2 底－丸底 高－3.4	①細砂 ②酸化焔 ③橙5YR6/6	底部から口縁部にかけて内湾する。 外面　口縁部横ナデ、以下へら削り。 内面　口縁部横ナデ、体部に指頭圧痕あり。

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
79－3 PL37	土師器 坏	＋11 ほぼ完形	口－10.8 底－丸底 高－3.4	①細砂 ②酸化焔 ③明赤褐5YR5/6	体部は稜を持ち、口縁部はほぼ直立する。 外面　口縁部横ナデ、以下横方向のへら削り。 内面　口縁部横ナデ、体部に指頭圧痕あり。
79－4 PL37	土師器 坏	＋5 3/4	口－10.6 底－丸底 高－3.4	①細砂 ②酸化焔 ③橙5YR6/8	底部から口縁部にかけて内湾する。 外面　口縁部横ナデ、以下横方向のへら削り。 内面　口縁部横ナデ。
79－5 PL37	須恵器 蓋	床直 天井～口縁部 1/4	口－(10.2) 鈕－(1.6) 高－2.2	①緻密、黒色鉱物 ②還元焔 ③灰N6/	鈕は宝珠状を呈し先端が欠損している。内面には身受けのカエリを持つ。天井部は回転へら削り。
79－6 PL37	土師器 甕	覆土 口縁部片	口－(12.0) 底－ 高－(6.9)	①細砂、黒色鉱物 ②酸化焔 ③橙7.5YR6/6	口縁部はやや外反し、立ち上がる。 外面　口縁部横ナデ、以下へら削り。 内面　口縁部横ナデ、以下へらナデ。
79－7 PL37	土師器 甕	床直 口～胴部片	口－20.8 底－ 高－(14.0)	①細砂、輝石 ②酸化焔 ③明黄褐10YR7/6	口縁部は大きく外反し、胴部はあまりふくらまない。 外面　口縁から頸部横ナデ、以下へら削り。 内面　口縁部横ナデ、以下へらナデ。

46号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
74－1 PL37	須恵器 坏	竈 口～底部1/2	口－(12.6) 底－7.6 高－3.5	①細砂、黒色鉱物 ②還元焔 ③灰白10YR7/1	直線的に立ち上がる。底部は回転へら切り後、不規則なへら削り。
74－2 PL37	須恵器 埦	覆土 口～体部片	口－(12.0) 底－ 高－(3.6)	①細砂、黒色鉱物 ②還元焔 ③黄灰2.5Y6/1	体部は丸みを帯びて立ち上がり、口縁端部やや外反する。轆轤成形(回転方向不明)。
74－3 PL37	須恵器 盤	＋16 口～底部片	口－(20.8) 底－(17.2) 高－2.6	①細砂、白色軽石 ②還元焔 ③灰5Y6/1	体部から口縁部にかけて直線的に開く。体部は下位に2段の回転へら削り。底部も回転へら削り。

47号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
81－1 PL37	土師器 坏	貯蔵穴 1/2	口－13.5 底－6.3 高－3.5	①細砂 ②酸化焔 ③にぶい橙7.5YR6/4	直線的に立ち上がり、口縁部大きく外傾する。 口縁部は横ナデ。体部はへら削り。
81－2 PL37	須恵器 埦	貯蔵穴 体～底部1/3	口－ 底－6.7 高－(4.3)	①細砂、輝石 ②酸化焔 ③オリーブ黒5Y3/1	体部は丸みを帯びて立ち上がる。 付高台。底部は回転糸切り。 右回転轆轤成形。
81－3 PL37	須恵器 坏	貯蔵穴覆土 1/3	口－(13.8) 底－6.2 高－5.5	①細砂、輝石 ②酸化焔 ③灰黄2.5Y7/2	体部は丸みをもち、口縁端部やや外反する。付高台。右回転轆轤成形。底部は回転糸切り。
81－4 PL37	土師器 甕	貯蔵穴・＋12 口縁部片	口－(19.0) 底－ 高－(7.4)	①細砂 ②酸化焔 ③明赤褐5YR5/6	口縁部は外反し、胴部はふくらむ。 外面　口縁部横ナデ、以下横方向のへら削り。 内面　口縁部横ナデ、以下横方向のへらナデ。
81－5 PL37	須恵器 羽釜	竈 口～胴上部片	口－(21.8) 底－ 高－(9.5)	①細砂、小礫 ②酸化焔 ③橙5YR6/8	口縁部は内湾し、胴部は丸みをもつ。鍔は断面三角形を呈し、やや上方を向く。 口縁部は内外面横ナデ。

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値（cm・g） 長さ	幅	厚さ	重量	石　材	特　徴
81－6 PL37	石製品 砥石	床直	4.2	5.0	2.9	60	砥沢石	中砥・手持砥。使用は表・裏・側部4面。手前は旧欠損。奥小口は剥落面となる。砥沢砥。

48号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
82－1 PL37	土師器 坏	掘り方 ほぼ完形	口－12.4 底－丸底 高－5.4	①細砂、輝石 ②酸化焔 ③橙5YR6/6	口縁部は内湾し、底部は丸底を呈す。 外面　口縁部横ナデ、以下横方向のへら削り。 内面　口縁部横ナデ後へら磨き、以下へら磨き。

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
82－2 PL37	土師器 甕	竈 口～胴上部 1/4	口－22.0 底－ 高－9.3	①粗砂、小礫 ②酸化焔 ③浅黄橙7.5YR8/4	口縁部は大きく外反し、胴部はふくらむ。 外面　口縁部横ナデ、以下へら削り。 内面　口縁部横ナデ、以下へらナデ。
82－3 PL37	土師器 甕	＋15 口縁部片	口－(18.9) 底－ 高－8.4	①粗砂、輝石 ②酸化焔 ③明褐7.5YR5/6	口縁部は外反する。 内外面とも横ナデ。 胴部外面は横方向のへら削り。

49号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
83－1 PL37	須恵器 坏	覆土 底部1/2	底－(6.5) 高－(2.1)	①細砂　②酸化焔 ③灰黄褐10YR5/2	右回転轆轤成形。底部は右回転糸切り。
83－2 PL37	須恵器 埦	＋5 体～底部1/3	口－ 底－6.7 高－(5.0)	①細砂、白色軽石 ②還元焔 ③灰白2.5Y7/1	体部は丸みをもつ。付高台。右回転轆轤成形。 底部は右回転糸切り。
83－3 PL37	土師器 甕	床下土坑 口～頸部	口－(18.0) 底－ 高－(4.5)	①細砂、輝石 ②酸化焔 ③橙5YR6/6	口縁部は外反し、頸部は［く］の字状を呈す。 外面　口縁部横ナデ、以下へら削り。 内面　口縁部横ナデ。

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値（cm・g） 長さ	幅	厚さ	重量	石　材	特　徴
83－4 PL37	石製品 砥石	覆土	3.2	4.2	1.1	21	砥沢石	中砥・手持砥。6面使用。使用消耗した砥石を再利用か。 小形製品研磨に使用か。砥沢砥。

挿図番号 図版番号	種　別 器　種	出土位置 残存状態	計測値（cm・g） 長さ	径	厚さ	重量	特　徴
83－5 PL37	鉄製品 紡錘車	覆土	(12.9) 軸部	6.2 輪部	0.6 輪部	23.63	円形の輪部の調整時欠損と軸部両端に欠損あり。輪部と軸部は直交状態。 軸部断面円形。木質などの付着なし。層状剥落少なく、遺存良い。

50号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
85－1 PL37	土師器 坏	＋5～＋9 口～底部1/3	口－13.6 底－丸底 高－5.0	①細砂 ②酸化焔 ③橙5YR6/8	底部から体部は丸みをもち、口縁部は短く内斜する。 外面　口縁部横ナデ、以下横方向のへら削り。 内面　口縁部横ナデ、以下丁寧なへら磨き。
85－2 PL37	土師器 坏	床直 口～底部4/5	口－13.0 底－丸底 高－(5.3)	①細砂 ②酸化焔 ③明赤褐5YR5/6	体部に稜をもち、口縁部はやや外反する。 外面　口縁部横ナデ、以下横方向のへら削り。 内面　口縁部横ナデ、以下へら磨き。
85－3 PL37	土師器 鉢	竈 完形	口－11.6 底－5.4 高－7.6	①粗砂、白色軽石 ②酸化焔 ③明黄褐10YR6/8	体部はゆるい丸みをもち、口縁部は直立気味。 外面　口縁部横ナデ、体部刷毛目？、底部へら削り。 内面　口縁部横ナデ、以下へらナデ。
85－4 PL37	土師器 鉢	竈 完形	口－10.5 底－3.0 高－6.8	①粗砂、白色軽石 ②酸化焔 ③にぶい橙7.5Y6/4	体部は丸みをもち、口縁部は内湾する。 外面　口縁部横ナデ、以下へら削り。 内面　口縁から体部横ナデ、以下へらナデ。

51号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
86－1 PL37	土師器 坏	床直 口～底部2/3	口－12.9 底－丸底 高－4.2	①細砂 ②酸化焔 ③明赤褐2.5YR5/6	底部から体部は丸みをもち、立ち上がる。 口縁部横ナデ。底部はへら削り。 器面荒れている。
86－2 PL37	須恵器 皿	＋13 2/5	口－14.6 底－(7.8) 高－(2.2)	①緻密、黒色鉱物 ②還元焔　硬質 ③灰白2.5Y7/1	体部から口縁部にかけて直線的に開く。 高台は細身で、やや外傾する。底部は回転糸切り。
86－3 PL37	土師器 甕	竈 口～胴部1/5	口－(16.5) 底－ 高－(15.1)	①粗砂、小礫 ②酸化焔 ③にぶい黄橙10YR6/4	口縁部は外反し、胴部は下脹れ状。 外面　口縁部横ナデ、以下へら削り。 内面　口縁部横ナデ、以下へらナデか。

52号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
88－1 PL37	土師器 坏	床直 口～体上部 片	口－(13.6) 底－ 高－(4.0)	①細砂、輝石 ②酸化焔 ③にぶい橙7.5YR6/4	体部はやや丸みを帯び、口縁部は外反する。 外面　口縁部横ナデ、以下へら削り。 内面　口縁部横ナデ。
88－2 PL38	須恵器 埦	床直 体～底部1/4	口－ 底－7.8 高－(5.5)	①細砂、小礫 ②還元焔 ③黄灰7.5YR6/1	体部は丸みを帯び、付高台。高台は［ハ］の字状に開く。底部は回転糸切り(回転方向不明)。
88－3 PL37	灰釉陶器 埦	掘り方 底部片	口－ 底－(7.8) 高－(1.3)	①緻密、黒色鉱物 ②還元焔 ③灰白2.5Y7/1	高台はほぼ直立し、端部は丸みを持つ。付高台。施釉方法刷毛塗りか。釉調は緑灰色。
88－4 PL38	土師器 甕	床直 口～胴部片	口－17.6 底－ 高－13.1	①細砂 ②酸化焔 ③橙5YR6/6	口縁部はやや外反し、胴部はふくらむ。 外面　口縁部横ナデ、以下へら削り。 内面　口縁部横ナデ、以下へらナデ。
88－5 PL38	土師器 甕	床直 口縁部片	口－(19.8) 底－ 高－(4.5)	①細砂、輝石 ②酸化焔 ③明赤褐2.5YR5/6	口縁部は［コ］の字状を呈し、横ナデ。口縁部に指頭圧痕のこる。胴部へら削り。
88－6 PL38	須恵器 羽釜	床直 口縁部片	口－(21.0) 底－ 高－(5.5)	①粗砂、小礫 ②酸化焔 ③にぶい黄橙10YR6/4	口縁部は内湾し、口唇部は直立する。鍔は断面三角形を呈し、やや上方を向く。鍔下部に接合痕あり。

挿図番号 図版番号	種　別 器　種	出土位置 残存状態	計測値（cm・g） 輪部径	厚さ	重量	特　徴
88－7 PL38	鉄製品 紡錘車か	床直	5.5	0.6	14.36	輪部の欠損は旧時と調査時。円形の輪部の中央に径5.5mmの孔あり。上方付近よじれあり。横断面は耳が薄くならずにほぼ同じ厚さで、内部が空洞になり、２枚鍛接か一枚の折り曲げ鍛接。上方の少孔のめくれは再用の結果か。

挿図番号 図版番号	器　種	出土位置 残存状態	計測値（cm・g） 長さ	幅	厚さ	重量	石　材
88－8 PL38	石製品 袖石	竈 ほぼ完形	18.0	10.0	8.0	1250	固結凝灰岩

53号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
90－1 PL38	土師器 坏	貯蔵穴覆土 口～体部片	口－(11.4) 底－ 高－(3.8)	①細砂、輝石 ②酸化焔 ③橙5YR6/8	外面の削りは弱く不明瞭。内面のナデは丁寧で平滑に仕上げている。
90－2 PL38	土師器 甕	貯蔵穴 3/4	口－15.3 底－(7.3) 高－(28.7)	①粗砂、白色軽石 ②酸化焔 ③にぶい橙7.5YR6/4	口縁部はやや外反し、胴部は丸みを持つ。 外面　口縁部横ナデ、以下縦方向のへら削り。 内面　口縁部横ナデ、胴部へらナデ。

54号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
92－1 PL38	須恵器 坏	＋10 完形	口－12.2 底－5.6 高－3.9	①細砂、輝石 ②還元焔 ③灰黄2.5Y6/2	丸みを帯びて立ち上がり、口縁部は外反する。 右回転轆轤成形。底部は右回転糸切り。成形時の歪みあり。
92－2 PL38	須恵器 坏	床直 完形	口－11.0 底－5.2 高－3.4	①細砂、小礫 ②還元焔 ③灰白2.5Y7/1	体部は丸みを帯び、口縁部は外反する。右回転轆轤成形。底部は右回転糸切り。成形時の歪みあり。
92－3 PL38	須恵器 坏	＋8 完形	口－12.2 底－6.0 高－4.0	①粗砂、小礫 ②酸化焔 ③にぶい黄橙10YR6/4	体部は丸みを帯びて立ち上がる。 右回転轆轤成形。底部は右回転糸切り。
92－4 PL38	須恵器 坏	＋8 口～底部3/4	口－11.4 底－6.2 高－5.8	①細砂、輝石 ②酸化焔 ③にぶい黄橙10YR7/4	直線的に立ち上がる。轆轤目痕強い。 右回転轆轤成形。底部は右回転糸切り。
92－5 PL38	須恵器 坏	竈 1/5	口－(13.4) 底－5.8 高－3.8	①細砂、小礫 ②酸化焔 ③灰黄褐10YR6/2	体部は丸みをもち、口縁部は外反する。 底部は右回転糸切り。

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
92－6 PL38	須恵器 埦	＋11 完形	口－12.0 底－6.4 高－4.9	①細砂 ②酸化焔 ③灰黄褐10YR6/2	丸みをもち立ち上がり、口縁部は外反する。 付高台。右回転轆轤成形。底部は右回転糸切り。
92－7 PL38	須恵器 埦	＋7 口～底部1/2	口－14.0 底－6.0 高－(8.3)	①細砂、輝石 ②酸化焔 ③にぶい橙7.5YR6/4	直線的に立ち上がる。付高台。高台は長く［ハ］の字状に開く。 右回転轆轤成形。底部は回転糸切り。
92－8 PL38	灰釉陶器 埦	＋9 口～底部1/2	口－(13.0) 底－(6.8) 高－4.0	①緻密 ②還元焔 ③灰白2.5Y8/1	丸みを帯び立ち上がり、口縁部はやや外反する。付高台。 大原２号窯式期。
92－9 PL38	須恵器 羽釜	＋7～＋10 口～胴部1/4	口－(20.0) 底－ 高－(13.7)	①細砂、小礫 ②酸化焔 ③黄褐2.5Y5/3	口縁部はやや内湾し、鍔は断面三角形を呈し、水平方向を向く。 外面　口縁から鍔部横ナデ。胴部縦方向のへら削り。 内面　口縁部横ナデ。
92－10 PL38	須恵器 羽釜	＋6～＋11 口～胴上部片	口－(21.8) 底－ 高－(14.2)	①細砂、輝石 ②還元焔 ③灰10Y6/1	口縁部は直立し、胴部は丸みを帯びながらすぼまる。鍔は短く断面三角形を呈す。口縁部内外面横ナデ。 外面　胴部へら削り。

挿図番号 図版番号	種　別 器　種	出土位置 残存状態	計測値（cm・g） 長さ	径	厚さ	重量	特　徴
92－11 PL38	鉄製品 刃器	床下土坑 近旧態	7.5	1.2	0.3	11.84	特殊形状の刃物で工具か。縞色黒々とし、良鉄。茎部折り曲げ、旧時欠損。

55号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
93－1 PL38	土師器 坏	覆土 口～底部片	口－(11.6) 底－(5.6) 高－3.4	①細砂 ②酸化焔 ③淡黄2.5Y8/4	体部から口縁部にかけて、直線的に立ち上がる。体部から底部は手持ちへら削り。
93－2 PL38	須恵器 埦	床直 底部片	口－ 底－(7.4) 高－(2.2)	①粗砂、輝石 ②酸化焔　軟質 ③にぶい橙7.5YR6/4	底部回転糸切り(回転方向不明)。 付高台。作りが雑。
93－3 PL38	丸瓦	床直 小破片	長－(7.4) 幅－(7.2) 厚－2.3	①鉱物少、重 ②硬　酸化 ③にぶい橙7.5YR6/4	製作法は２枚割り。粘土板合せ目あり。回転条痕あり。叩き目無文。側部面取り回数２回。製作地は笠懸。時期は７・８世紀。流用元は国府・国分尼寺か。

56号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
94－1 PL38	土師器 甕	床直 口縁部片	口－(23.6) 底－ 高－(6.5)	①細砂、輝石 ②酸化焔 ③褐7.5YR4/6	口縁部は外反し、胴部はあまりふくらまない。口縁部は内外面横ナデ。胴部外面へら削り。
94－2 PL38	平瓦	覆土 小破片	長－(4.6) 幅－(5.1) 厚－1.1	①鉱物少、重 ②締　還元 ③灰5Y6/1	製作法は桶巻作り。桶寄木痕あり。回転条痕あり。布目側粘土板糸切痕あり。叩き目無文。側部面取り回数２回。製作地は秋間。時期は７・８世紀。流用元は国府・国分尼寺か山王廃寺。

挿図番号 図版番号	種　別 器　種	出土位置 残存状態	計測値（cm・g） 長さ	径	厚さ	重量	特　徴
94－3 PL38	鉄滓 椀型	床直 旧態	10.5	7.0	3.6	360	半欠強の固体で凸部に炉底材わずかに付着。割れ口は、旧時であるが２枚が重なっている様にも見える。やや軽い。

57号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
97－1 PL39	土師器 鉢	＋21～＋27 口～胴部1/2	口－21.0 底－ 高－(11.3)	①細砂、輝石 ②酸化焔　硬質 ③明赤褐5YR5/6	口縁部は外反し体部は丸く底部に向かってすぼまる。外面口縁部は横ナデ後へら磨き。体部は刷毛目後へら磨き。内面口縁部横ナデ後へら磨き。体部へらナデとへら磨き。
97－2 PL39	土師器 高坏	＋5 脚部1/2	口－ 底－(11.8) 高－(7.0)	①細砂、輝石 ②酸化焔　硬質 ③にぶい橙7.5YR7/4	裾部はラッパ状に開く。 外面　縦方向のへら磨き。 内面　へらナデ。

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
97－3 PL39	土師器 高坏	＋9～＋10 坏～脚部1/8	口－ 底－(14.9) 高－10.3	①粗砂、白色軽石 ②酸化焔　硬質 ③橙5YR6/6	坏部直線的に立ち上がり、脚部はラッパ状に開く。 脚部に円孔４ヶあり。外面　へら磨き。 内面　脚上部へら磨き。裾部ナデ。
97－4 PL39	土師器 器台	床直 器受け部	口－18.4 底－ 高－(9.5)	①細砂、小礫 ②酸化焔　硬質 ③明赤褐5YR5/6	器受け部底部に鍔を持ち、口縁部は大きく開く。 外面　口縁部横ナデ、以下刷毛目後へら磨き。 内面　口縁部横ナデ。坏部へら磨き（内面荒れている）。
97－5 PL39	土師器 器台	床直 3/4	口－8.2 底－(13.0) 高－9.0	①細砂、輝石 ②酸化焔　硬質 ③にぶい橙7.5YR6/3	器受け部は丸みを持ち、口縁部はやや外反する。脚部の裾は大きく開く。脚部に円孔３ヶあり。外面口縁部横ナデ、以下は磨き。内面器受け部へら磨き、以下へら削り。
97－6 PL39	土師器 器台	床直 3/4	口－10.0 底－15.3 高－9.8	①細砂、白色軽石 ②酸化焔　硬質 ③明褐7.5YR5/6	口縁部は外反し脚部は裾部が開く。脚部に円孔３ヶあり。 外面　口縁部は横ナデ、以下はへら磨き。 内面　接合部へらナデ。脚部へら磨き。
97－7 PL39	土師器 器台	＋4～＋21 器受け～脚部 3/4	口－(7.4) 底－10.8 高－6.2	①細砂、輝石 ②酸化焔　やや軟質 ③にぶい橙7.5YR7/4	口縁部は外反し脚部はラッパ状に開く。 外面　口縁部横ナデ。脚部は刷毛目後へら磨き。裾部は横ナデ。内面　口縁部横ナデ。脚部へらナデ。
97－8 PL39	土師器 器台	床直 器受け～脚部 1/2	口－8.0 底－ 高－(3.5)	①細砂 ②酸化焔 ③橙5YR6/6	器受け部は大きく開く。脚部に円孔３ヶあり。外面　口縁部横ナデ、以下へら磨き。 内面　口縁部横ナデ、以下へら磨き。
97－9 PL39	土師器 器台	＋9 器受け～脚部	口－7.0 底－ 高－(4.2)	①細砂 ②酸化焔 ③橙7.5YR6/6	器受け部直線的に開き、口縁端部は直立気味。脚部に円孔３ヶあり。外面　口縁部横ナデ、以下へら磨き。 内面　口縁部横ナデ。
97－10 PL39	土師器 器台	＋14 脚部片	口－ 底－ 高－(5.5)	①細砂 ②酸化焔 ③橙5YR6/6	脚部は大きく開く。円孔３ヶあり。 外面　へら磨き。 内面　へらナデ。
97－11 PL39	土師器 壺	床直 口～底部4/5	口－13.1 底－5.5 高－21.2	①細砂 ②酸化焔　硬質 ③明赤褐5YR5/8	口縁部は外反し、胴部はほぼ球形を呈す。 外面　口縁端部は横ナデ、以下へら磨き。内面　口縁端部は横ナデ。口縁部はへら磨き。胴部は刷毛目。
97－12 PL39	土師器 壺	＋4 口～頸部片	口－15.2 底－ 高－(5.4)	①細砂 ②酸化焔　硬質 ③にぶい橙5YR6/4	口縁部は大きく外反する。 外面　口縁部横ナデ、以下へら磨き。 内面　口縁部横ナデ、以下へら磨き。
97－13 PL39	土師器 壺	＋6～＋15 口～底部5/6	口－13.3 底－5.8 高－25.4	①細砂、輝石 ②酸化焔 ③にぶい黄橙10YR6/4	口縁部は大きく外反し、胴部は球形を呈す。外面口縁部横ナデ、以下刷毛目後へら磨き。底部は未調整。内面口縁部は横ナデ後へら磨き。胴部刷毛目。底部へら削り。
98－14 PL39	土師器 直口壺	床直 口～胴部1/2	口－15.4 底－ 高－(17.0)	①細砂 ②酸化焔　硬質 ③橙5YR6/6	口縁部は直線的に立ち上がり外傾し、胴部は丸くふくらむ。外面口縁部横ナデ、以下へら磨き。内面口縁部横ナデ後へら磨き。口縁から頸部は横ナデ。胴部へら磨き。
98－15 PL39	土師器 壺	＋4 口縁部片	口－14.3 底－ 高－(4.5)	①細砂、輝石 ②酸化焔　硬質 ③橙5YR6/6	口縁部は大きく外反する。 外面　口縁端部は横ナデ。以下は刷毛目後へら磨き。 内面　口縁端部は横ナデ、以下は丁寧なへら磨き。
98－16 PL39	土師器 壺	＋24 胴下位～底部	口－ 底－5.4 高－(2.5)	①細砂、角閃石 ②酸化焔 ③にぶい黄橙10YR7/4	外面　底部から胴下部へら削り。底部に木葉痕あり。 内面　へら磨き。
98－17 PL39	土師器 壺	＋6 口～頸部片	口－25.3 底－ 高－(11.5)	①細砂、白色軽石 ②酸化焔 ③にぶい黄橙7.5YR6/4	頸部は［コ］の字状に屈曲し、外反する複合口縁。外面口縁部は横ナデ、以下刷毛目後へら磨き。頸部刷毛目後ナデ。内面口縁部横ナデ、以下へら磨き。頸部へらナデ。
98－18 PL40	土師器 壺	床直 口～底部4/5	口－13.4 底－4.6 高－13.5	①細砂 ②酸化焔 ③明赤褐2.5YR5/6	口縁部は外反し、胴部は丸くふくらむ。 外面　全面に丁寧なへら磨き。赤色塗彩。 内面　口縁部はへら磨き。胴部はへらナデ。
98－19 PL40	土師器 台付甕	床直 口～頸部片	口－(14.0) 底－ 高－(5.2)	①細砂 ②酸化焔　硬質 ③にぶい橙7.5YR7/4	外反するＳ字状の口縁部。 外面　口縁部横ナデ。胴部上部は縦位の刷毛目後横位の刷毛目。内面　口縁部横ナデ。胴部上位指頭圧痕残る。
98－20 PL40	土師器 台付甕	床直 口～胴部1/2	口－18.0 底－ 高－(10.0)	①粗砂、白色軽石 ②酸化焔　硬質 ③にぶい黄橙10YR7/3	外反するＳ字状の口縁。胴部は肩が張らず丸い。 外面　口縁部横ナデ、以下刷毛目。 内面　口縁部横ナデ、以下へらナデ。

挿図番号 図版番号	器　種	出土位置 残存状態	計測値（cm・g） 長さ	幅	厚さ	重量	石　材
96－21 PL40	石製品 炉石	炉 完形	32.4	12.3	10.1	4350	溶結凝灰岩

58号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
100－1 PL40	須恵器 埦	床直 口～底部4/5	口－14.8 底－6.9 高－(5.5)	①粗砂 ②酸化焔 ③灰2.5Y7/1	体部は丸みをもち、口縁部は外反する。付高台。高台端部は欠損。右回転轆轤成形。底部は右回転糸切り。
100－2 PL40	須恵器 埦	床直 口～底部1/2	口－(12.8) 底－6.4 高－5.2	①粗砂、小礫 ②酸化焔 ③灰黄2.5Y7/2	やや丸みを帯び立ち上がる。付高台。高台は［ハ］の字状に開く。底部は回転糸切り。
100－3 PL40	須恵器 埦	床直 口～底部1/4	口－(12.8) 底－(6.8) 高－(5.0)	①粗砂、輝石 ②酸化焔　やや軟質 ③にぶい黄橙10YR6/3	直線的に立ち上がる。右回転轆轤成形。底部回転糸切り。高台部欠損。

59号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
102－1 PL40	土師器 坏	覆土 口～底部1/2	口－12.4 底－丸底 高－(3.1)	①細砂 ②酸化焔 ③にぶい橙7.5YR6/4	底部から体部に丸みを持ち、口縁部はやや開く。 外面　口縁部横ナデ、以下横方向のへら削り。 内面　口縁部横ナデ。
102－2 PL40	須恵器 坏	＋8 口～底部3/5	口－13.0 底－9.0 高－3.8	①細砂、黒色鉱物 ②還元焔 ③灰5Y6/1	体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。 右回転轆轤成形。底部はナデ。
102－3 PL40	須恵器 埦	＋8 口～底部1/3	口－(12.2) 底－6.5 高－5.0	①細砂、白色軽石 ②還元焔 ③灰5Y1/6	体部から口縁部は直線的に立ち上がる。付高台。 高台は［ハ］の字状に開く。底部は回転糸切りか。
102－4 PL40	土師器 坏	＋14 口～体部片	口－(20.0) 底－ 高－(5.0)	①細砂、輝石 ②酸化焔 ③にぶい橙5YR7/4	体部は丸みを帯び、口縁部はやや内湾する。 外面　口縁部横ナデ、以下へら削り。 内面　口縁部横ナデ、以下横ナデ後ヘラ磨き。
102－5 PL40	土師器 甕	竈 底部欠損	口－20.4 底－ 高－(18.5)	①細砂、輝石 ②酸化焔 ③橙5YR6/8	器壁は薄く、口縁部は外反し胴部はふくらむ。 外面　口縁部横ナデ、以下へら削り。 内面　口縁部横ナデ、以下へらナデ。

60号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
104－1 PL40	土師器 坏	床直 ほぼ完形	口－12.8 底－丸底 高－5.2	①細砂 ②酸化焔　硬質 ③明赤褐5YR5/8	底部から体部は丸みを持ち、口縁部は内斜する。 外面　口縁部横ナデ、以下横方向へら削り。 内面　口縁部横ナデ。
104－2 PL40	土師器 坏	＋19 口～底部1/3	口－15.0 底－丸底 高－5.3	①細砂、輝石 ②酸化焔　硬質 ③明赤褐5YR5/8	底部から体部は丸みを持ち、口縁部は内斜する。 外面　口縁部横ナデ、以下へら削り。 内面　口縁部横ナデ、以下へら磨き。
104－3 PL40	土師器 坏	竈 口～体部1/6	口－(13.0) 底－ 高－(4.1)	①細砂 ②酸化焔 ③赤褐5YR4/6	体部に丸みを持ち、内斜する口縁部。 外面　口縁部横ナデ、以下へら削り後ナデ。 内面　口縁部横ナデ、以下丁寧なヘラ磨き。
104－4 PL40	土師器 坏	床直 口～体部1/4	口－(14.5) 底－ 高－(4.0)	①細砂、輝石 ②酸化焔 ③橙5YR6/6	体部は丸みを帯び、口縁部は内斜する。 外面　口縁部は横ナデ、以下へら削り。 内面　口縁部は横ナデ。体部は丁寧なへら磨き。
104－5 PL40	土師器 坏	竈 3/4	口－13.2 底－丸底 高－5.0	①細砂 ②酸化焔 ③にぶい赤褐5YR4/3	底部から体部は丸みを帯び、口縁部は短く内斜する。 外面　口縁部横ナデ、以下横方向のへら削り。 内面　口縁部横ナデ、以下不明瞭だがへら磨き痕残る。
104－6 PL40	土師器 坏	床直　竈 口～底部4/5	口－13.0 底－丸底 高－5.1	①細砂、褐色鉱物 ②酸化焔 ③にぶい橙7.5YR7/4	底部から体部は丸みを持ち、口縁部はやや内湾する。 外面　口縁部横ナデ、以下横方向のへら削り。 内面　全面縦方向のへら磨き。
104－7 PL40	土師器 坏	床直 口～底部1/2	口－13.0 底－丸底 高－4.8	①細砂、輝石 ②酸化焔　硬質 ③明赤褐5YR5/6	底部から体部に丸みを持ち、口縁部は短く内湾する。 外面　口縁部横ナデ、以下へら削り。 内面　口縁部横ナデ、以下へら磨き。
104－8 PL40	土師器 坏	床直 口～体部1/4	口－13.8 底－ 高－(7.8)	①細砂、輝石 ②酸化焔　硬質 ③明赤褐5YR5/6	内斜する口縁部。体部は丸くふくらむ。 外面　口縁部横ナデ、以下不定方向のへら削り。 内面　口縁部横ナデ。体部丁寧なナデ。

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
104－9 PL40	土師器 埦	竈 ほぼ完形	口－12.5 底－丸底 高－5.8	①細砂 ②酸化焔　硬質 ③赤褐2.5YR4/6	底部から体部は丸くふくらみ、口縁部は直立する。 外面　口縁部横ナデ。体部へら削り後横ナデ。底部へら削り。 内面　口縁部横ナデ、以下へらナデ。
104－10 PL40	土師器 高坏	竈・＋3 坏～脚部2/3	口－19.4 底－ 高－(9.8)	①細砂、輝石 ②酸化焔　硬質 ③橙5YR6/8	坏底部は稜を持ち、直線的に開く。 外面　へら磨き。 内面　口縁部横ナデ、脚部へらナデ。
104－11 PL40	土師器 高坏	覆土 脚部片	口－ 底－(13.8) 高－(3.1)	①細砂、輝石 ②酸化焔 ③橙5YR6/6	直線的に外傾しながら開く脚部。 外面　へら磨き。 内面　裾部は横ナデ。
105－12 PL40	土師器 高坏	床直 坏部	口－28.8 底－ 高－(11.0)	①細砂、小礫 ②酸化焔 ③明褐7.5YR5/6	坏底部は稜を持ち、口縁部は大きく外反する。 外面　口縁部横ナデ。坏部へら磨き後丁寧なナデ。坏部はへら削り。内面　口縁部横ナデ、以下へら磨き。
105－13 PL40	土師器 小型壺	覆土 口～胴下位 1/4	口－(5.6) 底－ 高－(4.5)	①細砂、輝石 ②酸化焔 ③にぶい赤褐5YR5/4	胴部は丸みを帯び、口縁部は直立する。 外面　縦方向の刷毛目。 内面　口縁端部に指頭圧痕残る。
105－14 PL40	土師器 壺	＋15 底部片	口－ 底－9.0 高－(3.3)	①粗砂、白色軽石 ②酸化焔　やや軟質 ③にぶい黄橙10YR6/4	壺の底部片、底部は平底を呈す。 外面赤色塗彩。へらナデ。
105－15 PL41	土師器 壺	竈 頸～胴部1/3	口－ 底－ 高－(18.2)	①細砂、輝石 ②酸化焔　硬質 ③明赤褐5YR5/6	胴部は球形を呈す。 外面　横方向のへら削り。 内面　へらナデ。
105－16 PL41	土師器 壺	床直 胴部下位	口－ 底－ 高－(12.5)	①粗砂、輝石 ②酸化焔 ③明赤褐5Y5/6	大型壺胴下部片、断面に接合痕が残っている。
105－17 PL41	土師器 小型甕	竈 底部	口－ 底－4.5 高－(6.0)	①粗砂、小礫 ②酸化焔 ③にぶい橙7.5YR6/4	底部は平底を呈す。 外面　へら削り。 内面　へらナデ。
105－18 PL41	土師器 甕	竈 口～底部3/4	口－12.0 底－(7.1) 高－23.2	①粗砂、輝石 ②酸化焔 ③橙5YR6/6	口縁部は外反し、胴部は丸く下脹れ状を呈す。 外面　口縁部横ナデ。胴部は不定方向のへら削り。 内面　口縁部横ナデ。胴部はへらナデ。
105－19 PL41	土師器 甕	竈 胴～底部1/2	口－ 底－6.5 高－(21.2)	①細砂、輝石 ②酸化焔 ③にぶい橙5YR6/4	器壁は厚く胴部は丸くふくらむ。 外面　胴部は雑なへら削りのため凹凸多い。 内面　胴部はへらナデ。

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値（cm・g） 長さ	厚さ	孔径	重量	石　材	特　徴
105－20 PL41	石製品 紡錘車	床直 完形	4.0	1.1	0.7	23	蛇紋岩	金属製の工具で精巧に成形されている。光沢有り。

61号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
107－1 PL41	土師器 坏	＋13 1/5	口－13.0 底－丸底 高－5.4	①細砂、輝石 ②酸化焔　硬質 ③橙5YR6/8	体部に稜を持ち、口縁部はやや外反する。 外面　口縁部横ナデ、以下へら削り。 内面　口縁部横ナデ、指頭圧痕あり。
107－2 PL41	土師器 坏	貯蔵穴1・覆土・竈 1/6	口－(14.0) 底－ 高－(5.8)	①細砂、輝石 ②酸化焔 ③明赤褐5YR5/8	体部は丸みを持ち、口縁は外反する。 外面　口縁部横ナデ、以下へら削り。 内面　口縁部横ナデ。
107－3 PL41	土師器 坏	貯蔵穴2・覆土 1/4	口－(13.5) 底－ 高－(4.8)	①細砂、白色軽石 ②酸化焔 ③にぶい褐7.5YR5/3	体部は丸みを帯び、口縁部は強く内湾する。 外面　口縁部横ナデ、以下へら削り。 内面　口縁部横ナデ。
107－4 PL41	土師器 高坏	床直 坏～脚部1/2	口－ 底－12.3 高－(9.1)	①細砂 ②酸化焔　硬質 ③橙7.5YR6/8	脚部上半はゆるいふくらみをもち、裾部はやや水平に開く。 外面　脚部から裾部へら磨き。 内面　脚部へら削り。裾部横ナデ。
107－5 PL41	土師器 高坏	床直 脚部片	口－ 底－ 高－(7.7)	①細砂、輝石 ②酸化焔　硬質 ③橙7.5YR6/6	裾部はやや水平に開く。 外面　へら磨き。 内面　へら削り。裾部は横ナデ。

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
107－6 PL41	土師器 壺	貯蔵穴・＋8 口縁部片	口－25.6 底－ 高－(8.0)	①粗砂、輝石 ②酸化焔 ③にぶい橙5YR6/4	口縁部は外反し、胴部は大きくふくらむ。 外面　口縁部横ナデ、以下へら削り。 内面　口縁部横ナデ、以下へらナデ。
107－7 PL41	土師器 甕	床直・掘り方 口縁部片	口－(19.0) 底－ 高－(5.5)	①細砂、輝石 ②酸化焔 ③にぶい赤褐5YR5/4	口縁部は外反し、[く] の字状を呈す。 外面　口縁部横ナデ、以下刷毛目。 内面　口縁部横ナデ、以下へらナデ。接合痕残る。

63号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
108－1 PL41	須恵器 埦	＋19 口～底部1/5	口－(13.6) 底－(6.0) 高－4.8	①細砂、輝石 ②酸化焔 ③にぶい黄橙10YR6/4	体部はやや丸みを帯び立ち上がり、口縁部は外反する。付高台。右回転轆轤成形。底部は回転糸切り。

挿図番号 図版番号	種　別 器　種	出土位置 残存状態	計測値（cm・g） 長さ	幅	厚さ	重量	特　徴
108－2 PL41	銅・鉄製品 原形か	覆土 旧態	7.5	4.5	1.5	62.00	銅錆には湯流状の渦が見え、銅材整形。発達したクラックを伴う鋳鉄様の鉄材が付着。そのため、原料として再利用時の原料化遺物か。

64号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
109－1 PL41	須恵器 坏	竈 口～底部4/5	口－11.5 底－7.0 高－3.7	①細砂、輝石 ②還元焔 ③にぶい黄橙10YR7/2	体部は丸みをもち立ち上がる。右回転轆轤成形。底部は回転糸切り。底部の摩滅激しい。
109－2 PL41	須恵器 坏	竈 口～底部1/2	口－(12.5) 底－6.0 高－3.8	①細砂、輝石 ②酸化焔　硬質 ③灰黄2.5Y7/2	腰部に丸みをもつ。体部上半から直線的に立ち上がる。右回転轆轤成形。底部は回転糸切り。
110－3 PL41	須恵器 坏	＋12 口～底部1/2	口－12.0 底－5.8 高－2.8	①細砂、小礫 ②酸化焔 ③にぶい黄橙10YR7/3	体部は丸みを帯びて立ち上がる。右回転轆轤成形。底部、体部は回転へら削り。
110－4 PL41	須恵器 埦	覆土 口～底部1/3	口－13.8 底－(6.6) 高－(5.0)	①細砂 ②還元焔 ③灰白10Y7/1	直線的に立ち上がり、口縁は外反する。付高台。右回転轆轤成形。底部は回転糸切り。
110－5 PL41	須恵器 埦	竈 口～底部3/4	口－14.8 底－8.5 高－6.5	①細砂、褐色鉱物 ②酸化焔 ③にぶい黄橙10YR7/2	体部は丸みを帯びて立ち上がる。付高台。高台は長く[ハ]の字状に開く。右回転轆轤成形。底部は回転糸切り。
110－6 PL41	須恵器 埦	＋3 底部片	口－ 底－8.0 高－(5.0)	①細砂 ②酸化焔 ③にぶい黄橙10YR7/3	体部は丸みを帯び、高台は長く［ハ］の字状に開く。付高台。底部は回転糸切り（回転方向不明）。
110－7 PL41	須恵器 羽釜	＋5 口～胴部片	口－(20.2) 底－ 高－(10.1)	①粗砂、小礫 ②酸化焔 ③橙5YR6/6	口縁部はやや内湾し、端部は直立する。鍔は断面三角形を呈し、水平方向を向く。口縁部内外面横ナデ。
110－8 PL41	須恵器 羽釜	竈 口～胴上部片	口－(18.6) 底－ 高－(7.4)	①細砂、黒色鉱物 ②還元焔 ③にぶい黄橙10YR7/2	口縁部はほぼ直立する。鍔は断面三角形で水平方向を向く。口縁部内外面横ナデ。
110－9 PL41	須恵器 羽釜	床直 口～胴上部片	口－(20.0) 底－ 高－(11.6)	①粗砂、小礫 ②酸化焔　硬質 ③にぶい橙7.5YR7/4	胴部は直線的に立ち上がり、口縁部はやや内湾する。鍔は断面三角形を呈す。口縁部内外面横ナデ。
110－10 PL41	須恵器 羽釜	竈・＋4 胴～底部1/4	口－ 底－(6.2) 高－(13.2)	①細砂、小礫 ②酸化焔 ③にぶい黄橙10YR7/4	胴部は丸みを帯びて立ち上がる。右回転轆轤成形。外面胴下部へら削り。

挿図番号 図版番号	器　種	出土位置 残存状態	計測値（cm・g） 長さ	幅	厚さ	重量	石　材	挿図番号 図版番号	器　種	出土位置 残存状態	計測値（cm・g） 長さ	幅	厚さ	重量	石　材
110－11 PL42	石製品 支脚石	竈 ほぼ完形	22.0	13.0	9.0	3200	固結凝灰岩	110－12 PL42	石製品 天井石	竈 ほぼ完形	43.0	16.0	10.0	7950	固結凝灰岩

65号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
112－1 PL42	土師器 坏	覆土 口～底部1/4	口－(12.4) 底－ 高－(3.0)	①細砂 ②酸化焔 ③明赤褐5YR5/8	体部は丸みを帯び、口縁部は直立する。 外面　口縁部は横ナデ、以下へら削り。 内面　口縁部は横ナデ。
112－2 PL42	灰釉陶器 埦	覆土 口～体部片	口－(16.8) 底－ 高－(3.0)	①緻密、黒色鉱物 ②還元焔　硬質 ③灰白5Y7/1	体部は丸みを帯びて立ち上がり、口縁はやや外反する。 施釉方法は刷毛塗り。釉調は灰白色。光ヶ丘１号窯式期。
112－3 PL42	須恵器 有台坏 (転用硯)	床直 底部	口－(14.0) 底－ 厚さ－1.5	①細砂、黒色鉱物 ②還元焔 ③灰5Y6/1	底部は右回転へら削り。削り出し高台付坏を転用したもの。 内面は全体的に平滑で特に右側に滑面光沢あり。
112－4 PL42	土師器 台付甕	覆土 台部片	口－ 底－(6.6) 高－(4.1)	①粗砂、白色軽石 ②酸化焔 ③明赤褐2.5YR5/6	台部は直線的に開く。外面接合部縦方向のヘラ削り。 端部は横方向のへら削り。内面はへらナデ。
112－5 PL42	土師器 甕	＋12 口～胴部片	口－(19.0) 底－ 高－(6.8)	①粗砂、輝石 ②酸化焔 ③明黄褐10YR6/8	胴部は直線的で、口縁部は外反する。 口縁部は横ナデ。胴部は縦方向のへら削り。

66号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
114－1 PL42	須恵器 埦	＋8 底部1/2	口－ 底－(7.2) 高－(2.5)	①細砂、輝石 ②酸化焔　硬質 ③にぶい褐7.5YR5/4	高台は細身でやや開く。付高台。底部は回転糸切り（回転方向不明）。

挿図番号 図版番号	種　別 器　種	出土位置 残存状態	計測値（cm・g） 長さ	厚さ	孔径	重量	特　徴
114－2 PL42	土製品 土　錘	＋6 完形	3.6	1.7	0.4	10	やや中央部が膨らむ管状土錘。

挿図番号 図版番号	種　別 器　種	出土位置 残存状態	計測値（cm・g） 長さ	幅	厚さ	重量	特　徴
114－3 PL42	鉄製品 釘(鑿)	床直 完存	21.9	3.9	1.5	260	頭部折り曲げの釘で、2.8cmの板と5.6cmの打ち込みによる柾木質付着。 柾鍛えか縦方向の少錆割れあり。

67号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
116－1 PL42	土師器 坏	床直 口～底部3/5	口－(11.6) 底－丸底 高－3.7	①細砂、輝石 ②酸化焔 ③にぶい橙7.5YR6/4	底部から体部は丸みを持ち、口縁部は直立する。 外面　口縁部横ナデ、以下横方向のへら削り。 内面　口縁部へら磨き後丁寧な横ナデ。
116－2 PL42	須恵器 蓋	床直 鈕～口縁部 1/3	口－(20.5) 鈕－(8.8) 高－2.7	①緻密、黒色鉱物 ②還元焔 ③灰白5Y8/1	鈕は扁平状を呈し、内面には見受けのカエリをもつ。 表面に窯壁が付着し、全体的に自然釉がかかる。
116－3 PL42	土師器 甕	貯蔵穴 胴～底部1/2	口－ 底－5.7 高－(13.0)	①細砂、輝石 ②酸化焔 ③にぶい橙7.5YR6/4	底部は平底を呈し、胴部はあまりふくらまず、直線的にのびる。 外面　斜めのへら削り。内面　へらナデ。

68号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
118－1 PL42	須恵器 皿	覆土 口～底部3/4	口－9.4 底－7.2 高－2.0	①細砂、白色軽石 ②酸化焔 ③にぶい黄橙10YR5/3	直線的に立ち上がる。 右回転轆轤成形。底部は右回転糸切り。
118－2 PL42	須恵器 皿	覆土 口～底部1/2	口－9.8 底－(4.4) 高－2.1	①細砂、小礫 ②酸化焔　硬質 ③にぶい橙7.5YR6/4	直線的に立ち上がる。 轆轤成形。底部は右回転糸切り。
118－3 PL42	灰釉陶器 埦	覆土 口～体部片	口－(23.0) 底－ 高－4.0	①緻密、黒色鉱物 ②還元焔　硬質 ③灰5Y6/1	直線的に立ち上がり、口縁部は外反する。 施釉方法は刷毛塗り。釉調は緑灰色。黒笹14号窯式期。

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
118－4 PL42	土師器 土釜	＋5 口～胴部片	口－(24.0) 底－ 高－(10.2)	①粗砂、小礫 ②酸化焔　やや軟質 ③赤褐5YR4/8	胴部は丸くふくらみ、口縁部は外反する。 外面　口縁部横ナデ。頸部に指頭圧痕残る。 内面　口縁部横ナデ、以下ナデ。

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値（cm・g） 長さ	幅	厚さ	重量	石　材	特　徴
118－5 PL42	石製品 磨石	＋3	13.7	9.3	6.8	1136	粗粒輝石 安山岩	点描部が磨耗部で非金属による。中央右寄りに敲打部あり。 右側部から手前小口に打ち欠きあり。

69号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
119－1 PL42	須恵器 坏	床直・貯蔵穴 口～底部4/5	口－13.1 底－7.0 高－3.5	①細砂、黒色鉱物 ②還元焔　硬質 ③灰黄2.5Y6/1	直線的に立ち上がり、口縁部は外反する。 右回転轆轤成形。底部は右回転糸切り。
119－2 PL42	須恵器 坏	竈 口～底部1/3	口－(12.6) 底－(6.8) 高－4.1	①細砂 ②酸化焔 ③にぶい黄橙10YR7/2	丸みを帯び立ち上がり、口縁部はやや外反する。 右回転轆轤成形。底部は右回転糸切り。
119－3 PL42	須恵器 坏	床直 口～底部3/4	口－(12.8) 底－6.9 高－3.6	①細砂、黒色鉱物 ②還元焔 ③褐灰7.5YR6/1	直線的に立ち上がり、口縁部はやや外反する。 右回転轆轤成形。底部は右回転糸切り。
119－4 PL42	須恵器 坏	覆土 口～底部2/5	口－(11.3) 底－(5.8) 高－3.4	①細砂、黒色鉱物 ②酸化焔　硬質 ③にぶい黄橙10YR7/3	直線的に立ち上がる。 右回転轆轤成形。底部は回転糸切り。
119－5 PL42	須恵器 埦	覆土 口～底部3/5	口－13.1 底－6.8 高－5.3	①細砂　褐色鉱物 ②酸化焔 ③にぶい橙5YR6/4	体部は丸みを持ち、口縁部は外反する。付高台。高台は細身で直立する。体部外面に［金］の墨書。 右回転轆轤成形。底部は右回転糸切り。
120－6 PL42	須恵器 埦	＋9 口～底部3/4	口－12.8 底－6.4 高－4.6	①細砂、小礫 ②酸化焔　硬質 ③にぶい黄橙10YR6/4	腰部が張り、口縁部は外反する。付高台。 右回転轆轤成形。底部は右回転糸切り。
120－7 PL42	須恵器 埦	床直・竈 口～底部1/2	口－12.8 底－6.1 高－4.8	①細砂　白色軽石 ②還元焔 ③灰2.5Y6/1	直線的に立ち上がり、口縁部は外反する。 付高台。高台は［ハ］の字状に開く。 右回転轆轤成形。底部は右回転糸切り。
120－8 PL42	須恵器 埦	貯蔵穴 口～底部1/2	口－15.3 底－(7.1) 高－6.1	①細砂、小礫 ②還元焔　硬質 ③灰黄2.5Y7/2	腰部がやや張り、口縁部は外反する。高台は内外面ともに外傾する。付高台。右回転轆轤成形。底部は回転糸切り。
120－9 PL42	須恵器 埦	床直 口～底部2/3	口－(12.8) 底－7.0 高－4.0	①細砂、黒色鉱物 ②還元焔 ③灰5Y7/1	体部から口縁部は丸みを持ち立ち上がる。付高台。 高台は［ハ］の字状に開く。 右回転轆轤成形。底部は右回転糸切り。
120－10 PL42	須恵器 埦	竈 底部1/2	口－ 底－(6.7) 高－(2.8)	①細砂、黒色鉱物 ②還元焔 ③灰白5Y8/2	底部内面中央部にヘラ状工具による同心円状の凹凸あり。付高台。底部は右回転糸切り。
120－11 PL42	灰釉陶器 皿	床直 体～底部1/3	口－ 底－(7.0) 高－(2.1)	①緻密 ②還元焔　硬質 ③灰黄2.5Y6/2	直線的に立ち上がる。付高台。高台は三日月形を呈する。轆轤成形。施釉方法は刷毛塗り。釉調は乳白色。光ヶ丘１号窯式期。
120－12 PL42	須恵器 鉢	竈・貯蔵穴 口～胴部2/3	口－12.8 底－ 高－(9.2)	①細砂、黒色鉱物 ②還元焔 ③黄灰2.5Y6/1	胴部は丸みを帯び、口縁部はやや外反する。 外面　口縁部横ナデ、以下へら磨き。 内面　口縁部横ナデ、以下ナデ。
120－13 PL42	須恵器 小型甕	床直 口縁部片	口－(12.2) 底－ 高－(4.8)	①細砂、白色軽石 ②還元焔　硬質 ③灰白10Y7/1	胴部は丸みを持ち、口縁部はやや外反する。 口縁部内外面横ナデ。轆轤成形（回転方向不明）。
120－14 PL42	土師器 羽釜	＋5 口～胴上部片	口－(20.1) 底－ 高－(10.5)	①細砂 ②還元焔 ③灰5Y6/1	口縁部は内湾し、胴部は直線的にのびる。鍔は断面三角形を呈し、水平方向を向く。右回転轆轤成形。

70号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
112－1 PL42	須恵器 埦	覆土 底部片	口－ 底－(8.2) 高－(3.0)	①粗砂、輝石 ②酸化焔　やや軟質 ③にぶい黄橙10YR6/3	器壁は厚く、高台は［ハ］の字状に開き、底部糸切り痕は不鮮明である。

72号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種　類 器　種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
121－1 PL43	土師器 坏	＋7 完形	口－11.7 底－丸底 高－3.7	①細砂、輝石 ②酸化焔　硬質 ③にぶい橙5YR6/4	底部から体部に丸みを持ち、口縁部は短く内湾する。 外面　口縁部横ナデ、以下へら削り。 内面　口縁部横ナデ、指頭圧痕あり。
121－2 PL42	土師器 坏	＋5 ほぼ完形	口－11.2 底－丸底 高－3.5	①細砂、輝石 ②酸化焔　硬質 ③明赤褐5YR5/6	底部から体部に丸みを持ち、口縁部は短く内湾する。 外面　口縁部横ナデ、以下へら削り。 内面　口縁部横ナデ、内面のナデが丁寧。
121－3 PL43	土師器 坏	＋5 口～底部5/6	口－12.6 底－丸底 高－4.1	①細砂、小礫 ②酸化焔 ③褐7.5YR4/6	底部から体部に丸みを持ち、口縁部は短く内湾する。 外面　口縁部横ナデ、以下へら削り。 内面　口縁部横ナデ、内面のへら削りがやや雑。
121－4 PL43	土師器 坏	＋5 口～底部2/3	口－14.0 底－丸底 高－4.4	①細砂、輝石 ②酸化焔 ③にぶい褐7.5YR5/4	底部から体部に丸みを持ち、口縁部はほぼ直立する。 外面　口縁部横ナデ、以下へら削り。外面のへら削りがやや雑。内面　口縁部横ナデ。
121－5 PL43	土師器 坏	＋6 口～底部1/2	口－(13.0) 底－丸底 高－4.1	①細砂、輝石 ②酸化焔 ③にぶい橙7.5YR7/4	底部から体部に丸みを持ち、口縁部は短く内湾する。 外面　口縁部横ナデ、以下へら削り。 内面　口縁部横ナデ、指頭圧痕あり。
121－6 PL43	土師器 坏	＋9 口～底部2/3	口－(12.8) 底－丸底 高－4.0	①細砂、輝石 ②酸化焔 ③にぶい橙5YR6/4	底部から口縁部まで内湾する。 外面　口縁部横ナデ、以下へら削り。 内面　口縁部横ナデ、底部に指頭圧痕あり。
121－7 PL43	土師器 坏	＋14 口～体部1/4	口－(13.0) 底－ 高－(3.6)	①細砂 ②酸化焔　硬質 ③明褐7.5YR5/6	体部は丸みを持ち、口縁部は直立する。 外面　口縁部横ナデ、以下へら削り。 内面　口縁部横ナデ。
122－8 PL43	土師器 坏	＋4～＋6 口～底部1/4	口－16.0 底－丸底 高－5.3	①細砂、小礫 ②酸化焔 ③橙7.5YR6/6	底部から体部に丸みを持ち、口縁部は内湾する。 外面　口縁部横ナデ、以下へら削り。 内面　口縁部横ナデ、以下丁寧なナデ調整。
122－9 PL43	土師器 坏	床直～＋4 ほぼ完形	口－17.7 底－丸底 高－5.9	①細砂 ②酸化焔 ③明赤褐2.5YR5/6	底部から口縁部にかけて内湾する。 外面　口縁部横ナデ、以下横方向のへら削り。 内面　口縁から底部まで丁寧なナデ。
122－10 PL43	須恵器 坏	竈 口～底部1/4	口－(9.8) 底－(7.4) 高－2.9	①細砂、黒色鉱物 ②還元焔　やや軟質 ③灰白2.5Y8/1	直線的に立ち上がる。底部は平底を呈し、回転へら削り。轆轤成形。
122－11 PL43	土師器 坏	＋8 口～底部1/4	口－(21.0) 底－丸底 高－(4.5)	①細砂、小礫 ②酸化焔 ③橙7.5YR6/6	体部は丸みを帯び立ち上がり、口縁部は大きく外反する。 外面　口縁部横ナデ、以下不定方向のへら削り。 内面　口縁部横ナデ、以下ナデ。
122－12 PL43	須恵器 埦	掘り方 口～底部1/4	口－(16.2) 底－(10.0) 高－4.6	①細砂、黒色鉱物 ②還元焔　硬質 ③灰白2.5Y7/1	体部から口縁部にかけて、わずかに丸みをもつ。底部は回転糸切り後、全面に回転へら削りが施されている。
122－13 PL43	須恵器 蓋	＋4 ほぼ完形	口－17.5 鈕－7.3 高－3.1	①細砂、黒色鉱物 ②還元焔 ③灰5Y6/1	天井部から口縁部にかけて直線的に開き、内面にカエリをもつ。鈕は大型の扁平鈕。天井部の中央は回転ヘラ削り。
122－14 PL43	須恵器 長頸壺	床直 頸部～肩部片	口－ 底－ 高－(6.0)	①緻密 ②還元焔 ③黄灰2.5Y5/1	頸部から肩部片。轆轤成形(回転方向不明)。 内外面とも自然釉が付着。
122－15 PL43	土師器 甕	貯蔵穴 口～胴部1/6	口－20.8 底－ 高－(11.5)	①細砂 ②酸化焔 ③にぶい褐7.5YR3/5	口縁部は大きく外反し、胴部はあまりふくらまない。 外面　口縁部横ナデ、以下へら削り。 内面　胴部へらナデ。
122－16 PL43	土師器 甕	＋3～＋6・竈 1/3	口－21.6 底－ 高－(28.4)	①細砂 ②酸化焔 ③明褐7.5YR5/6	胴上部にふくらみをもち、口縁部は大きく開く。 外面　口縁部横ナデ、以下縦方向のへら削り。 内面　口縁部横ナデ、以下横方向のナデ。
122－17 PL43	土師器 甕	竈 口～胴部片	口－(21.9) 底－ 高－(19.0)	①細砂、輝石 ②酸化焔 ③橙5YR6/6	胴上部にふくらみをもち、口縁部は大きく外反する。 外面　口縁部横ナデ、以下へら削り。 内面　口縁部横ナデ、以下へらナデ。